家庭教師ヒットマンREBORN!　自由な風、来る！

難波 壱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！　自由な風、来る！

【Ｎコード】
Ｎ２３２８Ｖ

【作者名】
難波　壱

【あらすじ】
風間南は交通事故に巻き込まれ、死んでしまった。しかし神の手違いだったため『転生』することになった！転生先は『家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！』の世界！！面倒くさがりや&自由過ぎる性格の南はどうするか！？
南の第二の人生が幕を開ける…

Straordinariamente1　登場人物1！

風間（カザマ）　南（ミナミ）

性別　女

年齢　１２

身長　１６５ｃｍ

体重　４１ｋｇ

一人称　オレ

誕生日　９月７日

性格　自由人、冷静、興味ないと全然反応を示さない、面倒事が大嫌い

髪の色　茜色

目の色　黒

髪型　ショートカットで、毛先が外側にハネている

目の形　フランと同じだが、目の下の▼は無い

ファッション　黒、白、青、緑、赤、などの男モノ系

アクセサリー　金属（銀色のみ）、黒や白っぽい色のモノ
（シンプルなモノ）
ピアスを両耳３つ付けてる

必需品　ケータイ、財布、ｉ．ｐｏｔ、リングペンダント、小型ノートパソコン（電子辞書サイズ）

漣（レン）（神）

性別　男

年齢　不明（本人は『三万年以上は生きてると思うんだけどなー』と言う）

身長　１７５ｃｍ位（南の予想）

体重　不明

一人称　オレ

誕生日　不明

性格　前向き、好奇心旺盛で思ったことはすぐに行う

髪の色　金と銀が混ざったような色

目の色　空色

髪型　南と同じ位のショートカットだが、天パ

ファッション　ラフな服装

アクセサリー　特にない

必需品　特にない

山下（ヤマシタ）　咲（サキ）

性別　女

年齢　１２

身長　１４８ｃｍ

体重　４３ｋｇ

一人称　私

誕生日　１２月１５日

性格　明るい、誰にでも優しい、無邪気

髪の色　茶色

目の色　茶混じりの黒

髪型　ツインテール、結んであるところから毛先にかけては天パ

ファッション　清楚系（特に白、薄ピンク）

アクセサリー　かわいいものが好き

必需品　ケータイ、ポーチ（くし、鏡など）ｅｔｃ

Straordinariamente1　登場人物1！（後書き）

はじめまして！難波壱です！！
今回はオリジナルキャラの設定です。
これからよろしくお願いします。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１　むかつく神と会う！

オレの名前は風間南

性別…女

なったばかりの中学１年…とはいっても私立の小学校から中学になっただけだから

あんま変わんねェかな

今は、ズボンの制服着て、カバン持って信号待ち中

あ？

なんで女なのにズボンの制服かって？

ンなモン、スカートなんて着たくねェからに決まってんだろ！

あ、信号が青になった

「ふぅ…」

オレはゆっくりと信号を渡り始める

キキィィィィッッッ！！！！

ドカァァンッッッ！！

「！！！？？！？！！！」

オレのすぐそばでトラックと軽自動車の

交通事故発生。

あ…

オレのほうに来る！！？！？？

ドンッッッッッ！！！！！

オレは見事に巻き添えをくらい、

どれだけのスピードをだしていたのか、数メートル先まで飛ばされた

「キャァァァッッ！！！」

「おいっ！　意識はあるか！？」

「き、救急車を呼べ！！」

オレの近くでうるさい声がする

？？　この赤い血みたいな液体は？

あ、オレの血？

そうだよな、巻き添え食らったもんな…

死ぬのかな…

ま、いっか

悲しむ親はとっくの昔に死んだし……

それに、親はオレが死んでも喜ぶだろうし…

あぁ…これでアイツのとこに逝ける…？

「おい！！　死ぬなよ！」

「大至急来てください！！」

あぁ、救急車、呼んだのか…

でも…

オレは眠いから…

寝るぜ？

『…ろ…きろ…起きろ、風間南！！』

「……」

起きたけど、知らない声なので寝たふりです

『起きてくださいよ――――

じゃないと、ず――っとオレはオマエを呼ばなきゃいけないんだよ――』

…それはうざいな

「…なんだよ」

『おっ　ようやく起きたか』

目を開けるが、やはり知らない男

「で？　誰だよテメェは」

『ん？　神だ！』

「冗談はいいから誰だよ」

『だーかーらー！！　か・み・さ・ま！！！』

……ha？

『…信じてねェって顔してんな…』

「アタリマエ。

どこにいきなり『神』っつわれて信じる奴がいるんだよ」

『え――

案外いるぞ？』

「…本当にそんな奴いたら見てみたいな」

『まっその話はおいといて
なんでここにいるか分かるか？』

ここっつわれても……

なんもない、あたり一面真っ白

あ……

「死んだ…からか？」

『おぉ――！オマエは優秀だな！！

まぁ、正解だ』

「やっぱりなぁ…

んで、オレになんか用？」

『あぁ！

…まず、悪ぃ！！』

…いきなり頭を下げて謝られた

「何が？」

するとこの男はバツの悪そうな顔をし、こう言った

『オマエが死んだの
オレの手違いなんだわ』

……

『さ、殺気を治めてください…』

今度はビクビクしながら言ってきた

「あのさー、そんなの無理に決まってるよね？
勝手に殺されたのに、さらに謝罪の気持ちが全く入ってない謝り方
…ケンカ売ってんのか、このクソ神？？」

オレは満面の笑みで言ってやった

目は笑ってないケドね

『ごっごめんなさいぃぃ』

男はとっさに土下座した

「それでいい　ずっとそのままでいろ」

『ハイ…』

「で？オレはこのままよく分かんねぇこの真っ白な世界で生きていくのか？」

『いえ…転生してもらいたいのですが…』

「なんでだよ」

『普通喜ぶ場所だと思いますが…

理由は、あなたは本来まだ生きているので、天国にも地獄にも逝

けないんです』

逝くって…

『なので、ほかの…つまり、さっきまで居た世界とは別の
もともと“風間南”という人間が存在しない世界にいってもらいます』

「オレが…もとからいない世界？」

『ハイ…そうすればあなたは生きられますし
オレも面倒なことしなくて済みますしね★』

ピキィィッッ！！！

あ…オレの中の何かが切れた

『それで、行く世界なのですが…って、え！？
やめてくださ…

ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！！！』

「んで？　どの世界に行くんだ？」

オレは、全身ボッコボコになった男に向かって聞いた

『か…“家庭教師ヒットマンリボーン”の世界です…』

「！？　リボーン！？

あれはマンガの世界だぜ！？？」

『はい

だ…ダメですか…？』

ビクビクしながら聞いてくる

「…いーぜ　原作も知ってるしな」

すると男は花が咲いたような笑顔になり…

『じゃあ、すぐに行きましょう！！』

「は？ちょい待て…ってホントにすぐかよ！！」

オレの全身が白く光り始めた

絶対今すぐ行くことになんだろ！！

このパターンはよ！！

『それじゃあ、第二の人生楽しんでくださいっ！！』

「このッッ！！

次会ったとき覚悟してろよ――――！！！」

――――――――――――――――――ここでオレは意識を失った

『や、やっぱもうちょい時間かけてからにすればよかった…』

今更後悔している神

『あ、オレの名前教えるの忘れた…』

また後悔が増えた神だった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２　神からの贈り物を受け取る！

…ここは？

オレは確か…

あぁ、そうだった

勝手に神に殺され、さらに勝手にリボーンの世界に転生させられたんだったな…

でもここはどこだ？

オレはベッドで寝ていた

起き上がると、紙が一枚

…誰からか、想像できたので読んでみた

『どうも！　神です！

これは、言い忘れたことを伝えるために書きました！

まず、オレの名前を教える　オレは漣（レン）！！

いくら神だって、名前くらいあるんだぜ？

今度会ったときは、漣って呼んでくれよな！

次に、オマエが今いる場所は

この世界でオマエの家となる場所だ！

かなり高級マンションだからな

もちろん一人暮らしだ

冷蔵庫に一週間分くらいの食いもんは入ってる

次に…この世界でのオマエの設定だ

両親はすでに他界

理由は、前世の両親と同じだ

今は中学生だ　沢田綱吉と同じ学年だからな

制服はもちろん男子用

許可も貰ってあるから安心して登校しろ

あぁ、クローゼットの中に入ってるからな

学校に持っていくものはベッドの横に置いてあるカバンのなかに入ってるからな

そん中なモノも説明しとくか

まず、並中の学生証

言い忘れていたが、転校先は並中だ

次にケータイ

これはオマエが前世で使っていたモノと全く一緒だ

三つめは財布

金は五千円程度だが減ったらオレに言えよ！

生活しやすいくらいに増やしてやるから

家賃や光熱費もだしてやるよ

んで、ｉ．ｐｏｔ

これは、ないと暇つぶしできねェだろ？

最後に、オレからの贈り物だ！

小型ノートパソコンの形をしているが、特殊能力のようなものがいっぱい入っている

もちろん、普通にパソコンとしても使えるからな

かなり軽いから持ち運びも便利だぜ！

家にあるものは

前世のオマエが持っていたモノに色を付けた程度だ

…まあ、こんくらいかな

じゃあ頑張れ！

オレのことを呼べばオレは出てくるし、

オレに会いたいって思いながら寝れば

さっきの真っ白な空間でオレにあえるからさ！

じゃーな！

漣』

かなり長い手紙を読み終え、ベッドの隣に置いてあったカバンを取る

手紙に書いてあったものが入ってた

時間を確認すると、７時１０分頃

転校初日に遅刻はしたくないので朝食を作る

…とはいっても、パンを焼くだけ

そして制服に着替え、前世でも常に付けていたリングネックレスをつけ玄関に行く

鏡を見たところ容姿は前世と変わっていなかったので安心した

重たいドアを開け、家を出る

こうして、オレの第二の人生が、幕を開けた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２　神からの贈り物を受け取る！（後書き）

どうも！
南がいつも付けていたリングネックレスというのは、今は亡き両親から貰ったものという設定です
リングネックレスというより、リングをチェーンに通したモノを首から下げてるだけです…
詳しくは本文で触れる…かな？

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３　初登校！

「あーあ…　疲れた」

オレは今登校中だ

只今の時刻、７時４０分

オレは朝弱ェから、準備すんのに時間かかるンだよ…

ハァ、とため息をつき並中へ向かう

なんで並中の行き方が分かるのかって？

……ホント、何でだろう

まぁ…迷うよりマシか

だんだん並中が視界に入ってきた

ふむふむ。確かに並中だ

未来編でリボーンが沢田綱吉に

『こいつは見たことあるはずだぞ』

って言って見せた並中にそっくりだ

オレの記憶力ハンパじゃねぇな…

オレはゆっくりと並中に入っていった

登校時間は約８分か

なかなかいい場所の家にしてくれたな…漣

ちょっとだけ漣に感謝した南であった

＊同時刻、応接室＊

「草壁、今日転校してくるっていう転校生の書類は？」

並盛最強といわれている雲雀恭弥が

自分より、はるかに大柄でリーゼントの男に聞いた

「それが…」

草壁といわれた男は少し戸惑いながら言った

「名前、住所、電話番号といったものしか分からなかったのですが…」

「……」

「い…委員長？」

何も発しない雲雀を不思議に思って、草壁は雲雀に声をかけた

雲雀は無言で草壁から、少ししか書かれていない転校生の書類を取り

「風間南…

僕を楽しませてくれそうだね」

雲雀は楽しそうに南の書類を置いた

そんなことも全く知らず、南は職員室の方へ向かう

自分のクラスが何組かを知るためだ

「今日、転校生がくるんですって？」

「そうなんですよ～　私のクラスになりましたよ」

一人の女性教師と男性教師が話していた

おそらく今日来る転校生は南のことだ

「1－Aですかー、風間さん…でしたわよね？」

「あぁ、風間南というらしいですよ

問題児でないことを祈るばかりですよ」

南はそれをしっかり聞いていた

だが、別に怒っている気配はない

『教師が新しく来る生徒は問題児ではないことを祈るのなんて普通じゃね？』

と思っているからだ

「1－Aね…」

南は職員室に行かなくてもクラスが分かったため

屋上へ行くことにしたのだ

並中といえば、やっぱり屋上だよな！

というわけの分からない理由からだが…

「おぉー、ここが屋上かぁ…」

まだ朝早く（といってももう7時５０分は過ぎているが）屋上には誰もいなかった

ここで南に疑問が一つ

今、原作開始からどのくらい前、または後なのか

「……まぁ、教室行ったら分かるか」

考えても無駄だと分かり南はボ――っとしていることにした

キーンコーンカーンコーン…

学校中にチャイムが鳴り響いた

「8時の予鈴か…」

ふぁぁ…

南を睡魔が襲った

改めていうが、南は朝がとても苦手だ

もちろん睡魔などに勝てるハズもなく――

南は壁に寄りかかってグッスリと寝てしまった

キーンコーンカーンコーン

「……んー？　８時２５分の予鈴――？

仕方ない…そろそろ行くか…」

南は珍しくしっかり目が覚め

ゆっくりと教室に向かって行った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４　原作開始！

「席に着けー　転校生を紹介する」

あれから教室に向かい、担任の先生に

『よく教室わかったなぁ』

と言われた

時間もギリギリではあったが間に合った

「よし、風間ー、入って来い」

「……」

無言でドアを開け、教室内に入る

「転校生の風間南だ

風間、自己紹介をしろ」

教師は黒板に『風間　南』と書いた

「風間南です

あー、一応女子です…まぁ気にしないでください

…席ってドコっすか？」

自己紹介か？アレ！？

と言いたそうな奴が何人かいるがドーデモいい

『かっこいい…』

とか言ってる奴もいるが、無視だ無視！！

「あ…ああ、そこの、一番窓側の席だ」

見ると、一番窓側で一番後ろの席が空いていた

そのままその席に歩いて行って座った

原作はっと…

教室内を見渡すと、まだ獄寺もいない

原作開始前なのか？

…まぁいいか

オレは眠いので寝ることにした

「よっ漣！！」

ただ寝るのもなんだかつまらないと思い、漣に会いにいったのだ

「あ、来たか！
んで、どーかしたか？　ってまた――！？
ぎぃゃぁぁぁあぁ……！！！」
「当たり前だぁ！！
よくも待てと言っているのに勝手に送り込みやがったな！！
名前で呼んでもらったのを感謝して欲しいくらいだ！！」
「うぅ…　すみません…」
漣は正座して言った
「ふん…まあいい
それより、今原作開始までどのくらい時間あるんだ？」
「えっと…　今日の体育の授業から開始です」
そっか…開始って沢田がボールに当たってからだったな
「分かった　じゃあオレはもう行く

じゃーな！」

「あ！！ちょっちょっと待って！

…ってもういねーーーー！！！

言い忘れたことがあったのにぃぃ！！」

漣の叫びがこだました

パチッと目が覚めた南

「ねえねえ風間さん！」

「どこから来たの？」

ワイワイと知らないうちにオレを囲んで群れができたいた

イラッときたのは言うまでもないだろう

「風間さぁーん！」

「…うるせぇ　こっから去れ

目障りだ」

「かっこいー――！！」

「キャー――――！！！」

本当にウルセェの、わかんねーのかよ…

次…体育か…

原作開始だな

オレは制服のまま体育館に向かうことにした

ちょうど沢田がボールに当たるときに着いた

あぁ、なんかもうメンドイ。

サボってかーえろっ！！

そして、オレは家に帰ることにし、教室に向かった

教室は静かだった

それもそのはず

実際は体育なので誰も教室にいない

オレはカバンを取り、家へ帰った

帰り際に南は思った

『転校初日からサボって大丈夫なのか』

しかしそんなことを気にする南ではないのだった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４　原作開始！（後書き）

原作開始時にはもう存在しているってことにしました！
今回の話で、南がどんだけ面倒くさがりか分かったと思います…
予告しときます！
次回はあの人と会います！
並盛にいる人なら『会いたくない』と願うあの人です！
…もう、お分かりですよね？
それでは！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５　雲に会う！

翌日

南は昨日の授業を、寝る＆サボる

で終わらしてしまったため『怒られるのかなー、それもメンドイなー』

と思っていた

転校初日から教師に目はつけられたくない

でも、過ぎてしまったものは仕方がない！

南はそう考え、教室へ入る

「？」

教室は、これでもか　と言うほどうるさかった

沢田が笹川京子に告って、拒絶されたらしい

「（あー、じゃあ今日は沢田が持田とバトる日か？）」

そう考えながら席に座る

だが、南は暇なのだ

友達も、別にほしいわけではない

いるに越したことはないのだが…

そして南は思い出した

『漣から貰ったｉ．ｐｏｔがあるじゃねェか！！』と。

南がイヤホンを耳につけようとした、そのとき

教室がより一層騒がしくなった

…沢田が来たからだ

あー、ってことは死ぬ気になるか!?

だったらせっかくリボーンの世界に来たことだし

傍観するぜ!!

そして南はイヤホンを耳につけ、道場に向かった

南が道場についたとき、沢田が持田の髪を抜き始めた

あーあ、カワイソ。

他人事だから、それしか思わない
勿論、南は全くそんなことは思っていないが

「Ｉｔ' ｓ　死ぬ気タイム」

南は小さな声で呟いた

沢田の死ぬ気が終わったのを見て、興味がなくなったのか
帰り始めた

…まだ授業どころか朝のＨＲも始まっていない

南が校門を出ようとした、その時…

誰もが恐れるあの人と会ってしまった

「ねぇ君、どこ行こうとしてんの」

「…家デスケド…」

「ふぅん　君、転校生だよね

昨日も無断で早退したくせに許されると思ってんの？」

もうお分かりでしょう

並盛中学風紀委員長、雲雀恭弥です…

「まぁ、許されないでしょうね

でもオレは帰ります

サヨウナラ。」

「ワォ、それなら僕が教えてあげなきゃね

無断でそんなことをしたらどうなるのかを」

イヤだなァ…

この人に目ェつけられるのは。

よし…

「結構です　でもオレは帰ります」

そう言って南は走り始めた
雲雀から逃げるために

「逃がさないよ」

勿論雲雀は追いかけてくる

「やっぱ来るか!!
…って校門閉まってんの!?
どうすりゃイイんだよ!!」

「僕に捕まって咬み殺されればいいんだよ」

「ンなモン無理に決まってんだろ!」

ホントにいつの間に校門閉まったんだ?!
さっきまでは開いてたのにィィ!

あぁもう！！

ダンッッッ！！！

オレは一か八か、校門を飛び越えることにした

結果……

「うし！！　成功！！」

見事に成功し、家に向かって走る

雲雀はやる気をなくしたのか、追うのをやめた

「また明日咬み殺せばいいしね

でもやっぱり…

風間南、どうやら久しぶりに楽しめそうだね」

ニヤリ、と雲雀は笑った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５　雲に会う！（後書き）

本日三話目の投稿です！
疲れました…
肩とか、だいぶヤバいです
昨日も三話投稿しましたケド…

二日連続は疲れます！！
でも、早くヴァリアー編に入りたいのでガンバります！！

それでは★

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６　ジャンプ弾を傍観！

「疲れたぁぁぁ…」

なんでそんなにも疲れているのかって？

それは昨日家に突然来た、あの人のせいです

オレは雲雀から逃げ、家になんとか帰りました

そして昼飯を食べ、高級そうな黒い革のソファーに倒れこんだ

時刻は１３時
とてつもなく眠いので、寝た
それから数時間後――――

ピーンポーン

インターフォンが鳴った

「……」

こんな小さい音では起きません

ピーンポーン、ピーンポーン、ピーンポーン…

オレは起きた

三回しか書かれていないが、二分間位インターフォンを鳴らされたからだ

しかし、突然インターフォンな鳴らなくなったのだ

ガッッッッ！！！！

ｗｈａｔ．．．？？？？

ナンダロナ――――

今の不吉な音は

「やぁ」

「……ナンデココニ??」

分かった人はいるだろうか…

並中の風紀委員長さんが来てしまったのだ

「決まってるでしょ
転校してきたばかりにも関わらず
違反ばかりしている君を咬み殺しに来たんだよ」

「イヤイヤイヤ、何でここが分かった!?
ンでもって、オレはまだ死にたくないぜ!?

それと、さっきの不吉な音は何だよ!!

オマエか!?」

「ウルサイ　家は調べた
君に拒否権はないから、黙って咬み殺されてよ」

「調べたってどんだけだよ!!
最後の質問にも答えてくれよ!!」

「校長に聞いただけだよ
転校生の家はどこかってね

それで、ドアを壊して入ってきただけだけど？」

「オイオイオイオイ、何でドアを壊す？

しかも校長…」

「君が出ないからだよ」

「オレ悪くねェし！！　居留守しよーがオレの勝手だろ！！」

「ふぅん　君、僕にそんな態度とってどうなるか分かってんの？」

「分かりませんよー　雲雀サン！」

「僕のことを知っているくせにその態度か

やっぱり君は面白いね、風間南」

「だったらなんだよ！！」

などという口喧嘩（？）が小一時間続き、玄関は漣に直させた

金もかかんねェし一番いい方法じゃね！？

と思った南だった

そう、その口喧嘩がやけに疲れたのだ

後から

明日、ただで済まされないのではないか

登校してすぐに咬み殺されたらどうしよう

とか、いろいろ考え、あまりグッスリ眠れなかったのだ

「今日は確か球技大会だったな」

ジャンプ弾を早く見てみたいなー

どうにか頭の中での話題を変えるため、無理やり球技大会のことを思い出したのだった

――――――今は学校だ

朝、校門の前には雲雀はいなかった

よかった、と思い教室に行った

すると教室には『球技大会!!』

の文字

あー、こうゆうのやりたがる人いるよね――――

オレはそのまま教室を出た

どうやら、少し遅かったらしく、沢田の足に弾が撃たれたところだった

「くるぞ　ツナ！

ブロック！！」

バレーをしている知らない男が沢田に言う

「オッケ――！

（やれるだけやるんだ）」

ダン、と沢田はジャンプする

…あり得ないくらいの高さに

「スゲー、足の位置がネット越してる」

オレは今、傍観中だ

なので他の奴のように体育館の中には入ってない

ちょっとした穴場のような場所から見ている

入ればいいんでは？と思う奴もいるだろう

でも、それだと面白くねェだろ？

こっそり見るのは面白ェぜ？

そして、オレはしっかり球技大会に参加した

本当はサボりたかったが、

『今度見つかったら即咬み殺されるだろうな』

と思い、今日はしっかり参加した

ちなみに、バスケやったぜ！
原作でそんなこと書かれてなかったから驚いたけどな！！
活躍？
そんなものは知らないが、オレの試合が終わったらバスケ部の人が来たぜ
『バスケ部に入ってくれませんか？』
だとよ
ちなみに顧問の教師まで来てかなり面倒だったけどな
ん？　勿論入んねェぜ！！
なぜならオレは傍観者になったしな！

傍観者、サイコ――――！！！！！

あ、ついでに見かけたぜ！

未来の嵐の守護者をな！！

タバコ吸ってたね！

悪だね！！

雲雀に咬み殺されちまうね！！！

そーだ！

アイツと友達になろうかな！！

なんかアイツなら友達になりたいしな！！

あとは…

クローム・骸の二人は友達になりてェな

…雲雀とも仲良く（？）なっていた方が殺される率低くなるから雲雀も！！

話を戻して…

獄寺とは仲良くなろう！

そう思い、学校を出る

…サボってねェよ

ホントに学校終わったんだよ

オレは転校後初休日となる明日をどうやって過ごそうか、考えながら帰った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６　ジャンプ弾を傍観！　（後書き）

疲れましたァァァァァ！！！！
ホントは守護者全員と仲良くさせようかとも思ったんですが、南の性格からして、

ツナ→弱いので嫌いそう
山本→能天気すぎてイラつきそう
了平→人の話を聞かずにイラつきそう
ランボ→とにかくウザいので関わりすら持ちたくなさそう

という訳です！！

もう眠いので…

Ｃｉａｏ～～★

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７　霧と会う！

「いよっしゃ～！！
学校休みィ！！！」

今日は学校休みでテンションＭＡＸな南です！！

え？　学校あってもサボってて休みみたいなモンだろって？

気分が違うよ～、気分が～

休みみたいなことに否定はしないけどな★

だってさ――

学校サボったらあの風紀委員長サンがオレを咬み殺しに来るんだもん…

「どーしよっかな――

アイスでも買って食うか！！」

そう言い、オレは家を出た

＊並盛商店街＊

オレは今、手にアイスが二個入ったビニール袋を持って歩いています

なんで二個もかって？

チョコと抹茶と悩んだんだよ

どうせ漣の金だしいいや！！　ってね

でも持って帰るとアイス溶けちまうからな――

お！！　ベンチ発見～★

オレはベンチのある公園に向かった

「誰もいね――

まぁ、よかったな…」

公園には誰もいなかった

オレ的には超嬉しいぜ?

うるさいガキ共がいなくて

オレはベンチに座り、抹茶アイスを食べ始めた

公園に一人女の子が来た

オレと同じ年齢ぐらいだと思う

…なんか見覚えあるんだよな～

藍色っぽい肩下まである髪、

同じく藍色っぽい大きな瞳、

そして真っ白のワンピース

誰だっけな～？

クラスの奴ではないと思うんだけど…

悩むのもイヤだし、声をかけてみるか！！

「おい！！　オマエ一人？

一人ならオレとアイス食わねェ？」

少女は突然声をかけられたことに驚いた様子だ

「オレ今もう一個アイス持ってんだ
つい買っちまったんだけど、溶けちまうからさ！！
食ってくんねェ？」

「いい…の？
私が…食べて…も…」

「いいのってか食ってくれ！！」

「…ありがとう」

少女は顔を少し赤くして、オレからチョコアイスを受け取った

「どういたしまして
オレは南！」

「私は…凪…」

「あぁ、よろしくな！凪！」

…ん？

ＮＡＧＩ？

凪ィィィィィ！！？？！？！！

って、クロームになる女の子だよな！？

いやった――――――！！！！！！

目標一人達成ぃぃぃぃ！！！

「…あの…？

溶けちゃう…よ？」

「おわっっ！？

あ、あぁ、サンキュー凪」

別世界に意識飛んでました。

凪！！救い出してくれてサンキュー！！！

そして、二人で黙々とアイスを食べた

食べ終わってしまい、凪がオドオドしている

「凪！　凪はまだ時間あるか？」

「えっ…う、うん！！」

「じゃあ、一緒に遊ばねェ？」

「い…いいの…？」

「モチロン！！」

「…ありがとう

でも、どこ…行くの？」

「んーと、ちょっとついてきてくれるか？」

「うん…」

そう言い、オレ達は公園を出た

「ここだ！！」

オレは凪にそう言う

「ここ…？」

「あぁ、『ラ・ナミモリーヌ』っつって
ケーキがかなりウマいらしいぜ！！」

来てみたかったんだよ！！　ココ！！

オレは店の中に入った

「いらっしゃいませー」

おぉ、ケーキのいい匂いだ

「凪、どれが食べたい？」

「あ…私、お金…持ってないから…」

「いいって！！

オレがおごるよ！！

ついてきてもらったんだし！」

「でも…」

「いいって、いいって！
ほら、ウマそうだぜ？」

「…ありがとう」

「どういたしまして
オレはチーズケーキ！
凪は？」

「あ…同じの…」

「分かった！
ちょっと待っててくれよ！
買ってくる！！」

「…うん」

そして、ケーキを買い、凪と二人で食べた

「ウマかった――――！！！
噂は本当だったな！！」

「あの…ありがとう…
風間…さん」

「南でいいって！！

もうこんな時間か…

凪、じゃあまた遊ぼうな！！

…っと、メアド教えてくんね？」

「うん！」

もう6時だった

赤外線通信をして、それぞれの家へ帰った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７　霧と会う！（後書き）

間違えて一回データ全部消しちゃいました…
でも書こう…書かないとヴァリアー編に入れない、
と思って書きました
今日はもうこれでラストの投稿かなー

あ、今度番外編やります！
何話ごと、とか正月、とかの区切りでやりますんで！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８　風紀委員になる！

皆さんに一つ聞いてもいいですか？

南だ！！

よっす！

あなたはグッスリ眠っています。

時刻は朝の５時です。

その刹那、携帯電話が鳴り始めました。

あなたは携帯電話をマナーモードにしていなかったので、

『プルルルルル』と音を鳴らしています。

携帯を見ると、知らない番号。

知らない人でしたし、もちろん出ません。

しかし、その電話は一回切れても、何度も何度もかかってきます。

もう５分は経ちました。

でもまだ電話は鳴り続けます。

さて、どうする!?

その？　電話に出る

その？　ムシを続ける

その？　電話を切る

オレがとった行動は、？だ!!

理由？

なんかオレの第六感が、『出ないともっとヒドいことになる』って

察知したからだよ

「もっしもーし」

『君、喧嘩売ってるの？』

「！？　この声、オマエ雲雀か？

ったく何の用だよ…

休日のこんな朝早くに…」

『１０分以内に応接室来て「無理に決まってんだろ！！　それにイヤだし！！」」

来なかったらどうなるか分かるよね？』

「…ワカリマセンガ？　ソレガナニカ？」

『まあいいや　じゃあね』

一方的に電話をかけられ、電話を切られ…

「オレって不幸…」

行かないとまた家に来るんだろうなぁ～

漣に直してもらってもいいんだけど…

あ…学校で咬み殺されるという危機もあるんだっけ…

「仕方ない…　行くか」

オレは嫌々私服に着替え、朝早い、並盛町を歩いた

「ンで？　何の用ですか――？」

ガラッ、とドアを開けながら言う

「来たんだ　僕が家に行って咬み殺さなきゃいけないかと思ってたよ」

あぁ、両方だったのか……

学校来てよかったよ…

「でも、なんで私服で来たの？
休日とはいえど、ここは学校だよ？」

ヤバい！！！

南は直感した

今の服装は

黒いダメージジーンズ

紫色のガラの入った長Tシャツ

の上に緑色のパーカー

指や手首にはアクセサリーが付いている

遊びにでも行くの？と言われそうな、到底学校に行くような格好で
はなかった

しかし、

「まあいいや　それより今日は君に話があってね」

よ…よかったぁぁぁぁぁ！！！！！

極悪非道の並盛中学校風紀委員長様から許しが出たよ～！！！

「話？」

「うん　君、風紀委員に入りなよ」

「無理」

即答したよ？

うん。

「断るのなら、学校に私服なんかで来た罰として咬み殺してあげる

よ」

「そ、それは丁重にお断りシマス。」

「ほら、ここにサインしなよ」

「オイオイオイオイ

勝手に話飛んでね？

いつの間にオレが許可したみたいになってんの？！」

「うるさいな　早く書いてよ」

「む、無理！！

って何オレに差し出してＮ「契約書だよ」

あ、契約書？　イリマセンケド？」

「だから、君に拒否権はないんだって何度も言ってるでしょ？

早く書いてくれない？

僕眠いんだけど」

「オマエが朝5時に呼びだしたんだよね！！

…条件次第で入ってもいいぜ？」

ここで、ピクリ、と雲雀が反応する

「…条件？」

「あぁ！

一つ目、オレは朝早くに学校に来るつもりはない。一般生徒と同じ時間に登校する

二つ目、無断欠席、無断早退、遅刻、そういったものを全て許可する

三つ目、オレの武器の所持を認める

四つ目、もしもオレが誰かと仲良くなって、そいつと一緒にいてもオレを攻撃しない

五つ目、中学校は三年間通って、卒業したら風紀委員は抜ける

…まぁ、こんくらいかな」

オレは一、二、三、四、五、と指を立てる

最後のが変だって？

未来編を覚えていますか？

『風紀財団』なんてものがあったでしょう？

あれは並中風紀委員を母体としてある組織ですよ？

ハイ。『？』ばっかでゴメンナサイ

「……」

雲雀は数秒考えている

オレは風紀委員に入る気なんてないのさ！！

こんだけ条件を付ければ諦めて――――――――――

「いいよ」

「いいのかよ！？」

――――――――――くれなかった

「どうせ、『これだけ条件を付ければ諦める』とでもおもったんでしょ

残念ながらそうはいかないよ」

「ＮＯＯＯ

オレの悲鳴が朝早い校舎に響いた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８　風紀委員になる！（後書き）

南残念！！
雲雀サンに裏をかかれてしまいましたねー
あ、南は学ランを着ることになります！
草壁さんに言われて…
あ、これ、次回触れます……

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９　初学ラン登校！

風紀委員になっちまった、風間南だ★

今９時５０分！！　登校中だぜ

ん？　遅刻じゃねえかって？

遅刻を許可してもらったことをお忘れかな？

ただね…。周りからの視線が痛いよ。

学ラン着て、腕に『風紀』と書かれた腕章付けてるからかな？

何で学ラン着てんのか、知りたいかい？

「ふぁーあ…　眠ぃ」

それは、昨日に戻るぜ――――――――

「失礼します！
委員長！　新しく風紀委員に入る者がいると聞いたのですが…」
あ――――、副委員長の草壁サンだ――――。
「本当だよ」
「そうですか…
？　この人は？」
そう言い、オレの方を見る草壁さん
「今日から風紀委員に入ることになっちまいました、風間南ッス

よろしくお願いしゃーす」

「君だったのか…

しかし女子だったのか…　どうしようか…」

ん？　なんか気になる終わり方だったぞ？

「なんかあったんスか？」

「いや…

聞いたとき『男子だと思う』と言っていたのでな…」

「？　それで？」

この後、『聞いていなければよかった』と後悔するのを、オレはまだ知らない

「いいんじゃない？　どうせ風間南の制服は男子用だからね」

雲雀は内容がわかったらしく、書類を片付けながら草壁さんに言う

「そうでしたか　なら大丈夫ですね

風間さん、明日から学校にくるときや、風紀委員として活動する際、こちらを着てください」

そう言って渡されたのは、皆さんご存じ風紀委員の学ラン

「そういう…決まりですか…？」

「いえ…決まりではないのですが、聞いたときに注文してしまいまして…

捨てるわけにもいかないので、使ってくれませんか？」

…あぁ、同じ風紀委員だというのに、草壁さんは何て優しい人なんだろう…

それにしても、出来上がるの早すぎね？

うん。さすが並中風紀委員だね。

「ワ…ワカリマシタ…」

モチロン嫌だぜ？

でもな、雲雀から

『着ないのなら、製作費と処分代を出してもらうよ』

と言わんばかりの無言の圧力をかけられたんだ…

「ありがとうございます

腕章は委員長が持っていますので受け取ってください

それでは、失礼しました」

それだけ言い残し、草壁副委員長は応接室を出て行った

「腕章って付けなきゃダメか…？」

「ダメだよ

付けないと言うのなら、僕が今すぐ咬み殺してあげるよ」

即答キタ――――――（ﾟ∀ﾟ）！！！

「じゃ、じゃあさ！！　せめて学ランの着方はオレの自由にさせて！！

そうしてくれたらちゃんと付けるから！！」

「ハァ…　どの道腕章は付けさせるけど、それくらいは自由にさせてあげるよ

その分仕事は増やすけどね」

「エ――――――――……」

「変更は認めないよ

ほら、腕章」

雲雀は腕章を持ってきて、ソファーにあった学ランの上に置いた

「うぃーす…

じゃあ帰る…」

オレは学ランと腕章という拷問的なモノを持って家に帰ろうとした

「ねぇ、君って何か武器持ってるの？」

「…ハイ？」

突然悪魔…もはや大魔王様がオレに聞いてきた

「さっきの条件で『武器の所持を認めろ』って言ったでしょ
どんな武器なのかと思ってね」

あ――――、あれか

「今ンとこは何も。

だけどコレにしよっかな、ってのはあるが…

それでも？」

「うん　どんなものなの？」

「んー、小刀みたいなヤツ？
ん？　短剣になるかも…」

「ふーん…
まあいいや」

「じゃ、オレ帰るわ
じゃーなー」

こうしてオレは応接室を後にした――――――

という訳さ！！

小刀みたいなのってのは『ＮＡＲＵＴＯ』のカカシが幼いころに父親の形見（？）で持ってたヤツに似てるモノだな

漣に今作らせてるんだぜ★

何度か持ってきたが、出来がイマイチだったからやり直しさせてんだ

二刀持ちにしてーなー、って思ってるから一刀できたら、もう一刀作らせるつもりだぜ★

楽しみだな――♪

――――その頃の漣

ブルッッ！！！！

「…なんか嫌な予感がする…

早く完成させよう…」

漣は今日も南に殴られないように頑張るのでした

ガラァァッッ

オレは教室のドアを開けた

皆、静かにオレを…いや、オレの腕章を見ていた

――――顔を真っ青にして…

「君!!　遅刻してくると…は……」ブルブルブルブル

教師がオレを見て、怒鳴ったかと思いきや、震え始めた

そうだよな…

学ラン着て、腕章付けてたらそうなるよな…

「何か用スか？」

オレは教師に聞いた

「なななななな何でもないですっっっ！！！

いっ、今テストをしているのですが、どうですか？

あ！！嫌ならいいんです！！」

プルプルと手を震わせながらプリントを渡してくる

まぁ、暇だし…

中一の問題なんてオレには問題ですらねェし…

「別にいーっスよ…」

オレはプリントを貰う

『ありがとうございます！！！』とか聞こえるが、気にしない、気にしないっと…

オレは席に着き、プリントを見る

理科…か…

オレはスラスラと書き、一分弱で終わらせた

それを教師が見ると、

「回収します！！」

と言った

「先生！まだ１０分しか経ってないのですが…」

「２０分って言ってたじゃないですかー」

とか、いろいろ聞こえる

「か…風間さんが終わってしまったんだ！！

一番後ろの席の人！！　早くしなさい！！
その列は後ろから二番目の人！！」

と言って指をさすのはオレの列

オレがいるからねぇ…

先ほど文句言っていた声は一瞬で消えていた

プリントを回収し終えた教師は

「本日は根津先生の代わりなので、説明の仕方が少々変わるかもしれませんが許してください」

と言う。

…どんだけ怯えてんダヨ。

でも、ヒマだな――

…よし！

ガタッ

オレは席を立った

「!?　風間さん!?　どうかしましたか!?」

「ヒマだから応接室行きまス――――

そんじゃ」

オレはそのまま応接室に向かってった

教室に残された教師と生徒達は南の出て行ったドアを茫然と見ていた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９　初学ラン登校！（後書き）

昨日更新しなくてスンマセン！！
昼まで寝てて…
ですがその分、南が何の守護者になる、とか
属性の炎の色は何色だ、とか
色々考えていました
今日は昨日の分も投稿するつもりなんで
それではまた後で！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０　大空と少し仲良くなる！

「今日も遅刻～♪

朝ゆっくりできるってサイコーだな！」

昨日に引き続き、またも余裕で遅刻している風間南だ！

今の時間ー？

１１時になるな、もうすぐで

でも気にしない、気にしない★

超自由人となった南はあり得ない時間でもゆっくりと、一瞬たりとも焦らずに学校に行くのでした

＊応接室＊

「風間南…　いくらなんでも初日からあり得ない時間で登校しないでくれる？」

「え――　いーじゃん別に…」

オレは学校に着いて、教室で授業受ける気にもならなかったので、そのまま応接室にＧＯ！したのです

「それに君は授業もサボってるの？

今日一度でも教室に行った？」

「いんや。今学校に来たばかりだけど？」

「じゃあ君は教室で授業受けてきなよ

それとも、書類整理をやってくれるかい？」

「！？　なにその究極の二択！！

それなら教室行ってくるよ…

じゃーな！」

オレは嫌々教室に行った

「ん？　書類整理を即やらされなかっただけで十分か…」

ガラッ！！

「「「「「……」」」」」

お！今日は教師までも静かだ

…アレ？　なんか席順おかしくない？

「かかかかか風間さん！！　あなたの席は変えてないのであそこです！！

よろしいでしょうか！？」

「…変えてないってどういうことだ」

「ハイイイイイ！！
実は、効率よく授業を進めるために、この時間だけ席替えをしてもらったんです！！」

「あー…　わかった」

オレは、
『効率よく、か…
ただ単にバカが後ろに来るようにしただけじゃん』
と思っていた

オレに席の隣は、沢田綱吉…

ハァ…　ここで原作キャラと関わるのか…？

あんま変えたくねェのにな――…

「よ…よろしくお願いします…

風間さん…」

沢田がオレに話しかけてきた

…沢田ってこんなに度胸ある奴だったんだな…

「…あぁ…」

オレがそれだけ言うと、周りで

「おい！沢田が風間さんと話してるぞ！！」

「やっぱ最近ツナってすげーな…」

とかいろいろ言っている

授業は――――

数学か…

オレ、どの教科でも満点取れる自信あるけど、数学は特に得意なんだぜ？

そして、オレは教科書を開いた

沢田はきっと、『風間さんも勉強するんだ…　教科書になんか書いてあるかな』

とでも思ったんだろう

沢田がオレの教科書をちら見してきた

「！？　何これ――――――――！！！！？？！？」

沢田がいきなり叫んだ

正直言って、ウルサ過ぎ。

ボコられたいんですか？　と思う

「……何か用？」

オレが低い声で言い、冷たい視線をぶつけて言った

周りからは
「ツナ…殺されるんじゃねェか？」
「ご愁傷様」
とか言われてる

「え！？？　あ…あの…」

とモゴモゴ言ってて聞こえない

「ハッキリ言え」

この一言で周りがこそこそ言っていた声も一瞬で消えました

「えっと…　その教科書、何て書いてあるのかと思って…

よくわかんないことばかり書いてあるから…」

「あー、これは数学の教科書

ただ、トップ校に通う高校三年でようやく解けるようになる位のレベルのな」

「あ…ははは…

そうなんだ…

（もう笑うことしかできね――――――！！！！）」

「まぁ…　でもこんなの簡単すぎてつまんねェけど

沢田解いてみるか？」

「イヤイヤイヤイヤ、いいです！！

オレはどーやったって解けないだろうし！！」

「あっそ」

オレはまた寝始めた

それからはオレを起こさないよう、静かに授業が再開された

キーンコーンカーンコーン

「…昼飯…か…」

どうやら席替えタイムも終わったらしく、元通りの席になっていた

購買で飯買うか…

オレはそう思い、席を立とうとしたその時

「あ、あの！！風間さん！！」

オレを沢田が呼びとめた

「……なんだよ…」

オレは今、腹減った&寝起き　というＭＡＸ不機嫌なのによー

喧嘩売ってんのかぁー??

「お…オレに、勉強教えてください！！！」

頭を深く下げて頼んできた

「…理由」

「は、はい?」

「オレに勉強教えてもらいたい、っつー理由は?」

「オレ…今家庭教師がいるんですけど、その家庭教師が答え間違えるごとにオレに攻撃してきて…

そっそれで、あんなに難しそうな問題が簡単すぎ、なんて言う風

間さんに教えてもらえないかなって思って…」

「（そりゃあ、リボーンはイヤだろうな…）

…よーするに、オレにその家庭教師の代わりをやれっつーことか…

……まぁ、いーぜ…」

「ほっ本当ですか!?

ありがとうございま「ただし、一回だけな」…そっそれでもいいです!

ありがとうございます!!」

沢田はまたオレに頭を下げた

――――――ここでまたメンドイことになる…

「「「「「風間さん!!私（俺）にも教えてください!!」」」」」

クラスのほとんど全員が言ってきた

「…イヤだ　オレは一人だけにする

…一番最初に言ってきた沢田のみだ

他の奴は教える気はない」

皆、嫉妬してるよ～

ドンマイ★

「沢田ー、今日の放課後オマエん家行くからな

場所は雲雀に聞くから

んじゃーな」

オレはもう授業を受ける気が完璧に失せたので、カバンを持って応接室に行った

もちろん、購買に寄ってからな★

＊放課後＊

オレは約束通り沢田の家に来た

家の場所は雲雀に聞いて借りを作りたくなかったから校長に聞いた

…答えるの、早かった…

腕章見たとたん、敬語使いまくりだった…

ピーンポーン

「おじゃましまーす」

インターフォン鳴らして、すぐ!?

と思ったヤツもいるだろう

でもな?雲雀は居留守使うと壊すんだぜ?

この前、また勝手に来た

いや…居た…

凪と会った日だ…

家に帰ったらいたんだよ!!

あいにくオレのとっておきのソファーで寝てて、すぐ起こして帰ってもらった

雲雀曰く『仕事も溜まっているからね　またくるよ』らしいです

もう来ないでいいです、と即答したのは伝えておきますね…

「風間さん！！

来てくれてありがとうございます！！」

沢田の私服…

マンガどーりだな…

「べつにー

んで、なんの教科？」

「えっと…　ほんとは全部教えてもらいたいんですけど、数学…で」

「数学な…

数学は簡単だから、もう一教科教えてやる

何がいいか？」

「じゃ、じゃあ英語でいいですか！？」

「いーぜ　じゃあ早速数学だな
この問題解いてみろ」

オレは沢田に一枚のプリントを渡す
すると沢田は一瞬で真っ青な顔になる

「あ…あのぉー
少ししかわかんないんですが…」

「それなら分かる問題だけでも解け
全くわかんないような問題も、少し考えてみろ」

「（この人、下手したらリボーンよりもスパルタだ――――！！）
は、ハイ…」

「じゃあスタート」

そうして、オレと沢田の（超）スパルタお勉強会が開催しましたとサ★

沢田『★じゃないですよ――――――！！！』

リボーン＆南『おめーは黙って解け』

沢田『風間さん、暴力は振るわないけど、怖すぎるぅぅぅぅ！！！』

南『感謝しろ　オレの知り合いのヤツ（漣）だったら今頃死んでるぞ』

沢田『…やっぱ怖い…』

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０　大空と少し仲良くなる！（後書き）

やばいです！！
昨日の分も投稿したい、とか言っていたけど無理に近くなってきました…

次回は番外編です★
やっぱ、１０話ごとに番外編の方法が一番いいと思うんですよねー
内容は、ツナのこの話の続きですかね
つまり…南とツナ（と、もしかしたらリボーン）の恐怖のお勉強、ですね
お楽しみに★

「次…これを解け!!」

「わ…わかんないです」ブルブル

「いいからやれるとこまで解いてみろよー（＾ｖ＾”）」イライラ
イライラ

「ごごごめんなさいィィィ!!!!!」

よっす!　南だ

今、沢田の勉強教えてる最中なんだ★　（前話の続きな）

沢田の出来が悪すぎて、イライラ最高潮だぜ!

「ん?　おめーは誰だ?」

突然、黄色のおしゃぶりを持った赤ん坊…リボーンが来ました★

「リ、リボーン！！
今日は部屋に入んないでくれって言ったじゃないか！」

「うるせーぞ
で、おめーは誰なんだ？」

「銃下ろせって！！」

「風間南…
あのさ…そんなおもちゃの銃向けられてビビる人はいないぜ？」

「（ニッ）よくわかったな」

「お…おもちゃ！？」

「まーな…
それより誰なんだよこの赤ん坊は…」

「オレはツナの家庭き「いとこ!!いとこです!!」」（沢田がリボーンの口を押さえた）

「家庭教師か　名前は？」

「んな――!!!　何でわかるんですか!?」

「途中まで言ってただろ…

名前は？」

「オレはリボーンだ

よろしくな、風間」（リボーンが沢田の首を絞める）

「あぁ、あんま関わりたくねーけどよろしくな」

「（ニッ）まあそーゆーな

今日は何で来たんだ？」

「こいつの勉強教えにだよ

オマエの代わりをしてほしがっていたから、今日だけ来てやったんだ」

「そーか、ツナはもうオレに教えてほしくないのか」

「えっ（なんか嫌な予感する…）」（顔が青くなっていく）

「なんでも、『すぐに暴力をふるってくる』んだそーだ

まぁ、こんな赤ん坊に負けるのが悪いけどって言いてーが、オマエ結構強いだろうからな」

「そこまでは言ってないですよ！！」

「同じようなことだろ」

「まぁ、そうですけど」

「そーかツナ、そんなにオレにシメてほしーのか」

「え……」

「あーぁ、どんまーい
オレは何も悪くねーかんな」

「ちょ、待ってってリボ…
うわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

「ごしゅーしょーサマ」

そして――――――

沢田、気絶。

「それにしても、おめー、どうしてオレが強いって分かった」

やべー、覚えてたか――――

「そんなの一目見れば大体わかるけど？

あー、オマエのことをアイツが見たら喧嘩ふっかけそーだな……

…」

「そーか……

でも、そー言ってるオマエも結構…いや、かなりつえーだろ」

「あり？　アンタも一目見ればわかるの？」

「まーな　ちなみにおめーは、オレが相手でもかなり苦戦するレベルの強さだぞ」

「それほどじゃないと思うけどー…」

「いや…　オレと同じ位はつえーはずだぞ

今戦ってみるか？」

「それは嫌だね　オレは面倒事が大嫌いなんで

さてと…　沢田が伸びちまったから、オレは帰ることにする

中途半端になったから、今度来るって伝えといてくれ

じゃーな、チビちゃん」

「チビちゃんは余計だぞ」

「まあまあ、んじゃな」

「ああ」

バタン、とドアを閉め、オレは帰り始めた

「風間南…か…

アイツ、オレが最初にこの部屋に入ってきたとき、殺気を出していた…

…調べてみるか……」

こうして南は、『できれば目をつけられたくないなー』と思っていた相手に見事に目を付けられてしまいました

……自業自得ですがね

Ｓｔｒａｏｒｄｉｎａｒｉａｍｅｎｔｅ２　大空との勉強会、そしてイエロー

まさしく話の続きですねー
まあ、番外編なんで許してください

ちなみに、Ｓｔｒａｏｒｄｉｎａｒｉａｍｅｎｔｅというのは、イタリア語で『番外編』という意味です
普段のＥｐｉｓｏｄｉｏも『第〇話』という意味です
章もですが…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１１　嵐…ともう一人の転生者が転入する！

「あーぁ、昨日は沢田のせいで疲れた――――」

久しぶりに朝早く（とはいってももう9時）から登校してるぜ！

そろそろ獄寺が来ると思うからな★

それに、雲雀からも怒られたくねぇし…

獄寺とは友達になりてーしな！！

オレのパシリ第2号にしてやる！！（嘘です）

ちなみに1号は沢田な

あ、風紀委員になったからほぼ全員がパシリだな…

こーゆー時、風紀委員でよかったと思える数少ない瞬間なんだよ…

ガラッ

オレは相変わらず遅刻している

「おはようございますっ！

風間さん、今日は１時間目はＨＲで、転校生の紹介をしていました」

やはり、キビキビと南に説明する教師

「（来たか…）転校生？」

風間さんに自己紹介しろ！」

「はい、獄寺！山下！

山下！？

獄寺と一緒に転校してくるヤツなんていなかったぜ！？

…オレの傍観を邪魔する気か…？

なら容赦なく殺すぜ…

そして、山下と呼ばれた女が立った…

獄寺は座ったままだ

「山下咲といいます

風間さん、よろしくお願いしま「うるせぇ、話しかけんな」…すっスミマセン…」

怖えええええええええ！！！！！！！！！（獄寺以外のクラス全員の心の声）

南は、咲の声を聞いた途端、

『こいつ、ぜってームリ！！

それに、十中八九オレの邪魔する！』

と悟り、殺気をぶつけた

「ご、獄寺君！！早く自己紹介をしなさい！」

「あー、オレもメンドイんでいーでーす

後で雲雀に聞くんで」

絶対、獄寺は自己紹介なんてしないから時間のムダだ

それにしても、あの女……

そして漣君、あの女の存在をオレに言わなかったとは

オレに殺されたいのかなぁ

会ってくるとしましょうかね…

きっと漣は、南に半殺しにされるでしょう

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１１　嵐…ともう一人の転生者が転入する！（後書き）

登場人物でいたのに出すの遅くなってホントにごめんなさい！！
南の敵になるか、仲間になるかはもう決めてます！
まぁ…予想してみてください

あぁ、文が短い……

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１２　大空ＶＳ嵐…と邪魔者！

あれから、オレは漣に会いに行き、聞いた

「れーんー？あの女は何なのかなぁ？」

「えっと…わ、忘れちゃいました…」

「わ・す・れ・た・？」

コイツ、そんなにもオレに殺されたいのかなぁ？

喧嘩売ってるとしか思えないのはなんでだろうねー

「（や、ヤバい！！！）

山下咲は、恐らく転生者だ

だが、オレはアイツを転生させてない

でも転生していることは確かだ

つまり…」

「漣以外の転生させることのできるヤツが転生させた、か…」

「あぁ、オレも知ったのは南を転生させて数日後だからな」

…？

こいつ、知ってたっつーことだよなー？

「知ってたのかい？」

「あぁ、だから、南を転生させて数日後…！！

あ！！！！！」

漣は、自分がミスをしたことにようやく気づいたようだ

顔がどんどん青くなる

「（にこっ）知ってたんなら、すぐにオレに言おうな？」

ボカッドゴッドビグシャァ！！！

「ず、ズビバゼンデジダ（スミマセンデシタ）」

「フンッ…

もう言い忘れていたことはねぇか？」

「ハイ…あぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

漣は何かを思い出したように叫んだ

「あのぉ…大変申し上げにくいんですけどぉ…

南さんを転生させるとき、こっちの世界でも強くなるように、

体力・精神力・気力・知力・腕力・瞬発力・…

つまりは、全ての力を上げまして…

でも、ありえないほど上がっちゃいまして…」

「…もはや敵なし状態になった、と？」

「オォー、流石ですねぇ
でも、敵なしどころか、敵がいたら怖いくらい上げちゃいました
★」

イラッ

「そっかぁ…
でも、いつオレが少しでも上げてくれって頼んだかなぁ？
オレが頼んだ記憶がないのは気のせいかな？」

「あ…」

さっきまで少し調子に乗っていた漣はもう一度青ざめる

「ハァ…いいや
どーせオマエを何万回殴ったり蹴ったりしても、もう戻らなそうだしな
他には？」

「えっと…

もうないです」

「分かった

あの女についてどんなに小さなことでもいいから、わかったら報告しろ

じゃあな」

南は沢田ＶＳ獄寺を見るために、現実世界に戻った

そして、今いるのは屋上――――――――

「オレを裏切るのか？リボーン！！

今までのは全部ウソだったのかよ！！？」

「ちがうぞ

戦えって言ってんだ」

「は！？」

「あー、リボーンが獄寺のダイナマイトの導火線だけ撃つシーンは過ぎちゃったみてーだな…

ま、死ぬ気までには間に合ったからいっか★」

あのリボーンの奇跡的なシーンを見たかったが、過ぎてしまったものは仕方ない

そう思っている間にも、獄寺から沢田への一方的な戦いが続く

「復活（リ・ボーン）！！！」

死ぬ気で消火活動！！！」

バカ、と音を出して沢田の死ぬ気タイムが始まる

「二回目の死ぬ気タイムか

今日は楽しませてくれよ？」

南は屋上でボソっとつぶやく

前回見た持田との一戦はあり得ないほどつまらなく感じたのだ

「消す消す消す消す…」

沢田の手がダイナマイトの火を消していく

獄寺は『二倍ボム』を放つが沢田はどんどん火を消す

そして、『三倍ボム』を放とうとするが…

未完成なのか、手から一つダイナマイトが落ちる

こういう場合、バランスが崩れるのでダイナマイトはポロポロと落ちていく

「（ジ・エンド・オブ・俺…）」

獄寺がそう思った途端…

「消す!!!」

『消火活動』を目的として死ぬ気になった沢田は獄寺の周りに落ちたダイナマイトの火も消していく

「…このまま、原作通りにおってくれればいいけど」

南がそうつぶやいた

なぜなら…

「なんでオマエがそこにいるんだよ…

山下…咲…」

南が大っ嫌いの、本来存在しない転校生――――――

彼女が沢田やリボーン達のもとにいたのだ

そして南は漣から直感力も上げられていたので、山下咲がこの後何かをすることに気づいていたのだ

しかし、原作通りに物語は進む――――――

獄寺が沢田に土下座する

しかし、このあとが変わった

「ところで、１０代目

この女は誰ですか?さっきから一緒にいますが…」

「…チッ

ここからあの女が関わるのかよ…

獄寺、気づかなくてよかったのによ…」

南の予想は、当たってしまったのだ

「あ、この子は山下咲ちゃん…です

今日獄寺君と一緒に転校してきたんですけど…」

なぜか敬語になる沢田

…笑える…

「山下、オマエは１０代目の何だ!!

さっきからなれなれしく１０代目の傍にいやがって!!」

「（ナイス獄寺ぁぁぁぁぁぁ!!!!!

ウザいよな！？ん――――、超ナイス！！！！！！！！）」

南は心の中で獄寺を後押しした

「えっと…ツナの友達…です
今日なったばかりだけど…」

咲がビクビクしながら言う

「アイツ、転生者っつーことは原作のことも知ってんだよな…
なら何で怯えてるんだか」

言っておこう。

獄寺は咲にかなりの殺気を送っているのだ

知っていても、まさか会ってすぐに殺気をぶつけられて怯えない人は一般人にはいないだろう

南はもはや一般人ではないから効かないが

「ケッ」

獄寺は咲の存在を自分の中から消した

そして原作に戻って、不良達が来て、獄寺がダイナマイトでボコボコにした

「あー、よかった

原作と変わったっつっても、アイツが獄寺に嫌われただけか…

どっちかっつーと…ラッキーだったからいーや★」

本日の南の運勢・大吉

予想外のことが起こりますが、自分にとってはいいことです。

安心しましょう。

ラッキーポイント・屋上

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１２　大空ＶＳ嵐…と邪魔者！（後書き）

更新遅れてすみません…
これからは一日一話になりそうです
できるだけがんばります

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１３　退学どころか退職させる！

今日は『退学クライシス！』か…

昨日、明日は理科のテストの返却があると聞いた

まぁ、そんなこと言われなくても

獄寺が沢田に負けた日の次の日って覚えてたけどな

そして…

今日は、学ランも腕章も付けてないんだぜ！！

…でも、今日はなんだよな…

今日からじゃないんだよな…

なんで付けてないのかって？

フッフッフ…

あの忌まわしき根津をハメてやろうと思ってな★

だから昨日頑張って雲雀から許可を得たんだよ…

アイツ、人の言ってることムシしやがるから大変だったんだぜ?

昨日にさかのぼってみよう――――――――――

「なぁ、明日だけでもいいから一般の生徒と同じ制服で来てもいいか？」

「ダメ」

…聞きました！？

この即答っぷり！！！！

「なんでそんなに即答なんだよ！！」

「君は風紀委員でしょ
なら当然だよ」

「だーかーらー、一日だけ！！
明日だけでいいから！！！
頼むよ～
極悪非道の風紀委員長雲雀様♪」

「咬み殺してあげようか？」

死にたくはないけど、明日の普通の制服はなんとしてももぎ取る！！！！

「あ、それは丁重にお断り。
ホントに頼むって！！」

「…」（ムシ）

「はあぁぁぁぁぁぁぁ！！？？！？！？！
ここにきてムシとかなんだよ！！！」

「……」（ムシ）

「……

ち、ちよっと酷くね？」

「……」（ムシ）

「そーかよ！！ムシかよ！！

ならオレはここで頼み続けるだけだ！！！

なあ！！明日…」

と、二・三時間続き雲雀が折れたのだ

……オマケに大量の書類（今日来る分だけらしいから大量かは分からないけど、きっと大量）も

よし、逃げよ★

今思ったけどオレって、一回も風紀委員の仕事してないなー（逃走するから）

肩書きだけでいいって

風紀委員とか、『風紀』って掲げただけの不良の集団なだけなんだよな～

原作では一部しかその様子が書かれてなかったから違うと思うだろ

うけどな

おっと、これを雲雀に言うってことは喧嘩売るのと同じことだから
言わねえけど

ま、そーゆーワケで今日のオレは風紀委員と知らないヤツは一般生
徒だと思うだろう

根津とか根津とか根津とか

あー、根津の驚いた顔が目に浮かぶぜ★

楽しみだな～♪

そして、理科の時間――――――――

「今日は理科のテストを返却する

呼ばれたヤツは取りに来い

まず、青山ー」

そして、名前順で呼んでいく

オレは風間だから、沢田より前かー

「大久保ー」

「はい」

「風間ー」

「……」

「風間！早く取りに来い！！」

ムシしてる訳ではありません。

爆睡中です。

周りの生徒（風紀委員と知っている生徒）は

「根津のヤツ、風間さんの機嫌を悪くさせんなよ！」

「根津…さようなら」

…とまあ、オレが根津をボコると思っているようだ

オレとしてはまだ考え中だな

「風間ぁ！！

起きんか！！」

そう言いながら根津は自分の教科書を丸めたもので殴ろうとする

オレは爆睡中だったが、気配を感じて起きた

ヒュッ

パシッ

なにが起きたかと言うと、根津が思いっきり殴ろうとしてきた（ヒュッ）

そこでオレの右手だけが動いてそれを止めた（パシッ）

んまぁ、こんな感じ？

「貴様っ！！」

「ウルセェ　黙りな」

根津のやつ、どんどん顔が真っ赤になってくぞ？

あー、楽しい★

「生徒ごときが生意気なんだ！！

…そうだ、オマエのテストの点数を皆の前で言いふらしてやろう

えーっと…１００点だ！！

たかが１００て…なにぃぃぃ！！！？？？？！

ま、満点？？！？？？！！」

「まぁ、簡単過ぎて一瞬で終わったしー？

オレを誰だと思ってんの？」

「ぐっ…まあいい

そうだ、ここで仮定を話してやろう

理科のテストで満点を取りながらも返却時は寝てるやつがいるとしよう

そいつは間違いなく頭のいいやつのテストをカンニングしている！

それはなぜか！！　なぜなら…

そいつは頭がいいように思わせたいからだぁ！！！！！」

「「「「「「（バカじゃないのか？根津のやつ…　風間さんはホントに頭いいんだよ）」」」」」」

クラス中があり得ないほど静かになり、皆の心の声が一緒になった

「そー思いたいなら思っとけ

五流大卒の根津銅八郎」

「!!?なぜ…

まあいい　後で聞いてやる

続きだ！　川田」

お?案外動揺しなかったな?

まあここでリアクションしちまうと退職すっからな…

！　そうだ!!こいつムカつくから退職させよ♪

そんな真っ黒いことを考えている内に話は進んでいき、沢田が呼ばれ、仮定をし、獄寺が来て…

今は校長室

校長はオレが風紀委員と知っている

「根津君、まずは風間さんを帰らしていいかね？」

「校長！！いけません！！

風間が一番悪い生徒なんです！！」

「きききき君は雲雀君を敵に回したいのかい！？」

「何を言ってるんですか校長

そんなのは嫌に決まっていますでしょうに」

「風間さんは風紀委員だ！！！！」

「！！！？？？！？！？！！」

あービビってる、ビビってる♪

「は！そういえば１－Ａに風紀委員がいるとか…

風間さん！！！ゆゆゆゆゆゆゆ許してください！！！！」

お――――――、見事なド・ゲ・ザ★

でもな、オレってばさっきのがかなり頭に来てんだ♪

「しょうがないですね～

実は根津が五流大卒で、４０年前に並中に通ってたってことを教えるだけでカンベンしてやるよ」

「!?風間さん!それは本当のことなんですか!?」

おっ、いーねーいーねー♪

校長が食いついてきた

「まー後は本人に聞いてくださーい

そんじゃ」

オレは校長室を出て行った

後から聞いたことだが、あの後は根津が退職することになり、沢田と獄寺も何事もなく助かったそうだ

そんでもって、オレは見事に書類からの逃走を成功させました★

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１４　雨の自殺を事前予防する！

「じゃあ、女子はドッヂボールで男子は野球だ
それじゃあ開始ー」

今は体育の授業だ

オレは久しぶりにドッヂボールの名を聞いたから参加することにした

あ、教師からは

『ちょっとでもやりたくないって思ったら辞めていいです！！！』

って言われたぜ？

それならそうしよう、とものすごい思ったね

なんか、教師の中では

『根津を退職させたのは風間さんだ』っつーことになってるらしい

オレが思うに自業自得

オレじゃなくても沢田と獄寺、それと一応リボーンがそうさせてたし？

……ああああああぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

オレ、自分で原作ブレイクしてんじゃねーかよ！！！！！！！

ぜっっっっったいに、自分からはブレイクしないって決めてたのにいいいいいい

うん。仕方ないね★

どうせ、あの女の存在がある限り、いつかブレイクするんだ！！

オレは入りたくないから傍観してまーッス★

だってさ――――――――――

メンドそーじゃん？

え？それだけの理由ですが？

おっと、随分と話がそれたな

まぁ、そんなこんなで今は体育の授業だ

「風間さんの方に投げるときは、死ぬときだと思え」

そう誰かが言ったのでオレの方には何も来なくなった

つまんね――――――…

男子は男子で、ようやくチーム分けが終わって試合を始めた

あー、原作通りだ

沢田がハブかれ、山本がチームに入れ…

まだだけど、負ける

沢田って、つくづくカワイソーな人間だな★
（そんなこと、1ミクロンも思ってません
『せめて少しでも努力してから自分をツキのない人間って思えば？』
って思ってます）

まあこうして、ごくフツーに終わった

…オレのもとには一球たりともボールは来なかった

おかげでメンドくなかったから、いっか★

放課後――――――――――

「君、昨日はよくも逃げてくれたね」

オレは帰ろうかと思ったんだけど放送で

『風間南、今日こそ応接室に来ないのなら咬み殺すからね』

って言われて嫌々来た

いつも勝手に帰ってるから、とうとう呼び出し食らったよ

あ、モチロン極悪非道の大魔王＝並盛中学風紀委員長、雲雀恭弥からです

「あー、あれは仕方がなかったんだ

それに、オレのおかげで並中から嘘つきなタチの悪ぃ教師がいなくなったんだ

オレ、並中の風紀を乱す者を消したんだぜー？

うん！それでチャラになったな！うん！」

とまあ、訳のわからないことを言う

「根津銅八郎のことか…

ハァ、もう君に昨日のことを言っても無駄そうだからいいよ

昨日のことはね」

「サンキュー！

じゃ、なんか嫌な予感するからここで！また明日な！」

オレは逃げるように応接室を出た

だって、あんなに昨日のって強く言ったんだぜ？

嫌な予感しないヤツはアホだな。アホ

だから、もちろん知らない

次の日に何が起こるかなんて

＊グラウンド＊

ここでは、沢田のアドバイスを聞き、山本が居残り練習をしていた

周りには、誰もいない

つまり一人で

オレは

『明日、絶対にあの女が原作ブレイクするよなー。なら、オレがブレイクしちゃおー』

っと、あの女にブレイクされるなら自分で、という思いからグラウンドに来ていた

オレがちょうどグラウンドに着いたとき、なぜか山本が腕を痛そうにしていた

「山本ー、なんかしたのかー？」

オレは山本の方に歩きながら聞いた

「っ！風間…か？

ちょっと、怪我っ…しちまってな」

「…痛ェンなら無理に喋らなくていい

腕だろ、見してみろ」

オレは知ってるので見て、骨折だなって言うつもりだ

「っ！！ってぇ～

ホントに動かすのも痛ぇから、叩いたりしないでくれよ？」

「ったりめーだ！オレはそんなに悪じゃねーよ

これは…骨折…だな

ムリしすぎたな」

「！？こっ…せ、つ…」

山本がどんどん暗い表情になる

「あぁ　だけど、間違っても屋上ダイブなんてしようとすんなよ？

あ、これは学校でな　別に学校以外でなら好きにしな

オレは別にオマエと仲良い訳じゃねーからな」

「…オマエ…止めないのか？」

「その様子じゃ死ぬつもりだったんだな

オマエの言うとおり、オレは止めない
ってか何で止めなきゃいけないんだよ
そんな義理もねぇ

…これで十分？」

「…あぁ
オレはじゃあ病院行くから帰んわ」

そして山本は腕が痛むのか、ゆっくりと帰って行った

「さて、明日どうなるのか楽しみだな」

次の日―――――――――

プルルルルルル…プルルルルルル…

…ウルサイなぁ

せっかく寝てたのに起きちゃったじゃないか

「ったく、第一今何時だよ!!　って7時？早！」

オレの起床時刻は早くて8時

最近、朝ゆっくりするのを代償に、長く寝ることにした

「んで…この番号は…」

無視したかったが、このまま永遠に鳴ってそうな気がする

「もしもーし、朝っぱらから何の用？」

『今から１０分後に応接室来て
来ないなら「分かった、分かった。行くよ」…ならいいよ
じゃあね』

一方的な内容で電話は切れた

電話の相手は雲雀ですよ…

前に電話かかってきたときに、登録したんですよ

オレは殺されたくないので、急いで支度した

「んでー？　何の用だ？」

「ギリギリセーフだね

昨日君が逃げたせいで書類が溜まってるんだ

一回も仕事してないから呼び出したんだよ」

……よし、逃げよう★

ダッ

「オレは手伝うつもりねーから！！！！」

「今日は逃がさないよ」

「って、追いかけて来んな！！」

オレは屋上へと逃げた

ギイイイ…

「！？　…風間…」

どうやら屋上には先客がいたらしい

「山本か…

その様子だと、死ぬつもりか？」

ネットの向こう側に立っている

「…あぁ　悪ぃな

ここ以外思いつかなかったんだ」

「ダメだ！！学校で死ぬと雲雀が怒るからな

『並中の風紀が乱れた』ってな

そんでもって、オマエと同じクラスのオレが怒られて…

せっかく書類から逃げたのに、意味がなくなる！！」

「…そ、そうか…」

「ンま、オレじゃない誰かが止めるからいーや

じゃな」

そう、たとえあの女がいても沢田が止めるはずだ

そう思い、オレは屋上を出て、雲雀に見つからないようにして教室に向かった

「んー、まだかなー

今日は雲雀に見つかんないように早く帰りたいんだけどなー」

オレは今、教室にいる

沢田の死ぬ気を見るためだ

「お、落ちてきた」

ちょっと遠いが、しっかり見える

ただ、声は何も聞こえない

そして、空中復活（リ・ボーン）をして、山本は死なずに済んだ

「ハー、これで雲雀に怒られないな」

オレはそそくさと帰った

見事に雲雀からの逃走を成功させて

そして、その後の山本達――――――――――

沢田「山本　大丈夫か？」

山本「ああ

　　ツナ！おまえスゲーな」

沢「えっ？」

山「おまえの言うとーりだ　死ぬ気でやってみなくっちゃな」

沢「！」

山「オレどーかしちまってたな

バカがふさぎこむとロクなことねーってな」

沢「山本…！

（リボーンサンキュー　死ぬ気が山本を救ったよ）」

山「風間が言ってた誰かってのはツナだったんだな」

沢「？風間さんが何か言ったの？」

山「あぁ、誰かがオレの自殺を止めてくれるってな」

沢「そ、そうなんだ…　風間さんは止めなかったの？」

山「『風紀が乱れて雲雀に怒られるから辞めろ』って言われたけど、それだけだったな」

沢「ハハハ、なんか風間さんらしいよね

自分にとって損になることは止めるっていうのが」

山「ハハッ、そーだな
書類から逃げたのに意味がなくなるっつってたしな」

沢「逃げたんだ…」

沢／山「ハハハハハハ」

リボーン「（風間はツナが来ることを知っていたのか？
山本の話を聞く限りでは、そーとは判断できないな…）
（ニッ）こないだの事といい、なかなか面白そうなヤツだな」

そして、さらにリボーンの警戒心を強めてしまっている南だった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１４　雨の自殺を事前予防する！（後書き）

南の予想はハズレでしたねー
今回は咲は関わらないんです
そして、とうとう1巻の内容は終わりです！
本当はあと2話ありますが、学校じゃないし…
カットしました★
それでは、また次回～★

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１５　ファミリーにスカウトされる！

「おい沢田、なんでオレはこんなところにいるんだよ」

「えっと…
（リボーンのやつ、風間さんまで巻き込んでんのかよ～）」

「ハッキリ言え」

「お、オレに言われても分かりませんって！！」

オレが今ドコに誰といるか、説明しましょう

場所・校舎の外

人・沢田、山本、獄寺、チビちゃん（リボーン）

だぜ★

「あ、あの…風間さん、ツナもわかんないって言ってるし…」

あぁ、オレには見えないがあの女もいるそうだ

（存在を消してます★）

「沢田、オマエは本当に知らないんだな？」

「（咲ちゃんのこと無視してるし！）

えっと…なんかリボーンが山本に試験するって…」

あぁ、入ファミリー試験か…

「チビちゃんが？」

「おい風間、チビちゃんと呼ぶなといったはずだぞ」

来たか…

「り、リボーン！！」

「じゃあ何でオレがここにいるのか教えてくんね？」

「オマエ、ツナのファミリーにならねえか？」

…は？？？？？

「ヤダ」

「なんでだ？別にファミリーになって何かしろ、とは言ってねーだろ？」

オレは傍観がしてーんだよ

「（よかったー）

ほらリボーン、風間さんは忙しいんだよ」

「忙しくねーだろ　こないだも風紀委員の仕事サボってたってツナに聞いたぞ」

……沢田ぁ――――――？？

「さーわーだーくーん？何勝手に喋ってるのかい？」

「え…お、オレは何も言ってないですって!!
（リボーン!!オレはそんなこと初めて聞いたぞ!!!!）」

この様子じゃ、本当に知らねェな…

「ふーん…まーいっか、ホントのことだし
ってか、オレが断る理由はメンドそーだからだぜ?」

「は…?（もしかして、オレのさっきの忙しいっての無駄?）」

「おい風間!メンドそーっつーのはどういうことだ!!」

おいおい、ここで獄寺が突っ込んでくんなよ…

今さっきまで山本と言い合いしてたくせに…

「そのまんま
オレはメンドイのが嫌いだから断ってるだけだけど？」

「メンドイってなぁ…！！」

「ご、獄寺くん！落ち着いて！！」

沢田…大変だな…　笑えるぜ？かなり

「じゅ、１０代目がそうおっしゃるなら…」

おー、見事に静かになったなー

すげーすげー（棒読み）

「まっ、そーゆーことでオレは断るからな」

「どーしてもダメか？」

あー、目をウルウルさせてきたよー

「ダ・メ」

「チッ　わかった
呼び出して悪かったな」

意外と諦め早いなー

オレにしちゃラッキーだけど

「別にー　でも、もう面倒事には巻き込むなよ
じゃーな、チビちゃん♪」

オレは教室に向かった

今回は誘われて断ったのに傍観して、バレたらまた誘われる確率が高いから無理だな…

そう思ったときだった

『風間南、今すぐ応接室に来て』

――――――――――

「…またか…」

オレは渋々応接室に行った

「風間南…アイツの戦闘力はきっとオレ以上だな…

今日は無理だったが、いつか絶対にファミリーに入れてみせるぞ」

リボーンは、今日からしつこく誘っていたら無理だと思い、簡単に折れたのだ

南はそんなことを全く気づいていなかった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１５　ファミリーにスカウトされる！（後書き）

咲のセリフ、一回でしかもシカトされたってね…
まあ、山本なんて一回もなかったし（（笑
入ファミリー試験の様子は…
咲も山本も、合格したってことで…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１６　弟子入りされる！

「今日はとうとうおにぎり自習だ…
耐えられるかどうか楽しみ♪」

そう！今日はおにぎり実習だ！

んでな、沢田が皆のおにぎり奪って無差別に食いまくっただろ？
そこで！オレのおにぎりも食わせてやろうと思ってな★

ただ、ビアンキのを超えるほどの毒入りだけどなー

さてさて、沢田は耐えられるでしょうか…

ただ、作るのは一個だけだぜ？
他のはオレの昼飯になるからな
その中身はフツーの鮭だ

昨日の晩飯のついでに漣に作らせたんだ★

あーそうそう、漣といえば

オレが前に漣に作らせた刀、完成したぜ！！

何から何まで漆黒の刀だ！

漣にしてはセンスがよかったのに驚いたけどな

なぜか、すでに二刀作ってあって

最初から二刀流の練習ができそうでよかったよ

もう学校だ…

朝早く（8時半）から行くのはダルいなー

でも仕方ないか…

ん？何が仕方ないのかって？

だってよー、おにぎり実習は原作があったんだぜ？

見たいじゃん？

…まぁ、オレは気分屋だから原作あってもビミョーだけどな…

しかたないよ、これがオレだからな

たとえ雲雀に朝っぱらから電話かけられても、耳栓して起きないからな

オレが最近雲雀に怒られる回数が多くなってるのは、そのせいかもなー

そして、実習の時間――――――――

「今日はご存知の通りおにぎりを作ります
失敗することはないと思いますが、食材を無駄にすることのないようにしてください」

やっぱり敬語だなー

あ、モチロン気にしてないぜ？

ってかむしろ、いい気分だけど？

そしてモチロン、やらなくてもいいって言われたぜ★

でも沢田に毒入りおにぎりを食わせて静かにさせたいから実習するけど♪

あぁ、食わせたい理由ってそれな

ウルサイのが嫌いだからってだけ

だから、どこぞやの牛も無理。

ソッコーで殺したくなる♪

さて、作り始めるとするか…

～作り方～

1．ご飯にタバスコ一本混ぜ合わせます。

2．かなり毒毒しいモノを1にぶち込みます。

3．得体の知れないものを具になるようにしていきます。

4．2で出来た物に3を包み込み、おにぎりの形にしていきます。

5．色が悪いので、真っ白になるよく分からないもので周りの色を白くします。

で、完成★

あ、作るときにゴム手袋やマスクなどを装備して安全につくろうな！！

モチロン、オレが食うものと見分けがつくようにしたぜ！

じゃないと危険だからな…

そろそろ教室に行くみたいだなー…

さて、沢田は耐えられるでしょうか♪

教室――――――――

「あ、あの風間さん！これ私が作ったんだけど、食べてくれませんか？」

「私のも食べてください！！」

おうおう、オレにおにぎりをくれんのか

確かに昼飯におにぎり二個ってのも腹減るしな…

「そーゆーことなら貰うけど、全部は無理だぜ…？」

そう、オレには獄寺以上に女子が群がってきていた

「じゃ、じゃあ一人一個ずつでいいですか？」

…そんなに食えないと思うけど…

「ハァ…それでいーよ」

オレは両手でも持ちきれないので袋に入れてカバンにしまった

しまわないと沢田が食うからな…

お！ビアンキが来た！

そろそろ…

ササッ

すげー

もの凄い速さでおにぎりすり替えたよ…

「ちょっまてよっ

何してんだおまえ!?」

沢田もここで行かなければオレのおにぎり食わずに済んだのになー

「ツナ君　食べる?」

笹川京子もあげようとするのに驚きだよな

ビアンキもドアの影に隠れて見てるし…

ってかさ、前に読んだときも思ったんだけど

獄寺、他のヤツからのおにぎり食わずに笹川京子のは食うって…

「食べたら死ぬんだぞ――――っ！！！！」

パパアンッ

勢いよくおにぎりが飛ばされる

そしてどこからか死ぬ気弾がきて…

「死ぬ気でおにぎりを食う！！！」

パクパクパク

おー、スゴイなー

空中マシュマロキャッチならぬ、空中おにぎりキャッチ…

ある意味キモいな…

「たりねー！！！」

来た来た♪

バッ

沢田がオレのおにぎりを食いとった！！

「う〝…」

沢田はオレのおにぎりを食うと、倒れた

「１０代目！？どうしました！？」

「ツナ！？」

獄寺と山本が倒れた沢田に寄ってきた

沢田の死ぬ気タイムは強制的に終わっていた

……このおにぎり、恐ろしいな…

「風間！１０代目に何しやがった！！」

オレのせいなのかよ…

「なんもしてねーよ
ただ沢田がオレが作った毒入りおにぎり食って倒れただけじゃねーの？」

「な…毒入りおにぎり…！？」

「あぁ、オマエも食う？今から作ってきてやろーか？」

「え…遠慮する…」

「ならいーけど」

オレは昼飯を食いに応接室に向かった

「ツナが倒れたのは、間違いなく風間が作ったおにぎりを食べてからだ…

となると、風間はこうなることを知っていた…？

山本の時といい、今といい…

（ニッ）それにしても、ビアンキの毒を越えるものを作るなんてな」

こうしてリボーンは南はの警戒心を一段と高くした…

「あなた…さっきおにぎり作って気絶させた子よね」

!?ビアンキ!?

なんでここに?

「そーっすけど?オレに何か用でも?」

心で動揺してても顔や動作には出さない

これは前の世界でできるようになったことだ

「私のポイズンクッキングを食べても気絶しなかったのに、あなたのでは気絶した…

これで一つ分かったの…

あなたのポイズンクッキングは私のより強いって」

…嫌な予感しかしないから逃げ出したいが、初対面なのでできない…

「…それで…？」

「私を、弟子にしてくれないかしら

あなたの空いてる時間にちょっとだけでいいの」

的中――――――――――！！！！！！！！

断りたい、断りたいけど…

なぜかオレの視界には、おのチビちゃんがいる…

「いーじゃねぇか　オマエどーせ暇だろ？」

やっぱり突っ込んできたよ…

しかもこないだっから暇暇暇暇って…

「そうなの？じゃあお願いね」

オレに拒否権なしッスか！？

「ハァ…分かりましたよ…　名前は？」

仕方ないよな…うん…。

「ビアンキよ」

「オレは風間南ッス

てか弟子になっても特に教えることなんてないと思いますけどー」

だってさー？この後もどんどん新技開発すんじゃねーか

師匠とか、いらないと思うんだよねー

「とりあえずは形だけでもいいの

その内今日のおにぎりの食材とか教えてちょうだい」

「あー、それならいいっすけど…」

「そしてついでにツナのファミリーになっちまえ」

あれー？またこの話かい？

「それは断る　こないだも言ったろ…」

「チッ…勢いで言うかと思ったのにな…」

まだオレを諦めて無いっつーことか…

「話そんだけならオレ昼飯食いに行くんでー

じゃーな、チビちゃん、ビアンキ」

「ええ」

「いい加減チビちゃんはやめろ」

「いーじゃねーか　言い方くらいなんでも

じゃな」

後ろを向いていたから分からなかった…

このときのリボーンの顔がとても嬉しそうだったなんて…

新しい獲物を見つけたように…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１６　弟子入りされる！（後書き）

ビアンキの師匠って…

恐ろしいね、南は

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１７　嵐と友達になる！

只今夏真っ盛り！

ウザイ限りですねー

でもオレは部屋のクーラーをフル活動させて涼しく過ごしてます★

あ、電気代は漣が払ってるから何も気にならないぜ！！

「神って使えるよなー」

「…使えるってなんだよ…」

「あれ？いたの？」

「…オレの存在って…」

あー、漣がガチでいじけてるよー。

めんどくさいなー。

「好きなだけいじけてろ
オレは無視すっからな」

「…ゴメンナサイ」

そろそろ夏休みに入る

気温とか、言うだけで嫌になる

「あちー…　漣、扇風機持ってこい」

「は…？この家にそんなモンねーぞ？」

そう、この家にはクーラーは一部屋に一つずつあるが扇風機はない

「（ニッコリ）分かるよね…？れーんーくん？」

「ヒィィィィィ！！！！！

も、持ってきますよぉ！！！」

漣は半泣き状態で消えた

「持ってきました！！」

そしてすぐに現れた

どーゆーことかと言いますと、神である漣に一番性能がいい扇風機を買って来させたんです

まぁ、神なら創ったのかもだけどな

「じゃあコンセントさして電源つけてー」

「あいあいさー」

やっぱコイツは、神じゃなくて使えるパシリだと思う

「あー涼しー」

扇風機とクーラー…

なんて最強な組み合わせなんだろう…

「漣、これと同じのあと7台なー」

「なななななな7！？

どこに置くんだよ！！」

「まずオレの部屋に1、この部屋（リビング）に1、客間に1、

キッチンに1、ダイニングに2、洗面所に1だ！」

高級マンションだから一つ一つの部屋が広いんだよ

ダイニングなんて、１５畳以上はあるんだぜ？

「…この扇風機は？」

「８台目は寝室」

部屋数が多いため、寝室を別に用意してある

「…分かった…　ちょっと待ってろ」

そう言って消えたかと思うと、扇風機を持って現れては消え、それを何度か繰り返した

「ふぅー…　これがラストだ」

オレの前には新たに７台の扇風機が…

これで今日からより一層快適に過ごせる

「おー、サンキュー」

「！！　たいしたことねーよ♪」

……

漣は感謝されたのが、とてつもなく嬉しいだけなんです…。

何か鼻歌歌いながら台所行ったけど、気にしないでください。

♪～♪～♪～

「何だ！？」

いきなり鳴り響いた音に、漣は身構えた

「漣…いちいちオーバーリアクションすんな、うぜぇから

オレの携帯の音ぐらいに…」

「あ…」

あー、やっぱウザイ。

オレは携帯を見た

Ｆｒｏｍ‥ビアンキ

Ｓｕｂ‥早速だけど…

早速だけど、今日から来てくれない？

ポイズンクッキング?を開発中なの

場所は沢田家よ

――ＥＮＤ――

ビアンキからかー

あぁ、なんで知ってるのかっつーと、前に交換したんだ！

（チビちゃんを通じてだったからチビちゃんのも登録してるけどな…）

んー、暇だし行くかー

「南ー、これやるよ」

漣から渡されたのはゼリー

とても豪華な感じがする

パクッ

「おー、うまいじゃん

漣が作ったのか？」

漣はオレに料理をさせられるようになったので料理がかなりウマイ

「おう！！」

ガッツポーズをしながら喜ぶ漣

ハァ…暑苦しい…

ＴＯ：ビアンキ

Ｓｕｂ：了解

了解

沢田の家なら行ったことあるから大丈夫だ

何か使えそーなものあったら持ってくな

ーーーＥＮＤーーー

オレはよく分からないものを持って沢田家へ向かった

「おい！獄寺！！」

沢田の家に向かってる途中、獄寺を発見～★

…ん？スイカ…？

もしかして…『ポイズンクッキング？』の日！？

「チッ…　風間か…」

「沢田ン家行くんだろ？オレもだから一緒に行こーぜ」

何でかって？

獄寺とは仲良くなりたいからな！

「オマエが１０代目の家に！？何しに行くんだ！！」

「ちょっと呼ばれてなー」

「そーゆーコトならいいが…」

あり？沢田に呼ばれてるって誤解してね？

…まーいっか。

ビアンキの名前出したらひどい事になりそーだしな…

「獄寺は何しに行くんだよ」

「１０代目にスイカをな…
って何でオレが答えなきゃいけねーんだよ！！」

…知るかよ…

オマエが答えたんだろ？

「ハァ…獄寺も騒がしい…
沢田に似てきたな…」

「そ…そうか…？」

アレ…？

なんか嬉しそうだな…　！！！

これはチャンスだ!!

「右腕なんだろ?

なら似てくんじゃねーの?いつもそばにいるわけだし…」

『右腕』

この言葉は獄寺に一番効くのだ

「へへっ…

やっぱ山本なんかじゃなくてオレが右腕だよな…」

おっ!!!　いーぞいーぞ!!

あと一押し…

「あー、山本はせめて左腕くらいじゃね？
そもそもマフィアに向いてるなんて思えねーし」

「オマエ…よく分かってんじゃねーか…！！！」

クリアー――――――！！！！！

クリアしたぜ！！　いよっしゃあ！！！

「ま、オレはマフィアになりたくないけどな
あ、一応言っとくが、オレの前であの女の名前を口にするなよ…
たとえ死んでも…！！！」

あの女――――

獄寺も嫌いなハズだが、一応言っておく

「あぁ…オレと同じ日に転校してきたヤツか…
オレもアイツは嫌いだ　１０代目になれなれしくしやがって…！」

よかった…　嫌いなままで

「やっぱな！！
獄寺とここまでウマが合うとは思わなかったぜ
あの女の愚痴ならいくらでも聞くぜ！」

「それならオレも聞くぜ

あ、もうすぐ着くぞ」

前を見ると、沢田家が見える

「あ、そーだ
メアドとケー番、教えてくれよ」

今逃すと、ビアンキ見てどっか行っちまうからな…

「おう…」

赤外線通信で交換する

「あ、オレのことは南って呼んでいーからな」

「わかった　じゃあオレも隼人でいーぜ」

お！？意外だな…

沢田以外にここまで心を開くとは思わなかったよ…

「じゃあ、そーさせてもらう」

そして、ご…隼人がインターフォンを押して『１０代目ーっ！』と言う

さて、沢田はどんな反応するかね…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１７　嵐と友達になる！（後書き）

いったん区切ります！

話はもう出来てるんですが、今日中に更新できるかな…？

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１８　一回目の毒料理レッスン！

沢田が玄関にやってきた

「ご…獄寺君、どーしたの？

って、あれ？　風間さんも？」

「ウルセェ　オマエには関係ねーよ」

オレは沢田のことが嫌いだ

理由？

…よくわかんねーけど、なんか気にくわない

まぁ、この前からそーだったけど、最近はより一層だ。

「（ニカッ）このスイカ一緒にどーすか

めちゃくちゃ甘いらしーんスよ！」

「す、すごくうれしいんだけど今ちょっといろいろ取り込んでて…
（う…うそじゃないよな）」

「トラブルっすね
なんならオレがカタをつけますよ」

おー
カタつけられないのに…

がんばれー

「え！？
（トラブルと言えばトラブルだけど…
あ
でも確かに獄寺君なら　ビアンキを追い出してくれるかも――
――…）

じ…実は今うちに…」

「おっと」

パシッ

隼人が落としそうになったスイカをオレがキャッチした

ウマイなら食いたいじゃん？

「あ…風間さん　ありがとうございます
（取れるなんてすご…　でも獄寺君どうしたんだろう）」

「別に…オマエのためじゃねーし」

でも、オレがスイカの命を救ったからオレも食うぜー

「…あ…

アネキ！！！」

ポロ…、とタバコを落とす

「え」

「隼人」

あーあ、ビアンキ来ちゃったよ

バイバイ、隼人。

スイカはオレが貰う★

「え？アネキって？ん？」

ぐぎゅるるる　↑隼人の腹の音

「はがあ」

どおっ　↑同じくヒザをつく音

「失礼します！！！」

ダァ　↑同じくドアを開け出て行く音

…騒がしいヤツだな…　ホントに。

「ちょ…獄寺君！！？」

ダダダダ　↑同じく必死に逃げる音

「いつもあーなのよ
変な子」

オマエのせいだけどな

「アネキ…アネ…？　ってことはつまり…

え〝――――っ

獄寺君とビアンキって姉弟なの～～～！？？」

「そーだぞ　腹ちがいのな」

「へー、ビアンキって隼人の義姉（ねーちゃん）なんだ」

あくまで、知らないフリしないとな

「って、え…？隼人って…獄寺君？ってかビアンキのこと知ってんですか？」

「隼人とはさっき仲良くなったからな
ビアンキのはこないだの実習ン時に弟子入りされたんだよ」
沢田はますます驚いた表情になっていく
「で…弟子入りってビアンキが風間さんに――――!?」
「ウルセ…」
「そーよ　南はあなたを毒料理で気絶させた
私のポイズンクッキングより強力な毒料理だったから弟子入りしたのよ」
気絶させた相手を前に言うのかよ…
まぁオレは構わないけど…
「え…オレを気絶させたのって風間さんだったの?」
「させた…?

オマエが勝手に雲雀に食わせようとしてたのに、食って倒れたんだろ？」

「あ！　ごごごごめんなさい！！！」

ここで雲雀に食わせるため作ったと言っておけば、なんで作ったのか教えられるからな

…さっきからチビちゃんが…な…

「それより、隼人のとこ行ってこいよ」

いくら嫌いでも友達の危機だから沢田を行かせる

「あ！じゃ、じゃあ行ってきます！」

沢田は隼人を追いかけてった

「それじゃあ南、はじめましょうか」

「ん！そーだな
あーこれ持ってきたぜ★」

オレがビアンキに渡したのは、得体のしれない謎の物体…

「ありがとう　これできっと『ポイズンクッキング？』が完成するわ」

「そ…それはどうも…
台所行こう…？」

こうして始まった――――――――

のだが…

ボンッ…

グシャァァ…

ビアンキ…その音は何だ…？

オマエ、恐ろしーわ…

「オレ…ソファーに座ってるな…」

「分かったわ

南のおかげで完成したからもう大丈夫よ」

「あ…あぁ、それはよかった…」

１０年後ランボ…

これは決してオレのせいじゃない…

オレがいなくても完成する運命なんだ…

アレ…？

チビちゃんは……うわぁ、水浴びしてるぅ…

ん？沢田…？

「リボーン　頼みがあるんだ」

そう言いながら庭に行く

「軽くランボをどついてくれないかな」

「ヤだ」

ムニューッ、とレオンがサングラスになっていく

「言ったはずだ
　オレは格下は相手にしねーんだ」
スチャッ、とサングラス(レオン)を付けて言う

「（キマってるぅ～～！！）」

「ガハハハハ
　そー言ってられるのも今のうちだぞリボーン
　ランボさんは　この二階から勇気を出して　飛びおりちゃうもんね！」

……ウザ…

ガキが嫌いになった瞬間でした

「じ…自分からきたっ
ラッキ――――ッ」

「死ね　リボーンッ
ボスに送ってもらったスタンガンでビリビリとな！」

バチバチ音を立ててるスタンガンを持って屋根から飛び降りる

が――――――

「ぐぴゃあぁぁっ」

うん。アタリマエだよね。

でも、普通は感電死すると思うんだけどね。

「うっうわああ」

カチッ

ドオン

おー、１０年バズーカ初めて見たなー

モクモクモク…

「やれやれ

なぜオレに水がしたたってるんだ？」

…キモ…

でも残念。オマエはビアンキに…な…

「あ　で！！でた！！大人ランボ！！

ビアンキちょっと…！！　ホラ！こっち来てみて！」

沢田…ダメダメな上にヒドイな…

「ムリヤリやらすのはキライだけどそろそろ家庭教師はじめるわよ！　ロメオ！！」

「？」

元気でな…１０年後ランボ…

「ロメオ！生きてたのね！

ロメオ～～～～！！！！」

ビアンキ…手加減してやれよ…

ムリか…

「ポイズンクッキング？――――――――！！！」

グシャァ

「なにーっ！！！」

ザパァァンッ

「ビアンキと元彼は別れる直前とても険悪だったらしいぞ

よく元彼を思い出しては腹立ててたからな」

「え〝――――――――っっ！！！」

「が…ま…ん」

こてっ

「ランボ！！しっかりして！！
寝ちゃだめだ！泣いてくれー！！」

…そうか！沢田はウルサイから嫌いなんだ！！
（きっとそうだろう…）

「１０年後の医療なら助かるかもな」

今さっき来たから、それに耐えてからだけどな

「オレ、もう帰るな
ナームー」

「あ！！ハイ！さようなら」

このままだと、またあのガキ戻ってくるし…

イラッ

そしてお土産（？）にスイカを貰い帰った

家に着くとストレス発散で二刀流（漣へのイジメ）の練習をしたのだった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１８　一回目の毒料理レッスン！（後書き）

ほぼ原作ですねー

まぁ、前回の途中からなんで…

ツナと南を仲良くさせようかとも思ったんですが、後々のことを考えてやめました

前に南が仲良くなりたいって言ってた人とは仲良く（？）なりますが…

お楽しみに★

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１９　問７を解く！

あっという間に夏休み！

あ、三浦ハルの話は無視したぜ？

あいつもウルサイ系のキャラだからな

んで、オレは今応接室にいます――――――

「ねぇ、聞いてる？」

コイツに呼び出されてな！！

「見回りだろー？ヤ・ダ！！」

ギロリ

うわぉ！

雲雀サンが睨みつけてきたよ！

「咬み殺されたい？」

「結構でーす」

「君は人をイラつかせるのが上手だね」

やべぇ…

結構…キレてる？

こうなったら選択は一つ！！！

「オレ、なんか嫌な予感するから帰る！！

んじゃな！」

「待ちなよ…ハァ

相変わらず逃げ足速いね」

オレは世界新記録を超えるような速さで逃げた

ってか、こんな暑い日に見回りなんてことは絶対にしたくない！！
（注：南は一回も風紀委員の仕事をしてません）

プルルルルルル…

「電話…？隼人じゃん」

隼人からの初電話

「もしもしー？どした？」

『１０代目に聞いたんだけどよ、頭良いって本当か？』

…あー。今日『問７』の日かー

「まーな♪んで、それが何？」

『ちょっと…分かんねぇ問題があってよ…

今から１０代目の家来れるか？』

す…素直！！

分かんないってハッキリ言った！！

「おう！すぐ行く！　じゃ、後でな」

ピッ

…にしても、どこまで進んだかな…

三浦ハルには会いたくねーし…

♪～♪～♪～

「ん…また隼人から？しかもメール？」

Ｆｒｏｍ：隼人

Ｓｕｂ：アイツがいる

今、１０代目の家には、１０代目、オレ、山本、リボーンさん

そして…あの女がいる

悪いが来てくれ

頼む

－－－ＥＮＤ－－－

「うげ！！アイツいんのかよ…

…でも、隼人の頼みだ！仕方ねぇ…」

そう、隼人だって頑張ってるんだ…

なら、行かなきゃダメだろ？

そして、一回だけため息をつき、沢田家に向かった

ピーンポーン

「おじゃましまーす」

最近よく沢田の家に来てるなー…

オレ的には、あんま嬉しくない

むしろ嫌だ

「よっ隼人」

「か…風間？」

「「風間さん！！」」

あ、オレ→山本→沢田の順な

（ツナと一緒に咲も言ってます）

まだ三浦ハルいねーな…

よかったぁー

「おう、早速だけどコレだ」

ピラッ、と見せられたのは問7

やっぱりな…

「んー…こりゃ超大学レベルだな…」

「「「「!?超大学レベル!?」」」」

うるさ…

「あぁ…答えはー

ネコジャラシの公式で『4』だな」

ちなみにオレは原作知識ではなく、自分の頭で考えたぜ？

「ネコジャラシの公式って何だ？」

「隼人はもしかしたら知ってるかと思ったんだけどな…

んー、コレが公式な」

サラサラッ

「…？」

「あ、説明するよ

コレが元で――――――――

んで、公式になる」

「なるほど…」

あー、周りは全く理解できてないな…

ま、別に関係ねーしいっか★

「とりあえず、答えは4だろ?

なら、それだけ書いときゃ大丈夫だろ」

山本…本当は途中式も書かなきゃダメだけどな…

それにしても、中学生の課題でこのレベルって酷いだろ…

「んじゃ、オレは帰るな」

「待て」

「…オレ、早く帰りたいのに何の用だよチビちゃん」

本当だぜ？

（もうブレイクしたが、）原作に関わりたくないからな

「何でネコジャラシの公式を知ってる…

コレは大学でも習うか習わないかの問題だぞ」

「オレの前のガッコは超一流なんだよ

聞いたことねぇ？

小、中、高、そして希望の奴は大学と大学院までエスカレーター式の学園」

漣に、オレの通ってた学園はこの世界でも存在させたってことを聞いた

同じレベルとして、だ

「南…それって『帝都王儀林学園（ていとおうぎりんがくえん）』か？」

「あ、さすがに分かった？」

そう言うと、山本（と、咲）の顔色が変わる

「え…！？あの『帝王』かよ！？」

「そーだけど？」

「て…帝王？」

沢田は知らねーの？

「ツナ知らないの？日本一の学校で、世界でもトップの学校だよ？」

あーあーあーあーあーあーあー…

オレの耳には女の声は聞こえてないー

「まさか…あの帝王ー！！？？！？」

「で、でもよ南…何で並中なんかに来たんだ？」

あ、隼人が沢田の言葉無視したよ…

「オレ、もう帝王の大学院のテストを満点取っちまったんだ

そんで、中学に最初は行ってたんだけど…

つまんないから、それならフツーのガッコ行こうと思ってな」

あ、この世界のオレの情報は前世の続きになってるんだとよ

情報を入れておいてくれてよかったよ…

オレは前世で満点取っていて、自由登校になってたんだ

あ、制服は男子はズボンで女子はスカートかズボンか自由だったんだ

高校までだけどな

んで、どのくらい頭がいいかはネクタイの色で決める

小学校→赤
中学→青
高校→黄
大学→緑
大学院→橙

って決まり

オレは紫

これは大学院をクリアしたレベル

初めて作った色らしい

緑までなら今までに2人いたんだとよ

まぁ、その2人も超ガリ勉で高3の二月に取ったってよ…

ただ、『帝王』のレベルだから…

『帝王』の赤ネクタイをしてる奴なら普通の高校くらいの問題はヨユーで解けるレベルだ

あ、オレはメンドイのが嫌いだから違うぜ?

「やっぱ南か…」

隼人?何がだよ

「何が?」

「『帝王の大学院をわずか11歳で卒業!!
今までの、そしてこれからの人類の中でトップの天才!ミナミ・カザマ!!』

これだ…見てみろ」

渡されたのは、雑誌

見開きが開かれてる

「…は？オレ、インタビューなんてされたことねーぞ？」

見開きにはオレのインタビュー記事

「オレも最近読み返したら見つけて、違うと思ったんだけどな…

でも顔がオマエだから会って聞こうと思って持ってたんだ」

インタビュー…？

「あ…思い出した」

「やっぱ南だったか？」

「いや、オレが大学院の卒業証書貰って一ヶ月位経った頃、メチャクチャ人が来て…

追い払ったんだけど一社だけしつこいから、『勝手にやれ』っつったんだよ

でもこんな風になってるとはなー」

そーだったよー…

にしても、最悪の出来だな

うん。イラつくね★

「やっぱなー…って南って世界で一番頭いいんだぜ！？

何でそんな性格なんだよ！！自慢とかもしねーし…」

「メンドイから。」

「「「「なんか納得」」」」

おいこら、納得すんなら聞くな
（南は基本、この中では獄寺以外の人に反応しません）

「やっぱな
じゃあもう帰っていいぞ」

やっぱなって思うなら呼び止めんなよ…チビちゃん

「ハァ…じゃあ帰る」

こうして南の天才っぷりが広まった

同時刻、職員室でもバレた…

応接室の人達は、とっくに知ってましたけどね

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２０　風紀委員の初仕事、そしてオレンジ親子に会う！

「あーつーいー…

なんでオレが外に行かなきゃいけねぇんだよ…」

今、外を学ランで歩いてます

学ランっつっても、Ｔシャツの上にＹシャツで、腕章付けてるだけ

…もう分かったかな？

只今、初仕事中です…

やはり一回も仕事しないと『二学期からは遅刻・無断欠席を禁止にするよ』って言われてな…

それだけはイヤだし、仕事をすることにしたんだ

内容は見回り

書類整理と悩んだんだけど、あっちは涼しい…

でも、終わってから見回りさせられる可能性があるから辞めた

見回りなら家に帰ってから電話で報告すればいいらしいしな！

それに、ただ単に風紀委員の服装で町を回ればいいだけだしな！
（南は着崩してるので風紀委員の服装なのかはビミョーですが）

でもな…

想定外のことが一つ

「暑いんだよ！！
絶対に風紀委員の仕事なんて二度とするか！！」

気温は…
言いたくないけど３４℃

ふざけてんのか？

科学者どもが！！

どうにかする方法一つくらい思いつけよ！
（八つ当たりです）

凄ぇイライラしてるんだ！

こんな時に問題が起きたらどうなると思いますか？

まぁ、それは一旦無視しましょう

信号を渡る

あまり人はいない

（風紀委員から皆が避けているんです）

オレの他には、見覚えのある幼い子供が一人

その子は何が楽しいのか、駆け足で信号を渡る

すると右側から赤信号なのにバイクがその子に突っ込んでいく

止まる気は、ないらしい

聞こえてくる声が一つ

「ユニ！！」

ダッ

ひょいっ

ガキィィンッ！！

理解した人は天才です。

説明しますね

オレが走り出す（ダッ）

その子を左腕で持ち上げ、抱える（ひょいっ）

漣に作らせた刀を右手で一刀抜き、突っ込んでくるバイクに攻撃する（ガキィィンッ）

「…オイコラ、テメェ…

この町の風紀を乱すとどうなるかわかってンのかぁぁぁぁ!?!」

あぁ、あの子は無事ですよ。もちろん

それより！

ユニって聞こえたんだけど…

ユニって…

確かにそんな顔をしてます。

確かに超カワイイです。

でも、何でここに？

イタリアで暮らしてるハズですよね？

「テメェ、そいつが誰か分かってンのか！？

ジッリョネロファミリーのボスと共にいた奴、つまりは関係者だぞ！」

バイクに乗ってたヤツはヘルメットを取り、バイクから降りる

どうやらマフィアに入っている男のようだ

「そんなのは関係ない

日本の信号ルールを知らねぇのか？赤は止まる、幼稚園以下か？お前は」

そう、関係ない

男の顔が赤くなる

「並盛町では並盛中学風紀委員長がルールだ

オレは長ではないが、同じ風紀委員

そいつを前に人殺しをしようなんて、殺してほしいのか？」

あー、こーゆー時は風紀委員って使えるよな

男は風紀委員のことを知っていたようで、赤かった顔が青くなる

「ひひひひ人殺しではない！！誘拐しようとしていたんだ」

「誘拐で罪が軽くなるとでも？

それにオレは優しい人間じゃねぇんだ

テメェは委員長に預ける、決定事項だ

残念だったな」

そして、男は諦めたようで、膝をついた

そして、そいつを雲雀に『もし風紀を乱しているヤツがいたら用』で渡された手錠をかける

ユニ（？）はまだ少し震えているので抱えたまま信号を渡る

右手には、男を引きずりながら

「あぁ…ありがとう

ユニを助けてくれて、本当にありがとう」

先ほど『ユニ！！』と叫んだ女性が寄ってきた

「誘拐を防ぐことなんて、当然ですよ

ちょっと聞きたいことが…いえ、

まずはこの男を委員長に連絡するのでちょっと待っててくれますか？」

「ええ　ユニ、大丈夫？」

ユニ、確かに助けた子に向かって言った

やはり、この子は未来編で出てくるユニだ

ユニはまだ震えていて、オレの腕にしがみつきながら小さな声で『大丈夫…』と言った

雲雀に電話しねぇと…

ピッピッ

プルルルルルル…

ピッ

「雲雀、見回りの途中に、誘拐未遂犯を捕獲したんだけどよ…
取りに来てくんね？」

『君が連れて来ればいいでしょ』

冷てぇなコイツ…

「いや…オレ、助けた子の知り合いだからさ…
ちょっと話したいし、取りに来てくれよ～」

知り合い…

ユニ達はオレのことを知らないのでウソです★

『ハァ…分かったよ

場所は？』

「んーと…商店街に入る場所

あ、並中に近い方の」

『草壁、並中に近い方の商店街の入り口に行って風間南から違反者貰って来て』

草壁さんに頼むのか…

『じゃあ草壁が行くから』

プチッ、と電話が切れた

「副委員長が来るようなんで、安心してください」

オレはユニの母親、アリアさんに言った

「よかったわ…

私はアリア、その子は私の娘のユニ」

「初めてまして、アリアさん、ユニちゃん

オレは風間南ッス

さっき『知り合い』って言いましたが、学校に行きたくないだけなんで」

あ、男は気絶してるぜ?

オレが一発殴ったからな

「ふふっ　驚いたけど、それなら納得だわ

ユニ、挨拶して」

「私はユニです

助けてくれて、ありがとうございます」

もう震えは止まってるようなので、ゆっくり下ろした

「気にすんなって！

あ、オレのことは南って呼んでくれよっ！

誤解されやすいから言っておくが、女だからな」

念のためだ…

念のため……

「南お姉ちゃん？」

ユニ！

お姉ちゃん、なんて嬉しいぜ！！

「まったく…ユニは…」

「いいッスよ、アリアさん！オレ家族いないんで、嬉しいですし

ユニ、じゃあオレは今日からユニの姉ちゃんな！」

「「家族いない…？？」」

二人して同じ場所に目付けるか！？

「あー…元々一人っ子で、両親は随分前に死んで…

まぁ、もう一人にも慣れましたし、全然平気ですよ？」

家族いないって、言わなければよかったと、心から思った

ユニとアリアさんの表情が一瞬暗くなる

「じゃあ、今日から南は私とユニの家族ね」

「え？」

アリアさん…？

「そうです！私達の家族ですよ！」

「ユニ……

ありがとうございます、アリアさん、ユニ」

こうしてオレに、義理だけど家族ができた

『家族』

それは、とても懐かしいものだ

オレは前世で幼い頃に両親を亡くした

それは、今の世界でも同じにした、と漣が言っていた

オレとって、今の世界でも同じなのは好都合だった

なぜかって？

もし、前世と同じ両親なら、懐かしくて嬉しいことだろう

同じでなくても、幼い頃に両親を亡くした人には嬉しいに違いない

…しかし、どう対応すればいい？

それが問題なのだ

漣はそのことを理解しているから、
異世界に送る者がいたら前世・前世界と同じ生活だったことにしている

なので、オレはユニ達を『家族』よりも『大事な友達、または仲間』と思うことにした

それは、きっと正解だろう

「ユニ、アリアさん、オレのことを家族と思ってくれるのは嬉しいンスけど…」

『家族ってどんな感じだったのか、思い出せない』

この言葉を言えなかった

しかし、さすがはオレンジのおしゃぶりを持った人

何が言いたいのか分かるようで、

「大丈夫よ

南はラクに対応すればいいの

あなたが気にすることなんてないの

『自分が一番居やすい、過ごしやすい場所』が家族（ファミリー）だから」

と笑顔で言ってくれた

『ファミリー』

この言葉からは、

『ジッリョネロファミリー』

と

『ユニとの親子としてのファミリー』

の2つの意味が原作知識があるから伝わった

「そう…ですね

じゃあそうさせてもらいます！」

「南、敬語も必要ないわよ」

「え？」

「家族の間には、敬語なんて必要ない
言ったでしょ？
『自分の過ごしやすい』って
あなたは敬語は普段使わないんじゃない？」

「う〝っ…」

そこまで分かるとは…

さすがは『アルコバレーノのボス』だ

まぁ、正確にはボスは違う人…『ルーチェ』だけど

「それなら敬語はやめる

ユニ、ユニも敬語ダメだからな？」

ユニは礼儀正しい子だから常に敬語なんだよな…

「え？わ、私もですか！？「敬語禁止だって言ってんだろ？」

…じゃあ…敬語はなるべく抑えま…抑える

『南お姉ちゃん』って呼ぶのは許してね？」

「おう！あ、アリアさん！

『アリアさん』って呼ぶのは変えませんよ」

『お母さん』なんて言えないから…

「ええ
それは許すわ」

「ありがとう「風間さん!!」
お、草壁さん」

草壁さん到着〜

「コイツです〜
理由は聞きましたが、しょーもないことだったんで、すぐにボコっちゃってくださーい」

『マフィア』なんて…

言えねーし…

「そうですか　わかりました

あと、委員長からの伝言で『今日の見回りは終わりでいい』とのことです

報告もしないで平気です

お疲れ様でした」

うっほ――――い

敬語ＭＡＸだね！

気にしないけどっ！！

「うぃース

じゃ、これで」

草壁さんは男を引きずりながら並中に戻っていった

「アリアさん…今日泊まるとこって安全？」

さっきの男のことがあったからだ

「…安全とは言い切れないけど…

そこしかないんだから、仕方ないわ」

「なら、オレの家に泊まって！
客間もあるし！
何より『家族』だしな！」

オレがそう言うのは予想してなかったようで、凄く驚いてる

「いいの？」

「モチロン！
ってかオレんち、ムダに広いからこっちからお願いしたいくらい」

本当、漣が広い家にしたから大変だよ…

掃除とか掃除とか掃除とか！！
（漣がキレイにしてます）

「それなら、そうさせてもらうわね
ユニ、今日は南の家に泊まるわよ！」

「ホント？
ありがとう、南お姉ちゃん！！」

「どーいたしまして
んじゃ、晩飯の食材買いたいからスーパー行こう！！」

食材が今は少ない

漣に足してくれって前に頼んだことがあるが、

『いくら神でも、食材はムリ。でも買う分の金は渡せるからカンベンしてくれ』

って言われた

スーパーに行くと、アリアさんとユニからの質問攻めにあった

『今日の晩御飯、何にするの？』

『南お姉ちゃんってご飯作れるの？』

『これって何？』

『このお野菜、持ってくる！どこに並んでるの？』

まぁ、大方は後ろ2つに似た質問だらけだ

イタリアと日本（ジャッポーネ）じゃ、色々と違うらしい

前2つの質問に答えようか

今日の晩御飯は、日本料理（だと思う）の中で贅沢、と言われている『すき焼き』

今は暑いが夜は6月上旬並に冷えるらしいから、ピッタリじゃね？

と思ったからだ

そしてオレは、料理できる

前世では一人暮らしだったんだ

今は漣に作らせ…作ってもらってるから作らないが…

やはり、大事な人には手作りを食べてもらいたい

食材を買って、家に向かう

マンションの下で、『ここのマンションだぜ』って言ったとき、二人には同じ言葉を言われた

『何で一人暮らしでこんな高級マンションに住めるの?』

と

心の中で言ったよ?

『オレにも分かんない』って

でも言えずにテキトーにごまかして部屋に向かった

あぁ、家の中に入ったときも同じようなこと言われたよ…

「南、ホントに手伝いいらないの？
三人分は大変じゃない？」

「大丈夫、大丈夫！
それより休んでくれよ
日本（ジャッポーネ）に来たばかりなら疲れてるだろうし！」

「大丈夫よ　どれやればいい？」

そう言ってる顔は『疲れた』って顔してるし…

「大丈夫って言いたいなら、鏡見てから言ってくれって…

疲れきった顔してるし」

「あら？バレちゃったかしら？」

「バレバレ

ユニも疲れてるだろうから風呂でも入ってきてくれよ

お湯も入ってるしごゆっくり♪」

あぁ、いつもはシャワーだけだぜ？

でもさ、お客さんが来たのに『シャワーだけで』なんてダメだしな

「南も折れなさそうだし、そうさせてもらうわ

ユニ！お風呂入りましょう！」

ユニも嬉しいのか、ちょっと笑顔になった

「あ、ちなみに露天風呂の方にもお湯入ってるから！
ここは結構場所的に高い階だし、外から見えないように特殊になってるから安心してくれよ！」

「「露天風呂…？特殊…？」」

まぁ、フツー驚くよな…

「まぁ、あんま気にしないで…
楽しんでくれよ！」

二人はもはや何も言わなかった

でも、風呂上がりの二人の顔が幸せそうで良かった、良かった

すき焼きも、食べたことが無かったようで、嬉しそうに食べてた

「お休みなさい、お母さん、南お姉ちゃん」

「「お休み、ユニ」」

ユニは客間に繋がる廊下へのドアを開け、ダイニングからいなくなった

「アリアさん、昼間に聞きたかったことなんだけど…」

「ええ

まずは『ジッリョネロファミリー』のことを話していいかしら」

オレは何も言わずに頷いた

「私は…マフィアのボスなの

マフィアの名前は『ジッリョネロファミリー』

イタリアにあるわ」

オレは、当然だが原作を知らないフリをする

「マフィアだし、イタリアか…

あれ？ってことはユニ…は、あの男の言い方からして無関係者？

ってか知らせてない、とか？」

「ええ…南は頭いいのね…

！まさか南って、日本の『帝王（ジャッポーネ）』の『ミナミ・カザマ』？」

うっ…

アリアさんも知ってたか…

「まぁ…一応　もう辞めたけど

話戻すけど、あの男がユニを人質に取ろうとして誘拐しようとした、ってことか…」

「多分ね…
ユニに、私達『ジッリョネロ』のせいで怖い思いをさせちゃったわ…
ユニのせいじゃないのに…」
アリアさんは深刻な表情で言う
「確かに、ユニのせいじゃない…」
「ええ…そうよ「でも!!」
…?」
「でも、『ジッリョネロ』のせいでもない
あの男の…あの男が入ってるファミリーのせい」

決して、アリアさん達が悪い訳じゃない

「南…！

ありがとう…」

アリアさんは少し泣きそうな顔で言った

「ま、この話はもう終わりで！

そんなことより、いつまで日本（ジャッポーネ）にいられるんだ？

さすがにマフィアのボスだと、そんなに長くいられないか？」

「私達が予定しているのは、８月の終わりまでよ」

ってことは、夏休みの間はずっとってことか！

よっしゃ！

「じゃあ、それまでここで暮らしててくれよ！
その方が楽しいし！」

「南…でも、いいの？
さすがにまだ長いし、迷惑じゃない？」

「だから、オレとしては嬉しいんだって！
よし、決定！」

「ふふふっ　ありがとう」

こうして、期間限定で一緒に暮らすことになった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２１　霧と遊ぶ！

「あっ来た来た
おーい、凪！！」

オレを見つけて走り出す凪

「ごめん…遅くなっちゃって…」

「いや、オレが早く来すぎただけだから大丈夫だぜ
それに、さっき着いたばっかだしなっ」

今は待ち合わせ時間の３０分前

…早いな…

オレ、雲雀から電話きて『今すぐ応接室来て』って命令されたんだよ…

逃げるために、『今日は用事あって、もう家を出る』っつったから…

だからもう来てるんだ

まぁ、凪との約束だし…

どっちみち今頃来てるけどな

「今度は…もっと早く、来るね」

「だから大丈夫だって！

オレも本当に来たばっかだし！な？」

凪…本当に次はメチャクチャ早く来そうなんだよ…

一時間前なんかに来られたら…

「…でも…」

「じゃあ、これから早く来ても待ち合わせ時間の３０分前より早く来ちゃダメだからな！

よし、それでいこう！」

「…わかった…

ありがとう…」

凪…

そんな満面の笑みで…

「おう！

んで、まずはどこ行く?今１０時３０分だからなー」

昼飯も一緒に食べる約束してるけど、まだ早いし…

「南…私、行きたいお店、あるんだけど…

行っても…いい…?」

「おう!行こうぜ!」

凪が行きたい店か…

楽しみだな♪

「ありがとう…こっち…」

凪は商店街の方を指差した

オレと凪は商店街の中に入っていった

何で凪といるのかって？

…そーいや話してなかったな…

昨日の夕方、凪からメールが来たんだ

♪～♪～♪～

「メールか…おっ凪からだ♪」

オレは凪からメールが来たのがスゲェ嬉しかった

だってさ、オレからメールし始めることはあっても、凪からメールし始めることはなかったんだよ！

ソッコーで確認する

Ｆｒｏｍ：凪

Ｓｕｂ：明日…

明日、空いてる時間…ある？

一緒に…遊んだり、できない？

――ＥＮＤ――

見た途端、オレは叫んだ

「やったぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

凪からの誘いっ！！

超嬉しい！

あぁ、叫んでアリアさんとユニにビックリされたよ

そんで、聞いた

「明日、一日友達と遊んできてもいいか？」

「もちろん、いいに決まってるわよ

だけど、今度紹介してね」

「私もいいよっ

今度私にも紹介して？」

「モチロン！！

じゃあ二人が帰る前に家に誘うよ

そんじゃあ、明日は遊んでくるな！」

ユニとアリアさんが来て、一週間が経つ頃

夜だろうが朝だろうが、クーラー無しの生活はムリになった

少し前まで二人はイタリアにいたんだから、きっとオレ以上にツライだろう

ＴＯ：凪

Ｓｕｂ：行こう！

おう！遊ぼうぜ！

明日なら一日中遊べるし、午前中から遊んで一緒に昼飯食おうぜ！

凪は午前中大丈夫か？

－－－ＥＮＤ－－－

凪とはよくメールするんだ♪

電話は…今まで3回くらいかな…

♪~♪~♪~

ちなみに、凪は返信がいつも早い

From：凪

Sub：うん…

うん…私も午前中、空いてる…

時間とか…どうする？

――ＥＮＤ――

時間か～…

１１時くらいがいいよな…

ＴＯ：凪

Ｓｕｂ：何時でも大丈夫

何時でも大丈夫だぜ！

１１時くらいに前に会った公園は？

－－－ＥＮＤ－－－

するとまた返信

♪～♪～♪～

Ｆｒｏｍ：凪

Ｓｕｂ：うん…

うん…それで大丈夫…

じゃあ…明日１１時に公園、で

―――END―――

「きっと凪は30分前には来るだろうな…

凪一人で待たすなんてできねぇし、35分前くらいに行くか！」

まぁ、こーゆーワケで遊んでるんだ★

凪の服装は、真っ白のワンピースに白いサンダル

髪は結んでない

オレ？

オレは…

ひざ下丈の黒いジーパン、青Tシャツの上に半袖の柄が多い男物の灰色パーカー

靴は、ビーサンみたいな青サンダルだ

もちろん、いつものリングはペンダントとして持ってるぜ

うん。超普段着。

ってか、こーゆーのしか持ってねぇし、着ねぇし…

オレ、初対面の時は男だって皆に言われるからな…

周りから見たら普通にカップルだけど、気にしない、気にしないっと

「ここ…」

凪が止まったのは、オレがこの世界に来てからよくアクセサリーを買う店

でも、カワイイ系の物もたくさん売っている

要は、アクセサリーショップだ

「オレもここならよく来るぜ！
何か買うのか？」

すると、凪はちょっと顔を赤くしながら言った

「こないだ…南がケーキと、アイス…くれたから…
お礼に、プレゼント…しようと、思って…」

凪っ！！

「そんな…別に気にしなくていーのに…」

「でも…」

凪は引かない様子だ…

「じゃあさ、二人でペアリングみたいなの買わねぇ？」

それなら、オレとしては自分のリングを買うモンだし、凪も納得するだろう

「うん…わかった…」

そして買ったのは、凪はリングの真ん中に白いラインが入ったリング

オレはラインの色が黒いリング

シンプルだけど、結構気に入ってる

凪も嬉しそうだし♪

金額？

合計で約６０００円

まぁ、本物のシルバーアクセサリーだからな…

んで、オレが何個かペンダント用のチェーンを持ってたから一つあげた

お互いにペンダントとして首にかけた

そしてお昼を食べて、話してたら3時過ぎになった

「うまかったな！！

あ、まだ時間平気か？」

凪の家は門限があるらしく、時間も早いって前にメールで聞いた

「うん…5時までだから…」

「じゃあさ、また『ラ・ナミモリーヌ』行かね？」

凪はきっと、前に食べたチーズケーキより好きなケーキがあると思う

「…うん！」

「いらっしゃいませー」

店に入ると、前と変わらぬ店員の元気そうな声

「凪、何にする？」

こうやって先に聞けば、凪が好きなのを言ってくれるハズだ！

「じゃあ…これ…」

凪が指差したのは、『ミルクティーチョコケーキ』

まぁ、『チョコケーキ』のチョコが『ミルクティー味のチョコ』に

なったモノ、と言えば分かりやすいだろう

「お～、それウマそうだからオレも♪」

そして二人でレジに行き、会計を済まして席に座る

「あ、そうだ…凪！

食べてる途中で悪いんだけど、ちょっと話いいか？」

「？うん…」

凪はケーキを食べるのを止めた

「今オレの家にさ、イタリアに住んでるけどオレの『家族みたいな人達』がいるんだけど、会ってくんね？

ってか、オレン家に遊びに来てくれよ！」

アリアさんとユニのことだ

「うん！　じゃあ、今度…行くね

南…『家族みたいな人達』…って？」

「こないだ知り合ったばかりなんだけど、オレに家族がいないこと伝えたら

『じゃあ家族代わりになる』って言ってくれた人達！

親子で、優しいお母さんの『アリアさん』に、まだ幼いけど礼儀

正しい『ユニ』っていうんだ

夏休みの間はずっといるから、時間あるときに来てくれよな！！

あ、泊まりで来てくれよ！

空いてる部屋があるし」

あ、アリアさんとユニが来てからベッドをオレの部屋に移した

まぁ、元々部屋にモノは少ないし、かなり広いし、だったから…

ベッドが来ても十分すぎるほど広いんだけどな…

「じゃあ…今度泊まり、で行く…ね」

「おう！　何日でも泊まってくれ」

ホント、何日でも泊まってくれ！

凪なら大歓迎だしなっ！！

「…ありがと…」

そして食事を再開した

食べ終わったら、凪は早く帰らなきゃいけなくなったらしく、急いで帰った

送っていこうかと思い、聞いたら『大丈夫』と言って帰ってしまった

オレはお土産として『ミルクティーチョコケーキ』を二個買って、帰った

二人は大絶賛してくれたので、今度は一緒に行こうと決めた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２２　邪魔者の正体を知る！

「ユニ～もう終わりにしようぜー…」

「まだ！だってまだ一回も勝ててないもんっ！」

「だからって…

アリアさん、助けて…」

オレは今ユニとトランプをやっていた

それは、『大富豪』

大方の人は知っているだろう、メジャーなトランプ遊びだ

「じゃあ、南は私と交代ね」

「よっしゃ！ユニ、また後で再戦な！！
オレはしばらく寝る！！」

なんか突然眠気が襲ってきたのだ

「うん！じゃあお母さんと特訓してる！」

「おう！頑張れよ」

そして親子で特訓し始めた

あぁ、特訓ってのはオレが二人に全勝してるからだ

二人の様子を見ようかとも思ったが、睡魔に勝てず寝た――――

――

ハズだった

「んで？何でオマエが出てくるんだよ」

『え？神様の力で南を無理やり眠らして、ここに呼んだから』

そう、自称神の漣だ

「ハァ…」

『あー！！まだ神様っての信じてないだろ！！』

「オマエがそう思ったんなら、そーじゃね？

もうオマエ相手にすんの、メンドクサイんだよ」

意外とこの言葉が効いたようで、いじけ始めた

「何の用があって呼んだ？」

いくら漣でも、『ただ暇だったから呼んだ』なんて言わないだろう

言ったらどうなるかを、よ――――――っく知ってるから

『あの女――山下咲がどうしてこの世界にいるのかが、分かった』

ピクリ

オレは反応する

『ちょっと分かりづらいこと言うんだけど…

あーまずオレの世界のこと話さなきゃだな…』

「なんか色々言ってるけど、要するにオマエの関係者が送ったと？」

『オレの関係者か…

まぁ確かにそうっちゃそうだが…』

どうやら漣のせいではないみたいだな

「まぁいい

話長くなってもいいから話せ」

『あぁ

まず、オレは“神”という役職をしている

“神”は、“神界（しんかい）”と呼ばれる場所にいる

まぁ、神に仕える者も住んでるがな

んで、これが善者の世界だとしたら、対になる世界がある

それが“魔界（まかい）”だ』

魔界って…

かなりオカルトな話じゃねぇかよ…

「“魔界”ってのは信じにくいけど、“悪魔(あくま)”が住んでて、そいつらがあの女を送ったと？」

漣は首を横に振る

『“悪魔”はそういうことはできない

“閻魔(えんま)”ならできるが、そいつも違う

まぁ、“悪魔”だって悪者なワケじゃない

『心を鬼にした善者』って感じだな…要するに、いいやつだ

説明に戻るけど、

この“神界”と“魔界”があって、南達…“命ある者”が成り立っている

“生命界（せいめいかい）”だ』

言い方からして、“神界”や“魔界”の者には命が無い

『そして、“生命界”の死者は善者ならば“神界”へ、悪者ならば“魔界”へ行く

悪者ってのは、殺人とか、そういう犯罪をした奴のことだ

“魔界”に行ったら、“生命界”でやった分の悪事を罰として“魔界の拷問”を与える

どんなことが与えられてるのかは知らないが、“生命界”での悪事のレベルを“1”としたら、“1．5”の罰を原則として与える』

…なんか話ズレてね？

まぁ、聞いとくか…

『そうして、善者なら記憶を一つだけ名残として残し、再び“生命界”に生まれる

よく“生まれつき○○が好き”とか、“○○はどうしても嫌いになれない”とかが前世の記憶の名残だ

んで、悪者なら、“魔界”の罰を受け終えたら“神界”に送られ、記憶は一つも残せずに“生命界”に生まれる

まぁ、これで“生命界”の命が無くならずに循環していく

…オレの説明、理解できる?』

ぶっちゃけ、かなり理解しづらい…

「まぁな…

でも説明下手過ぎだろ！」

『まぁ、許してくれ…

初めての説明だから難しくてよ…

まぁ、普通はこの３つの“三世界（さんせかい）”で成り立っているだけど…

数千年前、新たに“世界”ができてしまった…

“異端者が暮らす世界”の…“異端界（いたんかい）”だ』

漣は憎しみを込めて言った

きっと、何かがあったんだろう

でも、それは聞くべきではない

ってか、“いたんかい”ってさ…

なんかギャグにしか聞こえないんだけど…

『この世界は、“三世界”に不干渉だったんだが…

ある日、“神界”に干渉してきた

勿論、どんな力を持つ、何者かも分からないから拒絶した

でも、無理やり干渉してきて…』

一度区切って、言う

『当時の“神界”のトップを…“神”を殺した』

直感で気づいた…

そのとき殺された“神”は、漣にとって大事な人だったんだと

『でも、“神界”と“魔界”に暮らす者は命が無いから死ぬことはないハズだったんだ…

だから、存在を消された

それで満足したのか…もう何も干渉して来なかった

少し前までは』

!!

漣が言いたいことが、ハッキリ分かった

つまり――――――――――

「あの女は、“異端界”によって送られた」

『そうだ

あの女は“生命界”に住んでいた普通の人間だったんだが、

“生命界”と“異端界”の2つに暮らす者になった

まぁ、“生命界”に暮らしているから“命”はあるから殺せるがな

でも“異端界”の者だからオレらは干渉できない』

…殺したいのに…

『干渉できるのは“生命界”にいる者だけだ

まぁ、普通の人間なら間違って殺せるんだけどな』

イライラ…

思い出して、ムカついてきました★

『あ…悪ぃ…

そんでさ、南には色々悪いんだけど、“神界”と“魔界”に関わる人間になってくんね？

“神界”や“魔界”の者にならなくて大丈夫だから、関わりだけ作ってくんね？

今の南じゃ“異端界”の者に何もできないけど、関わりが出来れば“異端界”の者に干渉できるし』

…そうなれば、あの女を殺せる…？

「アイツを殺すことができるようになるなら、喜んで関わりをもつぜ」

『サンキュー！！

じゃあ、“コレ”と“コレ”に触れてくれ』

出されたのは、真っ白な水晶の様なものに、真っ黒な水晶の様なもの

まぁ、白が“神界”で黒が“魔界”だろう

「おう…

って、何だぁ!?」

触れた途端、光出したのだ

『…やっぱ南が“適任者”だったな…

まぁ、これで“関わり”ができたからな』

“適任者”？

まぁ、今日は疲れたから今度聞くか…

「じゃあ、そろそろ戻っていいか？」

『一つだけ伝えさせてくれ

あの女がこの世界に来た理由だ』

……ある意味、一番聞きたかったことだ

『何とも偽善者的な理由だ

“この世界の人間を守りたい”

それが理由だとよ』

イラつきは頂点に達し、オーバーした

が…

「まぁ、この場にアイツがいるわけじゃないから、大丈夫だよ」

漣はもう何も言わなかった

「オレはオレの大切な人は傷つけたくないから…」

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２３　オレンジ親子&霧との旅行！

「うわぁぁ…　広いね…
さすが南お姉ちゃん…」

「南…本当に別荘、持ってるんだね…」

ユニも凪も…

あぁ、凪の言葉で分かったかな？

今、アリアさん、ユニ、凪、オレでオレの『別荘』に来てるんだ！

前世で、色々な新しい発見をしたせいで金が大量に入ったんだよ…

その金で別荘買ったんだけど…

まさか、この世界でもあるとはな…

凪とユニとアリアさんは、前に一度会っている

偶然、商店街で会ったのだ

そして、漣から別荘があることを知らされて『思い出』として来ることにしたのだ

ユニとアリアさんは、あと一週間したら帰らなくてはいけなくなった

もう8月の終わりだから、ではない

アリアさんに用事ができてしまったのだ

ユニがいない時に話してくれたが、ジッリョネロのボスとしての仕事

そして二人に『別荘に行こう！』と誘った

最初はビックリされたよ…

でもな、『南なら持ってる気がする』っていわれた…

嬉しいのやら、悲しいのやら…

そんで『凪お姉ちゃんも一緒に行けない？』とユニに聞かれた

ユニは凪のことを『凪お姉ちゃん』って呼んでるんだ

凪に聞いたらソッコーＯＫ

それで、今４人でいるワケだ

「んじゃ、入ろうか」

オレは別荘のカギを開ける

ガチャッ

ギイィィィ…

「うわぁ…」

「私、こういう別荘好きよ」

「すごい…木のいい匂い…」

ユニ↓アリアさん↓凪の第一声だ

オレの別荘は、宮殿とかみたいな『高級感溢れる』ってのじゃなくて、

『森の中にいるような別荘』って感じだ

掃除はロボットがやってるから手間ゼロ

「まずは荷物運ぼうぜ

部屋はいくらでもあるが、お気に入りがあるからそこ行こう！」

部屋数？

ん～…普通のホテルみたいな部屋が２０、

それよりちょっと高級が１０、

さらに高級が１０、

お気に入りが１０

あはははは…

これは、作った人が悪い

『この金でホテルみたいに人呼べるように』って頼んだら、こんなになった

お気に入りの部屋は、間取り書いて渡したら１０部屋も作りやがった

「「「お気に入り？」」」

「3人でハモらなくても…
オレ自らが間取り書いた部屋
とりあえず行こう！」

オレは部屋に向かって歩き出した

荷物は、ちょっとした機械に運ばせてある

オレの別荘は、地下一階と、地上三階の計四階建て

地下にはカラオケとか、ボウリング場とか…

ボウリング場は2・3レーンくらいだった気がする

地上一階は、大広間にレストラン、そして大浴場

それぞれの部屋にもシャワーはあるが、この大浴場は普通のホテル

の倍くらいでかなり広い

地上二階と三階が部屋

二階がランク１、２の部屋

三階がランク３と、お気に入り部屋

屋上もあって、展望台とか…

まぁ、有り得ない別荘だ

もちろん、エレベーターがあり、エスカレーターまである

エレベーターに４人で乗り、三階へ向かう

「ねぇ南、食事はどうするの？

見たところ、人は私達の他にはいないわよ」

「あぁ、それはオレが開発した『調理ロボ』に任せてある
まぁ、超一流には負けるがウマいぜ？
あ、それかオレが作ってもいいし…」

「ロボット！？…南ってホント何者なの…？」

「前の学校でよく色々作ってたからな～…
この別荘も、そういうロボットとか、不可能と言われていたことを解いて…
んで、なぜか表彰されて貰った金が元なんだぜ」

あんまり表彰されたことは言いたくない

なんかさ…自慢話みたいになるじゃん？

まぁ、ここにいる人は大丈夫だけど

「まぁ、『帝王』だもんね…」

そんな納得しないでくれよ…

『ピーン　三階デス』

エレベーターが三階に到着～★

するとここでも、あのリアクションが

「南…『帝王』って、『帝都王儀林学園』…？」

くそぅっ！！

凪もさすがに知ってたか！！

「まぁ…一応…　もう辞めたけどな」

「じゃあ、南は…『帝王』で有名な、『ミナミ・カザマ』…？」

うぅっ…

なんで皆知ってるんだよっ！！

「まぁ…な」

凪は目を輝かせた

「スゴい…ね！　私、なんか…嬉しい…！」

これには驚いた

『スゴい』と言う人はたくさんいた

でも、『嬉しい』と言う人はいなかった

でも…

「なんで？

あ、凪に喜んでもらえるのはオレとしても嬉しい

でも、今までの人は…アリアさんとかを除いた人達は…

『誉めてやったんだから何か出せ』って感じしかなかった」

オレは『人』なんだ

でもその人達には『物』として見られてる

…だから大切な人に聞かれた以外は『帝王』の名が出されても無視してきた

「よく…分からないけど…嬉しいって、思った、の…」

「ふふっ　凪ちゃん、きっと『そんな有名な人が友達で嬉しい』って思ったのよ、きっと

ヒドい言い方しちゃうけど、凪ちゃんは人と付き合うのが苦手みたいだから、友達少なかったんじゃない？」

凪は図星みたいで顔を真っ赤にしている

「ほら南！部屋案内してくれないと分からないわよ！」

アリアさんに声をかけられて気づいたが、足を止めていた

「あ、あぁ…　こっちだぜ！」

凪の言葉は、あとで改めて聞いてみるか…

廊下を曲がってすぐに、少し階段がある

「この階段の上にある部屋は全部そうだから、好きな場所に行ってくれ」

すると、皆で色んな部屋に行き始めた

まぁ、楽しんでもらえれば何よりだな

結局、アリアさんとユニの部屋、右にオレの部屋、さらに右に凪の部屋になった

滞在期間は5日間

並盛からは随分離れてるから遊びに行くのもいいなー

でも一日目は、長い間車の中だったからなのか、疲れて皆すぐに寝てしまった…

凪に聞くのも忘れていた

そして、二日目――――

「ふぁ～あ…　おはよう…」

只今の時刻、９時

「南、相変わらず起きるの遅いわね…」

「南お姉ちゃん、おはよう！」

「おはよ…南…」

アリアさん…オレはこれでも早い方だと思ってるんですケド…

「今日どっか行くか？
近くにショッピングモールとか、遊園地あったハズだけど…」

あぁ、これも漣情報

「あら、じゃあ両方行きましょうよ
今日明日で」

「んー、りょーかーい…
でもまずは朝飯っ★」

腹が減っては戦はできないしな

そして飯が食い終わるとすぐに出掛けることになった

…オレさ、まだ寝起きなんだよね…

アリアさんが一番テンション高いし…

まずはショッピングモール

「南！ユニ！凪ちゃん！

次はあっちよ！！」

…やっぱアリアさんが一番楽しんでるじゃん…

ユニも凪も楽しそうだけど、オレはもうぐったりです…

いやぁ、女子ってスゴいな…

買い物でこんなにテンション上がるんだ…

まぁ、オレも一応女子だけど…

家に帰っても、買った洋服でファッションショーみたいなことしてるし…

明日は遊園地だから、余計に張り切ってるし…

二日目もすぐに寝た

明日…大丈夫かな、オレ…？

三日目

遊園地の開園時間から行く、とか誰かが言い出したせいで7時起床

そして7時４５分には遊園地に着いた

８時開園だけど、チケットで結構並んでる

「ユニちゃん…最初、どこ行くの…？」

「凪お姉ちゃんはどこからがいい？」

「二人共！！私に任せなさい！」

三人は、マップを見ながら盛り上がってる

「チケット買って来たぜ～」

「早すぎでしょ！　何かしたの！？」

「…」

スッ、とオレはカードを出す

「えっ…ここの責任者？」

「なんか、前の責任者にオレが変わってるから気に入った、とか言われて貰った」

盛り上がってた三人は一瞬静かになったが、納得したようで再び話し、入園ゲートに向かった

そして、１０時間後――――――――――――――――

オレは昨日以上に『ぐったり』が相応しい状態になった

乗ったもの？

ジェットコースター　五回
メリーゴーランド　三回
回転ブランコ　四回
コーヒーカップ　二回
観覧車　一回
ｅｔｃ，ｅｔｃ，…

他の三人はもっと乗っている

オレ、ついていけません…

お昼が唯一の救いだった…

別荘に戻っても疲れていたので飯食って寝る

…皆そうだったぜ…

四日目

「今日はどうするんだ…？」

まだまだ疲れが抜けない

「じゃあ今日はここでゆっくりしましょう

屋内・屋外プールもあることだし」

あぁ…アリアさん、ありがとう！！

「オレはじゃあのんびりしてる…」

あぁ、でもいい思い出になりそうだ…

プールでは、オレは普段着のまま足だけを水につけて寝られる椅子で寝ていた

あぁ…これを作っておいてよかったよ…

三人はとても楽しそうだ…

混ざる気力０

そしてお昼はそのままバルコニーでバーベキュー

午後は…さすがに皆疲れたようで、寝てたり、マッサージチェアで休んでたり…

オレは午前で大分回復したから、お菓子としてデザートを作った

ゼリーとか、プリンとか、…

ロボットが作ったのも合わせると結構な数になった

そして皆が起きたら食べる

凪はオレの調理したものを初めて食べたから、感想を待つ…

「凄いおいしい！」

言われて嬉しかった

んでさぁ…さっき気づいたんだけど、凪とユニが仲良くなるとか、原作ブレイクどころじゃ済まないよ？

何やってんの？オレ…

でも、オレは『傍観者』を続けるつもりだ

多少のズレは仕方ない…よな

そして四日目も終了

もう一日目の凪との会話のことは忘れてしまった

五日目

「いよいよ…今日が最後ね…」

アリアさんは名残惜しそうに言う

「いたいなら、何日でもいいぜ」

「いいえ、それをしちゃうと長引くから…

ユニ、イタリアに明後日帰るからやりたいことは今日中にやっちゃいなさい！」

『明後日』

オレの心にはその言葉が重くのしかかった

今日は別荘から帰るだけ

でも明後日はイタリアに行く

しばらくは、会えなくなる……

凪もそれが分かってるようで、暗い表情になる

「南、凪ちゃん」

アリアさんに呼ばれて顔を上げる

「なにー？」

「？」

「確かに私達は明後日イタリアに帰るわ
でも、一生の別れじゃないんだから…
それに、そんなんじゃ私達が楽しんで帰れないじゃないっ！」

「アリアさん…」

「そうと決まれば今日も悔いのないように遊ぶわよ！！」

そして、荷物は先に家に送り、夕方まで遊びつくし、やはりぐったりした状態になって家に帰る

夜遅くなってしまったので凪はオレの家に泊まることになった

別荘を見たからなのか、家を見ても驚かれなかった

オレンジ親子が帰るまで、あと二日

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２３　オレンジ親子&霧との旅行！（後書き）

南…オマエ何者だよ…

フツーに考えておかしいだろ…

な、話でしたね…

あ、あと一話か二話オリジナルストーリーで、終わったら原作に戻ります

早くＶＡＲＩＡ編が書きたいぃぃぃー…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２４　オレンジ親子、イタリアに帰る！

「ちょっと、話いいかしら」

アリアさんとユニは明日、イタリアに帰る

そんな状況の中で夜、アリアさんに呼ばれた

凪は昼間に、明日見送りに行くことだけ伝えて帰った

ユニは、時刻が遅いので寝ている

きっと、マフィア関係のことだと察した

「話す場所は、ここで平気か？」

「ええ、大丈夫よ」

スッ、と真剣な表情になる

「私には、少しだけど未来を見ることの出来る力があるの

そして…私は未来を見た　１０年後の世界だったわ」

！！１０年後…

いずれ、１０年バズーカで飛ばされる世界

「１０年後…」

「えぇ…残念ながら、私は１０年後にはいないみたい
そして、ユニが何者かに操られているみたいだったわ
南…あなたもいたわ」

オレが原作に関わるのか……

まぁ、ここまで主人公や中心的人物に深く関わっているんだから、
何もない方が変だが…な

「ユニが…　くそっ！１０年後のオレは何やってンだよ！！」

本当にそうだ

１０年後のオレは、一体何をやっているんだ…！！

「それがね…

見えたあなたは、１０年後の南ではなく、今の南の姿だったわ

どういうことかは、分からない」

「！？」

１０年バズーカで飛ばされたオレ！？

「そこでね、お願いがあるの

ユニを…守って…」

辛そうな、振り絞るような声で言った

「もちろん…ユニはオレの家族だぜ？

何があるのかは分からないけど、必ず守る…！！

もし既に操られてたりしたら、必ず助ける！！」

「南…ありがとうっ！！」

本当は、劇薬を飲まさせる前に助けたい

でも、アリアさんが見た未来では不可能だったみたいだ

なら、助ける！！

「アリアさん、明日はイタリアに帰るんだから、早く寝なきゃダメだぜ？

１０年後のユニのことはオレに任せろって！」

「そうね…　ありがとう！お蔭でスッキリしたわ！

じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

アリアさんは部屋へ向かった

もう、アリアさんてユニが来てから約三週間

別れるのは辛いが、今度はオレがイタリアに行こう

そう思い、今日は寝ることにした

翌日

さすがに今日は7時３０分には起きた

二人は既に起きていて、いつも通りに「おはよう」と言う

いつも通り――――――――――

でも、明日からこの家にはオレ一人になる

悲しいが、それは二人も同じことなんだ

そう思い、

いつも通り、三人で食事をする

いつも通り、三人でテレビを見る
いつも通り、日課になったトランプで遊ぶ

この『いつも通り』は、『今日まで』

でも…

きっとまた、この『いつも通り』が来ることがあるだろう

だって、『家族』だから――――――――――――――――――――

「ユニ、忘れ物はないか？」

もう出発の時間になり、ユニに確認をする

「うん！大丈夫！」

手に荷物は少ない

先に送ったのだ

「南、何かあったら送ってね！」

「冗談は辞めてくれって…

まぁ、本当にあったら送るよ

あ…」

オレは一つ思い出した

「アリアさん、住所教えて」

住所知らなきゃ、イタリアに突撃しにも行けない

「あら？教えてなかったかしら
何か書くものある？」

オレは側にあった紙とペンを渡す

「はい、どうぞ」

渡された紙を見ると、住所が二つ

アジトの住所と、ユニと暮らしている家の住所だ

「じゃ～、今度行くな！！

…って時間！！ギリギリになるぜ！？」

時計を見ると、空港までの時間を含めたらギリギリの時間だ

「ユニ、南、急ぐわよ！！」

アリアさんは急いで玄関に向かう

あぁ、オレも空港まで送ることにしてるんだ

ガチャリ

鍵を閉め、エレベーターに乗り込む

マンションのロビー的な場所には、凪が待っていた

そしてタクシーを捕まえて、空港まで行く

タクシーの中では、凪が作ってきたお菓子を皆で食べたり、喋ったりした

しかし、すぐ空港に着いてしまった

「南、凪ちゃん、本当にありがとう　とても楽しかったわ」

「それを言うならオレも同じだぜ？それに、『家族』にもなってくれて…」

「私も…すごく、楽しかった…

ありがとう…」

「二人共、ありがとう」

「南お姉ちゃん、凪お姉ちゃん、本当にありがとう！」

「ユニ…　今度はイタリアに行くなっ！」

「本当？南お姉ちゃん、私待ってるね」

「おうっ！待ってろよ」

『まもなく、イタリア行きの…』

放送が入った…

いよいよ、お別れだ

「…ユニ、時間になったわ…

本当に、本当にありがとう」

「そんなに言わなくても、また会えるぜ」

「うん…それまで、元気、で…」

そして、二人はイタリアに帰った

「んじゃ、オレらも帰るか」

「うん…」

帰りに乗ったタクシーは、やけに広く感じた

タクシーの中では、何も話さなかった

そして並盛に戻り、公園に行った

「凪…ちょっと変な話するけど、いいか？」

「？うん…」

「もし…さ、大切な人が命は助かるけど事故に合うとする
自分はそのことを知ってるけど、もし事故が起こる前に助けたら、
アンバランスな世界になってしまう
そんなことがあったら、凪はどうする？」

これは、凪の話だ

凪は猫を助け、右目と内臓を失ってしまう

オレは、そんな傷を負ってほしくないけど、それがないと、骸との
接点がなくなる

それじゃあ、オレはどうすればいい？

「…命が助かるなら…

ごめん…私も、分かんない…」

「そうだよな～…

ありがとう！」

これは、ゆっくり考えるとしよう…

「じゃあ、また遊ぼうな！」

「うん…！また、ね…」

オレは、今日からは一人になる家に帰った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２５　二学期開始！

「くそう、くそうっ

雲雀のアホ――――――――――――！！！！」

只今全速力で登校中

何で走ってるのかって？

「書類整理なんて、死んでもイヤだぁぁぁぁぁ――――――――！！」

という訳だ

「確か…体育館で朝会だっ！」

校門での時間はセーフ

だが、風紀委員は朝会の時にいなくてはいけないらしい

「着いたぁぁっ！！」

ガラッ、と体育館のドアを開けたら生徒が皆こっちを見て、静かになる

「雲雀ィィ！！セーフだから書類整理やんねぇからな！」

偉そうに座っている雲雀を指差して言う

その時――――――

キーンコーンカーンコーン

「うん　ギリギリセーフだね」

雲雀の許しが出た

「よしっ！！危なかったぁっ！」

思わずガッツポーズ

「でも、廊下走って来ただろうから書類整理やってもらうよ
今まで逃げた分もあるから」

「イヤだ！！オレは今日忙しいんだ！」

実際は何も忙しくないけどな★

「じゃあ何が忙しいのか言ってみてよ」

「あれとかこれとか…」

「用事ないのは分かってるんだから、諦めなよ」

「イーヤーだぁぁぁ！！

そっそうだ、隼人！！今日オレ用事あるよなぁ！？」

何かテキトーに言ってくれぇぇっ！

「オ、オレに振ってんじゃねぇ！１０代目に迷惑かかるだろ！」

「何でオレ――――――！？」

沢田は白目になっている

「ダメだ！沢田は今日ボクシング部に来るのだ！！」

うるさ…

「笹川了平か…

別にそれは自由にすれば？」

「うむ、それならばいい！！」

勝手に話しかけて、勝手に解決してるし…

何だコイツ…

「沢田、今日オレ用事あるよなっ！

（ボソッ）うん、って言えよ」

「君が無理やり用事作ったって、無駄だよ」

雲雀は黙っとけっ！！

「あ、あのっ！」

…ここで思わぬ声が聞こえたかもしれないが、空耳だろう

「咲ちゃん？」

沢田、関わるな、関わるな…

「雲雀さん…ですよね…？」

「…」

ナイスっ！！

ナイス無視！！

「あ、私は山下咲です！

書類整理なら私やりましょうか？」

……

アイツ以外なら喜ぶんだけど…

「僕に話しかけないでくれる？」

「す、スミマセン…」

ふっ…

残念だったな

「風間南、仮に君に用事があったとしても、書類整理はやらせるからね」

「イヤだぁぁぁぁぁぁぁ」

教師も生徒も、朝会始められなくて困ってるけど、それどころじゃねぇっっ！！

…こうなったら道は一つ！！

「なら逃げるっ！！」

オレはそのまま体育館を飛び出した

「後で咬み殺してあげるから安心して」

「安心できるかアホっ！！」

このまま家にいてもダメだしな…

まずは教室に行くぜ！！

そして放課後――――――――――――――――――――

「うわぁぁぁぁぁっ！！

来るなぁぁぁぁ！！！」

雲雀との鬼ごっこ開始！！

オレは今外を走ってる

お？前に何部かのジム！！

ひとまずここに隠れるぜ！！

バタン！！

ドアを開けて侵入

「あり…？」

中では笹川了平と沢田がお互いに死ぬ気になっていた

そーじゃん！！

一年二学期初日って、笹川了平が沢田とバトる日じゃねぇか！！

「南！？何でここに来たんだよ！」

お、隼人か

「書類整理から逃げたら雲雀に追いかけられてる
ひとまず隠れさせてくれ」

「そ…そーゆーことか…」

そして、対決を間近で傍観する

「入れ入れ入れ入れ!!」

「やだやだやだやだ」

笹川了平のパンチを避けながら断る沢田

…変な状況だ…

しかし、勝負は決まる

「断る！！！」

「ぐはあぁ！！」

ガッ、となかなか強い沢田の右パンチが笹川了平に当たる

殴られた笹川了平は窓ガラスを割るほど飛んだ

しかし――――――――

「ますます気に入ったぞ沢田！」

「！！？」

「お前のボクシングセンスはプラチナムだ！！
必ずむかえにいくからな！」

「もーお兄ちゃんうれしそうな顔してー！」

…変な兄妹だな…

それしか思うことねぇや…

「京子ちゃんのお兄さん、大丈夫ですか！？」

何でオレがまたあの女の存在を…

いやいや、

見えない、見えない、聞こえない

「おう！！京子の友達か！

見ての通りオレはピンピンしてるぞ！」

いやいや、血流しながら言えるセリフじゃねぇぜ？

「オレも気に入ったぞ笹川了平」

「！？」

「おまえファミリーに入らねーか」

あぁ、またスカウトしてるよ…

オレは今のうちに…

「おまえもどうだ？風間」

……

「何度言われようと答えは同じ

断る」

「何で嫌なんだ？」

「だから、オレはメンドイのが嫌いなんだよ
あと、ウルサイのも嫌いだから断る」

本当だぜ？

オレはこーゆーのが嫌いなんだ

「またそれか…
まっいつか必ずファミリーに入れてやるぞ」

「何度でも断ってやるよ
んじゃーな」

オレはもう放課後だから帰ることにした

だが、問題が一つ

「やあ」

「あ…ドチラサマデショウカ？」

「書類整理、やってもらうよ」

「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」

見事に雲雀のことを忘れてました

そして四時間後

「こ…これで最後だな…？」

もう夜の7時だ

「うん　早く終わらせてね」

「うぅ…」

そして、ポン、とハンコを押す

「おおおおおおお終わった…」

もう肩がいかれそうだ…

「じゃあ早く帰る準備してね」

「送ってくれんの？」

冗談で言ってみた

「もう夜遅いしね
見回りのついでだよ」

夜見回りすんのかよ…

「サンキュー」

「じゃあ校門に来てね」

雲雀はさっさと応接室を出て行った

「ってか、荷物これだけだし…」

オレも雲雀の後を追う

「んで…？なんで君は中学生なのにバイク持ってるのかい？」

校門の前にはバイクに乗っている雲雀

「並盛のボスは僕だよ？」

「あぁ…そーでしたね…」

もう何言っても無駄だ…

「早く乗りなよ」

「ハイ？」

聞き間違いだよな、うん。

「早く乗りなよって言ってるんだけど」

…どうやら聞き間違いではなかったようだ

「ハァ…乗らなかったら殺されそうだし、乗るよ…」

そして後ろに乗る

「行くよ」

ビュウウゥゥンッ！！

「おいおい！！速度出しすぎだろ！」

「僕にそんなもの関係ないよ」

でも速すぎる…が

「うっひょうっ♪

オレこーゆーの好きだから楽しいぜ♪」

オレ、絶叫系大好きなんだぜ★

「君に楽しんでもらう為じゃないよ」

「まぁまぁ…　お、もう家か」

あっという間にマンションが見える

「着いたよ」

マンションの下でバイクを止めた

「サンキューな
んじゃな★」

何も言わずに雲雀は帰ってく

「…あのバイク、雲雀が沢田の家に行く時に乗ってくバイクだよな…」

それだけ呟いて、家に帰った

「あ…また原作ブレイクしちまったや…過ぎてしまったものは、仕方ないか★」

次の原作は何だっけな～…

「次って、Ｄｒ．シャマルが来て…

んで、雲雀じゃねぇか

…イヤだなぁ…どうしよう…」

シャマルは放っておくとして…

最終的に、『流れに任せる』という案になった

＊100pt達成記念＊　Straordinariamente4　原作との

「なぁ、漣…

今原作とどの位変わってる…？」

ちょっと気になって漣に聞いた

「…正直、まだ今の原作では影響少ないが、この先を考えると…」

「かなり変わる、か？」

「あぁ

原因としたら、南とあの女だろうな…」

ハァ、と大きなため息が出た

元々は、フツーに進む原作を誰にも気付かれないように傍観するつもりだったんだ

それが、雲雀に見つかって、風紀委員にされたあたりから変わってしまった

…それがなくても、あの女が存在する限りは原作通りなんて不可能な話だ

「じゃあさ、オレってこの後の『リング争奪戦』とか、『未来編』のに関わるのか？」

多分、未来編には関わるだろう

アリアさんが言っていたから

「リング争奪戦は分からない
だけど未来編には関わると思う

正直に言って、あの女がいるから全く分からないんだ」

「そっか…」

あの女さえ存在しなければ――――――――――――――――

何度もそう思う

「どーせ、『あの女さえ存在しなければ』とか思ってんだろ？」

「…まぁ…」

ここまでピッタリ当てられると思ってなかったから驚いた

「仮にアイツのせいで原作がどんどん変わっても、南が直していけばいいじゃねぇか

まぁ、完璧にはムリだけど要はアイツの思うツボにならなければさそしたらいいんじゃね？」

「…確かに、そーかもな…」

考えたって無駄だ

何をどうしたって原作通りには行かない

恐らく、オレも深く関わるだろう

でも、オレだってこの『家庭教師ヒットマンREBORN！』の世界で生きているんだ……

雲雀や、凪、隼人、ユニ、アリアさん…

大切な人以外だって、『マンガのキャラクター』ではなく、『生きている』

イレギュラーであるオレだって――――――――――――

「分かったか？南

オマエが体感してるこのせかいは原作とは別物

そして、前世では『マンガ』だったことも全て『リアル』になるんだ」

「あぁ…」

現実なんだ――――――――――――

全てが――――現実――――――――――――

しかし、一つ思うことがある

「漣…なら、オレのマンガ知識抜いた方が良くね？」

先を知ってるのは、物事を有利に動かせる

でも、全てを知っているのはルール違反ではないのか

最近よくそう思っている

「確かに未来を知っているのはビミョーだが、あの女がいるんだ

なら記憶があった方がいいだろ?」

「あ、そっか

ならそうだな」

オレから原作知識を抜いたら、あの女だけが未来を全て知っていることになる

それだけは防がなければいけない

「それによ…南から原作知識抜いたって、オマエ冷静だし、頭いいし、面倒臭がりだし…

どの道原作知ってるのと状況変わらないと思うぜ」

ふむ。そういうものなのか…。

「じゃあ抜かなくていいや」

「だな

でもどうするのか？

沢田達に積極的に関わるつもりか？」

「は？イヤだよそんなん

オレは、自由な傍観者になるんだ」

原作が変わったなら、変わった物語を体感しながら傍観してってやる

「ハハハ…
なんか南らしいや…
でも忘れるなよ?原作と違うからオマエが巻き込まれる可能性は大だからな」

冷静な声で言う漣

「分かってる
ってか忘れるワケねーだろ…」

絶対に忘れない自信がある

「ならいいけどよ…

なぁ、何か別の名前考えようぜ!

仮にヴァリアーと深く関わった時に沢田達に言う名前」

確かに必要だな…

「うーん…

じゃあ『スード』は？」

「スード？」

「あぁ

イタリア語で『南』は『ｓｕｄ』

んで発音が確か『スッド』だから

でもそのままだと隼人とかにはバレるから『スード』」

思いつきだけど、大丈夫だよな…

「ナルホド

まぁそれならバレないんじゃね？」

「じゃあ、その時用の武器くれ！」

右手を前に出す

「えっ…

…分かったよ…作るから…

どんなのがいいんだ？」

あぁ、漣が『えっ…』と言った後にオレが睨みつけたんだ★

「んー…

千本にしてくれ　殺傷能力高くして」

千本ってのは、針を両方尖らせたようなものだ

「千本か…

分かったよ　何本くらい？」

「じゃあ千！！」

千本なんだから…

やっぱ千だろ！！

しかし漣の表情は青ざめてく

「…文句あんのか？」

「ナイナイナイナイ！！

じゃあ予備用と、千本のケースと…

あとなんかカッコ良さそうだから手袋も作るよ」

お？なんか気前いいな…

「おう！

じゃあ『黒曜編』に入るまでに作れよ」

まだ一年はある

「なら余裕だぜ！！

毒付きとか、色々作っとくからな！

変装の服とかも！」

「…なんか気前良過ぎてキモいけど…

ダサいのは使わないからな」

「任しとけ！！

顔隠す物とか…

うぉぉぉぉ！！！！！！

なんか燃えてきた！」

漣は一人で騒いで消えた

「…パシりっぷりに磨きがかかったな

まぁ、楽しみにしとくか」

漣はやはり神ではなく、使えるパシリだと改めて思った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２６　誕生日を迎える！

只今、９月６日の夜１１時

普通なら家で寝ている時間だ

でも、今日は違った

理由？

……あのワガママ委員長・雲雀に呼ばれたんだよ！！

電話が来たんだ

『今から並中の屋上来て』

それだけ言って切られた

…何のために？

しかも屋上？

……やはり、雲雀が何考えてるのかなんて分からないね★

理解する気もないけど

「やっと着いた…」

ギィ…

屋上へのドアを開ける

「遅い」

…いましたよ

何か安心したよ…

すっぽかされてると思ったからな…

「遅いも何も…
ちゃんと十分以内に来たけど？」

いつも十分以内だからなー

それに、オレ寝てたんだぜ？

やっぱり雲雀はワガママ大魔王だ

「じゃあこれからは五分以内に「スミマセン、もう言いません。」
ならいいよ」

五分以内？

ムリだし、イヤだし、メンドクサイし。

あ、この言葉気に入った

『ムリだし、イヤだし、メンドクサイし』

うん。

オレのモットーにしよう

ん？モットーでいいのか…？

まぁいいや

あぁ、空がキレイだ…

星一つも浮かんでないけど、月だけは見える

…最高ではないか

あぁ、オレ星って無駄にチカチカしてて嫌いなんだ

『死んだら星になる』？

オレはそんなの信じない

第一、漣から死んだらどうなるか聞いたし

「風間南、何ボーっとしてんの？」

「んー？空がキレイだなーって思って」

雲雀も空を見上げるが、一度見て、再びオレの方に向いた

「星一つも出てないけど…」

「星なんて無駄にチカチカしてるだけじゃねぇか

オレが好きなの月だし」

「ふぅん…

まぁ確かに月はキレイだね」

雲雀は再び空を見る

「委員長！！」

ドアを開け、草壁さんが入ってくる

「何？」

「用意できました

それとあと五分です」

？

何か用意してたのか？

それに『あと五分』って何が？

「分かった　今から行く

君も行くよ」

「え～…　まぁいいや」

雲雀から睨みつけられたのは言うまでもない

「ってかどこ行くんだよ」

草壁さんは何も言ってなかったのにコイツ知ってるみたいだし…

「ついてきたら分かるよ」

「…」

イラっとしたのは、気のせいではないでしょう

「…応接室？」

雲雀が止まったのは、応接室

「うん　入れば？」

「…なんか嫌な予感するんだけど…」

雲雀から言われて良かったことなんて何もない

「今日のことを企画したのは草壁だよ」

「じゃあ入る」

草壁さんなら大丈夫だろう

ガラっ

パパパパパ――――ン…

「「「「お誕生日、おめでとうございます！！」」」」

「…は？」

ドアを開けたらクラッカーを浴びた

？

「誕生日？　あ…」

時計を見たら、ちょうど１２時

「風紀委員って、マメな人だったんだな…」

これしかオレは言えなかった

だってよ、雲雀率いる風紀委員だぜ？

ビビる…

「君もこれで１３か」

「うお？！」

あの…あの群れるのが大嫌いな雲雀が…

この群れを許してるよ…！！

「僕は眠いんだ
早く終わらせてね」

…オマエが呼んだんだよなー？？

「雲雀！！」

オレは両手のひらを雲雀に見せる

「何？」

「プ・レ・ゼ・ン・ト！！」

「…」

何もくれねぇのかよ…

「じゃあ『特別委員』」

「は？」

何て言った？

「だから、君を『風紀委員会特別委員』にしてあげるよ」

「嬉しくねぇよ！！」

「もう決めたから無駄だよ」

「…」

…こんな勝手に嬉しくない誕生日プレゼントを渡されたよ…

あぁ、空が青いな～
（今は夜です）

「じゃあ…」

こんなに勝手な奴ならオレからも言ってやる!!

「オレ、これから雲雀のこと『ヒバリン』って呼ぶからな」

ふっふっふっ…

これは、『吸血鬼ヒバリン』の『ヒバリン』だ!!

「咬み殺すよ?」

「じゃあ恭弥って呼ぶ」

咬み殺されるのはカンベンだ

それに、凪、隼人、ユニ…アリアさんは違うけど、大切な人はみんな下の名前で呼び捨てなんだし

「…」

お？何も言わないってことなら許可したってことか？

「それなら僕も呼び捨てにするよ？」

「別にいいぜー？」

隼人も凪も、呼び捨てだし…

「あ、じゃあこの腕章も付けてね」

雲雀…否、恭弥から渡されたのは『特別委員』と書かれた腕章

「2つ付けろと…？」

「うん　『風紀特別委員』ってことだからね」

…やっぱ嬉しくねぇ…

「じゃあこれからは特別委員って呼ばさせていただきます！！」

「え…、いや…それはナシで…」

草壁さん、それだけは嫌です…

「しかし…」

「い、いままで通りでいいッスよ…？」

ただでさえ、『風間さん』ってさん付けされてるんだ…

「しかし…」

…そんなに『特別委員』ってスゴいものなのか？

オレには理解できない

「それじゃあ、南って呼んでいいぜ？

うん、それでいこう」

恭弥だって呼び捨てだし、他の人も呼び捨てに――――――――

「じゃあ南さん、で」

――――――――してくれなかった

何？

下の名前にさん付け？？

怖い人って思われるじゃねぇかよ…

「じゃあ、それでいい…
オレ疲れたから帰るな…」

もはや言い返す気力も無くなった

「「「お疲れ様でしたァ！！」」」

……ヤクザのボスかい、オレは

「じゃあね」

…うん、恭弥くらいサッパリした感じで充分

オレは家に帰った

朝――――――――

オレにはメールがいくつか届いていた

隼人、凪、アリアさん&ユニ、ビアンキ、だ

内容は皆『誕生日おめでとう』

あぁ、ありがたいな…

ビアンキとは仲良くなりたいとは思わないけど、祝ってくれるのは嬉しい

別に嫌いじゃないけど…

皆に返信をして学校に行く

新しい腕章は嬉しくないけど、誕生日プレゼントとしてちゃんと付けて行った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２７　雲ＶＳ大空・嵐・雨を少し変える！

オレは考えていた

隼人の誕生日プレゼント？

違う

隼人の誕生日はもう過ぎた

プレゼント？

隼人がいらないっつーからあげてない

何をかというと、原作どーなるのかなー…ってことをだ

今知りたいのは、一つだけ

「いつ沢田達は恭弥と戦いに来るんだ？」

今日沢田が学校まで来て、すぐ帰ったのが見えたからシャマルは今日だろう

なら、明日あたりに恭弥と戦うか？

「あ…明日各種委員会だ…」

つまり、明日来る…？

「…巻き込まれませんように…」

それだけだ

オレは原作とズレたとしても話を傍観したい

話に交わる気なんて微塵もないのだ

…なんかゆっくり傍観できそうもないけど、まぁいっか★

オレは寝ることにした

翌日

「んでー？何の用？」

応接室でグダグダしてたら電話が来た

相手？

「オマエ、雲雀と同じ風紀委員だよな」

チビちゃんから

「だったら?ってか腕章見りゃ分かるだろ」

あー、原作ブレイクしちゃうかな～…

「確認だ
オマエがファミリーに入りたがらないのは、風紀委員があるからか?」

…何でそーなる…?

そこまでして、オレをファミリーに入れたいのかよ…

「全く関係ねぇよ

何度言おうがオレはマフィアになるつもりは無い

諦めな」

まぁ、関わることにはなりそうだけど、それは言わない

「…そーか…

だが、オレは諦めねーからな」

それだけ言ってどこかに行った

オレは今日沢田達が来ることを忘れ、応接室に向かった

「あ～眠い…」

応接室のドアを開けながら言う

「眠りに来たなら帰ってくれる？」

「お～、恭弥か…

じゃあソファーに座るだけにするよ…

っとその前に紅茶とお菓子～♪」

これが最近のオレの日課

応接室って、色々あるんだよ～

「今日は…クッキーにしよっと」

紅茶とクッキーをソファーの前にある机に置く

その時だ

ガチャ…

「へ〜〜

こんないい部屋があるとはね――

！」

山本と隼人が来た

ああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

今日、来る日じゃねぇかよ！！

昨日考えてたのが水の泡…

最悪だ…

「君　誰？」

あぁ、原作は進む…

隼人、恭弥を挑発すんなよ…？

「なんだあいつ？」

「獄寺待て…」

「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？
ま、どちらにせよただでは帰さないけど」

「！！

んだとてめ――――」

「消せ」

ビュッ

マズいマズいマズいマズいマズいマズいマズい…

原作がぁぁぁ…

よし、オレは景色と一体化しよう。

「南!?」

…隼人くーん?

オレは景色と一体化してるから関わらないでー

「南、何でそこにいるんだよ！」

…関わらないで欲しかったのにぃ…

「オレ、風紀委員だぜ？

んで、応接室でまったりしてた」

隼人に無視はしたくないからな～

「へーはじめて入るよ応接室なんて」

するっ

お、沢田が来たか…

「ね、ねぇツナ…？」

…何か聞こえた？

オレには聞こえなかったなぁ

「まてツナ！！」

「え？」

「1匹」

ガッ

うわぉっ

まぁ沢田はいいんだけど…

「のやろぉ!!

ぶっ殺「隼人待て!!」

？」

オレは叫んだ

「恭弥も待てってのー！！」

オレは止まった隼人に殴りかかろうとしている、恭弥のトンファーを掴んだ

「…何のつもり？南…」

「最初に風紀委員に入るときの条件

隼人はオレのダチだから、手出し禁止な」

「…」

恭弥は止まったか…

問題は…

「南！！
コイツは１０代目に手ェ出したんだ！邪魔すんな！」

隼人だ

「…分かった
オレは一度止めたからな」

隼人には沢田関連で何言っても無駄だ

「それじゃあ、再開しようか」

恭弥も隼人と戦う気になっている

…これ以上は、ダメだな…

そして、原作通りに進む

隼人はやられ、山本もやられる

…存在を認めたくないが、あの女は？

部屋を軽く見回すと、いた…

入り口に立っていて、自分が攻撃されないように廊下にいる

……何だよ……

オマエが来た理由は何だ？

…確か、この世界の人間を守りたい、だよな…

…守れて、ねぇだろうが…！！

廊下に立ってる

それは、自分しか守れてねぇだろ…！！

沢田は目覚め、死ぬ気になっている

沢田だって、隼人と山本を守ってる

なのに、オマエは何だ？

殺気が出てきた

ピタ

恭弥と沢田の戦いが止まる

二人…いや、チビちゃんもオレを見ている

「南…？どうかしたの？」

下を向きながら殺気を放っているオレに恭弥が話しかけた

「…何でもない」

「…ならいいよ

ねぇ、君にはもう飽きちゃったな

そこにいる君、相手になってくれない？」

そう言って恭弥はチビちゃんに殴りかかる…が

まぁ、原作通りに止めた

…原作ブレイク、またしちまったか…

恭弥は、沢田に向かって飽きた、と言い、

チビちゃんに向かって、相手をしろ、と言って殴りかかった

まぁ、多少のズレはできたが、最終的には同じになったな

「ワォ　素晴らしいね君」

「おひらきだぞ」

爆弾！

忘れてた！！

オレは急いで爆弾をチビちゃんから奪い取る

…間に合え！！

ヒュッ

爆弾を思いっきり外に投げる

ドカーン…

「ふぅー…

おいチビちゃん、こんな危ねぇモンを使おうとするな」

「チッ…

（コイツ…どうして間にあった…？

…必ずファミリーに入れてみせるぞ）」

おいおい、舌打ちかよ…

「じゃあな」

ぴょん、と窓から降りて出て行った

恭弥は追わなかった

沢田、隼人、山本…あの女も消えていた

「…ねぇ」

「？」

いきなり恭弥が話しかけた

「あの爆弾に反応できたの？」

「ん？まぁ…」

…ヤバいことしちまったか？

「ふぅん…

ますます南を咬み殺したくなってきたよ」

嬉しそうに笑いながら言う

「…オレは嫌だからな」

嬉しそうな恭弥を止められそうもないので、急いで応接室を出た

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２８　仕事だらけの体育祭！

明日はいよいよ体育祭

オレは、風紀委員…いや、風紀特別委員だからかなり忙しい

恭弥のヤツ、オレに単なる面倒事係を押し付けただろ…

何がそんなに忙しいのかって？

まず、一週間前から予算を決め、各委員会との話し合い

そして、ルールのチェック、出場選手の種目チェック、ｅｔｃ、ｅ

tc、…

「草壁さんより忙しいじゃねぇかよ！！」

草壁さんも副委員長だから忙しいってことを聞いた

でも、その比じゃない位忙しい

「これで最後です」

オレには五人手伝いが来た

それでも、昼寝ができない程忙しいのだ

だから最近は授業は受けてない

まぁ、いつも受けてないが…

でもその仕事を教室でやっている

周りの目が痛いよ…

隼人が『手伝うぜ』って言ってくれたけど、遠慮した

なぜかって？

…全部オレのサインが必要だから意味ないんだよ…

「…まだあんのか…？」

さっき最後だって言ってたけど、新しい紙を大量に持った人が来た

「…スミマセン…

ですがこれは我々でも大丈夫な物ですので、お帰りください」

「おぉマジか！！

なら頼んだ！」

オレは急いで帰る

だってさ、また持って来られたら嫌じゃん

そしてそのまま帰宅完了★

ふっ…

成功したぜ…

明日、このままサボ…いやいや、棒倒しがあるからダメだ…

ソファーで横になる

「…なんか…眠い…」

よっぽど疲れてたのか、そのまま寝てしまった

プルルルルルル…

「電話…」

せっかく気持ちよく寝てたのに…

ピッ

「もしもし…」

『今日は朝から仕事あるから、早く来てって言ったよね？』

…恭弥ですよ…

ってか、そんなこと言われ…たな…

「悪ぃ…　何分以内？」

『今なら２０分』

おぉ？

意外と時間あるから、風呂入ろ

「分かった　じゃな」

電話を切り、急いで風呂に入る

そして学ランに着替え、残り五分

「やべっ…

走って行かなきゃ…」

…体育祭始まる前から疲れそうだ、コリャ…

まぁ競技は出ないけどな～

「間にあったか！？」

応接室のドアを勢いよく開ける

「うん　セーフだね」

「フー…」

よかった、よかった…

でもさ、こっからが忙しいんだよな…

「はい、書類」

「……どう…も…」

朝っぱらから書類…

何の嫌がらせだろうな…

あぁ、昨日に比べたら少ないかな？

「それをあと一時間で終わらせてね」

「……」

言う気力も失せたんだ

一時間後

「おーわーったァァァ！！！！！！！！！！」

何とか終わったよ、体育祭開始まで３０分…

「屋上行って、サボってよ♪」

これなら仕事が増えてもサボれるぜ★

そして１０分後の応接室――――――――――

「南…逃げたね…

…咬み殺す！！」

何も知らない南は寝てました

『只今から、並盛中学体育祭を開催いたします』

「ん…」

放送の声で目が覚めた

もうそんな時間か…

まっ棒倒しは午後だし寝てよっと♪

しかし、ここでアイツが…

『プログラム一番、選手全員による準備…ひひひひひ雲雀さん！！？』

…聞かなかったことに……

できないな

『南…逃げたお礼をしてあげるから出てきなよ』

ヤバい！！

行かなくては！！

え？どうせ咬み殺されるから隠れてればって？

１０で済むのを１００にしたくはない

ガシャッ

ヒュウウウ…

スタッ

ん？屋上から飛び降りたんだぜ？

フェンス飛び越えてな

周りの目が痛いが、それどころではない

「それじゃあ早速咬み殺してあげるよ」

トンファーを構え、言ってくる

さぁ、やっぱり逃げようか★

「来るなぁぁぁぁぁぁ――――――――――――!!!!!!!!!!」

……嬉しくない鬼ごっこ開始ー！

「いくよ」

そう言ってトンファーを振り下ろしてくる

ビュッ

ガキィィン

「!?…その刀は何だい?」

トンファーを防いだのは、漣に作らせた刀

「風紀委員になった時に言ったと思うぜ?」

「あぁ、完成したんだ」

そしてもう片方のトンファーが襲いかかる――――――――――

が…

ガキィィン

オレももう片方の刀で防ぐ

「ワォ　二刀かい？」

「まーな！」

恭弥は満足したのか、トンファーをしまった

「…許してくれんのか？」

「うん　でも次は容赦しないよ」

「……」

オレは何も言わずに刀をしまう

恭弥もどこかに行く

……あぁ、早く帰りたい

そしてしばらくして…

「…始まったか…」

原作が始まった

と言っても、隼人と笹川了平がC組の総大将を潰したとこだ

あぁ、やっと傍観できる…

そして昼――――――――――

『遠慮はしなくていいわ』

え？何が？

まぁそう思いますよね…

ビアンキに昼飯誘われたんだよ

「悪い、オレ忙しいんだ…」

本当だぜ?

今本部で審議中

それなのに堂々と電話してるんだ

ん?皆オレの電話待ち中だ

『そう…ならいいわ

またね』

ピッ

「んで？A組対B・C合同チームでいいのか？」

提案者である笹川了平に確認する

「もちろんだ！！」

熱いなぁ…

「じゃあそれで決定～

審議なんて面倒なのは終わりで解散」

周りは『本当にいいのか？』とか聞こえるけど気にしないっと

そしてすぐに棒倒しが始まる

合同チームの総大将は恭弥

よかった…原作通りだ…

最初なA組も元気だったが、2対1

ズガン

「お、死ぬ気タイム開始か」

騎馬を作り、圧倒していく

しかし、些細なことで終わってしまう

「おい芝生メット！
てめー今足ひっかけたろ！」

「ふざけるなタコ！
人の足を蹴っておきながら！」

…やっぱ短気な者同士だと大変だな…

ま、原作通りに乱闘だ

「…グラウンドが壊れませんように…」

願いはそれだけです

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２８　仕事だらけの体育祭！（後書き）

とうとう三巻に！

…早く日常編終わらせよう…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２９　新たな贈り物！

今日は日曜日

あぁ、久しぶりにゆっくり出来る…

しかし、そんな時間は長く続かない

プルルルルルル…

ピーンポーン…

「…出たくないなぁ…

よし、居留守だ」

ダブル居留守を使うことにした

しかし、相手が悪かった

ガキッ

…何だろう、今の聞き覚えのある音は

まるで、ドアが壊れた音みたいだ

みたいじゃないことは、認めたくないよ

「やぁ」

「…もう少しまともな入り方してくんね？」

「南が開ければいいことだったんだよ」

…居留守の権利なし？

あぁ、電話も恭弥からだ

「んで、今日は何の用？」

「赤ん坊に貸しを作りに行くんだ

南もついてきてもらうよ」

あ～、今日は沢田がモレッティを殺すと勘違いする日か

「はいはい、分かりましたよ」

オレはそのまま家を出て恭弥のバイクに乗る

あぁ、漣にちゃんと直させてるから心配はいらない

「なぁ恭弥、オレもバイク欲しい」

後ろに乗るのもいいけど、自分でも運転したい

「ふぅん

じゃあ後でね」

「マジ!?よっしゃ!

色は黒な!!」

バイクなら黒がいいじゃん？

「いいけど、早く行くよ」

「おう！」

そして、普通に５０キロは出して沢田家へ

「着いたよ」

うん。早いな。

「んじゃ、入ろ…ってどこから入ろうとしてんだよ！！」

「窓」

「……」

まぁ、原作通りにサッサと登るんだな、これが

オレも傍観するため恭弥に続く

「やあ」

「ヒバリー！！！」

「よっ　ジャマするぜ」

一応言っとかなきゃな…

「南もかよ！！」

隼人だけは反応してくれる…

オレ、嬉しいよ…

さすがに皆に無視されたくはない

「今日は君達と遊ぶためにきたわけじゃないんだ
赤ん坊に貸しを作りにきたんだ
ま、取り引きだね」

あ、恭弥は学ランだけど、オレは私服だぜ?

…ま、凪と遊んだ時とあんま変わらない

「待ってたぞヒバリ」

「ふーん

やるじゃないか　心臓を一発だ

うん　この死体は僕が処理してもいいよ」

「なっ

はぁ～～！！？　何言ってんの～～！！？」

「沢田、ウルサい」

本当、鼓膜破れたらどうしてくれるんだよ…

「ご…ごめんなさい…」

ふむ。少しセリフが増えたが正当防衛だ

あ、そういえばアイツは――――――――

良かった、いねぇ…

「死体を見つからないように消して殺し自体を無かったことにしてくれるんだぞ」

「いろんな意味でマズいよそれは！！」

だから、ウルサいっての…

ハァ…

「じゃああとで別の風紀委員の人間よこすよ

行くよ、南」

「へいへい」

別の、というのはオレがいるからか？

…まぁいっか

「委員会で殺しもみ消してんの～～！！？」

「またね」

「またな～」

あ、このあと隼人のダイナマイト来るんだっけ？

ん？でもオレがいるか「１０代目！！どいてください！！」…来るね…

「あいつだけは、やり返さねーと気が済まねぇ！！

南、避けろよ！！」

あ、一応だけど心配はしてくれてるんだな…？

「果てろ！！」

ビシュッ

お～、来た来た…

チャキンッ

「そう死に急ぐなよ」

お～、見事だな

ドカァン！

「じゃあ行こうか」

「おう」

隼人が無事なの知ってるし？

バイクの後ろに乗り、家に行くかと思ったら――――

「…ここは？」

「バイク欲しいんでしょ」

うん、バイクがいっぱいです

「好きなの選びなよ」

「ん～、じゃあこれ」

指差したのは、入り口に飾ってある黒いバイク

試しに乗るが、ピッタリ

「じゃあ待ってて」

それだけ言って店に入っていく恭弥

…きっとアレは脅してるんだろうか？

……まぁ、バイクが手に入ったことだけ伝えておきます

『南～』

「（！漣！？何だよ？）」

突然脳内に響く声

今が家でよかったけどよ…

『今から姿現しても平気か？』

「平気だよ　出てこい」

パッと姿が見えた

「何の用？」

「ん？前に渡した『小型ノートパソコン』の説明しようと思ってな

それに最近南、自分で飯作るから呼ばれなくて暇なんだもん」

…殴りたくなるのは、仕方ないでしょう

「何かイラつくけど、説明しろ」

「え!?あ、ハイ!!

まず、一つ能力を説明する

ちょっとこれを見てくれ」

出したのは、飴

「…帰る?気絶する?」

「いや、本気だから!!

説明続けるけど、この飴とパソコンはリンクしていて、
一度でも飴を食べたら食べたヤツの情報が画面に出るんだ
体力くらいだけどな」

まぁ、それ以上情報出たら個人情報がね…
法に関わるしな…

「それに、この飴には期限も無いし、数だって無限だ
パソコンにも無限」

なんかセコいなぁ…

「まぁ、とりあえず一つ目だ
飴はパソコンで作れるからな
二つ目は、対沢田用の『直感が当てにならない』能力

画面でそこをオンにすればなるからな」

おぉ、これなら超直感も遮られるな！！

…いつ、何のために使うのか不明だ…

「まぁ、あの女がどんな力使うか分からないから損はしないだろ
あ、ちなみに二つ目の能力は南に対してだけだからな、使えるの」

「チッ…　確かにそうだな…

オレにだけ効くんなら、原作の変化も抑えられるな」

やっぱり沢田の超直感は無いと原作通りに進まない

「…とりあえずは二つだ」

「は？とりあえずって…

まさか、漣が考えたのを能力にしてンのか！！？」

ギクリ

「そそそそそんなことは…

あります…」

「ハァ…」

やっぱな…

「じゃあ追加したら教えろ

こないだ言った千本できたか？」

あれはオレが『スード』になった時用の武器だ

「もうちょい…」

お？もうちょいとは、結構早いな

「んじゃ早く作れよ

作り終わったら飯係復活だからな」

オレは優しいから、漣が武器作ってる間は自分で作ってるんだ

「え…？

もう作らなくていいじゃ？」

「何言ってんだ！

あぁ、だからって作るのゆっくりにしちゃダメだからな」

オレが言い終わって、漣が叫んでたけどオレには関係ない

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３０　お正月を迎える！

あけましておめでとうございます

は？他の話はどうしたんだって？

まず、学校以外では沢田と会わないから分からないんだ

そして、あのチビ牛の保育係とイーピンが来る日は風紀委員の仕事が忙しくて応接室にこもってた

まぁ、二人とも嫌いだしいいやってな

ん？牛はともかく、何でイーピンもかって？

要するに、オレはガキが嫌いらしい

イーピンってなんか…

イラつくからさ…

恭弥の入院の？

何か入院が無かったんだよ…

まぁ、イタリアに行った時かもな

ユニとアリアさんに会いにな

今度その話はするよ

んで、今日はお正月

まったりしてる――――――――――――ハズだったのになぁ…？

「今日は何の用？」

「いくら正月だからって仕事はあるんだ

南には見回り行ってもらうよ」

「……分かったよ」

恭弥だよ？

仕事って…

もはや委員会の域越えてるよなー…

内心イロイロ言いながら、恭弥にもらったバイクに乗る

ヴィィィン…

「じゃ、川の方行くな」

きっと『ボンゴレ式ファミリー対抗正月合戦』をしているから

「うん　報告はいつも通りでいいよ」

「ん、じゃな～」

あ、いつも通りってのは電話な

そのままバイクで川へ向かう

警察がたまにオレを見るが、学ラン着てるから何も言われない

やっぱ便利だな…

オレは６０キロは出してバイクに乗っている

そんな奴を許す程、恭弥が怖いのか…

＊第三者＊

ちなみにいっておきましょう

南は見回りの途中、風紀を乱している人を見つけると、

ストレス発散のために、かなりボコボコにします

それは並盛のほぼ全体に起こり、伝わり…

となったので、恐れられている並中風紀委員は、委員長の雲雀と、

特別委員の南なのです

「ん…アレか？」

川沿いをバイクで走ってると、何人かの集団が見える

キキィィィ

近くでバイクを止める

「！？南？

あ、そうだ　明けましておめでとう」

「おう、おめでとうー

…何やってんだ？」

ま、反応したのは隼人だ

いるのは、
チビちゃん、隼人、沢田、山本、笹川兄妹、
三浦ハル、牛ガキ、イーピン、キャバッローネの奴ら、のハズだが…

あの女もいるんだな、コレが…

「ボンゴレ式ファミリー対抗正月合戦だ」

やっぱなー

「風間、オマエも入るか？」

「断る

どうせ入ったら『これからファミリーの一員だぞ』とか言うだろ？

それに何よりメンドイ」

まぁ、誘ったのはチビちゃんだ

「バレてたか

んで、何でここにいるんだ？」

「見回りだよ

オマエらが何か風紀を乱すようなことしたら、オレがすぐにストレス発散させてもらうからな」

ストレス発散…

最近しょっちゅうしてるんだけど、溜まるんだよ…

「わかったぞ

さぁどんどんいくぞ」

今は羽根つきをしていたらしい

でも百人一首、福笑い、たこあげ、すごろく…

残念な結果だな…

「あ――――、どーしよー！

このままじゃ１億円借金だ～～！！　一生借金地獄だ～！！」

ウルサいなぁ…

もし本当に１０代目になったら一億なんて余裕だろ…

ボンゴレってデカいし

「考えてみたらちょっとシビアすぎるな
大人対子供だ　少しハンデをやってもいいぜ」

「ん」

「ディーノさん」

キャバッローネのボスは優しいヤツなんだな――――

ま、どーでもいいけど――――

…問題起こしてくれたらいいのに…

ストレス発散できるから…

なんてことを考えてたら、もちを作り始めた

「うっわ…

隼人超笑顔だ…　山本と一緒にいるのに…

写メっとこ」

カシャッ

「…ぷっ

後で隼人に見してやろう…」

オレが隼人いじりを考えてたら、笛が鳴った

「まずはキャバッローネのアンコロもちだ」

「とりあえずつくってはみたが…

オレ達の知識じゃあこれが限界だ」

出したのは、ボロ――…、とした、もちみたいなモノ

「…まずそ…」

オレが思った通り、『パサパサしてまずいな』らしい

ってかよく食ったな…

「次ボンゴレだぞ」

「うん　これ

な！　ポイズンクッキング――――！！？」

確かにポイズンクッキングだ

ビアンキがいる

隼人…なんか可哀想だからいじるのは辞めてやるよ…

写真は残すけど

そしてチビちゃんは、凄まじいほど寝て原作通りに終わった

あの女がいても原作通りになってくれて良かったよ…

「ま、問題ナシだな

帰ろっと」

何も壊してないから問題ナシ

これがオレの基準

まぁ、コイツらに対しての基準な

オレはバイクに乗り、家に帰る

「さて…と、報告するか…」

ガチャ、と家の鍵を開ける

すると、見慣れたけど家にあるはずがないモノが

「……なんで？」

頭の中では分かってるよ？

認めたくないんだ

ダイニングへのドアを開ける

「何でいるのかな？報告は電話じゃなかったかい？」

恭弥だよ。

玄関にあったのは、靴だ

「報告が遅かったからね」

確かに、確かに遅かったよ

いつも見回り始めて一時間で連絡する

…まぁ、毎回『見回りの時間、短い』って言われるけど…

「なら電話すりゃよくね？

わざわざ家にいなくても…

って、あ！どうやって入ったんだよ！」

鍵は三つあるが、
一つは元々家に置いておき、
一つは携帯し、
一つは本来なら管理人だが、オレがそれを奪い、家の中

管理人も、納得したから新しく作るなんてしない

なら…？

「専門家に作らせたんだよ」

右手に鍵を持ちながら言う

確かにオレの鍵と同じ形だな

「…わかった…

もう扉壊さないでくれるならいいよ…」

漣に直させてるが、オレの精神的ダメージが多少だけどあるんだ

ん？漣に対するのじゃないぜ？

なんかさ…むなしくなる…

「ワォ　南が認めるとは思わなかったよ
まぁいいよ　もう扉は壊さないであげるよ」

「そりゃどーも」

恭弥は常に上から目線で言うけど、慣れてしまったから対抗はしない

対抗したって、損するだけだし

あ～、そういえばまだ1回も本気で戦ってないな～

戦いたくないけど…

「報告は？」

「問題ナシ

沢田達が遊んでいたのを見ただけ

あ、何も壊してなかったぜ」

「そう」

聞くだけ聞いて、テレビを付けた

「……帰らないのか？」

「今日は疲れたからね

早く何か作ってよ」

「はい？」

要するに、今日泊まってく、と言いたいのか？

まぁ、客間はあるけどよ…

「だから、今日ここに泊まってくんだよ

早く何か出してよ」

「今日の晩飯はイタリアンだけど…」

どうせ何言ったって無駄だ…

「ふぅん」

「…」

オレはキッチンに行き、ナポリタンを作った

…辛〜くしてな

「はいドーゾ」

恭弥に渡す

パクッ

「!!?」

ふはははは

作戦大成功!!

「…何入れた?」

「タバスコ一本位?

まぁ、今のは鍵勝手に作った代償　ほい、これは普通の」

新しいナポリタンを渡す

「…ホントにそれは大丈夫だから…」

「…」

パク、パク…

あ〜、面白かった♪

そして次の日の朝飯を食って恭弥は帰った

オレは正月早々二回も笑えて最高だった

「今年は、いい年になりそうだな♪」

このときは忘れていた

この年は、オレの人生を左右する出来事があることを――――――

Straordinariamente5　新たなリングを手に入れる！

これは、正月より前の話

オレは、イタリアにいた

ん？ユニ達に会いに行くためだぜ？

しっかり恭弥には言ってあるから大丈夫だ！

まぁ、そんなこんなでイタリアにいるワケだが――――――

「アリアさん、アジトの場所森の中じゃん…」

そう、森の中だった

まぁ原作で森っぽかったのは覚えてるけど…

「あ…あそこだ」

木の隙間から建物が見える

ガサガサ…

走るが、やはり森の中、歩きづらい

「誰だ！！」

建物の全体が見えたところで、銃を向けられた

「風間南

敵じゃない　アリアさんの家族だよ」

「ボスの…？オマエなんか聞いたことないぞ！」

さらに銃を持つ手に力がこもってる

「えっと…日本にアリアさんが来た時に親代わりになってくれて…」

「フン…嘘だな」

バンッ

キィン

「「……」」

はい、説明します

銃を撃ってきたんですよ、太猿に似た人が

んで、仕方ないから刀抜いて弾いたってワケ

正当防衛だよ

「貴様…！！」

あれ？

火に油でしたか？

これはまずい…

「太猿!?どうした!」

ワォ、γに似た人まで出てきた…ってγだな、あれは

「それが…コイツがボスの家族だって言うから…」

太猿に似た人…いや１００％太猿がγに言う

「ボスの…

おい、オレはγっつーんだが、オマエは？」

「風間南…
アリアさんから聞いてないのか？」

アリアさんなら話してると思ったんだけどな…

「やっぱりか…
悪いな、ボスは太猿がいない時に話したから知らねぇんだ」

「なんだよ…」

ってかアリアさん、太猿にも話してあげてくれ…

「すまねえな
にしても、さっき刀で弾丸防いでたよな？」

「ん？まぁな」

それが何かしたのか？

ふむ。不思議だ

「あ、別に器用なヤツだなって思っただけだ

さ、ボスに会いに来たんだろ？案内するぜ」

「サンキュー」

なんだ、ただ器用だなって思っただけか

それはきっと漣との修行のおかげだな

アイツ、弾丸と同じ大きさの石を弾丸以上の速さで投げて来るんだよ

神の力らしいが、オレはその勢いをそのまま漣に跳ね返してるから
意味ないけど

真っ二つにだって出来る

「ここがボスの部屋だ
ボス！友人が来たぞ！」

友人じゃなくて、家族だって心の中で言った

もし言ったら『ボスに子供はいない』って言われるから

その言葉は聞きたくない

ユニがいるから

ガチャ

「友人…？

み、南！？」

「久しぶり、アリアさん♪」

ビックリしているアリアさんに軽く挨拶

約半年ぶり

「来てくれたのね…

待ってたわ」

「連絡してくれれば行ったのに」

多分ソッコーで行く

「南こそ、何で連絡してくれなかったのよ！
ビックリしたじゃない」

「それは、ビックリさせようと思ったから♪」

アリアさんは、呆れた…と言った

「立ち話も何だから、皆の所に行こうぜ」

γがキリのいいところで話す

「そうね

南、あなたに私のファミリーを紹介するわ」

「おう！楽しみにしてるぜ！！」

ジッリョネロの人って、γ、太猿、野猿、幻騎士、ニゲラ…
その位しか覚えてない

その方が楽しみでいっか！！

そして、大広間のような場所に行く

「皆集まって！」

アリアさんの一声で集まってくる

「前に話した南よ
今日からファミリーの一員になるわ」

「は？」

そんな話、初耳ですよ？

「あら？南はファミリーになってくれないの？」

「なってくれないよ

仲間までならいいけど、マフィアになる気はねぇし

…日本だけでなく、イタリアでもマフィアに誘われるとはな…」

ボンゴレにしろ、ジッリョネロにしろ…

「誰に誘われてるの？」

ヤベっ！

「まぁ…

でもその話は内緒だ」

アリアさんは、無理やり聞こうとはしてこない

嫌がることはしないから、本当にいいボスだと思う

「そう、ならいいわ

皆！歓迎パーティーするわよ！！」

「「「お～！！」」」

「だから、ジッリョネロには入らないっての！」

…だめだ、聞いてない…

「ふふっ　あとで皆に言っておくわよ

南の歓迎パーティーなんだから、南も楽しんでね！」

「あぁ！」

オレはジッリョネロの人達に混ざって話をした

バトル申し込まれたりもしたな…

結果は圧勝！！

幻騎士とも戦ったぜ！

勝ったけどな♪

…γとだけは遠慮した

ってかγも嫌がってたからな…

イタリアの滞在期間は４日間

１日目はジッリョネロの人達と話をし、
２日目はユニに会いに行った

３日目はジッリョネロに戻り、戦った

そして、４日目

オレはイタリア時刻で午後５時発の飛行機に乗る

昼まではジッリョネロの人達と喋ったり、遊んだり

でも、昼飯後にアリアさんに呼ばれた

「アリアさん、話って何？」

今は、ボス、アリアさんの部屋で二人っきり

ユニの話か？

「南に、ユニの事と、もう一つお願いをしてもいいかしら？」

「あぁ！もちろん！」

「これを…持っていてほしいの」

渡されたのは、小さな黒い箱

「…開けても？」

「いいわよ」

パカッ

「！？これは…？」

中に入っていたのは、マーレリング…

「それは、『マーレリング』と呼ばれる物よ

不思議な力があるみたいなんだけど、それが何かは分からない

他にも7つあって、その7つは持ち主が決まってるわ

付けてみてくれる？」

いや…マーレリングのことは知ってるけど…

7つまでだよ？

色々考えながら、リングを指に付ける

すると、白かった石が透明になった

「って、え？

何でこのリングは渡されてないの？」

「…相応しい者がいなかったのよ…

そのリングは透明に輝いているでしょ？

でも、相応しくない者が付けても透明にならないの

私もさっきまで南が付けて透明になるか心配だったんだけど、その必要はなかったわね」

…？

まさか…

原作、カンペキにブレイクしてる？

ボンゴレリングとアルコバレーノも、まさか一人ずつ増えるとか？

「南…？」

「あ、いや、オレのせいじゃ…」

「…何の話してるのよ…」

「あ…」

ダメだ…

オレはもう傍観者に専念できそうもない…

「それで、そのリング持ってくれる？」

「……」

きっと、拒否することも出来るだろう

でも、拒否したら１０年後では誰が持つ？

きっと白蘭が新しい仲間見つけて『真７弔花』とかになる

敵は少ない方がいいだろう

「…イヤなら、遠慮なく言っていいわよ？」

何も言わないオレに、アリアさんが言った

「いや、オレでいいならオレが預かってる」

確かに面倒くさがりなオレだけど、

仲間を…大切な人を守るためなら何でもする

「…ありがとう

それと、そのリングは『預けた』ワケじゃなくて『あげた』のよ？」

…？

貰ったの？

「…オレが、貰っちゃっていいのか？」

「もちろん

それに南以外は誰も石を透明に出来ないんだもの」

そういえば…

透明って属性何だろ…

「じゃあ貰うけど、リングの説明してくんね？」

「あら、何か知ってるって気づいたの？」

「そりゃ、透明になることを知ってる時点で何か知ってるの分かるし…」

「そうね

まず、そのリング…『マーレリング』には、他の二つの物と深く関わりがある

それは、時が経てば分かると思うわ」

…今言いたくないってことか…

でも、十中八九『ボンゴレリング』と『アルコバレーノのおしゃぶ

り』だよな…

「そして、その三つには、属性というモノがあるの
リングの数…つまり八つあって、それは「待って！！」
南…？」

オレは途中で聞くのをやめた

何か、聞いたらズルい気がした

「時が来れば分かるなら、それまで知らなくていいや
その方が面白いし！」

「…ふふふっ

南がそれでいいなら言わないわ

……最後に、少しだけ言っておくわ」

一瞬でその場が静まり返る

「きっと、南はこれから大変な目に合うわ…

そのリングを巡って、さらに大変な目に合うかもしれない…

それでも…南ならリングは手放さないし、越えられることだと思う

だから、一言だけ…」

一度、間をおく…

「無茶は、しないでね…」

！！！！

思っていることを突かれた

「南はきっと、仲間のためなら自分がどうなろうと戦うわよね？

でも、助けられた側は、南が傷ついたら悲しむわ…

それは、忘れちゃダメだからね…」

「……オレは、それでも仲間を守るためなら何でもする…」

これは、絶対に引けないことだ…

「南…」

「だから…

圧勝できる位強くなる！それなら誰も悲しまないだろ！？」

オレはまだまだ強くなる！！

「…呆れたわ…

でも、それが南ね…」

「おう！！

って時間！ユニに会えなくなる！」

ユニと約束したんだよ～！

「急ぎましょう！」

そして、アリアさん達が日本から帰る時と同じ様に慌ただしくしてイタリアを後にした

首に、三つのリングを付けて――――――――――

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３１　嵐に相談される！

お正月も過ぎ、しばらく経った頃の夕方

「…なんかそろそろ問題起こりそうな気がする…」

南は平穏っぷりに違和感が感じた

本来いないハズの者が２人もいて、原作の主人公である沢田達と最近関わりがないからだ

いや、嬉しいよ？

超嬉しい…

でも、なんかな…

「まっ、考えても無駄なのは分かってるんだ！
そだ！マーレリングに炎灯してみよ」

…でも、それをすると炎の色分かっちゃうよな…？

でも、どうせ透明だろ！

リングの石がそうだったし…

よし、炎を灯そう

右手の中指に付ける

「炎を灯すには、覚悟だよな～

そりゃ、アリアさんに言った通り…

仲間を守る！！」

ボゥッ！！！！

「やべっ！炎デカ過ぎ！！」

落ち着け…落ち着け…

すると炎は小さくなった

「やっぱ透明か…

でも炎の大きさは分かるんだよな…」

炎の色は、透明

だけど、大きさは分かる

まぁ、分からないと大変だからな…

「一旦炎消して、やり直しだな」

初っ端から炎がデカいと、ムダに流してるだけだ

覚悟…

試しに、恭弥みたいに『ムカつき』でやってみるか！

白蘭に対してでいっか…

アイツ、ユニに劇薬投与して…

イライライライラ

ボワァァッ！！！！

「ヤバい！さっきよりヒドい！」

とりあえず炎を消す

…オレって、ムカつきで炎デカくなるのかよ…

イヤイヤ、ムカつきの奥には『絶対倒す』って覚悟があるんだ、きっと…

でも、もう炎出すのは辞めよ…

そう思った時――――――

プルルルルルル…

「電話…？隼人じゃん」

ピッ

「もしもーし　どうかしたか？」

『オレさ…

やっぱ一人が向いてんのかな…』

…まさか、『獄寺強化プログラム』の日？

「何でそう思うんだよ
ってか何でオレに聞くんだ？」

『周りから見たらどうなんだって思ったんだよ…
今日、リボーンさんが直接指導してくれたんだ
でも上手く行かなくて１０代目にまで迷惑かけて…』

ま、原作通りに進んでるってことか…

オレに相談するのは原作ブレイクになるからイヤだったけど…

「それで理由は全部か？」

『…そんで、山本が来た時に…』

言いたくないよな…

「沢田が頼りにしてるのが、隼人より山本だって思ったのか？」

『…あぁ』

隼人って馬鹿だな…

「確かに、そうかもしれねぇな…

でも沢田は少なくとも隼人のことを、大切な友達だとは思ってるだろ」

『…！』

頼ってる、なんて無責任なこと、オレは言えない

でも、沢田が隼人のことを大切な友達だと思ってるのは言える

『南から見て…そう思えるか…？』

「あぁ　それに隼人がいないと沢田も寂しいと思うぜ？
どうせ今、沢田のとこから出てきたんだろ？
早く行きな」

『南…ありがとな！』

プツ

電話が切れた

「あーぁ、原作ブレイクまたしちまったよ…
でも連絡あったのは隼人からだし、仕方ねぇか…」

これ以上ブレイクしないよう、頑張ろう

『南！』

脳内に響く声

「…出てこいよ…」

パッと出てきたのは漣

「今日は何の用？」

「出来たんだよ！千本とか、こないだ言ってた物が！」

そう言って色々出す

千本、毒付き千本、千本を入れるケース、手袋、変装用洋服

「早かったな」

「まあまあ頑張ったからなっ！」

黒曜編に間に合ったからノルマクリアだ

「服って、顔隠れるよな？」

「あぁ

マーモンの顔の隠し方と同じだからな」

服は、パーカーのフードがデカくなっている

まぁこれなら平気だろう

「毒付き千本は、痺れと、本当の毒と2タイプある
両方の解毒剤は千本入れるポーチにあるからな」

それで毒付き千本が黄色と紫だったのか…

ポーチを開けると、確かに解毒剤が二瓶

黄色のフタと、紫のフタ

「黄色が痺れだよな？」

「あぁ

痺れは1日経てば解毒剤無しでも消えるが、毒は五時間で死ぬからな

気をつけて使え」

おお、五時間で死ぬ毒とは怖いなぁ

「分かった…」

ポーチに千本をしまう

毒と痺れ付き千本は、仕切りがあったからそこに入れた

…結構服も手袋も、デザインが良かった

漣には才能がありそうだから、パシりにさらに使える

「じゃあ明日から練習するか！

漣、飯係だから飯作れ！」

「えっ…

作るから！作るから睨まないでっ！」

漣の飯係は復活しました★

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３２　時期外れの入院！

……いよいよ、原作がズレ始めたようです

何があったのか、それは――――――――――――――――

「入院が今日なんだよ…」

そう

本来ならもう少し前の話

でも、今日が入院らしいです

何で知ってるのか？

…オレが恭弥に呼ばれたんだよ…

「ハァ…仕方ないか…」

見舞いに行かなかったら後でオレが逝くことになりそうだからな…

バイクに乗り、並盛病院へ向かった

ガラガラッ

「恭弥、来たから貸し1な」

「ワォ　僕がそんな事を聞くとでも？」

「…そうだったな…

見舞いは無いからな」

「別に期待してなかったからいいよ」

ムッ…

そう言われると買って来ようかと思うが、そんな面倒なことはしない

「…そう言われたら買ってくるのが普通だよ」

「欲しいなら欲しいって言えよ～

オレはそうじゃなきゃ買わないからな」

オレの面倒くさがりっぷりをナメるなよ！！

「じゃあ買ってきて

今果物食べたいから果物」

「へ？」

「だから、果物買ってきて」

恭弥が…

「素直になった…！！」

「…何？」

「イヤ、何でもない！
買ってくるよ」

パイナップルも忘れずにな★

どうせなら骸戦が終わってからだったら良かったのに…

嫌がらせの意味が分かるから

「早くしてね」

「へいへい」

廊下を歩いていると、山本が見えた

…関わらないでいこう…

「お？風間？」

…バレちゃった～

アハハハハハ

「…だったら何だよ…」

「ハハッ　今ツナが入院しちまっててさ
ん？もしかして風間もツナの見舞いか？」

…誰も理由聞いてねぇし

「何でオレが沢田の見舞いしなきゃいけねンだよ」

「そんな事言うなって
ほら、行こうぜ」

「行かねーよ」

ってか行きたくないし

アイツがいる可能性もあるから

「まーまー」

…コイツ、ノーテンキ過ぎて殴りたい…

「やれやれ　トラブルですか？」

…まさか…

「初めまして、若き風間さん」

「風間知り合いか？

オレは先にツナんとこ行ってるな」

…山本…

何でそんなに馬鹿なんだよ…

「オマエ、誰？」

知らないフリをしよう

「風間さん、１０年後のランボです…」

いや、知ってるけど…

「オレ、ランボって名前のヤツ知らねぇぜ？」

「（ガーン…）

よ…よくボンゴレ…沢田綱吉と一緒にいるんですが…」

「あのアホ牛か？
死ぬほどウザい」

「（グサグサッ）
そ…そう、です…
では若きボンゴレに会いに行くので…失礼します…」

ヨロヨロと歩きながら行った

オレ、そんなヒドい事言ったか？

ま、いっか

「あ、恭弥のお見舞い」

急いで買いに行った

「恭弥、買ってきたぜ！！」

ガラッと開けて言う

「ワォ　意外と早かったね」

「バイクで行ったからな

ほら、コレ」

渡したのは、一般的なお見舞いの果物

パイナップルは忘れてない

ああ、恭弥の足元に何人か倒れているけど気にしないぜ？

オレは

「じゃあ切って」

「は？そんくらい自分でやれよ」

「僕は病人なんだから」

オレが言い返そうとした時、病室のドアが開いた

「やあ」

「ヒバリさん！！
風間さんも～！？」

沢田だ

「ウルサ…」

「ごっごめんなさい！
ヒバリさんは何で病院にいるんですか？」

「カゼをこじらせてね
退屈しのぎにゲームをしてたんだが、みんな弱くて…」

「んな――――！！！」

それが普通の反応なんだろうな

沢田にとっては
（普通の人の反応です）

「相部屋になった人にはゲームに参加してもらってるんだよ

ルールは簡単だ

僕が寝ている間に物音をたてたら

咬み殺す」

「一方的――――っ!!?

ってか病院じゃありえない状況だ――――――――――!!!」

ボコッ

「ごふっ」

「だから、ウルサい」

あまりにウルサいから、腹パンチ一発したんだ

「あ、あの僕

もうすっかりよくなったんで、たっ…退院します！！」

「だめだよ医師の許可がなくちゃ」

「！！？」

「やあ院長」

「え〝いんちょー！！？」

…やっぱ沢田はウザい

ウルサいのが分からないのか？

「こうして安心して病院を運営できるのもヒバリ君と風間さんのおかげ

生贄でもなんでもなんなりとお申しつけください」

ペコーッ

…オレって何かした？

あぁ、よく病院の周りにいる不良をボコってるからか…

「じゃあそろそろ寝るよ

南は皮剥いておいてね

ちなみに僕は葉が落ちる音でも目を覚ますから」

「なっ」

「ハァ…分かったよ」

「では失礼します」

「えっ　うそ!!　ゲームスタート!?」

恭弥が寝たらスタートだぜ?

そしてまたドアが開く

ガキが二人現れた

消えろよ…

「ガハ…んむむ」

…恭弥起きないよな…？

オレも咬み殺すとか言われないよな…？

沢田がアホ牛を連れて出て行った

…ヤケにイーピンと目が合うんだけど…

イーピンって、恭弥に惚れるハズだよな…？

しかも、外見男だけど女だし…

ドコォン…

…恭弥…起きるなよ…

ん？沢田の声が…

「ヒバリさんか風間さんに惚れてる――――！！」

…オレを選択肢に入れるな

ドオォン…

パラパラ

「……」

「あ、恭弥起きた？

沢田が何か爆破させたらしい」

「じゃあ約束通り咬み殺してあげないとね」

…オレはセーフだな

「わっヒバリさん起きちゃったよ――――――！！

ぎゃ――――――！！！」

ガツン

「ふぁ〜あ…
沢田綱吉もダメだったね
南、できた？」
「おう、ホレ」
確実にパイナップルを食わせるために、頑張ってパイナップルを剥いた
…廊下でぶっ倒れている沢田は無視でいっか
「じゃあ帰っていいか？」
ずっと病院にいるのもイヤだし

「うん」

「じゃな

早く退院しろよ」

「君に言われなくても早く退院するよ」

そして家に帰った

恭弥が退院して大変な事件が起こる事を知らずに――――――――――

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３３　命を狙われる！

恭弥が昨日退院した

そして、風紀委員で今日の朝校門に集まり、祝福しようと計画をしていた

あぁ、オレ以外の風紀委員は実行したみたいだ

でもな、恭弥は群れが嫌いなんだぜ？

案の定、ボコられてた

オレは屋上からその様子を見た

カワイソー

でも、自業自得だぜ？

そして恭弥が行くであろう、応接室に向かった

「退院おめでとーう」

「見事な棒読みだね」

「ま、気にすんなよっ！」

「ハァ…」

あ～、今日から大変な日々が…

ドカァァン…

「「……」」

応接室の前の廊下が爆発★

「あのさ…さっきもオレの近くで爆発音したんだよな…

命狙われてンのかな…」

屋上の入り口で爆発したし…

「ワォ　良かったね」

「アホ！！良くないわ！」

「でも南なら返り討ちにできるでしょ」

「まぁ…」

ここでこの話は終わった

数日後の応接室――――――――

「で、何かわかった？」

草壁さんが来ている

ん？オレはソファーでゴロゴロしてるぜ？

「はい……

爆発物のくわしい正体は不明です

強い異臭以外、残っているものがほとんどないためで……」

「ふぅん……」

「爆発物をしかけた犯人についても、いまのところ手がかりはつかめていません

その手段や動機についても不明です」

「不明ばかりだね

……報告は、それだけ？」

「いえ

あと、もう一つだけ」

「何？」

「実は……これは確実とは言い切れないのですが……

爆発がおこった場所に、共通点と思われるものがあります」

最近、並中で謎の連続爆発事件が起こっていたのだ

まるで…いや、確実に『隠し弾２　Ｘ－炎』の『恋するしっぽ』だ

ただ、違う点が一つ

「南さん、爆発が全てあなたの近くで起こっているんです」

「は？オレ！？」

そう、恭弥の近くではなくオレの近くになっている

…でもな、オレ、小説は詳しく覚えてないんだよ…

でも、この爆発事件は恭弥の近くで起こってたのは覚えてる

…なぜオレになった

「はい…もちろん、確実とは言えませんが」

「なんだ、南のせいだったんだ」

「オレのせいでは無い！」

本来ならオマエのせいだ！

とは言えない

「報告は以上です

失礼しました」

草壁さんがどこかに行った

「…オレ、なんで狙われてるんだろ…」

「知らないよ

まぁ、このままだと並中が破壊されるから僕も手伝ってあげるよ」

「マジで!?サンキュー!」

これでオレが死ぬ確率が低くなったというワケだなっ!!

よしよし…

「じゃ、オレは教室行くわ

じゃな」

「一応気をつけなよ」

「分かってる！」

…さすがに教室まで来ないだろう…

ガラガラ～

ま、普通に授業中だ

ドカァァン…

「…またかよ…」

今度は教室前の廊下

「南、またってどーゆーことだよ!?」

隼人が食いつく

「最近並中で爆発音が多いだろ?

それが全部オレの周りで起きてるんだ…

あ、草壁さん」

草壁さんが早速来た

「大丈夫でしたか？」

「まぁな…

ってか何でオレが狙われなきゃいけねぇんだよ…」

あぁ、しばらく家にこもろっかな…

でもそれは辞めよ

「我々が事件は解明致しますので、ご安心を」

「あぁ

絶対犯人ボコる…」

シーン…

オレが殺気を放ったせいで教室中が静まり返った

「んじゃ、ここの処理は頼んだぜ？」

「はい」

草壁さんに任せて授業という名のお昼寝タイムだ

あぁ、平穏な毎日が欲しい…

しかしその願いは叶わず、ある日――――――――――

「まっさかココまでやるとはな…」

オレは応接室前の廊下に、ガスマスクをして立っていた

「応接室のオレ専用ソファーの前に、ポイズンクッキング、か…」

確かにアレは、ビアンキのポイズンクッキングと同じだ

だが、ビアンキのと見た目が少し違う気がする

「南さん！」

「お、草壁さん」

草壁がこっちに走ってくる

「ご無事でしたか…」

「まぁな…

オレの代わりに何人かヤられたけど」

「爆弾に引き続き毒とは…」

ポイズンクッキングを使うってことは、ビアンキの関係者か…？

「この事を委員長には…」

「恭弥にはもう連絡した

アイツ、殺す気マンマンだったから、この件に恭弥は首出さないように言っておいた」

「な!?い、いいんですか!?」

「何が?ってかそうしないとオレが殺される…」

こないだも『君のせいだよね…』とか言って殴られそうになったもちろんトンファーで…

「そう、ですか…

南さん、この毒で一つ分かりました」

「あぁ、オレも分かってる

狙いは…確実にオレだ」

あ～ぁ…

本来ならこの話も傍観してるハズだったのにな～

なぜ狙われる身に…

「犯人分かったら…

絶対に殺してやる!!

オレの楽しみを奪いやがって!!!」

殺気溢れ出てきて、草壁さん達ビックリしてたね

アハハハハ…

さらに数日後――――――

「南さん！！」

屋上でのほほんと、してたら草壁さんが来た

「犯人分かったか？」

「それはまだですが、有力な情報を得ました」

「じゃあ言わなくていいや」

「へ？」

「オレも爆発の正体とか分かってるから
草壁さんは犯人探して来て」

どうせ、爆発はイーピンかアホ牛だ

毒はポイズンクッキングで間違いない

問題は、それを行った犯人

「分かりました
あと、この前も言いましたが…」

「さん付けは辞めてくれって？」

「はい…」

あ～、なんかこの前言われたんだよ…

『立場的にも南さんの方が上なので、さん付けはしないでください』
って

「分かった、分かった…

じゃあこれからはさん付け辞めるよ」

「ありがとうございます

それでは」

あー…

ますます傍観者から遠くなる～

でも気にしたら負けだ！

誰にも負けないけど、気にするな！

そして、眠くなったから昼寝をすることにした

ドオォン…

「また爆発か…

今回は遠いな…」

オレ狙いなハズだよな?

不思議だ…

「ま、応接室行こ」

オレは応接室が学校内で一番落ち着く場所になった

プルルルルルル…

「ん…もしもし？」

『南、草壁から聞いたんだけど、犯人は草食動物の所のイーピンって子供らしいよ

それで、草壁達は返り討ちに合ったらしい』

おー、恭弥か…

「ガキ？なんでオレがそんなヤツに狙われなきゃいけねぇんだよ…ってか返り討ちって…」

『知らないよ

それじゃあね』

プツッ

「おい…

ま、犯人はイーピンか…」

さて、どう殺してやろうか…

その時、屋上のドアが開いて、風紀委員が一人入ってきた

「南さん！犯人が…犯人が来ました！！」

もう！？

ま、構わないけどよ…

「オマエは消えてろ」

「はっハイィ！」

風紀委員はオレの言った通り、校舎内に消えた

コツ、コツ、と階段を上る音が聞こえる

ギィィ…

ドアが開く

「…何でオマエがここにいるんだ？

チビちゃん」

いたのは、イーピンではなくチビちゃんだった

「オレが犯人だからだぞ」

「嘘なのは分かってる
犯人は…」

ズガンッ

ガキィン！

チビちゃんが銃を撃ってきた

それを刀で防いだ

「何のつもりだ」

「犯人は、オレだ」

頑なに言う

「あのな…無駄だって言ってんだよ」

「理由だってあるぞ？

オマエが強いか見極めるためだ

弱いとマフィアになれねーからな」

「何言ってんだよ

それに、オレはマフィアになるつもりは無い」

「…」

ようやく黙ったか…

「オマエに何を言ってもダメなのは分かった
だから、このことはオレに貸し一つで終わりにしろ」

「……分かった
一つ聞かせろ
何でオマエはアイツを庇う」

すると、チビちゃんはオレに背を向け、帽子のつばを下げながら言った

「女にはやさしくするもんだ……
マフィアってのはな」

それだけ言って屋上から姿を消した

「…ってか、オレも一応女だけどな…」

ポツリ、と呟いた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３４　荒れた授業参観！

今日は授業参観の日

もうすぐ授業開始だ

一つ、心配事

オレは、風紀委員だ
（認めたくないけど）

そんなヤツがクラスにいて、原作通りに行くか？

行かないだろう

じゃあ、物語は少し変わる…？

変わるな…

でも、傍観し続けるぜ！！

でも、出来るなら原作通りがいい

…ムリだな…

まぁ、多少変わっても仕方ないな！

キーンコーンカーンコーン…

「今日は授業参観ということで
みんな緊張していることと思いますが、肩の力を抜いていつも通りの姿を見せればいい
先生もいつも通りミスするからな
よろしお願いします、父兄の皆様、風間さん」

オイ、早速原作ブレイクしてんじゃねェ

「じゃあこの問題
今日はあえて数学の得意でない生徒からあてていこうかな

山本いってみるか？」

よし、原作通りだな

「ちぇ　いきなりかよ――」

「いつもの汚名返上といってくれ」

…何気に教師、ヒドい言葉言ってるよな…

「んじゃ1（二分の一）／2あたりで」

「コラ！

またおまえは当てずっぽうで……ん？

いや…正解か」

「イエーイ　ラッキー！」

「いいぞ山本！！」

「いーぞ　武！！

今夜は大トロだ！！」

「ったく親父～っ」

あれだけで大トロってスゲー家族だな…

「ったく　くだらねーぜ」

「ご…獄寺…

私語はつつしまんか…」

「け」

あー、皆に不良って言われてるな～

ま、オレの態度はもっとヒドいぜ？

…聞きたい？

まず、隼人と同じく机の上に足を乗せる

そして、机の端にはお菓子

学校内の自販機で買ったジュースを飲んでいる

イヤホンを片耳に付け、曲を流す

今聞いてるのは、『ＤＩＶＥ　ＴＯ　ＷＯＲＬＤ』

ん？皆見て見ぬフリしてるからな！

「…そーだな　…あっとる

よし次！

山本も今日はがんばったし…山下！」

…アイツ、何て言った？

オレがイロイロ頭の中で言ってる内に、隼人のくだりは終わった

それはオレのせいだから何も言わない

あの女に当ててんじゃねぇよ！！

イライライライラ…

おっと、殺気は抑えよう…

「えっえと…

ええ～！？」

「落ち着いて考えろ

仕方ない…沢田！山下の代わりに問４！」

…アイツ馬鹿なんだな…

ってかあんな簡単な問題分かんないのかよ…

原作で隼人が沢田にジェスチャーしてたの忘れたか？

あ…今もしてるけど…

「９！？」

パコーンッ

「ぎゃっ」

お～、ぞうりが…

「あいた～」

「どーした沢田
何だ今の音は？」

「後ろから何かが…！
キモイおばちゃんいるー！！」

…チビちゃん、やっぱ来たか…

たまにオレに視線感じるんだよな…

「沢田どーした？」

「いや…あの…」

ここであのガキの声が

「はーい！！

１００兆万です」

「ランボ！！」

…死ね

ついでにオレを殺そうとしたイーピンもいるし…

「君は誰の弟君かな？

お父さんかお母さんは？」

「ランボさん九九もできるんだよ！

ニニンがニ！

キキンがキ！

ケケンがケ！！」

はい、意味不明な九九してんじゃねェよ

さっさと消えな

どっ、と笑い声が聞こえる

「見てて見てて」

フッ

キュッ

キュキュ――ッ

あーぁ、黒板消した…

でもな、それよりイラつくんだよ…！！

オレは原作ブレイクしても言うことにした

「…オイ…」

教室内の人間が、一部を除いて真っ青になる

「なななな何でしょう!!?」

教師が声を発する

「…このガキ達は何だ?

ウルセェんだよ…

さっさと追い出さないと、オレが消すぜ…」

「ごごごごごめんなさい！！」

教師がド・ゲ・ザ★

教師の土下座見るの二回目だな

根津の時と、今と

いきなり沢田が叫んだ

「あ――――！！

イーピンが照れて…もう残り三箇しか…」

うぉ！？

また爆発しそうじゃん！

沢田はイーピンを捕まえて廊下に出た

ドオォン…

外には大きな花火が…

「ふーギリギリセーフ…」

沢田が戻ってきた

「沢田、さっきのヤツとコイツはオマエの知り合いだよな…

どっかにやれ」

「えっオレ――――!?」

しかし沢田の親が出てくる

「すいません、うちの子達なんです」

「母さん!!」

あぁ、誤解が広まるな…

「ランボさん京子と遊んでく」

「コラ――――!!

ちょっと母さん、何でチビ達つれてきたんだよ！！」

「さあ…」

「さあって何だよ！？

わけわか…「私よ」！」

「隼人の授業参観についていきたいっていうから」

「ビアンキ！！！」

ビアンキ登場、つまり…

「うがっ　ふげ――――っ！！

がっ」

あぁ、ナームー

「先生大変です!!」

「獄寺君が倒れました!!」

ピクピクしてるし…

大丈夫か?

「なぁ!?」

「獄寺君大丈夫?」

「とにかく保健室に運ぼう」

「私もご一緒しますわ」

ここまではセーフ、だが…

「私もいくわ

隼人、私がついてるからしっかり」

「ふわっ」

さらに悪化したし…

「緊急事態ですので一時授業を中断します

父兄の方、そして風間さんにはご迷惑おかけしますが、各自自習

をして待っていてください」

そして、隼人、教師、ビアンキ、沢田母、アホ牛が消えた

教室はザワザワしている

「コラ――　静かに――

授業再開するぞー

はい注目～

オレが代打教師のリボ山だ」

よかった…

原作に戻ったよ…

「父兄の皆さんも、なにとぞヨロシク」

ま、姿は変だけど礼儀正しいから受け入れちゃうよな…

「えーっと

では、さっきの授業をひきついで、まずはこれ

わかる奴」

黒板にはぎっしりと問題が書かれた

ん～、答えは√5だなー

「ちなみにこの問題を解いた奴は、いいマフィアの就職口を紹介するぞ」

…言わないでおこう

「おい！

リボ山だかヘボ山だか知らねーけどよ、お前なんか相手にしてらんねーよ！！」

「私語はつつしまんか」

パアン

お～、チョーク粉砕したねぇ

「ちょっとあんた――――！！

うちのオサムちゃんに何するザマス――――！！」

「お母様落ちついてください」

パアン

母親もヤられたな～

「おい、じゃあ解いた奴は紹介ではなく入ってもらうぞ
風間、解け」

…こーなるの、なんか予想できたよ…

「イヤでーす
わっかりませーん」

「オマエなら余裕なハズだぞ

『帝王』に通ってたんだからな」

おい、バラしてんじゃねーよ

「おい、それなら風間さんはあの天才と同一人物か？」

「多分そうよ！さっすが風間さん！かっこいい～」

「サイン貰っとこうぜ！」

ひそひそウルサい…

「…黙れ」

ピキィッ

教室がオレの一言で静まった

「じゃあ風間、答えを言え」

「だから、オレは答える気ねぇし」

「分からないってことになるぞ」

「別にどうぞ?勉強なんかに誇りもプライドもないし」

「…チッ」

ようやく諦めたか…

「はいはーい!!

うんこ」

…消えろ

「ペケ」

ピューッ

ドガーン

「ぐぴゃあああっ!!」

アホ牛、リタイア

「アホ牛が…

この問題見たことが…あります」

「獄寺君!!」

「答は√5だ！！！」

「おまえはすでにマフィアだろ」

ピューン

ドガァン

「ぎゃあああっ！！！」

隼人、同じくリタイア

「獄寺君――――――！！！

ランボ！！獄寺君！！大丈夫？」

沢田が二人に駆け寄る

「おい！やりすぎだぞリボーン！！」

「カチンときたからなカチンと」

「おまえ、そんな理由でなあ！」

ここで、ヒソヒソと声がする

「やっぱり…」

「やっぱり沢田がらみだったんだ…」

他にも随分言ってるな…

「じゃー、どーにかしてやれ」

ズガン

「復活（リ・ボーン）！！死ぬ気でオレが教える！！

てめーらこれしきも分かんねーのか！！

ぶっとばすぞ！！」

見事な開き直りだこと

プルルルルルル…

電話…

「もしもしー？」

『仕事ができたから応接室来て』

…恭弥か…

「ヤだよ」

『君に拒否権はないよ』

「あのな、人間には拒否権くらいあるぞ？」

『そんなの関係ないよ』

「じゃ、逃げるわ」

プツッ

さて、鬼ごっこの…

ガラガラッ

「やぁ、逃げられると思ってるのかい？」

…来ちまったよ～

「逃げ道なら他にもあるさっ！「待て！！」

…何だよ…」

死ぬ気の沢田が話しかけてきた

「今はオレの授業中だ！」

「んなこと知るか

じゃな」

窓から逃げられるさ！

ヒュー

スタッ

着地成功★

こうして沢田と恭弥からの逃走を成功させましたとさ

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３５　バレンタインデー！

…今日は、前世で一番嫌いな出来事がある日です

それは、バレンタインデー…

あのさ、オレは一応女なんだよ…？

なのに、前世だと…

朝、下駄箱に溢れているチョコ

教室でも机の中にパンパンに入っているチョコ

机の上にも山になっているチョコ

手渡しで渡されるチョコ多数

…チョコは嫌いじゃないけど…

あ、貰ってないぜ？

ダンボールに入れさせた

パシりが一人いたからな

…この世界で、それが無いことを祈る

＊学校　昇降口＊

…オレのとこだけ、おかしいよね？

まず、何か溢れているんだ

…いわゆる、チョコ

仕方ない、風紀委員に処理させるか…

ん、一人発見

「おい」

「!?南先輩!?」

…オレは一年だぜ?

「あ、我々下っ端は先輩って呼ばさせていただいてるんです!

ところで、何かご用でしょうか？」

「デカいダンボール箱持って、ついてこい」

「？はい…」

そして数分後

「持って来ました！」

まあまあデカいな…

「んじゃ、こっち」

さっきの場所に戻る

「こっ…これは…？」

「…多分チョコだよ…

ここのが集め終わったら、教室までついてこいよ」

「はっ！！」

テキパキとチョコをダンボールに詰めていく

…優しいんだな…

チョコをキレイに積んでいくよ…

「これで全部です」

「おう

んじゃ、教室だ」

そして１－Ａに行く

ガラガラッ

「……やっぱな…」

机の上も中も周りもチョコまみれ

「さっさと頼む」

「はい！」

そしてまたキレーに積んでいく

あ、ダンボール箱が…

「すみません、新しく箱を持ってきます」

「…ついでに一箱目を応接室に運んどいて」

「はい」

…まさか、前世を超えるとは…

「南！」

隼人のヤツ、女子の群れから抜けるためにオレを呼んだな…？

「何だよ…」

「…スゲェ数だな…」

……

「前の学校ではどうだったんだ？」

「同じような状況…

でもこっちの方が多いな…」

「そっ、そうか…」

「あ、隼人いるか？」

オレいらねーし

「あのな…南に渡してるんだ

それにオレもいい」

「ハァ…

これだから２月１４日は嫌いだよ…」

「まぁ仕方ねぇよ…
おい、さっきのヤツ戻ってきたぜ」

さっきより大きいダンボール箱を持ってきた

「んじゃ、詰めるの再開して」

一人で詰めるのも大変だよな～

「あっ、あの…風間さん！」

後ろから声がした

「…何だよ」

「チョコ、貰ってください！」

…ぶっちゃけ、嫌だぜ？

でもチョコ詰めてる風紀委員が受け取って詰めていくんだ

「…オレは食わないと思うけどな」

「そっそれでもいいですっ！ありがとうございます！」

「私のもお願いします！」

「私のも！」

「私も！」

…オイ、詰めるなよ…

＊１０分後＊

ようやく手渡しで渡してくるヤツもいなくなった

ま、ダンボールに詰めただけだけどな

んで、机も元通り

詰めたチョコは、応接室に運ばせた

あぁ、応接室の前にもオレ宛のチョコがいっぱい置いてあったらしい

…チョコどうしよう…

オレいらねぇし…

キーンコーンカーンコーン…

お、今日も死ぬ気タイムが少しだけど見れるじゃねぇか！！

…でも、それどころじゃねェな

プルルルルルル…

！まずい！！

恭弥に怒られる！

「も…もしもし…」

でも出なきゃ書類整理やらされる

『応接室にあるダンボール箱は何？』

「…分かったよ…

今から応接室行く…」

『早くしてね』

プツッ

「…帰りたい…」

しぶしぶ応接室に行く

あぁ、途中でチョコを十数個渡されたけど、気にしないでおこう

「来たぜ～…」

応接室到着★

「ワォ　さらにチョコ貰ってくるんだね」

「…オレだって欲しくないよ…」

バレンタインデーなんて考えたヤツ誰だ！！

余計な日作りやがって！

「殺気が出てるよ」

「あ…」

知らないうちに殺気が出ていた

…頑張って制御しよう

「それで、食べるの？」

「…食いたくねぇな…」

それにさ、ムリだろ…

あ、今日凪と会う約束してるんだった！

チョコ作らなきゃな～

「ところでさ、僕にはないの？」

「は？何で恭弥にあげなきゃいけないんだよ」

「お世話になった人に渡すものでしょ」

…お世話になってないです

「え～…」

「ハァ…まぁいいよ
南が作るとも思わないから」

「作るには作るぜ？
今日もオレの親友に渡しに行くし！」

凪はオレの親友だしな！！

「じゃあ僕のも作っておいてね」

しまった！！

「いや「じゃあこのチョコを全部食べてね」
あーもー分かったよ！！」

全部食うなんてムリだし！

ついでに隼人の分も作るか…

「んじゃ、オレ一旦帰るな」

「うん」

チョコ一人分が三人分になったんだ

あぁ、買い物…メンドい…

何作ろっかな…

あ、漣にも作ったほうがいいのかな…

…材料が余ったらでいっか

ん〜…

凪にはカップサイズのガトーショコラだな

恭弥と隼人は…

買ったのでいっか

なら漣にも買ってやるか！

漣の金みたいなもんだし

そして、チョコを三個買う

生チョコが六個入った、普通のチョコ

凪にはガトーショコラを作った

本当はユニとアリアさんにもあげたいけど、仕方ない

作り終わったら、１４時になっていた

凪との待ち合わせは１６時

「先に学校で渡してくるか…」

＊学校＊

まずは応接室

「恭弥、ほい」

書類整理をしていたから机の上に置く

「…中身は？」

「毒なんて入れてないから…
店で買ったものだし…
毒入れて欲しかった？」

「バカじゃないの」

バカじゃないぞ、オレは

「ま、いーや
んじゃな」

「うん」

…さりげなく書類整理から逃げる作戦大成功★

やったぜ！

次は、隼人だな

「教室まで行くのダルいな～

この辺歩いて…いた！隼人！！」

超ラッキー♪

手間が省けた

「あ？南か　何だ？」

「ん、コレ

買った物だけどな～」

手作りは凪だけだし～

「…サンキュー…」

「ま、いいってことよ！

んじゃな」

「ああ」

家帰って、漣に渡してから凪に渡しに行こーっと

＊家＊

「漣ー」

『ん～？』

「…姿見せろよ」

すると漣が現れた

「何だ？」

「これやるよ」

「…これは…？」

「毒じゃねぇよ…

チョコ！買ったのだけどな」

ったく失礼だぜ

恭弥に引き続き漣まで毒って…

「よっしゃ！

…って、買ったってことは、元金はオレじゃん」

「文句でも？」

「ナイナイナイナイ！！

ありがとうございます！！」

ま、漣の金使って手間０ってのは否定しないけどよ…

「あ！

もう凪との待ち合わせ時間に３０分前だ！

じゃな、漣！」

凪はもう着いてるだろーな…

あー、漣のせいだ！

「凪！！」

待ち合わせの公園には凪がもういた

「ごめん…待たせたな…」

「ううん…私も、今…来たの…」

「悪ぃ…

早速だけど、これ！」

ガトーショコラが入った紙袋を渡す

「あり、がと…

私のも…」

凪から水色の包装紙で包まれた箱を貰う

「サンキュー！

あ、リングつけてくれてるんだな」

凪の首には前に買ったペアリング

もちろん、オレも付けてるぜ！

…マーレリングと、前世から付けてるリングも一緒だけど

「南も…つけて、くれてる…」

「そりゃ、『親友』だしな！」

「…うん…！」

凪と、こないだ『親友』にランクアップしたんだ！

ま、提案者はオレだけど…

「あ…南ごめん…

私、もう…帰らなきゃ…」

「ん！ありがとな！」

「うん…！南も、ありがとう…」

凪は小走りで帰った

…前は17時が門限だって言ってたよな…

早くなったのか？

「ま、いっか！

オレも帰ろっと」

家に帰ってから凪に貰ったのを開けると、トリュフとブラウニーが入ってた

ホワイトデーでお返ししようと決めた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３６　雪合戦を傍観する！

「あ～寒い…」

それもそのハズ

今日は雪が積もった

プルルルルルル…

「ん～？げっ…チビちゃんからだ…」

でも出ないと家にまで来そうな予感するから出る

「もしもし」

『オマエ、今日ヒマか？』

…ヒマですけどね～

「ヒマだとしたら何？」

『ツナ達と、雪合戦やんねーか？』

…あ～、原作であったな～

「それはパス」

『そうか…

まっ、オマエは来ないと思ってたからな』

…なら電話すんなっての…

「んじゃ、切るぞー」

『一つ聞かせろ』

……妙に低い声になったな…

『どうしてファミリーにそんなに入りたくないんだ？』

「別にー？

いつも言ってるけど、メンドいからじゃね？」

ってかそれ以外に理由ないし

『そうか…　わかった

じゃな』

プツッ

「あ～…

まだ諦めてないのか…」

さっさと諦めてくれればいいのに…

そしたら気が楽になるし？

プルルルルルル…

「また…って今度は恭弥か…」

ピッ

「もしもし？」

『仕事だよ』

…仕事をしろって言いたいんだよな…？

「えー…昨日ノルマはやっただろー？」

『やってないよ

見回り一時間でノルマだと思わないでくれる？』

「オレにとってはアレでノルマ達成だ！」

頑張ってるし～

オレにしては

『ともかく来てね
じゃないと咬み殺「分かったよ！」
…１０分以内だよ』

ブツッ

ツーツーツー…

「雪だからバイクは…
あ〝――――――！！！」

叫んでストレス発散…にはならないけど

「そうだ！傍観するために行こう！」

ちょっと元気になって行くことにした

＊学校＊

…原作やってるか？

「お、ちょうど沢田の到着か

…またあの女いるのかよ～…」

消えろ！！

…でも参加したくないから応接室でグチってるか…

ガラッ

「よっ」

「ピッタリ１０分だね」

「だって雪だから…」

と言いつつお菓子準備完了★

「ハァ…仕事する気ないでしょ」

「ん？当たり前じゃん」

だって仕事じゃなくて、傍観するために来たしー？

「まぁ今すぐじゃなくてもいいけど、これは今日のノルマだからね」

恭弥が用意したのは、書類、書類、書類…

「…どんくらいある？」

「自分で数えなよ」

…もうイヤだ…

傍観と言う名の現実逃避をしよう★

「書類はあとでやるから～」

さてさて、どうなってるかな？

もう三チームに別れた後か…

「あ～、またアイツいるよ…

は？何？ボンゴレチーム？

ウザイんだよ、キモイんだよ、死ね、そして消えろ」

恭弥にハッキリは聞こえないように、ボソボソと言う

「…何？」

恭弥が反応してしまった！

「あー、現実逃避してるだけだ
気にするな」

ま、ウソは言ってないし？

あー、存在がウザイ

マジ消えろ

おー、レオンＴＵＲＢＯになったか

あの『毒ボーボー』か『実弾入り雪玉』がアイツに当たってくれればいいのに…

よし、沢田めがけて投げたのがアイツに――――――――

チッ

雪の防御壁で守られたか…

「ふざけんなよな

アイツはいなくていい存在なんだから消えちまえよ

ランキングしてみてほしいね、『偽善者ランキング』

きっとぶっちぎりの一位だぜ？」

またグチグチ言う

「ハァ…
せっかくの雪だし外に行くよ」

「は？何でさ」

ん？行かないと原作通りにならないか…

「いいから行くよ」

「へいへい…」

また寒いところに行かなきゃいけないのか…

あーあ…

しかも原作途中だし…

アイツ死んだかな?

死んでくれれば嬉しいんだけどな〜

あーもう外だ…

ま、外行けば分かるか

「…南」

「んー？

何だありゃ…カメ？」

グラウンドにはデカいカメ…

あ、エンツィオか…

「行くよ」

「分かってるよ…」

恭弥は小走りで行った

ま、小走りってほどでもないか？

「いでで～～～っ」

コケるとか、ダサ。

「何これ？

あとそのデカいカメ」

「ヒバリさん！！

いや、あの」

オレはここに…

「せっかくの雪だ　雪合戦でもしようかとね
といっても群れる標的に一方的にぶつけるんだけど
…南、出てきなよ」

…原作には混じりたくないけど、出て行かなきゃダメだな…

「なー、やっぱ寒いから戻ろうぜ～？」

「って風間さん――――！！？」

ん？ちょっとイラっとしたよ？

「何だよ…オレが学校に来てたらダメなのかよ…」

「あ、いえ！そんなことは…」

「ここで会ったのも何かの縁だ
今日は君を標的にしようかな」

ん、原作に戻った

そーいやアイツは…

…何でだよ…

何で立っている…？

何もしないで…

助けたいんだろ…？

なら何で助けない…？

日常編の話なら、大丈夫だって…？

確かに、マンガだからな…

でも、ここは現実で、イレギュラーが二人もいる

死ぬ可能性だって充分にあるんだぜ…？

ふざけんなよ…

次にこんな状態があったら、殺してやるよ…

「ひいっ！」

あ、原作進んでた…

「と思ったけど、風紀委員の仕事の途中だ

またね　…南」

あちゃー、ちょっとセリフが変わったか…

「はいはい…」

「た…助かったー…

ん？無意識に何かをタテに…

うそ――――！！

イーピン風間さんに惚れてるんだった――――！！

ああ！爆発する！！あと二箇しか――――！

あっ」

一人で随分言ったな…

あ、オレは避難済

ドォオォォォ…

…何でオレは助かったんだろう?

ってかイーピンオレに惚れてるって…

あ、アイツも爆発でどっか行ったな!!

よし、このまま消えちまえ!!

……書類から逃げよ★

「恭弥、オレ予定があったから帰るな！

んじゃ！」

「…やっぱり逃げ足速いね…」

その通り！！

オレは書類から逃げる時、ものすごく足が速くなるのだ！

これが、メンドクサイ精神の威力！！

…しかし、次の日にこってりやらされました

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３７　花見をする！

季節は春

もうすぐ進級か…

んで、この世界に来て一年がもうすぐ経つ

「早いなー

一年って」

「そういえば南が風紀委員になってもうすぐ一年だね」

…空耳じゃないぜ？

今、恭弥と花見に来てるんだよ

「確かにそっちも一年経つな…」

「そっち、って他に何があるの？」

「えっ…

並盛に来てから？」

ウソじゃないよな！

うん！

「ふぅん…」

…大して興味ナシですか

ま、いいけどよ…

花見といえば、原作でもあるよな…

傍観できないかな～

…傍観どころじゃなくなりそうだけど

「やっぱ人がいないってのはいいなー
ウルサいの嫌いだし…」

「他の風紀委員に追い払わせてるからね」

「……ま、そいつはドンマイだな」

だって、後で隼人にボコられるし…

「あっちの桜の方が綺麗みたいだから行くよ」

「あいあいさー」

これで原作出てくるかな～♪

あー、凪とも花見したいな…

あとで誘ってみよ！

「ん？アレって沢田達じゃね？」

知らないフリをし、前を指差す

「そうみたいだね

追い払わせてた風紀委員もヤられたみたいだし、行くよ」

あー、オレの返事を聞かずに先行かないでくれよ…

でもこれで原作見れるな♪

アイツいないし♪

「何やら騒がしいと思えば君達か」

「ヒバリさん！！

それに、風間さん！

あ、この人風紀委員だったんだ！」

でも弱者は風紀委員にいらないぜ

「僕は群れる人間を見ずに桜を楽しみたいからね

彼に追い払って貰っていたんだ

でも君は役に立たないね

あとはいいよ、自分でやるから」

「い…委員長」

さよ～なら～♪

「弱虫は土にかえれよ」

ガッ

がはっ

「！　仲間を」

「見てのとおり僕は人の上に立つのが苦手なようでね

屍の上に立っている方が落ちつくよ」

確かにコイツはしょっちゅう、風紀委員をボコってるしな…

「いやー絶景！絶景！

花見ってのはいいね――♪

っか～～やだね――――男ばっかっ！」

「Ｄｒ．シャマル！」

原作ブレイクするなよ…？

「まだいやがったのか！！

このやぶ医者ヘンタイ！スケコマシ！

それに、一応でも南は女だぜ」

うん、一応でいいよ！

でも言わなくてもよかったよ！

「オレが呼んだんだ」

「リボーンも！」

「南って、その子か？

…モテそうだな～」

「…キモイ、ウザイ、ウルサイ、失せろ、死ね、消えろ」

「（グサグサッ）

す…スミマセン…」

オレの毒舌っぷりナメんなよ！

「赤ん坊、会えて嬉しいよ」

「オレ達も花見がしてーんだ
どーだヒバリ、花見の場所をかけてツナが勝負すると言ってるぞ」

「なっなんでオレの名前出してんだよー！！」

…ま、ドンマイ…

同情もしないけど

「ゲーム…

いいよ、どーせ皆つぶすつもりだったしね」

つぶすって…

「じゃあ君達三人とそれぞれサシで勝負しよう
お互いヒザをついたら負けだ」

「ええ！それってケンカ！？」

「沢田、ウルサイ
ヒザついたら負け、恭弥の割には優しいぞ？」

気絶したらじゃないだけ良かったじゃないか！

「えっ！？あ、スミマセン！！」

原作とちょっと変わったけど、気にするな

そして、皆…沢田を除いた人達がやる気になった

ん？オレ？

だって、『恭弥ＶＳその他』だろ？

なら別に参加する意味ないしー

「のへ――――――！！！

ふぎゃ――っ！！」

あ、いつの間にかシャマルという名の変態ジジィが消えた

次は隼人だ

「てめーだけはぶっとばす！！」

「いつもまっすぐだね

わかりやすい」

恭弥が攻撃をするが、隼人は避け、ボムを放つ

新技、ボムスプレッズ

「果てな」

ドガアン

「え〝え〝っ

まじでヒバリさんを！！」

「あのスピードと柔軟性は強化プログラムで身につけたものだぞ」

…まだヤられてないのに、呑気なこった

「で…？

続きはないの？」

もちろん原作通りに進んでるそ？

そりゃあ、イレギュラーのアイツとオレは関わってないからな！

ん？今オレがいるだろって？

…いるだけの存在になってるからな！

だからこのまま関わらないのさ！

「南、君も参加してるからね」

…前言撤回

「なぜでしょうか？委員長？」

「まだ君の戦闘を見たことがないからね

山本武は譲ってあげるよ」

…ブレイクキタ――――――――――（。∀。）！！

「遠慮す「そうだな。山本、風間と戦え」

…オイ、何乗り気なんだチビちゃん…」

ふざけるんじゃない

オレは優雅に傍観がしたいんだ

今もこうして桜の木の上に乗り、寝転がっているんだ

「早くしないと書類整理してもらうよ」

「…わかったよ！

１０秒で終わらせる」

「ハハッ　言ってくれるな」

うーん、アイツは剣使うし…

「じゃあスタート」

オレが言った途端、先制攻撃を仕掛けてくる

…甘いな

キィィン

右手で刀を持ち、防御する

「なっ…オマエも刀かよ!?」

「誰も素手で戦うなんて言ってねぇし

ま、これで終わりだけどな」

何も持ってない左手で腹パンチを一発★

「うぐっ」

山本は膝をつく

「オイオイ…まだ一割程度の力にしたのに…

弱いなー」

見栄を張っている訳じゃなく、ホントに一割

「風間…強、過ぎ…だぜ……ぐっ…」

山本はまだ痛そうにしてる

「ん、恭弥！これで終わったぜ」

「そうだね

じゃあ最後だ、沢田綱吉」

恭弥が軽く殺気を放つ

…コイツの場合、『早く戦いがしたくて、ウズウズして溢れた殺気』って感じだよなー

ズガン

ん、最終決着だ

沢田はレオンをはたきにして、恭弥のトンファーと戦う

しかし、それは長くは続かない

シュウウウウッ

「い　ぃ！？」

死ぬ気タイムが切れた

しかし恭弥は構わずに攻撃をしようとする

――――――――――が

どさっ

恭弥が膝をついた

「奴の仕業だぞ」

「おーいて

ハンサムフェイスに「どこがだよ、オッサン」

……」

原作ブレイクしたのは気にするな！

あまりのキモさに耐えられなくなったんだ！

正当防衛、正当防衛…

オッサンは半泣き状態の中、桜クラ病の説明をする

「約束は約束だ

せいぜい桜を楽しむがいいさ」

恭弥がフラフラだけど立ち上がった

「んじゃ恭弥、頑張って帰ってく「書類整理」

…分かりましたよ」

つまり、肩を貸せ、ということだ

「ちょっと待ってくれよー
タクシー呼ぶから」

「「「「タクシー！？」」」」

沢田・隼人・山本・オッサンの声だ

皆何に驚いているんだ？

タクシーくらい呼ぶだろ

ピッピッ

「もしもしー？
今すぐ来い、じゃな」
ブチッ
「…南、場所言ってないじゃねぇか…」
「ん？何言ってんだ隼人
そんなのはタクシー全部で探せば…来たぞ」
キキィッ
「お待たせ致しました、風間さん！
どうぞお乗りください！」
「ん、じゃな！」

そして恭弥とオレはタクシーに乗り、並中に行った

残された人達は、オレに対する謎が増えたとか、そうでないとか

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３８　進級する！

とうとう二年に進級する

クラス決めるの、オレだったんだよ…

なんか、今までは恭弥がやってた…

ま、草壁に任せてたらしいけど、形では恭弥が決めてたらしい

んで、それがオレになったってワケだ…

でも二年のだけ

まず、原作通りにクラスを分ける

オレも傍観するためにA組

アイツはB組にしたハズなんだけど…

なぜか発表ではA組になっていた

…何で？

まー、いつ何するか分かるしいっか…

…良くないけど…

んで、今は応接室にいる

「もうすぐ始まるよ」

「んー、じゃあな」

ホントは応接室でグダグダしたいが、嘆き弾が見たいからな

キーンコーンカーンコーン

「やべっ　見逃すのはしたくない！」

でも走らずにゆっくり教室に行く

「あ…担任って今日は代理の…
ロンシャンってウルサいしサボればいっか！」

…オレは、傍観より静かなのがいいんだよ！！

屋上で昼寝

「しっかし、もう一年経つのかー
大分慣れてきたなー」

この世界に

あー夏休みが過ぎれば黒曜か…

黒曜が過ぎれば、リング争奪戦

参加するにせよ、しないにせよ、その次の未来編には関わることになりそうだ

「リング争奪戦、か…」

小さな声で呟いた

…いつの間にか寝てしまったようだ

空は赤くなっている

つまり、夕方だ

「…ドンマイだな★」

これくらい、オレにはどうってことない

別に何も問題ないしな

時間を確認しようと、携帯を開く

「あれ、メールが一件…

恭弥か……内容はっと…」

見なければ良かったと、心底思った

『風紀委員になってもうすぐ一年だから、咬み殺し合いをする』

…ふざけるんじゃないっ

そんなこと…

「イーヤーだぁぁぁぁぁ！！！！」

しかしこの叫び声で見つかり、二回目となる屋上からの飛び降りした

百点満点の着地だったことだけ伝えておこう

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３８　進級する！（後書き）

最近の中では異常に短い…

何かもう手付かずなんです…

明日はジャンプですよ！？

リボーンの表紙＆Ｃカラーですよ！？

人気投票もあるらしいんです！

…楽しみなんです…

あー、明日の学校サボろうかなー

課題テストだしー

ふむ。やはり楽しみですね

それでは★

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３９　もう一人の霧と会う！

昨日、二年になった風間南だ！

…嬉しいことなんて何もなかった

違うクラスにしたハズのアイツがいたし…

それに、帰りには恭弥に殺されそうになる始末

…この状況を嬉しいって言うなんて、どんだけのＭだよ…

はっ！！

M・Mって名前の奴が黒曜の中にいたよな?

アイツはMなのか?

…会ったらイジメてやろう♪

まぁ、そんなこんなで今日は進級2日目だ

「書類終わった?」

…早速仕事をさせられている――――――――

「やってない」

――――――ハズはないだろう

オレを誰だと思ってるんだ？

仕事？

そんなモノ、下っ端にやらしとけ

「…じゃあ咬み殺「さらばっ！」」

ハァ…」

闘争…いやいや、逃走を成功させた

まぁ時間的には昼、つまり学校は終わってるんだ

今日は午前授業だったしな

んで、応接室で寝て、お菓子食べて、今に至るわけだ

「…ちょっと黒曜の方に行ってみるか…」

ん？興味からだぜ？

いや～なんかさ、骸に会ってみたいじゃん？

多分もう脱獄してるし？

でもどこにいるかな～

黒曜ランド行きたくはないしー

「…ウロウロしてたら会えるかな…？」

そして結果

ウロウロする！

誰だ？バカにした奴は！！

じゃあ貴様ならどうするんだ！

あ、貴様って意外と敬語なんだぜ？

まぁ、今では敬語にならないがな

…疲労のせいか、頭が少しイかれてるんだ…

放っておいてくれ…

バイクで行くと目立つし…あ、学ランでも目立つか…

家に帰り、私服に着替える

黒曜は隣町だから時間かかるかな？

しっかり武器も装備し、家を出る

「友達になれたらなりたいな…

凪の恩人になる奴だしな！」

そして黒曜に行く

試しに黒曜中に来たが、骸どころか、ランチアや犬、千種の姿も見えない

まだ来てなかったかな…

「そこのオマエ！
邪魔だびょん！」

…後ろから聞き覚えのある声がした

仲良くはなりたいけどな…？

「…ウルセエなぁ…」

軽く殺気を放ちながら振り返る

「!?テメェ、何者だ!」

「何者?人に尋ねるときは、自分から名乗るものだぜ?」

「くっ…「犬、その人は誰?」

柿ピー!」

お、柿ピーこと柿本千種も出てきたよ~

「…まぁいいや…戦闘の意志は無さそうだし

オレは風間南!並盛中に通ってる」

「「並盛…!?」」

二人で同じリアクションとは…

「並盛が何か？」

「なっ何でもないびょん！」

慌てて言う犬

千種はと言うと…

「……」

うん、無言ですよ。

シカトされた気分がするんだけど、気にするな…

「ってかお前らも名乗れよ」

まぁ、知ってるんだけど…

聞いてないのに知ってたら警戒されるからな

「…犬、城島犬ら！」

「…めんどい…」

「犬と…

あのよ、オレも面倒事は大嫌いだけど、名乗るくらいはしてくれ…」

このままじゃ、めんどいって名前になるぜ…

「…柿本…」

あり？名字だけ？

「柿ピーの下の名前は千種だびょん！

千種って名前嫌ってるんら！」

あぁ、そういうことか…

「ふーん…まっヨロシクな！

犬！千種！」

「…並中生と仲良くするつもりはない…」

…ボンゴレがいるから、か…

「オイ柿ピ「いいよ、犬」

南？」

犬が話してる途中で遮った

「千種に…いや、千種と犬は並中の誰かが嫌い、とかだろ？

ま、オレも大っ嫌いな奴いるし？

だけど千種、一つだけ分かってくれよ？」

オレは千種の方を見る

「オレは『敵』ではない

…少なくとも、今はな…」

これから敵になる可能性だって十分にあるからな…

「…分かったよ」

「うし！んじゃ、またな！」

骸に会うのはムリそうだし、帰ることにした

「…柿ピー、南って何しに来たんだびょん？」

「…さあね…　帰るよ、犬」

二人は黒曜ヘルシーランドに帰った

「黒曜中の用事は済みましたか？」

二人の前には、ある人物が座っていた

「はい…」

「おや？犬、何かありましたか？」

その人は、犬の微妙な変化に気づいた

「骸様、並中生と接触しました」

犬の代わりに千種が口を開いた

「並中生…」

骸と呼ばれた人は、少し不機嫌な表情になる

「名前は、風間南です
…男か女か、微妙ですが」

「クフフ、そうですか…
ボンゴレの事を知ってそうでしたか？」

「…微妙、ですね…
ですが、色々な情報を知ってそうでしたので、もしかしたら…」

「…風間…南…？」

骸は何かを思い出したようだ

「む、骸様！？どうかしたのかびょん？」

「クフフ…

風間南というのは、世界一の天才と言われている彼女でしょうね

…」

どうやら、南のことは知っている様子

「南…　！！」

「千種は分かったようですね…

似ていましたか？」

「…顔は似て…いや、同一人物で間違いなさそうですが、インタビュー記事で分かる性格ではなさそうでした

…企業が勝手に書いた、と推測すれば１００％同一人物です」

「そうですか…

一度話してみるとしましょうかね…」

そして骸は一人黒曜ランドを出て、南の家に向かった

その頃、南は――――――――――

「あー…やってしまった…」

まさか、犬と千種と話すことになるとは…

ただ姿が見えるだけで良かったのに！！

…まぁ、骸に報告したら間接的に知り合いになるからいいけどよ…

「はぁ～…

そういえば、オレってケンカランキング何位なんだ？」

原作は、
一位・恭弥
二位・山本
三位・隼人
だったよな？

……

「どうやら、犬と千種は報告したみたいだな…」

オレは玄関に向かう

ガチャッ

「クフフ…　気配は消したつもりでしたが」

「それならまだまだだな
オマエ、犬と千種の仲間とかだろ？
入れよ」

中に入りやすいように場所を空ける

「それでは、少しお邪魔させていただくとしましょうか」

骸は玄関に入り、オレの後をついてリビングに入った

「まず、オマエはオレの事を知ってんだろ？
ならオマエには名乗ってもらおうか」

「そうですね…

僕は六道骸です

そして察しの通り、犬と千種は僕の仲間ですよ」

まだ、多少なりとも警戒してるな…

右目を隠している

「やっぱな…

んで、何用だ？」

「あの世界一の天才に会いたかっただけですよ…

そして、一つ質問を…ね…」

思わずため息が出た

どこかにオレの事を知らない人はいないのか

…いないな…

「どうかしましたか？」

「…別に…

いい加減に天才って言われるのも嫌になってきてね…」

「クフフフフ…　そうですか

それでは質問をさせていただきましょうか」

骸は右目を露わにする

「この『六』は、六つの冥界のことを表してます
六道輪廻という言葉をご存知で？」

「当たり前だろ？

地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天界道…

人は死ぬと生まれ変わって、その六つの冥界のいずれかへいくってヤツだろ」

ま、漣曰わく、本当にそうらしいけどな

「ほう…ここまで知っている人は初めてですね…」

「そうかー？

ってことは、そいつらは無能だな」

「クフフフフ…クハハハハハハ！！

あなたは本当に面白い方だ…

…ですが、僕の体には前世に六道すべての冥界を廻った記憶が刻まれていましてね…

それを聞いて、どう思いますか？」

…これか、聞きたいことってのは…

「別に？

可哀想ですねー、六回も死んだ記憶があって？

っつか前世の記憶があるから何だ？オレにもあるし？」

どんな死に方したのかねー

オレは巻き添えという最悪な死に方だけど

「やはり、あなたは面白い…

それにしても、前世の記憶がある人には初めて会いましたよ」

「ってか自分がそうじゃねぇか

オレの前の死に方は、巻き添え事故だったからな

今度はマトモな死に方したいものだね」

巻き添え?

神の手違い?

ふざけるんじゃないぜ…

「…並中に、僕らの敵がいるハズなのですが、あなたも共に戦いませんか？」

「ふぅん…

お前らだけじゃ、倒せないってか」

「そうではありませんよ

被害を極力小さくし、勝利をより確実にしたいだけです」

まぁ、結果的には負けるんだけどなー

「あっそ

でも断る

覚えとけよ、オレの一番嫌いな事は、偽善的な事と、面倒事だ」

「クフフ

分かりました　気が変わったらいつでも言ってください

それともう一つ」

…気は変わらないけどなー

「あなたが並盛中にいようが、僕達は攻撃をしかけますからね」

「どうぞ、お好きに

ま、オレに攻撃してきたら返り討ちにしてやるから覚悟しろよ」

「ええ…　あなたには適わないでしょうからね…

それでは、Ａｒｒｉｖｅｄｅｒｃｉ」

「ああ…またな、骸」

骸は霧となって消えた

「ま、友達にはなれたかな…」

一人、呟いた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４０　夏祭り！

早いもので、只今夏真っ盛りです

…去年も同じ事言ったような…？

まぁ、気にしないでくれ…

んで、今日は並盛神社で夏祭りがあるんだ！

去年は行かなかったからな～

アリアさん…

ユニ…

もうしばらく会ってないなぁ…

たまに電話するけど…

まぁ、また会えるだろ！

んで、話戻すけど、今日は夏祭り

…覚えてる？

夏祭りで、風紀委員がショバ代回収してるの…

もちろん、オレも同行することになった…

は？浴衣？

着るハズねぇし…

そんなモン着るくらいなら死んだ方がマシだな！

あ、オレにとってはな…

だから今日も私服…

学ランじゃなくてもいいって言われたんだ！！

やったぜ！

ズボンは、サルエルっていう名前の黒いゆったりしたズボン

白いタンクトップの上に、あちこち切れたデザインの半袖の黒Tシャツ

…腕章は付けなきゃダメだとよ…

泣きたくなる…

凪と来たかったのに…

最近、凪とも連絡だけで会わないんだよ…

ハァァ…

「いつまでブツブツ言ってるの
早く行くよ」

「あれ?声に出てたか?」

「小声でブツブツとね
それより早く行くよ」

オレは無言で神社に向かった

「…なぁ、確認するが、この人混みの中に入るのか？」

オレは人混みも大嫌いだ

ウルサいから

「まぁね

でも腕章付けてれば道ができるから大丈夫だよ」

「……あっそ」

さすが風紀委員だ

…恐ろしいなぁ、まったく

そして恭弥の言った通り、通ろうとするとド真ん中に道ができた

「あ、射的！」

オレは射的の方へ行った

もちろん、人は自然と避けている

「もうそこのショバ代は回収済みだよ」
「じゃなくて、遊ぶんだよ！」
おっちゃん！一回！」

一回分を受け取り、狙いを定める

「ここだな…」

そして指を引いた

ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、…

バタバタバタバタバタ

「うし！最高記録達成！」

１０個以上をまとめて落とした

周りは静かだ

「ふぅん、南って射的得意なんだ」

「まぁな！おっちゃん、早くしろよ！」

「…またか…　さっきの小僧といい、うあああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

叫びながらもしっかりつめる

あぁ、さっきチビちゃんが来てたのか

「南、早く行くよ」

「おう！

ってたこ焼き！」

近くにあるたこ焼きの屋台に向かう

しかし、これでは治まらず…

「かき氷！」

「りんご飴！」

「綿あめ！」

「焼きそば！」

「お好み焼き！」

「…まだ食べるの？」

そう、絶え間なく食べ続けた

「おう！次はチョコバナナだ！」

ちょうどチョコバナナの屋台がある

「チョコバナナ5本！」

「5万」

「ヒバリさんー！！？
それに風間さんまで！？」

「相変わらずウルセェなぁ…
チョコバナナ5本！」

全く、いつになったら静かになるのやら

あ、近くの屋台が一つつぶされたな

「さっさとチョコバナナよこせよ！」

「ったく…ほらよ！チョコバナナ5本！！」

隼人がベルギー製のチョコを塗って渡した

「ん！じゃあ恭弥！２０００円払っといてくれ！」

「…ハァ…」

右手に3個、左手に2個持って歩きだす

そして、夕方

恭弥は突然神社の階段を上る

あぁ、ひったくり犯の奴らか

そして、手前にいた奴を殴る

「うれしくて身震いするよ

うまそうな群れをみつけたと思ったら、追跡中のひったくり集団を大量捕獲」

ひゅーひゅー

さっすがヒバリさんですねー

「なぁ、恭弥…」

「…何？」

「コイツら、全部オレにくんね？」

「ワォ、珍しく殺る気になったのかい？」

「あぁ…」

オレの今の顔を見たら、誰もが驚くだろう

だって、ニッコリ笑っているから

「沢田！　お前も手ェ出すなよ…！チビちゃんもな！」

「もももももちろんです！！！」

「…わかったぞ
（これで風間の本気が見られればいいんだけどな）」

「中坊なんかに負けるかよ！！」

１０人くらいが襲いかかってきた

ボコッ、ドスッ、ドカッ、…

「ぐあっ…！！」

「うぐっ！」

「うぁあ！」

一気に倒れた

ただ皆の腹に一発ずついれただけだ

「あー、弱いなぁ…

さっさと来いよ…まとめて消すからよ…」

軽く挑発する

「くっ…一斉に攻撃しちまえ！」

「「「「「うおおおおぉぉ！！！」」」」」

しかし、来たら倒れ、来たら倒れ、を繰り返す

そして最後の一人になった

「くっくるなぁ！！」

逃げたいらしいのだが、腰が抜けて立てないようだ

「じゃーな…♪」

「うわぁぁあああぁぁ！！」

バキッ

「ん、終了～」

結局刀使わなかったなー

つまんねーの

「んじゃ、沢田！
オマエんとこの金は持ってけ！」

「えっあ、ありがとうございます！！」

「オマエの為じゃねぇよ…
隼人に感謝するんだな」

オレが殺る気になったのは、隼人も一緒に稼いだ金だからだ
仲間の金に手を出したからな

「サンキューな、風間」

「お、チビちゃんか…
オレの戦闘力は測れたか？」

「気づいてやがったのか…
測るも何も、素手だけだったからな」

だって弱かったしー

「そ、んじゃオレは帰るわ
恭弥、帰ろうぜー」

「もう集金も終わったしね
赤ん坊、今度会った時は戦おう」

「いいぞ　んじゃな
（やはり、風間はなんとしてもファミリーに入れてみせるぞ
…咲が強かったら少しは刺激になるかもしれなかったのにな…）
」

リボーンは一つ違っていた

南は、咲が強いなんて事があろうがなかろうが、絶対に自分から入らない

そして、咲の存在が大きくなると、イラつきを抑えられないのだ

しかし、それでもリボーンは南をファミリーに入れたくなったそうだ

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４０　夏祭り！（後書き）

…最近、咲の存在薄すぎたので最後にリボーンのセリフ？でいれました

まぁ、ファミリーに正式に入ってる中では唯一の女ですからね…

Straordinariamente6　霧に会いに行く！

今、黒曜ランドの前にいる

骸に、戦いが始まる前に会っておこうと思ったからだ

実は今日、隼人から『オレ、イタリアに戻ることにした』と連絡があった

しかし、もう一度連絡があり、『やっぱ行かねぇ』と言われた

この出来事は、日常編の最後の話

もうすぐ…明日からかもしれないから、今日骸に会いに行くことにした

「…どうやって入ろう…」

入り口には錆びた鍵がかかっていた

…飛び越えるか

ガシャッ

バッ

スタッ

まぁ、普通に着地して骸が居るであろう、黒曜ヘルシーランドに向かう

…人の気配…

「犬？千種？骸？

誰か知らないけど、オレだっての…」

そう言うと、物陰から姿を表した

「南だったのかびょん…」

「なんだよ、そのガッカリした態度は…

骸のとこに、案内してくれるか？」

「わかったびょん」

犬は、人間なら進めねぇよ、と言いたくなる場所をスイスイ進む

…それについていけるオレって何だろう…？

「ここだびょん」

止まったのは、予想通りの場所

「へぇ…
んじゃ、入るか…」

スタスタと、中へ入るか

一階には居なそうだ…

確か、最上階に居た気がするんだよな…

階段を上って、最上階に行く

ギィィィ…

「クフフ　よく来ましたね…」

「よ！骸、千種」

「…久しぶり…」

千種には会った時、並中生だから嫌われてたっぽいからなー

返事してくれて嬉しいよ…

「今日来た理由は…

仲間になるかどうかの答えを言いに来た、でしょうか？」

「んー…

ん?何で来たんだ?」

ぶっちゃけ、黒曜編が始まる前に骸達に会っておこうと思っただけだしな…

「クフフ…やはりあなたは変わっている…」

「まぁ、仕方ないさ!

暇だったから、ってことで」

「別に構いませんよ

今の心境的には、協力する気はありますか?」

「全くないね」

あっさり答えた

「そうですか…
僕としては、ムリヤリでも仲間になってほしいので…」

骸が立ち上がる

「おっと、マインドコントロールしようとしてるなら、ムダだぜ？
オレはそんな軟弱な精神力じゃねぇからな」

「！　…そうですか？
試してみても？」

試そうってしてんのか…

「いいぜ？
ただ思いっきり傷を負わせる、とかはナシだからな」

「クフフ…　分かってますよ」

骸の三叉の槍で、腕の一部を軽く刺す

まぁ、血は流れるがな…

「ほら、乗っ取ってみろよ」

「…！？

どうやらハッタリではないようですね…」

「！？　骸様が…？」

「こんなの…初めてだびょん…」

驚くよなー、そりゃあ

まぁ、オレも絶対の自信は無かったけどな

「驚きましたよ…」

「そりゃどーも？

ま、この話は終わりだ

話がある」

今、黒曜編でオレがどうするかを決めた

「何でしょう？」

「オレ、戦いには参加しないけど、戦いを見たいんだ

だから、ここのどこかに隠れていたい…いいか？」

やはり、ここは傍観者でいこう！

…そーだ…　いーこと思いついた♪

「いいですよ

戦いが始まるのは、並中にいても分かりますので」

「そうなのか？　ならそうさせてもらう

あぁ、それともう一つだけ」

言い忘れてはいけないことを忘れるところだった

「オレの仲間には手をだすなよ…

骸達も仲間だと思ってるから、攻撃はしない

ただ、防御はさせてもらうからな」

「…分かりました
ただ、僕らも遊びではないので、そこだけはお忘れなく」

「あぁ、分かってるぜ…
んじゃ、帰るわ」

後ろを向く

「はい、また」

「じゃあね…」

「また来るんだびょん」

オレはそのまま振り向かずに帰った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４１　霧の襲撃、嵐を守る！

「とうとう始まったかー」

今日の朝、恭弥から電話があった

『並中の風紀委員が何者かに襲われている。だから、風紀委員は朝早くに行くことになった』

ということだ

オレは、何でわざわざ襲われやすくするのかは分からない

…まぁ、バトルマニアの恭弥が早く犯人を知り、咬み殺したいって理由だろ

オレは襲撃されないよな…？

ってか、オレってケンカランキング何位？

前も思ったけどさ…

ま、テキトーでいいよ

「南さん、おはようございます」

「おー草壁
恭弥はどうだ？」

「…委員長には、今は話しかけられませんよ…」
よっぽどピリピリしてんのか…

「被害は今どのくらいだ？」

「8人です」

8か…

「ん、じゃあ死なないように頑張れよ～」

そろそろ笹川了平やられるかな？

あ、沢田だ

ってことは、もう笹川了平はリタイアか…

楽しみだなー♪

「南」

「誰だ…って恭弥かよ…」

ビビったよ、少し…

「何か情報来てない？」

「んー？

ないな…ってか、オレは被害に遭った人数しか知らねぇし

しかもさっき草壁に聞いたばっかだし？」

「ふぅん…」

それだけ言って、恭弥は学校に入ってった

…？ナニ？

まぁいいや…

……帰ろうか「学校には出なよ」

…ヒバリくん…どうしてそんなにヒドいんだ?

しかし忠告されたから、教室に行く

教室に着いたが、来てるヤツがごく少数

知ってる中では、山本がいる

隼人は…確か遅刻するんだよな…

いなくては嬉しいけど、アイツは？

ここ最近、無断欠席してるんだよな…

あ、風紀委員の仕事だからだぜ

じゃなきゃアイツの生活なんて微塵も知りたくないからな

なんか……眠…

オレは寝てしまった

「……」

目が覚めた

あれ？まだ隼人来てないのか？

「なぁ、隼人って来たか？」

教師は震えだした

「ハハハハハハイ！！
ですが、少し前に帰りました！！」

ガタンッ

思わず立ち上がる

「ヒィィィィィイ！！！！！！！」

しまった…

「あンのバカ野郎！」

最短距離で行くために、窓から飛び降りる

スタッ

着地と共に、走る

急いで…商店街に行かねぇと！！

その頃、隼人は千種と会っていた

「おまえを壊しにきた」

隼人はケンカを買い、千種は観客を攻撃する

もちろん、隼人は驚く

今度は隼人に向かって攻撃するが、隼人は頬を掠めるだけで済んだ

「ちっ」

舌打ちをし、千種から離れる隼人

左に曲がり、それを追って千種が来る

ボムで攻撃を仕掛けたが、千種の武器、ヘッジホッグで相殺される

そしてそのまま、ヘッジホッグが隼人を襲う

が、何とかダメージは小さく済んだ

しかし、これはただの中学生の戦いではない

プロの殺し屋だ、と理解する

「黒曜中だ…？
すっとぼけてんじゃねーぞ
てめーどこのファミリーのもんだ」

「やっと…　当たりがでた」

「ああ？」

そう、千種達黒曜は、ボンゴレを狙っていたのだ

「狙いは１０代目か！」

そして、２倍ボムを放つが、今まで通りに防がれる

そして、２つのヘッジホッグが隼人をはさむ

とっさの判断で、チビボムを使い回避する

「食らいな」

ビュッ

軽くかわされる

「2倍ボム！！！」

「芸のない奴…」

千種は落ち着いて対処する

スカッ

「!?」

ドガァン

モロに食らった

どういうことかというと、隼人が2倍ボムの声とともに通常のダイナマイトを放った時

すでに放っておいたチビボムが通常のダイナマイトと同じ大きさに見えるほど千種に接近していたのだ

そして、隼人はトドメのダイナマイトを放つ

ドガドガ、ドガーンッ

勝負が決まった

その頃の南

「あれ…？　爆発音が…？

ヤバい！　爆発音が止んだ！！」

それはつまり、勝負が決まったことを意味する

「間に合え……！！！」

全速力で走る

「！ここだ…！

まずい…！」

もう千種が立ち上がっていた

シュッ

キキキキキンッッ

漆黒の刀が、針を弾いた

「よぉ…大丈夫か…？」

「み…南！？」

「風間さん～！！？」

「……」

とりあえず、隼人は無事「ぐっ」

「隼人！？」

どうやら、完全には防げなかったようだ

ドサッ

「ご…獄寺君！！」

オレは隼人のキズを見るためしゃがむ

「…始末する…」

千種が沢田に攻撃を仕掛ける

どんっ

オレが助けようかとも思ったが、山本が助けた

沢田を助けようかと思ったのは、隼人の大切な人だからだ

その隼人は、オレが完璧に防げなかったから倒れちまったし…

そして千種は、『山本は犬の獲物』とかいう理由で帰った

…一瞬オレの方を見られたけど、まぁ平気だろ

それより、今は隼人だ

「クソ…とりあえず、応急処置だ！」

オレはYシャツの下に私服のTシャツを着てるから、Yシャツから腕章を取り、隼人の傷に当てることにした

応急処置の基本だが…

これだけで平気か…？

毒…はオッサンがどうにかするから大丈夫か

針も少なかったし

「オレの…オレのせいで獄寺君が…」

「死にゃあしねぇよ

傷も浅いしな」

実際、随分浅い傷だった

「ほ…本当ですか！？」

「まぁな…でも毒を抜かないとマズいかもな…
揺らさずに急いで医者に診せろよ」

「は…はい！！
…って、風間さんは来ないんですか？」

「…別にオレにできることはもうしたし？
んじゃな…」

オレは家に帰った

そして、１０分後

「…フード、デカすぎるっての…

普通に被って鼻まであるって…」

今オレは、白いＴシャツの上に、漣に作らせた黒いパーカーを羽織っている

ズボンも真っ黒で、もちろん靴も

そして腰には千本が入っている黒いポーチ

手には黒い手袋

リングは、ポーチに入れた

…これは、『スード』の姿

今から黒曜に行くからな…

もし沢田達の前に出ても大丈夫な姿だ

漣から貰った小型パソコンも持った

そして、オレは家を出て、黒曜ランドへ向かった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４１　霧の襲撃、嵐を守る！（後書き）

いよいよ黒曜！

章の意味は、『仲間との運命の戦い』です

活動報告で意見募集してるので、是非意見をください！！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４２　大空ＶＳ霧の結末！

骸は、負けた

ん？イキナリ意味分かんないって？

…気にしないでくれ…

オレは今、漣から貰った小型パソコンで姿と気配を消し、沢田の超直感が効かない状態だ

小型パソコンの能力を追加したんだ

飴は

恭弥、隼人、凪、骸、犬、千種に食べさせてある

何かあった時、すぐに分かるためにだ

正常に作動しているようだ

大怪我してる奴は、体力が僅かで『気絶』と出ている

あぁ、そういえばな…

人質で、アイツもいたんだよ…

なんか、先に一人で乗り込んで来たらしいぜ

んで、見事に返り討ちにあって、『ツナ！助けて！！』と叫んでボ

ンゴレの知り合いとバレて捕まった

…何がしたいんだよ…

あ、それを聞いてイライラしたのは言うまでもないな

そんなことより骸が負けて、どのくらいかって言うと…

パリーン…

骸の三叉の槍が砕け散った

まぁ、負けたばかりだ

骸…

悪いな…

オレは、この後のことを変えることはできない

犬、千種、…

ごめん…

『仲間』…か…

「マフィアが骸さんにさわんな!!」

…この後の犬達の過去を聞きたくはなかった

でも…

知ってても、聞くべきだと思った

マンガで読んだとき、『ヒドいマフィアだな』と思った

でも、それだけで辛くなることはなかった

…でも、やはりこれは現実

聞いてて、耳を塞ぎたくなる

…未来を全て変えることは出来ないけど、一人の人間の言葉くらいならいいよな…

「医療班がついたな」

…来たか…

ビュッ

ガッ

復讐者（ヴィンディチェ）！！！！

犬に引き続き、千種、骸が捕まった

「いったん止めてもらおうか、復讐者（ヴィンディチェ）？」

オレは気配と姿を分かるようにし、言葉を放った

「…オマエハ何者ダ」

「なぜ教えなければならない？」

「…ナラバ止メナドシナイ」

そして骸達を引き寄せようと、腕に力がこもった

…かかったな！

「ならば教える代わりに待ってもらおう」

「！！」

「おっと、今さら前言撤回なんてダメだぜ？

捕まえるな、とは言っていない

今だけ…少しだけ解放しろ」

「……」

ガチャン、

骸だけ解放された

「…他の二人も解放しろ」

「ソレハデキナイ

オマエト正式ニ解放ヲ約束シタ訳デハナイ」

確かに、それは無理だな…

「分かった…

オレはスードだ」

「…ソンナ名前ノ人間ハ存在シナイ」

「本名じゃないんでね

骸一人だったから、本名まで教えたら不平等だろ?

文句は言わせねェ

おい骸!!!　起きろ!!」

気絶していた骸の顔を、ペシペシとたたく

「…ぅ……スー…ド…？」

あぁ、さっき教えたんだよ

この姿の時は、スードと呼べって

「あぁ…　話がある

歩けるか？」

「…えぇ…」

骸はヨロヨロと立ち上がる

「行くぞ」

「クフフ…　分かりまし「待て」？」

声を遮ったのはチビちゃん

「スードって言ったな…

オマエほどの威圧力がある奴なら、どっかのマフィアの人間だろ

どこのファミリーだ　言え」

銃口を向けられる

「…オレはオマエに情報を与えるつもりはない

残念だな、呪われた赤ん坊（アルコバレーノ）…

いや、選ばれし7人と言ってもらえた方が嬉しいか？（イ・プレシェル・ティ・セッテ）」

「！！？？！？！

なぜオマエがそのことを知っているんだ！！」

あり…？

挑発しすぎた？

「このくらいの挑発に乗るなんて小物だな

それに言ったはずだ

オマエに情報は与えない、と」

「くっ…」

よしよし、小物って言われたらやっぱ黙ったか

…でもスードがオレだってバレたらやばそうだな…

「骸、行くぞ」

「えぇ」

骸と外へ歩き出した

――――――沢田は、何かを感じていた

超直感が南に使えれば、その何かに気づいていたかもしれない

「あのスードって人…」

「どうした、ツナ」

「えっあ、いや……」

沢田は下を向いてしまった

「早く言いやがれ」

「…オレにもよく分かんないけど、あの人から何か感じたんだ…ん～、何て言うのかな…」

「（ツナの超直感でも分からないんじゃ、ダメだな）

分かんねーならいいぞ」

「うん…」

「わざわざ何の用でしょう?スード」

建物から少し離れた、森の中に二人はいた

「別に…?

無様に負けたオマエと話でもしよっかなーって?」

そしてフードを取る

「クフフフ　酷い言いようですね…

よかったんですか?顔を出してしまって」

「あぁ…沢田達がいなければいい
そうだ、この後沢田達と会ってもこのこと言うなよ？」

「僕はそんなことをしませんよ」

ため息交じりに言う骸

「ならいいんだけどよ

…んで、どうだ？負けた気分は」

「これからまた監獄ですので…

いい気分な訳ないですよ」

「よりによって、監獄がアレだとはな

ま、頑張れよ」

「何をですか…　監獄でできることなんてありませんよ」

「おっもしろいことが出来るじゃねーか

脱獄だよ、ダ・ツ・ゴ・ク♪」

本気で楽しそうに言う

だってよ、投獄されたら、脱獄したくなるだろ

「は…？」

「おいおい、耳悪くなったのか？」

「…脱獄…ですか…？」

「あぁ！」

どうやら骸は理解してるけど理解したくないって感じだな

「なんだよ…骸はこのまま負け犬か？
オマエはそんな奴じゃないだろ！」

「…クフフフフフ…クハハハハハ！！！！！
やはり南は面白いですね…
いいでしょう！脱獄してみますよ」

「…ならいい…んじゃ、帰るわ
っと…一つだけ言っておくぞ」

「？　なんでしょうか？」

「…オマエには、仲間がいるからな
操り人形じゃない…
それを、忘れるな…」

「…分かってますよ…
でも少し違いますね…」

「違う？　…まぁいいか」

フードを被り、再びスードの姿に戻って歩いていく

「じゃあな、骸！！
ちなみにオレも仲間だからな！」

「えぇ、分かっていますよ…
それでは、また」

そしてお互いに背中を向けて歩きだした

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４２　大空ＶＳ霧の結末！（後書き）

…これで黒曜編は終わりです…

ほんっとにスミマセン！

咲のセリフが無かったのは、気絶してたからです

というか、省きすぎました…

だって…南がただ傍観するだけなんです！

さて、次は念願のＶＡＲＩＡ編！！！！！

気分ＭＡＸです！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４３　拉致られ、イタリアに行く！

黒曜編も終わり、日常編のような毎日を過ごしている

今日は日曜

今も委員会の仕事はサボってるぜ！

恭弥も最近は何も言ってこないしな～

んで、今はＣＤ買いに行き途中

…まぁ、オレの顔が並盛で知れ渡ってるから、タダでくれるからだけどな…

だからわざわざ学ランじゃなくて楽だ～♪

ドゴォッ

…耳が悪くなったカナ？

ドゴオッ

ゴッ

…耳は悪くないようだ

ってことは…

始まりましたかー

ｖｓＶＡＲＩＡ編

…ここはどうしたらいいのか？

…うん、無視でいこう★

鮫は無視！

調味料も無視！！

よし、そうしよう

…鮫と沢田が戦ってるのが見える

そしてその向こうにゲーセンと目的地

あ、死ぬ気タイムが切れた

ドガガン

バジルスゴいよなー

オレは興味ないけどー

あー、リング争奪戦関わるのかなー

属性の名前は知らないけど、マーレリングがあるし…

まぁ、もう原作ブレイクは１００％なんだ

気にせずいこう♪

あ、ディーノだ

久しぶりだなぁ…

しかし、さらばだ

オレはディーノの後ろを何事もないように歩く

「帰るわきゃねぇぞぉ！！」

ウルサ！！！！！！

スクアーロって、声帯どうなってんの！？

声帯関係ないか？

ドゴオッ

スゴい爆は…

「…！？」

口元に布？？

って睡眠薬入ってるじゃねぇか！！

オレにそんなものは効かん！！

「ちっ」

ボコッ

舌打ちされて、腹パンチされた…

何かした？

ただ歩いてただけじゃん！！

「テメェ…！」

「何だよ！

イキナリ睡眠薬吸わされ、舌打ちされ、腹パンチされたんだぜ！？

そんだけやって、何が『テメェ…！』だよ！」

まったく理不尽だ

「フン…しばらく黙ってろよ…」

「は？意味ふめ…っ…」

うなじ辺りに手刀された…し…

あー、力入らないけど意識あるって悲しい…

「まだ意識あんのか…

だがそれなら力は入らねーなあ」

…この声と変わった言い方に覚えがある

クソアーロ!!!!!!

実際はちゃんと呼んでるけどな

「貴様に免じてこいつらの命はあずけといてやる

だが、こいつとこの女はいただいてくぜぇ

う〝お〝おい」

「な」

「ああっ　ボンゴレリングが…

あの方は…？」

「風間さん！？？！？

！！ボンゴレリング…？」

「じゃあなぁ」

スクアーロはどこかに向かって走り出した

ってか…オレ…

どうなるんだよ…？

「どうしよう…風間さんが…」

沢田は南が連れさらわれたことに動揺していた

「深追いは禁物だぞ」

「リボーン

なんで今頃出てくるんだよ！！

どーして助けてくれなかったんだ！！？

それに風間さんが…」

「オレは奴に攻撃しちゃいけねーことになってるからな

風間が何で連れてかれたのかは知らねぇ

まぁ、アイツは有名人だからな」

ミナミ・カザマは世界の有名人だ

それで仲間にさせ、利用しようとする者は多い

「そんな…

てか何で攻撃しちゃいけないんだよ」

「奴もボンゴレファミリーだからだ」

「え――――！！？何だってー！！？

オレ、ボンゴレの人に殺されかけたの――――！？

って風間さん巻き込んでんじゃん！

ど…どーゆーことだよ！？」

「さーな」

ファンファンファン…

警察が来た

そしてディーノ達は廃業になった病院を手配しに行く

「ま、待ってください！！
獄寺君と山本が……！！」

「あいつらなら心配ねーぞ」

「大丈夫かツナ！風間は…？」

「いったい何なんすか！？南が…！！」

「二人とも！！…風間さんのことも、何もわからない…」

「お前らの戦闘レベルじゃ足手まといになるだけだ
とっとと帰っていいぞ」

リボーンは二人にヒドいことを言うが、二人は何も言えない

そして沢田とリボーンは病院、中山外科医院に向かった

バジルのケガは命に別状はなかった

そして沢田はボンゴレが敵でそうではない人が味方でパニックになった…

と思われたが、本人には関係ないようだ

だが、そうはいかないようだ

リング…ボンゴレリングが動き出したからだ

ボンゴレリングはいわくつきの代物らしい

そしてそれをディーノが持っていた

バジルは囮だったのだ

しかし沢田はボンゴレと関わりたくないためか、逃げた

逃げられはしないのに――――――――

その頃の南は…

飛行機に乗っていた

「…おい、ロン毛…　どこ行くんだ…？」

「ロン毛って言うんじゃねぇ゛！！！

スクアーロだぁ！！

…イタリアに行く」

はぁ！？イタリア？

…まさか、ＶＡＲＩＡアジト！？

「何しに行くんだよ…

めんどいー」

「着けば分かるそれまで黙ってろ

世界一の天才、風間南よぉ゛」

…コイツも知ってんのか…

でも言い返すのがめんどいから寝ることにした

「ｚｚｚ…」

「って、悠長に寝てるんじゃねえ　ｧ！！！！」

やはり声帯がおかしいのだろう

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４４　暗殺部隊と会う！

イタリアに着いて、ＶＡＲＩＡアジトのような建物の中の、ロビーのような場所でだらけている

「ハァ…」

「ため息なんかしてんじゃねぇ　ゞ！」

…ウルサいので、ちょっとセコく脛を蹴る

「！！！　何しやがんだぁぁぁ！！」

「あのさ、オレウルサいのも嫌いなんだよ
だから声のボリュームを九割減にしろ」

「んだとぉ！？」

お、さり気なく小さくなってるな

「んで、要件は？」

「…今はまだ話さない
他の奴が来たら話す」

あぁ、他の幹部ってことか

ガチャ…

扉が開いて二人入ってきた

「誰そいつ…」

「見たことない顔だね…」

おぉぉぉ！！

なんかカンドー！

「ベルとマーモンか…

こいつは会議で話した風間南だぁ」

会議？

「へー、コイツがあの天才ねぇ…

よく見つけたな」

？意味分からん

「ってかさー、名前教えろよ
まだカスクアーロしか知らないんだけど」

「ししししっ　カスクアーロだとよ
オレはベルフェゴール
ベルって呼べよ♪」

「僕はマーモンだよ
雑誌とは随分性格が違うね」

あー、やっぱ知ってるのかー

「あれは、勝手に企業がやったんだ
つっても雑誌のことを知ったのは一年前くらいだけどな」

懐かしいなぁ

あれから一年経ったのか…

「へー　オマエって強いの？
王子と殺し合いしようぜ♪」

…早速っすか…

「南って呼んでくれよ…
殺し合いは遠慮するー　めんどいし？
ってかさ、王子って何言ってんだよ…
寝言は寝て言え」

知らないフリって大変だ…

「南、ベルは本物の王族の血を引く者だよ」

マーモン！

南って呼んでくれるなんてなぁ！！

嬉しいぜ？

「ふーん…　まぁどーでもいいけど…」

だってめんどいし

「…南ってかなりめんどくさがりだな…

なんかオレも殺る気失せちゃったし」

「あー、それは良かったよ

んでスクアーロ、この二人以外にも待つのか？」

レヴィとルッスーリア、ボスを待つけどなー

「あと三人だ」

やっぱなぁー

はぁ…

ガチャ…

「…アイツ、何人？宇宙人？」

出てきたのは、頭のてっぺんからだけ毛が生えた奴

しかも緑色

「地球人よ！！」

あー、聞こえてたのかー

「じゃあ、変態ってことで」

「南、変態なら他にいるぜ」

ベル君、それはムサいジジィのことかい？

「…ここって常識離れした奴しかいねぇじゃんかよ…」

「君も十分常識離れしてるよ」

…そう？

オレは一般人だと思うんだけど…

「ししし　確かに

南が一番変わってるよな」

「えー…　ベルやマーモンに言われたくない」

だって王子にアルコバレーノだぜ？

ガチャ

「ぬ　誰だその男は！」

…男？

「…殺すぞ」

ブワッ

殺気を放つ

まぁ、これでも加減してるけどな

「ぐっ…」

レヴィは膝をついた

フッ…

殺気を抑えた

「感謝しろ　今のでも三割未満にしてやったんだ」

「ししし　やっぱ強いんじゃん♪
（今の殺気…）」

「やっぱり、南が相応しいね
（僕でさえ少し気分が悪くなるほどの殺気か…）」

「う〝お〝ぉい！　お遊びはそこまでにしろぉ〝！！
（やはりな…）」

オレが相応しいって…

なに？

「ベル、この二人は？」

「あのオカマがルッスーリア
んで、向こうの変態がレヴィ」

「よろしくねぇ♪」

「…悪かったな…」

やっぱコイツは

「あぁ、よろしくな

ルッスーリア」

「オレは！？」

レヴィと言う名の変態ジジィは嫌だ

「私のことはルッス姐って呼んでいいわよ」

「じゃあルッスで」

姐ってなんか嫌だし…

「だからオレは――――！！？」

こうしてレヴィは空気になった

バタン！

「来たかぁ〜」

「リングをよこせ

…そいつが風間南か…」

おー…、これはこれは…

「そうだけど？そっちは？」

「…ＸＡＮＸＵＳだ……」

やっぱそうかー

「あ、スクアーロ！三人来たぜ！
ここに来た理由を教えてもらおうか」

「オマエには…
『風の守護者』になってもらう」

……

「はぁぁあああぁぁ！！？？？」

数日前の並盛町

スクアーロが南を連れ去った翌日の朝

沢田が中山外科医院に行くと、隼人と山本がいた

そして、ボンゴレリングは正式には８つある

ただし、８つめのリング…風のリングは特別らしい

そして沢田と風のリング以外の６つのリングは、時期ボンゴレボス沢田綱吉を守護するにふさわしい６名に届けられた

「なぁ！？オレ以外にも指輪配られたの～～！！？

ってかなんで風のリングは配られてないんだ？」

「…風間がいねーからな」

「！　風間さん…」

「１０代目！！　ありがたき幸せっス！！

身のひきしまる思いっス！！」

隼人は涙を流し、感激した

「獄寺のリングは『嵐のリング』、山本のは『雨のリング』だな」

「そーいや違うな」

「ん？そーか？」

「なんだ…？嵐とか雨とか……風は違う感じするけど、天気予報…

……？」

「初代ボンゴレメンバーは個性豊かなメンバーでな

その特徴がリングにも刻まれてるんだ」

初代ボスは、すべてに染まりつつ、すべてを飲みこみ包容する大空のようだったと言われている

ゆえにリングは『大空のリング』

そして守護者となる部下達は、大空を染めあげる天候になぞらえられた

…初代風の守護者は天気ではなかったが…

すべてを洗い流す恵みの村雨『雨のリング』

荒々しく吹きあれる疾風『嵐のリング』

なにものにもとらわれず我が道をいく浮き雲『雲のリング』

実体のつかめぬ幻影『霧のリング』

明るく大空を照らす日輪『晴のリング』

激しい一撃を秘めた雷電『雷のリング』

そして、
気まぐれだが、時に追い風となり、向かってくる敵を強力な風で吹き飛ばす風『風のリング』

山本はリングを返そうとしたが沢田が、リングを持っていたら昨日のロン毛…スクアーロが狙ってくることを言い、隼人と山本は修業に行った

その直後だった

カチャッ

入り口のドアが開いた

「さ…咲ちゃん?」

入ってきたのは、山下咲

「あのね…お願いがあるの…」

「？」

「私に…風のリングを渡してくれない？」

「「！！」」

沢田もリボーンも、これには驚いた

「だっ…ダメダメ！

そんな危険な目に合わせられないよ！！」

「…咲…オマエは本気で言ってんのか？」

「リボーン君…

うん、本気だよ…」

「ちょ、咲ちゃん!?」

「…確かに風間を除けば咲が適任だしな…

じゃあ咲、頼むぞ」

南を除けば、という言葉が咲には不満そうに見えた

「うん!」

「ダメだって!!」

沢田が大声をあげる

「ウルサいぞ、ツナ
それに咲が言ってこなくても、こうなっていたんだ
…風間がいねぇからな…」

最後の言葉は、誰にも聞こえなかった

「そんな…」

「ツナ…大丈夫！
私、結構強いから！　じゃあ私も修業するね」

「咲、オマエは誰に修業を頼むつもりだ？」

「……」

「いねぇなら、とりあえずはビアンキに頼んでみろ」

「うん！じゃあね」

そして咲は出て行った

「咲ちゃんまで巻き込んで…

リボーン！咲ちゃんに何かあったらどうするんだよ！！」

「咲も、それくらい承知で言ってきたんだ

…オレとしては、風間が適任だったんだがな…

咲には『追い風』にはなれるが、気まぐれでもねぇし、強風も吹けないだろうからな…」

「……風間さん、ピッタリじゃん…」

「だろ？　…まぁ連れてかれたから頼めないがな

ちなみにもうすぐ『晴のリング』を持つ奴が来るぞ」

パオパオ老師の姿に着替えながら言い、この後は原作通りに進んだ

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４５　日本へ戻る！

イタリアに来て、少し経った頃

「まさか、オレが守護者に…しかもヴァリアーに来るとはな…」

全く予想してなかった

でも、個人的にＶＡＲＩＡは好きだから嬉しさ半分ってとこだ

「『気まぐれだが、時に追い風となり、向かってくる敵を強力な風で吹き飛ばす風』か…

オレにピッタリ過ぎるだろ…」

あっちの風の守護者は誰だろなー

戦うことになるから楽しみだ♪

風のリングは、形は守護者のリングと同じ

刻印は…

説明しにくいな…

〇の中にSを上と下の曲線に合うように書いて、右が無色（リングだから銀）、左が黒になってる

他の言い方だと、勾玉を二個、上下逆さまで円にした感じ？

なんか見たことあるマークだけど…

まぁ、そういうヤツだ

んで、オレは風の守護者になることにした

そうそう、やっぱ偽リングだってバレたよ

早速日本に行くんだとよ

１０分後に集合って…

「やべっ　時間だ！」

オレは急いで集合場所のロビーへ向かった

「悪ぃ！遅れた！」

ロビーにはＸＡＮＸＵＳ以外の人が揃ってた

モスカは…いないか

「大丈夫よぉ、ちょうどピ・ッ・タ・リ♪」

「ルッス、キモい」

オレの言葉が結構効いたようだ

「あ、日本着いたらオレのことは『スード』って呼べよ

一応沢田綱吉達と知り合いだからよ」

「…分かったぞぉ〜」

「ししし、りょーかい」

「まぁ金は取らないであげるよ」

「りょーかいよぉ」

「ぬ　分かったぞ」

バタン…！

「ＸＡＮＸＵＳも日本着いたらオレのことは『スード』って呼べよ！」

「…くだらねぇ」

まぁ、了承してくれたんだよな…

「南…」

「ん？なんだよＸＡＮＸＵＳ？」

ビュッ

何かを投げられた

「…？これは？」

「隊服だ　仮にも今はヴァリアーだからな」

「ＸＡＮＸＵＳ…

サンキュー！！　着替えてくる！」

一度ロビーから出る

フードが付いてて安心した

普通に着るのは嫌だったから、ベルみたいに中に白Ｔシャツを着る

黒曜の時と、あんま変わんない

そしてロビーに戻り、日本へ向かう――――――――――

日本に着いた

「なぁ、オレちょっと出掛けてきていいか？」

家に戻って千本とか持って来ねぇと…

「いんじゃね？あとで合流すれば」

隣にいるベルが応えた

レヴィとマーモンは雷のリングを探すとかで、今はいない

「んじゃ、行ってくる」

いつレヴィが牛ガキを見つけるか分からないから急いで家に向かう

あぁ、ＶＡＲＩＡの皆に飴は食わせてある

…ＸＡＮＸＵＳに食わせるの大変だった……

隊服のお礼ってことで、今さっき食べさせたばかりだ

まぁ、飴と小型パソコンは常備してて良かったよ…

「…久しぶりの家だな…」

マンションの下で、つい止まった

ちょっとしか経ってないのに、懐かしく思う

結果、家から持ち出したのは

千本が一式入ったポーチと、手袋

刀を置いていこうかと思ったが、黒曜の時も持ってたから辞めた

そして、今はＶＡＲＩＡと沢田達がいるとこに向かっている

スタッ

「あ、あいつは…黒曜にいた……スード！！」

沢田が言う

「知り合いだったのか？」

ベルに問われた

「別に知り合いって程でもねェ

…何の話してたんだ？」

「それがさ、同じリング持ってる奴と戦わなくちゃいけなくなったんだよ
1対1で」

ちょっと遅かったか…

チェルベッロがもう着いている

「…リング所持者は7名のはずです
あなたは？」

突然チェルベッロが話しかけてきた

「オレは風の守護者、スードだ」

「！風の…

先ほどボンゴレリングは7種類と言いましたが、訂正します」

もうこんなに進んでたのか…

「風を含め、８種類です

しかし風の守護者は初代以降、いなかったのです

なので今回異例に異例が重なった事態となってしまいました

２人がふさわしいと考える7名が食い違い、それぞれが違う人物に一方だけを配ったのです

すなわち9代目が後継者と認めたＸＡＮＸＵＳ様率いる7名と、家光氏が後継者と認めた綱吉氏率いる7名です

さらに風の守護者も存在しています

そこで、真にリングにふさわしいのはどちらなのか、命をかけて証明してもらいます

場所は深夜の並盛中学校

詳しくは追って説明いたします」

オレは何番目だろう…？

相手って…？

「それでは明晩１１時並盛中でお待ちしています
さようなら」

そしてチェルベッロは消えた

沢田はＸＡＮＸＵＳに睨まれ、地面に座り込んだ

そしてオレはＶＡＲＩＡと共に姿を消した

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４６　晴戦！

いよいよ今日はリング争奪戦の開始日

出かけてるベルが帰ってきたら並中に行く

最初はやっぱ…晴だよな…？

風はいつだろう…

ってか相手の守護者誰？

今日来るよな？

まぁ、多分知ってる奴だろうけど…

「なぁマーモン、オレっていつ殺れるのかな!?」

「知らないよ
楽しみかい?」

「あぁ!!

今まで全力で戦ったことないから、全力出せる相手だったらいいなぁ♪」

せめて力の半分は出せる相手だといいな…

「きっとムリだね」

マーモン…

即答とか、ヒドくね？

「ベルが帰ってきたようだね」

「どこ行ってたのよん、ベルぅー

遅刻なんかしちゃダメよー

あら？

なにそのヘンなの？　なんかスッパイにおいするけど……くさってんじゃないの」

ドゴォォォッ！

ベル…

思いっきりケリ入れてるし…

「なぁベル…それって寿司か?」

「ししし　よく分かったじゃん
後で少しやるよ」

「やった!

あ、そろそろ行こうぜ?」

そしてスードの姿になり、並中に行った

並中に着いても、チェルベッロしかいなかった

…遅い…

晴の戦いだったら帰ろっかな…

あ、でも相手の風の守護者が来るかもしれないしな…

すると、隼人、山本、笹川了平…

あの女が来た

少し経つと、沢田が牛ガキとチビちゃんと来た

「とっくにスタンバイしてますよ」

「！　上だ」

「厳選なる協議の結果、今宵のリング争奪戦の対戦カードが決まりました

第一戦は

晴の守護者同士の対決です」

やっぱ晴か…

にしても…

まさか…

オレの相手って、あの女か…？

……消してやるよ…！！

あー、楽しみ♪

「戦いを始める前に、少しよろしいでしょうか

昨日言っていなかったことですが」

…？

こんな場面、なかったよな？

「オレ達はいいですけど…」
沢田が言う

「私もいいわよぉ」

ルッスも許可した

「ありがとうございます

初代風の守護者、ウィントが残した言葉です

『もしも風のリングを受け継ぐ者が現れ、候補者が二人になってしまった場合は、
チームは関係なく、強い者…つまり勝者を風の守護者にせよ
風は、強く…そして速いものだ』

今まで風の守護者は現れませんでしたので、今回この言葉の通りにします

なので、風の守護者同士の対決では、勝者を守護者に断定します」

「風って…咲ちゃん！」

ハァ…

やっぱりアイツが風のリング持ってるのか…

でも、これはツイてる…？

ツイてない…？

……ってかさ、オレ、絶対勝つつもりだから守護者になっちゃうじゃん…

「そのため、風のリングは数に数えません」

ふーん…

なら原作とあんま変わらないかな…

それにしても、初代風の守護者、ウィントか…

イイコトしてくれるじゃねぇか！！

「それでは、晴の守護者同士の対決を開始します」

もう戦い始めるのか…

結果は知ってる

ルッスがモスカに撃たれる

そして、笹川了平の勝利

あんま見たくないな…

「それでは晴の守護者、リングの中央へ来てください」

「遊んでくるわね――」

「楽しませてもらうよルッスーリア」

「とってと殺れぇ」

ルッスがリングへ向かった

沢田、隼人、笹川了平、山本、アイツは円陣を組み、アホみたいなことをしている

「ふぁ～あ…

眠いから早く終わらせろよ、ルッス」

「んもう、少しくらい楽しませてちょうだい！」

「じゃあどうぞ

仕方ないから待ってやるよ」

「それじゃあねぇ」

悪ぃな…

ルッス…

そして戦いが始まった

リングは疑似太陽によって光ってるように見える

笹川了平は目が開けられないため、ルッスからの一方的な攻撃を受ける

そしてワザと攻撃を食らい、晴の守護者の使命を行動で表す

そこで、コロネロがやって来た

笹川了平は拳に汗が蒸発して出てきた塩をのせ、散弾のように放って証明を割った

目が開けられるようになった笹川了平は、右手のパンチをするがルッスのメタル・ニーによって右手もヤられてしまった

そしてここで、笹川了平の妹、笹川京子が来た

それにより細胞エネルギー伝達率が１００％になり、ルッスのメタル・ニーを砕く

ルッスは再び戦おうとするが…

ドギャッ

モスカから攻撃され、敗北

オレは何も言わずに…いや、言えずに帰った

次は、雷戦

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４７　雷戦…ではなく親友に会いに行く！

ルッスが負けた次の日

朝から続いていた雨は、降り止まずに今も降っている

今日は、リング争奪戦には行かない

理由？

前に１０年後ランボと会ったとき、オレのこと知ってたじゃん？

そんで、万が一にバレたら嫌だから

今いるのは、黒曜ランド

私服で来ている

前と同じような、人の気配がする…

「犬…か？それとも千種？」

「この声…南！？」

ガサッ

茂みから犬が出てきた

「よ…久しぶりだな」

「全くだびょん…」

1ヶ月は会ってない

「千種のとこ、案内してくれよ」

「あ…いんらけどよ…」

凪のことだろう

「いいなら早くしてくれ

…あんま時間ねぇんだ…」

「わかったびょん」

着いたのは、ちょっと広めな部屋

「…ここだびょん…」

「あぁ…」

ギィィィ…

「!?　凪!」

「えっ…　南…?」

部屋の中には、千種と凪がいた

「って…なんか色々変わってね？」

眼帯とか、髪型とか、制服とか…

「…これは…　！骸様？

…はい…」

凪は姿を霧に変え、姿を見えなくした

「クフフフフ…　お久しぶりです…」

「骸！？」

「骸様！」

「骸さん！！」

まさか、骸が出てくるとは…

「クローム…いえ、凪のことは僕が説明しましょう」

そして、犬と千種には他の部屋に行ってもらい、凪のことを聞いた

凪は事故に遭い、右目と内臓をなくした

そこで、内臓を骸の強力な幻覚で作り、生きている

そのリンクは、三叉の槍

破壊されたら、凪…否、クロームの幻覚の内臓は消える

「…なるほどな…
話してくれて、ありがとな」

「いえ　礼には及びませんよ
それでは僕はここで」

「おう！
あ、もしかしたら近い内にスードになったオレに会うかもしんねぇから、口滑らすなよ！！」

「えぇ、それでは…」

シュウウウゥゥ…

再び霧が姿を消したかと思ったら、クロームが現れた

「南…骸様と、知り合い…だったの…？」

「まぁな！

今日は凪…じゃなくて、クロームの顔と骸達の顔見れたから帰るな

んじゃ、またな」

「……うん…」

クローム、ちょっと悲しい顔してるな…

ごめん…

ギイィ…

「南！　骸さんは！？」

ドアの目の前で犬と千種が待っていた

「犬……骸なら帰ったよ」

「くっそ～！！　わかったびょん！」

「…帰るの…？」

「あぁ…　そうだ、もし今度スードに会っても、口滑らすなよ？

骸にも言ったけどよ」

「？　まぁ、わかったびょん」

「めんどい…」

多分、リング争奪戦で会うからな…

「んじゃ、またな…」

そのまま黒曜ランドを後にした

雷戦は、レヴィの勝ち

大空のリングも手に入れた

次は、嵐戦…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４８　嵐戦！

今日の対戦は、嵐…

つまり、ベルＶＳ隼人

どちらも血まみれになる、オレとしては見たくない一戦だ

そういえば、終わったら誰か来るんだったと思うんだけど…

…誰だっけ…

最近、原作知識が異常な程抜けている

まぁ、沢田が勝つってのは覚えてるけど…

…何で勝つんだっけ？

全く思い出せない…いや、逆に知らなかったみたいな感じだ

何でだろう…

「あの時計の針が１１時をさした時点で獄寺隼人を失格とし、ベル

フェゴールの不戦勝とします」

あり？

隼人まだ来ないの？

…まさか、棄権…？

いや、隼人に限ってそれはない

でも、時計は隼人を待たずに進む

今、１０時５９分１５秒…

カチ、カチ、カチ、カチ…

早く来い…！！

５５秒、５６、５７、５８…

５９……！！

ドガァン

時計が爆破された

キュッ

「お待たせしました１０代目！！
獄寺隼人、いけます」

良かった…

「ベル、頑張ってこいよー」

棒読みだけど、一応言っておく

「ししっ　応援する気ねーじゃん
ま、王子が負けるとかアリエナイし」

…仲間を守りたいのに守れないって、辛いな…

あ…オッサンだ…

相変わらず変態だな…

「トライデントシャマル――…

噂では2世代前のヴァリアーにスカウトされ、それを断ったほどの男……」

あいつってそんなスゴいんだ…

隼人と二人で何か話してるけど…

「ってわけでオレこっちにつくから

よろしくな喪服の連中――っ」

喪服じゃねぇよ、コノヤロウ

「へえ、シャマルがあいつらとね」

「ディーノにコロネロにシャマル…

これほどの人材がなぜ集まる…

いったいどーなってやがんだぁー

まさか、これもあのチビの……」

「まあでもこれで少しは楽しめそうじゃん

今日の勝負の相手」

ベルは、むしろラッキーかのように言う

「確かにな
ってかそんくらいの人材が集まらなきゃ、超圧勝してつまんないし？
どうせならオレの相手もそんくらい強ければいいのになー
あんなひ弱そうな女とか、マジありえねー」
修業つけてもらったのも、どうせビアンキとかだろ？
あーぁ、つまんない
「仕方ないよ、スード
敵が分かってるだけでもいいじゃないか
僕の相手はまだ姿を現さないしね」
「マーモン…
まぁ…そうだけどよ…」

霧は骸だからいいじゃねぇかよ！！

オレの相手、マジ弱いだろ！

はぁー…

「それでは嵐のリング

ベルフェゴールＶＳ獄寺隼人

勝負（バトル）開始！！」

お、開始するか…

ドン

隼人がまず、様子見をする

しかし、爆煙が晴れると、隼人の周りにナイフが浮いていた

「…なぁ、マーモン…

あの光ってるのって…ワイヤーか？」

「よく見えたね　そうだよ

ベルはナイフとワイヤーの、両刀づかいなんだ」

へぇー…

……やっぱりオレ、原作知識消えてるな…

ま、楽しめるからいっか♪

バリ――――ン

あ、三倍ボム、せっかく完成したのに…

見事にハリケーンタービンの風に妨害され、ボムはベルに当たらなかった

しかし、ベルのナイフは隼人に当たる

ベルは気流の流れを読み、隼人にナイフを当てていたのだ

そして隼人はベルのナイフを食らい続ける

「怒濤の攻めのシメは、針千本のサボテンにしてやるよ」

ドスドスドスッ

隼人はナイフを食らった……かと思いきや、ワイヤーに気づいて回避した

そしてボムを構える

…どうするつもりだ…？

「果てろ！！！」

ボムを投げる

風の壁が…！！

バシッ

！？

ドシュゥ

…ボムが…加速した…！？

ドガガガガッ

…ベル…大丈夫……ではないよな…

「ベルの奴、無傷ではあるまい」

「そのとおり…　あれが始まるね」

「おぞましーぜぇ」

マーモン達が何か話してる

「なぁ、何が始まんの？」

「あぁ、スードは知らなかったね…
まぁ見てればわかるさ」

スパパ

「うしししし！！　あぁあ゛～っ
流しちゃったよ、王族の血を～～！！」

「？　ベル、大丈夫か…？」

「自分の血を見てから始まるのさ
プリンス・ザ・リッパーの本領は」

本領ねぇ…

「あ〝はあ〝ぁ〜〜

ドクドクが止まんないよ」

ベルがキレた…

そこからは、圧倒的だった

ムダのない動きでボムをかわし、ワイヤーで攻撃をする

隼人はチビボムを使い、なんとか攻撃を避ける

ハリケーンタービンの爆発まで、あと6分

隼人は図書室に逃げ込んだ

ベルは飛んでナイフを投げる

隼人はチャンスだと思い、ボムを投げるが…

ワイヤーによって、ボムが切られる

ベルはどんどんナイフを投げる

ピタ…

隼人の動きが止まった

ワイヤーが隼人のまわりに、はりめぐらされているのだ

しかし……

ヂヂヂヂヂヂヂ…

こぼれた火薬を導火線替わりに使い、本棚を爆破する

そしてワイヤーを逆に利用し、ベルにボムが迫る

ドガガガンッ

さらにロケットボムを投げ、ダメ押しをする

ゴッ

ドガガガガッ

煙が晴れると、ベルが倒れてた

ハリケーンタービンが爆発するまで3分の、ギリギリの勝利だ

しかし、リングを完成させるまでは勝利とならないようだ

隼人がベルのリングを取ろうとした時――――――

「あ〝…　はあ〝」

ベルが隼人のリングに手を伸ばした

そして、ハリケーンタービンが爆発を開始する

図書室までは、約1分後

隼人とベルはそれでも取っ組み合いを続ける

『右腕の名がすたる』…

『南を連れてったヤツらに負けるワケにはいかない』…

オレなんかより、命を大事にしろよ…！！

「ふざけるな！！

何のために戦ってると思ってるんだよ！！」

沢田が叫ぶ

「またみんなで雪合戦するんだ！！　花火見るんだ！！
だから戦うんだ！！　だから強くなるんだ！！
またみんなで笑いたいのに君が死んだら意味がないじゃないか！！！
風間さんだって、そう思ってるはずだ！！！」
あぁ、確かにそうだぜ……
ピ――――ッ
ドガガァンッ

爆発した

でも――――――

隼人は大丈夫だった…

ベルも生きてはいるようで、本当に良かった…

そして、次の対戦カードの発表

「明晩の勝負は

雨の守護者の勝負です」

…なんだよ…

「失礼する！」

レヴィの部下が来た

正体不明の侵入者がここに来ているみたいだ

「ぐあぁっ」

どしゃっ

す…

「ヒバリさん！！」

ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい……

恭弥なら、気づくかもしれない……

レヴィが攻撃をするが、難なく避ける

ヤバいヤバいヤバい……

「まずは君から、咬み殺そうか

……何でそこにい「言うなよ！？」

まぁいいや、後で聞くから」

…やはりバレました★

「ム　スード、知り合いかい？」

「…あぁ…　オレ、帰るわ」

ハァ…

最悪だ……

「スード？　まぁ、それも後で聞くよ」

…ヨカッタァァァァ！！

でも、しっかり説明しよう……

「んじゃな」

窓から飛び降り、帰った

次は、雨戦

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４９　雨戦！

雨戦は、校舎Ｂ棟全部を使ったアクアリオン

…思いっきり校舎ぶっ壊してるじゃん…

ん？恭弥のこと？

…電話したよ…

『面白そうだから仲間になることにしたら、敵対することになった
勝てたら仲間、負けたら関わり無しになる
スードって名前は、沢田達にバレないようにするためだから言わ

ないでくれ』

こんな感じのことを話したら納得してくれたよ…

『じゃあ負けたら書類やらせるから』

とか、意味不明なこと言われたけどな…

んで、今は雨戦だ

バトル開始からスクアーロが攻める

でも、山本は回避する

時雨蒼燕流（しぐれそうえんりゅう）　守式七の型
繁吹（しぶ）き雨

時雨蒼燕流　守式弐の型
逆巻（さかま）く雨

まだ防御しかしていない…

ん、前に出た

…攻撃に行くかな…？

時雨蒼燕流　攻式五の型
五月雨（さみだれ）

器用だな～

宙に浮かせたのをキャッチするとか…

ん？

スクアーロ、完全に無傷…？

まさか…？

山本が水柱を作るが、スクアーロも同時に作る

先に見つけた者勝ちの状況になった

先に見つけたのは、スクアーロ

そして山本を斬りつける

どぱっ

左肩から主に出血する

ここでスクアーロから、山本にとって絶望的ともいえることを言われる

『その時雨蒼燕流は、昔ひねりつぶした流派だからなぁ！！』

…やっぱりか…

さっきの『五月雨』に対する反応速度は、知ってたくらい早かったからな

そんなバッドニュースがあっても、山本は『完全無欠最強無敵』を信じ、戦うことを続ける

スクアーロはもう加減をしない

刀から放たれた仕込み火薬により、水が飛び散る

さらに柱を斬り砕き、破片を山本の方へ飛ばす

水のせいで視界が悪い山本は、破片を右目に当ててしまう

山本はもう一度五月雨をするが――――――

ガキィィィィ…

スクアーロが鮫衝撃（アタッコ・ディ・スクアーロ）を放ち、山本の神経を麻痺させる

どうにか右手で腕を打ち、硬直を解くが、次の攻撃を食らい、しばらくは左手は使い物にならなくなった

そして、鮫の牙（ザンナ・ディ・スクアーロ）

最後に雨の守護者の使命を体現する

もう山本はボロボロだ

しかし、スクアーロの一言で、何かに気づいた

『八の型、秋雨』

山本はもう一度立ち上がる

『時雨蒼燕流…』

ダッ

スクアーロに近づく

『時雨蒼燕流　攻式八の型
篠突(しのつ)く雨』

見事に決まった

どうやら、スクアーロが戦った時雨蒼燕流の継承者は、山本の父親と同じ師匠から一から八までの型を継承し、それぞれ別の八の型を作ったようだ

だが、スクアーロは篠突く雨をもう見切った

そして、野球でバットを持つように竹刀を構える

『時雨蒼燕流…九の型』

新しいので勝負する気か…

スクアーロも奥義、鮫特攻（スコントロ・ディ・スクアーロ）で迎え撃つ

『時雨蒼燕流、攻式九の型』

まずはスクアーロの攻撃をかわすが、すぐに方向を変えられ、再び攻撃が近づく

ガキン

ブァッ

なんとか柱のに隠れる

『とどめだぁ』

スクアーロが言うと、後ろに山本が襲いかかるが…

カチン

ズッ…

スクアーロは義手だったのだ

しかし…

ドバシャッ

スクアーロに水がかかる

スクアーロが切ったのは、水面に映った影だった

『うつし雨』

勝負が決まった

リングも合わせ、完全に勝った

「ざまぁねえ！！　負けやがった！！！　カスが！！！」

ＸＡＮＸＵＳは笑う

「用済みだ」

ＸＡＮＸＵＳが言うと、他の者がやろうかと言う

「お待ちください」

チェルベッロの一人が来た

「今アクアリオンに入るのは危険です

規定水準に達したため、獰猛な海洋生物が放たれました」

どうせ鮫とかだろ…

挙げ句の果てに、敗者であるスクアーロの生命の保証はしない…か

山本はスクアーロを助けようとするが、足場を落とされる

『おろせ』

スクアーロ！？

『剣士としてのオレの誇りを、汚すな』

……

スクアーロは山本を蹴り飛ばし、自分は……

水面が、血色になっていく…

『雨のリング争奪戦は山本武の勝利です
それでは次回の対戦カードを発表します』

雲、霧、風のどれかだな

『明晩の対戦は……
霧の守護者同士の対決です』

マーモンか…

骸とクローム…

どうか…

命に関わる傷は負わないでくれ…

次は、霧戦…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５０　霧戦！

今日の対戦は体育館で行う

…クローム……

マーモン…

大切な仲間に、順位なんてつけられない

二人とも、オレの大切な仲間だ…

「ハァ…」

思わず、ため息がこぼれた

「何ため息なんてついてんだよ

あぁ、まだスードの番になんないからか？」

「ベル…　まぁ、それもあるけどよ…」

正直、それもある

「ふーん…　相変わらずお前は謎だな」

「いやいや、ベル程じゃねぇから」

ベルよりは常識人のつもりだ

「お、向こうの霧の守護者来たぜ

…女かよ」

！！　クローム…

どうか、大きな怪我はしないでくれ……

「だまされないでください！！

そいつは骸です！！」

？

あぁ、モメてるのか…

隼人…骸じゃねぇよ？

クロームだし…

「六道骸じゃ……ないよ……」

おー、さすがボンゴレの超直感

ま、オレには効かないけど

「ありがと、ボス」

ちゅ

……クローム…？

あいさつ、ってなぁ…

…ハァ……

「んあ！スード！！」

…犬…

「スード、アイツらと知り合いか？」

「まぁ…一応な…」

ベルに不思議に思われたじゃねぇかよ！！

「それでは霧の対戦
マーモンＶＳクローム髑髏
勝負（バトル）開始！！」

まずはクロームの幻覚

…オレには全く効かないのは、ナゼ……？

しかしマーモンにも効いていないようだ

でもマーモンの幻覚も、クロームには効いていない

バキンッ

ジャララ…

マーモンの下に、鎖が落ちる

「ファンタズマいこう」

か…カエルが…！

超うける…

「やはりな……

奴の正体はアルコバレーノ、バイパー」

バイパーの顔見てみたいよな～

オレ、未来編までしか知らないからなぁ…

…ま、知ってるって程じゃなくなってるけどな…

マーモン…ん？　今はバイパー？

マーモンでいっか

マーモンは宙に浮いてるけど、一体どういう原理で浮いてんだ？

「藍色のおしゃぶりのバイパー
　アルコバレーノ一のサイキック能力をもつとも言われている術士だ」
ふむふむ

そうなのか

でも、クロームは諦めたりなんかしない

畜生道で大蛇を召喚する

しかしマーモンはおしゃぶりの力で回避

クロームは火柱を何本も作り出す

「確かに君の幻覚は一級品だ

一瞬でも火柱にリアリティを感じれば焼きこげてしまうほどにね」

…全くそうならないオレは何？

まさか、人間じゃないとか！？

…普通の人間では無いことは認めるけどよ……

「ゆえに弱点もまた

幻覚！！！」

マーモンの顔が消え、顔があった場所から冷気が放たれる

その冷気は火柱を凍らせる

これにはクロームも幻覚にかかってしまった

マーモン曰わく、
幻覚とは脳を支配し、その力は術士の能力が高いほど強く、術にかかる確率も高まり現実感（リアリティ）をもつ

そして術士にとって幻術を幻術で返されるというのは――――――

知覚のコントロール権を完全に奪われたことを示す

クロームの足が凍りついた

それでも念じようとするが…

ブゥン

ドギャッ

「っ…！！」

見たくない……

ここにいたくない…

親友が仲間に傷つけられている――――

クロームは、自分より槍の状態を確認する

マーモンは、槍がクロームにとって大切なモノだと気づく

そして…

パァン

「…ク、ロォ……ム…！！」

オレには何もできないのか？

辛い…

悔しい…

オレは、何のために強くなると決心したんだよ…！

南の気持ちとは裏腹に、クロームの腹は陥没していく――――――――

この時のクロームの脳裏に映っていたのは、病院でのことと、命の恩人である骸のこと…

そして、親友の南のことだ

南との、事故が起こる前の思い出

その映像は、南にも流れていた

そして、決まって映像と現実に変わらない部分がある

二人の首から下げてある、リング

南は、スードの姿になっても服の下にリングを下げていた

凪も、クロームになっても下げていた

それは、『親友』の証だから――――――――――――――――

「骸……様……

力になりたかった…」

「上出来でしたよかわいい僕のクローム
君は少し休みなさい」

響いた骸の声

シュウウウウウ…

霧がクロームをつつんでいく

数日前に南が黒曜ランドを訪れたときと同じ状況だ

「六道骸が!!!
骸が来る!!!!」

シュアアア…

「ムム！？」

ずる…

コオオォオオオ…

「クフフフ」

来たか…

ボゴボゴボゴ

ドギャッ

マーモンが攻撃された

「クフフフ　随分いきがっているじゃありませんか
マフィア風情が」

霧が晴れた

もうちょい早く来てればクロームは何ともなかったのによ…

ったく

「お久しぶりですね…　スード」

「そうだな、骸

監獄ン中からようこそ」

「クフフフ…

今はあまり話している時間は無いようですね」

骸とマーモンの戦いが開始した

骸は凍りつき、マーモンは氷を砕こうと近づくが、蓮の花が巻きつく

そして氷は一瞬で溶ける

マーモンもアルコバレーノの力を使うが、骸は修羅道で対応する

グニャアア

体育館が、変形する

骸はその中に火柱＋蓮の花を作り出す

皆気持ち悪そうにしている

「…スッゲェ面白いのに、どうした?」

「は？スード、何ともねぇのかよ…」

ベル？

何がそんなに辛いんだ？

こんなに面白い幻術バトルなんて、滅多に見れないぜ？

ピオイイイッ

骸が作った幻術が凍りつく

「あーぁ…　骸のヤツ、余裕じゃん」

「ししっ　マーモン負けるかもな」

「確かにそっかもなー…」

勝負も、一方的だ

骸がマーモンの幻覚に対応してたら、骸の後ろに迫り来る

そして骸全体を覆い、その周りでファンタズマが円になる

ファンタズマの内側には大量で大きな針

グチャッ

ファンタズマが縛り付ける

しばらくの静寂

「……！！　バカな！！」

骸が無傷で現れる

自分の周辺に蓮の花を咲かせて

「堕ちろ　そして巡れ」

うっひょう♪

決まったね、決めゼリフ

骸の手にはハーブボンゴレリングが２つ

骸が来てからあっさりだったなー

「まだだよ！！！」

サラサラサラ

塵になっていたマーモンが集まり、再び姿が見える

マーモンはまだ戦おうとするが…

さっきの自分の言葉を思い出せば挑むことが無意味だと分かるだろ

骸に幻術を幻術で返されたマーモンは、知覚のコントロール権を奪われている

ファンタズマがマーモンの首を締めつけ、マーモンの口の中に骸が入る

……気持ち悪いだろうな…

「ンムーッ！！！」

ボゴッボゴボゴッ

「ムムム！！！

やめろ！　死ぬっ！　死ぬ～～！！」

「君の敗因はただ一つ

僕が相手だったことです」

「ギャ」

ドンッ

マーモンは破裂し、完全に負けた

「これで……　いいですか？」

骸が手に完全なボンゴレリングを乗せ、言う

「霧のリングはクローム髑髏のものとなりましたので、この勝負の勝者はクローム髑髏とします」

複雑だな…

オレは、勝てば守護者確定

どちらが勝っても守護者は全員オレの知り合い

だけど、オレはＶＡＲＩＡの風の守護者

はぁ…

「ゴーラ・モスカ

争奪戦後、マーモンを消せ」

「は？　なんでだ？」

話聞いてなかった…

「スード聞いてなかったのかよ…

マーモンのヤツ、逃げたんだとよ

元からその分の力は使わないつもりだったらしいし

ししっ　なっさけねーの」

「ふーん…

説明サンキュー、ベル」

良かった…

生きてるのか…

「まったく君はマフィアの闇そのものですね　ＸＡＮＸＵＳ
君の考えている恐ろしい企てには僕すら畏怖の念を感じますよ」

ピク、とＸＡＮＸＵＳが反応する

「なに、その話に首をつっこむつもりはありませんよ
僕はいい人間ではありませんからね」

自分で言うかよ…

「ただ一つ…

君より小さく弱いもう一人の後継者候補を、あまりもてあそばない方がいい」

…骸だからこそ言えるよな…

だって、自分がそうだったし

「スード」

「あ？骸、何だよ」

突然話しかけられた

「…Ｎｏｎ　ｐｅｒｄｅｒｅ」

「敵なのに言っていいのやら…

ま、オマエに言われなくても分かってるっての」

「クフフ…　それでは…」

骸は消え、クロームが現れる

『負けるな』…か…

負けるワケねーじゃん…

「勝負は互いに3勝ずつとなりましたので引き続き争奪戦を行います
明日は風の守護者の対決です」

「よーやくか…　楽しみ♪」

ちょっと殺気混じりで言ったら、沢田側のヤツが冷や汗を流していた

「ご存知の通り、風のリングは争奪戦においてのリングの数には数えません」

ったく、分かってるよ！

「やっぱり…　あんなヤバい奴と咲ちゃんを戦わせられないよ！」

沢田が叫ぶ

おい、オレに対して奴だと？

…シバくぞコノヤロウ

「大丈夫だって！　絶対勝つから！」

…ウザ

どーしよっかな～♪

ゆっくり痛めつけて勝つか、瞬殺するか♪

楽しみ♪

「でも…」

沢田の忠告は間違ってないぜー♪

「おい」

珍しく、ＸＡＮＸＵＳが声を出した

「スードが勝つのは決定事項だ

死にたくなけりゃ、逃げるんだな」

…そんなに過大評価してたのか…

なんか…

怖っ…

「そんな…！　咲ちゃん、やっぱり「大丈夫！！　絶対負けないから！」

……」

その自信は、どこから来るのやら

「死ぬ覚悟はあるようだな　明日が楽しみだ

じゃあな」

一言言って、その場から去る

次はいよいよ、風戦…！！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５０　霧戦！（後書き）

南は未来編までしか知りません
今度設定で追加しておくので！
活動報告でまたアンケートしてます
結構大事なこと（だと思う）ので、意見ください…

Straordinariamente7　周りから見た風！

ＶＯＮＧＯＬＡ　大空
沢田綱吉

風間さん…

ごめんなさい…

オレのせいで、巻き込んじゃって…

風間さんは、獄寺君とかヒバリさんと仲良くて…

正直、なんであんなに怖い人と仲良いのか、不思議だと思う

そういえば、ビアンキの師匠でもあるし、イーピンに惚れられてるんだよな…

『帝王』で有名な人と同一人物なのに、あんな性格で…

そういえば、オレって風間さんのこと全然知らないな…

リボーンは風間さんをどうにかしてマフィアにしようとしてるし…

本当に、巻き込んじゃってごめんなさい

今は、それしか言えないかな…

ＶＯＮＧＯＬＡ　雨

山本武

風間か…

今頃、どこにいるんだろな…

ま、アイツなら大丈夫だろ！

そーいや、オレが自殺しようとしてた時、一応だったけど止めてくれたんだよな…

オレのことを心配してじゃないだろうけどな！

でも、アイツが認めた仲間には、優しいんだよな…

獄寺が怪我したときも、助けてたし

やっぱアイツは謎だな～

今度、色々聞いてみっか！

ＶＯＮＧＯＬＡ　嵐

獄寺隼人

南…

アイツ、今どこにいるんだ…？

ロン毛の奴に連れてかれて、ＶＡＲＩＡに捕まってるハズなのに、姿見えねぇし…

オレが、強ければ…！

でも、南はきっとオレより何倍も強ぇ…

…認めたくねぇけど……

アイツは、『謎』だよな…

まさかとは思ってたけど、あの『ミナミ・カザマ』と同一人物だったしよ…

めんどくさがってるけど、誰より仲間を大切にすると思う

夏祭りでも、オレの為だ、とか言ってたしよ…

応接室に行った時も、一応止めてくれたんだよな…

今度、礼言わなくきゃな…

ＶＯＮＧＯＬＡ　雲

雲雀恭弥

南か…

今はスードって名前で敵のとこにいるんだってね

おかげで仕事が溜まってるよ…

まぁ、南の本気の戦いが見れれば許してあげるよ

南の本気…

見たことないんだよね…

一目見たときから、かなり強いって思ったよ

なんせ、『帝王』の『ミナミ・カザマ』だしね

それでも南には謎が多い

まぁでも、それが南だからね…

VONGOLA　霧

六道骸

南ですか…

クフフ

彼女は面白いですよ…

契約の条件をクリアしているにも関わらず、マインドコントロールが出来ない

こんなことは今までなかったのでね…

それに、前世のことを覚えているようですし

やはり謎が多い

だからこそ、乗っ取ってみたいんですがね…

凪は親友だとも言っていました

まさか、『凪』を知っているとは思いませんでしたよ

やはり、面白い

ＶＯＮＧＯＬＡ　霧
クローム髑髏

南は、親友…
すごく優しくて…カッコ、よくて…
南とペアに、なってるリングは…私の宝物…
南のおかげで、アリアさんと、ユニちゃんと…友達になれた
感謝しても、しきれないくらい…
でも、知らないことが…たくさんある
『帝王』で有名な、南だってことは…知ってるけど…
並盛では、よく…聞く
『絶対に逆らっちゃダメな人の内の一人』って…
よく分かんない、けど…

やっぱり、知らないことが…ある
聞いたら、教えてくれるかな…？

ＶＯＮＧＯＬＡ　晴
笹川了平

風間南！？

誰だそれは！！

…ふむ。沢田達の知り合いか！

京子と同じクラスだとは…

思い出したぞ！

ケンカが強い、風間か！！

ボクシング部に勧誘しようとしてるヤツだ！

だが、面倒くさがりだとも聞くな…

ボクシングに対しては、そんなことないだろうがな！

うぉおおぉ！！

早速トレーニングだ！

極限――――！！！

ＶＯＮＧＯＬＡ　雷

ランボ
（戦う前）

風間南ー？

誰それー

１０年後ランボ

風間さんですか…

とても仲間思いな方です…

今、修業もつけてもらってますし

本人は、ストレス発散だとしか言ってませんが…

仲がいいのは、獄寺氏などでしょうか…

１０年前と変わりないらしいです

最近は、よくお菓子をもらいます

余ったから、と言ってますが、凄いおいしいんですよね…

ですが、謎が多いです…

いつか教えてくれれば嬉しいんですがね…

ＶＯＮＧＯＬＡ側　風候補

山下咲

風間さん…

あの人は、よく分からない…

私がこの世界の人間じゃないことを知ってるのかな…？

正直、謎が多くて怖い…

ビアンキさんの、師匠みたいだし…

それに、悔しいけど…

最初は風の守護者を風間さんにするつもりだったみたい…

でも今は、風間さんなんかより、スードって人の方が気になる…

絶対に私が守護者になる！

ＶＡＲＩＡ　大空
ＸＡＮＸＵＳ

南…

アイツは、きっとかなり強ェ

風のリングは数にはならねぇが、勝つだろう

負けたらかっ消すだけだ

VARIA　雨

S（スペルビ）・スクアーロ

（戦う前）

南か

アイツのことは、よく分からねえ〃

そういや、睡眠薬が効かなかったなあ〃

『あんなもんじゃ、オレには効かねぇよ』とか言ってたが

腹を殴っても、気絶しなかった…

手刀しても、意識がまだあった…

早くアイツの戦いを見てみたいぜえ〃

ＶＡＲＩＡ　嵐

ベルフェゴール

南？アイツのことは、よく分かんねー

別に気にしてないけど

武器は千本だったと思う

千本って殺傷能力低いから、改造してるらしーな

毒付きとか、ほんとおもしれー

それにアイツ、テキトーだからな

ししし、早くアイツの勝負見てー

ＶＡＲＩＡ　霧

マーモン
（戦う前）

南かい？

僕もよく知らないよ

めんどくさがってるから、言うのが面倒なだけだと思うけどね

別に僕は知りたいとは思わないよ

知ったって金にならないからね

南は頭がいいから呪いを解くカギを見つけてくれると嬉しいんだけど

金取るようなら頼まないけど、南ならそういうことはしないね

早く戦いを見てみたいかな

ＶＡＲＩＡ　晴

ルッスーリア
（戦う前）

南ねぇ…

私もよく知らないのよね

最近知り合ったばかりだけど、それでも謎なのよねぇ

スクアーロに勝手に連れて来られたのに文句聞いたことないし…

まさか、嬉しかったとか…？

…それはないわね…

あの子は『面倒』で全て片付けるから…

ほーんと、『謎』って言葉が似合うわ♪

これから楽しみねぇ♪

ＶＡＲＩＡ　雷

レヴィ

南か…

アイツは、最初このオレを無視したな！

オレのリング戦にも来なかった！

ムカつく奴だ…

それなのに、ボスは……

ムカつくぞ！

特徴としては、謎が多いことだな

ＶＡＲＩＡに来た時も、馴染むのが早かったからな

だが、ボスのことを一番に思ってるのはオレだ！！

それだけは譲らん！

アルコバレーノ　晴
ＶＯＮＧＯＬＡ　家庭教師
リボーン

風間…

アイツはとんでもねー力を持っているはずだ

…オレ以上のな…

だからこそファミリーに入れたいのに、頑なに拒否しやがる

風の守護者にさせたかったのにな…

咲でもなるにはなれるだろうが、風間以上の適任者はいねぇ

どうせなら、スードって奴が風間だったらラッキーなのにな

…だとしたら、謎が増えるか

アルコバレーノのことも知ってるぽかったしな

アルコバレーノ　雨
ＶＯＮＧＯＬＡ　晴の師匠
コロネロ

風間か…

よくリボーンから聞くな、コラ！

いくら誘っても仲間にならないってな

『ミナミ・カザマ』と同一人物らしいしな…

雑誌を読んだ印象からは言わなそうなことを言ってると思ったら、
そいつが言ったワケじゃねぇのか…

いくら聞いても謎が多いな、コラ！

門外顧問
ＶＯＮＧＯＬＡ　大空の修業相手

バジル

風間殿とは、拙者が沢田殿に会った時の方ですね

一目見ただけですが、凄い方だと分かりました

リボーンさんは、風の守護者にしようとしてたらしいですが…

山下殿よりも適任らしいですね

とてつもなく強く、謎が多い方だと

是非手合わせしてみたいです

キャバッローネファミリー　ボス
ＶＯＮＧＯＬＡ　雲の修業相手
ディーノ

風間ってのは、正月とスクアーロが来た時に見かけた奴だな
リボーンに狙われるとは…
アイツは風に相応しい感じがしたが、仕方ないよな…
戦ってみてぇな
何より謎が多いとか…
恭弥と知り合いで、仲もいいらしいな
…だからあんなにカリカリしてたのか…？
ったく…
スクアーロのせいでオレに迷惑かかってるじゃねぇかよ

ＶＯＮＧＯＬＡ　嵐の師匠

シャマル

風間南…

アイツは怖ェよ…

花見ん時も、一言であんなに恐怖を覚えたことはなかったよ…

隼人と仲いいみたいだが…

そういや、隼人が毒針で攻撃された時、アイツが応急処置をしたらしいな

謎だらけだな

何故か毒はほとんど消えていた

Ｙシャツを当てただけだって聞いたが…

何者なんだ…？

ＶＯＮＧＯＬＡ側　風の師匠
ＶＡＲＩＡ側　風の弟子
ＶＯＮＧＯＬＡ　嵐の義姉

ビアンキ

南ね…

最初は…いえ、最初から謎な子よ

リボーンが仲間にしたがってるのは知ってるわ

でもあの子はめんどくさがりだからね…

ポイズンクッキングは私以上の威力があるし、不思議な子

咲のことを嫌ってるとも聞くけど…

咲はいい子なのに…

仲良くなってくれれば嬉しいけど、南は嫌でしょうね

最近連れ去られたって聞くから、早く見つかってほしいわ…

黒曜
ＶＯＮＧＯＬＡ　霧の仲間
城島犬

南？

アイツは何考えてんのか分かんねーびょん…

最初は気に入らなかったけど、なんかいい奴らしよ…

そういや、気配消してもすぐバレるってこともあったな

ったく、謎だらけだびょん！

黒曜

ＶＯＮＧＯＬＡ　霧の仲間

柿本千種

南…

よく知らないよ…

骸様とよく話すのを見るけど…

あぁ、クロームと仲いいらしいね

今スードとして戦ってるらしいけど、興味ないね

骸様の情報を持ってるなら教えてほしいよ…

ほぼ皆が南に対して思ってることは、『謎』だ

そして、『仲間思い』

確かに南はそういう性格だ

しかし、だからこそ……

だからこそ、『風』に相応しい

Straordinariamente7　周りから見た風！（後書き）

一応書いた人は、

・候補者
・その師匠
・修行相手
・リング戦を知ってて南の知り合い

って区切りです

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５１　風戦！～上～

とうとう風戦

どんだけ待ったと思ってんだよ…

「あー、さっさと殺りたい♪」

「南…殺気が溢れてるぜ…？」

「あ…」

ベルに言われて気づいた

やっぱ、アイツを思い出すと殺気がなー

「ししし　そんなに楽しみなんだ」

「まーな♪

でもどーせ、本気出す前に終わるからなぁ…」

「相手は、あの女だよな

確かに力の一割も出さずに終わりそー」

…一割出さずに終わるって、遊んでるみたいじゃねェかよ

「ん、そろそろ時間だぜ？」

時計を見ると、１０時半

「ん、じゃあスードになってくるか」

ＶＡＲＩＡ隊服に着替え、ポーチを腰につける

念のためで、刀を見えないように忍ばせる

手袋をし、フードを被る

簡単だが、正体を知ってる人以外にはバレてない

そういや、骸がオレのことをクロームに話したらしい

昨日電話したら、

『絶対…勝って、ね…』

って言われた

クロームも恭弥も…

謎だ…

準備が終わり、ＸＡＮＸＵＳ、ベル、モスカ、レヴィと並中に向かう

学校に着いたら、既にチェルベッロがいた

「今日は2年A組の教室です」

オレの教室!?

…正体気づいてるのかよ…

教室に着いても、まだ誰も来ない

ガラッ

あ、沢田達が来た

「咲ちゃん…」

「大丈夫だよ、ツナ

ビアンキさんからポイズンクッキングも教えてもらったし、私の武器の修業もしたし！」

やっぱビアンキか…

ってか、アイツ武器なんて持ってんだ…

ガラッ！！

「ひ、ヒバリさん！？」

…恭弥が他の人の戦いを間近で見るなんて……

「相手の風の守護者の戦いが見たくてね…」

さいですか。

「そういえばスードとヒバリさん、知り合いっぽいんだよなー」

ガララッ

また扉が開く

あ…

「ク…クローム髑髏…!?」

クロームまで来たのか…

「スードの…戦いだから…」

「え？　髑髏もスードのこと知ってんの？」

「…うん」

ま、クロームにも口止めしてあるから大丈夫だ

こうして、
ＸＡＮＸＵＳ、ベル、モスカ、レヴィ、沢田、山本、隼人、恭弥、
クローム、笹川了平…

そして、相手のアイツ…山下咲が揃った

観覧者は、チビちゃん、コロネロ、オッサン、バジル、犬、千種

「それでは、ルールの説明をします」

チェルベッロが話す

風の守護者の使命を表すフィールドなんだよな…？

なのに、教室…

「この戦いでは、今この場にいる候補者全員の命が関わってきます」

！？

…そんな…

「ですが安心してください
自分が守ればいいだけです」

「…は？」

いや、こう言いたくなるだろ

「風の守護者の使命に基づいたルールです
『ファミリーのサポートと攻撃を同時にこなす、最速の強風』
これが風の守護者の使命です」

…一番大変じゃねぇか！！！

ふざけんなよ！？

…だからウィントは勝者を守護者にすることにしたのか…

「候補者以外の方には、こちらの赤外線感知式レーザー付の指定スペース内に入っていただきます」

今度は狭い

まぁ、教室だからな…

ちょうど机６台分くらいだ

「それでは、詳しい説明をします
風の対戦では、仲間に怪我を負わさせられるか、リングを揃えられたら負けになります
『仲間』とは、沢田氏側とＸＡＮＸＵＳ様側の今来ている候補者全員です
この先の説明をする前に、コイントスをしてください」

…めんどそーな気がするんだけど…

「表か裏か、決めてください」

「じゃあ…私から…　表」

勝手に言ってんじゃねぇ！！

不公平だろ

「ハァ…　じゃあ裏ー」

ってかそれ以外選べないしー

ピンッ

コインが上げられた

パシッ

おー…

上手いね、さすがチェルベッロ

「変更は無いでしょうか」

「大丈夫です…」

「ねーよ…」

そしてコインを隠していた手をどかす…

「裏ですね」

ってことは、オレか…

「それでは説明に戻ります

まずはスードが、仲間を守りつつ、戦っていただきます

山下咲はリングを奪って完全な風のボンゴレリングにするか、スード以外の候補者に怪我を負わさせられれば勝利となります

もちろん、沢田氏側の候補者でも、ＸＡＮＸＵＳ様側の候補者でも問題ありませんが、仲間になる可能性があるのをお忘れなく

スードは不利な状況の中ですが、仲間を完全に守り、リングを完成出来れば勝利です

制限時間は１０分です

１０分過ぎても候補者に傷一つ無く、リングが完成出来てなければ交代となります

勝敗が決まるまで、永遠に続きます」

…大変だぁぁぁぁ！！！

でも、仲間に攻撃しなくて済むならよかった…

逆だったら…

ひたすらアイツに攻撃するな…

んで、リング奪って勝利～♪

「以上で説明は終了ですが、質問はありますか？」

「一ついいか？」

どうしても気になりことが一つある

「何でしょうか」

「候補者同士での殺り合いは？」

「それは不可能です

候補者の方には足枷をさせてもらいます

鎖の分は動けますが、それ以上は動けませんので」

なるほど…

「よろしいでしょうか」

「あぁ、それなら問題ない」

っても、オレが最初に不利ってのはいいハンデになるかもな

…キツいのは変わんないけどよ…

「それでは…11時から対決を開始します」

時間を分かりやすくするため、か…

「ししっ　スード、早速不利じゃん♪」

「ベル、嬉しそうに言うなよ…

まぁ…こんくらいなきゃ、つまんなくね？」

見てても、殺ってても

「うしし　確かに」

「でも、あっち側のヤツも守らなきゃいけないとはな…

めんどくさ」

「まためんどくさいかよ…

こん時くらい、殺る気出したら？」

「心配無用

殺る気なら出してるから」

待ちわびたよ…

「それにしても、相手のヤツ逃げなかったな

オレは逃げると思ってたけど」

「そんなことすんなら守護者になるなって話だ

オレは待ちわびてイライラしてんだ

逃げたら殺しにいく」

「スードってやっぱ分かんねー」

オレは普通だと思うんだけどな…

その頃の、沢田達

「咲ちゃん…　やっぱり…」

「ツナ！　何度も言わないでよ

それに私は有利なんだよ？

すぐに勝負は決まるって！」

この時、咲が勝つ可能性があると思っている者は、皮肉にも咲以外にはいなかった

それなのにも関わらず、咲は負けると思わない

『マンガの世界だよ？
主人公がいる方が勝つに決まってる！』

という無責任で、現実を分からない者の理由からだ

これは、『現実』

痛い、辛い、悲しい…

嬉しい、楽しい、幸せ…

その全てが存在する

だが、咲はそれに気づかない

沢田のように原作で存在する者達のことも、南、スードのことも、
『キャラクター』としか認識していない

それが南と咲の、一番大きな差だと言えるだろう

だから今も、

『ツナ達は守らなくても生きる、主人公だから』

『話の展開的にも、私が勝つ運命』

など、命の重さも分からずにいる

「あの…　雲の人…」

クロームが部屋の隅にいる恭弥に話かけた

「…何」

恭弥は骸とクロームのことを知っているから、少し不機嫌になる

「スードの正体…知ってるの…？」

「……だとしたら？」

「…不利だけど…負けない、よね…？

絶対に…」

「…負けたらただじゃおかないから」

「……」

そしてクロームはスードを見た

「南…　怪我しないでね…」

誰にも聞こえないような小さな声で言った

「もうすぐ１１時になります
風の守護者はこちらに来てください」

既に観覧者は指定スペースに入ってる

…狭そうだな…

『仲間』は、ＸＡＮＸＵＳ達が前窓側、沢田達が廊下側にいて、足枷をしている

…一方に寄ってくれれば楽なのになー

チェルベッロめ…

カチ、カチ、カチ…

部屋には時計の針の音が響く…

カチ、カチ…

「それでは風の対決
スードVS山下咲」

カチ…！

「勝負（バトル）開始！！」

風の戦いが、始まった――――――！！！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５２　風戦！～中～

勝負開始と共に、咲はスードに襲いかかる

「はあぁっ！！」

咲は何かを手に持ち、攻撃する

ガギィィィ…ン

スードは千本で防ぐ

「へぇ…　手裏剣…それも随分大きなモノだな…」

「そうよ…！

あなたは千本　適うはずがないわ」

普通の手裏剣は半径約４センチなのに対し、咲の大手裏剣は半径約１５センチあった

「何言ってるんだか
そんなモン、何の根拠にもならねェぜ？」

「威力は絶対に私の方が上！」

「だが、現にオレは防いでる」

「ッ！！」

確かに咲の攻撃をスードは、全く動かず…

まるで、手を添えたかのように防いだ

咲はスードから離れ、間合いをとる

そして通常サイズの手裏剣を投げる

キィンッ

キンッ

スードは避けることもなく、千本で防ぐ

それも、右手だけで

「まだよ！」

咲は懲りずに手裏剣を投げる

数は、先程の倍の約２０

キンッ…キキンッ

数が倍になっても、変わらず右手だけで防ぐ

「ふぁ～…あ…
なぁ、こんだけ？」

「余裕ぶってる暇はないわよ！！」

さらにその倍以上の手裏剣が投げられる

キキキン

キキンッ

キキキキキンッ

相変わらずスードは片手

誰がどう見ても、咲に勝機はない…

沢田達は、咲の言葉や態度が豹変して、戸惑いを隠せずにいた

「あれが…咲ちゃん…？

なんか…様子が違う…」

「…確かにな…

だが好戦的になっても、山下に勝機は…」

山本は言葉を濁す

「うん…　オレもそう思う…

あのさ、オレ、前にスードに会ったときに思ったんだけど…

なんか知ってる人な感じがしたんだよね…　何でだろう…」

沢田は超直感以外の直感で、スードの正体に薄々気づいていた

最も、『誰か知ってる人』としか分かっていないが

「１０代目！　それは一体…？」

「…分かんない…

でも…あんまり大きな声では言えないけど…

勝負が、あの…オレ達の予想通りでも…」

『敵対しなくて大丈夫だと思う』

その言葉は言えなかった

「そーだ、ヒバリ！
テメェ何か知らねーのか！？」

隼人は恭弥に聞く

「さぁね　君達に言うつもりはないよ」

「テメェ…！！」

隼人は苛立つが、足枷のせいでどうにもできない

「それにしても、スードは遊んでるね」

恭弥が言う

「え…？　遊んでる？」

近くにいた沢田は恭弥の言葉が気になり、聞く

「全く力を出してないってことだよ

あれくらい、寝ながらでもできるんじゃない？」

「なっ！」

実際、恭弥の言う通りに寝ながらでもできる

「そんなことより、勝負を見たら？
君の守護者になるんじゃないの？」

恭弥に言われ、沢田達は戦いに集中する…

「おいおい…　そんだけかよ…

期待はしてなかったが、ここまでザコいとはな…

『修業した』っつってたよな？　修業してこのザマか？

期待外れにも程がある…」

スードは大きくため息をつく

「じゃあ…

この猛襲を受けてみなさいッ！！！」

再び咲はスードに近づき、大手裏剣で攻撃する

キィンッ！！

キンッ！

ガキッ！

ギィィン…

ガンッ

スードは咲の攻撃をカンペキに受け流す

ドカッ

スードは攻撃のために寄ってきた咲を、蹴り飛ばした

「ハァッ…　っく…

そん…な…　私の、攻撃…が…ぁ…！？」

咲の攻撃は数は少ないが、一撃一撃が重たかった

「は？　これで終わりか？
冗談もいい加減にしろ
どこが『猛襲』だ」

咲は息を激しく乱し、肩で呼吸している

だが、スードは息が乱れるどころか、汗一つない

「まずはオレに歩かせてみろよ」

そう、スードは一歩も動いていないのだ

「5分経過しました」

チェルベッロが話す

残り、5分

「…そうだぁ…

あなたのリングを奪う他にも、勝つ方法はあるんだ…

ふふふ…　これで…」

咲は立ち上がり、一番近くにいるクロームに近づく

「！！　テメェ…！」

スードは急いで追う

「終わりよッ…！！！」

咲は大手裏剣をクロームに投げる

『くそッ！

間に合っても、千本じゃ防げねぇ…！』

スードの頭の中では、そんなことを思っていた

ブゥンッ…

大手裏剣はクロームに近づいていく

「……！」

クロームは足枷を付けられてるので、逃げられない

大手裏剣が、クロームの目の前に来たとき、黒い影が前に立った

ガキィンッ…！！

防いだのは、漆黒の刀

「あ…あの刀は…！」

隼人が気づいたようで、声をあげた

「あぁ…　あの刀は…」

山本も一度直に刀を交えたことがあったので、気づく

「…念のためでも持っててよかったぜ…
千本（あれ）じゃ力（パワー）で負けるからな…」

クロームの前に立った黒い影が、声を発した

「そうだ…　あれは…！」

沢田も気づく

「…南…？」

隼人が黒い影に聞く

「…あぁ…

そうだぜ？」

黒い影…スードは、フードを外し、南の赤い髪が露わになる

「怪我ねぇか？　クローム」

「…うん…！」

南は、クロームとのペアリングを服の上に出す

「あ…そのリング…」

クロームがリングを見て、南に聞こうとする

「悪ぃ…　とりあえずアイツぶっ飛ばすから、話はそれからな」

「うん…」

今の南の脳内では、

『あのヤロー、クロームに武器投げやがって…！！

脳みそ取り出すぞコノヤロウ…！！』

とか、イロイロ言っていた

殺気を全開の８割出す

ブワワッ！！

「…！」

咲は一瞬で青ざめ、冷や汗を流す

咲だけではなく、フィールド…教室内にいるほとんど全員がだ

何ともないのは、ＸＡＮＸＵＳただ一人

「あ…やべ…」

南は他の人にも被害が及んでいるのに気づき、殺気を弱くする

すると、張りついていた空気が少し緩くなる

あまりの殺気で動けなかった、沢田や、精神力が強くない者は膝をつく

「そうだな…　一応スードとして戦うから千本にしよう」

南は刀と千本と、どっちを使うか考えていたのだ

刀をしまい、ポーチに手を入れる

「だが、クロームを傷つけようとした罰だ

痺れ付きの千本を使う」

手に取ったのは、宣言通りに痺れ薬がついてる千本

「…は…ハッタリ言っても無駄よ！

それに、当たらなければ意味はないわ！」

「ハッタリじゃねぇし、毒じゃないのを感謝してほしいくらいだな

当たらなければ、か…　果たして避けられるかな？」

ピッ、と南は千本を投げた

しかし咲の腕に少しの傷を付けるだけ

「ほら…　ちゃんと狙いなさいよ…！

こんなかすり傷…　！！！」

咲は力が入らなくなり、膝をつく

「オレはちゃんと狙ったぜ？

これは、かする程度が一番効くからな」

南はワザと狙いを少し外したのだ

いや、そこを狙っていた

「…！　力が…入る…

なるほど…　確かに直後に痺れてくるけど、時間は短いようね…」

「確かに短くしたが…

オレは本気で戦う時、一瞬の隙も見逃さないぜ？」

南は今、咲が痺れ、膝をついても動かなかった

「！…く…

私が！　私こそが風の守護者に相応しいのに…！

なのに、みんなして…風間さんばっかり…！！

風の守護者は、私のために作られたのに…！！」

「…やはりテメェが問題か…

オマエのせいで、こっちにも迷惑かかってンだ…

だが、仲間に武器を向けるようなヤツが仲間を守れるのか？」

チェルベッロが言った『怪我を負わさせれば勝利』というのは、仲間を裏切るかどうかの見極めだったのだ

どういうことかというと、人間、楽に勝つ方法があれば楽な方を選ぶ

そして、少しの傷でもつけることができたら勝ち、というのは有り得ない程楽だ

ただ、それが本当にいいとは限らない

つまり、ルール上では許可したが、実際はしてはいけない

チェルベッロはワザと許可し、風の守護者に相応しいか判断していたのだ

…普通に考えたら、仲間を守る使命があるのに、相応しいか判断するリング戦で許可されないことは分かることだ

だが咲は、楽な方法に気持ちが揺らぎ、クロームに武器を向けた

ここで、万が一に咲がリングを揃えても、守護者になれないことが決まった

「んじゃー、そろそろ戦うかな…

あと3分しかなくなっちまった」

喋りすぎたか、と南は少し思う

「あぁ、もう一つ言っておこう」

南は人差し指を立たせ、咲に言う

「…何かしら…？」

「オマエの攻撃タイムは…」

南が咲に向かって走り出す

咲は大手裏剣を構える

「終わりだ」

南はそう言い放つと同時に、右足で咲の腹を蹴り飛ばす

ドガッッ

「ガハッッ…」

咲は壁にぶつかり、血を少し吐く

壁は一部、破壊された

「あ…　恭弥、これは仕方ないからな…？」

南は校舎を壊し、怒られないかとヒヤヒヤする

「……勝てばね…」

「当たり前！！」

もはや南は遊ぶつもりはない

「まだ…これしきのこと…！！」

咲は立ち上がり、南に近づく

「…遅い」

南は咲のパンチを余裕で左に交わす

「おらよ！！」

右肘を、咲の背中に打ちつける

それだけで咲は前に倒れる

カカカカカカカカカカッッッ

倒れた咲の全身を囲うように千本が床に刺さる

「なっ…　動けない…！！」

それもそのはず…

全身にピッタリと千本の壁ができているのだから

「まー、ここで毒針刺して殺してもいんだけど…
そのくらいじゃクロームに武器を向けた罪は免れない」

南はめんどくさそうに言うが、内心とてもイラついているのだ

「ぐっ…　これしき！」

咲は強引に立ち上がる

千本は、長さ１０センチ弱だから多少の切り傷を覚悟すれば抜けられる

「あぁ、緩くしたんだから抜けてもらわなくちゃな」

南から殺気が出る

今度は咲に集中して放ってるので、他の者には影響は少ないだろう

「残り、2分です」

「もう2分か…

じゃ、そろそろ終わりにしようかな…」

「やれるものならね！」

咲は大手裏剣を構える

南は千本を持ち、咲に向かって走り出す

「近づいて来たわね！　もらったわ！」

咲は大手裏剣を投げる

避けたら後ろにいるクロームに当たるから、避けられない

「避けられないなら、止めればいいだけだ！」

刀を取る

ガキィンッ

刀で大手裏剣を右にはじく

正面に返すと咲がまた投げてくるからである

そして、勝負は一瞬で、あっさりと終わった

ドゴッ

南が咲を蹴り飛ばす

パキッ

同時に千本でチェーンの鎖を一つ壊し、ハーフボンゴレリングを南

が奪う

「きゃっ――――！！」

ドガンッ

咲は壁に激突し、意識を失った

「リングを一つに、か…」

南は自分の首からリングを取る

カチッ

「風のボンゴレリング…　完成したぜ…」

南はチェルベッロに見せる

時間はギリギリだ

チェルベッロは目を合わせ、一度頷く

「風の守護者は、スード改め、風間南です」

風戦が終わった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５２　風戦！～中～（後書き）

勝負、あっさりしすぎでした…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５３　風戦！～下～

オレは勝った…

…オレは…

どうすればいい…？

「南…」

「！　あ…クローム…」

突然話しかけられたからビックリしたぜ…

「どした？」

「…さっきは…助けてくれて、ありがと…」

「いいって！　巻き込んで、ゴメンな…」

今回のことは、確実にオレのせい

「ううん…　巻き込んでなんか、ないよ…」

「だとしても、ゴメン…」

オレはクロームに軽く頭を下げた

「お…おい、南…」

「ん？　隼人？」

「…足枷、外させてくれ…」

…勝手に外せばよくね？

「…そのリングが必要なんだってよ…」

「あぁ…　ちょっと待ってろ
順番に外す」

まず、クロームから

そして、恭弥、沢田、隼人、山本、笹川了平…

ＶＡＲＩＡの方を見たら、足枷が破壊されていた…

…まぁいっか

「おい、風間」

チビちゃんか…

「…何？」

ＸＡＮＸＵＳ達のとこ行きたいんだけど…

「オマエ、どうしてヴァリアーとして戦った？」

「どうもこうも、ヴァリアーはオレを風の守護者にするために誘拐したんだと

どこからか、オレが並盛にいるって情報が漏れたらしいからな」

ま、別に良かったけどな…

「じゃあ、ツナの守護者になるのか？」

「…沢田が勝ったらならなきゃいけないかもしれないけど…

オレは、オレの仲間しか守らねぇぜ？」

だって別にどうだっていいしー

「…残念だな、ツナ

風間がいても、咲に守護者になってもらうのは変わらなかったみたいだぞ？」

代理でもって言葉を忘れるなよ…

もうアイツは、どう足掻こうと守護者にはなれないからな♪

「オレは決めてねぇよ！！
父さんに言えよ！」

父さん…？

……あ、門外顧問のボスか…

うーん…

今のは原作知識ではなく、ＶＡＲＩＡアジトで見つけた情報だからな…

やっぱオレ、頭イカレた？

ここでチェルベッロが話した

「風のリングは数に数えないため、勝負は互いに3勝ずつとなりました

そのため、引き続き争奪戦を行います」

次は雲か…

「明日はいよいよ争奪戦守護者対決最後のカード

雲の守護者の対決です」

恭弥は…

「あり？　恭弥は？」

いつの間にか消えていた

「あっ…　さっき帰りました…」

沢田が遠慮がちに言った

ま、それが普通の反応だよなー

さっきまで完全な『敵』だったからなー

「おいＸＡＮＸＵＳ、どーすんだ？」

チビちゃんが聞いた

「次にヒバリが勝てばリングの数の上では４対３となり、すでにお前が大空のリングを手にいれているとはいえ、ツナ達の勝利は決定するぞ」

そーいや確かにな…

「そん時は約束通り負けを認め、後継者としての全ての権利を放棄するんだろーな」

チビちゃんのセリフに、ＸＡＮＸＵＳは少し口角を上げる

「あたりめーだ

ボンゴレの精神を尊重し、決闘の約束は守る

雲の対決でモスカが負けるようなことがあるば、全てをてめーらにくれてやる」

…モスカって、そんなに強かったっけ？

…ま、明日になりゃ分かるな！

沢田達は、ＸＡＮＸＵＳの発言を聞き、嫌な思いがよぎっている

…オレは恭弥が勝つと思うぜ？

一応敵だから言わないけど

「なお、山下咲は病院へ送っておきますのでご安心を」

「だ、大丈夫なんですか！？」

病院ってのにも心配か？

情けないなぁ…

「腹に痣が出来るかもなー

他の奴に比べたら軽いけどな」

隼人なんて次の日包帯グルグルだったらしいし？

「でも…咲ちゃんは…」

「自分から守護者にしてくれって言ってきたんだろ？

ならどうってことない」

「そうだけど…」

「じゃあ仮にアイツが守護者になったとしよう
ボンゴレなんて巨大マフィアは、いつだって命を狙われるようになる
だとしたら痣なんて無いに等しい」

「……」

ようやく黙ったか…

「オマエの周りを見ろ
クロームは内臓を失っていて、骸の幻覚でどうにかなってる
隼人だってまだまだ傷が癒えていない
山本は右目に包帯巻かなきゃいけない状態
笹川了平も右腕が骨折なり何なりとしてる
無傷な奴はいない」

クロームのことは、言いたくなかった…

「んじゃ、そろそろ帰るか…」

ＶＡＲＩＡの方へ行き、ＸＡＮＸＵＳに言う

沢田達は、敵でもなく、味方でもない南にどうすればいいか分からないようだ

変わりなく対応できるのは…

「…またね…南…」

「じゃーな」

この中では隼人とクロームだけだろう

「ししし　圧勝だったな♪」

「あと１０倍強かったら多少は楽しかったのになー」

アイツ弱すぎ…

「いや、１００倍じゃね？」

ベルが言う

「いや、１０００倍だ！！」

「「オマエに聞いてねぇよ」」

ベルと声が重なった

ったく…

誰もムッツリスケベに聞いてねぇっての…

あぁ、クロームに変なマネすんなって釘をさしておかなきゃな…

「ぬっ…」

「ＸＡＮＸＵＳＩ、風のリング渡した方がいいか？」

ムッツリを完全に遮断する

「…どちらでもいい…

行くぞ」

「ん、りょーかい」

「ししっ　さっさと帰ろうぜ」

あー、明日からもＶＡＲＩＡ隊服で来ていいよなー？

…恭弥は許しそうもないけど…

そして窓から飛び降り、帰る

一方、残された沢田達は南について話していた

「風間さん…だったんだね…」

沢田はまだ信じられないようだ

「ですが１０代目！　最初は南を風の守護者にするつもりでしたなら、ラッキーですね！」

隼人は南が仲間になってくれて嬉しいようだ

…もしかしたら咲じゃなくなっただけで嬉しいのかもしれないが…

「アイツは極限強い奴だぞ！」

「そうだぜツナ！

風間は味方じゃねぇけど敵でもねぇんだ！」

二人も隼人に同意する

「うん…　確かにリボーンから最初に聞いた時、ピッタリだと思った…

でも、風間さんがオレなんかの下には…」

「別に下になんてなんねぇぞ」

リボーンが口を挟む

「え？　でも…」

「ったく、もう忘れたのか？

風は空に関係なく、自由な存在なんだぞ」

「確かに天気ではそうだけどさ！！」

実際は天気と同じな訳ないと沢田は思う

「真の守護者は、天候と同じなんだ」

「！」

そうして沢田は今までの南を思い出す

とても気分屋だが、勉強を見てくれたこともあった

隼人の為だが、夏祭りにひったくられた売上金を取り返してくれたこともあった

そして、仲間を何より大切にしていた…

「確かに…そうだけど…」

沢田はまだ納得していない

「ガタガタ言うな

もう風間が守護者になるのは決定事項なんだ」

「…わかった」

そして帰った

次は、雲戦…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５４　初代風の守護者！

「風間南！」

「……」

オレ、寝てたハズなんだけど…

この声、誰！？

「起きてる気配は分かるんだから、ちゃんと起きろ」

「…その前に、アンタ誰？」

目はまだ開けない

…眠いから…

「オレはウィント！
聞いたことある名だろ？」

「！！？」

ガバッと起き上がる

目を開けて、姿を見る

身長、１７０センチくらい

髪型はオレと同じ

ただ、色は違う

青…群青色だ

目も同じく、群青色

他は…

オレと同じだ…

「…おい…　聞いてる?」

「ん?　何か言ってたのか?」

自称ウィントの姿見てたから、話なんて聞いてなかった

「…南、オレがウィントだって思ってないだろ…」

「よく分かったな

ってか、イキナリ呼び捨てですか…　別にいいけどよォ…」

ってか、オレと性格似てるなー

不思議だ

「んー、まぁ証明できる物なんて無いから…

オレが今、南と会っている…

これで証明できる？」

「できねぇよ」

でも、確かに…

何でオレと会ってるんだ?

「まぁ、一つビックリニュースを伝えよう」

「別にいいです」

嫌な予感しかしないし

「オレは南と同じ、転生者だ」

「…ま、そんな気はしてたよ」

だって、風の守護者なんて存在しなかったし？

「うーん、さすがだなぁ…

んじゃ、もう一個」

…もういいよ…

「漣はパシ…知り合いだ」

パシりって言いかけたよな…

ま、オレと同じ感じだな

「…驚かねぇの？

ま、いいや」

うん！

やっぱりオレと同じ性格だね！

「ハァ…

まぁ、ウィントだってのは信じるよ」

「お？　サンキューな」

…軽い奴だ…

まったく…

「ウィント、ありがとな」

「…オレ何かしたっけ？」

覚えてないのかよ！

「もし風のリングを受け継ぐ者が現れ、候補者が二人になったら勝者を風の守護者にしろって言葉

あれのおかげでオレは守護者断定だ」

「しゅ…守護者になりたかったのか！？」

「いや、相手を守護者にさせたくなかった

死んでもな」

むしろ、オレは守護者になりたくなかったけど！

「あ、その為につけた遺言だ」

…イマナント？

「漣から聞いたんだよ
んで、ソイツを守護者にしない為に漣に遺言があったようにさせたんだよ」

ホント、ありがたいなぁ…

「…ってか、漣はどこだ?
ここ、オレが死んだ時に来た場所だぜ?」

相変わらずの真っ白な空間

「南も?　オレも死んだ時、ここに来たんだよ
漣!!　死にたくなきゃ出てこい!」

ウィントは上に向かって叫んだ

「すみません！！！」

漣が突然土下座姿で現れた

…なるほど…

「「テメェ、何で消えていた？」」

お、ウィントも同じこと思ってたのか！

「…二人一緒で怖さ１００倍★」

ギロリ…

二人で殺気と睨みを全開★

「まままままままマジでスミマセン！！！！！！！！」

「「死んで詫びろ」」

「え…二人とも、知ってるよね？

オレが死ぬって、存在が消え…

ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！！！！！！！！」

二人で潰すって、楽しいね♪

「んじゃ、話を続けるか
ちょうどいい椅子ができたし」

「そうだな　頼むぜ、ウィント」

ふむ

やはりいい椅子だ

ちなみに椅子に名前があって、漣って名前だ

聞いたこと…ないな！

「あのルールを付けたのは、話の結末を知ってるからだ
南も覚えてるだろ？」

「それが…さぁ…」

ウィントは忘れなかった…

いや、消えなかったのか…

「まさか…　覚えてないのか!?」

「いや、覚えてないってか、消えた感じ…

ウィントは違うのかよ」

「…漣の読みは当たってたな…」

漣の読み？

…また漣のせいか…？

「理由を言うと、アイツ…山下咲と南の二人の存在しなかった者（イレギュラー）がいるからだ

んで、世界がアイツは放っておいても原作が変わらないと判断し、南の記憶が消滅しているんだ

原作との一番の違いは南になるからな」

…そっか…

ま、それなら仕方ないな

「ちなみに、南一人なら問題無かったぜ」

「アイツぶっ殺す！！」

あんな奴、いなければ良かったよ！

「…嘘だよ　南一人でも変わらない」

…なんだ…

ならアイツは放っておこう

「…んじゃ、戦いの結果は知らないのか…

ま、仕方ないな」

「ってかさ、ウィントは初代の守護者なんだろ？

なら何で？世（デーチモ）のこと知ってるんだよ」

おかしくね？

オレのいた世界と違うとか？

「オレは、転生されたのが初代の時だったんだ
だからリング争奪戦のこと知ってるんだよ
ま、未来編までだけどな」

「あ、オレも未来編まで
…もうかなり消えてるけど」

そっかー

時代が違ったのか

「…今から未来のことを、今どの位覚えてるか？」

急に低い声になったな…

そんなに深刻な事なのか？

「理由は分かんないけど、沢田が勝つってこと、

未来に飛ぶってこと、

死ぬ気の炎のこと、

…ユニが劇薬投与されること…」

ユニの事はアリアさんにも言われたからだけど…

「…じゃあ、匣は？」

「あ…　存在と、開匣方法くらいしか…」

…かなり消えてる…

「…知らないに等しいな…

じゃあ、これをリングに付けとけ」

渡されたのは、透明な丸いケース

「…どのリング？」

「あー、前世から付けてるっていうリングだ」

…あれが何か？

確か、ダイヤモンドのリングだよな…

結婚指輪じゃないけど、大きなダイヤモンドが付いた普通のリングだ

「いいから付けろ
未来行って、付けてる理由が分かるまで外すなよ」

「…分かったよ…」

カチッ

ピッタリだな！

見事にリングがケースに入ったよ！

ケースにもチェーンが入る穴があったから、付けてて嫌な感覚はしないな

「前世って言えば、ウィントは何で死んだんだ？」

「漣の手違い

んで、漣は楽するためにオレをリボーンの世界に送ったんだとよ」

オレと一緒か…

「ま、今は良かったと思うぜ？

G、スペード、アラウディとは仲良くなれたし

…何故かランポウに師匠にされたがな…」

「へぇ…　守護者として「オレは守護者じゃない！」

あ、は…はぁ…」

即答ッスか…？

「そ…そりゃ悪かった…」

「おう

…アイツら、どうなったのかな…」

ウィントは斜め上を見上げた

「アイツらって、Gって人とか？」

「いや、ボンゴレじゃない…

あ…何でもないぜ！」

…なんか、はぐらかされた…

「み…南…」

ん、椅子が喋ったよ

「ようやく目ェ覚めたか？」

「ウィント！　おかげさまで目はパッチリです！！」

…漣、本物のパシりになったのかよ…？

神様がこれって、ガキの夢が壊れるぜ…？

「南に出口を作ってやれ」

出口…？

「はい！　南、出口ってのはこの空間から出る為のドアみたいなも

んだ！」

あー要するに、もう起きる時間ってこと

「んじゃ、作るぜ」

パアァァッ

白い世界に、光るドアが出来た

「んじゃ、南…　またな」

「あぁ！　ウィント、楽しかったぜ」

ガチャ…

ドアを開ける

「またなー！！」

最後の言葉を言った

「行ったか…」

ウィントは呟いた

「心配してんのか？」

「ま、オレが風の守護者なんて作ったから南が戦うハメになったしな…

オマエが悪いんだけど！」

最後の言葉を強調して言う

「スミマセン…

南の事は、大丈夫だろ」

漣は、なんとなくそんな気がしていた

「ま、風の守護者だからな！」

「アイツは、風に相応しいよ…

何より仲間を大切にしてて、有り得ない程の自由人」

そして、もう一つ

「んで、強い…か」

「あぁ…

オレが少し強くしたけど、元からかなり強かったからな…」

そう、南は漣に強くされたが、そのままでも人間離れした程強かった

「さっすが♪　オマエが間違えて殺すだけあるな」

「オレだって怖いんだよ！」

漣はウィントと南という、怖い人を殺したのをかなり後悔していた

「オレは気に入ったぜ…

…だが、南には多くの試練があるだろうな…」

「…あぁ…　きっとな…」

二人は、南に多くの試練があるのを感じていた…

逃げられはしない、大きな試練を――――――――――――

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５５　風戦後の弱風！

私は、負けた――――

風間さんに――――

なんで？

なんで皆、風間さんばっかり…

私が、いるのに…

悔しい…

悔しい！！

今もこうして、ただ病院のベッドの上で寝ていることしかできない…

お腹に力が入らないの…

…でも、風間さんは強かったと思う

私があの時、クロームちゃんに大手裏剣投げて、間に合ったんだから…

「完全敗北かぁ…」

お腹に力が入らないから、小声でしか話せない

あんなにムキになって、お腹ばっかり攻撃しなくても…

…リングも取られて、風間さんは守護者確定

私は、もう絶対に守護者にはなれない…

初代風の守護者、ウィントか…

余計な遺言残してくれたわね…

ガララッ

突然ドアが開いた

「誰…？」

ドアの方を見ても、人影がない

「オレだぞ」

「あ…リボーン君」

どうりで人影が見えなかったのね…

「なんで来たの？」

「風の守護者についてだ」

…もう私は、守護者になれないよ…？

！！

もしかして、リボーン君ならどうにか出来るの！？

「な、何！？」

「咲、オマエが風戦で勝っていても、守護者にはなれなかったんだ」

…え…？

な…にを言ってるの…？

「なんで……！！」

「まず第一に、スードが風間だと分かったからだ
オレらは咲を風間の代理として戦わせたつもりだからな」

そんなこと、聞いてないッ！！

「…ツナのお父さんが決めたの…？」

「あぁ…　オレと家光で決めた」

…ひどいよ…

「それともう一つ…
咲がクロームに大手裏剣を投げたからだ」

「でも…　ルールで許可されたよ？」

チェルベッロは言ってたもん

「あれは、罠だ

仲間を守らなくちゃいけない風が、仲間を攻撃していいハズはないだろ」

…なんかリボーン君、怖いよ…

さっきから…

「ねぇ…　なんで怒ってるの…？」

「…咲が仲間に武器を向けたからだ」

「…そっか…」

私は、用済みね…

挙げ句の果てに、皆から嫌われた…

ただ、風の守護者になって、皆を守りたかっただけなのに…

ううん、結果として守れてないね…

京子ちゃんのお兄ちゃんにも、ランボ君にも、獄寺君にも、山本君にも…

怖くて何も言えなかった…

アドバイスも、何も…

「話は、これで全部…？」

「そうだぞ」

…なら帰ってくれればいいのに…

ガララッ

また誰か来たの…？

「咲ちゃん！」

「ツナ…？」

…ツナまで、私にヒドい事言いに来たの…？

「ごめん！」

…え…？

なんで…？

「やっぱ咲ちゃんを守護者にしない方が良かったんだよ…

怪我もしなくて済んだのに…

なのに、風間さんの代理とか頼んで、ゴメン！！」

…ツナも私が代理なこと、知ってたのね…

「それに、リボーン！

代理を頼むなら、オレにも風間さんの代理って早く教えてくれよ！」

「風戦の前に話したら、オマエは咲を戦わせなくするからな」

…なんだ、ツナは知ったばかりなんだ…

「そうだけど…」

「んじゃ、オレは帰るぞ」

リボーン君は病室を出てった

「咲ちゃん、本当にごめん…」

「ううん、もう気にしてないよ…」

…ホントは、守護者になりたかったけど…

元から私は代理だったのなら、どう足掻こうとムリね…

「あの…お腹大丈夫？」

「…喋りにくかったり、起き上がれないことはあるけど、大丈夫」

「そっか…」

ガララッ

「「咲ちゃん！　大丈夫（ですか）！？」」

「京子ちゃん…ハルちゃん…」

二人も来てくれたのね…

「あ…じゃあオレは帰るね」

「うん…　ありがとう、ツナ」

ツナが帰った

私がいるべき場所は、京子ちゃんやハルちゃんのような場所

戦う場所じゃないのかなぁ…

「大丈夫？」

「うん…」

「でもどーして怪我なんてしたんですか？」

「あ…ちょっと転んじゃって…」

リング戦のことは言えないよ…

「そうだったの…」

「はひー　お腹以外は大丈夫ですか？」

「ちょっと切り傷できちゃった…」

…風間さん、強かったなぁ…

「乙女に切り傷は大変ですよ！」

「ハルちゃんの言うとおりだよ！　傷は深くない？」

「うん、大丈夫…」

出来れば、一人にしてほしいな…

私の願望は、ツナ達と戦うこと

京子ちゃん達は大好きだけど…

一緒にいると、戦わない人になる…

「あの…　出来れば一人にさせて…？」

「…わかった！　何かあったら言ってね」

「…そうですね！　ハル達は咲ちゃんの味方です！」

…ごめんね…

京子ちゃんとハルちゃんは、病室を出ていってくれた

…あーぁ…

私は、二人を悲しませてる…

きっと、嫌な気持ちにさせた、とか言ってると思う

そんなこと、ないの…

私のワガママ

…私は、皆の心の支えにしかなれないのかな…

ううん、そんなことない

戦える…！

それに、未来のことを全部覚えてる！

情報は、一番強い！！

風間さんも、覚えてるのかな…？

『それはない』

！

王様！

異端界…いいえ、今は『新冥界（しんめいかい）』の王様

私がこの世界を変えることを条件に、特別な力をくれた人

『王様、どういうこと？』

脳内で会話する

『アイツ…風間南は原作知識が消滅している』

！？

なら、私しか未来を知らない…？

『…ホント？』

『あぁ　多少残ってるかもしれないが、知識と言える程ではない』

…それなら、風間さんには皆を守れない…！！

『それと、もう一つ教えておこう』

『…何かしら』

『風間南の情報だ』

風間さんの…

『アイツは、神界と魔界の適応者だ

そして、関わりができてる』

…また風間さん…

私じゃないの…？

適応者に、私がなりたかったのに…

『大丈夫か、咲』

『えぇ…』

『まぁ、気にするな

オマエは新冥界の契約者だ』

『…分かってる…

適応者なんかに負けないわ

…一人にして…』

正直、もう風間さんの話をしたくない…

『…じゃあまたな…』

それからは、もう話しかけられなかった

…風間さんには、負けない…！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５５　風戦後の弱風！（後書き）

…咲の印象、がた落ち…

新冥界っていうのは、異端界の中で言われている名前です

なので、異端界の者ではない人は知りません

次もリング戦以外の話になります

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５６　暗殺部隊との平穏！

「…ん…」

目が覚めた…

今の夢は…

きっと、現実だろうな…

今、どんな事話したかを鮮明に覚えてるから…

ま、気にしないでおこう

…で、ここは…

あぁ、昨日もＶＡＲＩＡの皆がいるとこに帰って、部屋のソファーで寝たんだ…

ベッドより、ソファーの方がよく眠れる

リングは４つまとめてテーブルの上だ

…４つって…

ま、今は一つだけケースに入ってるけど

時間を確認するために時計を見る

「…もう12時…」

さすがに寝過ぎた…

適当な服に着替え、ロビーに行く

ガチャ…

「ししし　こんなに遅いなんて珍しいじゃん
昨日疲れたか？」

ロビーには、ベルだけしかいなかった

「まさか　ただ昨日遅かっただけだっての」

昨日は１１時半には帰ってきたけど、武器磨きとかしてたら遅くなった

…次からは漣にやらせよう…

「ふーん…」

…対して興味ないんですか…

なら聞くなよ…

「今日で決まるなー

早く終わんないかな…」

正直、かなりめんどい…

「…めんどくさがってるだろ…」

「正解…

ってか、ちょっと考えたことあるんだけどよ…」

昨日武器磨きしながら考えたってか、思ったことだ

「あ？　何？」

「今日、オレらが勝ってもアイツら…特にチビちゃんが簡単に引き下がるとは思えない

またその逆も然り…」

後者の場合、ＸＡＮＸＵＳがな…

「…確かにな…

そしたらまた殺り合いか？」

「…さぁ…　ま、オレは確定してるから平気だけどー」

これ以上面倒になってたまるか！！

「…なんでそんな性格になったのか、不明だな…」

「なんで？」

「だってよ、普通南くらい強い奴なら戦い好きで強いだろ？
なのに面倒くさがりで強いって…
変な奴」

「本人の前で変な奴って言うのかよ…
オレは…生まれつき？」

修業とかしたこともないしー

「…あっそ」

…コイツ、呆れたな…？

まぁ、気にしないけどっ！

「腹減ったー　飯は？」

「自分で作れば？」

…用意してないのかよ…

「…分かった…　キッチンどこ？」

「飯作れんの？」

「…オシエナイ」

教えたら、ベルの分も作るハメになりそう…

「じゃあオレのもよろしくな」

…そんな言われ方じゃあねぇ…

「分かった！！　毒を致死量まで入れて作ってあげよう！」

「…普通の作れよ」

「ヤダ」

「普通の」

「イーヤーダ！！」

「…ケンカ売ってる？」

「セルフサービスだ」

「…相変わらず意味わかんねぇ…」

「ほっとけ」

「ってか作ってくれよ…」

ようやくちゃんと頼んだか

「ん、いいぜ」

「は…？」

「いや、作ってくれよってお願いしただろ？
オレは仲間にはちゃんと頼まれたら頼み聞くぜ？　あ、面倒事はムリだけど」

これはオレの基準だからな！

「…ホント、オマエって何者だよ…」

「失礼な！　人間だっての
んじゃ、飯作ってくるな」

「ん」

オレはドアに向かって歩く…

…あれ？

「…なぁ、キッチンどこ？」

聞き忘れてたんだよ！

「んー、忘れた」

…ベルに聞いたのが間違いだな…

「…じゃ、テキトーに探してみる

ベルはここにいろよ」

どっかに行かれたら、今度はベルを探さなきゃいけなくなる

「分かってるっつの」

ガチャ…

扉を開けて、キッチンを探しにいく

…でも、全く分かんないんだよなぁ…

あ、その辺の下っ端に場所聞くか

「あ、オイ！　そこのオマエ！！」

前にいるＶＡＲＩＡ隊服着た奴を呼び止める

「あ、南さん！」

…ここでも南さんかよ…

「何でしょうか？」

「キッチンってどこだ？」

「えっと…

説明しにくいので、案内します」

「おう、頼むぜ」

そのまま後をついて行く

3分後

「こちらです」

おぉ〜

広いな…

「ん、サンキューな」

「礼には及びません

それでは失礼します」

やっぱここの奴も礼儀正しいな！

決してオレが相手だからじゃない！！

「…ついでだし、ＸＡＮＸＵＳのも作っとこ」

ムッツリのは作らない

理由？

アイツに作る飯なんて無い！！

メニューは…

冷蔵庫を開ける

「刺身があるな…
寿司にすっか！」

とりあえず米を研ぐ

そして炊いてる間に刺身を寿司サイズにし、刺身以外のネタを作る

米が炊けたら、酢飯

「ん…　終わった」

ＸＡＮＸＵＳのは別の皿に盛り付けた

「まずはＸＡＮＸＵＳにだな」

もうキッチンの場所は分かったからＸＡＮＸＵＳの部屋の場所も分かる

一回行った道とか、すぐに覚えるからなー

ちょっと持ちにくかったけど、ガマンだ

コンコンッ

「ＸＡＮＸＵＳいるかー？
昼飯作ったんだけどよ」

「…」

…言葉は無いけど、起きてる気配はするんだよ…

「…入るぜ」

ガチャ…

「…何だ」

「寿司！　あ、ちょっと酢の匂いがするけど…」

…机の上に足あると、皿置けねぇんだけど…

「…よこせ」

「ん」

ん？

ＸＡＮＸＵＳは頼んでないだろって？

…ＸＡＮＸＵＳが『よこせ』って言うのは、十分頼んでることだと思う…

ってか、ＸＡＮＸＵＳにそんなこと言ってたら物投げられる…

……前にスクアーロが…な…

「…何固まってやがる」

「おっと、悪ぃ」

机には足はあるが、スペースができてた

そのスペースに皿を乗せる

「んじゃな

あぁ、食い足りなかったら作るから」

そしてＸＡＮＸＵＳの部屋を出る

…疲れた…

ＸＡＮＸＵＳの部屋は…

空気が重い…

「あ…ベル怒ってっかな…」

遅くなったからなぁ…

小走りでロビーに行く

ガチャ

「ベルー！　寿司作ってきた」

ソファーに横になってるし…

「ん…　飯できた…？」

「あ、悪ぃ…　起こしちまったな

寿司作ったぜ」

ベルは体を起こす

「…これ、南が作ったのか…？」

「？　そうだけど？」

オレはパクパク食べてるのに、ベルは一つも食べない

…寿司、嫌いとか…？

イヤ、それは絶対ない

リング戦初日、帰ってから寿司をウマそうに食べてた

ベルはようやく一貫食べる

「…ホントに料理できるんだ…

しかもウマいし…」

「オレは嘘はつかねぇよ

それにマズかったらＸＡＮＸＵＳにボコられるっての…」

「なっ…！　ボスにも作ったのかよ!?」

ベルは少し大声で言った

「お…おう？　それが…何か…？」

「…あのボスに飯作って、渡しに行って…

傷一つ無い奴、初めて見た…」

…そうですか

やっぱＸＡＮＸＵＳはおっかないンスね…

「…ま、オレ守護者になってあげてる立場だし…？」

「いや、ボスはそんなんに感謝も何もしねぇぜ…

やっぱ戦いが気に入ったんだろうな…」

「？　戦いが？」

昨日の風戦か？

「昨日、おもしれぇ戦い方をする奴だ、って言ってたんだよ…

ま、オレから見ても面白かったけどな♪　ししししっ」

…そんなに面白かったのか…？

…何がそんなに面白かったんだ…

「そういや、ボスの他には作ったのか？」

「いや？　ムッツリなんかに作らねぇよ」

ってか作りたくもない

「ししっ　じゃあアイツ今頃悲しんでるだろうな」

「は？」

「ボスと同じ飯が食えなくて」

「…ヘンタイだな」

「まぁな」

ムッツリで、ヘンタイで、ストーカーで…

最低なオッサンだぁ！！

「ん、ごっそーさん」

もう空になったか

「おう！」

ベル、しっかり礼も言うようになったのか！！

嬉しいから、デザートでも作ってやろう！

「何か食いたいデザートあるか？」

「作ってくれんの？」

「まぁな」

ってか、オレも食いたいし…

「…何でもいいや」

「じゃあ食材見て決めるな」

そして再びキッチンに向かった

「…南って何者なんだよ…」

ベルは一人、南のいなくなったロビーにいた

「あの性格で飯作ってウマいって…

ししっ　やっぱ変な奴」

南が料理をするようになったのは、幼い頃に両親を亡くしたからだ

その両親は互いに一人っ子で、二人の両親は既に他界していた

なので、南には親戚がいなかった

だから、南は一人で生活してきた

本来、どこかの施設に送られるハズだが、南の両親の遺書のせいでそうならなかった

『南は施設に送らせず、一人で生きさせてやってください。』

こう書いてあったのだ

理由はもう分からないが…

「ベル、ケーキとプリン作ってきた！」

南がＸＡＮＸＵＳに渡し、ロビーに戻ってきた

「二つもかよ！？」

「材料があったから」

平然と答える南

「んじゃ、ベルがこっちでオレこれな」

ケーキを決める南

しかし、これはＶＡＲＩＡとの最後の平穏となる…

…もうすぐ、最後の守護者戦が始まる――――――

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５７　雲戦！～上～

いよいよ、最後の守護者戦が幕を開ける…

…ところで、オレはどちら側で見ればいいんだろう…

うーん…

ま、とりあえずＶＡＲＩＡ側でいっか！

「なぁ…　モスカって強いの？」

「オレはよく知らねーよ」

…ＶＡＲＩＡであるベルが知らないのかい…

ま、恭弥に勝てるとは思わないけど

「そろそろ行くっぽいぜ」

…もう時間か…

「分かった」

並中に行く

…恭弥とは話したくないな…

アイツ、ワガママだからな！

ん？意味わからないって？

オレも直感で思ったから、オレも分からん！

ザッ

皆で並中到着～★

うん！なんか気分いいね！

「そうか…　あれを
咬み殺せばいいんだ」

…オレじゃないよな!?

モスカだよね!?

「…南、なんでそっちにいるの?」

「え…?　ダメッスか?」

恭弥君?

オレは仮にもＶＡＲＩＡだよ?

今だけだけど

「ワォ　僕に逆らうんだ」

「イヤイヤ、逆らうとかじゃなくてな…

まぁ、いいよ…」

もう恭弥に何を言っても無駄だな…

「ＸＡＮＸＵＳ、オレあっちの奴らといるからー」

「…好きにしろ」

「んじゃ！」

ふぅ…

ＸＡＮＸＵＳが許せばベルも許すからな！

ＶＡＲＩＡの法則だ！

「これで文句ないだろ？　恭弥…」

「……」

でた！

恭弥の無視！

ったく…どんだけワガママなんだよ！！

「南！」

「お？隼人」

「…なんでヴァリアーといるんだよ」

「いや、昨日も言った気がするけど…

面白そうだから？」

ってかそれ以外に理由ないし

「…だからって…ハァ…南に聞いたのが悪かったな…」

「オレのことなのに！？」

オイオイ…

そんなに変な理由か？

最近、皆からの扱いヒドいだろ！

「クロームは？」

「さぁ？　知らねーよ」

…来てると思うんだけどな…

「お待たせしました」

チェルベッロが来たか…

「本日のフィールドはグラウンドです」

グラウンドかー

広いのかな…

ま、恭弥がのびのびと戦えるな！

「行こうぜ」

「あぁ…　山本達は行かないのか？」

なんか、一言も話してないな

「あ…行くけどよ…」

山本達は、微妙な心境だよな…

オレが逆の立場だったら…

ま、普段と変わらないな…

「とりあえず、グラウンド行こうぜー」

早く終わってほしいからな！

理由？

とてつもなく眠いから

グラウンドに着くと、有刺鉄線に囲まれたフィールドが用意されていた

「こ……ここが…」

「そう、これが雲の守護者バトルの戦闘フィールド
クラウドグラウンドです」

いつの間にか恭弥、モスカ、チェルベッロは囲いの中にいた

「何ということだ…
運動場が!!」

「ガ…ガトリング!?」

笹川了平…もう面倒だから笹川でいっか

笹川と隼人が驚きの声をあげた

「雲の守護者の使命とは

何ものにもとらわれることなく、独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮き雲

ゆえに最も過酷なフィールドを用意しました

四方は有刺鉄線に囲まれ、８門の自動砲台が３０m以内の動く物体に反応し攻撃します

また地中には重量感知式のトラップが無数に設置され、警報音の直後爆発します」

ルールは特にないのか…

オレはフィールドは楽だけどルールがヒドかったから…

そんなに大変だとは思わないな

「まるで戦場ではないか！」

笹川はフィールドもルールも楽だったからな…

「怖けりゃ逃げろ」

「！？」

「てめーらのボスのようにな」

「ししし」

「ふざけんな！！　１０代目は逃げたんじゃねぇ！！！」

…あの…

ケンカはしないでくれますか？

オレ、一応両方に属してるからさ…

「ツナは来る必要ねーのさ
ヒバリはうちのエースだからな　あいつは負けねーって」

お、さすがＭｒ．ノーテンキ

「エース……

ぶはーはっはっ！！　そいつぁ楽しみだ！！！」

ＸＡＮＸＵＳ？

……面白いのか？

モスカ、か…

「……」

恭弥は無言でＸＡＮＸＵＳを見る

まぁ、恭弥は沢田の仲間でも無いのにエースって言われて、さらに笑われたから気分は悪いだろうな…

この機嫌悪いのが、オレに向きませんよーに

「んじゃ、円陣すっか！」

「そうだな！　風間！　オマエも入れ！」

「イヤだ」

これはさすがに即答だよ？

「南！　ヒバリの応援しねーのか！？」

「イヤ…それはするっちゃするけど…

円陣なんてアホみたいなこと、やりたくない」

「アホって言うんじゃねぇ！

これは１０代目が…！」

「極限プンスカだぞ！！」

「まーまー、いーじゃねーかよ

風間、入ってくれよ」

…皆して諦めが悪いな

「オレはオマエらの敵じゃないが、仲間でもないんだ

それを忘れるなよ」

「「「……」」」

ようやく黙ったか…

あ！　クローム発見！！

「んじゃオレ、クロームのとこにいるから」

勝手にクロームのとこに行く

「クローム！」

「あ…南」

うん、元気そうだな！

「…こうやって話すのは、久しぶりだな」

「そうだね…こないだ黒曜ランドに来てから…」

「だな…」

やっぱクロームと話すのと落ち着くよ…

さすがはオレの親友!!

「南…」

「ん？何？」

「…南は、どっちの味方になるの？」

……

いずれ聞かれると思ってたけど…

「分かんないな…

でも、クロームはオレの仲間だぜ！」

これだけは、言える

「！　ありがと…」

クロームだけじゃなく、恭弥も、隼人も、オレの仲間

だけどＶＡＲＩＡも仲間

…全面対決みたいになったら、オレはどうすればいいんだろう…

「南…」

ＸＡＮＸＵＳ？

「何？」

「……そろそろ戻ってこい」

「ん、りょーかい」

ってか、ＸＡＮＸＵＳがそんなこと言うなんて珍しいな…

……何かあるかもな…

でも、言われたからＶＡＲＩＡのとこに行く

「ヒバリーッ　ファイッ！！！
オ――――！！！！」

うわ…

円陣したんだ…

隼人の声しか聞こえなかったけど…

「それでは始めます

雲のリング　ゴーラ・モスカＶＳ雲雀恭弥

勝負（バトル）開始！！！」

雲戦開始…

最初に動いたのはモスカ

ガシャンッ

ドゥッ

「な！？　飛んだ！！！」

…機械とは思ってたけど、マジで機械だとビックリするな

ズガガガ

モスカの指から爆弾らしきものが恭弥に向かって飛んでいく

だけど――――

ガキィィ…

ゴキャッ

…何があったんだろうね？

モスカの右腕はもぎ取られ、他もボッコボコ

ピシピシピシピシ…

ドォン

あ…

モスカ爆発しやがった

「……」

カチ…

恭弥は無言でリングを完成させる

…いかにも暴れ足りないような表情をして

「な……」

ぽっか――ん

「え…」

ホゲ――…

「……」

キョトン…

「お疲れー」

うん！

オレ以外放心状態だね！

「これいらない」

恭弥はリングをチェルベッロに渡す

「へ？」

ガゴーン…

まぁ、ビックリするよなぁ…

「あの…」

恭弥はチェルベッロを無視する

「さあ、おりておいでよ

そこの座ってる君」

座ってるってことは、ＸＡＮＸＵＳか…

「サル山のボス猿を咬み殺さないと帰れないな」

恭弥君、君は強い人にすぐケンカ売るの辞めた方がいいよ？

じゃないと、この世界では厳しいよ？

「なぬ！」

「なぬじゃねーよタコ

それ以前にこの争奪戦、オレらの負け越しじゃん　どーすんだよボースーーー」

ま、オレには関係ないけど？

「……」

ＸＡＮＸＵＳはモスカを見、まだ策はあるような表情をした

そして椅子を蹴飛ばし、恭弥に上空から攻撃しようとする

ガッ

恭弥もトンファーで防ぐ

だが、反動で学ランが落ちた

ＸＡＮＸＵＳはそのまま後ろに飛ぶ

ダンッ

ふむ。見事な着地だな

「足が滑った」

「だろうね」

「ウソじゃねえ」

カチ

ピーッ

あ、地雷の警報音

ドォン

ＸＡＮＸＵＳは右に避ける

「そのガラクタを回収しにきただけだ
　オレ達の負けだ」

「ふぅん　そういう顔には」

ダッ

恭弥はＸＡＮＸＵＳに向かって走る

「見えないよ」

ＸＡＮＸＵＳに近づいた恭弥は、トンファーで攻撃する

ビュビュッ

…まぁ、かわされてるけど

「ヒバリの奴何をしとる！！
機械仕掛けに勝ったというのに！！」

笹川は叫ぶ

…何って、戦いたいんでしょ…

ウイイィ…ン

自動砲台が標準を合わせる

ガガガガ

ドォン

ドンッ

二人は関係ないかのように戦い続ける

「安心しろ　手は出さねぇ」

「好きにしなよ　どのみち君は咬み殺される」

いや、だから…

「おのれ～～!!　ボスを愚弄しおって!!」

「まてよムッツリ」

「ムッツリ！？」

「勝負に負けたオレらが手ーだしてみ
次期１０代目への反逆とみなされ、ボスともども即うち首だぜ」

まー、そうなるだろうな

「ではあの生意気なガキを放っておけというのか！？」

「なんか企んでるぜ、うちのボスは」

「！？　何を…だ……？」

「知らねえよ」

「な…」

「マーモンかスクアーロなら知ってたかもね

南、何か思い浮かばね？」

…オレに振るな

「…さぁ…

でもモスカが機械なら、あんだけぶっ壊されたから暴走とかしそうじゃね？

んで、皆殺しとか？」

「ししし　いーねぇ、皆殺し♪」

コラコラ、楽しむな

バチッ

ＸＡＮＸＵＳ…

「手……　出てるよ？」

「あやつ、ボスの動きをとらえてるだと！？」

「アンビリーばぼー」

「くっ」

ＸＡＮＸＵＳは手を戻す

ビビッ

恭弥は攻撃を再開する

「チェルベッロ」

「はいＸＡＮＸＵＳ様」

「この一部始終を忘れんな　オレは攻撃をしてねえとな」

…何だ…？

ブオン

！！！

恭弥の左ももを、何かが掠める

「恭弥！！？」

オレは恭弥の元に走る

…何が起こった…？

ガクッ

恭弥は膝をつく

ブシュッ

血が噴き出している

ドンドドン

「！？　隼人！」

隼人がいた場所も爆発する

…良かった…

どうにか避けたか…

ドガァン！

今度は後ろ…！

「ベル！」

…ギリギリで避けたみたいだな

「恭弥、大丈夫か！？」

何とか恭弥の元に着いた

「…あれは何？」

「オレもよく分からない…」

一体どういうことだ…

「……なんてこった

オレは回収しようとしたが向こうの雲の守護者に阻まれたため、
モスカの制御がきかなくなっちまった」

……オレの読み、当たっちまったじゃん…

「なに!?　暴走だと!!?」

隼人が叫ぶ

…オレは誰を守ればいい…

守りたい仲間が、ここにいるのに…！

誰を…

「行かなくていいの？」

「！！　恭弥…？」

「君が守りたい人が他にいるでしょ
僕は何ともないから早く行けば？」

…恭弥…

「…ありがとな」

オレはまず、クロームを探す

…爆煙が邪魔して…

クソッ！！

クローム…どこだ！！

「ぶはーはっは！！　こいつは大惨事だな！！！」

ＸＡＮＸＵＳは笑う

…オレにはこの暴走が目的とは思えない…

……まだ、何かあるのか…？

だとしても、今は仲間を……！

その時クロームは、南を探していた

そして、フィールドに仕掛けがあるのを忘れ、中に入ってしまった

カチ

「!?」

ピ――ッ

警報音

この音が南に届く

「！　クロームッ！！」

南の位置からクロームを助けることはできない

ドガンッ

爆発した…

どさっ

犬と千種がギリギリでクロームを助けた

南は、クロームが助かったのに一安心するが、走り、駆け寄る

だが、南とクロームの場所はとても離れている

「クローム！　逃げろ！！」

南は叫ぶが、爆音にかき消される

ウイイィィ…

南が叫んだ理由…

それは、フィールド内のもう一つの仕掛けの自動砲台があるからだ

そして逆からはモスカ

「クローム！！！」

南は走るが、間に合わない…

ガガガガ

ブオッ

自動砲台とモスカに、完全に挟まれ、砲撃される――――

ドゥッ

だが、炎の壁が、クローム達を守った

「…まさか…」

南は一人の人物を思い浮かべていた

カラカラカラ

フッ

自動砲台とモスカは止まった

シュウウウウ…

炎を放ち、クロームを守ったのは？の文字が書いてあるグローブを着けた者――――――――

沢田綱吉だった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５８　雲戦！～下～

南はクロームに駆け寄る

「クローム、大丈夫か？」

「うん…」

南はクロームが無事で安心すると同時に、後悔していた

『…なんですぐ、クロームを見つけられなかったんだよッ……！！』

普通はそんな事を思ったりしないが、南は仲間を自分の命よりも大切にしている

だからこそ、後悔は大きい

「あれは……」

「じゅ…１０代目！！」

「……」

「来たか……だが」

モスカは再び暴走し始めた

爆弾が、沢田に降りかかる

シュルルルルル…

「カスから消えていく　それに変わりはねぇ」

沢田は爆弾を睨みつけ、グローブに炎を灯す

そして炎を利用し、空を飛ぶ

シャッ

爆弾を避ける

そして、炎を爆弾に当てる

ドドドドン

爆弾は空中で爆発

「な、何ー！？」

「と……飛んでる！！」

敵も味方も驚く

ボウッ

沢田は更にグローブの炎を大きくし、モスカの上空に迫る

ダッ

沢田は、一瞬にモスカの左腕をもぎ取る

「な……何をしたんだ!?

何だ？　今の動きは!?」

「……」

ＸＡＮＸＵＳは無言のまま沢田を睨む

「おい、デクの棒」

ボッ

左手の炎が大きくなる

「おまえの相手はオレだ」

ドゥッ

もぎ取ったモスカの左腕を破壊した

ドシュシュ

シュルルルルルル

モスカは背中から大量の爆弾を投げ、沢田に向かって飛んでいく

ドドドドン

全てが沢田に的確に飛んでいく

「さ……沢田が！！」

「全弾が１０代目に！！」

「モスカの奴ターゲットを絞ったな」

ブオ

モスカの腹から、隼人曰わく圧縮粒子砲が飛んでいく

ブオッ

ドガン

沢田は難なく避ける

ボッ

シュッ

拳の炎が大きくなり、空中に現れる

「！！」

沢田の少し上にモスカが来る

「１０代目！！」

モスカの腹が光る

ドカッ

圧縮粒子砲が放たれる前に、沢田が殴り飛ばす

ドゴッ

「つ……強い！！」

「ああ」

「さすが１０代目！！」

「ボ……ボス！！

……！？」

モスカが圧倒的に負けてるというのに、ＸＡＮＸＵＳは笑っていた

南は、ＸＡＮＸＵＳがまだ先の事を狙っている気がしていた

「ＸＡＮＸＵＳ……　一体これは」

ボファッ

沢田が聞こうとした時、モスカが再び飛んできたのだ

バン

左手だけで受け止める

グググ…

ボウッ

右手の炎が大きくなる

ズバッ

沢田はその炎でモスカを縦に切り裂いた

「おお！！」

「やったぜ！！」

ズンッ

ズ…ッ

切り裂かれたモスカから見えたのは、意外な人だった

「!?」

ゴツ

この人の写真を南はＶＡＲＩＡアジトで見たことがあり、知っていた

「…ボンゴレファミリー９代目ボス…

ボンゴレ?世(ノーノ)」

そして南は理解した

この事態…沢田が9代目を手にかけさせる事がＸＡＮＸＵＳの狙いだと

「な…なんと…」

「中から人が……！！」

シュウウウウ…

沢田の額の炎が消える

「……え……こ……この人…

9代目……！？」

「！！　そんな…なぜここに！？」

一同は９代目が現れたことに驚いていた

「ど……どうなってんだ……？

……え？なんで……モスカ……から！？」

沢田の横に、リボーンが来る

「おい、しっかりしろ！

！

ちっモスカの構造……前に一度だけ見たことがある……

９代目は……ゴーラ・モスカの動力源にされてたみてーだな」

「！　動力源！？」

「そんな！」

「ど……どーして！？」

「どーしてじゃ、ねーだろ！」

「！？」

「てめーが9代目を手にかけたんだぞ」

ＸＡＮＸＵＳが言い放つ

沢田は青ざめ、手袋に付いた血を見て震えだす

ＸＡＮＸＵＳは沢田を責める

南はその話を聞き流していた

南にとって9代目は、面識も無いし、ボンゴレに入りたくないから興味ないのだ

ただ、仲間が傷つかないで済んでほしい、それだけ願っていた

その時、9代目が動き、声を出した

「悪いのは……私だ……」

「9……9代目!!」

9代目が意識を取り戻したので、南は少し興味を持つ

「やっと会えたね…綱吉君…

すまない…こうなったのはすべて私の弱さゆえ…

私の弱さが……

ＸＡＮＸＵＳを永い眠りから目覚めさせてしまった……」

「！！」

「！？」

永い眠り――――

それは８年前に起きたボンゴレ史上最大のクーデター、『揺りかご』に関係する

反乱軍の首謀者は９代目の息子のＸＡＮＸＵＳであるのは機密扱いにされ、知るのはごく一部の者だけだった

そしてＸＡＮＸＵＳは８年間眠り続けていた…

怒りと執念を増幅させて――――――――

沢田とリボーンは詳しく聞こうとするが、9代目は状態がどんどん悪くなっていく

「大丈夫ですか!?しっかりして下さい!!」

「…風間…南さんはいるかい…?」

「!?　風間さん…?」

突然出された南の名前

「…オレに何か用か……?」

「一言だけ、伝えておきたくてね…」

「……何の話だ」

「風の守護者は、自由でいい…
だから風なんだ…」

「…そんなこと、とっくに知っている
無駄な話をするのなら、遺言の一つ位残したらどうだ」

南は少しイラついていた

自分が敵対する者同士の仲間がいて、どちらを守ればいいのか悩んでいたことを、簡単に答えを出された気がしたからだ

しかし9代目の言葉が限りなく正解に近い気がして、更にイラつきを大きくさせた

南にそう言われた9代目は、沢田と話を続けた

『いつも眉間にシワを寄せ、祈るように拳をふるう』

沢田の戦う表情を表した言葉だ

そして、９代目は次期ボンゴレボスに選んだのは沢田だと言う

９代目は何も言わず、沢田の額に指を持って行き、死ぬ気の炎を灯した

しかしその炎はどんどん小さくなっていく

「だが君で……よかった…」

その言葉を最後に、９代目は気絶した

「よくも９代目を！！！」

グラウンドに響く、ＸＡＮＸＵＳの声

「9代目へのこの卑劣な仕打ちは実子であるＸＡＮＸＵＳへの、そして崇高なるボンゴレの精神に対する挑戦と受けとった！！」

「な！？？」

「しらばっくれんな！　9代目の胸の焼き傷が動かぬ証拠だ！！

ボス殺しの前にはリング争奪戦など無意味！！

オレはボスである我が父のため、そしてボンゴレの未来のために

貴様を殺し仇を討つ！！」

つまり、ＸＡＮＸＵＳの狙いは9代目を沢田の手で殺させ、悪役に陥れた沢田を殺すことだ

そうすれば揺りかごを知る者も１０代目としてＸＡＮＸＵＳを信頼し、抵抗勢力も排除される

そうさせるために、沢田の守護者をモスカによって攻撃させていた

沢田が仲間を助けに来る、そう分かっていたから仕組んだ罠だったのだ

「そ……そんな事のために……！！」

「憶測での発言はつつしんで下さい、リボーン
全ての発言は我々が公式に記録しています」

「あいつら…」

「やはりチェルベッロはＸＡＮＸＵＳ側についてやがったんだ！！」

「好きにしやがれ　オレはもうキレてんだ」

リボーンが殺気を込めて言う

チェルベッロはその殺気に少し怯える

「だが9代目との誓いは守って手はださねーぞ

……生徒の勝負にはな

オレがそう言っても、戦いが嫌いなオレの生徒がどーするのかは知らねーけどな…」

沢田は無言で立ち上がる

「ＸＡＮＸＵＳ」

沢田は覚悟を決めたようで、ＸＡＮＸＵＳの名を呼んだ

「そのリングは……返してもらう……

おまえに9代目の跡は継がせない！！」

その言葉は戦う事を表していた

「よく言ったぞ、ツナ」

「ボンゴレの歴史に刻んでやる　ＸＡＮＸＵＳに楯突いた愚かなチビが一人いたとな」

「一人じゃないぜ！

１０代目の意志は、オレ達の意志だ！！」

「個人的に」

各々が武器を構える

「くるかガキ共！！」

「いいねぇ」

ＶＡＲＩＡも戦闘態勢になる

「あ、オレは入らないんで」

南は、両方の守護者なので手出しができないのを分かっていた

「反逆者どもを根絶やせ」

ＸＡＮＸＵＳがスタートの声を出した

「お待ち下さい！」

しかし、チェルベッロが制止する

「９代目の弔い合戦は、我々が仕切ります」

「なに！！」

「我々にはボンゴレリングの行方を見届ける義務があります」

「何言ってやがる　ＸＡＮＸＵＳの犬が！！」

「口を慎んで下さい　我々は9代目の勅命を受けています
我々の認証なくしてはリングの移動は認めません」

チェルベッロは死炎印が押された紙を出す

「よくも抜け抜けと！
その死炎印は9代目に無理矢理押させたものだな！」

「我々は、勝利者が次期ボンゴレボスとなるこの戦いを
大空のリング戦と位置づけます
すなわち、今まで行ってきた7つのリング争奪戦の最終戦です
いかがでしょうか？　ＸＡＮＸＵＳ様」

チェルベッロはＸＡＮＸＵＳにのみ意見を聞いた

「悪くねぇ」

「なお、両者の守護者の風間南はどちらの味方になっても構いません
それでは明晩、並中にみなさんお集まり下さい」

「あーらら　モドキに執行猶予あげちゃったよ」

「なに！」

「てんめー！！」

「ツナは修業で力を使い果たしてたんだ　グッドニュースだぞ」

「フッ　明日が喜劇の最終章だ
せいぜいあがけ」

ＸＡＮＸＵＳは大空のリングを半分沢田に弾き飛ばす

コオォ…

カッ

ＸＡＮＸＵＳの炎でＶＡＲＩＡ、チェルベッロ、南は姿を消す

南は自宅に戻った

とても久しぶりの自宅だ

「…明日、どっちに味方すればいいんだろう…」

ＶＡＲＩＡの元に帰らなかったのは、まだ気持ちの整理が出来ていなかったからだ

チェルベッロからは自由でいいと言われた

南はどちらか片方にのみ力を貸す事ができない

どちらにも仲間がいるから

だが、そんな曖昧な状態でいられないのも事実

だから南は悩んでいた

南が部屋で休んでいた時だった

「……誰…って、チェルベッロか…」

玄関に人の気配がした

ガチャ…

「…何か用か？」

「はい　明日の大空戦の事です
あなたはどちらの味方でもないと思いますが、必ず来て下さい」

「……強制招集ってワケか…」

「はい　もちろんリングも必ず持ってきて下さい」

「分かってるよ…」

「それでは失礼します」

チェルベッロは去った

バタン

扉を閉めて、南は再び悩む

だが、この答はいくら考えても出せないのだ

南は分かっていながら考える

何としても仲間を守りたくて……

次は、大空戦…

全てが終わる

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５９　大空戦！～上～

大空戦…

この戦いで全てが終わる

南はまだ悩んでいた

昨夜から、今まで…

悩みながら、並中に行く

結論は出ない

並中には、まだ誰もいない

それもそのはず

今はまだ午後7時

家にいるより、という思いから早くに来た

一応でも、ＶＡＲＩＡ隊服を着て

「…オレは、どうすれば……」

今日は、風が強い

だが、風向きはバラバラ

南の心と同じだった

しばらくして、チェルベッロが来た

お互い気付いているが、何も話さない

そしてとうとう…

ガッ

ＸＡＮＸＵＳが来た

そして隼人、山本、笹川、バジル…

リボーンに沢田が来る

そこにチェルベッロが行くが、南はまだボーっとしてる

行きたくないのだ

どちらの味方をすればいいのか分からないから

だが、守護者は集まる

クローム、恭弥、ＶＡＲＩＡの仲間、ランボ…

そしてもう一人、誰もが驚く者が来た

「…咲ちゃん!?」

そう、山下咲

もう負けたから守護者にはなれないのにも関わらず、来た

「山下咲は自ら守護者になれなくても戦いに参加したいと言い、来ました」

チェルベッロが言う

南もこれには驚き、イラつく

そして皆のいる場所へ行く

「……戦いに参加…？」

疑問に思ったことをチェルベッロに聞く

「はい　山下咲は異なりますが、強制招集をかけたのは他でもありません

大空戦では、７つのリングと守護者の命をかけていただくからです」

その守護者には、咲は入っていない

「リングと守護者の命をかける……？」

沢田は二つ目のかけるモノに納得がいかない

「そうです」

「ちょっ　何言ってんの！？　ランボはケガしてるんだぞ！！？　ランボを返せ！！」

しかしそれはＶＡＲＩＡも同じ

『招集がかかったらどんな姿だろうと集まる』

それが守護者の務めだから

「じゃ、じゃあなんで咲ちゃんまで…」

「山下咲は守護者になれなくてもリング争奪戦を見届けたいと言い、我々が許可しました

強制招集もかけていませんので、詳しい理由は本人に聞いてください」

「な…咲ちゃん…なんで…？」

沢田達は咲が自ら来た事が謎だった

「…私、皆の勝利を見届けたいの…
代理でも、守護者だったから…」

咲の本心は分からない

沢田達は咲の言葉を信じられなかった

クローム(仲間)に武器を向けたことは、裏切りに値する

ここで南が口を開いた

「ハッ　わざわざ死にに来たのか？

オレは風戦の時、テメェの息の根を止めてもよかった

そうしなかったのは…」

南は咲を睨みつけた

「オレの、気まぐれだ」

南はそれだけ言うと、ＶＡＲＩＡの所へ行った

「ししっ　何わざわざ絶望させたんだよ？

何も言わず殺せばよかったのに♪」

「別に、なんとなくだよ…

チェルベッロ、早く始めろ」

南は早く終わらせたくて、チェルベッロに言った

「それでは大空戦を始めましょう」

まず、守護者のリングを回収された

沢田達は雨、雲、霧、晴のリング

ＸＡＮＸＵＳ達は嵐、雷のリング

南の風のリングは別で集められた

南と咲を含めた守護者はカメラ搭載型モニター付きリストバンドを渡され、各守護者戦が行われたフィールドへ移動した

そして、それぞれが戦った場所に着くと、ポールが置いてあった

頂上には、フィールドと同じ種類のリングがある

そしてその時

グサッ

渡されたリストバンドに内蔵されていた、デスヒーターと呼ばれる毒が守護者に注入される

この毒は瞬時に神経をマヒさせ、立つことすら困難にする

そして３０分間解毒されなかったら――

絶命する

解毒方法は、守護者のリストバンドに守護者と同種類のリングを差し込むこと

そうすれば内蔵された解毒剤が投与される

大空戦の勝利条件は、ボンゴレリング全てを手に入れること

説明が終わった途端、ＸＡＮＸＵＳは沢田を殴り飛ばした

だが、リボーンの早打ちで特殊弾はギリギリで撃たれた

「大空のリング

ＸＡＮＸＵＳＶＳ沢田綱吉

勝負（バトル）開始！！」

その頃、南は悩んでいた

だが、その悩みは昨夜から考えていたこととは違う

「……どうすればいいんだ…？」

南はデスヒーターの毒が効かなかった

理由があるとすれば、前世でよく毒を盛られたからだろう

世界的に有名になれば、命を狙われるなんて事は当然だ

そのため、毒全般に耐性が出来てしまっていた

チェルベッロ達も気付かない

「とりあえず、安全の為に解毒っと…」

いつも通りの動きでポールを登り、解毒する

ドシュッ

「よし、これで絶対に大丈夫だな…」

ポールから下り、教室に戻る

目の前には、毒に苦しむ咲の姿

南は解毒する気なんて無い

だが、『風紀委員』としてしなくてはいけないことがあった

『校内で死人は出さない』

恭弥が決めたルール

仲間のルールに逆らうワケにはいかない

「ハァ…」

南は頑丈なヒモを持ってきた

「な…にを…する、つも…り……？」

咲はどうにか声を出す

「風紀委員として、校内で死人を出せねぇからな」

南は咲の足・手を縛り、椅子に結びつけた

「解毒はしてやる

だが、戦いに参加するようなら容赦なく殺す

分かったな…？」

「っく……えぇ…」

ドシュッ

咲を解毒した

「ま、縛り上げてるから動けないと思うけどな」

南は椅子に座る

咲とはずいぶん離れた席の椅子だ

「……戦いに参加しないの…？」

南の行動を不思議に思う咲

「……話す義理はねぇ…」

「…それもそうだけど、教えてくれないかしら？」

南は咲のことを誰より、何より嫌っている

咲も無視されるだろう、と思っていた

「……オレはどっちの味方でもねぇから、行ったって何もできねーよ」

「!?」

咲は南が答えたことに驚いた

南も答えたつもりは無い

ただ、なんとなく言っただけだ

それっきり二人は話さなかった

二人が見るのは、モニターに映ったＸＡＮＸＵＳと沢田の戦い

南が見たのは、ちょうどＸＡＮＸＵＳが武器をとった時だ

「２代目の炎に７代目の銃…
こいつは凶悪な組み合わせだぞ……」

ボンゴレにはいろいろな戦闘スタイルのボスがいた

ＸＡＮＸＵＳと同じ炎の２代目は、炎自体の破壊力が圧倒的で素手で

同じくＸＡＮＸＵＳと同じ銃を使う７代目は、炎の弱さを補うため
に炎を蓄積させ一気に解放させる改良した死ぬ気弾を使って

その二つを組み合わせたＸＡＮＸＵＳの一撃は、とんでもない破壊力・貫通力になる

「ダニが

高速移動がてめーの専売特許と思ってんなよ」

ＸＡＮＸＵＳは地面に向けて引き金を引く

弾を推進力にしているのだ

「散れ」

ＸＡＮＸＵＳが沢田に銃を向けた

沢田は後ろを確認し、ＸＡＮＸＵＳの攻撃の方向が変わるようによける

ドゴォ

方向が変えられた炎は体育館に直撃する

沢田が一瞬ひきつけたため、クロームは無事

タンッ

ダッ

ＸＡＮＸＵＳと沢田は校舎の壁に立つ

「ほざいていたな　守護者は誰も死なせんと
それで貴様は何を得た」

「？」

「オレは部下が死のうがどーでもいいが、見ろ」

ＶＡＲＩＡの皆は、毒に苦しんでいた

そして、南の姿も映し出された

「な！？」

チェルベッロの声が響く

「！？　風間殿…？」

バジルが声を上げるが、その映像を見ている者全員が不思議がっている

「…毒が効かなかったとしか考えられませんが、デスヒーターは野生の象ですら歩行不能となる猛毒…」

「だが、現にアイツはポールを壊さずにリングを手に入れてるぜ、コラ！」

そして、南が自分の映像が映し出されているのに気付く

『あー、毒ならオレは耐性があったせいで効かなかったぜーんで、どっちの仲間かよく分かんねーからここにいるってワケワリーな、ＸＡＮＸＵＳ』

南は一方的に話した

「解毒しているのは知っていた

テメェの事はテメェで決めろ

…沢田綱吉、これこそが大空だ！！」

ＸＡＮＸＵＳは上空に上がる

コオオォオオオ

銃に炎が蓄積されていく

「施しだ！！」

ＸＡＮＸＵＳは銃を嵐と雷のポールに向け、引き金を引いた

ガッ

ドコオッ

二つのポールに乗っていたリングは、ベルとレヴィの方へ倒れた

「ししし　助かった～」

ドシュッ

「ありがたき幸せ！」

ドシュッ

二人は解毒された

「…リング戦で勝ったヤツじゃん」

南は二人の共通点を見つけ、呟いた

自由になったベルは、隼人を放ってリングを集めに行った

逆にレヴィはランボを殺すつもりだ

そしてベルがどこに行くかを決めた時だった

ヒュッ

キン

ベルの持っていた嵐のリングは誰かによって打ち上げられた

その誰かとは――――――――――

「おまえは…」

「ふぅん　よくかわしたね

君……天才なんだって？」

――――――――雲雀恭弥、彼だった

恭弥は束縛を嫌う意地の力で自分でポールを倒し、解毒したのだ

だからこそ、恭弥は

何者にも捕らわれることなく、独自の立場からファミリーを守る孤高の浮き雲!!

そして真の守護者達は使命だけではなく、関係性までもが天候に酷似している

雲は時に他の天候の契機となり、嵐を巻き起こすことがある

そして、雲を動かし、嵐があれば必ず存在する…

風

レヴィは爆炎の中にいるランボを見つけた

そこに嵐が吹き荒れる

「待ちな」

ドガンッ

恭弥は嵐のリングを隼人にはじいたのだ

「始めようか天才君」

「大空戦で余計な雑音は、たてさせねぇ」

新たに二つの戦いが始まった

風は、どこに吹くのだろうか

今は、同時に三つの戦いが行われている

沢田綱吉ＶＳＸＡＮＸＵＳ

雲雀恭弥ＶＳベルフェゴール

獄寺隼人ＶＳレヴィ・ア・タン

そんな中、南は歩いていた

もう、教室には咲しかいない

南がどこに向かって歩いているか

それは、リボーン達の場所だ

「…よぉ、チビちゃん……」

南はリボーンの前に姿を現す

「…仲間を助けに行かねーのか…？」

「……オレはどちらの仲間なのか分からねーからな

ま、３０分経ちそうになったら行くよ」

３０分は、毒の致死時間だ

「……どちらの仲間になるんだ…？」

「さぁなー…

まぁ、オレが手を出さなくても回復したヤツいるし？

オレが助けなくても大丈夫だろ」

南は無意識の内に話題を逸らす

「オレの質問に答えろ

どちらの仲間だ」

少し殺気を放つ

「……勝手に決めたら？

オレはまだ決めてないんだ」

南は殺気を全く気にしてない

「じゃあ、オマエはツナの仲間だ」

オレの仲間はＶＡＲＩＡと黒曜と恭弥と隼人だ」

「それは違う

「…どうしてツナを嫌う」

「じゃあ何で嫌っちゃいけないんだ？

オレは、オレを仲間と思ってくれなきゃ仲間とは思えないね」

「それならツナも仲間だと思ってるぞ」

「それは無い

風戦の後も変わらずに接したヤツはオレの仲間だけだったろ？

沢田は警戒した…それは当たり前の判断だが、オレの仲間は警戒なんてしなかった」

つまり、南を１００％信じない限り、南も仲間と思えないのだ

「…確かにそうだな…

何でここに来た？」

「特に理由はない　…気が向いたから？」

「……戦いに参加しねーのか？」

「だから、オレはどっちの仲間に……もういいや…」

南はリボーンがどうにかして沢田の仲間にしたいのが分かっていた

「…オレ、もう行くからな」

南はリボーンに背を向け、歩き出した

「…どこに行くんだ」

「……仲間の場所」

それだけ言って、南は去った

リボーン達は考えていた

南が向かった仲間は、誰なのかを

そして、モニターの戦いを再び見始めた

獄寺隼人ＶＳレヴィ・ア・タン

決着はついていた

隼人がレヴィに電気傘（パラボラ）を開かせ、ロケットボムを投げる

全て命中し、今度はレヴィに投げる

雷のリングを手に入れ、ランボの解毒をする

完全勝利だった

雲雀恭弥ＶＳベルフェゴール

恭弥はベルがワイヤー使いということを知らず、かなりの傷を負う

ダメージをかなり受け、トンファーは手から離れ、絶体絶命

ベルはトドメのナイフを投げる

だが、恭弥は素手でナイフをキャッチした

そしてトンファーを使って全てのワイヤーを切断

形成逆転だ

ベルは本気にならずに、リングを集めに行った

沢田綱吉ＶＳＸＡＮＸＵＳ

ＸＡＮＸＵＳが徐々にスピードを上げ、一方的な戦いになってくる

怒りの暴発（スコッピオ・ディーラ）
連射の攻撃をモロに受けた

だが、装備に救われ直撃はしのいだ

沢田は構える

するとノッキングするような不規則な炎を放出する

ＸＡＮＸＵＳはこの光景を見たことがあった

死ぬ気の零地点突破

ＸＡＮＸＵＳは沢田が集中できないように攻撃する

絶対に阻止したいモノなのだ……

もう一度沢田が構えをとった時、ＸＡＮＸＵＳから攻撃がきた

ドドドンッ

爆煙が晴れると、ボロボロになり、額の炎が消えた沢田が倒れていた

ＸＡＮＸＵＳがトドメをさそうとしたその時

メラ…ッ

沢田の額に再び炎が灯り、零地点突破は成功した

つまり、マイナス状態になってＸＡＮＸＵＳの炎を中和した

だが、沢田の体はボロボロだ

ボンゴレの奥義が使い手が大ダメージを受ける技なわけない、とＸＡＮＸＵＳは言う

確かにその通りだった

だが、沢田はもう一度構えた

先ほどの構えと、少し違う

ボンゴレの血（ブラッド・オブ・ボンゴレ）…つまり超直感が何かを見つけた

「零地点突破・改」

小さくだが、確かにそう言った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６０　大空戦！～中～

沢田が『零地点突破・改』を構えた頃、南は体育館に向かっていた

その理由は、まだ南が教室にいた時――――――――――

「…行かないんですか…？」

黙っていた咲が話しかけた

「……」

南は何も言わない

「…クロームさんが、血を流しますよ？」

「…そのクロームに武器を向けたのはテメェだ」

「…私が今言っているのは、原作であったからです…

罪滅ぼし…にはなりませんが…」

「！！！　…ウソ…じゃねぇだろうな…」

「本当です」

南は人のウソが見抜ける

だが、咲の言葉を信じたくなかった

「……クロームを助けたらオレはヴァリアーを裏切ることになる

それは出来ない…」

仲間は裏切れない

「…だから何ですか？

……あぁ、クロームさんよりヴァリアーの方が大切なんですか…」

「…テメェ…死にたいようだな…ッ！！」

南に一番の禁句を言ったのだ

「でも、そうじゃないですか！

きっと今、クロームさんは苦しんでます！」

「そんなモン、知ってんだよ！！！
テメェに何が分かる！！」

南は殺気をほぼ全開で咲に話していた

咲は真っ青だが、それでも話す

「わかりませんよ！
でも、いいんですか！？」

咲の言っている事は、南が考え、思った事のあるものだった

それを越え、今苦しんでいるのだ

「…やはりテメェは消しておくか…」

南は腰にあるポーチに手を伸ばす

「!?　まっ待ってください！」

咲の言葉を無視し、毒付き千本を取る

「…この毒の致死時間は、五時間だ

まぁ、体内に入った直後から全身に痛みが広がるがな」

南は千本を咲に向ける

「!?　…解毒方法は…？」

「オレが解毒薬を持ってるが…
そんなことすると思うか？」

「…そうですね……」

ピッ

南は咲に投げた

「～～！！」

咲の頬を掠め、頬の傷から毒が入る

「…じゃあな…」

そして南は教室を出たのだ

ガラガラ…

体育館の扉を開ける

「しし　来たんだ」

ベルがマーモンを解毒していた

「まぁな…

？　何故そいつがいる…？」

そこには、咲の姿

「他の奴らが体育館に来るだろ？

最初はコイツとリングを交換しようかとも思ったけど、南に怒られるからな」

コイツとは、クロームのこと

「あぁ、そんなことしたら半殺しにするぜ？」

「しし　やっぱり
ってわけで、コイツの解毒はするけど縄で縛るぜ？」

ベルはクロームの手を縛っていく

「南…」

「…クローム…オレは……」

南にとって、仲間を仲間に拘束されていくのを見たくなかった

「…大丈夫……わかってるよ…」

クロームは、南が自分の事を助けたい、と思っているのを気付いていた

「！！　…ご…めん……」

南は拳を強く握りしめた

ポタッ

手から、血が垂れる

クロームは縛られ、解毒された

南は思った

『目の前にいる仲間一人すら、守れないのか』と

沢田は、構えを変え、不規則な炎を放出する

だが、ＸＡＮＸＵＳは言う

「本物の零地点突破に、そんな構えはねぇ！！」

「オレはオレの零地点突破を貫くだけだ」

零地点突破とは、『境地』のことで、必ずしも同じ技とは限らないのだ

ＸＡＮＸＵＳは沢田を蹴り飛ばし、引き金を引く

沢田の炎はどうにか残る

炎の蕾（ボッチョーロ・ディ・フィアンマ）

３６０度から攻撃される

そして、ＸＡＮＸＵＳはトドメをさす…

決別の一撃（コルポ・ダッディオ）

ドゴオッ

沢田に命中した

だが、次に見えたのは誰もが驚く姿だった

「次はオレの番だ　ＸＡＮＸＵＳ」

沢田のスピードはＸＡＮＸＵＳに追いついている

額の炎も先ほどとはケタ違いだ

マルテーロ・ディ・フィアンマ
炎の鉄槌

ＸＡＮＸＵＳが放った炎は、沢田の構えを中心に集まり、小さく消えていく

そして、消えた直後――――

ゴアッ

額の炎がより一層大きくなった

つまり、ＸＡＮＸＵＳの炎を吸収し、己の炎へ変換しているのだ

その力はＸＡＮＸＵＳを上回り、ＸＡＮＸＵＳを殴り飛ばす

そして……

ＸＡＮＸＵＳの顔に、古傷が浮かび上がった

守護者も回復する

恭弥が山本を助け、隼人が笹川を助けた

恭弥はベルからの傷が深く、山本にリングを渡す

隼人も笹川とランボのリングを預かり、他のリングを取りに行く

リングを探す二人は偶然出会い、状況確認する

残りは風と霧

風のリングは南が所持しているのを分かっていた

つまり、残りは霧

体育館に急いだ

もう少しで致死時間が経つ

だが、クロームは解毒済みだった

体育館で苦しんでいたのはクロームではなく、咲

ガラ

扉が開いた

「ポールが……！！

どーなってやがる！！

ドクロはどこ行きやがった！！」

「こっちこっち――」

南はフードを被った

理由は分からない

「！　山下…？

それに風間…」

山本も隼人も不思議がっている

クロームは床に座っているが、ベルが三叉の槍を向けている

「南…！　何でそいつらと…」

「オレは隼人もクロームも恭弥も、仲間だと思ってる

だが、ボス候補の沢田は仲間じゃない　逆にＸＡＮＸＵＳはオレの仲間

…これでいい？」

つまり、沢田をボスにする気は無く、ＸＡＮＸＵＳをボスにするという事だ

「南！！」

隼人は信じられないようで、叫ぶ

「…さて、リングを渡して貰おうか…
クロームの解毒はしてあるが、代わりにコイツにオレの千本の毒が入ってる
リングと、コイツの解毒と解放を交換だ」

南は感情の無い声で言った

「…まぁ、致死時間は五時間だけど、今すぐ殺してもいいワケだから回答を早くした方がいい」

隼人はどうすればいいのか分からなかった

仲間である南が、嫌いでも自分達の仲間だった咲に武器を向けているのだから

黙っていたら、山本が口を開いた

「…風間は今はそっちの仲間って事か…

リングを渡すしかないみてーだな…

オレと獄寺でおまえ達のもつ霧と風以外の全てのリングを持ってんだ」

「！」

「おっ」

「手間が省けたな」

隼人は反論しようとするが、山本に止められた

「ただしいっぺんにはやらねーぜ

まず山下の解毒とこの雨・雲との交換だ

それができたら信用して残りのリングと山下の交換に応じる」

「だってさ、ベル
まぁ全部揃うならよくね？」

南はため息をついて言った

「ししし　確かにな
おまえの刀のリーチには入んないぜ　その距離からそっとリングを転がしな」

「同時にだ」

「うわー生意気
南、どうする？」

解毒薬を持っているのが南だからか、南に聞く

「山本、オレは別にコイツを殺してもおまえ達からリングを奪ってＸＡＮＸＵＳに渡しに行けるんだぜ？」

「…頼む…」

山本ではなく、隼人が言った

「……ハァ……　じゃあいいよ…

いくぞ、せーの」

南は解毒薬をムリヤリ咲の口に投げ込んだ

同時に動けなくするために、痺れ千本を咲に掠める

これは南が風戦で使った痺れ千本と同じで、漣に渡されたのを改良した

改良前は痺れ始めるのが遅かったからだ

その分効果時間は短くなったが…

「そら」

山本もリングを転がす

ズルッ

「わたっ」

山本がガレキに足を滑らせた

だが、これが狙いだった

時雨蒼燕流　攻式三の型

遣らずの雨

刀を足で蹴り飛ばした

「いだぁ！！」

刀はベルの右肩に突き刺さる

「なに！」

「足で…刀を！？」

「ベル、油断しすぎだぜ？」

その直後、マーモンに刀が向けられた

「動くな
風間も動いたらコイツを…」

つまり、マーモンか南が動いたらマーモンを殺す、ということだ

「形勢逆転だな」

「や…やるじゃねーか山本！」

隼人が寄ってきた時だった

フッ

マーモン、ベル、南、咲、クロームの姿が消えた

「…やはりタダモノではない連中だ

警戒しておいてよかったよ」

そしてマーモンが大量に姿を現す

幻覚だ

「体育館に一歩踏み入れた時から、君達は僕の世界にいたのさ」

「ししし　さーて、残りのリングもいただこーか？」

「残念だったなー、山本」

南はこの事を予想していた

さすがに刀を蹴り飛ばしてくるとは思わなかったが…

「幻覚だったのか！！」

「形勢再逆転♪」

その頃

沢田綱吉ＶＳＸＡＮＸＵＳ

沢田はＸＡＮＸＵＳの顔に古傷が浮かび上がったことに驚くが、戸惑ってはいられない

互いに接近し、沢田がＸＡＮＸＵＳの右頬を殴る

だが、ＸＡＮＸＵＳは引かない

ボウッ

ドス

血が飛び散る

「それが…どうした！！」

沢田はＸＡＮＸＵＳから離れる

「死ね！！！」

ドウ

ＸＡＮＸＵＳの銃から炎が放たれた

とてつもなく、大きな…

沢田は吸収しようとしたが、…よけた

炎が多く、吸収しきれずにパンクしてしまうからだ

「かっ消す！！！」

ＸＡＮＸＵＳは沢田に近づく

ガッ

ＸＡＮＸＵＳは銃を手放した

手を組み合うが、その体勢では零地点突破すらできない

カッ

沢田とＸＡＮＸＵＳを中心に、眩い光が覆った

ゴオオオオオ

煙で何も見えない

一人の人影…

ＸＡＮＸＵＳ

その手は、凍っていた

恐らく、これが初代零地点突破

炎の逆…つまり冷気だ

ただの冷気ではなく、死ぬ気の炎を封じるためにあるようなモノだ

「そんな、バカな…

「こんなことが！！！」

その頃の体育館

再びＶＡＲＩＡ優勢

「さあ、雨と雲以外のリングも渡しな」

「じゃないとこの娘、手足がもげるよ」

「きゃあっ！！」

クロームではなく、咲が締められている

「てめぇ！！」

「やめろ！！」

「またまた残念♪

幻覚を見ているワケだから抵抗したって無駄だぜ」

そしてマーモンの幻覚が隼人の腕を縛る

ポロポロ…

「しまっ…！！」

隼人の手からリングが落ちる

「おまえ達もここでリタイアさ
自分の想像力によってね」

死ぬ、と言わなかったのは、隼人がいたからだろう

山本と隼人は縛り上げられ、絶望的ともいえる戦況になった

その時だ

「極限太陽（マキシマムキャノン）！！！」

体育館が破壊されていく

「…笹川か！！」

南は飛んでくるガレキを避けながら、動けないクロームを守る

飛んでくるガレキが少なくなった時

ズパッ

クロームの縄を切った

「悪ぃ、オレはもう行くな…」

「…ありがとう…」

「っ…！！　ごめん……」

南は隼人の手から落ちたリングを拾い、破壊された体育館を出た

「お、二人とも無事だったか」

外にはベルとマーモン

「ししし　当然だろ？」

「マーモン、リング拾ってきたぜ」

マーモンに嵐・雷・晴のリングを渡す

「風はオレが持ってるな♪

オレは狙われないから」

「ム　わかったよ

それじゃあボスのとこに行こうか」

南達はＸＡＮＸＵＳのいるグラウンドへ行く

「なぜだ！！　ありえん！！

おまえみてぇなカスにボンゴレの奥義など…！！」

沢田はＸＡＮＸＵＳの古傷をみる

「そのキズ……

お前が前にも、全身に零地点突破を受けた証拠」

超直感でなのか、沢田には分かった

もう、ＸＡＮＸＵＳの拳に炎が灯されることはない…

だがＸＡＮＸＵＳはそれを否定しようと、氷を膝にぶつけて砕こうとする

「無駄だＸＡＮＸＵＳ　これ以上やるのなら…

９代目につけられたその傷ではすまないぞ」

「だまれ！！

オレは名に？[10]の称号を二つ持つ男ＸＡＮＸＵＳ！！！

てめーごときに屈すると思うか！！　勝つのはオレだ！！

ボンゴレの１０代目は！！　このオレだ！！！」

ＸＡＮＸＵＳは沢田に向かって走り出す

ドス

ＸＡＮＸＵＳは腹を殴られ、膝をつく

「いくぞ」

炎が消えてる沢田が言う

つまり、零地点突破をする前……

「零地点突破　初代（ファースト）エディション」

ＸＡＮＸＵＳは、凍っていく…

「……なぜだ…

なんでお前は…」

「うるせぇ！！！！

老いぼれと同じことをほざくな！！」

「９代目と…？」

沢田の脳裏をよぎったのは、昨夜の９代目との映像

「！」

ビキイ

沢田は何かに気づいたが、ＸＡＮＸＵＳは氷付けにされた……

沢田の手には、完成した大空のリング

「もうこれが溶けることはない」

ＸＡＮＸＵＳは、冷凍仮死状態…

揺りかごの後、８年間眠っていたのと同じように……

「うぐ…」

ガクッと膝をつく

沢田の気力は限界に達していた

「今がチャンスね！！」

沢田の前にルッスーリアとレヴィが現れた

だが、幻覚

「ムム　よく見破ったな

でも、もう這う力すら残ってないようだね」

幻覚が消え、現れたのはマーモン

「ムダだ…　ＸＡＮＸＵＳは眠りについた……」

「さて、それはどうかな？」

響いたのは、フードを外した南の声

「！！」

沢田だけでなく、モニターを見ていたリボーン達も驚く

「…風間は決めたようだな…」

リボーンが呟いた

「そんな…じゃあ風間殿は、ヴァリアーに…」

「アイツは仲間を守れるだけの力がある

ＸＡＮＸＵＳがボスになってもアイツが守りたい奴は守れるだろうからな…」

「あぁ、それにツナの事をボスとして認めてなかった…

クソッ！！」

リボーンに引き続き、ディーノが言う

「当然の結果だぁ〝…

アイツはオレらの風の守護者だからなぁ」

スクアーロが言い放つ

「チッ…　風間が敵対したのは最大のピンチだぞ…」

リボーンがモニターを見ながら言った

「その通りだよ

むしろボスが次期ボンゴレの後継者になるための、儀式の準備がととのったのさ」

「……？」

「ボスは再び復活する」

マーモンは手を開いた

そこには、大空と風を除いたボンゴレリング

「！」

「なぜリングを半分ずつ保管するのか…

そしてボンゴレの正統後継者にしか授与されないのかわかるかい？

それはリング自身にも秘められた力があるからさ」

ＸＡＮＸＵＳにかけられた９代目の零地点突破が溶かされた床には、７つの小さな焦げ跡が残されていた

…恐らく、風以外のボンゴレリングだ

「誰がやったかはさだかではないが、この形跡は一つの仮説を立てるのに充分だ」

すると、全てのボンゴレリングに炎が灯る

「思ったとおりだ
見るがいいさ」

マーモンは炎をＸＡＮＸＵＳの氷に触れさせる

ジュウ…

氷が溶け出した

南はマーモンからこの話を聞いていた

だからこそ、あんなにも落ち着いていたのだ

「これだけではないよ
7つの完全なるボンゴレリングが継承されし時、リングは大いなる力を新たなるブラッド・オブ・ボンゴレに授けると言われているさらに、風のリングがあると尚更だ」

「！　ボンゴレの…血に……？」

キンッ

沢田の手から大空のリングが弾かれた

「返してもらうぜ
これは正統後継者のリングだし
ボンゴレリング全部コンプ！」

「こっちも準備できたよ」

ＸＡＮＸＵＳは氷から解放された

「おかえりボス！」

「いよいよだよ」

「お疲れ様～♪」

マーモン、ベル、南はＸＡＮＸＵＳに近寄る

「リングを…よこせ…」

「もっちろん

これはあんな亜流のニセモノじゃなくて、９代目直系のボスにこそふさわしいからね」

ベルのナイフに乗っているリングの炎が消えた

「！　ま……ハァ、まて…」

「結局最初からこうなるって決まってたのさ」

マーモンは守護者のリングを嵌めていく

「そうそう♪

うし、風のリングもセット完了～」

南は自分で風のリングを嵌めた

タッ

チェルベッロが来た

「１０代目！」

「ツナ！」

沢田の守護者…恭弥を除いた全員が来た

「どいつもこいつも新ボス誕生のために立会いごくろーさん」

「受け継がれしボンゴレの至宝よ

若きブラッド・オブ・ボンゴレに大いなる力を！」

マーモンが最後の守護者のリングを嵌めた

そして、ＸＡＮＸＵＳの指に大空のリングが通された

カアァ

キュオオオ

リングが光り出した

「こ……これは…！！」

倒れていたＸＡＮＸＵＳが立ち上がる

「力だ！！！

とめどなく力があふれやがる！！！

これがボンゴレ後継者の証！！

ついに！！　ついに叶ったぞ！！

これでオレはボンゴレの１０代目に…

！！

がっ」

ＸＡＮＸＵＳが血を吐き出した

「がはぁ！！」

ＸＡＮＸＵＳは力なく倒れる

「ボス！」

「どーしたんだ！？　ボス！」

「ＸＡＮＸＵＳ！！？」

南もＸＡＮＸＵＳに駆け寄る

「……リングが…ＸＡＮＸＵＳの……血を…

拒んだんだ……」

『リングがＸＡＮＸＵＳの血を拒んだ』

南は何も考えられなくなっていった

聞こえるのは、ＸＡＮＸＵＳの声だけ……

「オレと老いぼれは血なんて繋がっちゃいねぇ！！」

この一言で、静まり返った

「ＸＡＮＸＵＳ……」

「同情すんな！！

カスが！！！」

…南の脳裏に、ある人物が浮かび上がった

自分が、ＸＡＮＸＵＳと重なる――――

『おまえの裏切られた悔しさと恨みが…オレにはわかる…』

突然響く声

スクアーロの声だ

「生きてやがったのか…カスザメ……

……わかる…だと…

てめーに…オレの何がわかる……

知ったような口を…きくんじゃねぇ…」

『いいやわかる！

知っているぞぉ！！』

「なら言ってみろ！！　オレの何を知っている！　ああ？」

ＸＡＮＸＵＳは苦しそうに叫ぶ

『……』

「言えねーのか！！」

『おまえは下町で生まれ、生まれながらに炎を宿していた

そしておまえの母親はその炎を見て、おまえが自分とボンゴレ９代目の間に生まれた子供だという妄想にとりつかれたんだぁ』

ＸＡＮＸＵＳの母親は、勝手にＸＡＮＸＵＳと９代目を会わせた

『ああ…　これはボンゴレの死ぬ気の炎だね

間違いない、お前は私の息子だよ』

当時、９代目はＸＡＮＸＵＳにそう告げた

そしてＸＡＮＸＵＳは威厳・実力ともに９代目の息子として、後継者として、文句ない男に成長した

だが、ある時知ってしまった

ＸＡＮＸＵＳの母親は９代目と一切関わりなく、自分は養子としてひきとられたことを

ボンゴレとも、何の血の繋がりもないことを…

しかも、ブラッド・オブ・ボンゴレなくしては、後継者として認められぬ掟

それから半年

揺りかごにつながった

『これがオレの知ることのすべてだ
揺りかごの後に調べた』

「くだらね「ＸＡＮＸＵＳ！！！」
…なんだ……」

叫んだのは、南

「…くだらなくなんてない…
ＸＡＮＸＵＳのその気持ちは…よくわかる」

南は顔を伏せた

「てめーに…何が分かるんだ！！！
カスザメに引き続き言いやがって！！

オレの事も最近知ったような奴が！！」

「…ＸＡＮＸＵＳの事は知らない…

オレが分かるっつったのは、その気持ちだ……」

南は真っ直ぐＸＡＮＸＵＳの目を見た

「……そうだな…

オレも話すよ……」

南は、静かに話し始めた……

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６０　大空戦！～中～（後書き）

長い＆疲れた…

次は南の過去です

ムリヤリですね～

あはは…

次は短く感じるかもしれませんが、今回詰め込みすぎました…

誤字脱字あったら教えてください

Straordinariamente8　風の過去！

オレは、ごく一般人の両親のただ一人の子に生まれた

ただ、オレは両親と全く似ていなかった

例を挙げればキリがない

例えば、髪の色

両親は二人とも黒

日本人だからな

そして両親の血は純粋な日本人の血しか流れていない

だからオレみたいな赤い髪は有り得なかった

だが、そんなオレの事を両親は受け入れてくれた

母は

『私がお腹を痛くしても産んだのよ！？

それにＤＮＡだって私達の子供だって証明している

あなたは間違いなく私達の子供よ』

そう言った

父も

『赤い髪は確かに不思議だ

だが、そんなものより我が子を信じるよ』

と言ってくれた

父はあまり喋らない人だったけど、真面目な人だったから信じれた

だが、髪なんかより二人を怖がらせたモノがあった

オレの、頭脳だ

言葉は生まれた直後から理解できた

話す事ができるのは、一般の時期だったけど

それが無くても、頭の良さは異常だった

話す事ができるようになった直後から、小学生以上の力を発揮した

両親も、初めは喜んだ……

『きっと神様が赤い髪にしてしまった謝罪で頭を良くしてくれたのよ！』

そんなことを言っていたと思う

確かに、ここで止まればそれで済んだかもしれない

オレは、勉強せずとも脳が成長してしまった

母も父もオレに期待し、色んな本を読ませた

高校のトップ校のを終えたのが、５歳の時

親はまだオレが異常な事を否定し、本を渡してきた

オレはただ、本を読んでいるだけで覚えた

それから一年

ようやく両親が不思議に思った

6歳にして、大学レベルは楽に解いていく

ある夜のことだ

オレが寝ていた時に、両親が話していた

オレはその頃、両親を拒絶していた

理由は分からない

直感的にそうなった

もちろん夜は眠れない

だから会話を聞いてしまった

『南、やっぱりおかしいわよ…

生まれた時も赤毛よ？』

『そうだな…

アイツの性格はオレ達の親戚含めて誰にも似ていないしな…』

『こないだ義母さんに言われたわ

南は何者なの、って』

『お袋が？

何て言ったんだ?』

『私にも分からないって言ったわよ…

ねぇ、やっぱり南をあの学園に送りましょうよ』

『そうだな…

確か、親が置いておきたいだけ寮に置けるんだよな…』

『えぇ

だからもう南は預けない?

お金だけ渡して』

『確かにそれが一番いいな

南には、一度プレゼントでもしてやろうか』

『は?なんでよ

もうあの子と関わり持ちたくないわ!』

『そんなのはオレだって同じだ
だが、だからこそ、だ』

『…どういうこと？』

『プレゼントの一つでもしておけば、悲しくなって帰ってくる可能性が低くなると思わないか？
要するに、オレ達の代わりになるんだ』

『！　…いいわね…』

『だろう？

プレゼントは…そうだな…

あの子は頭が良すぎるから、オレ達にとって価値のあるモノじゃないと気づかれてしまうかもしれないな…』

『じゃあ…

本当はあんな子に触れさせたくもないけど、私の指輪は？
あの子が生まれてからもずっと付けてるものだし…』

『…いいのか？』

『仕方ないじゃない…

モチロン、あなたが許してくれたらだけど…』

『…オマエが良いと言うなら、オレもいい』

『…じゃあ、早速明日渡しましょう』

『そうだな…

学園からも話が来ていたし、明日アイツを学園に送るか』

『えぇ、そうしましょう…』

オレはこの話を、しっかりと聞いていた

悲しくは、無かった

わかっていたから

いつか、この二人と離れるって事が…

次の日の朝、両親はいつもと変わらない愛想笑いをしてきた

『突然だけどね、南

あなたは今日から帝都王儀林学園に行くわよ』

『世界で一番の学校だ

頑張ってこい』

オレは、ただ頷いた

昼には家を出ることになり、荷物をまとめた

その時に、小さな箱を渡された

『私達と会えなくて悲しくなったら、これを見なさい』

オレには中身が分かっていた

前の晩に話していた、指輪だ

恐らく父が母にプロポーズする時に渡したモノ

母の渡す時の笑顔には、憎しみが見えた

父の顔にも、怒りが見えた

オレは、『ありがとう』と言った

もちろん、作り笑顔を浮かべて

学園でも、一人浮いていた

海外から来ている者もいたけど、赤い髪はオレだけ

さらに頭が良いんだから、誰もが嫌っていた

いや、一人だけ仲良い奴がいた…

蒼巻（そうまき）　風梨（ふうり）

オレと、性格がよく似ていた

風梨も皆から嫌われていた

群青色の髪と目だったから

親にも見捨てられたらしい

オレらは勉強なんてしないで、いつも端の席で寝ていた

端の席だと、誰も何も言わない

教師でさえ、オレらの事は嫌っていた

そして、8歳になった時だ

授業中に教師に呼ばれた

『君の両親が、亡くなった』

伝えられのは、それだけ

どんな事故、または事件だったのか

何故死んだのか

何も伝えられなかった

風梨は何も言わなかった

オレが内心喜んでいたのをわかっていた

オレは、家に一時的に帰ることになった

オレの部屋だった場所から見つかったのは、一つの封筒

つまり、遺言書

糊は付いていなかった

そのまま、遺言書を読んだ

『南へ

あなたがこれを読んでいる頃には、私達は死んでいるでしょう。

これは、遺言書です。

まず、私達は自殺しました。

理由は一つ。

あなたが、怖かったから。

私達はあなたから逃げるために、死んだのです。

あなたは私達の命を、間接的に奪ったの。

だからあなたは、苦しみながらも生きなきゃならない。

施設に入って生きる事は、許しません。

一生、苦しみと後悔と共にいて。

母』

これで、全てだ

苦しみ？

後悔？

そんなもの、存在しない

オレは両親を大切になんて思っていなかったから

だけど、それから半年経たない頃

風梨が、死んだ

誘拐され、殺された

風梨の叔父さんが政治家で、犯人が身の代金を求めてきた

だけど、叔父さんは風梨を嫌っていた

そして、殺された

風梨は、被害者だ

オレは風梨の通夜で何も言わず、表情一つ変えず、涙も出なかった

ただ毎日、花一つない風梨の墓の前で立っていた

そして、１１歳になり、大学院を卒業

たくさんの記者が来た

『この卒業は、亡くなった両親が育ててくれた感謝の気持ちを表したものですか?』

『両親に一言!』

大体の人が言うのは両親のこと

オレは何も言わなかった

何も言わなかったからか、記者達は撤退し始めた

ただ一つの雑誌の企業だけは諦めなかったが

その記者もしつこいから、『勝手にしろ』とだけ言った

次の日からは、もう誰も来なくなった

そして、学園から手紙を渡された

……もう一つの、遺言書

今後は、父からだ

『南へ

正直、ここまで化け物になるとは思わなかった。

今、何歳なのかは知らないが、どうせ小学生なのだろう。

やはり、オレ達は死んで良かったよ。

自殺したことについて、詳しく話しておこう。

理由はもう知っているだろう？

オマエから逃げるためだ。

オマエが学園に行っても、学園の方から連絡が一日に一回は来た。

最初の一カ月くらいは、しっかり連絡を受けていたよ。

だが、オマエの異常さが連絡されてからは、電話や手紙が来ても無視をするようになった。

何故か、分かるな？

関わりを持ちたくなかったんだ。

オマエの異常さについてじゃない連絡さえ、アイツ…母さんは苦しんでいたんだ。

だから、連絡を受けなくした。

学園も許可してくれたよ。

礼にオマエが発明したものを、くれてやったよ。

感謝しろよ？

オマエなんかが作ったものをオレ達が処理してやったんだ。

そして、オレ達はオマエの存在を忘れていた。

だがある日、学園から連絡が来たんだ。

オマエのことでな。

もう関わりを完全に断ち切りたかったから、死んだ。

まぁ、こういうことだ。

せいぜい、足掻いてくれ。

父』

…だからどうした？

オレには何も感じない

オレは遺言書を燃やした

もう、両親と関わりを持ちたくなかった

中学生になり、『オレ』を知る者から『オレ』を消したくて、学園を出た

それで、並盛に来たんだ

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６１　大空戦！～下～

南は全てを話した

死んだのは、学園にいたころ

並盛に来たのは転生してからだ

聞いていた者は皆、南を見ている

「…ま、これがオレの全てだ

もしかしたらＸＡＮＸＵＳより悲惨な過去だな…」

そう言い、ＸＡＮＸＵＳを見る

その目には、同情なんて無い

ウソではない、と誰もがようやく理解した

「まぁ要するに、だ…

ＸＡＮＸＵＳ、悲惨な過去を持ってるのは一人じゃねぇよ…」

南は優しい声で言った

「…だから、どうした…！！」

「別に…ただ言っておこうと思っただけだぜ？」

南は沢田の方を見た

「……オレに同情しなくていい…

母さんも父さんも、いずれはオレの手で殺していたからな…」

「なっ……！！」

「…ハァ…それより、超直感で分かることはねぇの？」

南は、自分よりもＸＡＮＸＵＳの事を気にしていた

そして、沢田が口を開く

「…９代目が……裏切られてもおまえを殺さなかったのは…

最後までおまえを受け入れようとしてたからじゃないのか……？

９代目は血も掟も関係なく、誰よりおまえを認めていたはずだよ」

ＸＡＮＸＵＳの脳裏をよぎったのは、自分が幼いころの９代目と自分の姿

「９代目はおまえのことを、本当の子供のように……「っるせぇ！！」」

ＸＡＮＸＵＳが言葉を遮る

「気色の悪い無償の愛など！！　クソの役にも立つか！！

オレが欲しいのはボスの座だけだ！！

カスはオレを崇めてりゃいい！！　オレを讃えてりゃいいんだ！！」

「な」

「なんて奴だ…」

「かっきーーー」

「……ＸＡＮＸＵＳ、オレは力を貸すよ…」

南はＶＡＲＩＡにしか分からない言葉を口にした

「ぐぁっ」

ＸＡＮＸＵＳは血を吐き、リングは指から落ちた

…リングがＸＡＮＸＵＳに付けられているのを拒むように……

「ＸＡＮＸＵＳ様！　あなたにリングが適正か協議する必要があります」

チェルベッロが近づいてくる

「だ……だまれ！！
叶わねーなら道連れだ！！　どいつもぶっ殺してやる！！」

「ＸＡＮＸＵＳ様！！」

「大さんせーだ　ボス、やろーぜ」

「当初の予定通りだよ」

「んじゃ、サクッと終わらせるか」

南は千本を右手に取る

人差し指から小指までの隙間に合計三本

「どこまで腐ってやがる
やらせるかよ！」

ボロボロになった隼人達だ

咲もいる

南は、クロームと隼人から目を逸らす

「どいつも死に損ないじゃん
おっ、あっちにも…」

恭弥だ…

南は、敵である仲間を見れない…

ＶＡＲＩＡ側として武器を構えているから

「ししし　こりゃ１０００％間違いなし
お前ら死んだわ」

「てめー見えてねーのか？　南はオレらに攻撃しねーし、２対６だ！
分がわりーのはそっちだぜ？」

隼人は、南を信じている

「２対６？　何の事だい？
君達の相手はこの何十倍もの戦力だ
それに南はヴァリアーだよ」

「南はヴァリアーじゃねぇ！！」

まだ信じ続ける仲間

しかし真実を言う仲間…

そして、真実を待つ仲間――――

「ししし　ならそう思ってれば？
答えは南が行動で表すと思うし」

南は、ＶＡＲＩＡの仲間と決めた

だけど隼人、クローム、恭弥には攻撃できない

「南がいなくても、総勢５０名の生えぬきのヴァリアー隊がまもなくここに到着するのさ」

「！　何を言っている！！」

「…ＸＡＮＸＵＳは勝利後お前らに関わりのある者全員を片付けるために、幹部クラスの次に強い奴を向かわせた…

もう一度だけ言う、オレはＶＡＲＩＡ側だ」

南は低い声で言う

「南…！！」

隼人は南を信じている

今の言葉は、『今だけ』であってほしいから

「お…お待ち下さい！　対戦中の外部からの干渉は認めるわけには

…」

チェルベッロが言う……が

「知らねーよ」

ベルがチェルベッロを殺す

喉を切られ、恐らく死んだだろう

その行動により、リボーンやコロネロ達が参戦しようと主張してくる

「……わかりました……

それではヴァリアー側を失格とし、観覧席の赤外線を解除します」

ピッ、とリモコンで解除をする

だが、マーモンが事前に細工をしたせいで解除されなかった

おまけに、内部からの攻撃で爆発する仕組みだ

リボーン達は参戦できなくなった

「くっそう!!　こうなりゃオレ達だけでやるしかねえ!!」

「!」

クロームが何かを感じた

ダッダッ

ＶＡＲＩＡ隊が３人到着した

「ナイスタイミーング

待ってたぜ」

「報告します

我々以外のヴァリアー隊全滅！！！」

つまり、４７人はやられた

「奴は強すぎます！！　鬼神のごとき男がまもなく…」

ギュオッ

何かの音が聞こえる

「げげ！！」

「暴蛇烈覇（ぼうじゃれっぱ）！！！」

到着したＶＡＲＩＡ隊がやられた

現れたのは――――――――――

「取り違えるなよボンゴレ　オレはおまえを助けにきたのではない

礼を言いにきた」

ランチアだ

「ランチアさん!!」

「なんれあいつが?」

「ランチア…　あのランチアがなぜ…」

「あいつ何者?」

「ラン…チア?」

南も知識が抜けているので誰か分からない

「北イタリア最強と恐れられた……

ファミリー惨殺事件のランチア」

スクアーロが答える

「ししし　そーきたか…　…そんじゃあ……

とっとと済まそっと♪」

ベルが沢田にナイフを投げる

キキキキンッ

「おっと、そーはいかねーぜ」

山本が弾く

「ムギャ」

「逃がさない」

クロームがマーモンを捕らえる

「ねえ　決着つけようよ」

恭弥もトンファーを構えた

「いかせんぞ」

咲以外の者はＶＡＲＩＡの四方を囲む

もちろん、南も例外ではなく囲まれた

カララン…

「ダメだこりゃ」

「ウム……　ボス…ここまでのようだ…」

ベルもマーモンもお手上げだ

「…悪ぃけど…」

南は毒付き千本を両手に持つ

ダッ

沢田に向かって走る

「オレはＸＡＮＸＵＳをボスにすると言った！！」

ビュッ

千本を投げる

出来るだけ範囲が広がるように

キキキキンッ

山本に弾かれる…が

「ぐっ」

弾ききれなかったものが、ある人物に当たる

沢田でも、山本でもない

だが、南が投げた先にはその二人しかいなかった

つまり、誰かが沢田を庇ったのだ

「……な…んで…」

南は立ち止まってしまった

「は……やと……」

そう、隼人だったのだ

「ぐっ…南…」

隼人は力なく倒れた

毒付き千本だったため、隼人の全身には刺すような痛みが広がっている

「オレ…は……なか、ま……に……」

南は両手で頭を抱え、しゃがみこんでいく

「う…あ……あぁ…あああああああああああぁぁぁぁ！！！」

しゃがみ、頭を抱えた状態で叫ぶ

何より守りたかった仲間を自らが傷つけてしまった

自分自身の命よりも大切な仲間

その仲間を、自分で……

「あぁ……ぅ…あ……」

南はもう何も考えられなくなっていた

そして…

バタッ

そのまま倒れた

「…解毒剤がポーチに入ってるはずだから、早く解毒したら?」

恭弥が言った

そしてクロームが解毒剤を取り出し、隼人に渡した

「……役立たずのカス共が…」

ＸＡＮＸＵＳが口を開く

「くそ！　ちくしょう！
てめーら全員！！！　呪い殺してやる！！！　ぐはっ！！」

そこにチェルベッロが来る

「ＸＡＮＸＵＳ様　あなたを失格としボンゴレリングを没収します」

「チェル…ベロ…
おま…え達の……望み通りだ……
予言が当たり……満足か……」

「お言葉ですが……これは我々の望みでも予言でもありません
全ては決まっていた事　あなたは役目を終えたのです」

「……タヌ…キ…が……うう…」

ＸＡＮＸＵＳはここで眠った

「お疲れ様でした

それではリング争奪戦を終了し、全ての結果を発表します

ＸＡＮＸＵＳ様の失格により大空戦の勝者は沢田綱吉氏

よってボンゴレの次期後継者となるのは、沢田氏とその守護者7名です」

隼人は解毒され、南以外の守護者全員は安心した表情を見せる

リング争奪戦は、こうして幕を閉じた――――――――

翌日　朝

南自宅

「……」

南は起きた

隼人のことは、しっかりと覚えている

「オレは…どうして……」

ハァ、と大きくため息をついた

ピーンポーン…

インターフォンがなる

「……この感じ…」

南は誰が来たのか分かり、急いで玄関に向かう

ガチャ…

「ちゃおっス」

「今大丈夫か？」

リボーン、隼人だ

「隼人…　ごめ…ん…」

南は視線を下に向ける

「気にすんなよ…あの後すぐに解毒したから何ともなかったしよ」

「でも…オレは…」

南はきっと謝り続けると悟ったのか、隼人が話題を変える

「南に届け物があってきたんだ」

「そうだぞ　ツナも連れてこようかと思ったが、アイツは熟睡中だったからな」

リボーンは小さな箱と取り出した

「…リング…か?」

南は直感的に答えた

「あぁ…風のボンゴレリングだ

ツナの守護者の証だぞ」

「昨日も言ったと思うが、オレはＸＡＮＸＵＳをボスにするために戦っていた

なのに渡していいのか？」

南は挑発するように言った

「風戦で言ってたし、大丈夫だっての

オレはアイツなんかより南になってほしいしな」

「それに、咲は風間がいない間の代理だったんだ

…このことは咲に戦いが終わってから伝えたがな…」

パカ、と箱を開く

間違いなく、風のボンゴレリングだ

「…オレは、守護者のはなれない」

この言葉に二人は顔をしかめる

「なんでだ？」

リボーンが聞く

「オレは沢田を守護する気などない

リングを貰うだけなら構わないが、そんな奴にリングは渡さないほうがいいと思うぜ？」

南は思いのままの言葉を言う

「…そんなこと言ったら、ヒバリだってそうだと思うぞ？」

「分かってねぇなぁ、チビちゃん

オレは昨日、沢田を殺そうとしたんだぜ？」

ＸＡＮＸＵＳも敗北が決まっても、と付け加えた

「…南、家の中に入ってもいいか？」

隼人が小さな声で言った

「…あぁ」

ギィ、とドアを大きく開ける

そして三人でダイニングに入った

「んで？　どうかしたのか？」

南は隼人に聞いた

「オレが昨日１０代目の前に立ったのは、１０代目を守るためだけじゃねぇ」

「「？」」

「もし南があそこで１０代目を攻撃してたら、きっと他の守護者とぎこちない関係になる

そうならないためにも、オレは１０代目の前に立ったんだ」

『南を守るため』ということだ

そのことを聞き、南は驚く

「オレは…仲間を守るどころか、守られ、攻撃したってことか…」

「…じゃあ、このリングを受け取ってくれるな？」

リボーンが言う

「…言ったことは変わらねぇ　守護者にはならない

それでもいいのなら置いてけ」

リボーンは無言でリングの箱を机に置く

その行動は答えを表していた

「…じゃ、悪ぃけど今日は帰ってくれ…」

その言葉を聞き、二人は立ち上がった

「じゃましたな」

「オレのことはもう気にしなくていいからな」

それだけ言うと、二人は南の家から出て行った

二人が出て行き、しばらく南はボーっとしていた

昨夜のことが、何度も脳裏をよぎる

どうして、あの時――――

「ハァ…考えたって時間は戻らない…か」

南は首から全てのリングを外す

風のマーレリング、同じく風のボンゴレリング

そして、もう一つのあるリングが突然光を放つ

「!?　なんじゃこりゃ…」

光はそこまで強くないが、リングは見えない

「クロームとのリングは何ともない…ってことはあのリングか!!」

前世から持っているリング

でも、なぜ?

フッ

光が消えた

光っていた場所には、

ボンゴレリング、マーレリング…

「このリング、ナニ!!??!」

見覚えの無いリングがあった…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６２　虹に吹く風、そして初代風の正体！

「…あれ？　石の形が変わってる？」

今までは普通のダイヤのリングだったのが、パールのようにつるつるだけど透明になった状態になった

「……認めたくないけど、コレは絶っっ対におしゃぶりの形だ…」

ただの丸型じゃなく、上におしゃぶりの形を確定させるものがあった

『南！！　話があるからこっちの世界に来てくれ！！』

突然南の脳内に響く声

「なんでだよ！　ってかそれなら漣が出て来い！！」

『オレ以外にもいるんだよ…　だからこっちに来てくれ…』

「…ってか、どうやって行くんだ？」

南は寝てるとき突然に、とかでしか行ったことがない

『じゃあオレが強制的に南を眠らせるからな』

「おう、じゃあ早くしろ」

そして南は１０秒もしないうちに眠った

「…ウィント？」

南の前には漣とウィント

「おう！　今日はオレも話があってなー」

「ふーん？　まぁいいけど」

「んじゃ、早速リングの話をするぞ」

漣が言い、静かになる

「今持ってるか？」

漣が聞く

「あぁ　ほらコレ」

南は形が変わったリングを差し出す

「これは、『アルコバレーノのおしゃぶり』の代わりとなる『アルコバレーノのリング』だ
もちろん、風のな」

今度はウィントが言った

「…は？　いや、仮にアルコバレーノってことにしても…
虹に無色はないだろ？」

「確かに虹の色ではな　でも、虹がある場所にも風は吹いているだろ？」

漣が言う

「あ、そっか　んで、なんで風が出来たんだ？
しかもさっきまでは普通のリングだったんだぜ？」

「7（トウリニセッテ）？の三つは覚えてるか？」

ウィントが確認する

「……あ、思い出した

ボンゴレリング、マーレリング、アルコバレーノのおしゃぶり」

「正解

んで…南が前世から持っていたリングが、アルコバレーノの風の穴埋めをするためになったってこと

ただし覚醒するまではただのリングだったんだ

だが、その三つがさっき一定の空間内に集まったから覚醒しちまったんだ…

南は呪いを受けるはずが無いから赤ん坊になりはしないから安心してくれ

まぁ、未来での非7?線(ノン・トゥリニセッテ)は受けるがな」

ウィントは説明した

「…さっすがウィント！！

無駄なことをだらだら言う漣とは大違いだな！！

…ところで、非7？線って…？」

「南…オレだって頑張ってんだ！！

非7？線ってのはアルコバレーノに有害な物質！！

んで未来ではアルコバレーノを捕まえるためか何のためか、それが放射されてるんだよ

アルコバレーノは放射されてるとこでは動けなくなるし、厄介なものだ」

やはり漣はいらないことも言う

「「わかんないなら言うな」」

「…もうオレは何も言わない…

ウィント、説明してくれ…」

漣は南とウィントから離れていじけ始めた

「まぁ、そういったものだ

こないだオレが南に透明のカバー渡しただろ?

あれで１００%遮られるから安心していいぞ」

今もリングにはカバーが付けられてる

「なら良かったよ…　未来で動けなくなったら嫌だからな…

ってか何でそんなのをウィントが持ってたんだ?」

「オレも前世でよく発明してたからなー」

「へー、ウィントも帝王行ってたのか?」

「あぁ!!　なんだよ南オレのこと忘れた?」

ウィントはナニを言ったのか分かっていない様子だ

それに引き換え南は……

「は…？　ウィント…オレと知り合い……？　前世で、会ってる…？」

パニックになっていた

「あ…今の言葉は忘れてくれ！！

……言っちゃいけないことだった…」

南にウィントの言葉は聞こえていない

南は一人の人物が浮かび上がっていた

叔父に嫌われていたせいで死んだ南の親友…

「ふ…うり…？」

「…漣、ばれちゃった…」

ウィントは漣に言った

「…なにがですか？」

漣はいじけていたせいで南とウィントの話を聞いていなかったのだ

「オレの前世♪」

「あー、蒼巻風梨だったってことですかー…

……ってえ――――――――――！！！！！！！！！？？？？？？」

漣はスクアーロ並の声を出した

「いやー、オレが失言して、南が頭いいからバレタ★」

「…ハァ…じゃあもう仕方無いよ…

南が混乱してるから説明してやれよ…」

「ん！　南、じゃあ長くなるけど聞いてくれるか？」

南は下を向いたままうなずいた

「オレが死んで、漣に会ってから話すか…」

オレは、漣に会って手違いだったことを聞かされた

本来なら、オレじゃなく、叔父さんの娘が誘拐されるはずだったらしい

んで、身代金を渡すけど足りなくて殺される

オレは漣が楽をするために転生させられることになった

だけど問題が一つ

オレの体が燃やされてたんだ

転生させるとき、前世の体が無ければ同じ体として転生できないらしい

そんで、オレは南とほぼ同じ体にしてもらった

唯一の親友を忘れないために

南と仲良くなれた理由の群青色の髪と目は変えなかったけど

そんで、転生させられて目を覚ますと、ＲＥＢＯＲＮ！の世界にいた

初代の時代だったことには驚いたけど、オレの設定を漣から聞かされてて何とかなった

オレはGのいとこ

まだボンゴレは存在していない

ジョットとGはすでに会っている

Gとオレは一年に数回会うくらいの仲

最初はそんくらいだった

でもボンゴレを作るときにオレもファミリーに入れさせられた

オレは嫌だったけど、Gに無理やり入れさせられてな

それから仲良くなったのは、アラウディ・D.スペード

…ランポウの師匠になったけどな…

オレは風の守護者を2代目に作らせなかった

『後継者候補が二人現れたときにのみ、風を存在させる』

それを代々伝えさせて、風は現れなかった

「んで、南の時代で風が存在することになったってことだな」

「…オレは風のリングを受け継ぐ者が現れ、候補者が二人になったらって聞いたんだけど…

それって同じことじゃねぇの？」

「ちょっと違う

風のリングを受け継ぐってことは、ボス候補が二人ってことだろ？

もしかしたら二人とも同じ者を風の守護者にするかもしれない

まぁ、実際南の相手は南の代理で出ていたらしいけどな」

実際はウィントの読み通りだったのだ

「ふーん…

なんか今日はいろいろ知って疲れた…

風梨がウィントって分かったり、アルコバレーノのことだったり…

ふぅ…」

南は昨日リング戦があったから疲れるのも無理はない

「んじゃ、帰るか？」

漣が聞いてきた

「あぁ…扉作ってくれ…」

「おうよっ！！」

そしてパァっと光り、扉が現れた

「じゃーな、南」

「あぁ…またな、漣、ウィント」

南は扉を開き、帰った

帰ったあと、何が起こるかも分からずに

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６２　虹に吹く風、そして初代風の正体！（後書き）

なんか短いですね…
次は風梨とウィントの紹介をして、未来編！！
ではでは！

Ｓｔｒａｏｒｄｉｎａｒｉａｍｅｎｔｅ９　登場人物２！

ウィント

性別　女

年齢　不明（『死んで何年か経ったから忘れちまった』らしい）

身長　１７０ｃｍ

体重　４６ｋｇ

一人称　オレ

誕生日　１月１１日

性格　南とほぼ同じ

髪の色　群青色

目の色　群青色

髪型　南と同じ

目の形　南と同じ

ファッション　ＶＡＲＩＡ隊服のように真っ黒服の下にワイシャツ

アクセサリー　首に十字架のペンダントをかけている

必需品　前世で南から貰った十字架のリング

蒼巻（ソウマキ）　風梨（フウリ）

性別　女

年齢　享年８歳

身長　１１０ｃｍ

体重　１３ｋｇ

一人称　オレ

誕生日　１月１１日

性格　南とほぼ同じ

髪の色　群青色

目の色　群青色

髪型　肩下まであるストレート

目の形　大きい
超死ぬ気モードのツナの目と似ている

ファッション　ボーイッシュだけど女物

アクセサリー　十字架のペンダント

必需品　ケータイ、財布

Ｓｔｒａｏｒｄｉｎａｒｉａｍｅｎｔｅ９　登場人物２！（後書き）

キリはよくないけど説明しなきゃなんで書きました…
他にも足りないことがありましたら教えてください
足しますので！

小説のタイトルが変わります
変更後は『家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！　自由な風、来る！』です
傍観者より合ってると思いまして…
今後とも、よろしくお願い致します

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６３　未来へ行く！

…なんでこうなったんだろうね？

今はね、見渡す限り白と黒の服を着た人に囲まれてます

…漣達と別れたとこから説明しよう…

オレは起きたらソファーで横になっていた

時間は夕方４時

何か食べようと思ったら、冷蔵庫には何も無かった

「…仕方ねぇ、買ってくるか…」

そしてリングを首にかけ、家を出た

商店街にもうすこし、というところで…

「…ん？　なんか嫌な予感が…」

後ろを振り向いた

「……は？」

ドッカーン…

何かよく分からないものがオレに当たった

んで、今に至る

「貴様…何者だ！」

「南様はどこへ行った！！」

…南様？

「あの…オレ、風間南ですけど…」

「ナニ！！？　…確かに似ているが…」

「失言失礼致しました、南様
入江様にお会いしていただけないでしょうか？」

…入江？

誰そいつ…

ってかさ、なんかオレのリング見られてる気がするんだよねー

気のせいじゃないよねー？

「よろしいでしょうか？」

「…めんどくさいけど、入江って奴に会ってみたいから行くよ…」

そのまま白い服を着た奴についていった

「入江様、失礼いたします」

ウィィィーン、と扉が開いた

「ナニ？　僕今忙しいんだけど…」

入江が南の方を向く

「え！？　風間さん！？」

南と入江は知り合いのようだ

「…テメェが入江か？　オレに何か用？」

「確かに僕が入江正一だよ…

君は風間南さんで合ってるかい？」

「…あぁ…　ここはどこだ？」

南がいるのは、第一通信司令室

「悪いけど、ちょっとついてきてくれるかい？」

「……わかった」

南と入江正一は部屋を出た

「…ここは？」

南が聞いたとき、入江は何かのスイッチを押した

「僕の研究室だよ…

ここなら通信を一時的に切れるから、聞かれたくない話をするにはもってこいの場所なんだ」

入江は南と向き合う

「秘密…？　オレがここに来たことか？」

「それもあるね

まず、ここは１０年後の世界」

「未来…か」

南は未来編に入ったな、と理解する

「うん、そうだよ

あー、どれから話そう…」

入江は頭をぐしゃぐしゃとし始めた

「まず、どうしてオレがここにいるのか教えてくれ」

「風間さんがここにいたのは、１０年後の風間さんがここにいたからだよ

この時代の風間さんは…白蘭サンに劇薬を投与されて、ミルフィオーレファミリーに入ってた」

南は目を見開く

「あぁ、でも風間さんには劇薬が効かなかったんだ

でも目的があるとかで、効いている演技をし続けた

…どんな目的かは教えてくれなかったけど」

「…入江、オマエは敵なんだろ？

なのにこんなに話していいのか？」

南の言っていることはもっともである

入江がミルフィオーレだと言うことは何となく分かっていた

「あぁ…混乱してて忘れてたよ…

僕も潜入しているようなものだから風間さんの…ボンゴレの味方だよ」

「…まぁ、そうじゃなきゃ話さないよな…

さっきの白蘭ってのはボスとかの名か？」

今度は入江が目を見開いた

「さすがは風間さんってことかな…

白蘭サンは何故か風間さんを仲間にしたくて無理矢理劇薬を投与した

…もう時間がない…　このチェーンを持っているリングに巻きつけてくれるかい？」

入江は三つの短いチェーンを南に渡した

「どのリング？」

南は首から全てのリングを外す

「コレ以外だよ」

入江が指したのはクロームとペアのリング

「…どこかに行くのか？」

南は他のリングに渡されたチェーンを巻きながら聞く

「ここに風間さんはいるべきじゃないんだ…

ボンゴレの人たちも風間さんが突然いなくなって心配しているだろうし、とりあえずは…」

「ボンゴレのとこに、か…」

南は全てにチェーンを巻き終わり、ため息をついた

「うん…

あ、あとコレも持って行ってね」

渡されたのは、小さな立方体の箱

一面に穴が空いている

「…これは？」

「それは匣（ボックス）と言って、この世界での武器だよ

この時代の風間さんはそれを使っていたんだ

まぁ風間さんのアジトとボンゴレのアジトに、他のが置いてあるって言ってたけどね」

入江は時計を確認した

「もう本当に時間が無いから話せるとこまで話すね

僕が風間さんのことをこれだけ知っているのは、風間さんとよく話していたから

僕らは演技でもミルフィオーレだったから、こうやって密かに話したり、すれ違いざまにメモを渡しあったりしるだけだったけどね

だから、風間さんがここから出てっても僕のことは話さないでくれるかい？」

「あぁ、分かっている

他のことはボンゴレのとこに行けば分かるか？」

「うん

…でもボンゴレアジトがどこにあるか、僕知らないけど…

どうにか自力で見つけてもらうしかないんだ…

ここから脱出するための地図は見せるから、覚えてくれるかい？」

入江が机の上から地図を持ってきた

「あぁ、紙があると入江が疑われるからその方がいい

まーアジトはどうにか見つかるだろ！

…ここって並盛だよな？」

「うん　地下だけどね

それじゃあこれ…」

入江が渡した

紙には線がいっぱい書いてある

直線的に出口に行くと、カメラで怪しく思われるからだ

「…覚えた　んじゃな」

南は研究室を出て行った

それから３０分後

「おぉ…確かに並盛だ…」

南は地上に出た

脱出成功である

「こっからが問題だな…

アジト探し…」

南はとりあえず並中に向かう

並中は、１０年経っても変わった様子はなかった

来る時通った商店街も変わったところは無く、南は少し嬉しい

その時だ

誰かの気配がした

でも、知っている者の気配……

一応物陰に隠れる

たったったっ…

足音が近づく…

そして、姿が見えた

「…隼人……？」

スーツ姿の、この時代の隼人だ

「くそっ…

ジャンニーニ！　見えないか？」

耳に手を当て、無線で話す隼人

南はまだ隠れていた

いや、隠れてるというより隼人を試しているのだ

南の気配に気づくかを

「…わかった…

!?

……この気配…」

南はワザと少し気配を出したのだ

今までは完璧に気配を消していたから

だとしても、プロでも見抜きにくいほどの気配だ

隼人が、南のいる場所に近づく…

そして、物陰を覗き込んだ

「よく見つけたなー　さすがは１０年後って事か」

「南……
　って……は？」

隼人は南が意味不明な言葉を言ったので放心状態だ

「…オレを、試していたって事か…？」

「おう！　またまた正解

ってかデカくなったなー」

南は隼人を少し見上げるようになっている

「南、なんで…

いや、アジトで聞くから付いて来てくれ…」

隼人はため息をついて歩きだした

「その前に、リングにチェーン…ってなんで付いてんだ?」

「秘密。」

南は入江の事を話す訳にはいかない

「……とりあえず、アジトに行くぞ」

隼人と南は歩いて行った

しばらく歩くと、隼人が止まった

「…ここだ」

「…森の中に作ったのか？」

止まったのは、森の中

「いや、地下だ

ここから入るぞ」

そしてどこからか、地下に入る

「入り口ってここだけか？」

「いや、他に6か所ある

南のアジトも別にあるが、とりあえずボンゴレのアジトでいいよな」

「あぁ」

そして、中に入る

「広……　さすがボンゴレ…」

しかもまだ完成してないと言う

「応接室でいいか？」

「いいぜー」

南は一瞬並中の応接室かと思い、驚いたが…

そして応接室に着いた

「んじゃあ、オレから質問させてもらう

なぜ南は昔の姿になってる？」

「なんか…商店街歩いてたら爆弾に当たって、気づいたらここに…

…」

南は笑いながら言う

「…10年バズーカか…

じゃあ、この時代の南の事は…」

「知ってるぜ

なぜ知ってるかは言えないが、知っている」

「…ようやく、戻った来たんだな……」

恐らく、南がミルフィオーレにいたことは南の仲間を心配させていた

入江が言っていたのは、このことだった

「…まぁ、何でもいっけど…
でさぁ、この匣ってのは？」

南は入江に渡された匣を出す

「それは、南の匣だな…
トレーニングルームに行くぞ　教えてやる」

隼人は立ち上がり、南と共にトレーニングルームに向かった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６４　１０年後風の匣と嵐と雷！

トレーニングルームに着き、南と隼人はリングのチェーンを外す

もちろんアルコバレーノのリングのカバーは外さない

「まず、リングの炎について説明する
…って、まさかこれも知ってるか？」

隼人が南に聞いてみる

「うーん…
確か覚悟を炎に、だっけ？」

「まぁ、炎の出し方は合ってる
理由とか原理は分かるか？」

隼人は理論派なため、聞く

山本だったら聞くことはないだろう

「それは知らん
教えてくれ」

南も微妙に理論派なため聞く

「人間の体には目に見えない生命エネルギーが波動となって駆け巡っている

波動には8種類あって大空・雨・嵐・雲・霧・晴・雷・風だ

ただ全部の波動は流れてない　まぁ数種類の波動が流れているのはあるがな

そしてその波動を炎にするためには、同じ属性のリングが必要だ

その炎…死ぬ気の炎を出す方法が、覚悟だという訳だ」

南はしっかりと理解した

「なるほど…オレのリングは風か？」

「あぁ…そうだな

でも南は他の波動も流れている

嵐・雲・霧・雷だ」

つまり、５つの波動が流れている

「この時代の南がそうだったから、今の南も同じだ

とりあえず炎を灯してみろ」

南はボンゴレリングを右手の中指に嵌める

南の覚悟――――

『仲間を、守る』

ボウッ

大きな炎が灯った

「少し抑えろ…」

隼人に言われ、炎を小さくする南

炎の色は透明（クリアー）で、台風のように渦巻いている

「さすがだな…
次は匣の説明をする
炎に慣れるために炎を出しながら聞いとけ」

南は頷く

「匣にも炎と同じ数の属性があって、同じ属性の炎でしか開かない
匣の種類もあり、武器が入ってるものや、アニマル匣…　まぁそ
の内見るだろ
開匣してみろ　それは風属性だからな」

南は少し考え、匣を左手に持つ

「開匣！」

穴とリングを合わせる

ドシュッ

何かが出てきた……

「…は？」

出てきたのは、子チーター

「そいつは南のアニマル匣だ

風チーター（ゲパルド・ディ・ヴェント）　まぁ、子チーターだけどな」

出てきたチーターは、南の足元に近づき、甘えてきた

「へー　名前ってあるのか？」

南はチーターを抱きかかえ、頭を撫でる

「『スード』…　リング争奪戦の時に南が名乗ってたのを、そのまま名付けたんだよ…」

「マジ？　ま、オレなら有り得なくないな

スード！」

南が呼ぶと、嬉しそうに微笑む

「…南、オマエに返すものがある……」

隼人は低い声で言った

「返す？」

「あぁ…　この時代の南が言ってたんだ

『オレがもう一度戻って来たら、渡してくれ』ってな…

…ミルフィオーレのとこに行く前の、最後の言葉だ……」

隼人はスーツの内ポケットに手を伸ばす

そして、匣を一つ取り出した

「南が作った匣だ…

オレが預かった…」

その匣は、全体が黒で、角に小さな丸く赤い石が付いていた

「…オレの…匣？

赤い石ってことは、嵐属性か？」

南は隼人から匣を受け取る

「あぁ…　スケボーだ

嵐属性の炎を出して空中を飛んだり、高速で移動したりできる

まぁ数年前から南が使ってたのを匣にしたんだけどな

オレだけじゃなく、雲雀、骸とクローム、ランボにも匣を渡してたぜ」

「…最後の奴はなぜ？」

「五年前位から、修業することになってな…

ランボが南に修業を頼んでたんだ

……オマエはストレス発散って言ってたけどな」

自分ならやりそうだ、と納得する南

そして、隼人は鍵と紙を取り出した

「この鍵は、ボンゴレアジトの南の部屋の鍵だ
地図に書いてあるから、そこに行ってみろ…
今ならランボがどこかにいるから、会うといいぜ」

南は隼人から受け取ったものをポケットに入れ、スードと共に部屋を出た

「…やっぱ、南は変わってねぇな…」

隼人は一人、呟いた

南はアジト内の自室に向かっていた

「なぁ、スード…
オレって何でミルフィオーレにいたんだろうな」

答えてくれないのは分かっていても、つい聞いてみた南

「……」

「あ…寝てたか…」

南はスードの頭を撫で、揺らさないように歩く

「…ここだ…」

南はある部屋の前で止まった

地図上での南の部屋

鍵穴に、渡された鍵を差し込む

ガチャ

鍵が開いた

ギィィィ……

「…ここが…オレの部屋…」

中はモノクロで統一されていた

１０年前の南のマンションと、家具は違うが同じ感じだ

「…この匣は…？」

南が気になったのは、机の上に置いてある匣

スードのと似ている

スードの匣は、全体が黒、辺の部分には白色の骨のようなものがあり、角に透明な石があった

この匣は、全体が白で辺の部分のは黒、角に透明な石がある

「…手帳とか、無いかな…」

机をあさる

自分なら、匣の特徴を記録すると思ったからだ

そして、一つの手帳を見つけた

真っ黒の手帳だ

「えっと…あった！　『匣』！」

パラパラ…と手帳をめくる

「『風ドラゴン（ドラーゴ・ディ・ヴェント）
名前：レウス（モンハンのリオレウスの黒ｖｅｒだったから）
風属性の黒いドラゴン（リオレウスの全身黒）
全長約２０ｍ
開匣する時は、必ず外で』

…これだけ？

しかもドラゴン…

その上モンハン…」

南は手帳を自分のポーチに入れ、匣もしまった

そしてまた、机をあさる

今探しているのはリングだ

そして、箱を見つけた

パカ…

「あった…」

中には

・嵐のリング×２
・雲のリング×３
・霧のリング×３
・雷のリング×２
・風のリング×３

どれもランクＢ以上、と書いてある

嵐・雲・霧・雷の内一つずつ、ランクＡのリングだそうだ

「オレってランク高いリング持ってるな…」

実際はランクAやBなんて多くあるわけではないのだ

この時代の南は、白蘭と何度も会い、リングを貰っていた

だからこそ、ランクが高いリングを持っていた

南はリング全てを巾着袋に入れ、ポーチにしまう

「未来に飛ばされる時にポーチと刀持ってきてて良かったよ…

おかげで小型パソコンもあるし」

南はいつからか常備するようになっていた

そして、もう一度机をあさる

手帳に、一番興味深い匣が書かれていたのだ

「…これか…？」

南が手に取ったのは、全体が黒で、辺は白、角に橙・青・赤・紫・藍・黄・緑・透明の石が付いた匣

南が探していた匣だ

『変換匣』

南が発明した匣で、炎を注入する時に注入する炎の属性の色の石が

付いた角を押す

そして、注入したらすぐに変換したい属性の炎の色の石を押す

するとその属性の炎が出てくる、という便利匣だ

…ただし、マイナス面もある

変換されて出てくる炎の量が、少ないのだ

１０の炎を注入したら、たったの２の炎しか出てこない

この時代の南はこの匣を晴の炎を出す以外には使わなかった

晴は、『活性』

つまり治癒能力があるのだ

南は仲間が怪我した時に、晴の炎を作り出すために発明したのだ

「うし、これで全部だな…」

南は匣二つをポーチに入れ、部屋を出た

そして鍵を閉め、鍵をポーチに入れる

「し…師匠ー！！」

南に向かって走ってくる人影

「師匠？」

南は不思議に思いながら、その人影を見る

「し…し、しょ…」

走ってくる途中で疲れたのか、ヨロヨロと走る

「…ウソだろ……」

南は走れなくなったことでは無く、その人物がわかった感想を言う

「…アホ牛…？」

そう、ランボだ

「師匠、お久しぶりです」

「ちょっと待て、前に病院で会った時は『風間さん』って呼んでたよな？

…まさか、リング争奪戦があったからか？」

南にはその時との違いがそれしか見当たらなかった

「恐らくそうだと思います
そうだ、師匠…匣を…」

ランボはポケットに手を伸ばした

そして、匣を取り出した

全体黒で、辺は白、角の石が緑色の匣だ

「これは、オレに修業用として渡してくれた雷属性の炎を纏うコインです

元々師匠が持っていたものですが…

獄寺氏達に渡していた匣と同じく、師匠が作ってオレ達に渡してくれたものです」

「隼人から聞いたときも言われたけど、オレが作った?」

「あ、はい…
でもこの匣は師匠が使ってるのを修業以外で見たことありませんが…
他の匣は使ってたんですけど」

確かにコインは戦いで使わないな、と南は思う

「んじゃ、一応預かるな」

南は匣を受け取った

「師匠、さっき獄寺氏に渡すのを頼まれたものが…」

ランボはポケットの中をあさり始めた

「あった…　師匠のアジトの地図ですね」

ランボは南に紙を渡した

南はそれをポーチに入れた

「ってかよ、アホ…ランボはいつから師匠って呼ぶことにしたんだ？」

「えっと…修業をつけて貰ってからです」

ランボは懐かしむ表情で答えた

「そっか…

オレはもう疲れたから寝るけど…」

先ほど部屋の鍵を閉めたのは、ランボに会うためだったのだ

「わかりました
お疲れ様です、師匠」

ランボは来た道を戻っていった

南は鍵をもう一度開け、部屋のベッドに倒れこむ

「…明日、クロームや恭弥のこと聞こう…」

南はそのまま眠りについた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６４　１０年後風の匣と嵐と雷！（後書き）

匣の説明です

風チーター（スード）
南がミルフィオーレに行っても持っていった匣。
基本スードは戦わず、南の癒し係。
生後一ヶ月半程成長した姿で成長が止まっている。
晴の炎で一時的に成長できる。
体重２．５ｋｇ　身長４０ｃｍ弱。
南と仲いい人（ＶＡＲＩＡのレヴィ以外、隼人、恭弥、クローム、骸、犬、千種、ユニ、アリア、γ、１０年後ランボ）には甘え、それ以外には普通。
咲・京子・ハルのことは嫌っている。
風の炎は耳・尻尾・足の部分から出ている。

風ドラゴン（レウス）
南はレウスが強すぎるため、滅多に使わない。
モンスターハンターのリオレウスを全身真っ黒にした姿。
体重不明　身長約２０ｍ。
南が許した者しか背中に乗せない。
炎は口から吐き出すことも出来る。
通常時は背中から出ているだけ。

嵐スケボー
南が５年前に買って匣にした。
スケボーの色は真っ黒。
空中に飛ぶときはタイヤの部分から炎を出し、前に進む時は後ろから炎を放出。

白蘭に呼び出されてミルフィオーレに行くときに隼人に渡した。

雷コイン
デザインは表が雷の刻印、裏がボンゴレ大空の刻印。
戦いでは使ったことはない。
ランボの修業用で使用。
直径５ｃｍの円。
炎は全体に纏っている。
コインの色は銀。
嵐スケボーと同じく南がランボに渡した。

こんな感じです
リオレウスはモンハンのサイトで調べれば分かると思います
生後一ヶ月のチーターはメチャメチャかわいいので画像探してみてくださいっ！！
匣のデザインはその内書くかもしれません
辺の骨みたいなヤツって言うのは、隼人がカスタマイズした匣の辺の色違いです
角の石は宝石みたいな感じのです
全体の色はグラデーションしていない、一色になってます
ちなみに次の日にリボーンが未来に来ます

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６５　イエロー・大空・嵐が未来へ来る！

「ふぁーぁ…　ここど…って未来に来たんだったな」

南は部屋を見渡す

マンションとほとんど変わらない

ただ、マンションの家具より少し豪華だ

「今は…あぁ、もう昼過ぎか…」

寝過ぎた、と思い起き上がる

そしてポーチの中身を確認し、整理する

通常千本　５００
毒千本　１００
痺れ千本　１００
解毒剤　一瓶
手袋
未来に来る前から持ってるリング以外のリングを入れた巾着袋
リングは１３
風ドラゴンの匣
変換匣
嵐スケボーの匣
雷コインの匣

風チーターの匣はポケットの中だ

整理し終えたら、右腰に付ける

刀を左腰に潜ませ、部屋を出る

ウィィン…

とりあえず応接室に行くことにし、歩き出す

応接室の前に着くと、中が騒がしいことに気づく

ウィィ…ン

「ちゃおっス」

「あり…？　チビちゃん？」

そこには１０年前のリボーンがいた

「まさか…チビちゃんも未来に来たのか？」

「そうだぞ　急に動けなくなって、当たっちまったんだ」

リボーンはそう言いながら着替える

「…それは何のコスプレかな？」

「コスプレじゃねーぞ

これ着てないと体調最悪なんだ

…非7？線（ノン・トゥリニセッテ）のせいでな」

おしゃぶりにカバーが付けられていた

南は寝起きのため、失言してしまう

「それならオレにも影響あるぜー？
オレはなんか風のアルコバレーノらしいからなー」

大きな欠伸をし、言った

しかし、その場にいたリボーン、ジャンニーニ、山本、ランボは驚いた表情をしている

「あ…　やべ、口が滑った…」

やはり呑気に言う南

「…どーいう事だ…」

「あー、チビちゃんはアルコバレーノだもんなー

オレは、風のアルコバレーノだってよ…

これが、アルコバレーノのおしゃぶりの代わりとなるアルコバレーノのリング」

南はリングを取り出し、見せた

「ですが、風の炎はクリアー…透明です
虹には透明はありませんよ？」

ジャンニーニが聞く

「リングを見て分かるように、確かに透明だ
でも虹のある場所にも風は吹いてるだろ？
だから虹ではないアルコバレーノだ」

南は教えられたまま話す

「…オマエが…風か…」

「…どういうことだ？」

リボーンは何かを知っている

「…確かにアルコバレーノに風は存在する…

だが、オレ達がアルコバレーノになる時、風はまだいないと言われた

いつか時が来たら、風は現れると言われてな…」

つまり、風はある

「…そうなの？

こないだ急にこのリング手に入れてさぁ…

まぁ呪いは受けないらしいから気にしてないけどなー」

南はウィントに渡されたカバーで完全に非7?線を遮断しているから、他に気にする事がない

「…それは、どうやって手に入れた?」

「教えない

ま、この話は終わりだ」

南はボンゴレリングに炎を灯し、スードの匣を開ける

「ガルゥ…」

まだまだ可愛い声が聞こえた

威嚇しているように見えるが、全然そんな風には見えない

「スード」

南が呼ぶと、嬉しそうにジャンプして南に捕まる

「スードって名は、ヴァリアーにいた時の名じゃねぇのか？」

リボーンが口を開く

「確かにそうだが…

この時代のオレはこの風チーターをスードって名付けたらしいぜ？

ま、今オレが名付けてもそうするだろうけどなー」

スードを撫でながら話す南

一同は南が優しく撫でていることに驚いていた

だが、南は仲間に優しかったことを思い出し、妙に納得してしまう

「他に未来に来た奴はいるのか？」

「いや、今んとこオレと風間だけだ

…まぁ、いずれはツナ達も来るだろうけどな…」

リボーン達は分かっていた

何か理由があって未来に留まっていることを

翌日

いつも通りの朝を迎える

まだ未来に来てから二日しか経ってないから、いつも通りと言うのも不思議だが

昼には隼人がアジトを出て行った

最近は毎日らしい

夕方、山本が門外顧問の使者を、ランボとイーピンが笹川京子とハルを迎えに行った

10年後のイーピンは南が女ということを理解していて、南に対して普通に接しているようだ

…最も、南は無視しているらしいが…

アジトに残されたのは、ジャンニーニ、リボーン、南…

何とも不思議なメンバーだ

南は自分で料理を作って一人で食べるから、スードと常に一緒にいた

だが、夜のことだ

１０年前の、沢田と隼人が来た

偶然南が応接室の前を通った時に再会した

「隼人!?」

「南！　…って何だ?そのチーターは…」

隼人は、南の腕の中でスヤスヤ眠るスードを見て言った

「オレの匣兵器の風チーター…名はスードだ！

今は寝てるから明日遊ばせてやるよ?」

「…いや、別に……

匣兵器…？」

隼人はまだ匣のことをよく知らない

「あぁ！

今度詳しく話してやるから、話続けろよ」

南はリボーンに言う

「そうだよ！　やることって？」

「おまえはちりぢりになった7人の守護者を集めるんだ」

「え！？」

「歴代ボスもずっとそうしてきたんだ

ボンゴレに危機が訪れる時、必ず大空は6人…初代は7人の守護者を集め、どんな困難をもぶち破る」

ここで南が口を挟んだ

「ちょっと待て、オレは守護者じゃねぇ
前にも言ったよな？」

「だが、形では守護者なんだ
オマエも仲間を守るためなら戦うだろ？」

南はそれを言われて、何も言い返せなくなった

「…だが、オレが助けるのは仲間だけだ
仲間以外は見殺しにするぜ…？」

「…それで仲間が悲しんでもか？」

「さぁな…　それはオレの気分次第だ
…オレはもう寝る……」

南はそのまま部屋を出て行った

「リボーン！」

「なんだツナ　オレは間違ったことを言ってねぇぞ？
まぁ、風間が言ったこともそうだけどな」

そう、お互いの言葉は間違ってない

「まぁ良かったじゃねーか
一番問題があって、恐らく一番強い風間が既にいて」

「…でも、たった8人集まったところで…」

「逆だぞ

奴らと勝負できるのはおまえ達しかいねーんだ」

その言葉を聞き、隼人と沢田は首をかしげる

「この時代の戦い方は特殊だが、だからこそおまえ達8人にも分があるとオレは思ってる」

「何…言ってんだよ……　わけわかんないよ！

それよりオレ達の知人もボンゴレ狩りの的になるっていってたけど…

それって母さんや京子ちゃん達も入ってんのか！？」

沢田は混乱する

ボンゴレと関係ない者まで命を狙われているのだから

笹川京子と三浦ハルはランボとイーピンが探しに行ったらしい

だが、沢田の両親はイタリアに行っていて、状況がつかめない

この2日間でボンゴレに少しでも関係あるものは消された

山本の父親も……

南はある紙を見ていた

この時代の隼人からランボを通して渡された、南のアジトの地図だ

アジトは表向きは一般企業のビルとして成り立っているらしく、ミルフィオーレはもちろん、ボンゴレも知らない

知っているのは、南の仲間だけだ

おまけに、アジトの位置は地下

入り口は１０か所以上あり、それぞれ違う暗号が毎日変わる

南が毎日適当な暗号を決めているのだ

その上で指紋認証させられるので、万が一入り口が見つかっても安全

手帳には、南が独自で作ったマフィアのような物は無く、南の自宅のように使っていると書かれていた

たまに骸やＶＡＲＩＡなど、ボンゴレアジトには行かない者が来ていたらしい

「明日…行ってみるか…」

そう言い、眠りについた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６６　雨・雷＋αが引き続き来る！

「ここだな…」

南は並盛中の一角に来ていた

南のアジトに行くためである

並中からアジトに繋がる入り口があり、南はそこを選んだ

ピッピッ

南が手に持っているリモコンのような物を操作する

このリモコンで南が暗号を決める

設定が終わると、今度は入り口でも暗号を打つ

そして、指紋認証

ピ――――

ガチャッ

ドアの鍵が開いた

プシュー…

ドアが開き、南が通り過ぎると閉じる

通路には電気がついた

コツ、コツ、と足を進める

アジト内はボンゴレアジトと同じような感じだ

さすがにボンゴレ程広くはないが…

あちらこちらに医療室やトレーニングルームがある

トレーニングルームは、ボッコボコになっているのが多く、ロボットが自動で修復していた

アジト内がキレイなのも、ロボットが掃除をしていたのだろう

「お、ここに来たのか、南」

「！？」

突然誰もいないハズのアジト内から声が聞こえた

「よっ！　漣だぜ」

そう、神である漣だ

「…何やってんだ…？」

「いやー、今までボンゴレアジトにいただろ？
そんなとこで姿現せないからさ～」

「なるほどな…
…今の漣は、オレの時代の漣か？」

漣の姿は全く変わっていない

「いや、オレはどの時代でも共通してこの姿だぜ♪」

「ふーん…　あ、無線」

南はボンゴレアジトを出る前に隼人と同じ無線を付けていた

もちろん、隼人以外には渡していない

「隼人、どうした？」

『オレらが朝アジトを出て、敵と戦ったんだんで１０代目が怪我をされて…

とりあえず情報を渡すから戻ってきてくれ』

「敵、か…

分かった」

無線での会話を終わらせ、南はアジトの更に奥に向かう

「…出口はそっちじゃねぇぜ？」

漣が言ってくるが、南はそのまま進む

「なんか、ボンゴレアジトは恭弥のアジトと繋がってるらしいんで恭弥のアジトとオレのアジトが繋がってるってワケまぁ、さっき知ったんだがな」

つまり、間接的にボンゴレアジトと繋がってる

そのまま5分程歩き、一つのドアの前で止まった

鍵穴に鍵を差し込む

ガチャ…

ドアの向こうは和風の造りになっていた

「…確かに恭弥のアジトっぽいな…」

南はそのまま進む

漣の姿はいつの間にか消えていた

そして、再びドアの前で止まる

ガチャ

先ほどとは違う鍵で開ける

「おー、ボンゴレアジトだ」

そして地図と照らし合わせる

「確か、沢田が怪我したって言ってたから…

第一医療室にでも行くか」

南は第一医療室に向かった

「隼人ー、いるかー？」

南はドアを開け、言う

「南！？　いつから？」

「今から　オレのアジトと間接的に繋がってて早く着いた」

そう言いながら椅子を用意し、隼人の隣に腰掛ける

「んで、誰と戦ったんだ？」

「ミルフィオーレの奴らだ…」

「ミルフィオーレか…」

南は１０年後の自分がミルフィオーレにいた理由がまだ分からない

「あぶない！！」

急に沢田が起き上がった

「１０代目！！」

隼人が沢田と話している間、南は考えていた

自分が『何か』を忘れている、と

入江は目的があって南はミルフィオーレにいると言った

ミルフィオーレに、目的……

そして、何かの糸口を見つけた時だ

「うえぇ～ん

いやですこんなの～～」

今までいなかった者の声がして南は考えるのを止めた

「１０年後の世界がこんなデストロイだなんて…」

三浦ハルだ

笹川京子と咲もいる

「ツナく……「ツナさーん！！」」

三浦ハルが沢田に向かって走った

「ハルは平和な並盛に帰りたいです！！」

ガバッと抱きついた

南はこの事にイラついていた

「…うるせぇな……」

「！？！！」

その場にいた皆が南を見た

殺気を放っているから皆の顔が青い

「『平和な並盛に帰りたい』？そんなんテメェだけが思ってることじゃねぇんだよ…

オマエはその為に既に何かしたのか？　何かの糸口を見つけたのか？

最低でも沢田は早く過去に戻ろうと努力している

この時代では戦わなければ生き残れない　だがテメェらは戦えないから沢田が戦って、守っている

…それを知らずによく言えるな…？」

南の言葉は三人だけでなく、皆の心に突き刺さった

「あ…あの、風間…さん？」

笹川京子が南に声を掛けた

三浦ハルの目には涙が浮かんでいた

「……何だ…」

「風間さんだって、最初はそうだったでしょ？

なのにハルちゃんにそんなこと…」

「オレが最初に着いた場所は敵のアジトの中だぜ？

そんな無駄な事を考えている暇はねぇ

それに言ったのはこの女（アマ）にだけじゃねぇ　テメェにも言ってんだよ」

南は戦いなどはしなかったが、脱出するまではカメラをできるだけ避け、息をするのも辛い状態だったのだ

「……」

ようやく笹川京子と三浦ハルが黙った

「風間さん、やっぱりそれはヒドいよ…？

私だって戦わなきゃダメなことは分かってるけど「分かってる？」

…そうよ…」

言葉を遮ったのは南だ

「本当に分かってるのか？」

「…えぇ…」

「じゃあ未来に来て何をした？

敵と戦ったのか？　戦わずとも、沢田や隼人の手助けはしたのか

？」

「そ、それは……」

咲が口ごもる

「あぁ…手助けどころか、足を引っ張ったか？

そうだったよ、テメェは手助けが足でまといになるんだったな

挙げ句の果てに仲間に武器を向ける」

もう南に反論できる者はいない

「それにな…「そこまでにしろ、風間」

…チビちゃんか…」

リボーンが南を止めた

「風間、オマエとハル達は違うんだ
咲も戦いには参加させねぇぞ」

「リボーン君!?」

ここで口を挟んだのは咲だ

「私は戦うよ!?　皆を守るんだもん!」

「…引かなそうだな…

……わかった　修業して、オレが合格を出せたら戦ってもらう」

リボーンは咲が引かない、と薄々感じていたのだ

南はその言葉にイラつきを大きくした

「…風間、敵のアジトにいたってのはミルフィオーレか？」

「……そうだぜ？　だが場所は覚えてない、脱出するのに精一杯だったんだ

まぁ地下だったがな」

南はため息混じりで言った

「…トレーニングルームを借りる

高さ２０ｍはあるか？」

「２０ｍならギリギリあると思うぞ」

南はそのまま何も言わずに出て行った

トレーニングルームに向かった南は、スードを開匣し、さらにポーチから一つの匣を取り出した

「グルル？」

「スード…　今日はコイツを使うって決めてたんだ」

ボンゴレリングに炎を灯す

カチッ

「…開匣」

そして巨大な黒いモノが出てきた

「グォォォ！！！！！！！」

ビリビリと響くドラゴンの声

南が開けたのは、風ドラゴン…レウスの匣だ

「おい！　レウス！！」

「グヴヴゥゥゥ……」

レウスは飛ぶのを止め、床に降りた

着地のときに風が吹き、スードが飛ばされそうになったが南が抱きかかえた

「オレは１０年前の南だ！

姿は違うけど同じ人間だからよろしくな！」

ニッ、と笑いながら言った

「グヴヴゥゥゥ！！！」

レウスは上を向き、風の炎を吹き出した

「あ〝――――！！　壊すなよ！？」

南が炎を消えた後を見ると、焦げ跡が無くて安心した

「そういや、風の炎の特徴って何だっけ…」

手帳を取り出し、ページをめくる

それらしきページを見つけ、読む

『風の炎の特徴

・加速
　ファミリーのサポート
　刻印での白
・減速
　向かってくる敵を倒す
　刻印での黒
・回旋
　風らしい特徴
　刻印での白と黒の境目』

「こんなに種類があんのか…

あ、風の匣は大空の炎でも開けられないんだ…　確かに風は空じゃないからな…」

手帳を閉じ、レウスと向き合う

「レウス！　オレと修業してくれ！」

「グォォ……」

レウスはよく分かってない様子だ

「まぁ、炎を使わずに攻撃してくれ！

オレはそれを避けつつレウスに攻撃する

スードは見て、戦いを勉強する、ＯＫ？」

「グヴヴヴゥゥゥゥ！！！！！！！」

「ガヴゥ♪」

ドラゴンＶＳ人間の修業が始まった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６７　１０年後員の雲、偽海の雷と会う！

むくり、とベッドから起き上がる

そして時計を確認

「…さすがに寝過ぎた…」

もう夕方だった

理由があるとしたら、昨夜…いや、早朝４時くらいまで南のアジトで修業していたからだろう

レウスとの修業は晩御飯前までした

そして夜中12時から、ただ一人で持っているリング全てに炎を灯したのだ

もちろん、リングが耐えられるギリギリまで

その状態で筋トレ、ランニング……その他もろもろ

南の予想では、長くても一時間後には気力切れでダウンのハズだったのだが……

「…なんか…懐かしい気配がする……」

また過去から誰かが来たかもしれない、と思いボンゴレアジトに向

かう

そこにいたのは、予想外な人物で、状況で、姿だった

「…恭弥…？　群れてるの、許せるのか？」

そう、１０年後の群れている雲雀恭弥だ

「久しぶりだね、南」

「あれ？　会話が成り立ってないぜ？」

南の質問に答えない恭弥

「南、まさかとは思うけど今起きたの？」

「う〝っ…　恭弥は相変わらず鋭いな…」

「この時代の南もそうだったからね」

南の寝坊癖はまだ直って…いや、直そうともしてないらしい

「…なんか血の匂いがするけど…」

「さっきミルフィオーレを倒してきたからね

電光のγ」

「γ!!?」

南は思わず叫んでしまった

γ…

「知り合い？」

「それって、ジッリョネロのﾔか！？」

「元はね」

南は顔が青くなっていった

「殺した…のか…？」

「いや、恐らく生きてはいるよ」

その言葉を聞き、安心する

「ねぇ、知り合いなの？」

「あぁ…　オレはジッリョネロの皆と知り合いだ…」

「「！！！」」

その場にいた者皆が驚いた

「ワォ　そんな事初めて聞いたよ」

「まさか…ユニ…は？」

「それはジッリョネロ…今はブラックスペルのボスの名だね」

南はアリアとの会話を思い出した

ユニが、操られている

「…白…蘭……！！！」

膨大な殺気が南から放たれる

「ねぇ、どうかしたの？」

恭弥に言われ、殺気を収める

「…ジッリョネロの奴らは、オレの仲間なんだ…

白蘭なんかに心を売るような奴らじゃねぇ…」

南は下を向いたまま言った

「それはどーゆーことだ？」

リボーンが聞いてきた

「そのまんま…

んで、ユニはオレの義妹だ　まぁ正式にじゃねぇけど、母親公認だからな」

南はなぜ１０年後の自分がミルフィオーレにいるのか分かった

ユニを、救うため

そのためにミルフィオーレにいた

だが、ユニと会えずに過去の自分と入れ違った

「…オレ、助けに行かなきゃ…！！」

ドアの方へ向き直る

走り出そうとした南を、リボーンが止めた

「どこに行くんだ？」

「ミルフィオーレのアジト
何となくで覚えてるから」

言いながら南は歩く

「恐らく、ユニは日本にはいないぞ」

「…そうだろうな…　だが、ヒントは掴めるかもしんねぇから行く」

南は止まらない

「クロームもいつか未来に来るぞ？　その時助けなくていいのか？」

「！！」

もう南は廊下に立っていた

『仲間は、助ける』

それでは、どちらを助ければいい？

クロームは突然未来に来たら驚き、敵と遭遇したら危険だ

ユニは攻撃はされないが、心はボロボロだ

「…オレ、は…」

「仲間を助けたいのは分かるが、オマエがしようとしているのは無茶だ
せめてクロームと会ってからにしろ」
「……そう、だな…」
南は自分のアジトに戻った
そして、地上に出た
ユニの元に行くのではない
γの治療に行くのだ

ボンゴレアジトから出れるが、それだと地上に行ったことがバレる

南のアジトからだったらバレることは無い

「いた！　γ！！」

神社の前に倒れているγを見つけ、駆け寄る

「くそッ　変換匣を使うか」

リングからチェーンを外し、風の炎を晴の炎にする

「う゛…」

「γ！」

γが意識を取り戻した

「オマエ…南…？」

「あぁ、そうだ！

…大丈夫か？」

「どうにか、な…

それより南はボンゴレなのに敵の治療なんかしていいのか？」

そう言われた南はフッと笑った

「オレはボンゴレでも何でもねぇよ

仲間と決めた者を守ってるだけだ」

「は…？」

γはぽかんとした表情をしている

「っく…ははは!!

確かにオマエはそうだったな!!

…姫を救うためにミルフィオーレにいたんだろ?」

「!　…あぁ…

救えなかったみたいだがな…」

南は手を強く握り締めて言った

「南のおかげでもう動けるようになった

アジトに戻んな」

「まだ完治してねぇ」

「…いいから戻れ
ミルフィオーレの奴が来る」

南は気配を探ると、確かに何人かの気配がした

「…わかった…
最後に一つ聞かせてくれ
ジッリョネロの皆は、ミルフィオーレに全てを売ってないよな？
皆ユニを救おうとしてるんだよな？」

南にとって、これだけは『ＹＥＳ』と答えてほしかったことだ

「あぁ、もちろんだ」

γは微笑しながら言った

「…んじゃ、また…な」

南はその場から立ち去った

南がアジトに戻ると、ある者が来ていた

「やぁ」

「お、恭弥か　どうかしたのか？」

南のアジトのロビーにいた

「γの治療かい？」

「！　…恭弥には悪いが、そうだ」

南は恭弥の目を見て言った

「ふぅん　別に構わないよ

それより、南に渡すモノがあるんだ」

恭弥はポケットから匣を取り出した

嵐スケボーの匣の角の石がバイオレットになった匣

「オレが、預けた匣か…」

「そうだよ

雲チェーン…　まぁ使えば分かるんじゃない？」

恭弥は立ち上がり、自分のアジトに戻った

「あとは…霧…」

南は匣を握りしめた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６７　１０年後貝の雲、偽海の雷と会う！（後書き）

またまた匣の解説です

雲チェーン
雲の炎で伸びる。
通常時は約１ｍ。
鎖の色は銀。
戦いでは敵を捕まえる程度で使う。
炎は全体が纏っている。
隼人達同様に、恭弥に渡した。

です。
チェーンというより鎖ですね…。
チェーンだと首に巻くような細いやつみたいですが、攻撃できる太めのものです。
誤字脱字等ありましたらご指摘お願いします。
感想もお待ちしておりますっ♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６８　霧と再会する！

γとの再会を果たして１７日後

沢田達が新しい修業を開始してから３日後だ

南はいつも通り一人で修業しつつ、たまに恭弥と修業していた

最近はいつクロームが来てもすぐに駆けつけられるよう、朝早くから起きていた

そしてこの日、骸の話でボンゴレアジトに来ていた

骸が、倒された

倒したのはグロ・キシニアという者

だがクロームが生きている姿を捉え、骸は生きていることが証明された

そして骸の手がかりが二つ

身元不明の男と、フクロウだ

そしてそのフクロウを『ムクロウ』と名付けたらしい

その名を決めたのは、１０年後の南だ

ちなみにヒバードと名付けたのも南らしいが…

そして、その時

ヴ――ッ

「！」

「何だジャンニーニ」

「一瞬ですがデータにない強いリングの反応が…？黒曜ランド周辺です」

「！！　黒曜ランド！？」

ガタッ

沢田が叫ぶと同時に、南が立ち上がった

「行くのか？」

リボーンが南に聞く

「当然だ」

南はそのまま部屋を出ようとする

「ですがこのあたりは電波障害がひどく、誤表示の可能性も高いです」

「おまけに、敵の可能性もあるぞ」

ジャンニーニに続き、ラル・ミルチが言う

「だとしても、クロームの確率もある
ならばオレは行く
敵だったら消してきてやるよ　よかったな、敵が減って」

南はアジトを出て、黒曜ランドに向かった

そして、アジトの入り口からある程度離れた場所で、嵐のリングを取り出した

嵐スケボーを使うのだ

「開匣」

南は初めて使うが、使い方を知っているかのように扱う

ドゥッ

そのまま上昇し、黒曜ランドに急いだ

それから5分も経たない内に黒曜ランドに着いた

そして物音がする窓から入る

入った時――――

クロームにイカの足が迫っていた

「クローム！！！！」

南は急いでクロームの前に立った

ドオッ！！

雨の炎を纏ったイカの足は、南のボンゴレリングから出されている
風の炎の壁で止められた

「南！」

「なんれ南がここにいるびょん！」

「……めんどい」

「クフフ…来ましたか、南」

「フリー・ヴェントだと…!?　なぜここに…」

皆が思い思いの南の登場に対する感想を述べる中、南はクロームが無事なことを確認し安心する

「来るのが遅くなって悪い、クローム…

ってかさ、フリー・ヴェントって？」

「ううん、ありがと…」

「クフフ…　南、あなたの通り名ですよ

『自由な風』そういう意味です」

「意味は分かってるっつの！！」

南は、倒れてしまったクロームを立たせながら言った

「あなたはボンゴレにも、ヴァリアーにも、決まった組織に入りませんでしたからね

さて、お喋りはここまでにして戦いを続けますよ」

「おう！」

「りょうかいだびょん！」

「分かりました、骸様」

「はい…」

皆が武器を構えた

が、骸達が霧となって消え始めた

「！！　みんな！！」

クロームが慌てる

そして骸と脳内で会話をし、クロームは炎を大きくする

すると綻びが戻った

南は骸に脳内へ話しかけられた

『南…』

『あ？　何だよ』

『この戦いはクロームに経験を積ませるために、サポートだけにしてください』

『…分かった』

そして南はクロームの横に行き、ボンゴレリングに炎を灯した

風属性の特徴の一つ…

「加速…」

南はクロームの有幻覚に風の炎を纏わせ、スピードアップのサポートをする

まずは千種が二人になり、ヘッジホッグを使う

「フッ　ヤケになったか
余力で作った低レベルの幻覚の分身を見分けられぬとでも思うのか？
スピードは確かに早いが…有幻覚（じったい）はこっちだ」

雨巨大イカ（クラーケン・ディ・ピオッジャ）の足が片方のヘッジホッグを防ぐ

だが…

カカカ

グロ・キシニアに針が当たる

幻覚に有幻覚の針を潜ませたのだ

南の風の炎のお陰で骸、犬、千種の行動が早くなり、勝負は駆け足

で進んでいく

「恥じることはありません
その昔ボンゴレもひっかかった手だ」

骸がグロに近づく

そしてイカの足で攻撃するが、骸は幻覚となり、消える

ゴッ

グロの左目に石が当たる

骸の幻覚に潜ませクロームが投げたのだ

今度は千種が何人も現れ、皆がヘッジホッグを投げる

「次こそ幻覚」

グロは確信のないことのため、幻覚と言いつつも防御した

だが、それは幻覚だ

「クフフフ

幻覚…有幻覚

幻覚に潜む有幻覚……有幻覚から生まれる幻覚

真実の中に潜む嘘…嘘の中に潜む真実

これが霧」

骸は再びグロに接近した

この骸は、有幻覚だ

だがグロの防御はもう間に合わない

「君の不幸は僕の計画に組み込まれたことです
思惑通りクローム、南を使い、小さな労力で君を倒すことができた
控えている大仕事にも支障なさそうだ」

骸はまるでこの結末が分かっていたかのように話した

ビキビギ…ブシュッ

グロの血管が切れた

「プッ」

南はあまりにも可笑しかったために、笑ってしまった

そして――――――――

カッ

骸がグロに攻撃し…

ドオウッ

黒曜ランドが一部爆発した

「きゃっ…」

「ぐっ…」

南とクロームは風圧で吹き飛ばされそうになる

「クローム！！」

南は炎の力でクロームの下へ行き、クロームを抱きかかえた

ムクロウはクロームが抱きしめている

だが、爆発が大きく吹き飛ばされた

「ちっ…開匣！！」

なんとか匣とリングを取り、クロームを抱えたまま開ける

嵐スケボー

「…うし…クローム、大丈夫か？」

「……」

クロームからの返事が無い

気絶しているのだ

「クローム！？　…とりあえず、アジトに急いで戻るか…」

地上に下り、クロームのリングと自分のリングにマモンチェーンを巻く

スケボーは炎だけ消し、通常のスケボーとなる

「風間ではないか！！」

「…笹川か…」

南に声を掛けたのは、ボンゴレファミリー晴の守護者、笹川了平だ

「やはり、貴様は来たか…　ヴァリアーの読みは当たったな」

「！！　ヴァリアー…？」

南はついこの前の仲間の名に驚く

「今急いでボンゴレのアジトに戻れば、どういうことか分かると思うぞ！！」

「…分かった…　クロームはオレが連れて行く

笹川、おまえは自力で行け」

南はムクロウを抱きかかえたままのクロームをお姫様だっこし、スケボーに乗って行った

「ヴァリアーは！？」

南はボンゴレアジトの作戦室に着き次第言い放った

『う〝お〝おおい！！！』

懐かしい声が聞こえた

『首の皮はつながってるかぁ！？　クソミソカスどもぉ！！！』

「出やがった」

「じゅ…十年後の…」

「スクアーロ！！」

「おぉー、スクアーロかー
ってか映像かよ」

南は直接会ったり、テレビ電話くらいはできると思っていたからガッカリした

「あ…　風間さんとクローム！！」

「あ？　クロームの傷はゼロだ
映像は撮っておけ　オレはクロームの体調を診る
…イヤだが、急ぎたいからこのアジトでな」

「は、はいっ！！」

南はそのまま作戦室を出て行った

そして、医療室

「…怪我じゃねぇな…よかった…

だけどこれは…栄養失調…」

それも、何日も食べていないみたいだ

今は点滴でどうにか栄養を体に注ぎ込んでいる

「クフフフ…」

突然部屋に聞こえた声

「…姿を見せろよ…」

そして、霧が現れ、集まり…

「よぉ、さっきも会ったのにまだ何か？」

そう、この時代の…１０年後の姿の六道骸だ

「先ほどは助かりましたよ　クロームを守っていただいて」

「オマエの為じゃねぇよ」

南はクロームを見る

「そうですね…

今回は、あなたに用があり、来ました」

「…匣、か？」

「はい、そうです」

骸は一つの匣を取り出した

他の者に渡した匣との違いはもちろん、角の石の色だ

この匣は、インディゴ

「それは霧メガネです

幻覚を9割は見抜く、術士にとっては恐ろしい物ですよ」

「へぇ…　確かに受け取った」

南は匣を握りしめた

「では、クロームを頼みますよ…」

骸が霧となっていく

「…オマエに言われなくても分かってるっつの」

骸が完全に消えた

「今日からは二人前＋二匹分作らなきゃな」

南は少し嬉しそうに言った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６８　霧と再会する！（後書き）

南の匣は最後の解説です。
あ、ボンゴレ匣の時にまたしますが。

霧メガネ
一見ただの黒縁メガネ。
幻覚を９割見抜くメガネ。
南は戦闘で、相手が霧の炎を出したら掛けるようにした。
メガネの『ヨロイ』よりもフレーム側にある場所にマークがあり、
霧の刻印（両方）。
霧の炎は刻印の部分から出ている。
骸とクローム、二人に渡した。

とまぁ、こんな感じです。
ヨロイというのは調べて出てきた名前なんで、どの部分かはよく分かりません…。
南の通り名は、小説のタイトルと同じです。
通り名を付けよう、と思った時にこれがピッタリだと思いまして…。
まぁタイトルと同じですが、嫌な人は目をつぶってください。
それでは、感想お待ちしてます♪
ではでは～

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６９　戦う理由と霧の容体！

「5日後に、殴り込みか」

「はい…そういうわけです」

南はあれからクロームの隣にずっと座り、クロームの手を握っていた

まぁ、まだ一時間しか経っていないが

そこに沢田が来て、作戦を聞かされたのだ

今はまだ午前中

沢田はこれからラル・ミルチと修業らしい

「で？　オレに何の関係がある」

「へ？」

南からの思いもしない返事に、素っ頓狂な返事をする

「だから、オレに何の関係がある？

オレは隼人、クローム、恭弥以外と行動を共にする気はない」

「それは分かっています…

オレもまだ納得いきませんし…」

沢田は視線を下に下げる

「そういう事じゃない
作戦は良いと思う、だがなぜオレまで参加しなくてはならない？
オレは自由に…単独で動き、日にちも自分で決める」
「（この人本当に自由だ――！！）
分かりました…　一応結果を決めたら伝えに来ます」
沢田はドアに向かって歩き出した
ピタッ
沢田がドアの手前で止まった

「まだ何か用？」

「…風間さんは、どうしたらいいと思いますか？」

沢田は南の方に向き直り、聞く

「なぜオレに聞く？」

「いや、あの…

獄寺君は賛成するだろうし、咲ちゃんには聞けない…

山本に聞こうとしてもリボーンいるから『自分で考えろ』って言ってくるだろうし…

他の人もリボーンと同じだろうし…

風間さんの意見が聞きたいなって…」

沢田にしては強気な言葉に南は、沢田が変わった、と思う

「…じゃあ聞くが、なぜ沢田は反対なんだ？」

「！！　それは…

そんな事しても、皆が怪我するし、危険な事は避けたいし…」

沢田も、『仲間を守りたい』んだ

「ハッ　それは甘いな

どの道、楽して過去には帰れない

のんびりしてたら、逆に攻め込まれるぜ？」

「そんな…！！」

南の言葉は正しい

沢田も理解するが、それでも……

「あぁ、結論を言ってなかったな
オレは作戦には『賛成』だ　参加するかは別とすればな」

「…ありがとうございました」

沢田はそのまま部屋を出て行った

南はクロームの方に向き直る

「沢田も、オレと理由は一緒だな…」

南は分かっていた

沢田と自分の目的が同じである事を

『仲間を守るために戦う』

南はユニ、クローム、恭弥、隼人

沢田は皆を

沢田にとって、皆の中には南も含まれている

本人は自分より南の方が強いのを分かっているため、あまり気にしてないが

それから一時間後

クロームの容体が急変した

内臓が、失われているのだ

「クローム！！」

南はもちろん、ビアンキまで来ている

「がはっ」

クロームが血を吐き、血が真っ白なベッドと、真っ黒な南の服に染み込む

南の服というのは、南が『制服より…』という思いで着させた南の服だ

「クローム！！」

沢田が来た

「！！」

「ダメだわ！！　手の施しようがないの！！」

「そん「いや、あるぜ」

！」

沢田の言葉を遮り、南が言った

「クローム！　聞こえるか！？」

南がクロームに叫び、聞く

「う゛…み、なみ…」

「よし、聞こえるな？

今からクローム自身の力で内臓を作るんだ！！
霧の炎はオレが力を貸す！
できるな！！」

南はクロームにそれほどの力があると信じ、言う

ポーチからランクAの霧のリングを右手の中指に嵌めた

「がっ…

わか、ん…ない…け、ど…やっ、て…みる…！！」

南はその言葉を聞き、クロームの手を握る

「よし、いくぜ！！」

ボウゥッッ

南の右中指から膨大な霧の炎が放たれる

リングが耐えられるギリギリの量だ

クロームの右中指からも、南よりは小さいが炎が放たれている

「う…」

「クローム！　頑張れ！！」

南はポーチからランクBの霧のリングを二個取り出し、右人差し指と薬指に嵌める

そしてそのリングからも炎が放たれる

「ぅ……」

クロームの表情が落ち着いてくる

「……もう大丈夫だな…」

南は中指のリングだけ残し、他の二つのリングは炎を消し、ポーチに戻した

「…みな、み…」

「！　どうかしたか？　クローム？」

「…ありがと…

服、汚して…ご、めん…」

クロームは辛そうに笑い、言った

「！！　…そんなの、気にしなくていいぜ…？

…クローム、お疲れ様…」

幻覚を作るのは、大変なのだ

南は幻覚を作れないから、少しでも負担が軽くなるために霧の炎を提供したのだ

それでもキツいことには変わらない

苦しい中、内臓を作るのだから

パリン

何か音がした

「っ…！」

「クローム!?　どうかしたか?」

「槍、が…」

南はクロームの鞄の中を許可を取って見させてもらった

中には、砕け散った三叉の槍

「……体には、影響ないか？」

「…さっきより、ちょっと苦しい…

骸様の幻覚が、完全に消えた…」

つまり、骸に何かがあったのだ

「…骸なら簡単にくたばらないさ

クロームは安心して休めよ？　霧の炎はしばらくオレが出すから」

ガチャ

誰かが入ってきた

「雲の人…」

「恭弥？」

「ワォ　さすが南だよ

わざわざ来なくて平気だったね」

恭弥はクロームに自分で幻覚を作れ、と言いに来たのだ

南が気づくという予想もしていたが、念のためだ

「あ、ついでに言っとくよ
今日は恭弥との修業しないから」

「ずっとここにいるのかい？」

「もちろん！」

南はクロームの容体が急変したこともあり、絶対に離れないつもりだ

「南…私に構わないで修業して…？」

クロームは小さな声だが、南に心配させないように強い声を出した

「クローム、オレはここにいたいんだ
どの道今日は実戦したから実戦練習はしないつもりだしな」

優しい声で言う

「…ありが…と……」

クロームは眠った

疲れが溜まっていたのだろう

「ま、そゆことで
いいだろ？」

「別に構わないよ
その分明日に回すから」

恭弥はサラッと言い切った

「…オマエは１０年経ってもタチ悪ぃな！！」

「面倒くさがりよりはマシだよ」

恭弥は溜め息混じりで言う

「ひどくね？　別に気にしないけど」

「それもどうせ面倒だからでしょ？」

「おー…　さすがワガママ元委員長」

パチパチ、と手を叩く

「…バカにしてる？」

恭弥は殺気を少量放つ

「してないって～

…殺気引っ込めろよ…　ここはクロームの部屋だ」

お互い殺気を放ち始める

「ヒィィィィ！！

落ち着いてください！」

殺気に耐えられなくなった沢田が言う

リボーンとビアンキの額からは汗が流れている

「「殺る気はない　少し遊んでるだけだ（よ）」」

南と恭弥が見事にハモった

「笑顔で言わないでください！」

二人とも、笑顔で言っていた

「ま、今日はムリだけどな」

「僕も暇じゃないからね」

恭弥はそのまま部屋を出て行った

「ビアンキと沢田とチビちゃんも、早く戻れ」

「そうね…」

「オレも山本の修業で忙しいからな」

リボーンとビアンキは出て行った

沢田が、残っている

「早く行け」

「あっハイ！！　スミマセン！

…クロームの事、お願いします」

「オマエに言われたくは無いね」

そして沢田も出て行った

「…クローム……」

南はクロームの手を握り締め、ずっと隣に寄り添っていた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７０　大空との約束と、霧の目覚め！

「ちょっと…いいですか？」

沢田が南に会いに来た

その瞳には、覚悟の意志が見える

「…実行することにしたのか…」

「え！？　あ、ハイ…」

沢田は言う事を当てられ驚く

「それは正しい答えだぜ？

仲間を守りたい答えならば」

「…ありがとうございます

それで、お願いがあるんです…」

沢田が南の目を見る

「何だ」

「オレ達と一緒「断る」

……どうしても、ですか…？」

予想していた答えだろう

だが、沢田はすぐに引かなかった

「オレとまともに話がしたいなら、オレが気の許せる仲間を連れて来れば？

第一、オレはテメェが嫌いなんだ」

南は沢田の方を一切見ずに、ずっとクロームの方を見ていた

「…それは、知っています…

でも、風間さんの仲間を守るためにも一緒に戦ってくれませんか？」

南はここまで粘る沢田に驚くが、沢田の事は見ない

「オマエは…仲間を守りたいっつってたよな？」

「はい…」

「だったら、そのためにすることは修業なんじゃねぇのか？」

南は沢田を見て言った

「…修業は、してますが…」

「してる？　どこがだ？

本気でそう思ってるなら、今もリングに炎を灯し、修業しながら来るだろ？

それもしないでよく言うな」

「！！」

沢田は思い出す

南が常にリングに炎を灯していたことを

「あの、聞きたいんですけど…」

「あ？　何だよ」

「それって…どういう効果があるんですか？」

「…は？」

南はさすがに呆れてしまった

「あの…？」

「オマエって、ホントットに脳みそ無いな…」

南は力の抜けた声で言った

「う…」

「さすがに呆れた…

ま、教えてやるよ」

南はフーッと息をはいた

「常に炎を出しておけば、自分が出せる炎の合計が増えていくんだ」

「…どういう…意味ですか…？」

沢田はまだわかっていない

「…分かった、幼稚園生並の説明をしてやる
ゲームとかで体力…ＨＰってあるだろ？
あれを普段から炎を出すことで増やせるんだ
回復じゃなくて、基礎ＨＰが増える
これで分かったか？」

「あ、ハイ！　ありがとうございます」

沢田は南とマトモに話せたのが嬉しかったのか、少し笑顔だ

「じゃあもう行け」

「あ、ハイ…」

沢田はドアに向かって歩き出した

そして、ドアに手をかけた時だ

「もし…」

「？」

南が突然口を開いた

「もし、作戦の前日…４日後にオマエがオレの納得いくまで強くなってたら参加してやるよ」

「本当ですか！？」

沢田はやはり嬉しそうだ

「だが、参加したとしても別行動だがな」

「それでもいいです！　ありがとうございます！！」

沢田は深々と頭を下げた

「合格すれば…つまりテメェ次第だけどな」

「あ…」

そして沢田は部屋を出て行った

「…何言ってんだろうな…オレ…」

返事が来ないのをわかっていても、クロームに聞いた

その日の夕方だ

猫が南のもとに来た

「にょおん♪」

「あ？　何だ、この猫…」

南は特に警戒はしていない

猫は南に近づき、南の膝の上に乗ってのんびりし始めた

「…嵐の炎…隼人の匣か？」

「にゃおんっ♪」

返事をするかのように鳴いた

「んー、ならオレのも出してやるよ
開匣」
南はスードの匣を開けた
「グル…？　！！」
「にょおん♪」
猫は南の膝から降り、スードとじゃれ始めた
同じ猫科なだけあって、仲良い
コンコンッ

ドアを叩く音がする

「隼人だろ？　入ってこいよ」

ガララ…

「あのよ、瓜がここに…

瓜！！　やっぱりここにいたか！」

隼人はこの猫…瓜を探しに来たのだ

「…瓜？」

「あ、あぁ…　コイツの名前だ」

南は内心『変わった名前』と思っているが、言わない

「ほら、瓜行くぞ！」

「シャッ！！」

瓜の爪が隼人の顔面を引っ掻いた

「いってぇ――――！！

何しやがる！」

「シャ――！！」

隼人と瓜は対立し始めた

「…瓜、本当に隼人と性格似てるな…」

「どこがだよ！　スードと似てる南に言われたくねぇ！」

そう、南と同じでスードは面倒くさがりだったのだ

「でもスードはオレに懐いてるぜ？」

「そ…それはオマエの仲間を大切にするとことかが反映してんじゃねぇか？」

隼人は苦し紛れに言うが…

「いや、それは良い事だから…」

「…瓜もスードみたいだったらな…」

隼人はスードを見て言った

「オレは瓜もスードもいい仲間だと思ってるがな」

南がそう言うと、瓜とスードが寄ってきた

「にょおん♪」

「グル♪」

二匹は南の膝の上に乗り、南は二匹を撫でた

すると二匹は嬉しそうに鳴く

「う…瓜が懐いてる…」

隼人は信じられないものを見る目で見ていた

「瓜だっていい奴だぜ！

隼人がもっと優しくすればなぁ…」

ハァ、と南がため息をつく

「う…うる「ん…」

！！」

声を出したのは、南では無い

つまり、クローム

「クローム!?」

南が声をかけた時、クロームの目が徐々に開かれた

「…南…?」

「良かった…体はなんともないか?」

隼人もクロームに寄る

「うん…大丈夫…」

そしてクロームは自分が着ている服を見る

「…血が…ない…？」

「あ、血が付いたから替えたぜ？」

そう、クロームの服には血が付いていたから替えたのだ

同じような服だが

もちろん、シーツ等も替えた

「ごめん…」

「だから、気にするなっての！

…5日後、ミルフィオーレの日本支部に殴り込みをすることになった

クロームは行けそうか？」

南は言うのを悩んでいたが、言う事にした

クロームも、仲間だから

「うん…大丈夫…行けるよ…」

クロームは無理をして言ってはいない

南がすぐにクローム自身の幻覚で内臓を作ることを提案し、霧の炎を提供したからクロームはすぐ体調を戻したのだ

「…分かった…でも万が一があるから、オレと共に行動してくれ

ま、オレは参加を決めた訳じゃないけどな」

南はクロームが参加すると言っても、自分は別として決めるのだ

隼人は沢田にクロームが目を覚ましたことを伝えに行った

南はクロームにご飯を作りに行った

それからのクロームは完全に体調を回復させ、南と修業を始めたのだ

Straordinariamente10　ハルのハルハルインタビュー！（

ハル「きょ、今日はあのデンジャラス・オブ・デンジャラスな風間
南さんがゲストです…」

南「…くだらね…」

ハル「そっそんなこと言わずにインタビュー受けてください！！
　お願いします！」

南「…他の奴は？」

ハル「はひぃっ！
　ツナさんと獄寺さん、それとリボーンちゃんが来ています！
！」

ツナ「ど…どうも…」

獄寺「よ」

リボーン「ちゃおっス♪」

南「ハァ…こんなに大勢かよ…
　さっさと終わらせろ」

ハル「は、はい！！
　まずは、プロフィールを教えてください！」

南「9月7日生まれのＡＢ型」

ハル「は、はい…
　えっと…身長と出来れば体重は？」

南「知らねー」

ツナ「んなー！！
　そんなことってあるんですか！？」

南「ウルセェなぁ…

じゃあ適当に書いとけ」

ハル「じゃあ、おおよその身長を…

１６５ｃｍくらいですかね…

そして、赤い髪の黒い目です」

リボーン「余計な事を言ってるぞ」

ハル「はひ！

す、すいません！！」

南「ウルセェ」

ハル「はっはひ！！」

ツナ「（それがウルサいって言われるんだけど…）

えっと…質問が来てるんだよな、ハル？」

ハル「はい！

片っ端から読んできます！

風間さんはボンゴレ、ヴァリアー、ミルフィオーレのことをどう思っていますか？

…ってこのヴァリアーとミルフィオーレって…？」

南「沢田はウルサイ、山本は知らない、隼人は単純、恭弥はワガママ、クロームは優しい、

骸は不気味、笹川は騒がしい、アホ牛は消えてほしい、あの女は存在ごと消えてほしい、

ＸＡＮＸＵＳは強い、スクアーロは声がデカイ、ベルは目を見てみたい、マーモンはほっぺたムニムニ、

ルッスはキモい、変態はＸＡＮＸＵＳにかっ消されてほしい、ミルフィオーレはよく知らない」

ツナ「ぜ…全部一気に言った…」

獄寺「つーか、皆一言じゃねぇか！！」

南「えー、いいじゃんそんなの」

ハル「はひぃ…

よくわからない単語続出でしたが、ありがとうございます

次は好きな食べ物と落ち着く場所です」

南「好きな食べ物…どれも普通

場所は、ヴァリアーアジトのソファー、応接室のオレ用ソファー、家のソファー…

要するに、ふっかふかで昼寝ができる場所

ウザイヤツがいないことも必須条件」

ハル「あ、ありがとうございます！

次は得意料理はなんですか？」

南「どれでも作れる」

ツナ「え？風間さんって料理できるんですか？」

南「当たり前

じゃなかったらオレはアジトで何食ってんだよ」

獄寺「１０代目、南の料理ってうまいんスよ！！」

リボーン「ま、風間の仲間にしか作ってないがな」

ツナ「へー…

（食べてみたいかも…）」

南「テメェには作らねェよ」

ツナ「え！？心読まれた！？」

南「オマエは単純だし、顔に出てるからな」

リボーン「ホントのことだぞ」

ツナ「え――！！うそぉ――――！！」

南「…ウルセェ…」

ツナ「ハッ！！スミマセン！！！！」

ハル「えっと…

なんだか大変な空気になってきたので終わります！！

次は引き続き咲ちゃんのインタビューです！」

南／獄寺「チッ…」

ハル「と、いうわけで咲ちゃんですぅ！！」

咲「こんにちは♪」

ハル「それでは早速プロフィールを教えてください！」

咲「うん♪

１２月１５日生まれでＯ型！

身長は１４８．５ｃｍだよ♪

体重は秘密ーっ」

ハル「ありがとうございます！

咲ちゃんにも質問が来ています！

まずは、風間さんの一つ目の質問と同じです」

咲「はーい♪

ツナは優しくて、たまにかっこいいかな

山本君は…なんだか守ってくれる感じがして、獄寺君は怖い…

雲雀さんはカッコイイ！！

クロームさんは…この前に武器向けたのを謝りたいかな

骸さんは…会って、話をしてみたい

京子ちゃんのお兄ちゃんはいつも元気ハツラツだよね！

ランボ君はかわいいっ♪

風間さんは……謎…

ヴァリアーの人達とミルフィオーレの人達は関わりないからなぁ…

あ、でも……」

ハル「どうかしましたか？

顔が真っ赤ですよ？」

咲「…ベルには…会いたい…」

ハル「ベルっていうのは何なのか分かりませんが…

それは後で聞きます！

次に、使っている武器について詳しく教えてください…って武器ですか！？」

咲「あ、これは手裏剣と大手裏剣のことね♪

私は大手裏剣を1、通常サイズの手裏剣を100持ってるの

両方とも大きさが違うだけで、特に変わったとこはないでーすっ

今は炎を灯す練習をしてるんだけど…

私には風の波動が流れているか、分からないの…

どのリングも全然反応しなくって…」

ハル「はひ！！落ち込まないでください！！

どういうことかは分かりませんが、落ち込むなんてダメですよ！！」

咲「ハルちゃん…

うんっ！！ありがとう！」

ハル「元気になってくれてよかったです！！

次は…最後の質問ですね！

咲ちゃんはどうしてそんなにウザくなったのか…

誰ですか、こんなの混ぜたのは！！咲ちゃんは優しいいい人です！！」

南「お～、やっといい質問来たな」

ハル「か…風間さん！！？

さっき帰っていませんでしたか！？」

南「文句あんのか？」

ハル「ひぃぃ！！無いです！！

すいませんでした！！！」

リボーン「獄寺が来たからだな」

南「…正解

もうすぐ来るかな？」

獄寺「１０代目、早く終わらせましょう！！」

南「隼人ー、遅い！！」

獄寺「悪ぃ、アホ牛が１０代目から離れなくて…」

ツナ「咲ちゃん、どう？」

咲「うん、ハルちゃんとお喋りできるし楽しいよっ♪」

ハル「本当ですか！？ありがとうございます！！」

咲「うん♪こちらこそ、ありがとぉ」

南／獄寺「（さっさと終わらねーかな）」

ツナ「…なんか獄寺君と風間さんから…

ハル！！もう終わらせろ！！」

ハル「は…はい…

以上、咲ちゃんのインタビューでした！！」

咲「まったねー♪」

南／獄寺「（失せろ）」

Straordinariamente11　海の日常！

ミルフィオーレ日本支部…

ここではボスの白蘭と、日本支部の長の入江正一が通信していた

「白蘭サン、過去の風間さんが来て、逃げられたのは本当のようです…」

『正チャン、ずいぶん報告が遅くないかい？』

「…すみません…」

入江はカメラから視線を下げた

『まぁいいよ
それでも風間ちゃんは来てくれたからね♪』

白蘭は笑う

「あの…そこまで風間さんを7弔花にしたい理由は？
確かにマーレリングは持ってるらしいですが…」

『風がボンゴレにだけいるなんてズルいと思わないかい？
それに彼女はボンゴレに所属しているわけじゃないからね♪』

「その『風』というのは何が特別なんですか？」

『あれ？　正チャン知らない？
風はまず7？（トゥリニセッテ）の全てにおいて幻の存在なんだ
だから7？とは別として数えるんだよ
さらに、その幻を全て持っている風間ちゃん自体も変わった存在

だからね♪』

白蘭は黙々と話した

全ては語っていないが

「…風間さん自体が変わった存在？」

『うん、そうだよ

知らないかなー？　帝王♪』

この言葉を聞き、入江はハッとする

「…あのミナミ・カザマと同一人物だと言うんですか？」

『おっ大正解～

でも気付くの遅いよー

名前が一緒なんだから知ってると思ってたけどね』

白蘭はマシュマロを食べ始めた

「すみません…

もうあの記事が出てから噂は一切無くなりましたから…

…だからですね…」

入江は拳を握る

白蘭はそれに気付き、マシュマロを食べるのを止めた

『どうかしたのかい？』

「たまに、ボンゴレの者がオリジナル匣…それも性能がいい物を作っていると聞いたことがありまして…

でもあのミナミ・カザマなら可能ですね…」

入江はただ、研究者として悔しいのだ

自分が出来なかった事を成し遂げているのだから

『だからこそ風間ちゃんが欲しいよね

ま、この時代の風間ちゃんは手に入れたんだけどね♪』

白蘭はマシュマロを食べるのを再開した

「白蘭サン…
過去の風間さんも手に入れるんですか？」

『もちろんだよ
この時代の風間ちゃんは操っているはずなのに、何か裏がありそうだったしね…
過去の風間ちゃんでも試してみなくっちゃ』

白蘭の目は鋭く、入江は視線を外した

「…わかりました
風間さんは日本にいるようなので、発見次第捕獲します
何か動きがあったら連絡しますよ」

『ふーん、それはありがたいね

じゃあ頼んだよ』

「任せてください
それでは」

ブチッと通信が切れた

「風間さんか…
…確かに変わった人だな…」

入江はそれだけ言い残し、研究室に戻って行った

ミルフィオーレイタリア本部

「白蘭様」

「あれ？　桔梗来てたの？」

「つい先ほど」

白蘭はソファーに座り、桔梗も座るように促す

桔梗は断るが、しぶしぶ座ることにした

「風間南様のことですか？」

「うん、そうだよ

どうやら過去の風間ちゃんと入れ替わって、逃げられちゃったみたいでね…」

白蘭の目は笑っていた

まだ、策があるかのように

「…一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

桔梗が言った

「いいよー　何？」

「…どうしてそこまでして風間様を？」

桔梗は入江と同じ質問をする

「彼女は僕に必要なんだ…

ユニちゃんも必要だけど、風間ちゃんはもっとね…」

白蘭はマシュマロで『風』という字を作った

その時、ドアが開いて数名部屋に入ってきた

「ニュニュウ～

びゃくらん、風間南は～？」

「バーロー、今日本だっての！！」

「風間様…危険だよ！」

ブルーベル、ザクロ、デイジーだ

そして今は何も話してないが、トリカブトもいる

「皆ごめんねー

今風間ちゃん日本で、さらに逃げられちゃったみたいでさー」

「決別の時」

「ぼばっ！

トリカブトが…トリカブトが語った！！」

「うるせーなぁ、バーロー！！」

「うるさいのはザクロだもん！ベーっだ！」

「オメェは黙ってろ！！　電波ちゃん」

「誰が電波だぁ――――！！！」

騒がしくなってきた時、一人の言葉で一瞬にして静まった

「風間ちゃんは、何としても手に入れるよ♪

だから君達も協力してくれるかい？」

そう、白蘭だ

今まで騒がしかった部屋は一瞬で張りつめたような空気になった

「当然ですよ、白蘭様」

「びゃくらんの頼みだもん♪」

「様を付けろ！　バーロー

オレも同じですよ」

「もちろんです…」

「……」

トリカブトは何も語らないが、白蘭に忠誠を誓っているのは分かる

「うん、じゃあその時が来たらよろしくねー♪」

「了解しました」

「りょーかーい」

「了解です」

「僕チン…頑張る」

そして真7（リアル）弔花はいつも通りの毎日を送る

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７１　霧との修業！

作戦実行４日前

前日の夕方、クロームが目を覚ました

それから南のアジトに行き、クロームは南のアジトにあるクロームの部屋へ行った

もちろん広い

南と部屋のインテリアは似ているが、南の部屋は普通に見たら男の部屋だ

家具が必要最低限しかなく、モノクロ

クロームもモノクロだが、やはりどこか女性の部屋らしい

そして、今日

南とクロームは共に修業を始めた

まず南がこの時代での戦い方を伝え、少し練習

南は仲間を大切にするが甘くはなかった

クロームが手を抜いてほしくないのを分かっていたから

クロームが多少苦しそうでも炎を出させ続ける

南は後ろめたさがあるがクロームは感謝していた

そして、修業一日目はこれで終了

一日目にしては有り得ないほど伸びた

南の教え方に無駄がなく、上手いのと、クロームの『強くなりたい』
という意志の強さ故だろう

そして、二日目

作戦実行3日前

南は本格的な修業をクロームとし、午前の修業が終わる時にクロームに頼み事をした

『幻術を教えてほしい』

そう言ったのだ

理由はいくつかある

幻術はとても便利なこと

幻覚を見破るには、ある程度幻術が出来た方が良いこと

そして何より、仲間のため

今のクロームが分かりやすい例だ

クロームの内臓

南は自分が幻覚を作れたら、少しはクロームの助けになれると思っ

ている

だから、クロームに頼んだのだ

「うん…もちろんいいよ…」

「ホントか！？　サンキュー！！

じゃあ早速、今日の午後から教えてくれるか？」

それは、午後のクロームの修業時間が減る、ということ

「うん、じゃあ午後から…」

だがクロームも、南が本気なのを分かっている

二人は昼食を取り、修業を再開した

南が幻術の修業をしている時は、クロームはムクロウと修業したり、
炎の最高出力を増やす修業をしたり

一瞬たりとも修業以外のことはしていない

これは、修業を開始してからずっとだが

それから6時半

「南、もう幻術できてるね…」

「…へ？」

なんと、南はもう幻術を9割マスターしていた

普通では有り得ないが、南が普段から霧の炎で幻術らしいモノをし

ていたから短時間で済んだんだろう

「…これで…いいのか…？」

「うん…南、おめでと」

「サンキュー」

南は短時間で修得できると思って無かったから、何となくしっくり来ない感じがするのだ

「…ま、クロームの合格が出たんだ

待たせたな、クローム！　飯食って、修業再開するぜ！」

南はそのままトレーニングルームを出て、調理に向かった

クロームはこの時間、自主練習をする

昨日は炎を出せるだけ出してみた

だが疲労が激しく、ある程度しか出せなかった

今日は軽い実戦練習をするため幻覚を作り、戦う

この時代のクロームは匣を残していかなかったため、ムクロウとだけの修業になる

だから幻覚と戦うのだ

それを数十分すれば、南が来た

夕食だ

今日はピザだった

南はイタリアンが好きなので、よくピザとかパスタを作る

もちろん和食や洋食、中華なども作るが

夕食時も、炎は出し続ける

２４時間、炎を出す

どうしてもキツくなったら、炎を小さくして

それは南にとっては日常化していた

そして、夜の修業

南は高さ５０ｍ程のトレーニングルームに行き、レウスとの修業

そしてスードは見て、勉強する

たまに南と修業することもある

クロームもスードと同じく見て、勉強する

それは途中までで、クロームは他のトレーニングで有幻覚の修業をする

この時代では匣兵器があるから有幻覚をより修業しなくては、とクロームは自ら決断したのだ

そして、２３時

修業を終え、寝る支度に入る

明日も朝６時から修業

その前までは自主的に修業する

ちなみにクロームは今日、朝5時から修業していた

そして、翌日

作戦実行2日前

明日は沢田のテストだ

「クローム」

「なに…？」

修業中のキリが良い時、南がクロームを呼んだ

「本格的な修業は、今日までだ」

「？　なんで？」

「明日は、体を休めなきゃいけないからなー
ま、炎を出すのは変わらないけど常に2割の炎にしといてくれ」

まだ作戦に参加するかは決めてないが、参加する事になって全力が出せなかったらダメだ

「うん　わかった…」

今日が作戦前の最後の修業と言える

南はあることを思い出した

「クローム、これを渡しておくよ」

南はポーチから何かを取り出し、クロームに渡した

「…匣？」

「あぁ、この時代のオレが作ったらしい

幻覚を9割は見抜く、霧メガネ」

そう、骸から返されたあの匣だ

「でも…南のなんじゃ…」

「オレが持ってるより、術士のクロームが持ってる方が断然良いって！」

恐らく、南よりクロームの方が術士と戦う確率は高いだろう

「…開けてみても、いい？」

「あぁ、もちろん」

クロームはリングの炎をより大きくした

「開匣…」

ドシュッ

炎が注入された

「…これが…霧メガネ…」

クロームの顔には黒縁メガネ…霧メガネがかかっている

「一見普通の黒縁メガネだけどな
サイズとかどうだ？」

「…大丈夫…ちょうどいい」

「そっか！　んじゃあその修業も始めるぜ？」

「うん…！」

修業が再開された

明日はいよいよ、参加・不参加を決めるテストがある

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７１　霧との修業！（後書き）

前話のＳｔｒａｏｒｄｉｎａｒｉａｍｅｎｔｅｌｌは、番外編１０話達成記念で書きました。

いつかミルフィオーレの話を書こうと思っていて…。

そのため話が進まなくてスミマセン。

次はツナのテストですね！

むぅ…どういうテストにしようか…。

『めんどいのはお断りだぜ？』

お！南ぃ～久しぶりだね！

『だって修業してヒマじゃなかったし』

あー悪いねー、それは全て作者のせいだ。

『知ってるっての
ま、強くなりたいから気にしてないけど』

さっすが～♪

ねぇ、ピザってどんな名前の？

『数種類作ったから覚えてない』

…そうですか…。
ならいいよ…。
んじゃ、ツナのテスト頑張れ～。

『見事な棒読みだな…？
ま、クロームが行くっつってるから多分参加するけど』

…じゃあテストの意味ないよね？

『そうかもな…
ま、アイツのテストだからいいんだよ
参加するかを決めるだけのテストじゃないからな』

おぉ～カッコイイねぇ。
ツナのこと嫌いなの？

『あぁ
あの女と同じ位な』

…なんでだよ…？

『本気で仲間を守りたいのか…強くなりたいのか曖昧だからな
それをテストするんだよ』

そっか…。
まぁ頑張ってくれたまえ！
んじゃ！

『あぁ

またな！』

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７２　大空のテスト！

作戦実行前日

南はトレーニングルームに来ていた

南のアジトではない

ボンゴレアジトだ

だが、ボンゴレアジトのトレーニングルームには南以外の者もいる

沢田、山本、隼人、クローム、リボーン、笹川、ラル・ミルチ、恭弥、草壁、咲だ

咲の修業は、沢田と共にしている

最も、途中でバテて気絶してしまうのだが

皆、沢田と南の戦いを見に来ている

「そろそろ準備しろよ」

南が沢田に死ぬ気丸を飲むように言う

ゴクン

ボゥッ

「さぁ、始めてくれ」

沢田の準備が出来た

「あぁ、まずルールを言う

合否は勝敗によって左右はしない　そんなことしたらオマエは絶対に不合格だからな

タイムリミットは、オマエの死ぬ気が切れるまで

リングの炎は使用可だ　ハンデはオレが匣を使わないこと

質問は？」

「ない」

南は風のボンゴレリングだけを指に通した

「ちなみに、オレは刀を使うからな」

刀を両手に持つ

「先攻は、オマエに譲ってやる」

南が言った途端、沢田が南に急接近した

ブンッ

沢田が南にパンチをしようとする

ボウッ

南は動かず、リングの炎を身に纏うほど大きくした

「!?」

沢田は風の炎に触れた途端、動きが鈍くなった

「ダメだぜ？　相手の炎の特徴は把握しとかないとな」

そう言って無防備な腹を蹴り飛ばした

ドガンッ

沢田は反対側の壁まで吹っ飛んだ

「ここでヒントをやろう

風の炎の特徴は、加速、減速、回旋

減速がある以上、接近戦はできない」

南は刀を一刀鞘に収めた

「合否を簡単に出すよ

オレをここから少しでも動かさせたら合格」

聞くだけでは楽に聞こえるが、実際はかなり難しい

接近戦が不可能となると、沢田にはある一つの方法しか無かった

バッ

沢田は前後に腕を伸ばす

コオオォォォ…

後方に柔の炎が放出される

「…こりゃ、マトモに当たったらヤバいな…？」

南はそう言いつつも余裕そうだ

「行くぞ…

？（イクス）　ＢＵＲＮＥＲ（バーナー）！！」

南に向かって剛の炎が真っ直ぐ伸びてくる

ボウウッッ

南は風の炎を纏うように放出する

風の特徴、回旋だ

ドガァンッ

風の炎の壁に、沢田の炎がぶつかった

「…なかなか、スゴいな…」

南は目の前でズレていく炎を見ながら言った

そして、炎の激突が終わった

モクモクモク……

爆煙がヒドく、南の姿が見えない

「！　そんな…」

沢田が言った

南は、立っていたのだ

「オレには…もう他の手段が…」

沢田は絶望の表情を見せる

「…合格、だな……」

南は言った

「!?　だが、動いていない」

沢田は南の言葉に驚きつつ、言った

「いや…動いたぜ…」

南の足の前に、何かの跡がある

足の引きずったような跡だ

南の踏ん張る力を、炎が勝ったのだ

そのため、後方へ１０ｃｍほど動いた

「…だが、これでは…」

沢田はまだ納得のいかない様子だ

「ツナ、風間がこれで手を貸してくれる

何も言わないでおけ」

リボーンが言った

シュウゥゥ…

沢田の額の炎が消えた

「…ありがとうございます、風間さん…」

「あぁ…　それにオマエ、４日前に聞いてから普段も炎を灯してるようにしただろ？

その事でオレの中でオマエの株は上がってんだ

まだまだ弱いが、その分フォローしてやるよ」

南なりの言い方だ

『沢田を、仲間として認める』

「えっと…？

あ、ありがとうございます……」

沢田は南の言葉がイマイチ分からないようだ

「だから、オマエの…沢田の仲間を守りたいって覚悟は本物だとわかったから、認めるって言ってんだ

仲間として、認める…」

南は沢田に少し微笑みながら言った

「えっ…？

そんな…簡単な…」

「オマエを認めてない理由がこれだったんだ…

ま、別行動するのと、嫌いなのは変わらないがな」

南はそのまま沢田に背を向ける

「あ、あの！」

沢田が言った

「…何だよ」

「仲間として認めるって…？」

南は振り返り、沢田に向き合う

「オレにとって害の無い者、さらにランクが上がると大切な仲間だと認めるってことだ

オマエはまだ前者だけどな」

「あ…ありがとうございます…」

沢田はまだ実感が湧かないのか、ポカンとしている

「んじゃ、明日な」

南はクロームと部屋から出て、アジトに行った

「…オレが…風間さんに…？」

「良かったな、ツナ

これで明日、アイツも戦ってくれる」

「…うん…」

沢田は笑っていた

南と初めてマトモに話が出来、さらに一応でも認めてもらえたから

「ニヤついてんじゃねぇ

気色悪いぞ」

「なっ！！」

「まーでも良かったじゃねーか
明日は風間も来てくれるんだぜ？」

山本が二人の会話に入ってきた

「南が作戦に参加すれば、戦力は上がります！
頑張りましょう、１０代目！！」

「…うん…そうだね」

「ツナ！！」

咲がリボーンの抜けた三人の輪に入ってきた

「咲ちゃん！」

「合格おめでとっ♪

私も昨日、一応合格できたんだよ！」

「えっ…

じゃあ、咲ちゃんも明日…」

沢田は少し表情を暗くした

「…ホントは、不合格だったの…

でもリボーン君が『オマエがいることで、ツナが躊躇する回数が減るはずだ。無理をしない程度で戦え』って…

だから、頑張るね」

つまり、咲が行くのは沢田のため

咲はまだまだ弱いため、他の者にとって多少のダメージは咲にとって致命傷となってしまうほどだ

そのため戦いを完全に…なおかつ迅速に終わらせるために、咲は行くのだ

「…でも……」

沢田だけではなく、山本、隼人も咲が行くのには反対の表情をしている

「ねぇ…

私、やっぱり足手まとい…？」

咲がうつむいて言った

「！　そんなこと…」

「じゃあ、私は行く

……風間さんばかり皆に期待されて、信用されて…ズルい」

皆には南に対する言葉は聞こえてない

「…じゃあ…一緒に頑張ろう…」

沢田もしぶしぶ認めた

沢田達が咲と話している時、リボーンや恭弥達も作戦に関して話していた

「で、風間が参加することによってどんくらいの成功率になるかわかるか？」

リボーンが草壁に聞いた

「はい

明日の作戦の成功率をハイパーコンピューターで試算しました

敵施設の規模から人数を割り出し、ミルフィオーレ構成員の平均戦闘力を入力し、他の要素をかけ合わせた結果…

成功率わずか０．００２４％でしたのが、０．５１８に上がりました」

「…そんなに高くあがったのか…」

笹川が言った

「アイツ一人でそんなに上がった理由は何だ」

ラル・ミルチが聞く

「南さんは、レウスという名のドラゴンの匣兵器を持っています

それも、全長２０ｍに及ぶほどのです

その大きさ故あまり戦闘では使いませんが、使ったら圧倒的な強さを誇ります」

つまり、南がレウスを使用した場合のシミュレーション結果だ

「それでも僅か1%にも行かない…

奇跡でも起きなければ成功しない数字か…

沢田達には黙っておけ　士気にかかわるぞ」

「今更ショックを与えても、他の選択肢はないのだしな…」

「賛成です……」

ラル・ミルチに続き、笹川、草壁が言う

「ってより、無意味な数字だな」

「「！」」

「完成されたプロなら戦闘力や可能性を数値化することに意味があるだろう

だが伸びざかりのあいつらを計算に当てはめるなんてバカげてると思うぞ

数値化できねーところに、あいつらの強さはあるからな」

土壇場での戦闘力アップがあるかもしれない…いや、確実にあると信じて言った言葉だ

だが、まだ南は決めてなどいなかった

明日、参加はするがミルフィオーレには仲間であるジッリョネロの者がいる

敵対したくはないが、ミルフィオーレに行ったら確実に敵対するこ

とになる

だが、ユニの居場所が分かるかもしれない

風はまだ迷走を続ける――――――

「南…どうかしたの？」

クロームが南の様子がいつもと違う事に気が付き、聞いてきた

「…明日、ミルフィオーレに行くだろ…？

ミルフィオーレにはオレの仲間がいるんだ…

しかも数人じゃなく、ブラックスペル全員」

「！　…私の知ってる人？」

「ブラックスペルのボスの名は…

ユニ」

「！！」

クロームもユニの事は知っているのだ

「だけど、ユニは絶対にこんな事しない…！

ジッリョネロの皆も、ユニを救うためにミルフィオーレにいるハズだ…！！」

南は皆を…仲間（ジッリョネロ）を信じているのだ

その気持ちを誰かに肯定してほしくて……でも誰にも肯定されなくて…

参加するかをテストとして決めたのも、これが理由だ

「私も、そう思うよ…」

「！　…クローム…」

南は強く握っていた拳を緩めた

「南が信じた仲間なら…絶対に大丈夫…」

「…サンキュ……」

初めて、肯定された

これで南の迷いは消えた

仲間は傷付けずに必ず守る、と……

風向きの決まった風は、強く吹き荒れる

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７２　大空のテスト！（後書き）

ツナを認めると言っても、山本とかと同じランクにいます。
元は咲と同じだったんで、少し上がったんです。
それでも山本達より少し上かな？
まだまだクローム達には及びませんがね…。
ツナも南がＶＡＲＩＡにいた事で少し近寄り難かったんで、ツナからしても南に対しての仲間意識が上がりました。

いよいよメローネ基地だー。
でも全然南をどうするか決めてないやー。
あははははは…。
どうなるんだろう…？
とりあえず、ツナ達とは完全に別行動になる事だけ言っておきます。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７３　作戦開始！

作戦実行当日

日が昇り始めたころ、ボンゴレアジトから２ｋｍ離れた倉庫予定地にミルフィオーレが攻めてきた

そこには、既に恭弥が向かっている

南のアジトにその情報が届いたのはそれから一時間後のことだ

なぜそんなに遅れたかというと、南からでなくては通信が出来なくなっているからだ

「クローム、メローネ基地と倉庫予定地…

どっちに行く？」

「…私はどっちでも…
南は？」

正直、南はメローネ基地でジッリョネロの皆を守りたかった
だが、クロームの意見を聞かないで勝手に決められないと思ったのだ

「…メローネ基地でも、いいか？」

「もちろん…南の守りたい人がいるんだから…
行こう…？」

「クローム…ありがとな」

それから出る準備をし、ボンゴレアジトに向かった

ジャンニーニから『オートマモンチェーンリングカバー』を装着すると言われたことと、もう一つ理由があった

雷の守護者を連れて行くためだ

沢田はまだ幼いからとかで連れて行かなかったが、南は連れて行くことにした

最初はリングだけ持って行こうとしていたのだが、ボンゴレの守護者を揃える必要があると思ったからだ

南はボンゴレに属しているつもりはないから、仲間のために

寝ているランボを誰もいない時を見計らって連れて行った

起きたら気絶させるつもりだが

そして、メローネ基地

南たちが到着したころには沢田たちが潜入していることがバレているらしいので、ダクトから慎重に潜入せず、ダクトの中を破壊して進みやすくして潜入した

ドゴォン……

「！　今の音は…」

まだ来たばかりの南にも聞こえる程大きな音だった

「…誰かが、戦ってる…？」

「恐らくそうだな…

…ジッリョネロとだったら止めなくちゃな…

急ぐぜ、クローム」

「うん」

南達はより速く潜入していく

今の音は、警備システムが破壊された音だった

その近くで、南達より早く潜入した者達がいた

沢田、隼人、山本、笹川、ラル・ミルチ、咲だ

「よし！　警備システムの破壊は成功だな」

「そんじゃあ主要施設の破壊に移っか！！」

「待てよ」

隼人がストップをかけた

「アルコバレーノの話が済んでねーぞ」

「！！」

隼人の言葉に沢田が反応する

「ん？」

「何でおまえが知ってんだよ」

「……約束でさ
修業が終わった時、小僧が教えてくれたんだ」

「なっ」

「リボーンが！！」

「こいつはたまげたな……オレだって師匠には聞けずじまいだったのに」

「それで……どんな話だったの…？」

咲は原作でアルコバレーノの秘密を読む前に転生したため、知らないのだ

「ただし今はまだ話せねーんだ」

「なんでだよ!!」

「この作戦が終わるまでは話すなって…これも小僧との約束でな」

「なに!!

（なぜ右腕のオレじゃなく山本なんだ…）」

「（なんで…リボーンが山本に…？）」

「ぐ…リボーンさんがそうおっしゃるのならしょうがねえか…」

隼人はまだ聞きたそうだが、諦めた

だが、ここであきらめない人がいた

「…今話してよ…」

「！　山下…」

そう、咲だ

咲は原作を……すべてを知ってるが故に、誰よりも知識が欲しかった

自分がこの世界において知らないことをなくしたかった

既に南というイレギュラーがいるからこそ、さらに貪欲になっていたのだ

「……悪いが、オレは小僧と約束しちま「そんなの関係ないよ」

……どうしてそんなに知りたがるのかはわかんねーけど、話すことはできない」

山本は断る

だが、咲はまだ諦めなかった

「私が知らないことなんて、あっちゃいけないんだ…

だけど、アルコバレーノの呪いのことは知らないの

だから、話して?」

もはや咲は、理由になっていないことを言っている

「…咲ちゃん…？
どうかしたの？」

沢田が聞いてくる

「『どうかした』…？
……そうね…私が知らないことを知っている人が目の前にいる…
この状況こそが『どうかしてる』わ…」

アハハ、と笑いながら言う咲

いつもと完全に違う咲の様子に、沢田達は戸惑いを隠せずにいた

「…１０代目…」

「うん…咲ちゃん、いつもと違う…」

「違う？　違わないわよ…

私はただ、知らないことを知りたいだけ

それの何が違うの？」

その時、足音が近づいてきた

「…ほら、敵が来ちゃったよ…？

早く話して」

「…山下…オレは話さない…」

「……話すまで、ここから動くつもりは無いわよ…？」

足音は、どんどん近づいてくる

「…いくら山下が言おうと、オレは話さない」

山本は約束を破るわけにはいかなかった

「……ほんと…生意気よね…

私が知らないことを知ってて、挙句の果てに話さないなん「いいかげんにしろ」

！！？」

咲はいないはずの者の声が聞こえたことに驚く

咲だけではなく、皆が驚いている

そして、咲の後ろに立っている者を見た

「！　……あなたも私の知らない存在よ…？

風間南…」

そう、南だ

南の斜め後ろには、クロームとクロームの背中のリュックに気絶して入っているランボがいる

…ランボが気絶しているのは、一度目を覚まし、ウザさのあまり南が殴ったのだ

「…オマエ、作戦中に何をしている…？

さっさと終わらせるぜ…」

「あら？　私はただ知りたくて聞いてただけ

それの何がいけないの……！！」

咲の様子を見て、南は完全に咲がおかしくなったのに気づく

クロームも、少し怯えている

「…作戦中に、私情を挟むな…

そういうヤツがいると、作戦は失敗する」

「…それは、獄寺君も同じだったわよ?

あんなに仲間を大切にする、とか言ってたのにいいのかしら?」

「アルコバレーノのことだろ?

なら知りたいのも分かる…が、隼人は山本が話さないのを聞き、諦めた

それに比べてオマエはどうだ?

ただ、知らないことがあるだけでしつこく言い、諦めない

そういうのはただ邪魔なだけだ」

南の言葉に咲は顔をしかめるが、言い返してきた

「あなたに私の何が分かるの…？

もう忘れたあなたに…何が分かるのよッ！！！！」

「テメェのことなんて、知りたくもねぇ

……チビちゃんが許したが、リタイアさせる必要があるな…」

「…リタイア……？」

「あぁ……そうだよ！！！」

南は一瞬で咲の後ろに行き、首裏に手刀をいれた

「がっ……」

「おっと」

気絶し、倒れる寸前になった咲を笹川が抱えた

「…今のは仕方無い判断だな…

このままでは山下が永遠に諦めずに動けなかったからな…」

笹川が南に言う

「…そんなことは関係ない

こいつがいつまでもグチグチ言ってたら邪魔だったからだ

……オレはもう行くぜ…」

南はクロームと、その場から離れていった

ちなみにランボはリュックを完全に閉じているから気づかれなかった

「…咲ちゃん、なんか変なこと言ってたよね…？

『自分が知らないことなんて、あっちゃいけない』とか、風間さんに『あなたも私の知らない存在』とか…」

「確かにそうでしたね…

ですが１０代目、タイムロスをしてしまっているので今は諦めましょう…

メインルートのゲートの封鎖が始まるかもしれません」

すると、ウィィ…、という音が聞こえてくる

「始まったな…シミュレーションしていた行動パターンの一つだ…

急ぐぞ」

「おまえ達だけで行け」

ラル・ミルチが言った

「ラル！！　まさか…体調が！？」

「俺は後で行く

ジンジャーとの戦いで少しハシャギすぎた…」

「！！」

沢田の脳裏に、先ほどのラル・ミルチの言葉が蘇る

『青いおしゃぶりはオレの命と引き換えに炎を放つ』

「体…つらいんだね」

「いいから行け　足手まといになるのはゴメンだ…」

「「「「ダメだ！！！」」」」

その場にいる意識ある者全員が言った

「ふざけてんじゃねーぞっ

これくらいのことは想定内なんだよ」

「オレ達は作戦を成功させて、誰一人欠けることなく帰るんだ！！」

「……」

ラル・ミルチはもう反論しなくなった

「それじゃあ、どうするか…

メインルートの封鎖が始まったら、皆が次のポイントまで移動するまでの囮をラル・ミルチがやる予定だった…」

「……」

「そーいや…」

つまり、早速予定通りに行かなくなっていた

既に咲が暴走した時点で作戦通りでは無かったのだが

「あ…あの…

オレがその役をやります」

「１０代目！！」

「ツナ！！」

そう、沢田だ

「た…たしか囮役は機動力がいるんですよね……

だったらおれが一番だと思うし…」

「たしかにな……」

「しかし危険すぎます！！」

「大丈夫　後でおち会おう　獄寺君、ラルを頼むよ」

さすがに隼人もボスに言われ、頼まれたら反論できない

「くっ　１０代目！！

何かあったら無線で呼んでください！！

『右腕』がすぐはせ参じます！！」

隼人は沢田の肩を掴み、大きく揺らした

沢田が痛がったいるが、隼人の耳には届いていない

「その端末の指示通りに進め　ルートはインプットしてある

できるだけ遠く…Ｂ１０Ｆ（地下階）の用水路で敵をくい止められればベストだ」

「わかりました」

笹川が沢田に言っている間も、隼人は『ボスを危険な目に…！』とか言っている

「じゃあいってくる！！」

沢田が端末に従い、行った

「頼んだぜ、ツナ！！」

「お気をつけて！！」

南達は、沢田達と別れてからある場所に向かっていた

ジッリョネロ…今は表向きがブラックスペルの者となってしまった、
γに会うためだ

少し前に会ったが、もう一度会っておこうと決めた

もちろん、場所など分からない

その辺にブラックスペルがいれば、南の事を知っているだろうが、あいにくと、今南がいるのはホワイトスペルの者しかいない場所だった

そこで南はある行動に出た

『脅迫』だ

適当にホワイトスペルの者を物影に連れ込み、脅迫するつもりだ

そして、南達の隠れている場所の近くを一人が通り過ぎた

ガッ！

南はそいつの後ろ襟を引っ張り、ムリヤリ引き寄せた

「ぐっ！？　だ、誰だ！！

……風間…南様！！？」

どうやら南のことを知っている者らしい

「…γはどこだ……」

南は殺気をぶつけながら言う

「電光のγか…？

何の用ですか？」

「オレが聞いてんだ、テメェが質問すんな

γの居場所…言わねえとテメェを消すぜ…？」

もはや南の顔は笑っていた

……いかにも悪そうな笑みだが

「ヒイィィィィィ！！！！

い、いいいい言います！！」

「いや、言うだけじゃなく案内しろ
じゃねぇと……」

「よよよ喜んで案内致します！！」

そしてそのホワイトスペルの奴は、南に怯えながらγのいる部屋の前に行った

部屋の前に着くと、南は案内した奴を気絶させた

コンコンッ

扉を叩く

「……誰だ…」

中から声が聞こえてくる

だが、知っている者の声…

会いに来た者の声だ

ウィィ…

扉が開く

「！！　オマエは…！」

「…久しぶり…γ……ジッリョネロの皆…」

南はミルフィオーレや、ブラックスペルと言わずにジッリョネロと言った

南が警戒していない証拠だ

そして、小さく微笑んだ

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７４　オレンジのファミリーとの再会！

「南…だよな…？」

「よかった…無事だったんだな」

「γ隊長が言ってたのは本当だったな！」

南に対するジッリョネロの人達の言葉が次々と出てくる

南はジッリョネロの皆から今も仲間と思われているのがたまらなく嬉しかった

前にミルフィオーレのアジトから脱出した時はジッリョネロの事を知らなかったとは言え、見捨ててしまったと同じ事だと思っていたから

「……あぁ、ボンゴレの奴らと来たんだな…」

γが南がここにいる理由を考え、言った

だが南は、それに笑って答えた

「オレがここに来たのは、ジッリョネロの…ユニのためだ…
ボンゴレと共にここを潰す事なんて関係ねーよ」

南が言うと、一斉に騒がしかった中が静かになった

そして、どっと笑い声が響く

「さっすがは南だ！！」

「１０年前でもそうだったな！」

「面倒なこと、仲間に害があること以外は放っておく」

「ったく、変わんねーなぁ！！」

「１０年でそんなに変わるかよ…

……γ、話があって来たんだ」

南の一言で、今度は緊張感が部屋中に広がる

「あぁ…姫のことか…？」

「もちろん、ユニのこともだ…
ま、とりあえずユニの情報をくんねぇか？」

ユニがこの日本支部にいるなら今すぐ助けに行くし、いないのなら情報を得に動くつもりなのだ

「姫は…ここにはいない
……白蘭と共にイタリアだ…」

「イタリアか……
詳しい場所は分かんねーか？」

「さぁな…だが、救出しようとしてるなら辞めておけ
今は南も狙われてるんだからな」

そう、逆に自分も捕まる可能性があるのだ

だが、南も諦めたりなどしない

「知らないなら、自力で探すさ

まずは、この日本支部で情報を得るつもりだ」

「……そうか…なら止めない…

ところで、後ろの子は誰だ?」

後ろの子…つまりクロームのことだ

「クローム…ボンゴレ霧の守護者の一人だ

んで、ユニの友達でもある」

「!!　姫の…友達…?」

γだけではなく、ジッリョネロの皆が驚いている

「オレが初めてユニ達に会った時、クロームも友達になったんだ」

「…はじめまして…」

クロームがオドオドと挨拶をした

「だが、姫からはクロームという子は聞いたことないな…

南と会った時にもう一人友達が出来た事は聞いたことあるが…」

「あぁー…クローム、言ってもいいか？」

南の言葉にクロームは頷く

「クロームは、凪という名もあるんだ
ユニは凪お姉ちゃんって呼んでたハズだけど……」

その言葉に、再びジッリョネロの皆は驚く

「その名は聞いたことがある
…無礼を許してくれ」

γは頭を軽く下げた

「えっ……あの……」

クロームはまたオドオドし始めた

「γ、クロームが困ってるっつの！

とりあえず頭上げろって」

南に言われ、γは頭を上げる

「…オレはγだ…

よろしく頼む」

「あっ…えっと……」

「ははっ……クローム、γ、悪いが時間があまり無い…

話を続けてもいいか？」

南の再び緊張感がある言葉に、和んでいた空気が変わる

二人は頷き、南の話を待つ

「γ…ボンゴレの奴は、ブラックだろうがホワイトだろうが、ミルフィオーレとして戦いに来る

……オレは助けることができないが…」

南はジッリョネロの皆を見て、もう一度口を開く

「テメェらなら死んだりしないと、信じてるぜ……」

小さな声でだったが、その言葉はジッリョネロの皆の心に響いた

「…それは、オレらからも言えることだけどな」

γが南に言う

ジッリョネロも南を信じてる

「…サンキュ……」

南とジッリョネロは、再び絆を体感する

「ま、南もジッリョネロだから信じるなんて当たり前だけどな」

「ちげーっての！」

太猿の言葉に、南は即答する

「……もう、行くのか…？」

野猿が聞いてくる

「…あぁ…オマエら、兄弟喧嘩はすんなよ？」

「当たり前だぜ、ショア！」

「南に心配されなくてもオレがさせねーよ」

「γ、オマエにも言ってんだぜ？」

そしてまた笑い声が聞こえてくる

「……んじゃ、またな…」

南は背を向け、扉の方を向く

「あぁ…」

「どうか、姫を救ってくれ…」

「白蘭には気をつけろよ…」

「あぁ…」

南は振り向かず、部屋を出て行った

南はγ達と別れた後、いなかった二人の内の一人を探しに行った

鬼熊使いのニゲラだ

…幻騎士の心は、もう完全にミルフィオーレのモノだから

それは、１０年後の南の手帳に書いてあり、知ったことだ

「…ニゲラ……無事でいてくれ……！！」

ジッリョネロ……ブラックスペルは、ホワイトスペルから嫌われている

なのでホワイトスペルから攻撃される可能性もあり、今はさらにボンゴレからも攻撃されるかもしれない

だからこそ、今走って探していた

ドゴッ……

近くの部屋から音が聞こえてきた

「…クローム、入るぜ…？」

「うん…！」

音が聞こえてきた部屋の扉は開いていた

バッ

「ニゲラ…！！」

中にいたのは、ニゲラと絨毯に乗った太った中年男…バイシャナだ

「オマエ…南……？」

「あぁ…久しぶりだな、ニゲラ……

だが今はそんなことを話している暇はない…これはどういう状況だ…？

表向きは同じミルフィオーレ同士で……」

南の嫌な予感が当たってしまった

「確かに表向きはそうです…

ですが、ブラックスペルなどと同じにしてもらっては困ります、南様…」

バイシャナは南に言った

「あ゛？　ウルセェよ、中年デブ男

テメェとは話してないし、話すつもりもない」

その時だ

新たに数人入ってくる足音がした

「み…南…？」

そう、隼人達だ

だが、沢田がいない

「…ニゲラ、行こうぜ…

ここはボンゴレの奴らに任せとけばいい」

南はニゲラにジッリョネロの元へ戻るように言う

「…悔しいが、そうだな……」

ニゲラは匣兵器を戻した

「…さて、オマエら！

オレはまだ用事があるから戦わない…オマエらでバイシャナ殺っといてくれ」

南は隼人達に向かって言った

そして、ニゲラ達と共に扉の方に歩く

「おう！　極限任せろ！」

「さっさと用事終わらせろよ」

「風間も早く戦いに参加してくれよ？」

すれ違う時、皆が思い思いの事を言ってきた

南はニゲラを安全な場所まで連れて行き、クロームと共にまた他の場所に行った

ユニの情報を集めるために

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７５　メローネ基地、稼働！

南とクロームがユニの情報を集めに移動している時だ

ゴゴゴゴゴ……

突然地震のような地響きが聞こえた

そして、揺れ始める

二人は足を止めた

「…地震？」

「確かに地震みたいな感じだが、揺れ方が違う…

クロームとりあえずこっちに…」

クロームの場所は掴まる物がない

「うん…」

クロームはゆっくり南の場所に近づく

ガタン

「「!!?」」

突然足元が上下に動き始めた

そのズレは、南とクロームを分断していく

南が上に上がっていく

「…クローム、後ろに下がってくれ！！」

「うん…！」

南は炎で加速し、ギリギリでクロームの隣に着地した

「っぶね……」

「怪我…してない…？」

「あぁ…大丈夫だ……っ！」

南はスライディングするようにしたので、右腕を摩擦で怪我していた

「あー、ちょっと擦ったか……

ま、こんくらいは放っておくか」

南は擦り傷位に構っている暇はないのだ

この傷をクロームがしていたら多少の時間など惜しまずに治療をするが

ゴゴゴゴゴゴ……

ピタッ

「揺れが…止まった……」

「南、治療しないと…」

「大丈夫だって！　今は何で揺れたのかを調べないと……

行くぜ？」

南とクロームは形の変わったアジト内を駆け回った

その頃、隼人達は二つのグループに分断されていた

隼人、了平、咲のグループ

山本、ラル・ミルチのグループだ

そして隼人達は……南の仲間であるγと、山本は幻騎士と遭遇していた

隼人達はγからメローネ基地の構造を聞き、今の揺れの原因が分かった

メローネ基地自体が、入江の匣なのだ

そして隼人は笹川の死ぬ気の炎で強化された縄で縛られた

ボンゴレ晴の守護者と6弔花の雷の戦いが始まる

まずは笹川が匣を開け、晴シューズを装着し、飛ぶ

ある程度上がったら、斜め上からγに急接近する

極限（マキシマム）イングラム

だが笹川のパンチはかわされ、殴ったのはコンテナだった

今度はγからの攻撃

ショットプラズマ

雷の炎を纏ったビリヤードの玉が飛んでくる

笹川はコンテナの後ろに行き、よける

しかし……

エレットリック・タワー

ブシャー…、と血が飛び散る

だが、笹川はまだ意識があった

γがトドメをさそうと構えた時、笹川の匣…晴カンガルーが飛びかかった

それに戸惑うことなく、今度は晴カンガルーに標準を合わせ、倒す

隼人は唯一開けられる匣の瓜を出すが、隼人の命令を無視してγに

飛びかかった

ガキィッ

笹川が瓜を殴り飛ばし、隼人の方へ行く

笹川はダメージを受けつつも、晴の炎で高速治癒していく

だが、それも長くは続かない

再び、エレットリック・タワーが笹川に襲いかかった

ズバババッ

ダメ押しでγはもう一度ビリヤードを構える

カッ

玉が弾かれ……

バチイッ

何かに遮られた

そこに立っていたのは、ボンゴレ嵐の守護者、獄寺隼人

腰の匣はいくつか開かれ、指のリングの一つには嵐の炎が灯っている

「てめえだけは、許さねえ!!」

開かれた隼人の目には、ディスプレイのようなモノが見える

γは隼人の匣に見、イノチェンティのオリジナルだと言う

そして、ショットプラズマを放つ

隼人はさらに匣を開けた

ホバーで笹川からひきはなそうと動く

γはそのことに気づきつつも、隼人との戦いを続ける

そしてエレットリック・タワー

しかし、γは手応えの違いを感じた

何かにビリヤード玉が止められているのだ

ギャババ

先ほどと同じ、隼人の匣だ

そして、一つの疑問

嵐の兵器で雷の炎を完全に無効化したことだ

γが考えつつも、戦いは続く

隼人はさらに匣を開け、弾として嵌め込む

ドウッ

赤炎の矢（フレイムアロー）

γは上空に上がり避けようとするが、追尾型だったため追いかけてきた

γはリングの炎をガードとして使用する

バチイ

赤炎の矢とγの炎のシールドがぶつかる

例え嵐の『分解』でも属性一の硬度をほこる雷のバリアを破ることはできない

……はずだった

メラメラ…、と徐々に貫き始めた

仕方なくγは横に避ける

「逃がすかよ!!」

隼人は再び同じ弾を撃つ

「逃げやしねーよ」

「!?」

炎はγに近づいていく

「見るのさ！！」

スレスレのところで、γは避ける

ギュオオ

「（…！！　この炎…ただの嵐の炎じゃ…）

！」

γが真相に気づいた時、炎が右目の近くを掠めた

ブシャッ

血は派手に飛び散ったが、多少の傷で済んだ

「っと、あぶねぇ…

うやむやは許せないタチでな　だがハッキリしたぜ、正直驚いた…

嵐と雨の属性の炎を同時に使えるとはな」

正確には嵐の炎の表面に雨の炎をコーティングしている

その雨の炎の性質…沈静で雷のバリアを弱体化させ、嵐の分解で貫く

この仕組みは隼人が先ほどからシールドで防御していたのと同じだ

「ましてや2種類の炎を融合し同時に放つなんざ、聞いたことがねえ」

「へっ　おまえをそこまでビビらせられたなら、苦労したかいがあったぜ」

隼人は修業の時を思い出す

『くっそー!!　やっぱりわからねーぜ!!』

隼人は資料室で匣と睨めっこをしていた

『ＳＩＳＴＥＭＡＣ（スィステーマ）．Ａ．Ｉ．と名付けられた匣が１６コ
そのうち開けられた匣は４コだけ…しかも出てきた兵器に炎を注入してもウンともスンとも言わねぇ…
１つにはまったく使えねぇ仔猫が入ってるしよ～』

瓜は資料室の床をガリガリしていた

隼人は１０年後の自分が活路を見い出せていたのか、このままでは山本にも勝てないし沢田にも迷惑がかかる、と思う

スタッ

瓜が机の上に乗り、兵器で遊び始めた

『おいコラ！！　兵器で遊ぶな！
オモチャじゃねーんだぞ！！』

瓜はその言葉に腹を立てたのか、隼人が気に入らなかったのか、隼人に引っかきついた

『シャー！！』

『ゴラー！！』

少し経つと瓜は飽きたのか、スタスタと行ってしまった

『くそ…ケンカ損だぜ』

その時、兵器からパーツが落ちた

『げっ　やっべ！！　壊しちまった！！』

ガバッと起き上がり、落ちたパーツを取る

『どこのパーツだよこれ！　リングみてーだけど…

！！』

そう、そのパーツは雨のリングだった

隼人はそのリングを指に通し炎を出してみる

『！！　かすかだがこいつは雨の炎！！

（オレには雨の波動も流れてんのか…？

だが南に複数の波動が流れれてるから可能性はあるか…）』

そして開かなかった匣に雨の炎を注入する

すると、３つの匣が開いた

『だがまた兵器はウンともスンとも言わねえ…

しかもまだ９つも開かねえ匣が…

はっ　まさかこの３つの兵器のどっかにもリングのパーツが……？』

そしてリングを見つけ、同様に匣を開けていく

「どうやらそいつは中遠距離攻撃に特化した兵器のようだな
だがカラクリがわかった上で、そう何度もくらうと思うか？」

「さーな」

ズガガガガ、と弾を撃つ

放たれた弾は、ボッボッと音を立てながらγに接近する

不規則な加速をしながら

そして、もう一つ

尋常じゃない炎の出力

そう、晴の活性が付加されていたのだ

「まずいっ」

ドウ

「嵐と雨だけならば、話は簡単だったんだ

ＳＩＳＴＥＭＡ　Ｃ．Ａ．Ｉ．とは複数の属性リングと、複数の匣を順序よく開匣しなくては力を出しきることのない…パズルの匣！！

そしてＣ．（こいつ）Ａ．Ｉ．を使いこなすための、５つの波動がオレには流れている」

隼人の右手には、５つのリングからそれぞれ異なった属性の炎が灯されていた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７６　貝の嵐ＶＳ偽海の雷！

南とクロームは、メローネ基地内を駆け回っていた

γと隼人を探しているのだ

それは、南が小型パソコンで隼人とγの体力等の減り方を見、戦闘
している気がしたから

何となく、嫌な予感がする……

メローネ基地も大きく形を変えたため、なかなか見つからない

だが、見つけなければならない

二人は駆け回る

南の気持ちも知らず、隼人とγは戦闘を続ける

γは匣の電狐（エレットロ・ヴォールピ）を開ける

γはいままでの弾から隼人の匣が典型的な中遠距離兵器を推測し、近接戦闘をしかける

隼人は晴と嵐の弾で撃ってくるが、避けられる

γは近づきながら匣兵器で隼人を挟み込もうとするが、隼人の匣に捕まる

だが、γはフリーだ

「もらった」

γが構える

ボシュッ

「どうだか」

ガチャン

隼人の弾が変わった

ドウッ

ゴーッ

雲属性の増殖で、弾の先端が枝分かれしていく

ドオッ

γはモロに食らってしまった

「ＳＩＳＴＥＭＡ（スィステーマ）　Ｃ．Ａ．Ｉ．ってのはＣａｍｂｉｏ（カンビオ）　Ａｒｍａ（アルマ）
Ｉｓｔａｎｅｏ（イスタンタネオ）、瞬時武装換装システムのことだ
瞬時に切り替わった弾の特性についてこれなかったみてーだな
今のは相当くらったはずだ」

γはコンテナの後ろで、ある匣を見ていた

先ほど、幻騎士を通して姫…ユニから渡された匣

その時のことを思い出して、匣を強く握り締める

そこに、隼人がやってきた

だが、γはもういなかった

隼人が上を見上げると…

黒くなった電狐が先ほどとはケタ違いは炎をだしていた

「何年ぶりかにこいつを開けたが、相変わらずすさまじい
悪いがこいつを開けちまったら…カタはつく」

その場がカッと眩しくなる

雷の炎と、鮮血が見える

そう、γの炎が隼人のC．A．I．のシールドを貫いたのだ

「この匣はアップデート匣でな
開匣されると電狐は強大な力を纏い、黒狐（ネレ・ヴォールピ）となる」

正確には、ある日より封じた力を元に戻したといった方が正しいが

「くそ…油断しただけだ…　次はそうはいかねぇ！！
果てな！！」

再び嵐＋雨の弾を撃つ

だが、それは黒狐に防がれた

徐々に近づいてくる黒狐を見て、隼人は一番強力な弾に切り替える

嵐＋雷

「赤炎の雷（フレイムサンダー）！！」

だが、それも二匹の黒狐とぶつかり、突き破ってきた

完全に赤炎の雷が突き破られ、隼人はＣ．Ａ．Ｉ．シールドで防ぐ

「フッ…いちいち黒狐の能力を説明してやってもいいが、究極的にはオレとおまえの差は一点につきる」

「！」

「おまえのリングはオレのマーレリングと同じ7?の一角、ボンゴ

レリング

匣兵器もイノチェンティのオリジナルならオレの黒狐と遜色はない

お互い兵器に大差がないのに、炎のパワーに差が出る理由は一つ…

覚悟の差だ」

そして、C．A．I．シールドも破られ、隼人に左右から黒狐が襲いかかる

ドッ…

どさっ

隼人は前に、うつ伏せになるように倒れた

「中坊（ガキ）の覚悟なんてそんなもんだ
お前の年頃ってのは言葉に酔う
かっこいい言葉を並べることと揺らぐことのない本物の覚悟は違うってことだ」

γがトドメを刺そうとした時、黒狐が怯えていることに気づく

「ガルルルルル」

部屋中に響く豹の鳴き声

隼人はこの声に聞き覚えがあった

隼人の匣兵器の、瓜の声

だが、どう考えても仔猫の声ではない

隼人は先ほどのことを思い出す

「（瓜は…カンガルーの方へふっ飛ばされて……）

！　ふっ飛ばされて！？」

そのカンガルーの腹は膨れ上がっていた

ドシュッ

炎の塊が隼人の方へ飛び出した

ズザアァ

そして、隼人の隣に止まる

「ガォォオ」

咆哮のような声に黒狐は体をビクつかせる

徐々に、その姿が見えてきた…

前足のつけねからは、嵐属性の死ぬ気の炎

体は豹柄…瓜と同じだ

「まさかおまえは…カンガルーの晴の活性で成長した…

瓜なのか!!?」

豹は右前足を隼人の顔にポフッと当てる

サクッ

……だが、足の爪を立て、隼人の生え際に突き刺さる

「ぐああ！！　爪立てんじゃねぇ！！

つーかオレを小バカにしたこの態度、間違いなく瓜！！」

ピシャ

黒狐から今までにない位膨大な量の炎が放出される

力を温存していたのだ

ずんっ

瓜が隼人を守るように立つ

そして瓜と黒狐は互いに近づく……

ガオオ

バシャシャッ

ギャキッ

そして一度ぶつかり合っただけで三匹は元の場所に戻る

ブシャッ

瓜の左耳下辺りから血が吹き出す

だが、その直後

ドシュッ

「ギャン」

一匹の黒狐が全身から血を吹き出した

これが、成長した瓜の力だ

瓜だって、れっきとしたＳＩＳＴＥＭＡ（スィステーマ）Ｃ．Ａ．Ｉ．の一部

そして、笹川の倒れる前最後の言葉

『あわてるなよ』

そう、このことが分かっていたのだ

「フッ　野良猫のラッキーパンチを少々甘く見すぎたようだ」

γはコンテナの上に降りた

「…おい、ふざけてんじゃねーぞ

てめえ覚悟がどうのってほざいてたよな」

γはこれに反応する

「瓜のオレの匣兵器の一つだ

これでC．A．I．のフルパワーを見せてやれるぜ

オレの…いや…

オレ達の覚悟をな!!　ボンゴレなめんじゃねえ!!!」

一人で戦ってるのではなく、皆で戦っているのだ

「ほう、こりゃまた無駄に熱いなあ
だがかっこつけじゃあオレには勝てないと言ったはずだぜ」

「心配ねえよ　オレには相棒がいる」

瓜は、その言葉に答えるように咆哮をする

その瞬間…ほんの一瞬だけ黒狐がひるむ

「今だ！」

隼人の声で瓜は駆け出し、隼人は赤炎の矢を放つ

γはこれを跳んで避け、そのことによって空いた黒狐とγの間に瓜が着地する

匣兵器同士の戦いが始まる

隼人はγが黒狐の方に戻れないように炎を飛ばす

分断して戦うつもりなのだ

確かにその方がγにとっては不利で、隼人にとっては有利だろう

「ボンゴレ嵐の守護者の戦い方を、見せてやる」

ガチャ、と弾を変える

嵐＋晴の弾だ

ズガガガガガ

バチッ

γはリングの炎のシールドで防御する

そして、隼人はまた弾を変えて放つ

『常に攻撃の核となり休むことのない、怒涛の嵐』

ドギャウッ

モクモクと、爆煙があがる

「ハア…ハア…」

もう隼人は限界に近い状態だ

「覚えておこう」

隼人の後方上空にγがビリヤードの玉を二球構えた状態でいた

「召されな」

カッ

ビリヤードは、隼人のいる場所に直進する……

が、そこには隼人はいなかった

そして爆煙の下から隼人が飛び出してきた

その位置は、ほぼγの真下だ

「おまえがな」

ドオッ

嵐＋雲

「がはっ」

モロに食らう…

「（まだ…死ねねえ…）」

γの脳裏に浮かび上がるのは、馬、一人の少女、森に囲まれた建物…

「（姫…）」

そしてγは、全てが変わり始めた日々を思い出す…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７６　貝の嵐ＶＳ偽海の雷！（後書き）

遅くなりました…。
それなのに短く…。
全く原作と変わりない戦いです！
…次話は、変わります…多分。

えっと…。
アンケートをさせてください！！
ズバリ、アニメオリジナルの話です。
そろそろアンケートしなくちゃなー、と思いまして。
私、今アニメの話をやるか迷ってるんですよねー。
きっとやることにしたら、一週間に一話ペースになります。
…かなり遅いですね…。
それでもよかったら、書きます！！
でもアンケートは多数決ではなく、私の基準で決めさせていただきます。
『更新ペースが落ちるなら、このまま原作だけがいいけど、感想って残るから書きにくいなー』という方は、ユーザ登録されてる方は、メッセージを。させてない方は『この感想を消しておいて』と書いていただければ消します。
期限は…装置の前で入江から説明される話の前までです。
ちなみに、チョイスの前じゃなくてもいつかアニメオリジナルを書くと思います。
…ですが、かなり未来のことです…。
そのときは、『Ｅｐｉｓｏｄｉｏ』でもなく、『Ｓｔｒａｏｒｄｉｎａｒｉａｍｅｎｔｅ』でもない新しいものに変えます。
まだ決めてはないんですが…。
さらに、しっかり書き溜めておくので、一日一話でいけるとおもい

ます。
あ、なので『後回しにしてほしい』でも大丈夫です。
それでは、どしどしお待ちしております！！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７７　三代目オレンジ　と偽海の雷の出会い！

γとユニは、悲しい出来事と共に出会った

ジッリョネロファミリーは、白蘭率いるジェッソファミリーと対立していた

ジッリョネロが持っている、マーレリングが狙いで

「あれだ…」

γは太猿と共に帰ってきた

「まさかこの時代に馬に乗って逃げ帰るとはな…」

「ぼやくな太猿

我らジッリョネロファミリー最古の隠れ家へはおあつらえ向きだぜ」

太猿の言った通り、二人は馬に乗っていた

ガササ

二人が茂みの中から完全に姿を現すと、何人かの気配がした

「撃つな　オレだ」

「！

ガンマと太猿だ！！」

「無事だったか！！」

「アニキ！！」

隠れていた者達があちらこちらから出てきて、二人に駆け寄る

「太猿が負傷した　見てやってくれ」

二人は馬から降りる

γの言った通り、太猿は怪我をしていた

「敵は？　ジェッソの連中は？」

「なんとかまいた」

「ここまでは追ってこまい」

「さすがだぜ」

ファミリーの者の問にγ、太猿が答える

そして、γは一つ聞く

「ボスの容体はどうだ？」

一瞬にしてその場の空気が凍る

「そ…それがよぉ……」

「！！」

γはアジトの入り口を勢いよく開ける

「ボスはどこだ！？」

中には、幻騎士……それと、南がいた

「囮役御苦労だったなγ」

「γ……」

「南もいたのか…ボスはどうした！？」

γは南がいたことに少々驚くが、南はよく来ているので普通に対応する

そう、南は一ヶ月に一回以上は来ているのだ

「……γ、アリアさんのとこ行くか…」

「！！！　……あぁ、案内してくれ…」

南はγの気持ちを優先し、急ぎ足で奥の部屋に行く

ガチャ

「…ここだ」

そこには、安らかな顔で眠るジッリョネロファミリーのボス、アリアがいた

「本当にボスの言った通りになりやがった…」

γはゆっくりとアリアに近づいていく

「おとといまでピンピンしてたのにこんなこと…

オレが信じていれば…」

γの目に、涙がにじみ出てくる

『ボスを守るのが、部下の務めなのに…』

γはアリアと過ごしてきた日々を思い出す

――――だが、もう戻らない日々…

もう、二度と……

「（必ず守ると約束したのに…

ちくしょお！！　オレが…オレのせいで…）」

「ちがうわ　γ」

今まで聞いた事の無い声に反応するγ

「!?」

後ろを振り返る

「おかえり」

そこには、優しく微笑む一人の少女

どことなく安心させられるような、ホッとするような笑顔…

全てを優しく包み込む、『大空』のような笑顔

「……誰だ、あんた?」

「はじめまして

ユニといいます」

「ユニ…？」

γはユニの首から提げられているオレンジ色に輝くおしゃぶりに気づく

「！　おい！！

そのネックレスはボスがつけていた！！　何をしている！！」

「母から引き継いだのです」

「母…？　何を言ってる……」

γは訳が分からない表情をする

「γ…ユニは、アリアさんの実の娘だ」

南がγの疑問に答える

「…信じられないかもしれないけど…」

南は少し下を向く

南だって、大切な人が亡くなって悲しいのだ

自分を家族として受け入れてくれ、それからは本当の母のように振舞ってくれた人

「我々に知る者は南しかいなかった

だが、ボスの唯一の血縁者だ

ＤＮＡ鑑定も済んでいる」

幻騎士が部屋に入ってきて、γに伝える

「バ…バカな！！　ボスに子供など…！！」

「アリアさんはオレ以外誰にも言わなかった
…ユニにも自分がマフィアのボスとは結局言わなかったみたいだしな…」

南に伝えていても、アリアは一人で背負い込んでいるようなものだった

それを南は気づいていたが、何も言わなかった

いくら仲がよくても、南はジッリョネロに正式に入ってはいないのだから

それなのにファミリーのことに首を突っ込むわけにはいかない

それに、話すか話さないかはアリアが決めるべきだと思っていたから

だからアリアから相談のようなことをされても、聞くだけだった

「つまりユニ様は一般人なわけだが、掟により次期ボスになってもらわなければ…」

「冗談じゃない！！」

幻騎士の言葉に瞬時に反応するγ

「こんな話信じられるか！！　何もかもデタラメだ！！

第一オレのボスはこの女性（ひと）だけだ！！」

γはアリアが再び目を覚まさないことを頭では理解してても、納得することはしない

それは、南も……ジッリョネロに関係する者全員に言える

「γ」

ユニは、γの目を真っ直ぐ見て言う

「母はこうなることを知っていました…

あなたを責めてもいないわ」

ユニは、γにどう言われても笑顔で言う

今悲しんでいる人に、笑ってほしくて…

南はそのユニの意思に気づき、少し笑顔になる

「何言ってやがる!!　ヘラヘラと何がおかしい!!

本当の娘なら母親が死んでなぜ笑っていられる！！」

「γ！！！　違う！！！！！」

南はγの言葉に叫ぶ

「不愉快だ！！　部屋から出ていけ！！」

γはユニの右手を掴み、グイッと引っ張る

その反動でユニの頭から帽子が落ちる

「！！」

袖を掴み、γは気づく

袖が、濡れていることに…

何でもないようなことだが、このことは……

少し前のことだ

γはアリアを呼び出した

『話って何　γ？

悪いけど今日はふざけてる気分じゃ…』

『わかってるさ

…泣いてたろ

あの犠牲はあんたのせいじゃない』

γはアリアに持ってきていた缶を片方渡す

『泣いてないわ』

『隠せてるつもりだろうが、バレバレなんだぜ

袖が濡れてる』

『！』

『ここんとこ毎日だ…』

これはアリアの少しでも皆に気づかれないようにして身に染み付いた癖なのだろう

『……最近だめね…』

『……？

何があった』

『…信じないだろうけど代々受け継いだ血なのか呪いなのか、見えるのよ…

死んだ母さんも同じだったわ…』

アリアは少し下を向いて言う

『見える…？』

『でも母さんにはこう教えられたわ…

何を見てしまっても周りを幸せにしたかったら…

笑いなさいって』

アリアは、優しく微笑む

その時の笑顔と、今のユニの笑顔はよく似ている

それがγには分かり、ユニの腕をそっと放す

「（同じだ…暖かいオレンジの光も…

そうか…ボス…あんたはこの娘の中に…）」

「生きています」

「！！」

γの言葉に答えるようにして言うユニ

「（オレの心の中が……見える、とでもいうのか？）」

ユニは頷く

γは右膝をつき、床に落ちたユニの帽子を拾う

「！」

「よかった…γ…」

幻騎士は驚きの表情を見せ、南は安心の表情を見せる

γはその帽子を膝をついたままユニに差し出す

「数々の無礼を許してくれ
オレがあんたを命がけで守る」

ユニは帽子を受け取り、先ほどまでのように頭に乗せる

「もちろんです…これからよろしくお願いします、γ……」

そして、もう一度微笑む

「ま、そーゆーことでユニもボスとして頑張れよ!!」

南は二人の下に行き、言う

「南お姉ちゃん…

一応でも南お姉ちゃんもファミリーの一員だと、皆からは言われましたよ?」

「だから、『一応』だからな!?」

南はため息とついた

「南…さっき『違う』と言っていたが…?」

γが立ち上がりながら南に聞く

「あー…ユニの許可がないと言えないな…」

「そうか…ならいい…」

γはその言葉を聴き、聞くのをやめた

『違う』というのは、ユニが苦しみ、悲しみ…その気持ちを押し殺してγと笑って話していたということだ

アリアが息をひきとった時、ユニは心の奥底から泣いた

南は、その時一緒にいた

だが、ユニはその時もなんとか泣くのを抑えようとしていた

南は泣いては無かったが、拳には力がこもり、血が流れていた

そう、涙を痛みで殺していたのだ

そして、体は小刻みに揺れている

少しすると、小さくだが聞こえていたユニの泣き声が聞こえなくなった

「…南、お姉ちゃん…」

「…？　どした…？」

ユニは、南の方を向く

「…お母さんは…南お姉ちゃんの笑顔が見たいと思う…

だから、笑ってあげて…」

ユニは笑顔で言う

だが、やはりそれは無理をしているようで…

「！！　…そうだな…

アリアさん…ユニは、何があってもオレが守っていくよ…

だから、安心して眠ってくれ…」

南も、笑顔になって言う

南はアリアからもらった風のマーレリングを握り締めた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７７　三代目オレンジ　と偽海の雷の出会い！（後書き）

今日もギリギリ…。
しかも話が全然進んでないー。
…スンマセン…。
えー、次もあんまり進まないと思います。
またジッリョネロの過去で終わるかも…。
そいでは、アンケートはまだまだ募集してますので！！
ちなみに、書くのは決定しました！！
ですが、『いつ』書くかを決めたいので…。
『アニメと同じ流れになるように書く』
それか、
『とりあえずマンガと同じにして、後でまとめて書く』
のどちらかを選んでください。
一個目だと、週２ペースです…。
二つ目は毎日更新でいけます♪
五分五分ですが…。
それでは、おねがいします！！

＊５００ｐｔ達成記念＊　Ｓｔｒａｏｒｄｉｎａｒｉａｍｅｎｔｅ１２　１０年後の南

これは１０年後の南が、ミルフィオーレに捕まる少し前からの話

「まだまだ、修業が足んねーな」

南は自分のアジトのトレーニングルームにいた

「す…少しは手加減してください…」

そこにはランボもいた

ランボの修業をしているのだ

「嫌だね
オレにとってはストレス発散なんだからな♪」

南はポケットから匣を取り出した

ボウッ

風のマーレリングに炎を灯す

この時代のボンゴレリングは破棄しているからだ

他の通常リングだと風の特徴の『加速』と『減速』が無いからだ

この二つの特徴は、ボンゴレリング、マーレリング、アルコバレーノのリングにだけ存在する特徴なのだ

ドシュッ

「開匣」

出てきたのは、スードだ

「あ…スード、久しぶり…」

ランボはスードの頭を少し怯えながら撫でる

スードはとても嬉しそうに鳴く

「まず、スードと戦え」

南の言葉に、ランボは驚いた

「スードと戦うんですか！？」

「あぁ…ただし……」

そして南はもう一つ匣を取り出した

「成長させた、な…」

その匣に炎を注入し、出てきた炎をスードに向けて放つ

「変換匣で…スードを成長させるんですか？」

「お、正解！

…そろそろ成長し始めるかな？」

晴の炎を注がれたスードは、徐々に成長していく

「ガルルルルル……」

今まで高く、かわいらしかった声は、低く、威圧感のある声になった

「でか……」

ランボは成長したスードを見て言う

成長したスードの大きさは、成長した瓜と同じサイズだ

「ランボ、このスードは一筋縄では行かねーぜ？

チーターはただでさえ速いが、さらに風の加速・減速でイキナリ速度が変わる

…もちろん、回旋もあるしな」

南の言葉に、ランボはごくり、と唾を飲み込む

そして、南を見て一言

「ムリです！」

無駄に意志のこもった目をしている

「…開始は今から１０秒後

１０、９…」

南がカウントダウンをするにつれて、スードは体制を低く、ランボは顔を青くしていく

「2、1…

開始！」

その言葉と共に、ランボとスードは同じ方向に走り出す

……ランボがスードから逃げているのだ

「うわぁぁぁぁぁ！！！」

ランボは泣きながらスードから逃げる

…だが、スードに速さで適う訳がなく……

「あぁぁぁぁぁ……！　ぶっ！」

スードが上からランボを捉え、ランボは床に顔を強打した

「…逃げんな」

南は少量の殺気を放ちながら言う

「お…オレにスードと戦って勝つなんて出来ません！！」

「誰も『勝て』なんて言ってねぇ

まず、逃げずに相手の……悪い、無線だ」

右耳に付けていた無線

『南…今大丈夫か？』

隼人の声だ

「ま、とりあえずは大丈夫だ

何かあったか？」

『…ちょっと、ボンゴレアジトに来てくれ』

南は隼人の声がいつもより低く、緊張感のある声だと気づく

「…わかった
どこに行けばいい？」

『そうだな…応接室に来てくれ』

「すぐに行く」

無線での会話はこれで終わり、南はランボを見る

「ボンゴレアジトに…行くんですか？」

「あぁ…スード、戻ってくれ」

南の言葉に従い、スードは匣に戻る

「…ランボ、これをオマエに預ける」

南はポーチから一つの匣を取り出した

「これって…修業で使ってる雷コインの匣…？」

「あぁ…オレが戻って来るまで預かっていてくれ

使っても構わないぜ」

南は隼人の通信が何の話か分かっていた

ランボは頭に『？』を浮かべている

「頼んだぜ…」

南はトレーニングルームから出て行った

そして、ボンゴレアジト応接室……

「南、話ってのは…」

「ミルフィオーレ…白蘭だろ？」

隼人が言うより早く、南は言った

「…あぁ…」

隼人はポケットから一通の手紙を取り出した

そして、南に渡す

「それが、白蘭から送られてきた手紙だ」

南はその手紙を乱暴に開ける

南はそれを無言で読み続ける

最後の一行を声に出す

「『一度、直接会って話がしたい』…

今までは間接的にだったのにな…」

南は大きくため息をついた

「…どうすんだ?」

隼人は聞く

「…オレはミルフィオーレに…白蘭に返してもらわなきゃならないものがある

だから、取り返してくるよ」

「！！　止めろ！

アイツの狙いは『風』を手に入れることだ！！」

『風』……つまり、南のことだ

「そんなことは知っている…

隼人、これを…」

南はポーチから一つの匣を取り出した

「！　嵐スケボー…？」

「あぁ…これを、次にオレと会うまで預かっててくれ」

南はそれだけ言い、部屋を出て行こうとする

「…必ず、帰ってくるからよ」

パタン

南は隼人を残し、部屋から出て行った

そして、恭弥のアジトに行く

「何の用？」

部屋の前に立っただけで恭弥が声をかけてくる

「入るぜ」

すすす、と障子を横にずらす

「…白蘭のとこに、行くの…？」

「アホ　アイツに奪われたものを返してもらいに行くだけだ」

南は恭弥の前に行き、スーツ…それも男物を着たまま胡座で座る

守護者のYシャツは属性の炎と同じ色で、南は白だ

だが、ネクタイはせずにボタンを2、3開けている

「いつも言ってるけど、ここにスーツで来ないでくれる？」

「いつもは私服だしー」

「同じようなものだよ」

その言葉を最後に、部屋中が緊張感ある空気になる

「…コイツを、預けに来た」

南はポーチから匣を取り出す

「雲チェーンだね
で、いつまで？」

「オレが帰ってくるまで」

それだけ言い、南は立ち上がる

「早くしてね　荷物が増えるから」

これから恭弥は匣を調べるために再び海外に行くのだ

今日はたまたま日本に戻っていただけだったのだ

「…あぁ、わかった……」

そして、南のアジトに戻る

ランボは南が恭弥と話している時にボンゴレアジトに戻ったので、
ここには誰もいない

南は自室に行き、霧のリングに炎を灯して有幻覚を作る

「クフフフフ……」

「出てきてもらって悪いな、骸…」

そう、骸を呼び出したのだ

「…白蘭には気をつけてくださいね…」

「あぁ…クロームを頼むぜ…？」

「えぇ…」

南はポーチから匣を取り出す

「霧メガネを、僕とクロームに預けると…？」

「そうだ…オレが戻ってくるまでな…」

骸は南から匣を受け取る

「分かりました…」

骸はそれだけ言うと、霧となって消えた

「…さて、オレも準備するかな…」

南はマーレリングとアルコバレーノのリング以外を小さな箱の中に綺麗にしまう

その箱と、変換匣を机の中にしまう

レウスの匣は、机の上に置く

「…あ、これもだな…」

南はポーチの中から手帳を取り出した

「…過去のオレが見つけてくれるのを祈るか…」

手帳も机の中にしまう

「…さて、ユニを救出できるのが先か…

それとも、過去のオレが来るのが先か…」

南はそれだけ言い残し、部屋に鍵をかけて出て行った

南はイタリアに飛び、白蘭と会った

「はじめまして、風間ちゃん♪」

「テメェが白蘭か…

話とはなんだ？」

南は殺気を放ちながら聞く

「…君に、僕達の仲間になってもらおうと思ってね…」

白蘭は南をある部屋に連れて行く

ガチャ…

「ここが…真(リアル)7弔花の秘密の部屋だよ」

つまり、南も含まれている

「びゃくらーん、その男は誰？」

「ブルーベル、この人は風間ちゃん♪」

「えっ…男だと思った…」

ブルーベルは南に近づく

「ニュニュウ～近くで見ても男にしか見えなーい
ま、でもこれからよろしくー♪」

「…雨のマーレリング所持者か…？」

南はやはり殺気を少量放ちながら言う

「そーいえば名前言ってなかったわね

ブルーベルよ！！」

「バーロー！！　ウルセーよ電波ちゃん」

「うっさいザクロ！！！」

そしてガヤガヤと騒ぎ出す

「仲間になる気になってもらえたかな？」

白蘭は南に聞く

その質問に、真7弔花も静かになる

「……ハッ」

南は殺気を止める

そして、鋭い目つきになり……

「…誰が仲間になんてなるかよ」

「「「「！！！！」」」」

南は引っ込めた殺気を再び放つ

Ｍａｘではないが…

「…じゃあ、君にはムリヤリ仲間になってもらおうかな♪」

桔梗が扉の鍵をかけた

「鍵をしたって逃げねーよ…
劇薬でもなんでも、したいようにすれば？」

「…じゃあ、そうさせてもらうよ…♪」

それから、数日

ボンゴレに、ある手紙が届いた

『風間南は、ミルフィオーレの仲間となった』

その言葉に、誰もが動揺した

だが、皆は信じていた

南は、隼人達に匣を預けたのだ……

それに、南は約束を破ったことが無かったから

「南…早く帰ってこいよ…」

嵐は言った

「師匠…この匣を早く返させてください…」

雷も南が預けた理由が分かった

「早く取りにこないと、貸しにするよ…」

雲はイタリアで

「南…待ってるからね…」

「クフフフ…大空のアルコバレーノの救出はできるでしょうかね…」

霧も風に紛れて言う

皆、風が吹けば振り返る

そして、風が過去からやってきた

まだまだ幼いが、強力な風

そして、皆は言う

『おかえり』と…

＊５００ｐｔ達成記念＊　Ｓｔｒａｏｒｄｉｎａｒｉａｍｅｎｔｅ１２　１０年後

皆様のおかげで５００ｐｔに！！
感謝感謝です！！
内容が少し次期的には微妙ですが…
こんな感じで１０年後南はミルフィオーレ（仮）になりました。
でも仲間の皆は信じてたんですよー。
次話は明日になりそうです…。
それでは！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７８　風が貝の嵐と偽海の雷の戦いを止める！

隼人とγは互いに譲らぬ戦いを繰り広げていた

「くっ…しぶてぇ…」

二人とも息が荒く、あと一発大きな攻撃をするのがやっとだ

「てめーら…ボンゴレなんざ…
オレの通過点にすぎねーからな…」

γはヨロヨロと、コンテナの上に着地した

「！！」

「白蘭を…倒すためのな…」

「な！？　白蘭はてめーらのボスだろうが！！」

確かに、表向きはそうだ

「……フ…

そーいやおまえは…オレ達ミルフィオーレのいまわしい結成より前の時代から来たんだったな…」

「いまわしい…結成？」

ユニがジッリョネロのボスとなり、三ヶ月…

幻騎士が重傷を負って帰ってきた

幻騎士曰く、ジェッソとの交換条件に失敗したらしい

ジェッソが言ってきたことをクリアーすれば、五年間ジッリョネロには手を出さない、と言う交換条件だ

それを幻騎士は独断で行動し、返り討ちにあったということらしい

「幻騎士…」

ユニが幻騎士の下に来た

「姫…

申し訳ありません…」

「何も話さないで、キズによくないです

それに、あなたの気持ちはわかりました」

ユニの瞳に、幻騎士は冷や汗を流す

「私…行ってきます」

ユニは立ち上がり、言い放った

「どこへ？」

「もちろんジェッソファミリーのアジトへ」

「！！　何だって！？」

「犠牲者をこれ以上出さない方法を白蘭と話し合います……」

ユニはアジトへ向かって歩き出す

「そうなれば白蘭の思うツボだ!!　これは揺さぶりだ!!
奴がこちらを試しているんだ!!」

γは必死に叫ぶ

「大丈夫」

ユニは優しく微笑み、アジトの中へ入る

γはユニの後を追うが、その場に残された者たちはザワザワと騒ぎ始める

「姫!!　考え直してくれ!!　奴らの狙いは略奪!!
リングと匣を奪われて殺されるのがオチだ!!　時間をかせげばきっと同じ考えの同盟ファミリーが現れる!!」

γはユニに言い続ける

「それでは遅いの　白蘭には強い力を感じます」

「！」

「私にしか、止められない」

その表情は笑顔だった

それからすぐに、ジェッソのアジトへ行った

この日は南が来ておらず、ユニと部下四人で行った

その四人の中には、γや二ゲラがいる

そしてユニは、案内された場所で白蘭と会った

「ふ～、今日も食べ過ぎた
2皿多かったな」

この声の主は、白蘭

「あなたが白蘭ですね」

ユニは話しかける

「ん？

えーと誰だっけ…って知るわけもないか　見るのも会うのもはじ

めてだもんね

ユニちゃん」

白蘭の言葉に、γ達はユニを守るように立つ

「てっきり赤ん坊が来るかと

思ったよりすっとチャーミングだね」

「あなたは思ったより…

普通だわ」

「よく言われる」

白蘭は笑顔で返す

「おっと、とりまきの皆さんはジッリョネロが誇るマーレリングの

守護者の皆さんだ

いいな～、本当に羨ましいよ

今日は何人か欠席しているみたいだけど」

「霧の守護者は何者かの策略によりヴァリアーの剣士にやられたがな」

この何者かというのは、ジェッソの者…白蘭だとわかって言っている

「風はいないのかい？」

「！！？」

γは驚いたのには理由がある

風というのは幻…伝説なため、知る者はいないはずなのだ

だが、この男（白蘭）は知っていた

「風のことを、なぜ知っている…？」

「それは秘密だよ♪

でもその反応を見ると、存在しているみたいだね」

白蘭は風のことを半信半疑だったのだが、γたちの反応を見て確信した

『風はいる』と…

「まぁいいや

確か7？の一画であるそのマーレリングを守るのが君の一族の使命なんだよね、ユニちゃん」

ユニは肯定も否定もしない

「っと立ち話もなんだからゆっくり話そうか……
できればボス同士水入らずで」

「貴様そんなことが！！」

γは拒否するが……

「いいわ」

「！！　姫！！」

ユニの思いもしない回答に、γはユニを見る

ユニはγの袖をグッ、と引っ張る

γは左膝をつき、ユニと同じ目線も高さになる

「私の目を見て、γ
無謀に見える？」

「（目…？）
！！
」

ユニの目は、どこか安心するような目をしていた

この表情がγたちを安心させるためなのか、心の奥底からの表情かを知る者はいない…

ユニはニコッと笑い、γの耳元で囁く

「いってきます
ありがとうγ
私、あなたのこと……」

それだけを言い残し、ユニは白蘭との話し合いに行った

だが、帰ってきたユニは『ユニ』では無かった……

姿はユニ…しかし、そこにユニの心は無い…

γが白蘭に聞くが、何も答えない

γは匣開け、白蘭に攻撃しようとしたが……

プシャッ

ユニに、遮られた…

こうして何もできず、ジッリョネロとジェッソは合併することになった

母体は、ジェッソ

これからは、ミルフィオーレファミリーという名になる

そして、調印の時間……

「調印の時間だ」

γがユニに言った

二人の肩には、ミルフィオーレの紋様が書かれた肩当が付いている

「その前に姫…こいつを返す」

取り出したのは、一つの匣

「これはジッリョネロファミリーのためにと、あんたの母さんからもらった匣だ

ミルフィオーレのために使うつもりはない」

ユニは、無表情のままだ

「また再びジッリョネロのために使う時が来るまで預かってもらいたい
時は必ず来ると信じている」

それは、ユニの心が再び戻ってくることを信じているのと同じだった

γは、悔しさと悲しさのある過去を思い出し、苦い表情をする

「時々おまえらの言うことが理解できねえぜ…
白蘭も入江正一も同じ仲間（ファミリー）だろうが！！」

確かに、そうだ…だが、そうではないともいえる

「フ……仲間（ファミリー）か…

ミルフィオーレに本当の仲間なんて何人いるんだろうな

同じ黒い服に身をつつんでいながら仲間（ファミリー）じゃねー奴もいる」

「！？」

つまり、ブラックスペル同士で仲間でない奴もいる、ということだ

「奴らはジッリョネロを売ったカスだ…

中でも一番くえねーのは……幻騎士」

その頃の南は、γ達のいる部屋のすぐ近くまで来ていた

「…γ…隼人…どこにいるんだ…？」

もうほとんどの階は回った

だけど、どこにもいなかった

「クローム、体調は平気か？」

「うん…大丈夫…」

クロームはそう言いつつも苦しそうだ

「…ちょっと、この階をゆっくり探してみるか…」

そして、ゆっくりと歩いていく

「！！　…クローム、気をつけろ…

何人かの気配がする…」

南の言葉に、クロームも緊張した表情になる

「…この、角の向こうだ…」

曲がり角の先を覗き込むと、数人のホワイトスペル

南はブラックスペルがいなくて安心する

そして、少しそこから離れる

「クローム、幻覚使えるか…？」

南はクロームに聞いてみる

「…うん…大丈夫…」

それを聞き、南は考える仕草をする

「…じゃあ、クロームは自分だけをホワイトスペルの隊員の姿になってみてくれ

オレは自分でやる」

「うん…」

そして、クロームは霧に隠れていく…

霧が晴れると、そこには正しくホワイトスペルの姿

「うん、これならバレないな…

んじゃ、オレも…」

南は霧のリングを指に嵌め、幻覚を作る

シュウウウ…

「…これで、どうだ…？」

南もホワイトスペルの姿になっていた

クロームは何も言わずに頷く

「じゃ、とりあえずオレについて来てくれ

合図をするから、そしたら……」

「それにしても、こんなに人数少なくて大丈夫なのかよ…」

先ほど南が発見した奴らの内の一人が言った

「静かにしろ

それに今は非常時だ

人数が少ないのは仕方ない」

その時、足音が近づいてきた

「誰だ！！」

目線の先には、二人のホワイトスペル

「自主的にですが、増援に来ました
要らないのならば帰ります」

一人が言う

「…そうか…
なら一応いてくれ
二人だけか？」

「今は二人だけですが、後から増えるかもしれません」

「…わかった」

そして、新たに二人を増加して再び配置につく

「ところで、今の中の様子は？」

「分からない……そろそろ戦いが終わるらしいが…」

「そうですか……」

そう言って、立ち上がる

そして、どこから取り出したかは分からないが針のようなモノを投げつけた

投げられた者は、力なく倒れた

「貴様！　何をしている！！」

元々いた者達は、針を投げた者を取り囲むように立つ

「何？　そんなん決まってんだろ……」

その者を囲うように霧が広がっていく

そして、霧が晴れる…

「あなたは…風間南様！！」

「敵を倒しただけ」

そう、南だ

そして、もう一人も霧となり、霧が晴れると違う者になっていた

「くそッ…ボンゴレの霧の守護者か！！」

そう、クロームだ

「んじゃ、そーゆーことだから消えてくれよな♪」

ビッ

南はポーチから千本をとり出し、急所に当てた

ドサッ

言葉を発する暇もなく、ホワイトスペルの者達は倒れる

ドゴォン…

「「！！！」」

中から大きな音がした

「クローム！！　入るぜ！！」

「うん…！！」

ドゴッ

入り口を破壊して入る

ビキィ

ズバババ

ジュアアッ

ドドゥッ

ゴオオ

中ではあちらこちらが破壊されている

2020

しかも、それがまだ続いている

バチイィィ

部屋に取り付けてあったカメラが破壊された

南は大きく息を吸い込んだ

「ぃい加減にしろぉおおおおおおおお！！！

そして、炎のぶつかり合いが止まった

「「なんで南がここにいるんだ!!」」

隼人とγは同時に言った

「オマエら…ボッロボロだな…」

南はここまでなっているとは思わず、呆れてしまった

「そんなのはどうでもいいんだよ!!」

「南…姫のことは何か分かったのか?」

「一気に言うな…
ここにいるのは戦いを止めるため
ユニのことは……何も…」

γはそう聞き、少し下を向く

「南!!」

「なんだよ!!!」

「へ…？」

隼人は特に言いたいことも無く呼んだので、返事に困ってしまった

「何の用だよ…？」

「いや…何でも…」

「なら叫ぶな」

南は二人に近づいていく

「…後味悪いだろうけど、戦いを辞めてくれ」

「「！！」」

もちろん二人は、予想していたが驚く

「…オレのワガママなのは分かっている…

だけど…頼む……！！」

南は少し頭を下げる

「…わぁったよ…」

隼人が大きくため息とつきながら言う

「隼人…」

「オレもソイツと同じだ…

南は仲間だしな…」

「γ……」

南は頭と上げた

「……サンキュ…」

「ケッ…」

この映像は、カメラが破壊されたため入江のもとに届いてはいない

「んじゃ、これからのことを言う」

南の言葉に、二人は緊張感のある表情になる

「幸い、カメラは破壊された

だからγはこのまま野猿や太猿達のとこに戻ってくれ

…もしかしたら、地上に行ったほうがいいかもしんねぇ…」

「あぁ、分かった」

そして、南は隼人の方を向く

「んで、隼人はオレとクロームと一緒に行くぞ」

「構わねーけど…

どこに行くんだ？」

隼人の問に、南は数秒考える

「…幻騎士のとこだ」

「「！！」」

隼人だけでなく、γも驚く

クロームはよく分かっていない表情だ

「幻騎士って…コイツが言ってた…？」

「？　γ何か言ったのか？」

「いや…名前を出しただけだ」

γの答えに、そうかと言って隼人に説明を続ける

「幻騎士は強いから、勝てる奴はいない…

まぁ恭弥が来てたら分かんないけど…

だから幻騎士はどうにか止めなくちゃいけない…」

南はもちろん知らない

既に恭弥が来ていることを

「だから…

幻騎士はオレが殺(や)る!!!」

南は短剣二本を握った

2029

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７８　風が貝の嵐と偽海の雷の戦いを止める！（後書き）

なんか微妙な終わり方…。
咲は結局目を覚ましませんでしたねー。
その内目覚めさせます。
山本ＶＳ幻騎士はすっ飛ばします…。
特に変わりないんで…。
むぅ…。早くメローネ基地の話を終わらせたい…。
そいでは！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７９　１０年前雲が過去から来る！

南がγと隼人とこれからの話を終え、γは部屋から出て行った

「さて、オレらも行くか…」

南が隼人とクロームに言う

「だけどよ…

コイツ等どうすんだ？」

隼人が言ったコイツ等とは、笹川と咲だ

「そうだな…」

南は何か思いつき、部屋を出る

ドアの向こうには、ホワイトスペルが倒れている

だが、生きている者も一部いる

「…生きてる奴、立て」

南の殺気交じりの声に逆らう者は無く、二人が立ち上がった

他は、絶命しているだろう

「…何でしょうか？」

ホワイトスペルの者は、一応南のことを上司だと思っているので敬語で言う

「気絶してる奴を二人、背負え

あぁ、もし反抗したらどうなるかなんて…

言わなくても、分かるよな…？」

南はニッコリ笑っていた

……目は笑ってないが…

「「もちろんです！！！」」

二人は急いで部屋の中に入り、笹川と咲を一人ずつ背負った

「んじゃ、行くか」

「「……」」

南の行動に、隼人もクロームも何も言わなかった

その頃の匣兵器実験場

山本は幻騎士によって幻を見せられ、鋼鉄の柱へ突っ込んでしまった

幻騎士がトドメを刺そうとした時、突然壁が崩壊し始めた

ドオオッ

壁が完全に破壊された

「ああ君…丁度いい」

パリンッ

声の主がつけていたリングが壊れた

「白く丸い装置はこの先だったかな?」

雲雀恭弥だ

恭弥の後ろには、匣兵器のロールがいる

「ボンゴレ雲の守護者、雲雀恭弥か…

その問に答える必要はない」

幻騎士が匣開け、中から大量の何かが飛び出してきた

「貴様はここで死ぬのだからな」

その途端、あたりの風景が一変した

まるでどこかのジャングルの中のような景色だ

「ふうん　どうやら君は霧の幻術使いのようだね
君に個人的な恨みはないけど
僕は術士が嫌いでね…
這いつくばらせたくなる」

ボウッ、とリングに炎が灯る

「雲雀恭弥…風間南様と同等に近い力を持つボンゴレ最強の守護者だという噂は聞いている
それが真かどうか、確かめよう」

こうして、雲雀恭弥ＶＳ幻騎士の戦いが始まった

メローネ基地、コントロールルーム

「！！！　この人は…！！？」

入江はカメラに映し出された一人の者を見た

「…なんで…風間さんがここに…！？」

南が来ていることに驚いていたのだ

「…だが、これはチャンスだ…

白蘭サン…必ず風間さんを…」

そして入江は幻騎士と恭弥との戦いに目を向けた

……だが、その映像には針のようなものがたくさんついている球体しか映っていなかった

「…これは…なんだ…？」

「詳細は不明ですが、雲雀の匣兵器と思われます

恐らく幻騎士と雲雀はこの中に」

入江の言葉にチェルベッロが答える

「……中…？」

チェルベッロの言うとおり、恭弥と幻騎士は裏球針態の中にいた

両者は互いに譲らぬ戦いをしていて、力は互角

……のように思えたが、裏球針態はリングの力を封じている
わけでもないのでリングのない恭弥のトンファーは切断されていく

「貴様…死を望んでいるのか？」

「どうして僕が？　咬み殺されることになるのは君なのに」

そう言うが、トンファーはどんどん短くなっていき、頬や腕、肩な
どからも血が流れる

「！？　この状況で何を言っている！！」

ガキンッ

トンファーが恭弥の手から離れ、宙を舞う

「うらやましいな」

だが恭弥の目には恐怖なんて無い

幻騎士はそんな恭弥を恐ろしく思い、間合いをとる

「（何だこの不敵な目は…！！　何だ…

何なんだこの男は！？）

えぇい！！　死ねい！！！」

幻騎士が恭弥に向かって刀を振りかざす

ズバッ

そこに残ったのは、雲ハリネズミの匣

ピシ…ッ…

ビシビシッ…

バキャッ

裏球針態が崩れ落ちる

「ミードーリータナービクー…」

ヒバードはのん気に並中の校歌を歌う

そして、止まった

……ある者の指に

その者は、指に雲のボンゴレリングを嵌め、『風紀』と書かれた腕章を学ランに付けている

「ふぁ～あ　さわがしいなあ…」

むくり、と起き上がる

「君…誰？

僕の眠りを妨げると、どうなるか知ってるかい？」

１０年前の、雲雀恭弥だ

「ねぇ、君」

恭弥が幻騎士に話かける

「並中なら、その眉毛は校則違反だ」

「こ…これは…」

「まあいいさ

しかしなぜうちの行方不明だった生徒が倒れてるんだい？」

行方不明だった生徒…つまり、山本のことだ

「……山本武はオレが屠った」

「ふぅん　君が…

じゃあ話は早いね

君の行為を並中への攻撃とみなし、僕が制裁を加えよう」

チャッ、とトンファーを構える

「いくら風間南様を同等の力を持っていると言われる雲雀恭弥でさえも、１０年前なら話は違う」

幻騎士の言葉に、恭弥は反応する

「…どうして南のことを知ってるんだい？

それも今南は行方不明…」

トンファーを構えたまま、恭弥は聞く

「あの人は白蘭様が欲している者…

オレはあの人を捕獲することも白蘭様から頼まれている」

「白蘭…？　まぁいいよ

君はここで咬み殺されることになるのだからね」

その直後、恭弥は幻騎士に向かって走り出す

ガッ

「！！」

だが、逆にカウンターを食らってしまった

ドォンッ

恭弥は瓦礫の方へ吹き飛ばされた

「先ほども言ったはずだ…

雲雀恭弥といえど、小童では話にならん」

ガラガラ

恭弥は起き上がった

…その表情は、不機嫌さＭａｘだった…

ガラ…

恭弥はゆっくりと立ち上がる

「刃ではなく柄で倒そうなんて、ずいぶんふざけてるね」

恭弥はそう言うが、今の幻騎士の一撃には霧の死ぬ気の炎が込められていたのだ

死ぬ気の炎…それを今の恭弥が知っているのかを疑問に思い、幻騎士は問う

「貴様、この時代の戦い方を知っているか？」

「？」

恭弥の反応に、質問の言い方を変える

「では、これを見たことはあるか？」

幻騎士は匣を持ち、聞く

「……オルゴールかい？」

つまり、匣を知らないということ

「ならば」

幻騎士は匣に炎を注入する

「圧倒的に倒すのみ」

突然部屋中に管のようなものが大量に現れた

そして、管の隙間からロケットのようなものが飛び出してくる

それも、無数の

そのロケットの向いている方向は、全て恭弥だ

「これは貴様の置かれた状況を、わかりやすく視覚化したものだ…

貴様は何百という誘導弾に囲まれている

更に…」

スゥゥ…

フッ

目に見えていた誘導弾が全て透けて見えなく、視認不可能となった

「我が匣兵器は姿を消し、霧の中の幻となる

成長したおまえは“経験”によりこれを退けたが、貴様にそれはない

オレと戦うには１０年早い

さらばだ……雲雀恭弥」

ヒュオオオオオオオ

ヴゥゥ…ン

恭弥に、弾が近づいてくる

「恭弥！！」

ドドウッ

「！！！」

恭弥の周りには、隼人の匣兵器のC．A．I．シールド

「へ…借りは返したぜ…

つってもてめーじゃわかんねーか…」

「よっ♪　久しぶりだなぁ、こっちの恭弥は」

南達が到着したのだ

しかし、その恭弥の表情はいかにも不機嫌だ

「南…群れすぎだよ…」

「え……」

南は恭弥の足元に落ちているオリジナルの雲ハリネズミの匣に気づく

「恭弥、リングの炎って出せるか?」

「…リングの炎…?」

ピク、と恭弥がイラついた表情をする

「跳ね馬と同じようなことを、君まで言わないでくれる…?」

コオォォ…

ボオッ

恭弥のボンゴレリングにすさまじいほどの炎

これほどの炎にも耐える、ランクAオーバーのボンゴレリング

「さっすが♪」

「君達なんて来なくてもよかったのに」

「…オレが来たのはそこの幻騎士を倒すためだ…

あ、そうだ……恭弥、オレと共闘しねぇ？」

南の言葉に幻騎士と恭弥…隼人とクロームまでも驚く

だが、その返事は…

「…ヤダ」

…拒否だった

「…んじゃ、オレがコイツもらってもいい？」

南の言葉にまたムッとする恭弥

「それは駄目だよ」

「んじゃ共闘」

「やだ」

…戦闘はもう始まっているのに関わらず、南と恭弥は言い合いをする

だが、これだけの隙がありながら、幻騎士はなぜ未だに攻撃をしないのか…？

それは、幻騎士が白蘭から言われたことに南のことがあったからだ

南がいるから、幻騎士は攻撃をしない

「…んじゃ、どっちかを選べ

オレに譲るか、共闘するか」

南はムリヤリ言う

「ハァ…後で書類整理やってもらうよ」

「え゛…？（ま、サボればいっか♪）

んじゃ、共闘してさっさと消すぜ♪」

南は指にボンゴレリングを通し、風の炎を灯す

そして、手にはある匣

「…仕方無い…

風間南様にはしばらく眠っていただくとするか…」

幻騎士も戦闘態勢に入る

恭弥はすでにトンファーを構えている

「んじゃ、勝負開始…かな？」

風と雲の初共闘が今、開始する――――――――――――！！！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８０　風・貝の雲ＶＳ偽海の霧！

南の言葉と同時に幻騎士と南・恭弥は接近する

ブォッ

幻騎士が霧の炎を込めた一太刀を南に向かって振り落とす

ガギィィ…ン…

南は風の炎を纏わせた短剣でガードする

そして、その隙に恭弥がトンファーで幻騎士に攻撃しようと近づく

幻騎士は恭弥に気づき、南から離れる

「…恭弥…そこらへんに立方体のハコが落ちてるだろ…？」

「…あるけど…」

恭弥は戦いを楽しみたいのに南に声をかけられ、不機嫌な声をしている

「怒んなって…

そのハコ拾っといたほうがいいぜ♪」

「……」

恭弥は南の言葉を信じ、拾う

「…これ、何？」

「匣っていうこの時代の武器みたいなものだ
それはこの時代の恭弥が使っていた雲ハリネズミ♪」

「…ボックス…この時代のって？」

恭弥が南に聞いた時、幻騎士が南に襲い掛かる

が、南は気づいていないように恭弥に説明をする

「匣の説明は後でしてやるよ♪

この時代っつーのは…」

恭弥が南の前に来る

ガキィィン…

恭弥のトンファーが幻騎士の刀を止める

南はこうなることが分かって動かなかったのだ

「ちょっと…自分のとこに来たのくらい自分で防いでよ」

「んー？　恭弥が来るって分かったからガードしなかっただけーんで、恭弥はタイムトラベルしてんだよ」

ガキッ

幻騎士は再び間合いを取る

南が攻撃態勢に入ったからだ

「タイム…トラベル…？」

まるで信じられないような言い方だ

「んー、信じられないようだけど、嘘は言ってねーよ？
とりあえず、コイツを消してから詳しくゆっくり話す」

カチャ…

南は持っていた匣に炎を注入する

ドシュッ

「グォオオオオ！！！！！」

現れたのは真っ黒なドラゴン……レウスだ

「!?　これは…?」

その言葉を言ったのは恭弥

クロームと隼人は南のアジトで見たことがあり、幻騎士は南なら持っていてもおかしくはない、と思いから大して反応しない

「実際に使ったんだよ♪

さっき恭弥が灯したリングの炎をこの穴にぶち込んで開く

ま、炎が少なすぎたら開かないけど…」

恭弥は数秒考える

「今開けなくても後で開けりゃいいさ♪

今は…コイツに集中しなくちゃいけないしな…」

南は緊張感ある声で言うが、その表情は楽しそうだ

「ワォ　南が戦いを楽しそうに言うなんてね」

「んー、最近楽しくなってきてなー♪

特に、強い奴なら♪」

その途端、レウスが幻騎士に向かって炎を吐き出す

「！！？」

幻騎士はギリギリのところで避ける……

が、そこには南の姿

「楽しみたいけど、早く終わらせたい気持ちもあるんだよな」

ビュオッ

南が幻騎士に刀を振りかざす

ザシュッ

「！！　…幻覚か…」

そう、南が斬ったのは幻覚

「恭弥ー、そっち行ったかも！！」

レウスの炎の爆煙のせいで、見通しが悪くなっている

「問題ないよ」

ガキィィン…

金属音が鳴り響く

「ほう…先ほどと同じく霧の炎を込めた一撃を防ぐとは…」

「霧の炎…？

南の炎や僕の炎の色が違うのに関係あるのかい？」

シュッ

南が幻騎士に刀を投げる…

「!?　投げた…!?」

幻騎士は急いで恭弥から離れる

パシュッ

南の投げた刀は、幻騎士の髪を多少切っただけで通り過ぎた

「んー、さすがに反応早いか…」

南は刀を拾いながら呟く

「だけど、もう終わりだぜ♪」

南は笑う

「…？

（終わり…？　これから本気を出すとでも言うのか…？）」

幻騎士は南の行っている意味が分からないようだ

「んじゃ、消えてもらおうか♪」

パチンッ

南が指を鳴らす

ビュオォォッ！！！！！

南のもう一つの刀が幻騎士の心臓目掛けて飛んできた

レウスが投げ、さらに風の特徴の加速が追加されている

幻騎士が振り返ったときには、すでに目の前に……

ゴゴゴゴゴゴゴ……

突然、幻騎士のいる床が斜め上に上昇し始めた

スカッ

そのせいでレウスの投げた刀は幻騎士に当たることなく、空気を切り裂く

「！　レウス、戻れ」

南はこの揺れが何か分かり、幻騎士と同じように動いていくレウスに言う

レウスは何も言わずに戻り、南はレウスの匣をポーチに戻した

「…恭弥、これ以上は無理だ…」

南は隣にいる恭弥に言う

「地震なんてすぐに止むよ…」

「これは地震じゃない…
意図的に床を動かしてるんだよ…誰かがな…」

南の言葉に恭弥は驚くも、仕方無いと言ってトンファーをしまう

「幻騎士、忠告しておいてやる」

南は幻騎士に言う

「オレはミルフィオーレになんかならねぇ
仲間に手を出したら地の果てまで追いかけてただの肉の塊にしてやるよ…」

南の殺気のこもった声に、幻騎士だけでなくクロームと隼人まで怯える

「…オレはただ白蘭様の言葉に従っているだけだ…」

「じゃあ、白蘭に伝えとけ…」

ゴゥン…

幻騎士が完全に見えなくなった

「…あーぁ…中途半端で終わったな…」

南は刀を鞘に戻しながら言う

「南、怪我ない…？」

クロームが南に近寄りながら言う

「ん、無いぜ！！」

そして、その時だ…

シュウウゥゥゥゥ

「「「「！！！？？」」」」

そこにいる者全員が驚いた

「南！！　開いた隣の部屋から煙が！！」

隼人が言う

「は！？　…何の煙だ…？」

「わかんねぇ…　テメェら知らねぇのかよ！」

隼人はホワイトスペル二名の胸ぐらを掴みながら聞く

「オ…オレは知らねぇ！！」

「オレもだ！！」

二人は隼人に怯え、冷や汗をかいている

「チッ…使えねぇなぁ！！」

ボコッ　ドカッ

隼人は二人を殴り、二人は気絶した

シュウゥゥゥ…

とうとうこの部屋にも煙が入ってきた

「逃げ場…ってどの扉も閉まってる！！」

南は叫ぶが、煙はどんどん入ってくる

「く……そ……」

バタ…

その場にいた者は全員倒れた

だが、息はしている

睡眠ガスだったのだ

南はそれにようやく気づくが、眠りに落ちてしまった

Ｓｔｒａｏｒｄｉｎａｒｉａｍｅｎｔｅ１３　１０年後風と暗殺部隊！

これは、１０年後南がイタリアに来たある日の話

「ん…二カ月ぶりだな…」

南は大きな建物の前に特に荷物を持たずに立っている

先ほど、自分専用飛行機で来たばかりだ

だが、イタリアに来たのに荷物は無い

財布やケータイ、匣が腰に付いてる小さな黒いポーチに入っている
だけ

ただ散歩をするような荷物の量

でも服装は違う

ズボンは真っ黒

裾はそのまま踵の下あたりまである

上着は黒に黄色などの色が入ったセンスのいいもので、フードがある

要するに、ＶＡＲＩＡ隊服

そして上着の前を開け、中にＴシャツを着ている

首からはカバーの付いたリング…アルコバレーノのリングが下げられている

ガチャ…

何の躊躇も無く、ドアを開ける

その行動に、見張りの者も何も言わない

「ん…ここにいるかな…？」

ドアを開け、あたりを見回す

「あり？　南じゃん♪」

南は声のした方を見る

「お！　ベル！！」

そう、南の先にはソファーにゆったりと座った１０年後ベルフェゴールの姿

「にしても、久しぶりだな
二カ月ぶりくらい？」

ベルの問いに、南は答える

「二カ月…長いなぁ…」

たかが二ヶ月で長い、久しぶり、と言うのには訳がある

南はジッリョネロに行くのと同じように、ＶＡＲＩＡアジトにもしょっちゅう来るのだ

……南専用飛行機で

ガチャ…

扉が開いて誰かがロビーに入ってきた

「ベルセンパーイ、持って来ましたー」

それはカエルの被り物をし、手にマグカップを持った新米幹部のフラン

「あれー、南センパイ来てたんですねー」

「来てたっつっても今だけどな♪

久しぶりだから皆と話したいけど…

ＸＡＮＸＵＳは？」

フランが南のことを『センパイ』をつけて言うのには訳がある

フランがＶＡＲＩＡに来る前…つまり、骸の下で修業してたときに会ってたことと、もう一つ

…南が一応ＶＡＲＩＡ幹部だからだ

そのため南はＶＡＲＩＡ隊服で来て、風のヴァリアーリングもあるヴァリアーリングはボンゴレリングのように常備してなく、ＶＡＲＩＡアジトに置いたままだ

ちなみに、南を幹部にしたのはＸＡＮＸＵＳ

だから南は仕方なく『ＶＡＲＩＡ幹部（仮）』になったのだ

「ボスなら部屋にいんじゃね？」

南の質問にベルが答える

「んじゃ、行って来るか」

南はそのままＸＡＮＸＵＳの部屋に直行した

そして、ロビーに取り残された二人は話していた

「それにしても、南は何で正式な幹部になんねーんだろ？」

ベルがフランに持ってこさせた飲み物を取りながら言う

「そんなのミーに聞かないでくださいよー」

「誰もカエルになんか聞いてねーよ」

ベルはそれを無表情で言う

「だとしたら大きな独り言ですねー」

「テメェ…」

「でも、かわいそうなんで一応ミーの意見言ってあげますよ」

「オマエ…サボテンにしてやろうか？」

ベルがナイフを構えながら言う

「それは結構ですー
…南センパイがどこにも正式に所属してないってこと、知ってます？」

フランの言葉を聞き、ベルはナイフをしまう

「…ボンゴレにも、ヴァリアーにも、六道骸の一味にも、っつーことか？」

「他にもいくつかあるらしいですけど、そーゆーことですー
だから南センパイはヴァリアーに正式に入らないんじゃないですかー？」

「何が言いてぇんだよ」

ベルは再び飲み物を飲みながら言う

「ほら、南センパイって仲間を大事にするじゃないですかー
それでどこかに正式に入っちゃうと他のところと不平等になると思いませんー？」

「結局は予想かよ」

「だからミーの意見だって言ったじゃないですかー」

だが、このフランの意見は限りなく正解に近かった

しかし、それに南は気づいていない

それは南の心の中にもう一つの理由があるからだ

これも南らしい理由

『どこかに正式に入ると面倒事が増えるし、自由になれない』

そして、この考え方のせいで南がどこにも入らない、と思う人が増えて南の通り名が出来た

『自由な風（フリー・ヴェント）』

コンコンコン

南はドアをノックする

「……」

だが、返事は無い

南は大きくため息をつく

「…ＸＡＮＸＵＳ、入るぜ…」

ガチャ…

扉を開けると、少し薄暗い部屋の中のソファーに座るＸＡＮＸＵＳがいた

南はそこらへんにある一人がけソファーに座る

「…何の用だ」

ＸＡＮＸＵＳから威圧感のある声がする

「んー、久しぶりに来たからまずはボスであるＸＡＮＸＵＳに会おうかなって

今回は一週間位いさせてもらうぜ♪」

南は毎回二、三日で帰るので、長いほうだ

「勝手にしろ」

「ども♪　んじゃ、まだ皆と会ってないから行くな！」

南は立ち上がり、部屋を出て行く

そして、次に向かったのはＶＡＲＩＡアジト内にある自室

ヴァリアーリングを取りに来たのだ

「こいつをつけるのも…二ヶ月ぶりか…」

南はリングを指に通す

南はリングをたくさん持っているので、基本どのリングも戦闘時や修業時以外にはつけないのでヴァリアーリングだけが指に通っている

「んー、ルッスに会いにいったら飯作り手伝わされるし、変態には会いたくないから…

よし、スクアーロんとこ行こ」

南は部屋を出て、ロビーに向かった

もしかしたらスクアーロがいるかもしれないからだ

だが、ロビーに着く前に声がした

「うぉぉぉぃぃ！！！！」

「！！！　……ウルサ…」

南は声がした方に振り向く

「久しぶりだなぁ〜南ぃ！！！」

「しばらく見ないうちにウルサくなったな

消してほしい？」

南がその言葉をニッコリ笑って…目は笑ってない状態言ったので、
スクアーロが引きつった顔をする

「ＸＡＮＸＵＳには会ったのか？」

「ついさっき行ってきたばかりだな　何かあったか？」

普段なら言ってこない言葉を不思議に思い、南は聞く

「……オマエ、いつになったら正式に入隊するつもりだぁ〝

ＸＡＮＸＵＳは今のままでもいいと言ってるが…

ってう〝お〝い〝！！！！」

南はスクアーロの言葉を最後まで聞かずにロビーに向かっていた

「スクアーロ話長ぇ

ベルとフランと話してくる♪」

南はそのままロビーの扉を開けて入っていった

ポツン、と一人残されたスクアーロ

南の言葉にイラついてか、扉を切り刻みながらロビーに入っていった

言うまでも無く、その後はベルとスクアーロがケンカと思えないケンカをした

途中でレヴィが入ってきたが、瞬殺されたのは言わなくてもいいことだろう

ちなみに、南とフランは風の炎の回旋を使って人が来れなくし、のんびり紅茶を飲んでいた

風のヴァリアーリングは回旋だけしか特徴がないと思うかもしれないが、『虹の欠片』によって加速と減速の二つもある

つまり、ボンゴレリングやマーレリングと同じようなものなのだ

この時代のボンゴレリングは沢田の命令により壊してしまったが…

カンカンカン!!

「「「「「!!」」」」」

その音に、皆が振り向く

「みんなぁ～、ご飯できたわよぉ～♪」

ルッスだ

「あんらぁ？　南までいるじゃないっ！！

なんで私のところに来てくれなかったのよぉ」

ルッスが南に気づき、言う

「だって行ったら飯作り手伝わされるし」

南の言葉に、皆が納得した

「…まぁ変わってないようで嬉しいわぁ…

もうボスさんは来てるわよ？」

「「「「「「！！！！！　ボス（ＸＡＮＸＵＳ）が（ですかー）！！？」」」」」」

再び声を合わせる

それほどまでに珍しい…今まで無かったことなのだ

皆より先に来てるなんて…

「そーなのよぉ…

キッチンにいる隊員も怯えてるから早く来て頂戴♪」

ルッスに言われ、皆がロビーを出て行った

南も行こうとしたが、ルッスに止められた

「何？」

「南…背伸びたの？」

「は？」

南は思いもしない質問に気の抜けた返事をする

「だって…裾が短くなってるじゃない」

見てみると、確かにすこし短いズボン

だが、ほんの数センチ短くなっただけだ

「…ルッス…さらに変態な目つきになったな…」

「んもうっ！！

で、直すの？」

そう言うルッスの手には針と糸と一時的に穿くようのズボン

「…準備万端みたいだから、頼むよ…」

南はルッスからズボンを受け取り、穿き替えに行った

戻ってきた南の姿は、先ほどと少し変わっていた

ズボンの裾を折って七部丈にしているのだ

「んじゃ、飯の後でくれ」

「わかったわぁ♪」

ルッスは南に言われて先に晩御飯を食べに行き、食べ終わった後に一分もしない内に直した

そして、また南に『変態』と言われたのであった

そして、一週間後

南が日本に戻る日

この一週間の間は大変だった…

ベルに部屋にトラップを仕掛けられてケンカと言う名の殺し合いをしたり、

またまたベルにナイフを投げられ、殺し合いをしようと言われたり、

レヴィを無視するのに大変だったり、

マーモンの残したアルコバレーノの呪いを解く方法を研究したり、

スクアーロに刀を突きつけられて戦うハメになりそうだったり、

ルッスに調理を手伝わされそうになったり、

フランに死ぬ可能性もあるほど危険なイタズラを仕掛けられたり…

ＸＡＮＸＵＳからのは全てスクアーロに向かっていたから特に気にならなかった

「んで、次はいつ来るんだ？」

ベルが南に聞いてきた

「さぁなー
でもまた近いうちに来るぜ♪」

南の飛行機の前にＶＡＲＩＡ幹部が全員集合している

ＸＡＮＸＵＳも来ている

……とても遠くにいるが…

「あ、リング置いてくんの忘れた…」

南の指にはまだヴァリアーリングが通っていた

「…ＸＡＮＸＵＳ！！！」

南はＸＡＮＸＵＳを呼ぶ

「……何だ…」

いかにも不機嫌な声だ

「オレのリング、預かっててくれ！！」

南は指からリングを取り、ＸＡＮＸＵＳに投げた

ＸＡＮＸＵＳはそれを片手で取る

「次オレと会った時に渡してくれよ！」

「……カス鮫」

そう言ってＸＡＮＸＵＳがスクアーロに投げる

もちろんスクアーロも取る

「まー、スクアーロでもいいや
とりあえずヴァリアーアジトに置いといてくれ」

南の言葉に少し不思議がるＶＡＲＩＡの皆

前にもリングをつけたままの時があり、その時はつけたまま帰ったからだ

だが、南がこう言うということは何かある、と思って何も言わない

「南様、そろそろ時間です」

パイロットが南に言った

「…んじゃ、またな！」

南はそのまま日本に帰った

それから一ヶ月後……

南はあれから一度も来ておらず、代わりに日本のボンゴレアジトか

ら通信があった

『南がミルフィオーレに捕まった』

その報告に一同は同様するも、ただそれだけで終わった

そして、一ヶ月前のことを思い出す

南がリングを預けたことを…

南が予知していたのかもしれない…

だが、一つ良かったと思えることがある

『ヴァリアーリングがあること』だ

ミルフィオーレに行ったら、ヴァリアーリングも奪われてしまうから

そして……

再びＶＡＲＩＡの下に日本から通信が入った

『南が、１０年前の姿となって戻ってきた』

それはこの時代の隼人からの通信

隼人が南と会ってすぐに連絡したのだ

そして、この時代の南の言うとおりに次に会った時に渡す……

それがたとえ、１０年前の姿でも

Straordinariamente13　10年後風と暗殺部隊！（後書き）

南のアルコバレーノの呪いは、いつか書きます！

もう決まってるんですが…。

メローネ基地編が終わったら、ある人と会って…。

次でどうにかメローネ基地を終わらせるぞ…！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８１　目的地へ到着する！

南が再び目を覚ました時は、リングや匣が全て無くなっていた

それだけでなく、手錠・足枷をされ、牢屋のような場所にいる

「…ここ、ドコ…？」

そう言いつつ、手錠を破壊して欠伸をする

「んー、眠い…

クローム達はどこ行った…いや、オレが変な場所にいんのか…？」

一人でブツブツ言っていると、足音が聞こえてきた

ザッ

その足音は、南の目の前で止まる

「よぉ、久しぶりだな…」

南はその者の顔を見る

「入江、正一……」

そう、ミルフィオーレファミリー日本支部長・入江正一だ

「手荒な真似してごめん…なさい

一応立場上、リングと匣は回収させてもらいました

仲間は、無事ですよ」

入江は南の知りたい情報を全て言った

「あー、了解…

んでオレはどうなんの？」

ガギャンッ！！

南は、足枷も破壊した

「…まさか破壊するとはね…

これから風間さんには…この時代の風間さんみたいに、演技してもらってもいいかな？」

その頃の沢田…

幻騎士に仲間の幻覚を作り出されるが、死ぬ気の零地点突破初代(ファースト)エディションでどうにか回避する

その時に出てきた仲間は、山本、隼人、笹川、ラル・ミルチ、咲、ランボ、クローム、恭弥、南だ

恭弥と南以外は辛そうな表情をしていたが、二人はどうでもいいような表情だった

そして右手から後方に炎が放出される

その炎の炎圧は、２０万オーバー

『レフトバーナー２３万…２４万…レッドゾーン突入！！
ゲージシンメトリー！！　発射スタンバイ！！』

ギュオオと左手を幻騎士に向ける

幻騎士も霧の炎を放出して構える

？（イクス）　ＢＵＲＮＥＲ（バーナー）　超爆発（ハイボタスプロージョン）！！！

幻騎士の炎と沢田の炎が激突する

ピシッ

幻騎士が作り出した幻覚にヒビが入る

ビキキキ

ドギャ

そして、粉砕した

幻騎士を守っていた炎は薄れていく

「図に…乗るなよ…所詮貴様らなど…白蘭様…の…掌の上で…踊っているのに過ぎぬの…

ドワァアア！！！」

ジュッ、と霧が広がった

幻騎士が最後の力を振り絞り、逃走したのだ

幻騎士が消えたことにより、作られた南たちの幻覚も消えた

沢田が放った炎はそのまま直進する

ドガァァッ

海牛が降ってきた

幻騎士が使っていた匣だ

そして、瓦礫も落ちてくる

しばらく経つと、爆煙も薄れた

「……ありがと、ボンゴレ」

「よくやったな、ツナ」

無傷のスパナ、沢田、リボーン

「もっとも最後の力を使ってこの場から離脱した幻騎士を見逃したのは気にくわねーがな」

「……」

沢田もリボーンも、幻騎士が逃げたことに気づいていた

「……あ」

「？」

「お」

「？」

スパナとリボーンは沢田の奥にあるものを見ていった

沢田も後ろを見る……

そこには、目的としていた白くて丸い装置

三人…二人は装置の前まで飛ぶ

そこに、ある者が来た

……人数は、四人

入江、チェルベッロ二名……南

だが南は両手が拘束されていて、その目には何も映っていない

「！！！　…どうして…？」

沢田だけでなく、リボーンとスパナも南の登場に驚く

「風間さんにはこの時代の風間さんと同じく劇薬を投与し、我々の犬となってもらった

彼女は白蘭サンが欲している人間だからな」

その言葉を聞き、驚き、怒りの感情をあらわにする沢田

「まずは拳を下げてもらおう

話はそれからだ」

「…話だと？」

沢田はそう言いながら拳の炎圧を上げる

「聞こえなかったのか？　ヘタに動けば彼らは死ぬぞ」

「！？」

そして、現れたのは、メローネ基地に来ていた南以外の者達

皆、眠っている

「完全密閉した部屋に、睡眠ガスを送り込んで眠らせてある
少しでも抵抗するそぶりを見せれば毒ガスに変更する」

入江の言葉を聞き、沢田は炎圧を下げる

その様子を見、入江はチェルベッロに睡眠ガスを無効化させるガスを入れさせる

そして、ガスは中和し、守護者達が起き上がる

「１０代目!!　南!!?　捕まっている!?」

隼人達はリングと匣を使おうとしたが、入江に没収されていたのでそれは叶わなかった

そして、沢田に装置を破壊するように言う

だが入江から思わぬことを言われた

『装置に入っているのは１０年バズーカで入れ替わった、この時代の皆なのだ』と…

その言葉に南も一瞬反応する

…南には、劇薬が投与されていない

投与されても、効かないので投与していないのだ

なのになぜ、捕まっているような状況なのか…？

それは、入江に頼まれたからだ

捕まっているフリをしてほしい、と

南は白蘭に欲されているので、他の者達と同じように毒ガスを浴びる危険性の無い場所にいなくてはいけない

だから仕方なく、劇薬を投与されて効いているフリをしているのだ

そして南は先ほどからずっと思っていることがあった

『ヒマ。眠い。だるい。』

その他もろもろ、『メンドクサイ』に通じる言葉だ

そして、入江がアルコバレーノが人柱になった、と言ったとき、ガチャン、という音がした

南が手錠を破壊したのだ

「「「「「「「「「!!!!!???????」」」」」」」」」

皆は南を信じられないような目で見る

「あー、もう無理♪」

ボゴッ　ドガッ

南がチェルベッロ二人の腹を殴り、気絶させる

「…風間さん…」

入江が呆れた口調で南に言った

「オレは言ったぜ？

『だるくなったら行動する』とな！」

入江と南以外は何があったのか分からない様子だ

「ん！　入江、早くクローム達を解放しろ！！！」

南に怒鳴られ、入江は皆を解放する

「…どういうことだ、風間…？」

いち早く正気に戻ったリボーンが南に聞く

「…それは、入江の仕事だ!!」

南は入江に責任を押し付けた

「ちょ……説明するよ…」

入江は南以外の者に説明をした

ちなみに、南がボーっとしている間、風についてこんなことを言っていた

『風はボンゴレリング、マーレリング、アルコバレーノのおしゃぶり…正確にはアルコバレーノのリングだが、全てに存在する

だが、風はその三つと別として数える

風は、幻とされているからだ

だから7?と風、全くの別物として存在している

7?の原石がこの世界を創造した礎で、風がこの世界に命を吹き込んだ礎だ』

つまり、風は7?と無関係のようで、切っても切れない繋がりがあるのだ

だから、南はアルコバレーノであり、ボンゴレ１０代目沢田綱吉の守護者であり、真７弔花でもあるのだ

それがたとえ、その中に仮になっているものがあったとしても……

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８１　目的地へ到着する！（後書き）

…微妙な終わり方して、スンマセン…。
そして短い…。
次はちゃんと…。

アンケートを締め切りました！！
結果…
アニメオリジナルは、後回しになりました！
後回しでもしっかり更新しますので！
なので、未来編はこのまま原作通りになります。

アルコバレーノの呪いについてですが、１０年後は呪いを受けていることになっています。
今の南ももうすぐ呪いを受けますね…。
赤ん坊にはなりませんよ！？
でも『呪い』なのでキツイことには変わりませんが…。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８２　本当の仲間！

入江が沢田たちに仲間だということを伝え終わった

どうやら、タイムトラベルは１０年後の南も計画した内の一人らしい

南は入江の話をそのこと以外一切聞かずにボーっとしていた

そして話が終わったのを見て、クロームに駆け寄る

「…大丈夫…だったか…？」

「うん…南は…？」

「オレは何ともないぜ！！」

南はニッ、と笑って言う

だが、その心には罪悪感があった

クロームはそのことに何となく気づいているが、何も言わない

言っても南の罪悪感を大きくしてしまう、と思ったからだ

「あっ忘れてた!!」

突然入江が叫んだ

「ボンゴレ基地に何か連絡は?」

入江がリボーンに聞く

「？　ないぞ…」

「まだか…そうかまだだよな…

う…　また緊張してきた…」

そう言って腹を抱えるようにしゃがみこむ

「どうか…したんですか…？」

沢田が心配して聞く

「君達がここに辿り着くことが白蘭サンを倒すための一つめの賭けだった

それを第一段階だとすると、クリアすべき第二段階があるんだ！

！」

その第二段階……

それは、イタリアの主力戦だ

つまり、ＶＡＲＩＡ達の戦い

南は拳を強く握りしめる

だが、今はどうすることもできない

「……明日にでも、会いに行くか…」

南は小さな声で呟いた

それは、ＶＡＲＩＡが勝つと信じて言った言葉だ

入江達は怪我人…山本と笹川、それと咲を緊急用ベッドに寝かせる

三人は、まだ起きない

「おい入江、一発なぐらせろ

ワケありだったとしても腹の虫がおさまらねえ！」

「僕が先だよ」

隼人と恭弥の言葉にギクリとする入江

「ちょっ君達？」

「まあ待てお前達、入江にはまだ聞かなくちゃなんねーことがあるだろ？

白蘭の能力ってのは何なんだ？」

その質問に、皆が反応する

「……うん

一言で説明するのは難しいが、能力自体は極めて限定的な状況でしか使えないものなんだ……

だがこの時代に起きているありえないことの多くが、白蘭サンのその能力に起因している」

『ありえないこと』

その言葉が沢田にはつっかかった

それは、南も同じだった

南は白蘭に対して疑問に思っていたことがあったから

『風の存在』

それは幻とされ、ボンゴレ・アルコバレーノ・ジッリョネロしか知らない存在だったのだ

それを白蘭は知っていた

「…能力、か…」

南は再び小さな声で呟く

「ん……」

その時、咲が目覚めた

「咲ちゃん！！」

沢田が咲に駆け寄る

「ツナ！？　私…？」

「咲ちゃんは……

（どうしよー！！）」

沢田は先ほどのことを言って再び咲が暴走するかもしれないので言えないでいる

「…私、何かした…？」

咲が沢田に聞く

「え！？　いや…　あの……

（誰か助けて――！！）」

「気絶したんだぞ」

助け舟を出したのは、リボーンだ

「気絶？　何で？」

「オマエは戦いを見てる時、炎圧に耐えきれずに気絶したんだ」

リボーンは見事に嘘をつく

沢田に咲が暴走したことを聞かされたからだ

そして、咲が起きた時にどう対応するかを考えていたのだ

「……そっか…」

咲はベッドのシーツを握り締めた

悔しさ故だ

「咲、もうオマエは戦いに関与するな」

リボーンが咲に言う

「嫌!!　私も戦う!!」

咲は叫ぶ

「どうしてそこまで戦うことにこだわる?」

「!?　それは……」

咲は口ごもる

「言えねーのか?」

「…私は、特別な存在なの…

なのに、守護者にもなれずに非戦闘員なんて、嫌だ」

咲は下を向いたまま話す

「特別な存在?」

リボーンが聞く

すると咲は顔を上げ、言う

「そうよ…！

なのに守護者を風間さんに取られた…」

「取られた？

前にも言ったが、オマエは元々風間の代理として一時的に戦ってもらっただけだぞ」

リボーンの言葉を聞き、咲はリボーンを睨む

「…私は、代理なんかじゃない…

私のために風の守護者は生まれたの…！！」

「……あまり直接的には言いたくなかったが…」

リボーンは一度下を向き、再び咲に向き合う

「咲、オマエは足手まといになっている」

「「「「「！！！」」」」」

あまりに直接的に言った言葉に、咲以外の者も反応する

「私は…足手まといなんかじゃないっ！！！」

「じゃあ今回のことをどう説明する？

炎圧に耐えきれずに気絶だなんて、足手まとい以外の何でもねーぞ」

リボーンは容赦せずに言う

「リボーン！！」

沢田がこれ以上言わせないように言う

「ツナ、オマエはどう思ってるんだ？」

「！！？」

だが、自分に振られてしまった

咲は沢田を見る

自分を必要としている、と言ってほしくて

「え……と……

…咲ちゃんは、戦うより…」

沢田はここまで言って口ごもった

「…ツナは、私を必要としてくれないの…？」

「そうじゃないけど…

咲ちゃんに傷ついてほしくないんだ…」

沢田なりの言い方だ

「…じゃあ、私が戦うのに反対はしてないってことね…？」

「え…？」

咲は沢田の言葉の意味に気づきながらも、気づいていないフリをする

どうしても自分が特別な存在になりたくて

「なら、私は戦う

もうこの意志は変えないよ…」

沢田は反論しようとしたが、咲の目を見て固まってしまった

憎しみ、妬み、怒り……

そういった感情のこもった、冷たい目をしていたから

「…リボーン君、ボスであるツナが許してくれたから、私は戦うよ…」

「……好きにしろ」

リボーンはもう咲に何を言っても無駄だと分かった

だが、ここである者が口を挟んだ

「…オマエは足手まといだと分かってないのか…？」

そう、南だ

「…風間さん…

じゃあ私のどこが足手まといなのよ…！！」

咲は南を睨む

先ほど沢田に向けた目よりも冷たく、妬みが強くなった目をしていた

「本気で分かんねーのかよ…

じゃあ今回の作戦でオマエは何をした？

炎圧に耐えきれずに気絶しただけか？」

「…あなたに…そんなことを言われる筋合いは無いわ…！！

本物の風の守護者でも無いあなたに、言われたくない！！」

咲の叫びに、皆が驚く

「本物の風の守護者でもない、か……」

南は呟いた

「…選んでよ…」

咲は南に言う

「選ぶ？」

「えぇ、そうよ…

ツナを獄寺君やクロームさん位大切な人として接するか…

風の守護者を私に譲るか…」

あまりに自分勝手なことを言う咲

「何でオレがテメェの言うとおりにしなくちゃいけねーんだよ…」

南も相手にしていない

「あら？　怖いの？」

咲は南を挑発する……

が……

「オレを挑発したって無駄だ」

「！　……じゃあ、私も条件をつけるわ…」

今度は南が反応する

「…条件…？」

「えぇ…

あなたがツナの仲間になるのなら、私はもう風の守護者に関して何も言わないわ…

これで、どうかしら？」

それは、南にとってメリットのあるものだった

普通は無視すればいいだけだが、南が咲を異常に嫌っていたのでメリットがあるのだ

そして、大きなため息をつく

「…わかったよ…

選んでやる」

南の言葉を聞き、周りの者が皆南を見る

「…オレは、沢田の仲間になってやるよ…

正式にな…」

つまり、南が沢田を認め、南も仲間として対応する

その答えを予想していた者も、していなかった者も驚く

「え…？それって……？」

一番驚いているのは、沢田本人だ

「だから…

沢田をオレの仲間としてやるっつってんだ…

クローム達と同じようにな…」

そう言われ、ようやく理解する

「…じゃあ私はもう何も言わないわ…
風の守護者に関してはね…」

咲もようやく黙る

「あー、なんか勢いで言っちゃったけどなー…
ま、いいや…」

南はどうでもいいかのように、大きく欠伸をする

「あ、の…！」

「ん？　何だよ」

南に話しかけたのは、沢田

「オレを仲間とするって……？」

訂正、沢田はまだ理解しきれてなかった

「あー…理解できてないのか…」

ハァ、とため息をつく南

「まぁ、簡単に言えば…

オマエ…沢田も隼人やクローム、恭弥みたいにオレの大切な仲間

だってこと」

「そんな…簡単に…

オレとしては嬉しいですけど、いいんですか…？」

まだ遠慮がちに言う沢田

「まぁ、この作戦が終わったら多少はそうしようと思ってたし？

いいんじゃねーの？」

そう、南はとっくに沢田を仲間と思っていたのだ

決定的だったのが、囮役を自ら引き受けたこと

隼人と無線が通じていたので、南は沢田が囮役に立候補したことを知っていた

それを聞いた時、思ったのだ

沢田を仲間と認めて隼人やクロームのように守り抜こう、と

だからこそ、南は咲の選択にも答えた

「…じゃあ……」

沢田が南に言う

「…これからも、よろしくお願いします…

風間さん…」

南はフッ、と笑う

「一つ言うが、オレは沢田の守護者になったワケじゃなく、沢田の仲間になっただけだからな…

それでいいなら、好きにしな」

南は再び欠伸をする

「あ、そうだ」

南はあることを思いついた

「呼び方なんだけどさ…

沢田、ツナ、ボンゴレ…どれがいいか？」

超どうでもいいようなことに思えるが、大切なことだった

南が沢田のことを呼ぶ時に若干怯えているのに気づき、少しでも楽にさせるために言ったことだから

沢田はその質問を聞き、本当に少しだが、表情が明るくなった

「じゃ、じゃあ…」

「ん、ボンゴレな」

「ツナでお願いします！！

あ！」

南の言葉にツッコミをし、怒られる！と思って反応してしまう

「あと、敬語」

「へ？」

間の抜けた返事をする

「仲間と話すのに敬語って変だろ？
だから敬語すんなよ、ツナ」

南に言われ、少し笑顔になるツナ

「は…う、うん！」

ツナはぎこちなく返事をする

南は壁側に行き、壁に寄りかかるようにして座る

「…まぁ、いずれは…こうなってたしな…」

南は誰にも聞こえないような小さな声で呟き、眠った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８２　本当の仲間！（後書き）

うわ…。
微妙な終わり方…。
…スイマセン…。
こうして、南とツナは仲良くなりました！
でも、ツナは「風間さん」なんですよねー。
呼び捨てってのも微妙ですし、南さん、も…。
だったらヒバリさん、みたいに風間さんでいいや！と思って…。
うん…このままで、いこう…。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８３　夢の中！

「ここは…どこだ…？」

南がいるのは、真っ暗な世界

「さっき、ツナと和解みたいな感じになって……

あ、壁に寄りかかって寝たんだ…」

自己完結し、改めて自分の状態を考える

夢の中で、ここまで意識があるのはおかしい、と…

その時、足音が聞こえた

コツ、コツ…

南は思わず戦闘態勢に入るが、武器が一つもない

不思議に思いながらも、拳を構える

「そんなに警戒しなくて結構だ」

ピキッ

突然動けなくなった

「テメェ…誰だ！！」

暗闇のせいで、声はしても姿が見えない

「それはいずれ、分かりますよ…」

パッ

暗闇に、光が差し込んだ

だがスポットライトのように、南ともう一人の声の主しか光は当たっていない

その声の主は、鉄の帽子を被った男

「名乗らないのなら、それでいい…
だが、ここはどこで、何でオレがここにいるのかを答えろ」

南は殺気を放ちながら言う

「もちろん答えるとも
ここは、夢の中だ
そして、ここにいるのはアルコバレーノの話をするため」

「!?　アルコバレーノ…?」

夢の中だというのは予想通りだったため、何も言わない

「君は風のアルコバレーノだが、まだ正式にアルコバレーノになった訳ではない

後で現実世界で会うが、説明だけでも今の内にしておこうと思ってな」

「…なら手短に話せ」

南は殺気を緩める

「まだ殺気を消さないか…　私は戦うつもりは無いのだが…

君を世界最強の人間だと見込み、話す」

鉄の帽子の男は南に近寄り、首から提げらたチェーンに通されているアルコバレーノのリングを取った

「知ってると思うが、これは『アルコバレーノのリング』　風だけはリングにした

そしてこのリングに適任する者は、君、風間南…

そこまでは知っているな?」

南は殺気を消す

戦闘の意志が全く無いことがわかったからだ

「あぁ、それは知っている」

「では他に知っていることはあるか？」

男に聞かれ、南は数秒考える

「オレに、何の呪いもかかっていないこと…」

他のアルコバレーノは赤ん坊になっているのに、南は赤ん坊になっていない

「あぁ、今はそうだな…
だが安心しろ　風は『アルコバレーノのおしゃぶり』ではないから赤ん坊にはならない
他にはあるか？」

南は再び考える

「他は、無い」

それを聞いた男はフフッ、と笑う

「では、長くなるが聞いてもらおう――――――――――」

その男に説明されたのは、こんなことだった

風のアルコバレーノは、アルコバレーノの中でも幻とされている

そもそも、透明は虹にはない

だが、例え虹のかかる場所でも見えないが風は吹いている

だから、アルコバレーノに風が存在し、見えないために幻となった

虹ではないために、『アルコバレーノのおしゃぶり』ではなく『ア

ルコバレーノのリング』

そして、このリングを守り、7?と『風』を監視することを使命として生きていく

虹のアルコバレーノは、赤ん坊になった

大空のアルコバレーノには別の呪いがあるらしいが、それが何かは言わなかった

風は赤ん坊にはならず、他の呪いがかけられる

それは――――――

『異常な程の長命』

１００年は余裕で生きる

アルコバレーノのリングに命を代償に炎を放出させることで死ぬことは出来るが、寿命は異常な程長い

南が断ったら南の仲間に呪いをかける、と言われたために、南は断れなかった

その他にも、長ったらしい話をされた

「…話は以上だ」

男は言う…が…

「……」

南は寝ていた

「さすがに、起きてもらわなくてはいけないからな…」

南にリングを投げつける

何かが飛んでくる気配を感じ、南は起きる

パシッ！

目の前にまで迫ったリングをキャッチした

「二度説明する気は無いが…どこまで聞いていた？」

男は溜め息混じりで聞く

「あー…

オレがアルコバレーノになるのを引き受けなきゃ、オレの仲間に呪いをかけるって言ったとこ…

仕方ないから引き受けるけどな」

ふぁぁ、と大きな欠伸をする

「そこまで聞いていれば問題ない

夢から覚めたら…現実世界に戻ったら、一日以内に私に会いに来いでなければ、君の仲間に呪いをかける」

それを聞き、南は男を睨む

「逃げたりなんかしねーよ…

仲間に手ェ出したら殺す……」

南の殺気がこもった言葉を聞いても、男は笑っていた

「それでは、後ほどお会いしよう」

男が言った瞬間、南はその世界から消えた

「風間南…本当に面白い人間だ…

だが、気づいているのか…？

『風』を全て背負うということの重大さを……

『風』の意味を…」

その言葉を言い、男は姿を消した

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８３　夢の中！（後書き）

未来でですが、呪いをかけられます…
前にも書いたかもしれませんが、１０年後の南にはすでに呪いがかけられています。
でも死のうと思えば命の炎出しきって死ねるんですけど。
…まぁ、自殺みたいなもんなので…それはしないと思いますが…。
それでは♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８４　ボンゴレ匣！

「……さん……風間さん……風間さん！！」

パチッ、と目を覚ます

「……ツナ…？」

「あ、はぃ…うん…

さっきリボーンのとこに連絡あって、ヴァリアーが勝った、って…」

まだ南と会話をするのが慣れないツナ

南は立ち上がって大きく欠伸をする

「そうか……」

南は首から提げられているチェーンに通したリングを掴む

「…今日中、だったな…」

「？」

「いや、何でもねぇよ」

南がそう言った時

『いいや、ただの小休止だよ』

いないハズの者の声が聞こえた

『イタリアの主力戦も、日本のメローネ基地も…すんごい楽しかった』

ヴン…

突然、白蘭の立体映像（ホログラム）が浮かび上がった

『ボンゴレの誇る最強部隊の本気が見れちゃったりして、前哨戦としては相当有意義だったよね♪

メローネ基地で僕を欺こうと必死に演技する正チャンも面白かったなぁ』

「じゃあ僕が騙してたのを…」

『うん、バレバレだよ』

入江は驚きと焦りの表情を隠せずにいる

南は白蘭を睨む

『確かにこの戦いを逆に利用して敵に寝返る計画はよくできていたし、正直ボンゴレと手を組むなんて思ってなかったけど、正チャンがいつか敵になるのは想定の範囲内だったからね

だって昔からずーっと正チャン、僕のすることなすこと、いつも否定的な目で見てたもん』

白蘭は笑いながら言う

「!!

……あなたは……間違ってる!」

入江は冷や汗を流しながら言う

『ほーらきた　まあ好きにすればいいよ　どちらが正しいかは今にわかるし

しっかし正チャンもつくづくもの好きだよね

まだケツの青いボンゴレ１０代目なんかに世界の命運をあずけちゃうなんてさ

あぁ、世界の命運だけでなく風間ちゃんもかな？』

南はピクリと反応する

「…オレは、何があってもオマエの仲間になんかならない…」

殺気を込め、睨みつけながら話す

その殺気に、ツナや入江達は怯えるも、白蘭は笑みを浮かべたまま
で変わらない

『やっぱり面白いなぁ、風間ちゃん
でも君が何と言おうと僕は“風”を手に入れるからね♪』

白蘭の言葉を聞き、南はさらに殺気を強くする

『本当はこのまま息つく暇なく戦力を投入してボンゴレを消すのは
簡単なんだ
でもここまで楽しませてもらったのは確かだし…
それに信頼してた副官に裏切られたとあっちゃ、リーダーとして
のプライドにかかわっちゃうだろ?』

南は“風”の話が終わったことで、少しだけ殺気を弱める

『だからそろそろちゃんとやろーと思って
沢田綱吉クン率いるボンゴレファミリーと僕のミルフィオーレファミリーとの、正式な力比べをね』

白蘭は不敵に笑う

『もちろん7?と“風”をかけて
時期的にもぴったりなんだ
正チャンやこの古い世界とのお別れ会と、新世界を祝うセレモニーにさ♪』

「オイ、勝手に言ってんじゃねーぞ」

南が殺気を込めて、低い声で言い放つ

『ん、何かな?　風間ちゃん♪』

「オマエが7?の一角、マーレリングを所持しているから7?を賭けるのには何も言わない
だが、“風”についてはオマエがどうこうする権利が無いハズだぜ?」

南の言葉を聞くも、白蘭は笑みを消さない

『確かにそうかもね…
でも、風間ちゃんはどの位“風”のことを知ってるのかい?』

ピクリ、と更に鋭い目つきになる南

『それに風間ちゃん…
“風”を…君を賭けるのを拒否するなら、代わりに君の大事な仲間を賭けてもいいんだよ?』

南は一瞬目を見開き、今までの比にならない程の殺気を放つ

「……ふざけんな……！！！」

その殺気に皆が冷や汗を流し、ツナと入江、咲、ランボは顔を真っ青にして尻餅をつく

『そんじゃ、風間ちゃん自身か君の仲間…どっちを賭ける？』

「チッ……

…好きにしろ」

南の解答を聞き、白蘭は再び笑う

ピシッ

何かが壊れるような高い音が聞こえた

「マーレリングが…！？」

入江の晴のマーレリングが割れた

「な…！？　マーレリングが壊れるなんて…！！？」

戸惑っている入江に白蘭は言う

『あぁ、それはニセモノのマーレリングなんだよ♪

晴だけじゃなく、嵐、雨、雷、霧…僕と風間ちゃんのマーレリング以外は正チャンの知らない人が所持してるんだ』

「な…！？　その人は…！？」

入江は相当戸惑っている

『悪いけど、正チャンには秘密で他に組織してあるんだ
正チャンに会わすには刺激が強すぎると思ったから伏せといたんだけど、もう敵同士だからいいよね
紹介するね』

ブウゥン…

白蘭の後ろに映像が映し出された

『彼らが本物のミルフィオーレファミリー7人の守護者、真7弔花（リアル）

♪』

その中には、１０年後の南の姿も含まれていた

「リ…真７弔花!?　それに…風間さん!!?」

皆が南を見る

「…１０年後…この時代のオレはある目的の為に、投与された劇薬が効いているフリをしてたんだとよ…

だから、オレは白蘭の守護者じゃねぇ…」

南の言葉を聞き、皆がホッとため息をつく

逆に白蘭は……

『やっぱり効いてなかったのかー♪

その目的って……

あ、もしかしてユニちゃんの救出かな？』

南はピクリと反応するが、その問には答えない

『まぁいいよ♪

きっと正解だと思うからね♪』

南は舌打ちをする

「白蘭サン、この人達は誰なんですか！？　知らないぞ！！

僕の知らない人間がミルフィオーレにいるなんて！！」

入江は叫びながら白蘭に聞く

『彼らこそが僕が新世界を創るために選んだ
真のマーレリング保持者（ホルダー）にして、僕の本当の守護者達だよ
知らせなかったのは正チャンに心配事増やすとメンドくさいからだよ』

「……」

入江は何も言わずに冷や汗を流した

『僕はこう考えたんだ
ただ腕っぷしの強い人間を選んでもたかがしれてる
なぜならリングの力の強さの要はより強い“覚悟”だからね
そこで強い上に常識離れした“覚悟”を持った人間をマフィアといわず世界中から探し回ったんだ
そしてその“覚悟”が僕への“忠誠”になりうる人間をね
今見ても分かるけど、風間ちゃんは違った…でも“風”は風間ち

ゃんにしか適合しないから仕方ないけど♪』

『適合』…その言葉がやけに南の心に引っかかった

『世界は広いよねー　おかげで彼らと会えたよ

例えば彼は…』

映し出されたのは、赤い髪の男

そして映像が変わり、大自然が映された

『ご覧のように大自然に恵まれた大変美しい故郷の出身なんだけど

“覚悟を見せてくれないか？”と言ったとたん…』

再び、映像が変わる…

『故郷を捨ててくれたよ』

美しかった大自然は、正しく地獄絵図と化していた

山からはマグマが噴出し、村は完全に消滅していた

山からだけでなく、あちらこちらからマグマが噴き出ている

「なにこれ!?」

「まるで地獄絵図だな」

「こんなことが……」

『こわいよねー　ここまでアッという間だよ

まさか僕への忠誠を示すために生まれ育った木も山も村も村人も、全部消してくるとは思わないじゃん』

そう言いつつも、白蘭は笑顔を崩さない

「!?　噴き出したマグマの中に何かいるぞ!?」

隼人が気づき叫ぶと、その部分がズームアップされる

「何だ!?」

「動物…?」

だが、そこにいたのは人間だった

先ほど映された赤い髪の男だ

決して人間にはできないことを口笛を吹きながらこなす…

これだけで以上な戦闘力が見せ付けられた

驚くのはそれだけではない

南を除いた真7弔花には1人につき5000名の部下とAランク兵（ソル）士（ジャー）を1000名与えられている、と言う

このことは入江もスパナも知らなかったことらしく、酷く驚いていた

今までAランクは偽7弔花の6人しかいなかったらしい

ちなみに、南を数えなくて6人だ

『彼らを倒したら今度こそ君達の勝利だ
ミルフィオーレはボンゴレに全面降伏するし、風間ちゃんの望んでいるユニちゃんも解放するよ』

そう言っている白蘭の表情には負けることなんて奇跡が起こっても無理だと言っているようだった

「白蘭サン!!　力比べって…一体何を企んでるんですか!!」

『昔正チャンとよくやった“チョイス”って遊び覚えてるかい？
あれを現実にやるつもりだよ♪』

入江は目を見開いた

聞くだけでも危険そうなのは分かる

ゲーム…言ってはいないが、恐らく戦闘モノのゲームを実際にやる、

と言っているのだから

『細かいことは１０日後に発表するから楽しみにしててね♪

それまで一切手は出さないからのんびり休むといい』

「無茶言うな　あんな怪物見せられてのんびりできるわけねーだろ？」

リボーンに反応し、白蘭は楽しそうに言う

『んー、君とも風間ちゃんとももっと話したいなー

でも君達はもう逃げないとね

君達のいるメローネ基地は、もうすぐ消えるからさ』

カァ…

白蘭が光り出す

「!?　消える?」

『正しくは基地に仕込まれた超炎リング転送システムによって移動するんだけどね』

「!　それってリングの炎を使ったテレポーテーションシステム…?

完成…してたのか?」

スパナは知っているらしい

知らない者の頭には『?』が浮かんでいる

『まだこの規模の物体じゃなきゃムリなんだけどね

すさまじいエネルギーと時間がかかるから一生に一度見られるかどうかだよ

じゃあ……楽しみだね、１０日後♪』

そう言って立体映像の白蘭は消えた

消えた場所からまぶしい光が広がっていく

テレポーテーション…つまり、どこかに飛ばされるらしい

「大丈夫だ!!　何かにつかまれ!!」

入江は時計を確認する

キュオオ…

カッ

「……どうやら、何とかここは守られたみてぇだな…」

南はギリギリで飛ばされなかったのを見て言う

「クローム…大丈夫か…？」

倒れているクロームに近寄りながら聞く

「うん…でも、何で大丈夫だったんだろう…？」

「オレも分かんねぇ……
？　なぁ、あれ…」

南がベッドで寝ていたハズの者を見ながら言う

「極限にここはどこだー！！？」

晴のボンゴレリングと共に１０年前からやってきた、ボンゴレファミリー晴の守護者、笹川了平だ

笹川と晴のボンゴレリングが過去から来たことでボンゴレリングが揃い、結界ができて守られたらしい

そして、もう一人…山本も意識を取り戻していたようだ

過去から笹川が来てボンゴレリングが揃ったことはプラスとなるが、
それだけであの化け物じみた者達を倒せるとは到底思えない

「いいや、できるさ!!」

そんな中、入江が叫んだ

「成長した君達なら奴らと渡りあえるさ!!

僕達だってただ君達をイジメてきたわけじゃない

君達を鍛えることはこの新たな戦力を解き放つためでもあったんだ!

君達の成長なくしては使いこなせない新たな力…」

入江は装置のボタンを押す

すると、装置の中心が開き、８つの光が見える

「今こそ託そう
この時代のボンゴレボスから君達への贈り物だ
心して受けとってくれ！！」

そしてその光は、８属性それぞれの炎を纏いながら飛んでいく

大空の炎なら、大空のボンゴレリング所持者の沢田綱吉のもとへ

嵐なら、嵐のボンゴレリング所持者の獄寺隼人のもとへ

同様に、炎の属性と同じボンゴレリングを持つ者に飛んでいく

南にも、その光は届いた

その光の正体は……

ボンゴレの…匣!!!!

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８５　風の呪い！

「…ボンゴレの紋章が書かれた…

炎の色の匣…？」

南以外の者の匣は炎の色そのままだったが、さすがに透明にするわけにはいかないのか、真っ白だった

「…まぁ、無色イコール白とも考えられるしな…」

南は大して興味ないのか、ボンゴレ匣をポーチにしまった

それよりも気になることがあったからだ

アルコバレーノの…否、『風の呪い』……

「南…？　どうかしたの…？」

すぐにポーチにしまったことを不思議に思ったのか、クロームが聞いてきた

「いや…何でもない…」

南が言いたくなさそうなのに気づいてか、クロームはそれ以上聞かなかった

「オイ！！」

南は皆に向かって言う

「オレはちょっと先に地上に行ってるからな！
クローム、もしかしたらアジトに戻るのクロームの方が先かもしんねぇ…
ごめんな…」
「ううん…大丈夫…」
クロームは笑顔で言うが、南は少し視線を下にずらす
「大丈夫だぜ！」
「！？」
突然聞こえた声に顔を上げる南

「南、オレがちゃんと連れてってやっとくからよ！！
さっさと用事済まして来い！！」

そう言ったのは、隼人だ

南が仲間を置いてまで早く済ませたいことなのだから、なにか大事な用事なのだと分かったんだろう

「隼人…サンキュ！！」

南はそのまま嵐スケボーと出し、地上まで一気に飛んでいった

「…南…」

クロームは南が飛んでいった場所を見つめた

「……早く、帰ってきてね…」

南は何も言わなかったが、クロームは分かっていた

南が行きたくないのに行ったことを

「…で、どこにいるんだ…？」

南は嵐スケボーをしまい、並盛商店街を歩いていた

鉄の帽子の男からは、一日以内とだけ言われ、場所を指定されていなかったためにそこら辺を歩いていたのだ

自力で探せ、ということなのかもしれないが…

「…場所聞いとけばよか…！！」

後ろから、気配がした

あの男の気配が…

「……行くか…」

南は進行方向を変え、道を戻る

そして、商店街から抜け出し、どこか狭い道に入る

そこは狭いのに木が大きく成長しており、昼とは思えない暗さの場所

「…ここにいんのか…？　いや、いるだろ…

出て来い…」

南が見つめるのは、一つの木の影

「…さすが、“風”に相応しい者だ…」

その先から南が探していた、鉄の帽子の男が現れた

「早く呪いをかけるならかけろ

こっちは修業したいのに来たんだからよ…」

「抵抗しないか…

それもそうだな、君が拒否すれば君の仲間に呪いをかけると言っ

たからな…」

再び言われた仲間のことに、南は不機嫌になる

「それでは、呪いをかけると同時に“風”の情報も入れておくかね…」

パァァァ…

風のアルコバレーノのリングが光る

その光りはどんどん大きく、強くなっていく…

「…！！？」

フッ…

眩しかった光は一瞬で消え、南は体を記憶に異変を覚える

「体の異変は、長命になったからだろう

記憶は“風”の情報をムリヤリ入れたからだ…

さて、私の用事はこれで終わりだ　何か聞きたいことはあるか？」

南はフゥ、とため息をつく

「無い」

「そうか…

それでは失礼しよ「一つだけ、言っておく」

…ほう、何だ？」

男は更に不気味な笑みを濃くして聞く

南も、笑う

「オレは必ず、この呪いを解いてやるよ…

そんで、呪いを解いてからオマエを殴る！！！」

右手に力拳を作って言い放つ

「…この時代の君に呪いをかけた時と同じとこを言うとは…

やはり、面白い…

楽しみにしているよ」

そう言った直後、今度はあたり一面が暗闇になる

そして、暗闇が消えて元に戻った時には、あの男はいなかった

「…長命、か…

早く解かないと…な…」

南はフッ、と笑い、アジトに向かった

「あ…ついでに食材買ってこ」

商店街に逆戻りする

その姿は、先ほどと変わりないように見える

だが、変わっているのだ…

気持ちも、寿命も、知識も……

そして、覚悟も……

鉄の帽子の男は、この時代の南に呪いをかけた時のことを思い出していた

『“風の呪い”…？』

『あぁ、そうだ…』

『断る』

『当たり前の答えだな…

だが、君が断るのなら、君の仲間に呪いをかけてもいいんだぞ…

？』

『！！　チッ…ムカつく奴だな…』

『で、どうするんだ…？』

『…かけたきゃかけろ

受け入れてやる』

『…では…』

『……』

『体に違和感を感じるか…

それが呪いを受けた証拠だ

“風”については知っているな？』

『当たり前だ』

『それでは、私の用事は終わりだ』

『一つ、忠告しておくぜ』

『？』

『オレは必ず呪いを解いて、オマエをぶっ飛ばす！！』

『フッ……楽しみにしているぞ』

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８６　風の仲間と呪いをかけられた風！

南は呪いをかけられても、それまでと変わらぬ様子でアジトに戻ってきた

「南…おかえり」

南が買ってきた食材をしまおうと、キッチンに行くと、クローム・隼人・恭弥がいた

それも、三人が同じ机を囲むように座っている

机が大きいので、皆離れて座ってるが…

「た…ただいま…

っつか何？　この異色の集団…」

それもそうだ

クロームと隼人と恭弥……

信じられない集まりだ

「君、何のために先に地上に行ったの？」

恭弥がズバリ言った

「んー？　ちょっとした野暮用だよ」

南は食材を片付けながら答える

「じゃあその野暮用って何さ」

またしても恭弥が聞く

「えー…　言わなきゃダメかよ…」

一度手を止め、三人の方を向く

「クロームと隼人も、知りたい？」

南の言葉に、頷く二人

「…分かったよ…」

ため息をつき、三人と同じように座る

「まず、オレは風のアルコバレーノなんだ…

だけど風はアルコバレーノのおしゃぶりではなく、アルコバレーノのリング…

これがそうだ」

南はリングを取り、見せる

「そして、風のボンゴレリング、風のマーレリング、風のアルコバレーノのリング…

そして、その全てを所持し、その全てに適合するオレ…

この４つを“風”と言う」

「「「！！！」」」

つまり、白蘭の欲していた“風”とは、このことだったのだ

「アルコバレーノは皆、呪いをかけられる
だけどオレは今まで何も呪いをかけられていなかった…
そして、今さっき済ませた用事…」

一度区切り、ため息をつく

「オレに、呪いがかけられた」

「「「！！！！！」」」

三人は大きく目を見開いている

「だ、だけどよ…

南は赤ん坊になってねーぞ？」

隼人が言う

「入江も言ってただろ？“風”は違うんだよ…

あと、少し間違えた…

オレにかけられた呪いは、“アルコバレーノの呪い”じゃなく、“風の呪い”…

だから赤ん坊にはならない」

そう、アルコバレーノの呪いではないのだ

「南…その“風の呪い”って…？」

今度はクロームが聞く

「……異常な程の、長命…

詳しくは教えられてないけど…」

その言葉を聞き、暗い表情になるクロームと隼人

恭弥も少なからず動揺しているようだ

「でも、安心しろよ！」

南が元気な声で言う

「オレは絶対にこの呪いを解く！！
んで、呪いをかけた奴をぶん殴るんだからな！！」

再び力拳を作って笑う南

「南…」

「ったく…」

「長く生きるなら、並盛の風紀を守り続けてもらうからね」

恭弥の言葉を聞き、露骨に嫌な顔をする南

「…もっと詳しくあるけど、オレはこれ以上は話せない…」

南の言うとおり、実際はもっと詳しくあるのだ

だから、かなり疑問に残ることもある

「ううん、話してくれてありがと…南」

クロームだけでなく、隼人も恭弥もこれ以上聞こうとはしなかった

「…サンキュ……」

南がそう言った時だった

「うわぁぁぁぁ！！！！」

ドタドタと、扉からツナ、山本、了平、ランボ、リボーンが入ってきた

そして、「ヤベ…」と呟く隼人

「…ここはオレのアジトだぜ…？

簡単には入れないのに、どうやって入った…？」

勝手に入られたことに不機嫌になる南

「どうやっても何も、扉が開いてたから入ってきたんだぞ

今来たばかりだけどな」

「開いてた…？

……オマエだな、隼人……！！」

隼人の表情を見、犯人が分かった南

「わ…悪ぃ！！」

手を合わせ、謝る

「…まぁ、いい…

オイ、チビちゃん！　本当に今来たばかりなんだな！？」

「あぁ、本当だぞ

それに気配が無かっただろ？」

確かに、と南は言う

それにしても、何故ランボまで来たのか？

考えるが、どうせ興味本位だろ、と決めつけた

「あ、そだ」

南は何かを思い出したかのように言い、ツナを見る

「オレ、今からヴァリアーアジト行くから」

南の爆弾発言に、数秒固まるツナ

「え…えぇ――――――――――――――!!!???」

「あ、でも明日の内に帰るつもりだから」

「はい――――――――――――!!??」

何のために行くんだ、とツナは心の中でツッコんだ

「んで、クロームの分の飯は作っとくからよ

あ、それとも一緒に行くか？」

ツナから、クロームの方に向き直る南

「えっ…と……

……じゃあ…行く……」

入江から骸が生きていることを聞かされてはいたが、まだ心配なのだろう

骸の情報を得られるかも、と思い行くことにしたのだ

南はクロームの返事を聞き、

「ん、じゃあ一時間後にイタリアに飛ぶからな」

と笑って言った

もちろん、乗る飛行機はこの時代の南専用飛行機だ

「ま、そーゆーワケだから
チビちゃん達は早くこのアジトから出てけよ」

南に言われ、後から来た人達＋隼人がボンゴレアジトに戻った

クロームも準備のために部屋に行った

残ったのは、恭弥と南だけだ

「ん、恭弥は並中とか行くだろ？」

「そのつもりだよ
僕ももう行くから」

そして、恭弥も部屋から出て、恭弥のアジトに行った

残ったのは、南ただ一人

日帰りだからいいや、と思って支度をしないのだ

服装も、いつも通りの私服

南は、アルコバレーノのリングを握り締める

「…皆、ありがとな…」

南はアルコバレーノのことを話して、皆から拒絶されると思っていたのだ

その感情を押し切って、話した

その結果、拒絶などされず、受け入れてくれた

それが何より、嬉しかったのだ

「…皆から言われてるし、早く呪い解かねーとな…」

握り締めていたリングをチェーンに通し、首にかけ、再び食材の片付けをする

その表情は、どこか嬉しそうだった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８７　１０年後暗殺部隊！

「…着いた…」

南は大きな建物の前に、手ぶらで立っている

その隣には、またしても手ぶらで私服のクローム

日帰りなので、荷物は無い

どんな服かと言うと、南はＶＡＲＩＡ隊服みたいなズボンに、紫のＴシャツ…その上に青いパーカー

クロームは、赤いTシャツの上に藍色のパーカー、そして白のスカート…膝下まである黒のロングブーツを履いている

スカートとブーツ以外は南の私服だ

なぜかと言うと、この時代のクロームの服で合うサイズが無かったから

南はこの時代に来てからよく地上に行き、買い物をしていた為、色々なサイズがあった

バンッ

勢いよく扉を開ける

何の躊躇も無く扉を開けた南の後を、クロームがついてくる

「!?　南…?」

ロビーにあるソファーから、一つの声がした

「あ…ベル…!」

10年後のベルだ

「オマエ…10年前の南か…?

それに、その女は…」

「クローム！　今のオレと同じく、１０年前のな♪」

クロームはオドオドしながらベルに軽く頭を下げた

「っつか、修業はいいのかよ…

白蘭（アイツ）は南も狙ってるんだぜ？」

「だから今日中に帰るんだよ

他の皆は？」

ロビーには、ベルしかいない

「ボスは部屋じゃね？

あとは知らねー」

「んじゃ、とりあえずＸＡＮＸＵＳに会って…

そっからはテキトーでいっか

「また後でな、ベル」

そう言い、南とクロームはロビーから姿を消した

コンコンコンッ

南がＸＡＮＸＵＳの部屋の扉をノックする

「……」

１０年経っても、返事はない

「…変わんねーな…

入るぜ、ＸＡＮＸＵＳ？」

ガチャ

「よ♪」

１０年前より鋭い目つきになったＸＡＮＸＵＳ

そんなＸＡＮＸＵＳに構わず、南は声をかけた

「……何の用だ」

「用？　……うーん……？

用は…無いけど…」

そう、南はなんとなく来たのだ

「来たのは……あ、１０年後のヴァリアーを見たかったから？

あ、あともう一つ…」

南はドアの前に立っているクロームを見た

「六道骸について、何か知らね？」

南は分かっていたのだ

なぜ、クロームも来たのか

「知るか」

「やっぱりかー　ま、いーや
んじゃ、今日中に帰るからなー」

そう言い、南はＸＡＮＸＵＳに背を向ける

「待て」

だが、ＸＡＮＸＵＳが南に声をかけた

「？　何？」

ＸＡＮＸＵＳは何も言わず、一つの箱を投げた

パシッ

南はそれを片手でキャッチする

小さな箱

「…何だ…？　開けていいか？」

「好きにしろ」

パカ……

そこに入っていたのは…

「！！　ヴァリアーの…リング…？」

そう、この時代の南が過去の南へ残したヴァリアーリングだ

南はリングを指に通し、炎を灯してみる

ボウッ

「風属性…？　もしかして、この時代のオレのリング…？」

南は聞くが、ＸＡＮＸＵＳは答えなかった

だが、『ＸＡＮＸＵＳがオレに渡（投げる）すってことはオレのだよな…』と思い、リングを受け取った

「んじゃな」

南とクロームは、そのまま部屋を出た

「骸様…」

骸の情報が得られず、少ししょんぼりしたクローム

「大丈夫だって！　ヴァリアーに骸の情報が来る確率は低かったし…

…？　アイツ…誰だ…？」

南達の前に現れたのは、カエルの被り物を被った、いかにもやる気なさそうな人

「あ、来てたんですねー　南センパイに、師匠の仲間の…クローム髑髏さん」

「南センパイ…？　クロームのことも知ってるのか…？」

南のことはＶＡＲＩＡなら知っててもおかしくは無いが、クロームのことを知っている…

「あ、ミーはヴァリアーの人間なんで、警戒しないでくださーい

ミーの師匠、あのパイナップルなんですよねー」

『あのパイナップル』……

それは、骸のことだと南は一瞬で分かった

「ふーん…骸が弟子を作るとはね…

だからクロームのことも知ってたワケか…」

「骸様の…弟子…？」

「そーですよー

あ、もしかして、師匠の情報得るために来たんですかー？」

フランの問いに、クロームは頷く

「師匠は生きてますよー

まぁ今は動けないと思いますけど」

はぁ、とため息をつくフラン

フッ

クロームは安心したのか、力が抜けて倒れそうになった

それを南がギリギリで受け止めた

「どした…？　クローム」

「骸様…よかった…」

南は「そうだな」と言ってクロームを立たせる

「んじゃ、ミーはもう行きますんで」

フランは南達の横を通り過ぎ、行った

「んじゃ、あとはスクアーロとルッス……

もう一人には会わなくていいや」

１０年後のレヴィにも会う気は無い

１０年前から

『クロームのことをキモイ目で見たり、そういう感情持ったら殺す』

と言ってあるが、会わせたくもないし、会いたくもない

ルッスのいそうな場所……

「……キッチンだな…」

どうせご飯の支度をしている、と思い、キッチンに行く

案の定、いた

「ルッスー」

お互いに久しぶりの再会なのにも関わらず、いつも通りの声で呼ぶ

「!?　み…南!!」

幽霊でも見るような目で南を見た

だが、１０年前の姿なのに気付き、いつもの表情で近づいて来る

「南…大変なことになったわねぇ…
あなたまで賭けられて…」

「んー…でも気にしてないけどなー
オレは負ける気無いし」

ニッ、と笑う南

だが、すぐに嫌そうな表情に戻り、こう言った

「あのウザイ女が足を引っ張る可能性大だけどな…
オレではなく、ツナ達の修業を」

南は本気で嫌そうな顔になり、舌打ちをする

「ボスは…大丈夫だと思うよ…」

「クローム……
ま、そうだな！」

そして再び笑顔になる

「あらぁ…？　この娘(こ)……
あぁそうだわ！　よく南と一緒にいた娘ね！？」

ようやくクロームに気づいたルッス

そのダサいサングラスが邪魔してんじゃね？」

「気づくの遅…

「きぃぃ――――！！

ダサいって何よ！！」

ルッスの言葉を聞き、南は思った

『……ウルサい』と…

くるっ、と扉を向く南

そして、ルッスを背にして歩く

「ルッス、ウルサ過ぎ…
クローム行こうぜ」

「あ、うん…」

南に引き続き、クロームが部屋から出てくまでルッスはポカンとしていた

「１０年前から変わらないわね――――――！！！！」

ルッスの叫び声が廊下にまで響いた

その後スクアーロを探したが、いなかった

南は聞くのすら面倒だと言い、ベルとフランとクロームと一緒にロビーで、たむろっていることにした

一瞬、レヴィがロビーへの扉を開けたが、クロームの姿を見てレヴィ自身が瞬時に閉めた

よっぽど南に言われたんだろう…

もはやトラウマになっているらしい、とフランとベルが説明した

そんなこんなで、イタリアに着いてから数時間

南達が帰る時間

「んじゃ、このリングは持ってくな」

南は指に通したヴァリアーリングを見て言った

「つーか、この時代の南のだし」

「あ、そっか」

ベルに言われるまで忘れていた南

「ベル達もチョイスっての参加するのか？」

「しし♪　ボス次第じゃね？」

そう言いつつも、真7弔花と戦いたそうな表情のベル

「準備、完了致しました！」

パイロットが南に告げる

「南…私、先に乗ってるね…」

気を使ったのだろう

クロームは南に言い、すぐに乗った

「……んじゃな」

だが、南は特に何も言わずに飛行機に向かう

また、すぐ会えることを確信して

そして、二人は日本に帰った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８８　１０年後並盛中学校！

南とクロームが日本に着いたのは、翌日の午前１０時頃

パイロットが時差ボケしないように寝る時間のアドバイスをしてくれたので、疲労は残るものの、いつも通りの朝を迎えられた

思えば、メローネ基地の後にすぐヴァリアーアジトに行ったのだ

疲れは増加しているだろう

なので、今日は修業を無しにした

ツナ達は明日もオフらしい

南は正直明日もオフでも、どちらでもいい

とりあえず、今日はオフなことをクロームに伝えた

そしてオフになった今日…

「で、地上に行くと…」

南はボンゴレアジトと恭弥のアジト、ヴァリアーアジトとしか通じない電話で、ツナと話してた

『あ、うん…

もしよかったら、風間さんも一緒に行かない…？

もちろんクロームも…

あ、クロームの体調どうです…どう？』

「一気に言うな、一気に

クロームの体調は大丈夫

地上か……誰が行くんだ？」

南自身も地上に行きたいし、クロームも地上に行きたいはずだ

ウザイ人達がいなければ、一緒に行くか迷っている

『えっと…

獄寺君、山本、お兄さん、咲ちゃ「断る」

…わかりま…わかった…』

南の断る時の声がとても低く、殺気のこもった声をしてたのは気のせいではないだろう

「あ、でもオレ達も地上には行くつもりだから」

『じゃあ、後で会うかもです…だね』

ツナはつい敬語になりそうになるのを、急いで直す

「そうだな…

ま、いいや…んじゃあな」

カチャリ、と電話を切る

南は同じ部屋にいるクロームの方を向く

「地上…？」

電話を一部聞いていたので地上に行くことも聞いていた

「あぁ…クロームも行こうぜ？

黒曜ランド、とかさ…」

その言葉を聞き、花が咲いたような笑顔になるクローム

「うん！」

「んじゃ、またオレの私服貸すから…どうせなら、服も買う？」

もう未来で買い物はしないだろうが、修業時に着るのもあった方がいいだろう

制服だけだと、制服がボロボロになってしまうから

「でも…」

「あ、金なら気にしなくていいぜ！

この時代のオレが金持ちだったみたいで、財布にかなり入ってたし、オレの財布もあるし」

南がこの時代に来た時は財布も持っていたので、金には一切困っていない

南が言った時、クロームは心の中で思った

『１０年前と変わらず、お金持ちだったんだね…』と

「本当にいいの…？」

「あぁ！　んじゃ、すぐ行こうぜ♪」

そして、二人は支度を始めた

南は黒いダメージジーンズ、黒いドクロがプリントされた白いＴシャツ、その上に紫×黒のシャツ

クロームは七分丈のジーパン、ワンピースみたいに裾が長い白のロングTシャツ、茶色のあったかいモコモコのベスト

今日のクロームの服は、全てこの時代のクロームのタンスから出したものだ

運よく、ちょうどいいものが見つけられた

…そして、またもや周りから見たらカップルになってしまった

それも仕方ない

南は外見が１００％男だから

並盛商店街に通じる出口を使い、地上に出た

買い物は帰りがけにすることにし、まずは黒曜ランドに

１０年後の黒曜ランドは取り壊しの案内が出ていた

「取り壊し……」

つい、うつむいていまうクローム

無理もないだろう

仲間達と過ごした大切な場所だから

「クローム…

…オレも、取り壊しは嫌だけど…さ…？」

クロームはうつむいていた顔を上げ、南を見る

「過ごしてきた場所も大事だけど、仲間との繋がりは場所だけでは無いと思うんだ…」

そう、確かに場所も大切だ

大切な仲間と過ごした場所なのだから

だが、一番大切なのは仲間と過ごした場所ではなく、仲間のいる場所

「南……うん
ありがとう」

「って言ってるオレもまだ未練が残ってるんだけどな」

私も、と続いて言うクローム

「んじゃ、中行くか…」

南が門に手をかけた

「…私は、いい…」

「へ？」

「私は、いいや…

私が帰る場所は、１０年前の…ううん、骸様達のいる場所だから」

もちろん、南のいる場所も含まれている

南は門から手を離す

「…黒曜中は？」

南の問いに、頭をフルフル振って答える

「んじゃ、行きたい場所ある？」

「ううん…

あ、じゃあ、並中行きたい…」

「え……」

もちろん嫌では無い

だが、並中には必ずあの人物がいる……

そう、雲雀恭弥だ

会うのも嫌では無い

だが、並中生では無いクロームを連れて行って咬み殺されないだろうか？

その思いがあったのだ

「…だめ？」

「あ、いや、別にいいぜ！

（ここは１０年後だから、恭弥に言われてもムシしよ）」

結局恭弥のことも流れに任せ、並中に足を進める

「リング戦以来だね…」

クロームが並中の校門前で止まり、言った

「そーいや…リング戦の時に来てるんだよな…」

すっかり忘れていて、今日が初めてだと思っていた南

「うん…」

「じゃ、中行くか」

校門を通り、並中に入る

黒曜ランドは１０年前より老朽化が進み、ボロボロになっていたが、並中は多少汚れが増えているが変わらなかった

なんとなく、それが嬉しかった

「んじゃオレの教室…応接室…それと屋上行くか♪」

「うん！」

まずは、教室

机の数・配置・荷物以外に変わりは無かった

ちなみに、南の席には机が置かれて無かった

だが床に仕切りのようにビニールテープが貼られ、

『１０年前の、伝説の風紀特別委員・風間南様の席』

と仕切りの中に書かれていた

「…伝説…？」

クロームもそれに気づいた

「さぁ…？　オレもよく知らない…」

だが、色々と思い当たることはある

風紀委員長の恭弥に逆らったり、イタズラしたり、適当過ぎたり、

ある意味伝説になっていることがたくさん

「じゃあ…次の場所行く？」

教室にいても、何も無い

クロームは頷き、二人は応接室に向かう

応接室の内装は、１０年経ってどうなっているだろうか？

１０年前に自分用として配置したソファーは、まだあるだろうか？

そんな疑問があった南だったが、応接室を見た途端……

「……アイツって、バカ？」

つい、そう言ってしまった

『雲雀恭弥様の言葉により、この応接室は永久に風紀委員のものとする』

そんなことが書かれた紙が、ご丁寧に額に入っていた

もうわかったかもしれないがアイツとは、恭弥のことだ

「ここは…？」

クロームは応接室のことを知らない

「応接室

オレは並中の風紀委員で、ここが風紀委員が使う部屋…ってかんじ？」

「応接室……」

クロームは部屋の奥に行き、窓からグラウンドを眺める

カラカラ、と窓を開ける

「ん…涼しい…」

程よい風が通り抜ける

「だな…

屋上の方が快適だと思うし、もう屋上行かね？」

「うん…」

窓を閉め、屋上への階段を登る

階段を登り終えると、屋上への扉が開いていることに気づいた

そして、何だか騒がしい

「誰か…いんのか？」

屋上に足を踏み入れながら言ってみた

「か…風間さん！　は！！　イーピン！！」

「南！」

そこにいたのは、ツナや隼人達

……もちろん、咲や京子、ハルもいる

ちなみに、ツナがとっさにイーピンの目を塞いだので爆発の心配は無い

「はぁ…オマエらか…

あ、クローム入っていいぜ」

ドアの前で止まっていたクロームを促(うなが)すと、南の隣に来た

「クロームも!?　って、風間さんがいるから変でもないか…」

南はハルのことを見、軽く睨みつける

「で、どーして風紀委員の許可無しに並中に入ってんだよ」

「は、はひ!!?」

前のことがあってか、ハルは南に怯えている

「並中に他校の者が入るには、風紀委員の許可が必要だ
これは１０年後でも変わっていないみたいだぜ?」

先ほど行った応接室にある書類に書いてあったのだ

「は、はひ…すみませ「謝ることなんて無いよっ！」
咲ちゃん…！？」

ハルの言葉を遮ったのは、咲

「クロームさんだって、入ってるじゃない」

「バカかテメェ…

風紀委員…つまり、オレの許可があるからいいんだよ」

「それは１０年前でしょう？」

「残念だったな、オレの風紀委員としての権利は１０年後も健在らしいぜ？」

これも、応接室にあった書類情報

これを聞き、咲は何も言わなくなった

「クロームさん…だよね？」

突然京子が声を出した

「……」

クロームは何も答えない

「？　クロームさん？」

「あ、京子ちゃん…
クロームで合ってるよ」

クロームが答えないのを見、ツナが言った

「私、笹川京子っていうの　よろしくね」

「ハルは三浦ハルといいます♪」

「あ…私は…山下咲…

ねぇ、風間さんなんかじゃなく、私達と一緒にいない？」

京子とハルの言葉を聞いている時は南の後ろに隠れるようにしていたクロームだったが…

咲の言葉を聞いた途端、南と共に冷たい表情になった

「風間さんはヒドいことばかり言うでしょ？
だから……私達が守ってあげるよ
いいよね、京子ちゃん、ハルちゃん」

「うん！　もちろん♪」

「ハルもあのデストロイな人怖いですし…」

さらに咲は話し続けた

南はどうでもよくなり欠伸をし、クロームは下を向いた

「ほら、こっちに「南は…」

？」

咲の言葉をクロームが遮る

「南は…私の大切な親友…

南のことを知らないのに、そんなこと言わないで…！」

クロームは敵を見るような目で言う

その目に、咲は怯(ひる)んでしまった

「クローム…」

南はクロームがそんなことを言うと思ってなかったので、意外そうな目でクロームを見た

「南…行こ…」

今度は逆にクロームが南を促し、二人は屋上から消えた

「…また、風間さん……！！」

咲は南とクロームが出て行った扉を見つめ、声を押し殺すように言った

「はひー、クロームさん…あの人と親友だったんですね…」

「不思議な子だね…」

クロームは南のアジトで生活をし、ご飯も南と共に食べているので関わりが無かった

さらにこの出来事があったことが決定打になり、クロームは咲・京子・ハルと仲良くなることは無かった

ちなみに南とクロームは、大量の買い物をして帰った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８８　１０年後並盛中学校！（後書き）

原作でクロームが京子達と仲良くなってましたが、この話で無くなりました。
…まぁ、元々そうするつもりでしたが…。
クロームのボンゴレ匣の修業は、南とやる予定です。
あ、南のボンゴレ匣の修業も同時進行してきますけど。
そして、この話について私の感想。
…咲、ウザイ。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８９　機動力ＵＰ！

アジトに戻ってからクロームも南も、買った服を着た

南はかなりラフな服装

クロームもラフだが、やはりどこか女の子らしい私服っぽさがある

そして、夕食後にリボーンに呼ばれてボンゴレアジトに行った

行くことにしたのも、もちろん何となくだ

「んでー、何の用？」

南とクロームはトレーニングルームに来ていた

そこには、バイクがいくつかある

「お、来たか

ジャンニーニ、風間のはあるか？」

「えっと…どのサイズがいいでしょうか？」

「とりあえず…いや、風間はもう乗れるから大型でいいぞ」

リボーンの言葉を聞き、ジャンニーニはあるバイクを取ってきた

「風間さん、こちらがあなたのバイクになります」

「…バイク？」

持ってきたバイクは、全身が黒光りしていた

「はい…機動力アップの為に、チョイスの時はバイクに乗って移動するんですよ」

「機動力…ねぇ…

普通にオレの匣のスケボーでいいじゃん

あ、炎探知されるからバイクか？」

南の言葉に返事をしたのは、リボーン

「そうだぞ

炎探知されないことが、第一だからな」

「はぁ…メンド…」

心底めんどくさいようにため息をつき、ジャンニーニが持ってきたバイクにまたがる

ヴォオォォン…

「「「「「……」」」」」

この部屋にいた一同は、南を見て声が出なくなった

普通に乗っている

ただそれだけだが、それが凄かった

そして勢いをつけ、壁走行をする

そして更に言葉を失う一同

キキィィィィ！！！

床に戻り、止まった

「んで、他に用件は？」

もう問題はないだろ、と言うように南は言う

「風間ができても、クロームができなきゃダメだろ？」

「え…私も…？」

まさか自分もバイクに乗るとは思っていなかったらしい

「クロームには強制はしねぇ
乗りたかったらにしろ」

「え…じゃあ、いい…」

そう言いつつも、バイクに乗る、というのがどんなものなのか興味津々のクローム

「…クローム…オレの後ろに乗る？」

「え…？」

「バイクに乗るのがどんな感じなのか気になるんだろ？」

もちろん、南にはお見通しだった

「……うん…」

「んじゃ、後ろ乗れよ」

南はクロームにヘルメットを投げる

ちなみに、南はヘルメットをしていない

危険だが、南はつける気が全く無い

クロームに渡したヘルメットは、これまた真っ黒

それを付け、南の後ろに乗る

「んじゃ、しっかり掴まってろよ」

ヴゥゥン…

一人で乗っていたときほどではないが、それでも速い

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫…」

クロームは少し嬉しそうに返事をする

「風間、ツナ達もここを使うからな」

南は一度バイクを止め、誰がいるのか見る

ツナ、隼人、山本、笹川、バジル……それと、咲

バジルは今来たばかりのようで、ジャンニーニから説明を受けている

「……あの女がいなければ許せるんだけどなー」

南は小さな声で言った

後ろにいたクロームにその言葉が聞こえ、クロームも少し嫌そうな表情をする

大事な親友のことを酷く言われたのだ

リング戦のことはどうとも思っていなかったが、これぱかりはクロームでも許せない

「南…」

「ん？　どした、クローム？」

「どうするの…？」

うーん、と数秒考える南

「ツナー、オレとクローム、アジトに戻ってもいいかー？」

「え!?　あ、う、うん…」

少し残念そうな表情のツナ

「？　どうかしたか？」

南はツナに聞く

「え？　あ、何でも…」

「風間、オレらにバイクの乗り方教えてくれよ!」

突然の山本の言葉

「ん？　別にいいぜ？」

山本・笹川（兄）ともツナと仲良くなるのと同時に（まぁまぁ）仲良くなったので、簡単に受け入れる

「あ、でも一時間だけな

それ以上はメンドクサイ…」

ふあぁ、と欠伸をして「眠いしな」と付け加える

そして一時間後――――――――

「な…なんとか乗れた…」

ツナがベンチに倒れながら言った

「か…風間さん、スパルタ過ぎ…」

ツナの言う通り、南はかなりスパルタだった

だが、そのお蔭で転ばずに乗れるようになった

ちなみに山本が南から教わったのは２０分だけで、今はウィリーしている

笹川は直進してばかりだったが、そのせいで転ぶと南からの容赦無いパンチが飛んできていた

なので今はところどころ殴られて赤くなった顔で乗っている

隼人とバジルはすぐにバイクを乗りこなし、今は大型バイクに乗っている

つまり、今南が指導しているのはツナだけ

咲には何も教える気も無い

一度咲が自分も頼もうかとしてたが、言葉を発した途端に南に断られた

再現すると…

『あの『黙れ』
…』

まぁ、こんな感じだ

その時咲にはクロームからも少し痛い視線をぶつけられていた

咲は運動神経が普通より少し下なので、今は山本に教えてもらっているが、アバウトすぎる説明を理解できずに困っている

「ん、もう一時間か…

ツナ！　オレはもう帰るけど、明日の朝このコースを一回も転ばずに走れるかテストするからな！！」

「無理――――――！！！

（やっぱこの人スパルタだ――――――！！！）」

「んじゃ、また明日な」

南はツナの言葉を聞かずに、アジトに戻った

クロームは既に戻っており、今はお風呂を出てまったりしているだろう

「オレの意見、聞いてくれないしー！！！」

ツナの叫びが廊下に響いた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９０　霧の思い！

次の日の朝

南はツナに言った通りテストをするため、朝早くからボンゴレアジトにいた

時刻は、６時

本来なら寝ている時間

「んじゃ、開始だ

速度は常に最低でも２５キロ以上」

「に…２５ー！！？」

「ま、頑張れー」

南が棒読みなのに内心ツッコミながら、ツナはバイクにまたがる

ヴォォン…

「コースは超簡単だからな」

「う…

（風間さんにとっては超簡単かもしんないけど、オレにとっては難しい方だよ!!）」

「心の中で文句言ってる暇あったら早くスタートしろ」

「（バ…バレてる!!?）

ご、ごめん!!」

そして、スタートした

1分後

「お…わった…」

昨日と同じくヘロヘロなツナ

「ん、どーにか合格だな」

南が言ったとき

「10代目ー!!!」

隼人達…昨日いたメンバーが来た

もちろん咲も例外ではない

「あ、獄寺君…」

「はよ…」

南は一応あいさつをする

「テストどうでしたか？」

「あ、うん…一応合格にしてもらえたよ…」

そして皆はおめでとう、と告げる

「ツナ、オレはもう戻るけど、バイクの練習サボんなよ！！」

「あ、うん！　ありがとう！！」

ツナからのお礼の言葉をもらい、南はアジトに戻った

その少し前、アジトのトレーニングルームの一つにはクロームがいた

「…早く、南の力になれるようにならなくちゃ…」

クロームは匣を握り締める

そして、目をつぶって思い出す…

南に助けてもらってきたことを

凪だったときも、初めての友達になってくれた…

そのお蔭で、ユニ、アリアとも仲良くなれた…

リング争奪戦の風戦の時も、咲の攻撃から守ってくれた…

未来に来てからも、何度も何度も…

そして、目を開く

「…今度は…私が南の力になるんだ…！」

そう言った時…

ウィィン…

「あ…南…」

南が来た

「ボスとの約束、終わったの？」

「あぁ　んじゃ、オレらは今日どうすっかー…

ツナ達は休み…まぁバイクの練習するらしいけど…」

そう言いながら、近くの椅子に座る

「ねぇ、南…」

「ん？」

「…私、強くなりたい…」

クロームの言葉に、南は一瞬目を見開いたが、すぐに優しく微笑んだ

「んじゃ、修業すっか！」

椅子から立ち上がり、ポーチに手を伸ばす

「うん！」

そして南が取り出したのは、ボンゴレリング、スードの匣、変換匣

「？　その匣は？」

クロームは変換匣を知らない

「これは変換匣…

炎の属性を変えることができるんだよ

効率は悪いが、な…」

ドシュッ

スードの匣に炎を注入する

「グルル♪」

スードは出てきてすぐにクロームと南に甘えてきた

南はもう一つの匣に炎を注入する

そして、出てきた炎をスードに向けて放つ

炎の属性は、晴

スードを成長させるのだ

ちなみにこの方法は、隼人から聞いた

「グルルルル……」

瓜が成長したときと同じく、スードの声も威圧感のある、低い声になった

「…スード？」

クロームはスードが急成長したことに驚いている

「あ…晴の活性で成長したの？」

「おっ正解♪

まずはスードとのウォーミングアップしようと思ってな

知ってると思うけどスードはチーター…

目でなんか追えないからぴったりなんだよ」

南の言葉を聞き、ごくりと唾を飲み込む

「んじゃ、行くぜ！」

スードと南が戦う

南が駆け出した直後、スードは南の視界から姿を消す

しかしスードの姿がどこにも見つからない

高速で移動しているのだ

南は止まり、じっと動かない

「…南…？」

周りを見渡しもせず、ただじっと止まっている

いや、何もしていなくは無い

リングの炎を薄く、広く放出しているのだ

この時代の恭弥がやっていたこと

「……！！！

そこだ！」

南は後ろによける

すると、右から何かの影が来た

ひゅっ

南はその影に襲い掛かる

ドタッ

南がその影…スードの上に勢いをつけて乗り、バランスが崩れたスードは床に倒れる

「ん、オレの勝ち♪」

南はそう言って、スードの上から降りた

「グルル……」

スードは負けたのが悔しかったようで、すこし悲しそうに鳴く

「ま、そう落胆するなよ

オレとスードは、まず経験からして違う

それにスードは今始めてマトモに戦いをしたんだからさ」

南に言われ、少し元気になったスード

「んじゃ、修業開始するぜ！！」

南とクローム、それにスードはツナ達よりも一日早く修業を開始した

Straordinariamente14　10年後風の日常！

まだミルフィオーレができていなかった頃の話……

南はいつも通りの日常を過ごしていた

南の日常は忙しい

なぜなら、しょっちゅうイタリアに行くからだ

ヴァリアー、ジッリョネロ

この二箇所に一ヶ月に一回は行く

それも、毎回2、3日滞在する

日本にいるのは大体3週間だけ

一応ボンゴレ10代目の守護者だが、南は何にも仕事をしていない

ツナも南の性格は知っているので、特別何かあったとき以外は頼んだりしない

10年後でも、南はツナを仲間としていた

咲のことはより一層嫌っていたが、ボンゴレ守護者に対しては普通になっていた

でも皆忙しいので、あまり会ったりしないが

この日、南は日本にいた

起床時間は9時

それが南の日常

南のアジトでは、南の仲間がよく出入りする

クローム、恭弥、隼人、骸、ＶＡＲＩＡ（一部除く）、ランボ、ツナ、犬、千種…

この人達はよく来る

一人一人に部屋があり、泊まることも多い

ＶＡＲＩＡ、黒曜は個室と別に広い部屋がある

それでもアジトの部屋は埋まらない

掃除などは全てロボット任せなので、南本人も把握していない

南は朝起きると、のんびりと朝食を取る

誰かが来ていれば、その人の分も作る

それからは決まったことは無い

この日は、ボンゴレアジトに向かった

ランボの修業と、ジャンニーニに発明を頼まれたからだ

ジャンニーニにはよく発明を頼まれる

実際は手伝いを頼まれているのだが、南が一人で終わらせてしまう

のだ

まずは、ランボの修業

南がトレーニングルームに着くと、既にランボがいた

「あ、おはようございます！　師匠」

「んー」

南はランボの挨拶をテキトーに返す

「で、今日は何を…？」

「今日は…そうだな…
基礎体力を上げて、後は雷コイン…かな？」

南は倉庫のような場所からコーンをいくつか持ってきて、床に並べる

ランボは嫌そうな表情

「はぁ…あれ嫌いです…
キツイから…」

「文句言うな
んじゃ始めるぜ」

並べられたコーンは２０個ほどで、不規則な並びをしている

そのコーンの先端をタッチしたり、避けたりしながら走る

その途中に南からの攻撃をかわしたり、跳ね返したりする

そんな修業だ

ちなみに、これを休まず最低３０分

時間は南の気分によって変わる

今まで最高は２時間３０分

今日は４５分だった

「づ…づがれだ…」

ランボはそのまま床に倒れこむ

「何勝手に休んでんだ
次行くぜ！」

南は雷コインの匣を開けた

ランボは急いで立ち上がる

だが、フラフラだ

南はランボに構わずにコインを弾く

キィィィン…

コインは真っ直ぐランボに向かっていく

「避ける、避ける、避ける、避ける、避ける……」

ランボは呟きながらコインを見つめる

「……無理！」

ボゴッ

ランボの右頬にコインが直撃した

どたっ

ランボはコインの勢いに負け、床に倒れる

「何が無理だ！　避けるだけなんだから成功しろ！
じゃないとキャッチするようにさせるぜ！」

「キャッチ！！？　無理ですよ！　無理無理！！！」

ランボは起き上がり、頭を大きく横に振る

「じゃあ次成功させなかったら、もう修業つけないからな」

「え……え――――――――!!!?　それは困ります!!」

「なら成功させろ

んじゃ、行くぜ!」

南はコインを広い、はじく

ビュウゥゥ…

「避ける……今だ!」

ランボは大きく右に避けた

だが、そのすぐ右をコインが通過した

……つまり、南がワザとランボの右側にコインをはじいたのだ

それに気づかず、ランボは自ら接近した

まぁ、ギリギリでかわせたが…

南の表情は呆れ、ランボは冷や汗を流している

「……バカかオマエは！！！！！」

「ごごごごごごごめんなさい！！！！」

ランボが綺麗な土下座をする

「はぁー……避けれたからいいけどよ…
わざわざ近づくって命取りだぜ？」

「う……」

南はもう一度大きくため息をついた

「……オマエさ……
どうして強くなりたいんだ？」

「え…？」

ランボが顔を上げる

「言えないか？　それとも理由は無いか？」

「……」

ランボは再び顔を下げ、南から顔を背ける

「戦うのが好きで強くなる奴もいる　恭弥がそうだからな
オレも多少はそうだが、他に理由がある
……何だか分かるか？」

「……クロームさんとか……仲間を守るため…？」

ランボは自信無いような声で言う

「…正解だ…
ツナも、仲間を守るために強くなり、今に至るって感じだしな」

「……オレは…」

ランボが顔を少し上げて言う

「…オレが戦う…強くなりたい理由は分からないけど…

多分師匠や、ボスと一緒だと思う…」

南はランボの言葉に「そうだな」と言った

「でも、オマエに守られるほど弱い奴はいないと思うぜ?」

「い…いいんですよ!　…いつか守りたい人より強くなるんで…」

ランボがそう言ったとき、トレーニングルームの扉が開いた

「あ…ボス…」

「よ、ツナ」

そう、ボンゴレボス１０代目、沢田綱吉だ

「ボス、どうかしたんですか？」

「あぁ、うん…

風間さん、ちょっと来てくれる？」

「…分かった…

ランボ、今日の修業は終わりだ　また明日同じのやるからな」

南の言葉を聞き、固まるランボ

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

そのまま泣き出したランボ

「んで、オレに何の用だ？」

南はツナの部屋に入り、二人がけのソファーに座る

「あぁ、うん…最近並盛で騒ぎになっている原因が分かって、それを風間さんに頼めないかなって…」

「その原因…ヤクザか何かか？」

それを聞き、一瞬言葉が詰まるツナ

「うん、そうだよ
頼んでもいい？」

「…潰す系の仕事なら引き受けるって言ったしな…
ん、行って来るぜ」

それを聞き、ホッとため息をつく

そして南は１５分もしない内に帰ってきた

騒ぎを起こしているヤクザだけでなく、そのヤクザと関わりが深かったヤクザまで潰したらしい

こうして並盛の平和があるマフィアによって守られ続けたとか、そ

うでないとか…

Ｓｔｒａｏｒｄｉｎａｒｉａｍｅｎｔｅ１４　１０年後風の日常！（後書き）

まぁ、１０年後の南も自由人だった、という話です。
次の番外編…何書こうか…。
何か読みたい話があれば、教えてください…。
ネタ切れで…。
一人いくつでもいいです♪
気軽に感想に書いてくださって構いませんので♪
もちろん、期限など無いので、いつまでも募集してます！
それでは♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９１　それぞれの修業！

その翌日

南とクロームは買った服でボンゴレアジトに来ていた

ツナ達が修業開始するので、一応いることにしたのだ

来ているのは、ツナ、隼人、山本、笹川、ランボ、ディーノ、その部下数名、リボーン、バジル、リボーン、咲

…他に誰かがいるのに南は気づいていた

バイクの陰にカモフラージュをして隠れている、京子とハルだ

南はリボーンに言おうかとも思ったが、面倒くさいのでやめた

そしてディーノが修業について話す

「よしっ　そろったな

今日から本格的な匣兵器の修業だが、リボーンの一番の教え子であるこのオレが全体を仕切る家庭教師をすることになった　よろしくな」

そうディーノが言うが、南は眠たそうに欠伸をする

心の奥底からどうでもいいような表情をしている

南は、ディーノに何と言われようが自由に修業をするつもりなのだ

「ちなみに今回オレはそのさらに上の役職『家庭教師の精』だからな」

リボーンの言葉にツナがツッコミを入れる

「ディーノがヘボい時はオレが制裁をくだすから安心しろ」

「いでで　やめろってリボッブッ!!

ってことで始めるが…その前にクローム、それと風間　意思確認だ」

ディーノの真面目な声に、少し睨む南

「まずクローム、お前はボンゴレ守護者であると同時に骸の一味でもある

ミルフィオーレとも戦いには味方として数えていいのか?」

クロームは少し考え、強く頷く

「私…もっとちゃんとして…強い人になりたい…

それが…過去に帰ることにつながると思うから…」

それが、クロームの答え

「よし、頼んだぜ

次は風間南…お前は…もう色々に属しすぎてて分からないが、どうだ?」

色々…ボンゴレ風の守護者（仮）、ヴァリアー幹部（仮）、ミルフィオーレ真7弔花（仮）、ジッリョネロファミリー（仮）、骸の一味（仮）…

全てが仮だ

「オレは全て仮で入っているだけだ
ま、味方だと思うなら味方だろうし、敵だと思うなら敵なんじゃね？」

随分と曖昧な答えだが、つまり敵ではない、ということだ

「ハァ…１０年前からテキトーな奴なんだな…
それなら味方として数えるぜ、いいな？」

「んー」

ディーノの言葉に、南はまたもやテキトーに答える

「それとランボにも本格的な修業をしてもらう　白蘭を倒すには守護者全員の力が必要だ」

そう言われているランボ本人は、ゴロゴロとペンを持ちながら遊んでいた

「オレはこの時代のツナに聞いて、お前達のボンゴレ匣のことを多少は知っている

そこから考えて、それぞれに違う修業をしてもらうつもりだ

ちなみに雲雀恭弥はオレとの修業をもう開始させている」

あのバトルマニアな恭弥が修業(戦い)をまだしていないとは考えられないので、なぜか納得してしまう南

「じゃあ沢田綱吉！　お前から修業内容を言ってくぞ」

「あ…はい！」

少し楽しみに返事をする

だが、返された言葉は意外な答えだった

「お前は正しく開匣できるまで一人だ」

正しくは一人では無い

匣兵器と一緒だ

「次に獄寺隼人

お前は匣初心者である笹川了平とランボの面倒をみてやってくれ」

「なにっ！？」

「あーぁ…隼人ドンマーイ♪」

南は笑いながら言う

「南っ！　お前は手伝いやがれ！！」

「嫌だね　オレは一人で修業するしー♪

ま、教えること以外なら考えるけど」

再び隼人をバカにするように笑う

隼人はイラつきが最大級になったが、ある者の一言で静まった

「すごいね獄寺君、もう教える立場なんて」

「えっ!?」

ある者とはもちろん、隼人が尊敬し、忠誠を誓った…沢田綱吉

「いえいえいえ、もったいないお言葉!!　自分なんてまだまだピヨッ子です!!

ですがお役に立てるのなら力の限りやらせていただきます!!」

一同が隼人のピヨッ子発言を謎に思った

そして笹川とランボが文句を言うが、隼人の勘違い発言で次に進む

「次にクローム髑髏

お前は匣兵器強化のためにも半分の時間をアルコバレーノ、マー

モンの残した幻覚強化プログラムで修業し、残りの時間を格闘能力アップに使うんだ…

風間、お前と一緒でいいな？」

「ん？　クロームは既にオレと修業してるぜ？」

「…だと思ったよ…

ま、これからも頼んだぜ」

お前に言われなくてもそのつもりだしー、と小さく呟く

「んで、風間…は、オレが何を言っても自分の好きなように修業するな…」

「お！　わかってるじゃないかー♪

オレに何言っても無駄だからなー」

その直後、何人かのため息が聞こえた

隼人、ディーノ、ツナだ

リボーンは予想していたことだったようで、いつものニヒルな笑みを浮かべている

「それで…山下咲」

「はっ…はいっっ！！！」

背筋をピーンと伸ばす

「…まず、確認する…

お前、炎は出せるか？」

「！　……」

咲はうつむき、返事をしない

「…わかった、じゃあまずは炎を出せるようになれ

……必要なのは、本物の覚悟だ」

殺気が混じっている訳ではないが、その言葉からは威圧感が感じられた

「……はい…」

咲はうつむいたまま、返事をした

「そして山本武」

「うす！

待ってたぜ!!　ディーノさん！　何やんだ？」

幻騎士にボロ負けしたが、明るい、いつも通りの山本

「お前はパスだ　待機」

「へっ？」

まさかの一人だけ待機

つまり、待機期間は自主練しかできない

ディーノは山本に何も言わないのではなく、言えないらしい

何でも、ヘタなこと教えると誰かにぶっ殺されるらしい

その誰かとは、山本の一番の理解者

『うわー、絶対にあのウルサい、カスクアーロだ…』

南は心の中でため息をつき、山本に憐れみの視線を送った

そして、解散

修業場は各自で決める

とりあえず、南とクロームは南のアジトでやることにした

だが、今日だけはボンゴレアジトで

理由は、ただ単に南がアジトまで帰るのを面倒くさがっただけ

…ここまで来ても、南の面倒くさいスキルは発動していた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９２　ボイコット開始！

南が修業を開始し、今はもう夜

修業に一区切りつき、ご飯を作ってから風呂に入ったりする時間

今日の修業場所は、ボンゴレアジトのトレーニングルームだった

ツナと山本が一緒だ

…最初は咲も一緒だったが、南からの殺気に耐えられずに出て行った

1時間くらい前にツナと山本は修業を終えた

そして今、南とクロームも終え、とりあえずツナに言ってから南のアジトに戻ることにした

だが、肝心のツナが見当たらない

何も言わずに帰ろうかと思ったが、明日からは南のアジトから出ないで篭(こも)りっきりになるので会っておくことにした

「…ここは…　いた！　ツナ！！」

曲がり角の先に、ツナがいた

他にも変な看板（？）を持った京子とハル、咲、ビアンキ、隼人、笹川、山本、ランボ

二人が持った看板（？）には『秘密反対！！』『情報の開示を』とか書かれている

「あ…風間さん…」

ツナが白目のまま南に目を向ける

「…この様子…あぁ、女どもがボイコットでもしたのか…？」

「あ、うん…」

南はツナから視線をずらし、対立している京子たちを見る

南に見られた京子、ハル、咲はビク、と反応する

南が怖いのだ

「…オレは別に教えようが何でもいいが…
お前らは知って何をしたいんだよ」

南はどうでもいいかのように欠伸をしながら聞く

「…私達も、戦いたいんです！」

「そうです！　戦いたいんです！！」

京子の言葉に、ハルが反応する

「…『戦いたい』…？

…ハッキリ言うが、お前らが戦っても足を引っ張るだけだから辞めろ

むしろオレが間違ってお前らを殺すかもな」

南は笑いながら言う

「…でも、今からでも修業すれば…」

咲が口をはさむ

「おいおい、今一番足を引っ張ってる…一番お荷物になっているお前がそれを言うのかよ

オレにとってはお前も“敵”だからな…」

最後の言葉に殺気を交えつつ、南は言い放つ

この殺気に三人は怯え、肩を小刻みに揺らす

「ハァ…やっぱりダメだ

この程度の殺気でビビるのは一般人だけだぜ？

見てみろ、こっちにいる者とビアンキは何とも無い顔してんだろ？」

ツナ、隼人、クローム、笹川、山本、（ランボ、）ビアンキを見渡す

皆、南の言う通り何てこと無い表情をしている

もちろん、南の放つ殺気には気づいているが

「ま、それでもお前らが引かないのなら、オレは教える気はない
あー、やっぱ元々無いかなー
だってオレ、お前らのこと…」

三人を見る目を更に鋭くする南

「嫌いだし」

この一言が、三人の心に響く

直接『嫌いだ』と言われて悲しくならない者は、そうそういない

「それで、京子、ハル…

どうするの？」

ビアンキが聞く

「…私は、それでも知りたい…！！」

「ハルもです…秘密は、無くしたいです…」

少し低い声のまま、ビアンキの問に答える

「ちなみに、私達も京子達につくわ」

「修業しっかりね！」

とても気持ち悪い女装をしたリボーン、ジャンニーニ、フゥ太が言った

いつからいたのかは、南しか知らない（気配を感じたから）

それから少し経ち

南、クローム、ツナ、隼人、笹川、山本、ランボが一つの部屋に集まっていた

南が来たのは、興味本位だ

「一応聞くぜ　どうするんだ？　ツナ」

「…うん…

やっぱり今の本当の状況やこれからの戦いのことは話せないよ…

京子ちゃん達をあんな壮絶な戦いに巻きこめない…」

山本、ツナ、笹川、隼人が円を描くように座り、ランボは暇なのかフラフラしている

クロームはランボと軽く遊んでいて、南はボケーっとしている

ツナ達の話を右から左に聞き流し、クローム達のこともただ目に映
しているだけ

何も考えず、ただいるだけ

「……る……風間さん、聞いてる!!?」

「うぉう!?」

突然ツナに声をかけられ、変な返事をする南

「オレ達、やっぱり京子ちゃんたちには話さない…
風間さんも話さないでくれる…?」

「ん、やっぱりな！
オレは話さないから、安心しろよ！」

ありがとう、と返す

「んじゃ、クローム！　そろそろ帰るか！」

「うん…！　またね…」

クロームはランボに小さく手を振る

「ばーいぶぅー」

ランボの返事に南は少しイラっときたが、どうにか抑える

「んじゃ、何か困ったことあれば言えよ

内容次第で手ェ貸してやるから」

「あ…うん！　ありがとう！！」

ツナからのお礼を聞きながら、部屋から出て行った

それから、３０分後…

「……うん、オレはいつかこうなるって予想してたけどな…？

それでも酷すぎるよな…？」

南のアジトの中には、南と南の前に土下座している先ほどのメンバー

「…ごめん…」

「みじん切り…コツなんかいらねぇんだよ…」

「頼む!!　極限に腹ペコなのだ!!!」

「刺身があればなー」

隼人の土下座が少し高いのは気のせいではないだろう

「……じゃ皆、一回気絶しろ♪」

南のニッコリ笑った表情に冷や汗を流しまくる一同

「…冗談だっつの…

料理は全面的、洗濯はやり方だけ教えるよ…ハァァ…」

今までにないくらい大きなため息をつく

南の表情とは逆に、ツナ達は表情が明るくなっていく

「あ…ありがとう!!」

「礼はいいから早く立てよ…

バカみてぇ…」

「ボス…？」

クロームがやってきた

肩にタオルがかかっていることから、今までお風呂に入っていたことが分かる

「あ…南の言った通りになったの…？」

「あぁ…今土下座しながら頼んできた…

んで、お前らだけでどこまで出来た？」

南の問に、皆が顔をそらす

「…洗濯は洗剤一箱入れて、料理は…火事の危険が…」

「…わかった、やっぱり料理は全てやるよ…

洗濯は…さっき言った通り、方法だけ教える
とりあえず…晩飯は？」

南が問いかけた途端、いくつかの腹の虫がなった

「…ついて来い」

南はキッチンに向かい、他の者には見えないスピードで料理を作った
せめて明日までは自力でやるだろうと思っていたので、明後日用の
食材を使って…

一口食べてからは…

ツナ・山本・笹川は意外そうな表情をし、

ランボは『京子とハルのよりおいしいもんね！』と叫んだ

小さな声で『確かに…』と言う声聞こえた

隼人は食べ慣れている者の表情をしながら食べた

…まぁ実際、隼人は食べ慣れているのだが…

こうして京子たちのボイコットは、南によって小さな被害で済んでしまった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９３　風の家事講座！

ボイコットが始まった次の日

南のアジトでは朝７時にも関わらず騒がしかった

「アホ！！　火力弱めろ！！」

「や…やめろ南！！　うわあぁぁぁゲフッ！！」

男の叫び声と、低い殴る音が廊下に響く

ウィィン…

その音がする扉を開け、入っていく少女が一人

「お、クロームおはよ♪」

「よ…よぉ…」

「あ、おはよう…クローム…」

「よっす…」

「極限…」

「ランボさん…もー無理…」

一人を除いて、生気の感じられない返事が聞こえる

「…南…どうしたの…？」

「んー？　料理を教えてたんだ！」

机の上には、クロームの分として作られてある朝ごはんが綺麗に盛り付けられている

新鮮な野菜が使われた、サンドウィッチ

もちろん、南が作った

「料理を…教えてた？」

「あぁ　今まで家事してきた奴らがボイコットしただろ？だから一人で出来るように教えてたんだ♪」

南は紅茶を淹れながら話す

そして、牛乳等を入れてクロームに渡す

そして、もう一つ…自分の分として淹れる

「ありがと…

でも…皆ボロボロだよ…？」

クロームの言った通り、皆ボロボロだ

「もう修業したの？」

「そ、そういうわけじゃないんだけど…

まぁある意味修業、かな…」

ツナがハハハ、と笑いながら話す

「（風間さんのスパルタっぷりは変わらないんだよなぁ…
前にバイクの乗り方教えてもらった時も…すぐ殴られるから…
あ…それと精神的ダメージも与えてくるんだった…）
み、みんな…大丈夫…？」

「な…なんとか平気っす…」

「いつつつ…でも、流石風間だよな」

「しかし極限厳しいのだぁ！！」

「ランボさんは…もー疲れたもんね…」

「おら、さっさと次行くぞ！！
次は今から自分が食べる物を作れ！」

南の言葉に、顔を青ざめていく一同

クロームは机に座りながら、ゆっくりとサンドウィッチを食べている

「で…何を作るんだ…？」

隼人が南に聞く

南は数秒考え、口を開く

「サンドウィッチであれば何でもいい　ただし1時間以内に作れよ
ツナはランボ（アホ牛）の分も」

「な、なんでオレー！？」

「ツナー！　早く作らんかー！！！　ランボさんはお腹すいたぞー！」

ツナの言葉を無視し、南は冷蔵庫から食材を大量に取り出す

「今出した物は、一般的はサンドウィッチを作るのに必要な食材だ
もちろん、ここに無い物が欲しければ用意してやる
どの調理器具を使うかも全て自分で考えて作れよ」

皆は南が出した食材の前に群がり、これは何だ、それはどーだ、とか言っている

「んじゃ、開始♪」

南が開始の声をかけ、皆が思い思いの食材を取る

隼人はレタス、トマト等の野菜

ツナは調理済の肉、レタス

山本は卵

笹川はツナ缶

マヨネーズとパンは皆が持って行った

そして、隼人は見事な野菜のサンドウィッチを作り上げた

南から合格を貰い、一番早く朝食を取る

一番と言っても、南とクロームは既に食べ終わっていたが…

その次は、ツナ

ただ肉を好みの大きさに切って、パンに挟んだだけだったが、南から合格を貰えた

そして、笹川と山本が同時に持ってきた

二人とも合格を貰い、皆が朝食を食べ終わった

そして修業に入るかと思いきや、洗濯の仕方を脅されながら教えられ、無理やり脳に叩き込んだ

「んじゃ、これでどうにか家事が出来るようになったか！」

南は元気そうに言うが、他の者はボロボロ

クロームは修業に行っており、ここにはいない

「あ…ありがとう、風間さん…」

ツナに続き、皆が南にお礼の言葉を述べる

「いいって！　んじゃ、修業だな♪

オレはもう行くから、昼飯の時にまたな！」

南は駆け足でクロームともとに行った

残された者達は、ゆっくりとボンゴレアジトに向かった

その後の良かった事と言えば、この後の食事を全て南が作ってくれたことだ

その日の晩……

ボンゴレアジトの女湯には、京子、ハル、イーピン、ビアンキが入っていた

「お兄ちゃん達昨日は風間さんに作ってもらったらしいけど…
大丈夫なのかな…」

「ツナさん達が本当のことさえ教えてくれれば、とんでいってごはん作るんですけど…

それにしても、風間さんという人はどんな人なんですか？

前見た感じではツナさん達にご飯作るような性格じゃなさそうでしたけど…」

ハルの言葉を聞き、ビアンキが口を開く

「南は…自分が仲間だと決めた人を死んでも守り抜く、強く優しい人よ…

京子もハルも、南の本当の姿を知ったら分かるわ

私も8年くらい前までは師匠になってもらってたけど…

まぁでも、京子達が心を開いても南は違うかもしれないわね…

…あの子、ちょっと変わってるから…」

ビアンキはそう言いながらお湯に浸かる

「はひー、そうなんですか？」

「確かにクロームさんもそんなこと言ってた…

……じゃあ、お兄ちゃん達とは仲いいのかな？」

「そうね…南はツナ達のことをもう嫌ってはいないわ

だから食事は大丈夫だと思うわよ」

ビアンキの言葉を聞き、少し安心する二人

ガララ……

咲が入ってきた

「あ、咲ちゃん！」

「どうかしたんですか？　その包帯…」

ハルの言った通り、咲の右腕には包帯が巻かれていた

「あ…ちょっと擦りむいちゃって…」

その言葉通り、少し擦りむいただけ

だが咲は包帯を巻いている

「ちょっとじゃないですよ！　何があったんですか！？」

「…今日の修業で…

あ、でもツナ達もこれほどじゃなくても怪我、してるし…」

その言葉は二人の心に強く響く

だが実際は、ツナ達…もちろん南も咲の比にならないほどの怪我をしている

このくらいの傷なんて、絆創膏も貼らずに放置しているのだ

「…京子ちゃん、ハルちゃん……？」

咲が二人に話しかける

「なぁに？」

「どうかしたんですか？」

咲は下を向き、再び二人の目を見る

「……二人が知りたいこと、教えようか…？」

「「！！！」」

咲の言葉に京子とハルは目を見開き、ビアンキはため息をつく

イーピンは聞いておらず、お風呂で泳いでいる

「……あのね、本当は…「咲！」

…ビアンキさん？」

咲の言葉を遮ったのは、ビアンキ

「このことは、あなたが勝手に言っちゃダメよ　絶対に」

「……はい…ごめんね、京子ちゃん、ハルちゃん…」

「いいですよ！」

「うん、全然気にしないでいいよ！

……ねぇ、ハルちゃん…？」

京子はハルに目を向け、ハルも京子に目を向ける

「一時休戦にしよっか」

「そうですね！　…ツナさん達も怪我してるんですし…」

翌日

南のアジトに、置手紙があった

『京子ちゃん達がボイコットをやめるって言ってくれた
今まで家事をしてくれて、教えてくれてありがとう！
……よければまた作ってください…
それと、チョイスについて白蘭から通信が入ったんだ
6日後の昼12時に並盛神社に集合するらしい
…場所はまだ分かんないんだけど…
過去から来た仲間は全員集合みたいだから、風間さんもクロームも来てください…

沢田綱吉』

南は小さく微笑み、その手紙をゴミ箱に捨てた

「…6日後の12時…

ギリギリ間に合うか…？」

南は少し考え、修業に戻った

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９３　風の家事講座！（後書き）

次はチョイスです♪
南の最後の言葉は…次話の最初に明らかになります。
うーん…チョイスのどこで区切ろうか…。
…まぁ、流れに任せて頑張ります…。
…お願い事があります…。
大変図々しいのですが、感想を…書いてくださいっ！！
…最近、やる気が右肩下がりで…。
時間も減り、疲労が増えてきていて…。
…どうせなら逆がいい…。
そして、私がやる気を上げる方法が、皆様の感想なんです。
ユーザ登録していない方も、何となくでもいいので感想を書いてくださ い…。
「コイツ、マジでヘボいから」
南…今の私にはかなりキツい言葉なのだよ？
「じゃあそのままサヨナラ」
…南の出番増やすよ…？
「チッ…めんどくせーなぁ！
とりあえず皆様、このダメ作者・難波壱の為に感想を書いてくれる人がいたらよろしくお願いしやす！」
南…！！！
ありがとう！
「オレは応援してねーけどな」
グハッ！
…それでは、また♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９４　チョイスへのチケット！

それから、６日後……

南と恭弥、山本を除いたメンバーが並盛神社に集まっていた

南は今日の朝、突然姿を消していた

クローム宛に置手紙があり、クロームはそれをツナに見せた

内容は、こうだ

『クローム

オレはちょっと野暮用があって一緒に行けないけど、時間までに

はちゃんと行くから！

だからツナ達と一緒に行っててくれ

一応黒曜の制服をクリーニングにかけてあるから、着れるようになってるぜ♪

そんじゃ、後でな♪

南』

手紙の通り、黒曜の制服は綺麗にハンガーにかかっており、今クロームはそれを着ている

ツナにクローム用のスーツを渡されたが、クロームは黒曜の制服を着ることにした

「風間さん…野暮用って何だろう…？」

ツナが小さな声で呟く

「ボス…」

クロームはツナの呟きを聞き、そばに近寄ってくる

「南は来るよ…南は約束を破ったりしないから…絶対」

「クローム……うん、そうだね」

ツナがそう言った時だ

スパナがバカでかい死ぬ気の炎が近づいてきていることを告げる

そして上空にカミナリ雲のようなものが現れ、そこから白蘭の顔が現れた

「やあ諸君♪」

「ひいいっ　何アレー！？」

ツナが上空に現れた白蘭の顔に異常なほど反応する

しかし、この白蘭は顔の形をしたアドバルーンのようなものだった

ミルフィオーレの科学なら可能らしい

遠くから見ても、空に人の顔が出ているのでかなりシュールな光景だ

そして白蘭の顔の形をしたアドバルーンの中に、超炎リング転送システムがある

この装置に５００万ＦＶ（フィアンマボルテージ）の炎を注ぎ、ツナ達がチョイスの舞台にいけるようになっている

このＦＶに達しなかったらチョイスのチケットを獲得出来ず……

いとも簡単に並盛ごと消されるかもしれない

そして、もうすぐ約束の時間…

だが、南、恭弥、山本はまだ来ていない

白蘭から放たれていた光は急速に縮まっていく

そして、ツナ一人だけに光が照らされる

「だって…まだ全員集まってないし…」

「へぇ　ルールを重んじてくれるのは嬉しいな
でも僕には５００万ＦＶを出せない言い訳に聞こえるかな？」

「きっと…きっと来てくれる
風間さんも来る、と言ったんだ！」

ツナの言葉に白蘭が反応する

「あれ？　そういえば風間ちゃんもいないね
でもタイムオーバーだね」

「いいや来る！」

その直後

ドシュ

雲の炎が…

ボウ

雨の炎…

ゴオ

そして、風の炎…

「何してんの君達？」

「よっ　待たせたな」

「ん、ギリギリセーフだな♪」

恭弥、山本、南が到着した

「１０代目！！」

「沢田！！」

「ボス！」

「よ、よし……今だ！
ボンゴレ匣！！」

ツナの言葉に合わせ、守護者達がボンゴレリングに炎を灯す

「開匣！！！！」

そして、皆がボンゴレ匣に炎を注入する

キュアアアア

辺りを眩しい炎の光が包む

そしてその炎は、真っ直ぐ超炎転送システムに伸びていく

「ん？　あれ…こんなことって……

１０００万ＦＶオーバー！？」

その光の根元…そこには８名の者と、匣から現れたアニマル達…

若き１０代目ボンゴレファミリー！！！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９４　チョイスへのチケット！（後書き）

あぁ…かなり短くてスイマセン…。
南のボンゴレ匣のアニマルがどちらかは、次話で明らかになります♪
そして、アルコバレーノがいつも決まった服装をするように、南の風としての服装も明らかにしちゃいます！！
…さてアレは、正装と言っていいのだろうか…？
……まぁ南らしい格好です…。
ちなみに、前に着た事のある服装です♪
誰がチョイスされるかも次話で明らかになります♪
んー、次話は色々と明らかになることが多いですねぇ…。
あ、ボンゴレ匣のアニマルに選ばれなかった方は、過去に戻ったときにリングになりませんので！
…これってヒントになりますね…。
それでは、また明日～♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９５　ルール！

ボンゴレ匣を開けた守護者達の隣には、ボンゴレ匣から現れたアニマルがいる

ツナの隣には、ライオンのナッツ

隼人の隣には、猫の瓜

山本の隣には、犬の次郎

恭弥の後ろには、アーマーに入ったハリネズミのロール

クロームの上には、フクロウのムクロウ

ランボの下には、牛の牛丼

笹川の隣には、カンガルーの漢我流

南の隣には、チーターのスード

スードの額には、ボンゴレの紋章がある

スードだけでなく、ナッツにも、瓜にも…皆の額にはボンゴレの紋章が書かれていた

「てめーらおせーぞ！」

「わりーわりー」

「オレ後から行くっつったしー」

「僕は個人として来てるんだ
君達とは関係ないよ」

「ちっ
っつーか南！　後から来るにしても時間ギリギリすぎるんだよ！
それに…その服って…」

南の服装は、リング戦の時にスードと名乗っていた時と同じだ
黒いパーカー、ＶＡＲＩＡ隊服のような黒いズボン、そして長めの白いＴシャツ
パーカーの裏にはいくつかの匣が見える

「んー？　これはオレのアルコバレーノ…いや、“風”としての正装みたいなもん？
ってかこれを正装にしたんだけどなー♪
時間に関しては…ま、気にしないっつーことで！」

こんな服装が正装なのかどうかは疑問であるが…

「だが沢田、よく来るとわかったな！！」

笹川が超死ぬ気モードのツナに声をかける

「…いや、わかっていたのは全員揃わなくては白蘭には勝てないということだけだ」

そう、全員揃わなくては勝てない

「うん、いいねぇ　見事５００万ＦＶを超えて合格だよ

じゃあさっそく、チョイスをはじめよう」

「ああ」

「まずはフィールドの“チョイス”をするんだけど」

白蘭の顔の右頬あたりから、大量のカードが現れた

そしてこのフィールドのチョイス権は、皆の炎を讃えてツナのものとなった

そして、カードを一枚引く…

カアアアアァァァァ

「お　フィールドのカードは
雷」
カードには、雷の刻印
「じゃあいこう」
白蘭の声を合図に、皆の身体が光り、宙に浮く
そして、超炎転送システムに向かって高速に進む
次の瞬間には、どこかの硬い床に着地した
「おっと」

南はどうにか右膝だけをつくように着地する

倒れるように着地している者もいた

「ってあり…？　スード消えた…」

南は炎の注入口が閉じたボンゴレ匣を見て言う

パーカーの裏にあったいくつかの匣も消えていて、あの匣がボンゴレ匣から出てきていたことが分かる

「超炎転送システムっつーのは、本当にすさまじい炎を消費するんだな…」

隼人が南の言葉に続くように呟く

「やっ♪　ようこそチョイス会場へ」

煙の外から、白蘭の声が聞こえた

南はつい戦闘態勢に入る

と言っても、炎のリングを少し灯す程度だが

そして煙が晴れ、徐々に自分達がどこにいるのか分かる

「超高層ビル郡のド真ん中！！！」

ここそがツナのチョイスしたフィールド…

雷面…超雷炎硬層高層ビル
FULMINELLO

「何度も会っている気がするけど、僕と会うのははじめてかい？

綱吉君、それにこの時代の風間ちゃん」

煙の向こうにいたのは、白蘭、真7弔花…桔梗、ザクロ、ブルーベル、トリカブト、デイジー

南は先ほどより大きな炎と灯し、殺気を少量放つ

「まぁまぁ、そんなに敵意むき出しにしないでよ、風間ちゃん♪
ここで今から戦闘するんだし　いいロケーションだと思わないかい？」

「こ、こんな人の多い場所で戦えるわけないでしょ！！」

ツナが叫ぶ

「そう言うと思って人はぜーんぶよけといたよ
ここには僕ら以外人っ子一人いないんだ」

恐らく、元無人島か…

南は心の中で呟いた

そして今殺気を出しても仕方無いと思い、殺気を引っ込める

「お、風間ちゃん殺気引っ込めてくれたんだ♪」

「……今殺気出したって仕方ねーだろ…

それに今どうしたって、オレはユニを取り返すからな」

白蘭は細く目を開く

「ま、風間ちゃん達が勝てたらね♪」

南と白蘭が話している内にブルーベルは軽く挑発したらしく、皆はブルーベルの人間とは思えない行動に疑問を抱く

「そんじゃ、次のチョイスを始めようか」

白蘭はジャイロルーレットを持つ

「みんなが見やすいように映しだそうね」

白蘭はツナに近づきながら話す

パッ

そして、二つの表のようなもの…ルーレットボードが表示される

ボンゴレ、ミルフィオーレの紋章があり、その下には晴、霧、雲、雨、雷、嵐の刻印

一番下には□（しかく）がある

風は、無い

南は風が無いことを不思議に思いながら、ツナ達はチョイスを進めていく

いつの間にかジャイロルーレットは回っていて、ルーレットボードに数と炎が新しく書かれていた

「これで決まったからね

バトル参加者♪」

つまり、属性の横に書いてある数が、その属性の者が出られる数ということだ

「でもボンゴレとミルフィオーレで合計がちがう？」

「これがチョイスの醍醐味だよ♪

ボンゴレは大空に嵐に雨が一名か～　いい引きしてるじゃないか、綱吉君」

それでは、一番下の□は何か？

それは無属性…リングを持たぬ者を示している

ボンゴレは2…二名選出しなくてはならない

「おい」

南が突然口を開いた

「ん？　何かな、風間ちゃん」

「なぜ風属性が無い？　オレには戦う権利すらないってことか？　あ゛？」

「大丈夫だよ　風間ちゃんがチョイスに参加するのは決定事項だから」

「「「「「！！？」」」」」

南が驚きの声をあげる

「僕はチョイスの報酬を7?と“風”と言ったよね
7?は皆に関わるからいいとしても、“風”は風間ちゃんだけだろ?
だから風間ちゃんだけは参加決定にしたんだよ♪」

「…あっそ…
でもなぜ風属性を表示しない? オレ以外にも風属性がいるかもしんねーぜ?」

南の言葉を聞き、白蘭は少し驚いた表情をする

「風間ちゃん、知らないのかい?
風の波動は、“風”である風間ちゃんにしか流れてないんだよ」

「「「「「!!!!!」」」」」

再び驚く一同

「オレ…だけ…？」

「うん　君自信が“風”なんだ

だから君にしか風属性の波動は流れてないんだ

そこにいる、咲ちゃんにも波動は流れてないしね」

南には最後の言葉は聞こえていない

「…じゃあ、このリングは…？」

咲が一つのリングを見せる

「ん？　それは風のリングじゃないよ

風のリングは風間ちゃんが持っているボンゴレリング、マーレリング、アルコバレーノのリング、それと僕がこの時代の風間ちゃんにあげた3つだけだからね

それは、単なるリングだよ」

「……うそ……」

咲は顔を真っ青にさせた

ただでさえ、ボンゴレ守護者というものを逃したのだ

それなのに、風の波動も流れていない

そして唯一流れている者が、自分が唯一知らない存在の南

心の中では嫉妬、怒り……色々な感情がごちゃ混ぜになっていた

「ま、僕は君なんてどーでもいいんだけどね♪

それよりも、早く参加戦士（メンバー）を発表しようか

まぁ風間ちゃんは決定してるけどね」

南はもう勝手に出場することになってるので、大きな欠伸をする

もう勝手に決めてくれ、と言うかのようだ

入江がベストだと思うメンバーを発表し、一部の人が文句を言う

その一部には、もちろん恭弥も含まれている

だがディーノがうまく言いくるめ、メンバーが決定した

ボンゴレファミリー

大空　沢田綱吉

嵐　獄寺隼人

雨　山本武

無属性　入江正一・スパナ

風　風間南

ミルフィオーレファミリー

雲　桔梗

晴　デイジー

霧　トリカブト・猿

そして、勝敗のルール

これは最もシンプルかつ、てっとり早い『ターゲットルール』に決まった

お互いに敵の標的（ターゲット）となるユニットを一人決め、その標的がやられた方が負けとなる

だが、コレは7？において

南…“風”においては別として決められる

南もターゲットになり、南がやられたら“風”はミルフィオーレのものとなる

すなわち、もう一つの標的と“風”は関係ない

そのもう一つの標的とは、誰なのか？

それも先ほどのジャイロルーレットで決められていたらしい

ルーレットボードの炎がつけられた属性の者が7？においての標的

ミルフィオーレは晴…デイジー

ボンゴレは二名なので、ルーレットがランダムに選ぶらしい

そして、標的となった者の左胸にマークがつけられた

南、デイジー……そして、入江

「あぁ…めんどくさ…」

南は自分が賭けられているにも関わらず、いつも通りめんどくさそうな表情

恭弥から『なら僕と代わってよ』と言いたそうなオーラが放たれているが、南はムシすることにした

そして…

ボゥッ

突然つけられたマークに炎がともった

晴属性であるデイジーと入江は晴属性の炎、南は風属性の炎

入江は相当つらそうにしているが、南は何ともない表情

「南…つらくないの？」

クロームが寄ってきた

「ん？　全然なんとも♪
入江は修業が足りねーんだよ」

「風間さん…僕だって頑張ってるんだよ…？
発明とか…」

入江がハァハァとつらそうに言う

「じゃあミルフィオーレにいる時にサボりすぎだな
っつか、これじゃあ炎探知されんじゃん？
オレがバイク乗る意味無くね？」

「う…（風属性は囮（デコイ）が無いから…）
うん…」

「んじゃ、オレは自由に行動させてもらうからな♪」

南はニシシ、と笑う

入江は呆然とした表情

「風間さん…捕まりたいのかい？」

「は？　ンな訳あるか

だってよ…逃げる気無いけど、逃げられないなら瞬殺すりゃよくね？」

入江はもう何も言わず、そうだね……とだけ言った

「それじゃ、そろそろ始めるよ」

白蘭がそう言うと、花火を打ち上げるような音が響く

「さっきも言ったけどこの盛大なチョイスの勝者の報酬は
全てのマーレリングに……全てのボンゴレリング……全てのアルコバレーノのおしゃぶり……
すなわち新世界を創造する礎となる僕が一番欲しいもの…7?と“風”だよ♪」

ドドーン、という音と共に7?と“風”の花火が見える

そして、南はある一つの花火を見て呟いた

「……ユニ……」

その声は誰にも聞こえずに消えた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９５　ルール！（後書き）

あー…また話が進まない…。
南のボンゴレ匣は…チョイス期間の間に出ると思うんで、そん時にまた書きます。
一応今回の話から分かることを書いておきますと、パーカーの裏にあった匣は、獄寺のみたいにボンゴレ匣を開けると出てくる、持ち運び便利になった状態です。
新しく何かを出したりはしないので、今までに出てきたことのある匣です。
形態変化も決まってるんですが…チョイスの時に使うかな…？
でもボンゴレ守護者の形態変化に無いものです。
あ、そうそう。
南のボンゴレ匣でレウスは出てきません。
…多分もう出ないと思います…。
レウスって出しにくいんですよね…。
その分スードが出てきます♪
そいでは♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９６　チョイス開始！

花火が消え、白蘭が口を開く

「そうそうバトルを始める前に公平にジャッジする審判を紹介しないとね」

「我々におまかせを！」

上空から二名の女性が降りてきた

その二名は、チェルベッロ

ミルフィオーレチェルベッロ機関というものらしく、正体をこれ以上明かそうとはしなかった

「ミルフィオーレの…チェルベッロ…？」

「ざけんな！！　どのみち敵の息のかかった審判じゃねーか！！」

「この娘達は公平だよ　それがとりえなんだから

それよりズルをしてるのは君達じゃないのかい？」

「？」

ツナは全く分かっていない様子だ

「ツナ、オレらの基地ユニットから０．０１％の人の気配がするんだよ

恐らく…オレがこないだイタリアに行ったのに会わなかった奴だな」

「うぉ〝おい！！！　バラしてんじゃねーぞぉ！！！」

基地ユニットからＶＡＲＩＡ隊服を着た、声のデカイ者…スクアーロが出てきた

「ん、久しぶりだな　カスクアーロ♪」

「『カ』は余計だぁぁ！！！」

「だってカスじゃん？」

「テメェ…三枚におろすぞぉ〝！！！」

スクアーロが剣を構える

「んー、それは面倒だから遠慮するー」

ふあぁ、と欠伸をしながら言う

「テメェ…１０年前からそうだったんだな…」

「オレが変わる訳ねーじゃん♪

何事も大事なのは『面倒じゃないかどうか』だ　仲間が関わってるなら別だけどー」

南の様子を見て、スクアーロは剣を下ろす

「風間ちゃん、そろそろチョイスの説明を始めていいかな？」

白蘭が南に聞く

そして、基地ユニットからリボーンが出てきた

どうやらここには非7?線が無いようだ

「…さっさとしろ」

南の言葉を聞き、チェルベッロが一度頷く

「では参加戦士（メンバー）は基地ユニットにお入りください　フィールド内のランダムな位置へ転送します

参加戦士以外の皆様には、各ファミリーそれぞれにフィールド内に観覧席を用意しましたので、そちらへ

観覧席から参加者への通信は禁止です　観覧席へは各所に設置されたカメラからの映像と我々の声と味方の音声しか入りませんのであしからず

なお観覧席は完全防壁で出来ており、観覧席への攻撃は反則とし、負けとなります

では3分後に開始します　用意してください」

そう言い残し、チェルベッロとミルフィオーレは消えた

「ふぅ…何か面倒だなー」

南は自分が賭けられているにも関わらず、まるで関係無いような表情をしている

まぁ南らしいと言えばそうなのだが…

「南……」

クロームが南に声をかける

「ん？　どうかしたか？」

「……私は何もできないけど、頑張ってね…」

「クローム……

…あぁ！！！」

南はこの言葉でようやく少し気合いが入る

「クローム、一つだけ言っておくよ」

南は観覧席へ向かうクロームに声をかける

「？」

「…あのな――――――――――――――――――――――――――――」

それから約1分後

南、ツナ、隼人、山本、入江、スパナはボンゴレ基地の中にいた

山本は隼人にネクタイの結び方を教わっている

「風間さん」

そんな中、ツナが南に話しかけてきた

「ん？」

「神社に集まる時…どこ行ってたの？

あ、いや、答えたくないならいいんだけど…何か昨日と雰囲気違う気がして…」

ツナの質問に南は少し考える素振りを見せる

「今日の朝、骸と話してたんだよ」

「え…む、骸！！？」

先ほどクロームに言ったのは、骸が無事だということだ

それを聞いた時クロームは、心の奥底から安心した表情を見せた

「あぁ、そう　そんで情報を貰ってたんだよ

…オレの今回チョイスに参加する目的の人物のな…」

南は少し鋭い目つきになった

「…それって、『ユニ』って人…？」

「あぁ　オレの義理の妹…

実際会えば分かるぜ」

「え？　実際…『3分たちました』

！」

「…話はここで終わりだ…」

南はボンゴレリングだけを指に通す

首からはもちろん、クロームと対になっているリングがチェーンに通ってかけられている

そして、アルコバレーノのリングも首から提げられている

『それでは……

チョイスバトル、スタート！！』

一同が険しい表情になる

その中で一番険しい顔をしているのは南

その理由は、今日の朝骸と会った時のこと――――――――――――

朝１０時　黒曜ランド

南は正面から入り、骸とツナが戦った部屋に入る

この部屋にはソファーがあり、ゆっくり出来るのだ

そしてソファーに座り、意識を精神世界へ飛ばす…

精神世界は広い草原のような場所で、主に黒い服の南の服装は基本白になっていた

白いTシャツ、ジーパン

その風景に馴染んでいる

南がここにこれるのは、骸と一応契約をしているからだ

最も、南の強い精神力によって乗っ取ることは出来ていないが…

南が骸とテレパシーのように会話をしたり、有幻覚で骸を呼び出せるのも、契約しているが故だ

「おや？　これはまた珍しい者が来ましたね…」

南の後ろから声がした

南に無言で振り向き、その者と向き合って口を開く

「…よぉ、ピンピンしてんじゃねーか…

……骸」

そう、ここには骸がいた

もちろん１０年後の姿

「クフフ…実際はそこまで軽いものではありませんでしたよ…

それで今回はどういった用件で？」

この言葉から、この時代の南もよく骸に会いに来ていたことが分かる

「…大空のアルコバレーノ、ユニの話だ……」

南の言葉にピクリ、と反応する

「彼女のことなら貴方のほうが知っているのでは？」

「確かに、そうだ…だがこの時代でユニと会えていない…

ユニは今、どこにいるんだ？」

もしかして骸なら少しでも情報を持っているのではないか、と思って来たのだ

「…それは分かりませんが、本日行われる“チョイス”の時に顔を見せるでしょう」

「……そっか…よかった……」

南はホッ、とため息をつく

「それと…今ユニが何をしようとしてるのか、ご存知ですか？」

「！！　……思いつくのは……

アルコバレーノを復活させることだけど……

……オレは絶対にユニを守る…たとえオレが死んでも…」

「！！」

南の覚悟を決めた目を見て、少し驚く骸

「…貴方ならそう言うと思っていましたよ…

…ですが、これをお忘れなく…」

「？」

骸は深く息を吸う

「…貴方がいなくなって、悲しむ者がいることを……」

南はそのことを分かっていたが、他の者に言われるとつらかった

わかっていた…だけど自分は仲間（ユニ）を守りたい…

「……わかってるよ…」

そう言う南の声は小さすぎて、骸の耳には届かなかった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９６　チョイス開始！（後書き）

…チョイス開始してませんね…。
で、でも一応チェルベッロが開始の合図したんで！！
次は南の戦いが少し入るかもしれません…。
それでは♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９７　大空・雨の形態変化！

「オレは絶対に断る！！」

南はボンゴレ基地の中にいた

何があったのかと言うと、皆で円陣を組もうとしていたのだ

それを山本が南にも誘ってきた

「まーまー　風間だって仲間じゃねーか」

「仲間だからってオレはこーゆーことはしない！

絶対に拒否するからな」

隼人は嫌がってはいたが、ツナの言葉によって円陣をすることにしていた

そして南にも声がかけられ、今それを断っている最中…

「だってよ、風間はリング戦の時にヴァリアー側にいただろ？
だから円陣できなかったじゃねーか」

「それがどう関係してんだよ…

あーもー！！」

南は基地ユニットの外に向かって走り出す

「ちょ、風間さん！？」

ツナが南に叫ぶ

「オレはもう行くからな！
どうせ標的（ターゲットマーカー）の炎で見つかるんだしよんじゃ、健闘を祈る！」

そして南はバイクに乗って出て行った

その映像を見ていた観覧席の一同は…

「…風間の奴、何してんだ…？」

ディーノが呟く

「標的の炎があるから適当に行くことにしたんだろ
…囮を作れるかと思っていたが、さっきの正一の様子からして風属性は無理みてーだしな
（この行動が正しいとは言え、風間にとってはかなり不利は状況になる…
風間はどうするつもりだ…？）」

「南…頑張ってね…」

クロームのように口にしなくても、恭弥も同じようなことを思っていた

『負けたら許さないよ』と

しかし、ここで負のオーラを放っている者がいた

咲だ

京子とハルは南のことを怖がってはいるが、嫌ってはいない

『なんで風間さんなの…？

なんで私じゃないの…？

この未来編が終わったら、もう私はこの世界に用は無いのに…

だから私は未来編を最後にするのに…！！

私は…私は……！！！』

そう心に中で言い、強く拳を握る

「……そろそろ、この世界を終わらせましょう…

ね、王様…？」

咲は誰にも聞こえないくらいの声で言った

勝手に基地ユニットを飛び出してきた南

一度止まり、これからどうするかを考えていた

目的は敵の標的の炎…デイジーを倒すこと

だが南も標的になっているので、敵ユニットには行きにくい

それでは、どうするか…

「よし、とりあえず行き当たりばったりで！」

南は超テキトーに進む

ちょうどその時、ボンゴレ基地ユニットからツナ達が出て行った

隼人がディフェンス、ツナと山本がオフェンスとして戦う

そして空中用囮ホバリングも開始される

これで敵のレーダには入江の標的の炎が散らばっているように表示されるだろう

だが南の標的の炎は一つ…

入江の標的の炎はトリカブトと猿が向かい、南の標的の炎には桔梗が向かった

そして、それから少し経ち…

ツナはトリカブトと戦い始め、山本は猿…否、幻騎士と戦い始めた

そんな中、南はのんびりとバイクを走らせていた

だが自分に向かって一つの炎が近づいてくる

南はどうしようか少し考え、指のボンゴレリングに大きな炎を灯す

この行動を見た者の頭には「？」が浮かんでいる

「おーい！　ここに近づいてきてる奴ー！！

…オレに追いついたら戦闘開始だ！」

南は風の炎の特徴、加速を使って自分のバイクを猛スピードで走らせ、減速を使って相手の速さが遅くなるようにする

そして、回旋で敵が行きたい方向に簡単に行けないようにする

つまり、競走のようなことをしようとしているのだ

南は一度振り返り、敵を確認するためだ

「…やっぱりアイツだったか…

真7弔花のリーダー、桔梗…！！」

そう、南の場所に桔梗が来たのだ

「ハハン　報酬を傷つけるのには気が引きますが、これも白蘭様の命

あなたの標的の炎、消させていただきますよ」

「誰が負けるか！

ま、その前にオレに追いつかなくちゃいけねーけどな！」

さらに風の炎を大きくし、自分のバイクのスピードを上げる

桔梗との距離が少しずつ増えていく

しばらく経ち、桔梗と南の距離は一定した距離になっていた

南がそうしたのだ

ずっと距離を広げると、桔梗が入江を倒しに行くかもしれないから

そのことに桔梗は気づいていながらも、南を標的にし続ける

それを不思議に思いながらも、南はバイクを走らせていた

その頃

沢田綱吉ＶＳトリカブト

ツナがボンゴレ匣を開け、天空ライオン（レオネ・ディ・チエーリ）Ｖｅｒ．Ｖ（バージョン ボンゴレ）…ナッツを出した

そして、ナッツに「形態変化防衛モード（カンビオ・フォルモード・ディフェーザ）」と言う

すべてに染まりつつ、すべてを飲み込み、包容する大空…？世のマント（マンテッロ・ディ・ボンゴレ・プリーモ）

ナッツが？世のマントへと変わった

ボンゴレ匣は匣アニマルが武器となる匣だ

その武器は、初代ボンゴレファミリーが使っていた武器と酷似している

そしてツナがトリカブトを倒したと確信し、デイジーの下へ向かった

山本武ＶＳ幻騎士（猿）

山本は幻騎士だと分かるとすぐにボンゴレ匣を開けた

すると秋田犬の次郎…雨犬（カーネ・ディ・ピオッジョッタ）　Ｖｅｒ．Ｖ（ボンゴレ）と短剣３本現れる

いや、それだけでは無い

今は上空にいるが、燕…雨燕（ロンディネ・ディ・ピオッジャボンゴレ）　Ｖｅｒ．Ｖもボンゴレ匣から出てきた

これこそが、山本のボンゴレ匣だ

そして雨の特徴、鎮静を活用して幻覚で見えない幻騎士の位置をも見破る

そして、小次郎…雨燕が山本の時雨金時と合体…形態変化をする…

すべてを洗い流す恵みの村雨と謳われた…朝利雨月（あさりうげつ）の変則四刀

初代雨の守護者・朝利雨月の剣は世紀無双と言われその才能は誰もが認めるところだったが、本人は何より音楽を愛し自分の剣を一本も持たなかった

だがある時、異国の友であったボンゴレ?世（プリーモ）のピンチを聞きつけ、なんの躊躇（ちゅうちょ）もなく命より大事な楽器を売り、武器と旅費にかえて助けに向かった

そう、友のために全てを捨てることをいとわなかったのだ

その時に楽器と引き換えに作った武器が、3本の小刀と1本の長刀だったという

朝利雨月は音楽と刀…山本武は野球と刀…

二人の選択はとても似ていた

ボンゴレ匣を形態変化させた山本に対し、幻騎士はヘルリングに精神を売る

前回ツナと戦った時は、ツナの覚悟を決めたユニと同じ目に惑わされ、全力を出せなかったらしい

そして、本気の戦いが始まる

まずは幻騎士の幻剣舞（ダンツァ・スペットロ・スパダ）を放ち、山本が時雨蒼燕流守式四の型・五風十雨（ごふうじゅうう）で防御する

この五風十雨は敵の呼吸に合わせて剣をかわす、回避奥義だ

それにボンゴレ匣の推進力が足されたため、当たることはまず無い

幻騎士は幻覚で自分を9体作り、１０倍の幻剣舞…究極幻剣舞（エクストラ・ダンツァ・スペットロ・スパダ）を放つ

規模的にも、攻撃力的にも、先ほどとは比べ物にならない

だが山本はこれにも落ち着いて反応する

時雨蒼燕流総集奥義・時雨之化（じうのか）

その次の瞬間、幻騎士の放った究極幻剣舞が止まったように見えた

実際は止まっているわけではなく、スローモーションのように動いている

雨の鎮静の炎を剣撃と幻覚すべてにぶつけて、攻撃そのものの動きを静止に近づけたのだ

これこそが、山本武……！！

そして、決着がつく…

時雨蒼燕流攻式八の型・篠突く雨（しのつくあめ）

山本の父が作り上げた技で決まった

そして負けた幻騎士の、一生が終わる…

幻騎士が役に立たなくなった時に消せるように桔梗が、雲の炎で増殖する雲桔梗（カンパヌラ・ディ・ヌーヴォラ）を鎧に仕込んでおいたらしい

…白蘭の命で……

白蘭にとっては幻騎士は捨て駒にすぎないのだ

幻騎士は、死にゆくことも怖くない…

また神が…白蘭が助けてくれると思っているから……

幻騎士は、最後に笑って死んだ

南は桔梗との競争をまだ続けていた

「おいおい、オレもそろそろヒマになるから早く追いついてくれよ～」

南は後方にいる桔梗に言う

「それでは止まったらどうですか？

私もこんなことは面倒なので」

「それは追いつけない言い訳に聞こえるな
でもま、いっか」

南はバイクを止める

「戦う気になったのですか？」

「…ちょっとだけだけどな…
オレも負けるわけにはいかねーし」

そう言って南はボンゴレ匣を取りだす

「ハハン　あなたもボンゴレ匣を使うのですか」

「使うには使うぜ…
だが形態変化はしねーけど…な！！」

ドシュッ

ボンゴレ匣に風の炎が注入される

「風チーター（ゲパルド・ディ・ヴェント）Ｖｅｒ．Ｖ（バージョン ボンゴレ）」

そして、パーカーの裏にある匣…

それはこの時代の南が仲間に預けた匣の嵐スケボー、雷コイン、雲チェーン、霧メガネの４つ

「これが…オレのボンゴレ匣だ……！！」

そして、風と真海の雲の戦いが始まる――――――――――――

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９７　大空・雨の形態変化！（後書き）

えー南の戦闘は期待しないでください…。
途中で…というよりすぐに終わります…。
変換匣とレウスはボンゴレ匣には入ってないんです。
過去に持って帰るのに、この二つはダメだろうと思いまして。
そして、次でチョイスが終わると思います。
短い！と思ってる方がたくさんいると思いますが…。
でもようやくユニと再会だ――――――――――！！！
うん、よし！！
作者のやる気が上がりますね♪
それではまた♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９８　チョイス終了！

南はポーチから嵐、雲、雷、霧のＡランクリングを取りだし、さらに嵐スケボーの匣に炎を注入する

するとスケボーが南の足元に現れ、南はそれに乗る

そしてポーチから匣を一つ取りだす

変換匣だ

それに風の炎を注入し晴の炎に変換してスードを成長させる

「グルルル…」

「ハハン　チーターを成長させたところで私にはかないませんよ」

南は桔梗の言葉を無視し、桔梗に襲いかかる

桔梗が上空にいるため、嵐スケボーに乗って

そして短剣に風の炎を纏わせ、刀を振りかざす

スカッ

だが刀は空間を切り裂いただけ

そして南の攻撃をよけた桔梗に、今度はスードが襲いかかる

「こんなものでは面白くありませんよ
そろそろ形態変化、というものをしてみたらそうですか？」

桔梗はスードも簡単に避け、南を挑発する

「そう言って形態変化させようったって無駄だぜ」

南はパーカーの裏にある一つの匣に炎を注入する

雲チェーンだ

そして、チェーンの片方の端を刀の柄頭（つかがしら）に取り付け、刀と鎖を繋げる

「（刀とチェーンを繋げて…？）」

桔梗は南の行動を不思議に思っていた

刀にチェーンを取りつけても、刀が重くなるだけだから

それならば、他に目的があるのか…？

「不思議がってるな」

「！　…だとしたら何ですか？」

「ま、あんま余裕ぶっこいて無いほうがいいぜ…

そらよ！！！」

その直後、南はなんと、刀を投げた……

チェーンと掴み、雲の炎で伸ばしている

「！！？」

桔梗は驚きながらも避ける

「まだまだぁ！！」

今度はチェーンを振り回し、桔梗の方向に振る

だがメチャクチャなので桔梗の少し上を通過する

「ハハン　この程度はどうってことないですよ」

「だから、余裕ぶっこいてんなっつの！」

ピンっ

何かを弾く音がした

「ぐっ！」

その何かは桔梗の腹に直撃する

「あー、炎が弱かったか…」

「…弱かった…？　確かにもう少し強ければ貫通してましたよ…

…雷の炎を纏った…コインによって」

そう、南が弾いた何かとは、雷コインのことだ

「で、止まんねー方がいいぜ？」

「…？

！！！」

南はいつの間にか刀を自分の下に引き寄せていて、桔梗に投げる

「がはっ！！！」

そして刀は桔梗の右足を掠(かす)る

「いてーだろ…♪

オレが毎日毎日手入れしてるから、切れ味は半端ねーぜ」

今度は、チェーンを引っ張る

すると桔梗の後ろにあった刀が、再び桔梗に接近する

「ぐっ」

今度は避ける

「んじゃ、そろそろ消えてもらおうか…」

そう言う南の手元には、雷コインが戻っていた

実は、風の炎を少量混ぜていて、その風の炎を活用して南の手元に戻らせたのだ

先ほどの刀も同じ仕組みだ

風の炎をチェーンに少し含ませ、倍以上の速さでチェーンを回収する

ピンっ

ブンッ

コインを弾くのと、刀を投げるのを同時に行う

「…いいえ、終わるのはあなた達の方です」

「！！？」

突然桔梗が、南に背を向けて去って行く

「…まさか…！！！」

南は急いで刀とコインを回収し、晴の炎が切れて小さくなったスードをスケボーに乗せ、桔梗の後を追う

「こちら側はもう一つ倒すべき標的の炎があるのです
そちらを終わらせてから続きをしましょう」

「ちっ…

おい、入江!!　そっちに向かうぞ!!」

南は無線で入江に告げる

『うん…わかった!

獄寺君!　風間さんから通信があった!

もうそろそろ獄寺君のいる場所に着くと思う!』

入江は隼人に告げる

入江の言葉通り、南の前方には隼人がいる

「隼人！！！　そこで一旦コイツ止めてくれ！！
そしたらオレも一緒に殺るから！！」

南は風の炎を使って桔梗を追っているが、先ほど桔梗と南の距離が長かったため、すぐに追いつけない

「ハハン　彼には無理ですよ」

「うるっせ！　オマエとは話してねーんだよ！！」

『風間さん！！』

入江から通信が入った

「あぁ？　なんだよ！！」

『獄寺君が足止めしたら、共闘してくれ！』

「んなこと言われなくても分かってるわ！！ボケ！！」

『あ…ごめん…パニックになってて…』

そして、桔梗が隼人の前に着いた

左手で突こうとしてくる桔梗の手を右の避け、ボンゴレ匣を開ける

そして出てきたのは、嵐猫（ガット・テンペスタジョン）　Ｖｅｒ．ＶとＳＩＳＴＥＭＡ（ボンゴレ　スィステーマ）　Ｃ．Ａ．Ｉ．

これが隼人のボンゴレ匣

だが瓜は桔梗に吹っ飛ばされる

「隼人、こっからはオレも参戦だぜ！」

南が桔梗の後ろから斬りかかる

だが桔梗は上空に逃げて回避する

「南！」

「よ、隼人

それに、瓜♪」

「あ、瓜！！

よく耐えたな、えらいぜ」

隼人は瓜を撫でようとしたが、逆に瓜に噛みつかれた

「あーあー、まだ懐(なつ)いてないのか…

全く…これだから隼人は…」

南がやれやれ、とでも言うような動作をする

「う…うるせぇ!!」

「さて、隼人…

まずその腰の匣を塞いでるのは何だ?」

「は?」

南に言われ匣を見る

「んだこりゃ！？」

「ハハン　失礼します」

桔梗が入江の方に行く

「あ、バカ隼人！！

簡単に桔梗通してんじゃねーよ！！！」

南は急いでスケボーに乗る

そして、隼人を残して行った

「くそ…

…こうなりゃ、バイクで追いかけっぞ！

行くぞ、瓜！！」

「シャー！！！」

隼人に言われたのが頭にきたのか、隼人の手を引っ掻く

「って――――――――！！！

こんな時まで引っ掻いてんじゃねーよ！！」

そう言われた瓜は、とっくにバイクに乗っていた

「このやろ…待ちやがれ！！」

南は桔梗を追っていた

だが桔梗は先ほどとは比べ物にならないスピードでボンゴレ基地ユニットに向かっていた

桔梗と基地ユニットの距離、７００ｍ（メートル）

「ハハン　待てと言われて待つ者はいませんよ」

「ムカつくヤローだなぁ！

あぁ、クソ！！」

南は炎をより大きくして桔梗に接近する

だが桔梗も炎を大きくし、南から逃げる

ビビビッ

桔梗の前方から桔梗に向かってレーザーのようなものが伸びてきた

「ハハン　これを逆に使わせてもらいましょう」

桔梗はそのレーザーを避け、直進してくるレーザーは南に向かう

「は…？」

ドゴォン…

そのレーザーは南に直撃した

「ハハン　どうせこれで倒れる者では無いでしょう
私はこの間にもう一つの標的の炎を消しておくとしましょう」

そして桔梗は去ってった

ドガガガガガ！！！！

レーザーが発せられていた場所が爆発した

南がコインや刀で破壊したのだ

「っぶねー…回旋でどうにかできてよかったぜ…」

南の言葉通り、風の炎の特徴・回旋でレーザーを避けていたのだ

「おい!!　南!!」

地上の方から声がする

「あ、隼人!」

「『あ』じゃねーよ!!

早くアイツ追うぞ!!」

そう言って隼人はバイクを走らせて行った

「……あ、そうだ桔梗！！！」

南は突然隼人に言われて、一瞬フリーズしていた

そしてスケボーの乗って桔梗を追いかけようとしたが…

「ぐる……」

「ん、どしたスード…

って、スード！？」

スードが足から出血していた

先ほどのレーザーが当たったのだ

「ちょっと待ってろ　すぐに変換匣で…」

南は変換匣に炎を注入し、晴の炎を出す

幸い傷は浅かったようで、すぐに癒えた

「ぐるぅ……」

スードが申し訳なさそうな目で南を見る

「そんな顔すんなって…

完璧に防げなかったオレだって悪いんだし…

……んじゃ、桔梗に追いつくぞ…」

「ぐる！！！」

そして南は急いで桔梗を追った

だが、南が見たのは止まっている桔梗だった

つまり、もうすでに標的の炎を消した

「そんな……

ツナ！」

地上にいるツナと隼人を見つけ、そこに降りる

「風間さん…大丈夫？」

「あぁ……オレは何ともねぇ…

おいチェルベッロ、入江はどうなんだ？」

「標的の炎は体内の全生命エネルギーが２％以下になると消滅します

入江氏の標的の炎は２％を大きく下回り下降し続けているため、

消滅と認めます」

それを聞き、皆が顔を青くする

「そんな…

正一君!!　しっかりして!!　死んじゃダメだ!!」

ツナが叫ぶが、入江の返事は無い

『こちらもです

デイジー氏の標的の炎も、消滅と認めます』

つまり、引き分け（ドロー）

のはずだったが……

なんと、デイジーは生きていた

正式には、全体内エネルギーが回復した

「デイジーは“不死身の肉体（アンデッドボディ）”を有していましてね

死ねないのが悩みだという変わった男なのです」

いつの間にか桔梗が地上に降りてきて、桔梗の隣に霧が集まっていく

「おわかりいただけましたか？
これが真7弔花の真の力（リアルパワー）なのです」

そしてその霧がトリカブトとなった

ツナは完全にトリカブトを倒していなかったのだ

「これにより、7？をかけたチョイスバトルの勝者が決まりました
勝者は――――――

ミルフィオーレファミリーです！！」

“風”を賭けたチョイスはまだ終わっていない…

しかし、この結果は世界の終りを意味しているように南は思えた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９９　オレンジ登場！

7?を賭けたチョイスバトルは、ボンゴレの負けに終わった

まだ“風”をチョイスがあるが、それまでしばらく時間が取れるようになった

その間、入江が白蘭の能力…ファレノプシス・パラドックスについて話していた

南も一応聞いていたが、それよりも考えていることがあった

“風”を賭けたチョイスのことと、ユニのこと

骸がユニはチョイスの時に来る、と言ったが、まだ来ていない

来ているかもしれないが、姿を見せない

戦いの最中に来たりしたら、とても危険だ

今、この時間に来てくれれば…

そう思って気配を探している

だが、入江から白蘭の能力についての説明で驚くことが分かり、そちらに気を向ける

白蘭は、同時刻の無数にあるパラレルワールドにいる自分全員の知識と思惟(しい)を共有できる

今の時代、情報こそが何よりの武器だ

そしてその武器を使って、ありえないことも起こせる

まだその世界で発見せれていないワクチンの知識を知っていたり

日陰の身で姿をかくしていた王族を発見したり

何百という“偶然”の発明なくしては生まれえない兵器の開発に技術を提供し、猛スピードで完成させたり

“風”の情報を知っていたり……

そして、その世界は白蘭の手によって滅ぼされていった…

だが、その無数のパラレルワールドの中で唯一滅ぼされてない世界があった

それが、今いるこの世界

つまり、白蘭を倒せるかもしれない唯一の世界

なぜこの世界だけ世界征服されていないのか、それも“偶然”だった

偶然、入江とツナが唯一出会えた世界

そして、未来の入江本人が過去の入江に指示してつくった未来だから

いや、実はもう一つ理由があった

“風”…それが完成しているから

どういうことかというと、南が風ボンゴレリング、風マーレリング、
アルコバレーノのリング…

その全てを持っているから

他の世界ではアルコバレーノのリングがない

正確には、創られる前に白蘭が南を殺したので、創れなくなったのだ

あのリングは、風ボンゴレリング、風マーレリング、そして南が一定の範囲内に存在して形成されるもの

その一定範囲内になったことが無かったため、形成されなかった

だがこの世界では、条件を満たして形成されている

それが一つの理由だ

そのため、奇跡的にボンゴレ匣がつくられる未来になった…

この時代だけ…それはつまり、ボンゴレ匣は白蘭も知らない、ということ

他の世界ではボンゴレファミリーは壊滅しているだろうから…

それならば、ツナがこの時代に来たときに入らされた棺桶はどうなのか

この世界のボンゴレボス、沢田綱吉も亡くなっているのではないか

実はツナに撃たれたのは特殊弾で、仮死状態になっているだけだった

そして、この時代のツナは楽しみにしていた…過去の自分が来ることを……

そんな思い・意味があったのに、負けてしまった…

「そ、君達の負け♪
僕の事こんなによくわかっているのに、残念だったね正チャン」

白蘭がやって来た

おそらくボンゴレリングとアルコバレーノのおしゃぶりを奪うためだろう

だが、そんなことをされたら“風”を賭けたチョイスでは戦いにならない

それが、ミルフィオーレの策だった

これで“風”を賭けたチョイスで戦えるのは、南一人…

メンバー変更も不可能だろう

「待ってください！　約束なら僕らにもあったはずだ…」

「？」

「覚えていますよね…　大学時代僕とあなたがやった最後のチョイスで僕が勝った……

だが支払うものがなくなったあなたはこう言った……

『次にチョイスで遊ぶ時はハンディとして正チャンの好きな条件を何でものんであげるよ』

今それを執行します

僕はチョイスの…7?を賭けたチョイスの再戦を希望する!!」

白蘭は少し考えるような言葉を言い…

「悪いけど、そんな話覚えてないなあ」

こう、言い放った

そして…

「ミルフィオーレファミリーのボスとして正式にお断り♪」

この言葉に、もはや誰も言い返せなくなった

いや、一人だけいた

「私は反対です」

ピカ――――――ッ

南のアルコバレーノのリングが光る

それはリボーンのも同じだった

「……ようやく、来たか…」

南はその者を優しく見つめる

「白蘭」

そして、ツナと白蘭が驚きの表情を見せる

ツナは知らない者が出てきて驚いているだけかもしれないが

「ミルフィオーレのブラックスペルのボスである私にも」

「…お前は」

リボーンも気づいたようだ

「決定権の半分はあるはずです」

その少女は、頭に代々受け継がれた大きな帽子を被り

左目の下に代々現れる五弁花のマークがあり

そして、首からリボンで結んだ橙色に輝くおしゃぶりを提げている

そして、南の義妹…

アルコバレーノ大空・ユニ！！！！！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１００　風とオレンジ！

「ユニ…貴様…！」

白蘭がユニを睨む

「ユニ！！！」

南がユニに駆け寄る

「南お姉ちゃん！！」

ユニも笑顔で南に駆け寄る

「ユニ…やっぱ１０年経つと大きくなったな…」

「この時代の南お姉ちゃんはもっと背高いけどね

……それと、ありがとう…」

ユニの言葉に「？」を浮かべる南

「…この時代の南お姉ちゃんは、私を救うためにミルフィオーレにいてくれた…

本当に、ありがとう…」

ユニの言葉を聞き、南はまた微笑む

「ばーか　オレは当たり前のことをしたまでだ

…第一、ユニを救出できなかったしな…」

「ううん、来てくれただけですごく嬉しい…

ありがとう」

満面の笑みを見せるユニ

その表情を見て、そっか…と南は言う

だがその直後にツナが口を開く

「え――――――!?

あの娘(こ)がミルフィオーレのもう一人のボス――――!?

ってか風間さんの言ってたユニって人、この娘(こ)!?」

「やはりお前のことだったんだな

でかくなったな、ユニ」

ツナが混乱している中、リボーンはユニに言う

「はい、リボーンおじさま」

ユニは笑顔で答える

「！！　リボーンの知り合い！？

っていうか…おじさま――――――――！！？

この赤ん坊のことをおじさま――――――――！？」

「うるせーぞ」

リボーンがツナの指をグキッとする

まぁ、骨は折ってないだろう

「ツナ！」

「え、あ、何？　風間さん」

「コイツはさっき言ってたユニだ　オレの妹みたいな、大切な仲間」

南に言われ、ユニは口を開く

「はじめまして、ボンゴレのみなさん」

ユニの満面の笑みに、顔を赤くする者数名

それに対しハルがムキになるが、南には聞こえていない

「ハハハッ　これは一本とられたよ　いやあびっくりしたなー

すっかり顔色もよくなっちゃって　元気を取り戻したみたいだね、ユニちゃん♪」

南は白蘭の言葉を聞き、白蘭を睨む

「ちがうよ……白蘭サンの手によって……魂を壊されていたんだ」

入江が小さな声で言う

「白蘭サンはブラックスペルの指揮権を手に入れるため、彼女を口利(き)けぬ体にしたんだ…」

「人聞きの悪いこと言うなよ正チャン

ユニちゃんが怖がりだから精神安定剤をあげてたまでだよ」

白蘭は笑顔で言い切る

「いいや、あなたはブラックスペルの前身であるジッリョネロファミリーのボスだったユニとの会談で無理矢理劇薬を投与して、彼女を操り人形にしたんだ

そうだろ？　ユニさん…」

ユニはその言葉に否定も肯定もせず、言葉を言う

「でもその間私の魂はずっと遠くへ非難していたので無事でした

白蘭、あなたと同じように私も他の世界へ翔(と)べるようです」

「！！」

この言葉を聞き、白蘭は驚きの表情を露(あらわ)にする

「話を戻します

私はミルフィオーレファミリー、ブラックスペルのボスとしてボ

ンゴレとの再戦に賛成です
あの約束は…白蘭と入江さんとの再戦の約束は本当にあったからです」

「元気いっぱいになってくれたのは嬉しいんだけどユニちゃん
僕の決断に君が口出しをする権利はないな
僕が迷った時は相談するけど君はあくまでもナンバー2だ
全ての最終決定権は僕にあるんだ
この話は終わりだよ」

ユニはこのことを予想していたかのように、更に口を開く

「…そうですね…わかりました……
では私はミルフィオーレファミリーを脱会します」

そして、ツナの前に歩いていく

「沢田綱吉さん…お願いがあります」

「え！？　お…お願い…！？」

「私を守ってください」

ユニからの思いもしない言葉に、驚く一同

南はそれほどでもないが、驚いている

南はユニがミルフィオーレから脱会するのが何となくわかっていた

「ま…守るって…ブラックスペルのボスなんじゃ…！？」

「私だけじゃありません　この――――――――

仲間のおしゃぶりと共に」

ユニの手に乗っているのは、輝きを無くしたおしゃぶりが４つ

リボーンとユニのは自分が、コロネロのはラルが持っているから４つのおしゃぶりが誰のかわかる

赤・風（フォン）

藍・バイパー（マーモン）

緑・ヴェルデ

紫・スカル

今、おしゃぶりに色はないが…

「勝手に持ち出しちゃだめじゃない、ユニちゃん
それは僕の7?コレクションだ」

「ちがいます　これは私が預かったものです…
それにあなたが持っていてもそれは7?とは言えません
なぜなら」

コオォ…

パアアッ

おしゃぶりから大きな光が放たれる

アルコバレーノ同士が近づいて光る時とは比べ物にならないほどの光

「おしゃぶりは魂なくしては存在意義を示さないのです」

おしゃぶりが輝くのに合わせ、南のアルコバレーノのリングのストーンが虹色に輝く

「!?　これは…」

南がリングを見て、言う

「…！　まさか…共鳴…？」

「そう　南お姉ちゃんのリングが光っているのは、“風”の中のアルコバレーノが共鳴しているから」

“風”の中の虹（アルコバレーノ）…つまり、風は風でも虹のある場所に吹く風が共鳴したのだ

虹（おしゃぶり）なら、アルコバレーノのリング…

貝（ボンゴレ）なら、ボンゴレリング…

海（マーレ）なら、マーレリング…

そして、その全ての南…

一同は南の…“風”のことよりも、ユニがおしゃぶりを光らせたことに意識をおいていた

「……なるほど…

そういうわけか！！　すごいよユニちゃん！　やればできるじゃない！！

やはり僕には君が必要だ　さあ仲直りしよう、ユニちゃん」

白蘭がユニに近寄っていく

「こないで！」

ユニは徐々におしゃぶりの光を小さくしていく

「もうあなたには私達の魂を預けるわけにはいきません」

白蘭は一瞬笑い、鋭い目つきに変わる

「なーに勝手なこと言ってんの？

それ持って逃げるんなら世界の果てまで追いかけて奪うだけだよ」

その言葉を聞き、表情を曇らせていくユニ

「さぁ帰ろう　僕のところへ戻っておいで
ほら♪」

白蘭がユニに近づく

だが

スパッ

「おっと」

白蘭の服が、少し斬られた

そしてユニの前に一人、立つ

「あー、ユニちゃんも必要だけど、君も欲しいかな

風間ちゃん♪」

白蘭の服を斬り、ユニの前に立ったのは南

右手には、漆黒の刀

「…ユニはもう、二度とテメェに渡さねぇ…」

「南お姉ちゃん！」

ツナの隣には、そっと銃をしまうリボーンがいた

「うーん、僕は君もユニちゃんも欲しいんだよねー

さて、困ったなぁ」

白蘭が言うと、後ろにいる桔梗も口を開いた

「白蘭様

ご安心ください　ユニ様と風間様は我々がすぐにお連れします」

そして上空に飛ぶ桔梗、ザクロ、トリカブト…

「ハハン」

桔梗が攻撃をする……が、それは反対側から飛んできたモノとぶつかり、空中で相殺された

「う〝お〝おいっ！！

てめーの相手はオレだぁ！　暴れたくてウズウズしてたんだぁ！！」

「じゃまだよ」

スクアーロと、スクアーロをトンファーでつつく恭弥

「スクアーロに……ヒバリさん！！」

ツナが酷く焦ったように言う

今、新たな戦いが始まろうとしていた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１００　風とオレンジ！（後書き）

ついにＥｐｉｓｏｄｉｏで１００話達成！
今までありがとうございます！
そして、これからもよろしくお願いします！
最近は一日一話更新が毎日になってしまっていますが、もうすぐ休日のみ一日二話更新に戻れそうです！
少し忙しかったので…。
…でも、まぁ、これからも忙しい日は一日一話になってしまいますが…。
改めて、これからもよろしくお願いします♪

Straordinariamente15　初代風について！

これは、ボンゴレに伝わるある書物に基づき書かれた報告書だ――

――――――――――――――

ボンゴレファミリー初代風の守護者・ウィント

彼女は群青色の瞳・髪の女性で、自由気ままな性格だった

彼女の遺言によって、風の守護者はある条件が無いと存在しないこととなった

故に、幻の守護者と言われている

なぜ彼女がこんなことをしたのか、それは誰にもわからない…

彼女は初代嵐の守護者・Gのいとことして生まれた

ボンゴレ創立時、Gが彼女をボンゴレファミリーに誘い、彼女は入ることになった

だが実は、彼女はボンゴレファミリーに入ることを拒んでいた

彼女はボンゴレが創立される前から他の誰かと仲が良かったようなので、だからかもしれない

そのため、彼女は『ボンゴレファミリー風の守護者（仮）』という曖昧（あいまい）な位置についた

だから遺言で風の守護者をつくるのに条件をつけたのかもしれない

自分がいた足跡を残さないように…

だが彼女は、守護者達の中でも仲の良い者がいた

嵐の守護者・G

雲の守護者・アラウディ

霧の守護者・D.スペード

雷の守護者・ランポウ

性格・容姿が男だと間違えられるほどなので、気が合ったのかもしれない

あの、誰とも共に行動をするのを嫌がると言われている雲の守護者・アラウディも彼女となら行動を共にすることがあった

最も、よくケンカして、周りから見たら殺し合いとしか思えないこともしていたらしいが…

ランポウとは、仲が良いというより、ランポウの師匠となっていた

そして、謎の多い、D．スペードとも仲が良いのも疑問だ

他の者とは、普通

仲間としてはいたが、特別仲が良い、というほどではなかった

彼女は、仲間を何より…自分の命よりも大切にしていた

一度、彼女の仲間が敵対しているマフィアに捕まったことがあった

その時、彼女は一人で救出に行った

そのマフィアもそこまで小さいマフィアではなかったので、皆が無謀だと言って止めた

だが彼女は、こう言い切った

『オレの仲間を見殺しにしろっつーのか!?

アイツらは皆、オレの助けを待ってるんだ!!

だったらオレは行くのみだ!!!

止めるんじゃねぇ!!!!』

その言葉に気圧(けお)され、彼女を止める者はいなくなった

彼女を止めていたのは、ボンゴレボスや、守護者では無かったが…

彼らはその当時、他のことで忙しかったため、すぐに行動できなかったのだ

そして、彼女が敵マフィアに行く時に持っていった武器は一つ

それは仲間が彼女にあげたもの

彼女はその武器以外所持しておらず、止めた者達は彼女が戻ってこないと思っていた

だが、彼女は戻ってきた

何より大切な、彼女の仲間と共に

だが彼女は瀕死の重傷

彼女が帰ってきた直後にボンゴレの者が来て、彼女はどうにか一命をとりとめた

目覚めた彼女を待っていたのは、仲間達

彼女が目覚めた途端、皆が彼女にお礼を言った

『ありがとう！』

『ウィントなら来てくれるって信じてた！！』

『私のせいでこんな傷を負わせて…ごめん！』

ある者が言ったように、彼女が瀕死の重傷を負ったのは仲間を庇ったためだ

そして彼女は、仲間に言った

『誰か、怪我してねーか？』

それを聞いた者は皆、驚いたそうだ

自分が瀕死の重傷を負っているにも関わらず、仲間のことを心配したから

彼女は怪我を負い、気絶する前も同じことを言っていたらしい

『オレ、の…他に…怪我して、る奴…いな、い…よな…ぁ…？』

そして仲間がこう叫んだ

『いないよ！！ウィント！！

誰もいないから喋るんじゃねぇ！！』

その言葉を聞いた途端、彼女は気絶した

仲間が皆無事だったことを確かめてから気絶したのだ

誰よりも、仲間を大切にする…

そんな彼女だからこそ、初代ボンゴレボス・ジョットはファミリーに入れたのかもしれない

だが彼女は、時折寂しそうな表情をしていたらしい

まるで、誰かに謝っているかのような、そんな表情

そういえば、彼女は手帳に手紙のようなものを書いていることがあ

った

その手紙がなんとも不思議な文章なのだ

『もう会えない親友へ

きっと、今オレがいなくなって、お前は一人になっているよな…

ごめん…

…オレだって、お前に救われたのによ…』

『もう会えない親友へ

漣からたまに、オマエのことを聞いている

だから知ったんだけど、お前大学院もクリアしたんだってな

ったく…オレはテスト受けなかったけど、受けててもお前には適わねーよ…』

『もう会えない親友へ

オレに最近、新しく仲間ができたんだ

オレのいとこのGのダチとも仲良いみたいで、たまに名前を聞くGのダチの名前はジョット

…この名前、聞き覚えあるだろ?

…そう、“あの世界”だよ

オレはあの世界にいるんだ

漣に送られてな

あぁ、漣って知らねーか…

…この言葉も届いてないんだし、説明はいっか…』

『もう会えない親友へ

前書いた時から随分日が空いたな…

前に言った、仲間…

誰か言おうと思ってたんだけど、言えなくなっちまった…

ごめんな…

そうそう、オレはマフィアになることになったんだよ

ボンゴレファミリー

これも聞き覚えあんだろ？

しかも、オレが初代風の守護者になれ、って！

そんなもん絶対に断る！

でも無理なんだろーな…

…オマエもこの世界に来ることになったら、オマエがなれるようにしとくよ

あ、オマエは面倒なこと嫌いだったな

…ま、オレと同じ運命を歩めってことで

……オマエがここにいてくれれば…』

『もう会えない親友へ

また日が空いたな…

実はさ、ちょっと怪我してさ…

でももう治ったから、安心しろよ！

…オレ、鏡見るたびにオマエのことを思い出すんだ…

オマエに貰ったペンダント、今もつけてるぜ…？

オレ、オマエに何か残せたっけな…？

…何も残せてねーな…

オレだけ貰って…ごめん…

オレだけ漣からオマエの情報貰ったりできて…ごめん…』

このような不可解な、誰へ書いているのかわからない日記だ

“あの世界”、とはなんだろうか？

仲間となった者とは、誰だろうか？

“もう会えない”のはなぜだろうか？

そして何より、この手紙は誰に宛てて書かれたのか？

謎が多い

今、ボンゴレボス１０代目候補に風の守護者が現れたため、迅速に

分析しているが、寧ろ謎は深まるばかり…

ボンゴレボス１０代目候補の風の守護者も『風の守護者は（仮）でしか嫌だ！』と言っているらしいので、彼女なら何か共感するだろうか…？

…いや、彼女…風間南でも分からないだろう

風間南と言えば、彼女も仲間を大切にするらしい

リング争奪戦の大空戦時、間違えて仲間である嵐の守護者・獄寺隼人を攻撃してしまった時はショックで気絶したとも聞いた

ウィントもそんなことがあったらしく、彼女も風間南同様に気絶し

たらしい

そういえば、ウィントと風間南の顔つきが似ている、と聞いたことがある

まぁ、こんなのはただの偶然だろうが…

初代風の守護者・ウィント

彼女の謎は深まるばかりだ

＊100話達成記念＊　Straordinariamente16　初代風の

ウィントは仲間を庇って亡くなった

いや庇った、とは少し違う

仲間の代わりとなったのだ

彼女が亡くなる少し前、ボンゴレはある危機に直面していた

あるマフィアがボンゴレに敵対してきたのだ

そのマフィアは巨大マフィアでは無いが、中小マフィア程弱くも無いだがそのマフィアのボスが高齢ということもあり、2代目に引き継いだ

1代目は温厚で、ボンゴレ?(プリーモ)世と気が合い、同盟を組んだ

だが2代目は支配を望んでいた

そんな意見が対立し合うマフィアが同盟を組み続けられる訳も無く…

いよいよ、敵対したのだ

敵対する時に人質を取られた

ボンゴレボス・守護者達とも仲の良い者

……その人質はウィントの親友・エレナ

エレナは一度、瀕死の重傷を負ったことがある

だが運良くウィントがすぐ近くにいて、治療した

それでもウィントが亡くなった後にすぐ、エレナも亡くなってしまったのだが……

エレナとウィントは、ボンゴレ創立前からの親友だった

美しく、女性の魅力をまとっているエレナ

それに対し、強く、勇ましいウィント

全く正反対の性格をした二人だったが、とても仲が良かった

二人は常に一緒にいるような、そんな仲だった

そんな彼女が人質に取られた

初めはD．スペードが行こうとしていたのだが、異国にいた

すぐに戻って救出しようとしたが、船が出せないと言われ動けぬ身

更に、敵マフィアはいつエレナを殺すか分からない

人質だが相手はマフィア

いつ殺すかなんて分からないのだ

そうでなくても、ウィントはすぐに救出に向かうつもりだったが…

ウィントは一人でエレナの救出に向かった

敵マフィアが『救出に来るのならば、必ず一人で来い。もしそれ以上いたら即この女を消す』と言われ…

霧の幻覚も、D．スペードがいないのでできない

そしてウィントは、一通の遺言書をジョットに渡して行った

『エレナだけが帰ってきた時、それを開けてくれ…』

こう、言い残して…

ウィントは、死ぬことを分かっていたのかもしれない

5日後……

敵マフィアに到着し、ウィントは鬼神のごとく攻撃していった

群青色の髪は血色に汚され、真っ黒の服の内側に着ている白いシャツも血色に染まっていく…

だが現れる敵は徐々に強くなり、人数も増える

エレナの下（もと）になんとか辿り着き、逃げる

だが敵が追いかけて来たためエレナ一人、先に行かせた

それから数時間…数日が過ぎてもウィントは戦っていた

始めは１対約１０００

ザコには手刀だけで倒していける

そして7日後、敵は５０人にまで減った

敵は交代しながら戦うので、体力は多少ずつしか減らない

もう彼女の髪で群青色が見えるのは一部のみで、服は完全に血色

たまに森に潜み、木の実を食べたり、澄んだ水を飲んだり、木の上で仮眠をとった

だが一瞬たりとも気は抜けなかった

そして、さらに一日が過ぎる

つまり、ウィントがエレナを逃がして８日後

今は１対２８

既に９７２人、という敵をたった一人で倒したのだ

だが、全て彼女の武器を使ったわけでは無い

時にトラップを仕掛け、時にアジト内にある武器を使い…

弱い者は手刀で倒した

ウィントが森に潜んでいた時

彼女は一瞬めまいがした

その時に気を抜いてしまい、気配がバレた

近くにいた敵は5人

彼女は仕方なく武器を使い、敵を倒す

残りは２３人

だがその時に発した音で位置がバレ、敵が１５人まとめて来た

その内１０人は運良くトラップに引っかかり、５人は武器で

トラップと言っても、死は確実と言える程

おまけに風景に溶け込んでいるので、見つかることはまず無い

残りは、８人

その８人の中には、ボスと右腕が残っていた

他はそこまで強くない者

だが力も残り少なく、ボス以外を１日かけてどうにか倒した

右腕は一対一で倒し、他は森に仕掛けた無数のトラップで倒す、という戦法だ

そしていよいよ、最後の一人…ボス

そのボスは体調が優れなかったが、それでも強い

ボンゴレと同等に近いほどの力を持つマフィアのボスなのだから当たり前かもしれないが…

ちょうどその時、エレナがボンゴレアジトに到着した

ウィントが予想した時間だった

エレナから話を聞いたジョット達は、至急ウィントの下に行った

D．スペードもエレナ到着２０分後に着いたので、ジョットと守護者達…それとエレナでウィントの下に向かう

初めはエレナが行くことに皆が反対していたのだが、エレナは行くと言い、引かなかった

……もしかしたらエレナも、ウィントが戻らぬことを分かっていたのかもしれない

彼女の瞳には、涙が浮かんでいたから……

ウィントは、ボスとの一歩も譲らぬ死闘を繰り広げていた

敵ボスの武器は長剣

ウィントの武器と相性が悪かった

だがウィントはアジト内にある鉄パイプで応戦する

ウィントの武器は使える回数が限りのある武器なので、『ここぞ』
という時にしか使えない

だがアジト内にある武器庫で回数を増やせたので、どうにか戦えて
いたが…

『はぁ、はぁ…クソが！！
さっさと、くたばり…やがれ！！』

ウィントは極限状態だ

『ふ…ふはは、はは…

その言葉、そっくりそのまま…キサマに返す…ぐっ』

それは敵ボスも同じだった

ウィントはもう、約１０００人も敵を倒したのだ

それでもボンゴレと同盟を組む程の敵ボスと戦えているのだ

故に、ボンゴレ史上最強の守護者と言われるようになった

『…オレは…まだ負けるわけには、いかねー…んだよ…！！
アイツが…アイツらが待ってるから…！！
これからも…アイツらを…守りたいから！！！！』

ウィントは鉄パイプを敵ボスに投げる

それはつまり、自分から剣への対応方法を捨てていることを意味する

『は…そう言っておきながら自ら生きることを諦めたか…』

敵ボスは刀を鉄パイプに当て、対応しようとする

ガギィィ！！

『これしき…

！！！？』

ガチッ…

剣にヒビが入り、どんどん崩壊していく

『な…！？　私の長剣が…

！！　……まさかキサマ…こうなることが分かって…』

そう、ウィントは剣の限界が来ることを分かって投げたのだ

『…？　いない…？』

敵ボスは、周りをキョロキョロと見渡す

だがウィントの姿は見えない

『…これで…アイツらのとこに戻れる…』

ウィントは心の中で確信する

ウィントは、天井にいた

天井につけられているシャンデリアの鎖に掴まっているのだ

『ぐっ…』

流石に身体は無傷では無いので、思わず声が出てしまう

そして傷から血が垂れる

ポタッ…

血が敵ボスの目の前を通過して落ちる

『！！

…天井にいたか…』

ウィントの位置がバレてしまった

『くそッ…

…だが、これで終わりだ！！！

』

ウィントは最後の一撃を、天井から落ちながら放つ

『グハァッ！！！！！

』

それが敵ボスの心臓付近に当たり、勝負が決まった

……だが…

『！！？』

ウィントの腹部にも、あるモノが刺さっていた

敵ボスの、途中まで崩壊した長剣だ

この剣が、ウィントの落下する勢いある状態の中で刺さった

『は、ははは……

どうせ、ならバ…キサ、マも…わた、シと…逝く、ノだ…な……』

それだけ言い、敵ボスはもう二度と話さなかった

『がはっ！！！』

ぼたっ、とウィントの口から大量の血が吐かれる

『くそッ…！！！』

どすっ

ウィントは右膝(ひざ)をつく

『…帰らないと…』

ズルズル、とそんな音を出しながらウィントは歩く

アジトから抜け、森に入る

だが暗いため、ウィントには何も見えない

『……オレは…死んだら、南と会える…のかな…？

…でも、アイツ、怒るだろう…な…

仲間を、残して…死んだり、したら…

…エレナ…G…アラウディ…スペード…ランポウ…ジョット…朝利雨月…ナックル…

それと…オレのもう一つのファミリー…

みん、な…』

ウィントの目から、一筋の涙がこぼれる

『オレ…皆を守るどころか、皆に守られてばっかだった……

そんな、オレの……！！』

ドサッ

とうとうウィントは倒れる

『……仲間でいてくれて……』

『ありがとう』

それから、５日後

ボンゴレファミリーの者が来た

そこで見つけることのできた人間は無い…

人間のカタチをした、冷たいモノ

だが、その者を包むように暖かい太陽に光が差し込んでいた

彼女のカタチをしたモノ…いや彼女は、何とも美しい森の中にいた

その光景を見た者は皆、涙を流す

『どうして…！！

どうしてコイツが死ななきゃいけなかったんだよッ！！！』

Gが駆け寄る

彼はウィントのいとこ…つまり、一番付き合いが長かった

『そんな…

ウィントォ――――――――――！！！！！！』

彼女の親友、エレナも駆け寄っていく

『…行く前に、言ったよね…

“絶対生きて帰ってくる”って…

…約束、破ったことなかったくせにね…』

アラウディも、ゆっくりと近づいていく

『…いつものように、メンドクサイと言いそうな顔してますね…

あなたに“スペード”と言うのを辞めさせたかったのですが…

…直す前に、いなくならないでくださいよ…』

D.スペードも、ゆっくりと近寄る

『師匠…
もう修業してもらえなくなっちゃったじゃないですか…』

ランポウも涙を流しながら歩く

『…ウィント…
……このことを、予知していたのか…？』

ジョットはウィントに渡された封筒を強く握り締める

その封筒は、開いていた

そして皆がウィントの周りに集まる

そこから聞こえるのは、皆の声

泣き声だったり、それを必死で抑えている声だったり…

そして、エレナがウィントの隣に落ちている血に気づく

『！！！

ねぇ…見て、これ…』

そこには血文字があった

ウィントの残した、最後の言葉

『Ｇｒａｚｉｅ（ありがとう）』

それを見た者は再び泣く

彼女は確かに存在しない者（イレギュラー）だ

だが彼女の生きた証は、そこにあった

遺言書には、こう書いてあった

『これを読んでるってことは、オレは死んだんだよな…

皆、オレは皆と会えて幸せだった！！

Gとはしょっちゅうケンカして、迷惑かけたな…

でも楽しかったからいいけど！

エレナはオレと親友になってくれて…数え切れない程の思い出がある

あ、もちろん他の皆ともあるぜ？

んで、アラウディ

…オマエは…まぁ、よくケンカふっかけられたけど、楽しかった！

スペード！

オマエはオレに“デイモン”って呼ばせたかったらしいけど、オレは絶対に変えん！！

…でも、不気味なオマエといれたのも、楽しかったぜ

あれ？これ褒めてないな…

んで、ランポウ！！

オマエはもう少し戦おうとしろ！

でも、ま…いざと言う時は頑張ってたな…

ジョット…

オレはまだ、守護者って認めてねぇからな！

ったく…風の守護者なんて他のヤツに頼めっての…

ナックル、オマエは戦いを好まなかったけど、オレはそーゆーとこ評価してたんだぜ？

大事な時にだけ拳を振るうの、なんかわかるしさ…

朝利雨月…音楽、楽しいか？

まー、楽しいかどうかはおいといて、剣の腕が衰えないようにな！

…そんで、名前は言えないけどもう一つのオレのファミリー…

オレにボンゴレにいるように言ってくれて、ありがとう…

オマエらとも一緒にいたかったけど…

もしエレナとかGとかに、そっちに行けって言われたら、オレはオマエらんとこにいたんだぜ？

オマエらが言ってくれたから、オレは決断できたんだ…

“風はどこまでも自由に、大空の天気をかき乱す”か…

確かにそうだったかも…

でもそれって、大空以外も吹くってことだもんな

…オレは…ボンゴレは一生オマエらを忘れない……

頼みがあるんだ

オレ以降の風の守護者を、作らないで欲しい

いや、一人だけにしてくれ

ただその一人も、ある条件を満たす時のみ

ま、こんなことがあるか分かんないけど……

“ボンゴレボス候補が二人現れ、なおかつ風候補も異なった場合”だ

あー、じゃあこう言い伝えてもらおうかな

“もしも風のリングを受け継ぐ者が現れ、候補者が二人になってしまった場合は、
チームは関係なく、強い者…つまり勝者を風の守護者にせよ
風は、強く…そして速いものだ”

オレが思っている“風の守護者”はこうだと思うんだ…

あ、風候補ってのは、代理でもいいからな?

もし両者とも同じ者を風候補にしたら、片方が代理になるだろ?

その状況でも風の守護者は存在させていいからな

それじゃ、まだ言い足りねーんだけど…

もう時間が無いからさ……

…最後に、一言だけ……

ありがとう』

こうして、ウィント以降の風の守護者は現れなかった

だが、ボンゴレボス１０代目候補が二人現れ、風の守護者も現れた

その二人の風の守護者は同じ者で、片方が代理となり、戦った

そして勝者であり、二人の本物の風の守護者・風間南が風の守護者
となった

そして、もう二度と風の守護者は現れない

…ウィントの残した言葉によって……

彼女が残した血文字の言葉と、手紙の最後の言葉は同じだった

『ありがとう』

それこそが、彼女が言いたかった最高で、最も哀(かな)しく、最も嬉しく、最も儚(はかな)い言葉…

そして、最も伝えたかった言葉なのだ

彼女にとって一番大切なモノは、仲間だったのだ……

＊100話達成記念＊　Straordinariamente16　初代風の

ずっとこれが書きたかったんです！
でも、いざ番外編を書く時にこの話のこと忘れてるんですよね…。
なのでアイディアがどんどん…。
そのせいで、5000文字オーバー…。
ちなみに改行・空白除く、で…。
皆さん、こんな長いのに読んでくれてありがとうございます！
感想くださると、めっちゃ嬉しいです♪
この話、ある意味とっておき（？）だったので…。
そいでは！

Ｃｏｏｐｅｒａｚｉｏｎｅ１　首狩り姫と風の出会い！～無の守護者・１～

初めての夏祭りが過ぎ、少し経った頃

朝、イキナリ電話がかかってきた

「…うるさい……」

南は朝日が差し込む部屋の中、のそのそと携帯電話を取る

その携帯は、まだ鳴っている

……かれこれ、１０分くらい…

ここまでしつこい者を、南は一人しか知らない

「…もしも『遅い』

……おやすみ」

ピッ

勝手に電話を切る

プルルルルル…

プルルルルル…

プルルルルル…

「…しつこ――――い！！！！」

南は電話の通話ボタンを潰すほど強く押す

『遅「うるっっっさいんだよ！！！！」

へぇ、僕にそんな口きくんだ？』

「へいへいへいへい、そーですよ！」

南は叫ぶように言い返す

「…んで、何の用だ…？」

南はため息交じりに言う

『見回りだよ』

「…要するに、仕事をしろ…と？」

『まぁ、そういうことだね

君が断っても、仕事が溜まるだけだからね』

「……わかったよ！！

すりゃいんだろ！？

んじゃ、もう切るからな！！」

ブチッ、と言いそうなほど勢い良くボタンを押す

「…あー、行きたくねー…

……でも行かなきゃ今日の分上乗せか…」

仕方無い、と思って着替える

だが、腕章も付けず、Ｙシャツも着ない

思いっきり私服だ

そして、のんびりと家を出て、見回りと言う名の散歩をする

南が公園の近くを通った時

見た目１０歳の少女がブランコに乗っていた

……それも、かなり危険な乗り方で

「……落ちねーよな…？」

南は少し心配しながら公園の前を通り過ぎようとする……が

「って、おい！」

その少女がブランコで一回転し、飛んでしまった

南は急いで受け止めようとするが、間に合わない

すると少女は南に気づいたようだ

「ん？　誰？」

と少女は言うと同時に着流しの裾をはためかせて綺麗に着地する

「着地できたのかよ」

「くふふ♪　当たり前です♪
それで貴方はなぜこんなところにいるんです？」

「ん？　まぁ、何となくかな
それにしても…骸…？　いや、右目が普通だし、左目は眼帯だし
…それに女の子だろ？」

その言葉に少女が反応する

「ムク兄、知ってるの？」

「ムク兄…？
…もしかして妹、とか？」

「おや？　一発で当てるとはすごいですね
察しの通り私は六道骸の双子の妹ですよ」

「双子！？」

「チビ、とか思ってます？」

すると少女からもの凄い殺気が放たれる

「そんな殺気出すなっての♪　骸の双子だろ？

オレは風間南！　骸の…友達？仲間？…ま、そんな感じの存在だ

オレは別にチビだなんて思ってねーよ　人間の成長期ってのは個人差があるしな」

「ムク兄の仲間…？」

「あぁ　そんで骸の妹だから…六道、何？」

「…六道浅葱ですよ」

「んじゃあ浅葱って呼ばせてもらうぜ、浅葱も呼び捨てでいいからな

あ、あと敬語じゃなくてもいいぜ？」

南は仲間…友達同士で敬語なのも嫌なので、浅葱に言った

「くふふ♪　ムク兄が仲間を作るとはね、でも、南ならいいかもね
楽しそうだ♪

あ、南になら変装解いてもいいかな♪」

と言って、浅葱は眼帯をはずし、髪の色を藍色に変える

「うお、その色になったらもっと似てんな」

南が言った通り、浅葱の髪色は骸と全く一緒だった

「まーね♪　でも私が１０歳の見た目ってのは理由があるのだよ」

「理由？」

浅葱は鎖に巻かれたおしゃぶりを取り出す

そのおしゃぶりの色は漆黒だが、どこか見覚えのある形

「アルコバレーノ……！」

「そうさ　私は１０歳の時にアルコバレーノとなって呪いを受けたそれは赤ん坊になるはずだったんだけど私の中の力と反応して呪いが少し変わったんだよ」

南はそれを聞いて、少しの間を空け、再び口を開く

「そっか…　でもま、赤ん坊にならなくて良かったな」

「あー、そういう考え方もできるね　確かに赤ん坊なんかになってたら……」

「だろ？」

「うん♪　ありがと、南♪」

そして、浅葱が満面の笑みを見せる

それに合わせ、南も少し笑う

「そーだ　浅葱、今から時間あるか？」

南が何かを思いつき、浅葱に聞く

「？　あるよ」

「商店街とか行って、遊ばね？」

すると浅葱は即座に答える

「うん♪　行こう♪」

そして、浅葱と南は二人で商店街を歩いていた

見た目１０歳と、見た目男が一緒に歩いているので、周りからは兄

妹に見られているだろう

「なんか見たいもんとかある？」

南が浅葱に聞く

「んー、ない　南は？」

南は数秒考え、答える

「オレもないな　んじゃ、ラ・ナミモリーヌ行くか！」

「お　ケーキがおいしい、って噂のお店だね♪」

浅葱が心底楽しみな表情で言う

「行ったことなかったのか？」

「うんお菓子なら奈々さんの食べに行くか、おいしいチョコ菓子店があったからね

ケーキ屋はあまり行ってなかったんだよ」

「へー、じゃあウマイから楽しみにしとけよな！」

そして二人はラ・ナミモリーヌに足を運ぶ

店の前に到着した

「ここがラ・ナミモリーヌだぜ♪」

「どのくらい美味しいのか楽しみだね♪」

そして、店内へ入る

店内は相変わらずの甘い匂いに包まれていた

二人に店員が寄ってきて、まず南が注文する

「オレはモンブランとミルフィーユ…それと紅茶」

「かしこまりました」

そして、浅葱が注文する

「んじゃ私はチョコと名のつくケーキ全部♪」

店員は一瞬固まり、慌てて確認をとる

南は特に気にしていない様子

「そ、それではチョコレートケーキ、チョコブラウニー、生チョコケーキ、チョコロール……の13個となりますけどよろしいですか？」

「ん、オッケー♪　それでお願い　飲み物はコーヒー牛乳で♪」

「かしこまりました」

店員は若干引き気味で帰って行く

「浅葱チョコ好きなのか？　つかそんなに食えんのか？」

「うん♪　大好きだよ　チョコがあれば生きていけるかもね♪
それにチョコと名のつくもので私が食べれない物も食べれない限界の量も存在しないのさ♪」

無駄にキリッ、として浅葱は言い切った

二人は席に着き、店員(ケーキ)を待つことにした

少し経つと店員が大量のケーキを持ってきた

「お待たせいたしました
こちらが注文のモンブランとミルフィーユ、それに紅茶でございます
そしてこちらがチョコレートケーキ、チョコブラウニー、生チョ

コケーキ、チョコロール……

それにコーヒー牛乳でございます」

カチャ、と南と浅葱と前に置いた

「ん、ありがとな！」

「んじゃいただきまーす♪」

二人はパクッ、と一口食べる

「むー　美味い　あのチョコ菓子屋はケーキおいてなかったからなー」

「だろー、ここのケーキはウマイんだ」

南たちが話しをしていると、少し離れた席に座っている女子高生の声がした

「そーいえばさぁ、ここにくる途中にやってたケンカどうなったんだろうねぇ」

「さぁ？あの郵便局の裏路地にある空き地のところでしょ？　遠目にしか見てないからあまり見えなかったしぃ？　わかんなぁい」

この会話を聞き終え、南と浅葱は顔を見合わせる

「な、浅葱…聞いたか？　今の」

「もっちろん♪　なんか面白そうだね」

「んじゃ…行くか！」

「ん、いーよ♪　でも食べ終わってからね♪」

そう言う浅葱のケーキは、もう半分くらい無くなってた

数分後

郵便局裏路地・空き地

ここでは不良同士のケンカが行われていた

近くを通る者は、何も見ていないような目でそそくさと通り過ぎる

ドガガッ

何かを殴るような低い音が響いた

「「うわぁぁ！」」

入り口の近くにいた二人が吹っ飛んだ

「だ、誰だ！！」

「子供（ガキ）と…男？」

ビキッ

何かがキレる音が二回した

「誰がガキだ！　私は立派な１５歳なんだよ！」

「オレを男と言おうが構わないが、仲間をバカにする奴は許さねぇ」

南と浅葱が来たのだ

「ヤ…ヤベェぞ！　コイツら！！」

「野郎共、一気にたたみかけるぞ！！」

ケンカをしていた者は皆、二人に襲いかかる

それにも関わらず、二人は会話し始める

「浅葱…」

「ん？　なに？」

「合わせ技とか、考えね？」

南が言うと同時に、不良が二人に鉄パイプで殴りかかる

だがそれを少し身体をずらすだけで、いとも簡単にかわす二人

そして、浅葱も返事をする

「合わせ技、いいねえ♪　んじゃー南、私と契約してくんない？
いいの思いついたけど説明難しいからさ。契約したら情報送れるからね♪」

「契約？」

「憑依弾っていう特殊弾があってね　それを使えば契約した相手に憑依することができるのさ

それを私は使った　ムク兄も持ってるよ、もう使ってるかは不明だけど」

「へー、いいぜ♪」

南は簡単に受け入れる

「ありがと♪　んじゃ簡単に説明しとくよ

私の契約方法は大鎌で傷つけること

んで、ただ一方的に憑依したり話しかけるだけなら傷つけるだけでもいいけど、それより繋がりを強固にするなら大鎌を刺す

刺したら大鎌で傷つける面積が増えるから、強固になるんだよ

契約の傷は、相手が抵抗しなかったら肉体的損傷にはならないからね

んで、繋がりが強固な契約すれば精神世界にも行けるようになるし、互いにテレパシー、的な物を使える」

「へー、すげえな！」

と、話してる間も浅葱と南は敵の攻撃を軽々と避ける

「ま、わざわざ敵に種明かしするのも嫌だしな　いいぜ♪」

「んじゃ契約するねー♪」

と言って浅葱は有幻覚の大鎌を出す

「避けないでね？南」

そして浅葱は南に大鎌を投げて心臓辺りに突き刺す

「！？　コイツら、仲間割れか！？」

「よし、今の内に！」

不良達は二人の行動に驚くも、今がチャンスだと言うように襲い掛かってくる

ガシッ！

だが、不良の持っている鉄パイプを、一人が止める

「あ？　仲間割れ…？」

不良が鉄パイプを止めた者を見て、思わず声が出る

それは、南だった

「！！？　コイツ…今刺されて…！？　傷一つ無い！！？」

南に刺されていた大鎌はいつの間にか霧散していた

そして南に掴まれた鉄パイプを持っている者以外は、ゆっくりと後ろに下がっていく

「んじゃ、浅葱…」

「うん♪」

「「首狩りと風の協奏曲第一番。
Ｃｏｎｃｅｒｔｏ　ｎ．１　ｎｅｌ　ｖｅｎｔｏ　ｅ　ｃａｃｃｉａｔｏｒｉ　ｄｉ　ｔｅｓｔｅ．
『知らぬ間に血潮舞う独壇場』
”Ｉｌ　ｓａｎｇｕｅ　ｖｏｌａｎｔｅ　ｉｎｃｏｎｔｒａｓｔａｔａ　ｉｎｖｏｌｏｎｔａｒｉａｍｅｎｔｅ”」」

二人の声とほぼ同時に指パッチンが響く

浅葱の目は一になっている

「ゴー！　南♪」

「おう！」

というと南は空中に駆け上がる

まるで空中にも足場があるかのように

「な、なんだ！？」

「なぜ空中に！？ってブゴア！」

話していた不良はどこからか殴られる

南は全然違うところにいるはずなのに、どんどん違うところの敵が吹っ飛んでいく

敵は知らぬ間に吹っ飛ばされて混乱している

「くふふふふ♪　ここが戦場なら技名通りになってますね♪」

「なっ！　どういうことだ！　説明しやがれ！」

「もう混乱する顔は存分に見れたし、知っていてもかわせないだろうから教えてあげるよ

私はまず有幻覚で人が乗れるくらい丈夫なワイヤーを張り巡らす」

そして、南が浅葱の続きを言う

「オレはその上に乗って空中を駆けながら倒しまくる」

「な、なんだ、それだけ」

「じゃあその間浅葱は何をやっているでしょう?」

南が不良を倒しながら言う

「何をやっているんだ…?」

「幻覚をかけているんだよ　南の姿が見えないように　違うところにいるように見えるように

分身して見えるように　ほら君達の後ろにいるかもよ?」

浅葱がそう言うと敵は一斉に後ろを振り向く

だが、そこに南はいない

「バーカ、こっちだっつの」

実際は本当の南は浅葱の上空にずっと立っていた

幻覚で見えないだけで

そして南は敵の背後から次々殴って、蹴って気絶させていく

1分後

そこに立っているのは、南と浅葱だけだった

ただ、地面には１００人近い男が倒れている

「んー、楽しかった♪」

南が少し伸びをしながら言う

「だね♪　相手が弱すぎるけど」

「そーなんだよなー　並盛って強い不良とかいないし…」

南がため息交じりに言う

「だよねー、それが並盛の欠点かなー」

「確かになー
そんじゃ、また商店街で遊ぶか！」

「そーだね♪」

そして二人は商店街に行き、暗くなるまで遊んだ

そして、夜

南は家に帰り、今日のことを思い出していた

「それにしても、骸の妹…浅葱か…」

南は一瞬笑い、マンションのテラスに行く

夜空を見上げ、また口を開いた

「また、会おうな…」

その声が浅葱に届いているかは分からないけど、また会える、そんな気がした…

Ｃｏｏｐｅｒａｚｉｏｎｅ１　首狩り姫と風の出会い！～無の守護者・１～（後

今回は、『家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！　無の守護者、来る！』とのコラボでした♪
『無の守護者』では、浅葱視点＋少しのオリジナル話が読めるんで、そちらも読んでください！
ちなみにタイトルの“首狩り姫”というのは、浅葱の通り名です。
知っている方も多いと思いますが…。

それでは、『無の守護者』の作者・『骸っち』さん！
コラボしてくださり、ありがとうございました！
初めてのコラボで、とても嬉しかったです♪
二回目も楽しみにしてます！

次からは久しぶりの本編です。
ちゃんと書けるかな…。
それでは！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０１　真理！

『何か面倒なことになった』

これが今の南の思いだ

まだ“風”を賭けたチョイスが残っているのに…

それなのに、今すぐ殺る気マンマンの桔梗、ザクロ、恭弥、スクアーロ…

南はと言えば、逆に殺る気も、やる気も共にゼロ

ユニが来たからチョイスを行う気も無い

ただ、ツナがユニへの返事をしてないことだけ気になっていた

そのツナは、恭弥達にツッコミを入れてる

「じゃあこうしよう、ユニちゃん」

白蘭がユニに声をかける

「チョイスに勝利して僕がもらえるはずの7?は、手に入れるまでにとても苦労したし、すごく大事な物だよ

でも、もしユニちゃんがミルフィオーレに帰ってきてくれるんなら、ボンゴレリングはボンゴレファミリーに返してあげてもいい

そうだ、“風”を賭けたチョイスも無しにするよ」

この言葉を笑顔で言う白蘭

「え!?　で…でも白蘭てボンゴレリング、メチャクチャ欲しがってたんじゃ!!

それに…“風”も!?」

ツナはユニの頼みより、今の発言に驚いていた

「白蘭　なぜあなたが私を欲しているのかはわかっています

わかっているからこそ、あなたの元へ帰るわけにはいきません」

ユニは南の後ろから、隣へ移動しながら話す

「ふうん　じゃあやっぱり、ボンゴレリングは僕らのものだ
ユニちゃんが逃げ込もうとしてる連中に、ミスミス武器を渡すつもりはない
っといっても…かんじんの白馬の王子は、ユニちゃんの願いにビビってるけどね」

「い〝っ」

どうにか誤魔化していたことを突かれ、ドキッとするツナ

「ボンゴレリングはあなたのものじゃないです、白蘭」

「ん？」

「おしゃぶりはアルコバレーノのもの、ボンゴレリングはボンゴレファミリーのもの

それは真理です

なのにあなたは7？と“風”を手っ取り早く安全に手に入れるために無理矢理チョイスを開催し、7？と“風”を賞品にしました

“風”はあなたがどうこうできる物ではありません

私の魂がある限り、7？の一角をになう大空のアルコバレーノとしてそれは許しません

すなわち7？争奪戦、ならびに“風”争奪戦は認めません

チョイスは無効とし、行いません！！」

確かにユニの言う通りだ

“風”を動かすことのできるのは、“風”である南のみ

白蘭は南を脅し、無理矢理“風”を賭けさせた

勝っても南には得が無い

「確かに大空のアルコバレーノには7?の運用について特権が与えられてて、“風”には僕の力が及ばない

でも、僕を怒らせるのはどうかと思うな

ボスのユニちゃんが裏切ったとして…残されたブラックスペ「ウソを言うな!」

…何かな?」

白蘭の言葉を遮ったのは、南

「……ジッリョネロの者は、メローネ基地がワープする前に基地から出ている

つまり、オマエの手の内にいる者はミルフィオーレの者だけだ」

そう、γと共にメローネ基地から去ったのだ

残りは……ミルフィオーレの者のみ…

「…やっぱり風間ちゃんの指示か…

うーん、君にはいつも裏を取られるなぁ」

笑いながら言う白蘭

南は白蘭のこういう所も嫌っていた

「南お姉ちゃん…ありがとう」

ユニは心底ホッとしたような声で言った

「別に礼を言われるまでもねーよ

オレは仲間を守っただけだしな♪」

南の言葉に、再び笑顔になるユニ

「ツナ…オマエはユニの頼みを受け入れるのか？　それとも否か？」

「え…オ、オレ！？」

「ユニはツナに頼んだ
だからツナが決めるんだ」

こう言いつつも、南は分かっていた

ツナがどうするのかを…

「えっと…」

ツナはユニの目を見た

この先のことが分かってて、全て覚悟しているかのような目を……

「…うん…

オレ達と一緒に来るんだ…！

みんな！！　この子を守ろう！！」

ツナの言葉に、皆は返事をする

そして一人、ユニと南の元へ来た

「ユニちゃん！」

「クロームお姉ちゃん」

そう、クロームだ

ユニは『クローム』と会ったことは無かったらしいが、南から聞いて知っていた

ユニとクロームは、１０年間会えなかったのだ

そしてクロームとユニが知り合いだったことに、皆が驚いたとか…

Episodio102　並盛へ戻る！

ツナがユニを守ると決め、新たな戦いが始まっていた

と言っても、ミルフィオーレはユニと南を手に入れるため

ボンゴレはチョイスに参加できなくて暴れている者ばかり

もちろん、ユニを守るためでもあるが…

南は守らなくても大丈夫、だと思っている

まずスクアーロが匣を出して暴れ中

さらにディーノ、隼人も戦闘に入る

その間に他の者は転送システムの近くまで行き、すぐに並盛に戻れるようにする

カチッ

南がボンゴレ匣を開け、更に嵐スケボーを出す

それに雲も炎を纏わせ、三人乗れるサイズになった

「ユニ！　クローム！　後ろ乗れ！！」

三人とは、南、クローム、ユニの分

二人は南の後ろに乗り、スケボーが動き出す

南のボンゴレ匣から出される匣は全て風の炎を含まれ、南が出せる属性も纏うことができる匣なのだ

そのため、もの凄いスピードが出る

今は二人がいるから超ではないが、それでも速い

あっという間に基地ユニットの前に着き、南は匣をしまう

すると少ししてツナ達が来た

そしてツナ達に引き続き、恭弥や隼人達も来る

さらにもう一人……

「白蘭！！」

そう、白蘭が来た

南は戦闘体勢に入る

「来るなら来い！　ユニは渡さねェ！！」

「ちょ…風間さん！！

風間さんも狙われてるんだから！」

ツナが南を止めようとする

「そう、でも…だからこそオレが残って足止めする

オレ以外のヤツが残っても殺されるだけだ　早くしろ！！」

確かに、南の言う通りだ

白蘭にとって南とユニ以外は殺す対象

残っても１００％殺されるだけだ

「あっ」

叫んだクロームをみると、槍が霧散していっていた

「クフフフ…それはどうでしょうねえ」

そして新たな槍と、一人の人物が現れる

「僕に限って」

有幻覚の骸だ

これには白蘭も驚いていた

南は並盛で会ってきたので、少しだけしか驚いていない

「……骸様」

クロームは頬を赤く染め、安心するような、嬉しそうな声で言う

「骸、ナイスタイミング♪」

骸が来たことで、南は白蘭を骸に任せる

「クフフ…話は後でにしましょう」

それはつまり、後でまた話すことを約束していた

ガキィ

骸と白蘭が戦いを始める

白蘭は骸の幻覚で作られた火柱に閉じ込められ、蓮の花でぐるぐる巻きにされる

「ハハハ　ダメダメ骸君　これじゃあ僕には勝てないよ
いくら本物に近い幻覚とは言っても、所詮(しょせん)君はニセの作り物だ
僕に勝ちたいんなら少なくとも、復讐者(ヴィンディチェ)の牢獄から抜け出して君自身の肉体で戦わないとね」

１０年間ずっと、骸の肉体は牢獄の中にあった

冷たい水の中に閉じ込められ、日の光も浴びれずに……

「クフフ　ご心配なく

僕が自らの手で直接あなたを倒す日も遠くはない」

「お、やったな♪」

南だけでなく、他にも嬉しそうな表情をする者がいる

「南との約束ですしね…

我々はすでに動きだしている…とだけ言っておきましょう」

『我々』…つまり、他にも仲間がいるのだ

「それに今この場では、足止めさえできれば僕の勝ちですよ

さあ、大空のアルコバレーノを並盛町に連れて行くのです、沢田綱吉」

もちろん南もですがね、と骸は付け加える

だがツナは有幻覚とは言え、骸を置いていくのに迷っていた

そして決断する

「骸!!　また会えるのか!?」

「当然です　僕以外の人間に世界を取られるのは面白くありませんからね」

いつもの口調でクフフ、と笑いながら言う

しかしすぐに深刻そうな表情になり、再び口を開く

「絶対に大空のアルコバレーノ・ユニと、“風”…南を白蘭に渡してはいけない」

ツナはその言葉に不思議そうな表情を浮かべ、南は骸と同じく深刻そうな表情になる

「黙って♪」

「ぐっ」

白蘭の手が骸の体を突き通す

「いや！！」

「あ！！」

「骸！！」

有幻覚とは言え、骸自身にもダメージはある

そしてサァァァ、と徐々に骸の体が霧散していく

「…さあ早く転送システムに炎を」

骸に言われ、ツナはリングに炎を灯す

「わ…わかった…　クローム！　み…みんな！！」

ボッ

クローム、南、隼人、バジル、恭弥、山本、笹川も炎を灯す

南と恭弥の炎だけ、大きさがケタ違いだったが…

そして、その炎は転送システムに届き、南達はその場から消えた

チョイス会場に取り残された骸と白蘭は少し話し、骸は霧となって消えた

そこに真7弔花が到着し、白蘭はユニと南を追う理由を話す

ユニは7?を覚醒させるために

南は“風”を覚醒させるために

それには順番があり、まず7?を覚醒させなければならない

もし先に“風”を覚醒させると、白蘭の望みは叶わなくなる

なぜ“風”が欲しいのか

それは縦の時空も手に入れるためだ

7?を覚醒させて手に入れることができるのは、横の時空軸…つまり、同時刻のパラレルワールドのみ

そこで“風”を覚醒させると、縦の時空軸…過去・現在・未来、その全ても手に入れることができる

話し終え、白蘭は真7弔花に言う

「わかったらさっさと追おうね♪

一刻も早く二人を奪え」

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０３　向かう場所！

南達は無事に並盛に帰ってきた

転送システムを破壊しようと、隼人が実弾を当てる

…が、転送システムが消えてしまった

まだ破壊しきれてなく、白蘭の元(もと)に帰ったのだ

すると地面から草壁が出てきた

ひとまずボンゴレアジトに戻ることにし、地下に行こうとした時

転送システムが帰ってきた

だが破壊寸前だったようで、四方に散った

その内の一つを見て、恭弥は走り出した

「一つ並中の方に落ちた　見てくる」

あくまで学校第一な恭弥だった

「南も行くよ」

「は!?　何でオレ!?」

突然のことに驚く南

「君、風紀委員でしょ」

「一応だけどな!!　第一嫌だし」

その言葉を聞き、少し南を睨む恭弥

「まぁまぁ、オレが行ったら敵はオレが倒しちゃうけど…

それでもいいなら行ってやろうか?」

今度は大きなため息をつく

「…わかったよ…
その分、書類整理させるけどね」

「は！？
…ってムシすんな！！」

南を無視し、恭弥は階段を降りていく

「恭弥！！　これ持ってけ！！」

ビュッ、と恭弥に向かって投げる

パシ

もちろん恭弥はキャッチする

階段の降り途中で止まり、南から渡された物をまじまじと見る

「……何、コレ…」

「無線機！　ま、オレとしか繋がんねーけど…」

南の無線機は、南と誰か、と言う1対1でしか通じないようにしている

恭弥のように他の者と通じない方がいい者がいるから作った仕組みだ

「ふぅん　まぁいいよ」

恭弥は無線機を耳に付け、去った

ちなみに無線機は、クローム、隼人、骸、ＸＡＮＸＵＳ、ベル、フラン、スクアーロ、ルッスには既に渡してある

恭弥、隼人、クローム、骸は、黒ベースに属性の色のライン

ＶＡＲＩＡはグレーベースに属性の色のライン

属性の色、とは嵐なら赤、大空なら橙、つまり炎の色

ちなみに南のはラインも何も無く、真っ黒

「そうだ、ユニ！」

ポーチから一つ取り出し、ユニに手渡しする

白ベースにオレンジのラインが入った、無線機だ

「これ…私の分？」

「あぁ

…オレ少し出かけるから」

南は、１人で真7弔花と戦う気なのだ

一気に全員と戦う気は無い

バラバラに散った今、１人ずつ潰していく気だ

ユニはそれが分かり、うつむく

南はユニの頭に手を乗せ、口を開く

「ユニ…オレは絶対に大丈夫だから…」

「……本当に？」

「オレが約束破ったことあるか？」

それを聞き、ハッとする

そしてユニは、笑顔で南の目を見る

「……どうか、気をつけて…

…無理はしないでね」

「ユニ……

あぁ！！」

ニッ、と笑う

南は手を元に戻し、ツナの方を見る

「ツナ、オレは行くからユニを頼む」

南の真面目な声に、少し慌てるツナ

「えっ…！？

あ、うん…気をつけて…」

その言葉を聞き、南は階段を降りて行った

「風間さん、どこに行くんだろう…？」

「ボス……」

ツナの隣にクロームが来た

「南は…大丈夫…

早くユニちゃんを…」

「あっそうだ！

皆！　早くボンゴレアジトに！！」

ツナに言われ、皆が地下へと向かった

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０４　雲の形態変化！

南は並盛山の近くにいた

真7弔花を探しているのだが、なかなか見つからない

先ほど恭弥に通信したら、敵が修羅開匣というモノをしたらしい

それならまた後で通信する、と言って切ったから詳しいことは知らないが…

しかし、相手も南を探しているはずだから、ここまで見つからないのは変ではないか…？

「…おかしい…どうして誰とも会わないんだ…」

もう疲れた…と言いたそうな表情をしながら歩く

だが、足を止める

「…違う…敵(アイツら)はオレが一人で探すと知った…

だから狙うのを後回しにして、今は……

ユニ！！！！！」

敵の考えを知り、急いでユニに通信する

「ユニ！！　無事か！？　ユニ！！！！！」

南は匣の嵐スケボーに乗りながら話す

『…南お姉ちゃん…？』

「今どこだ！？」

『えっと…

川平不動産だよ　５丁目にある…』

南は5丁目が見通せるまで上空に行き、川平不動産を探す

「敵は来たか？」

『さっき一度…

でも見つからなかったから安心して』

敵が来たのか…

南は少し考える

『どうかしたの？』

しばらく返事をしない南に、ユニから声をかける

「…敵は今、オレを狙っていない…先にユニを捕まえるようにしてんだ…

だからユニのとこに行こうと思ったんだけどな」

『…南お姉ちゃんが来たら、見つかる…？』

「あぁ、おそらく」

南は川平不動産を見つけた

今敵から南が見えているだろうから、違う方を向く

一瞬見た感じでは、今南が向かったらばれてしまいそうな場所だ

「…じゃあ、オレは真7弔花探しを再開する
敵が来たらすぐにオレに連絡くれよ！？
あ、隼人とクロームにも伝えといてくれ」

『うん　わかった』

ブチッ

無線での連絡を切り、真下に下りる

地上に降りたら匣をしまい、テキトーに真7弔花探しを再開する

「……絶対に捕まんなよ…」

祈るように言い残し、南は並盛山から離れるように歩いていった

並盛中学校

ここではデイジーとディーノの戦いが終わろうとしていた

デイジーが修羅開匣をしてからは、圧倒的だった

白蘭の能力によりディーノの技が全て見切られてしまうのだ

デイジーがユニの場所を聞くため、ディーノの内臓を潰そうとした時

バキ

デイジーがふっ飛ばされ、校舎に激突した

恭弥がトンファーで殴ったのだ

ところが恭弥はディーノも蹴り飛ばす

並中で暴れたことも怒っているが、これは恭弥なりに守ったのだ

そしてそばにいるロールに声をかける

「いくよロール　形態変化（カンビオ・フォルマ）」

「クピィイイイ！！」

恭弥が右手の人差し指だけを立て、そこに光が集中する

光が消え、そこに一つの物体が姿を現していく

初代雲の守護者はある国の秘密諜報部（ちょうほう）のトップだったが、一人を除いて誰にも迎合（げいごう）することなく、一人でいることを好み、ファミリーと足並みを揃えることはなかった…

だがひとたびボンゴレ？世（プリーモ）の正義と己の正義が重なった時には、誰よりも多くの敵と倒し、誰よりも味方に優しかったという

そして、恭弥の手元に現れた物が明らかになる

なにものにも囚(とら)われず、我が道をいく浮雲と謳われた、アラウディの手錠!!!

これこそが、恭弥のボンゴレ匣だ

「覚悟はいいかい？」

ガシャン、という音と共に、手錠の片方の輪からトゲが出る

そのトゲは炎を帯びたトゲなので、殺傷能力はある

…だが、普通の…人を捕らえるのに使う手錠

デイジーは白蘭からボンゴレ匣のことを聞いては無いが、自分に有利だと確信する

そして、合図も無く二人は戦い始める

手錠のトゲがデイジーの頬(ほほ)を掠(かす)めても、直後に元通りになる

恭弥はそんな事を気にせず、戦いを続ける

ガッ

デイジーの右腕が、恭弥に向かって一直線に伸びる

恭弥はそれを避け、手錠をデイジーの伸びきった右手首にかける

「もう逃がさないよ」

左手で手錠を引き、右手に持ったトンファーで攻撃をしようとする

だが…

ブチッ

手錠をかけられている一部のみが、デイジーの腕から切断される

否、わざと切断したのだ

「！」

さすがに恭弥も、このことには驚く

ギュルッ

切断された部分が新しく現れ、腕を元通りにする

バキッ

デイジーの拳が、恭弥の顔を勢いよく殴る

ドオッ

恭弥はそのまま吹き飛ばされ、校舎に激突した

今のデイジーの腕の現象…

あれは晴の炎の活性で細胞を超活性させたのだ

トカゲの尾のように

「修羅開匣は能力の掛け算なんだよ

匣アニマルのもつ特殊能力と人間の能力が掛け合わされて、あらゆる生命体のリミッターを超えた能力を生みだすことができるんだ

だからトカゲのしっぽでは考えられないことも」

デイジーがそう言った時

ガッ

切断されたデイジーの手首から手が生え、恭弥の首を絞める

デイジーの千切(ちぎ)れた手首からは手だけでなく、腕、肩、どんどん広がっていく

ベシャッ

恭弥はそれを払いのける

「残念だけど、君のボンゴレ匣は僕チンと相性最悪さ
もう諦めてユニ様の居場所を吐いちゃいなよ」

「いらないな」

言いながら、恭弥は立ち上がる

「その程度なら武器（トンファー）はいらない」

手錠がいつの間にか2つになり、ヒュッヒュッ、と恭弥は手錠を回す

「校舎を壊した罪で、君を逮捕する」

今度は４つに

「面白い手品だね　でも手錠をいくつ増やしたところで、同じだよ！！」

ドゥッ、とデイジーは恭弥に近づく

「僕も同感さ」

恭弥はデイジーの攻撃を避け、再びデイジーに手錠をかける

「１０や２０ならね」

コオォオォ

ボンゴレリングの炎が強くなる

ガシャシャシャ

手錠が増え、デイジーの体をすき間無く覆っていく

「ぼっ！！？」

デイジーが気付いた時は、全身が手錠に覆われた後だった

まるで、拘束具（こうそくぐ）のように

デイジーが自切（じせつ）するスピードを、雲属性の増殖スピードが上回ったのだ

デイジーは顔を青くしながら、こんなの聞いてない、と言う

「君……死にたがってたみたいだけど、そんな甘えは許せないよ

しめあげよう」

恭弥の言葉通り、手錠がギリギリギリ、と締まっていく

わずかなすき間から、血が飛び散る

「聞いてない！！　白蘭様に聞いてないよ！！
手錠がこんな風になるなんて！！！」

言ってないのではなく、白蘭は知らないのだ

他のパラレルワールドで存在しなかったボンゴレ匣

これこそがボンゴレが勝つための、希望の光なのだ

「ぼ…ばふっ」

ガシャン

デイジーは手錠に縛られたまま気絶し、倒れた

恭弥は倒れたデイジーの横に行き、口を開く

「思ったより情けないね

君が死にたくても死ねないのは、晴の活性の炎が体内を巡ってるからだろ?

これは風紀委員が没収する」

恭弥の手には、晴のマーレリング

こうして、真7弔花を一人倒した

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０５　風の形態変化！

「おー、勝ったか！」

南は戦い終えた恭弥と通信していた

『当然でしょ　君は誰かと戦ったの？』

「んー、それがまだなんだよ…敵が見つかんなくてさ…」

恭弥は南が皆と別行動していることを伝えられ、その理由も知っている

『それならユニって子のとこに戻ったら？』

「そーしたいんだけど…今行くと確実に見つかるからな」

ハァ、とため息をつく

「ま、敵が来たらすぐ行くよ　恭弥は？」

『僕には関係ないよ』

「あー、そーでしたねー　恭弥はそーゆー人でしたねー」

見事な棒読みで返事をする

『よくわかってるね』

「そりゃーモチロン

オマエの勝手っぷりには『南！！』

！！？」

恭弥との通信中、クロームの声が聞こえた

「恭弥！　また後でな！！

クローム、どうかしたか！？」

南の言葉でクロームから南に通信が来たことが分かり、恭弥は無線の通信を切った

『敵が来て…ユニちゃんが！！』

聞きながら南はボンゴレ匣を開ける

更に嵐スケボーも開匣し、最速スピードで川平不動産に向かう

「来たのは誰だ！？」

『真7弔花の霧と…雨と雲の人！』

「アイツらか…わかった！」

ザクロまでいなかったことが、不幸中の幸いだろうか

『きゃ…！』

クロームの声と共に、ドオッという爆発音が聞こえる

「クローム！！　通信は切っていい！　今すぐ行く！！」

『うん！』

ブチッ

通信が切れる

だが南の視界には、小さく真7弔花が見えている

「……スード」

南は肩に乗っているスードを呼ぶ

「ぐる…？」

「…形態変化（カンビオ・フォルマ）」

並盛町５丁目

川平不動産

ここにいるのは、皆ボロボロの者ばかり

ツナは何かを頭にぶつけたために頭を抑えている

打ち所が悪かったようで、とても痛そうにしている

そして、川平不動産があった場所の前方上空には、真7弔花、ユニ、そしてジッリョネロの者がいる

ユニを連れて行かれそうな時、γ達が駆けつけたのだ

真7弔花はγ、太猿、野猿の登場に驚くも、焦った表情はしていない

そして、トリカブトが再びユニを奪うために近づく

「来てみやがれ！！　心から命を懸(か)けられる戦いをまってたんだ！！」

「最高だぜアニキ！！　オレは今、ジッリョネロの野猿だ！！」

トリカブトの前に、太猿と野猿が立ちふさがる

しかし…

ドッ

二人はあっけなくやられ、トリカブトは止まらない

γは黒狐(ネレ・ヴォールピ)を出すが、一撃でやられてしまった

「くそ！！」

バババババッ

γが雷のリングでシールドを作る

「ハハン　そのランクのリングでは役に立ちませんよ」

その時だ

ズガァンッ！！！！

トリカブトが右から一直線に伸びてくる炎に攻撃された

トリカブトはそのまま左にふっ飛ばされる

その炎の色は、クリアー

「「「「！！！」」」」

炎を放った者を見て、誰もが驚きの表情を見せる

「悪ぃ…遅くなっちまった」

その者は、ユニとγの前に立つ

止まった時に、フードが頭にかかってしまう

黒い服に身を包み、唯一違う色は内側に来ている白いTシャツのみ

そして、またもや真っ黒のスケボーに乗っている

左手にはおなじみの漆黒の刀の柄頭（つかがしら）にチェーンを取り付けた状態

だが右手には見覚えの無い武器を持っている

頭からフードを取り、敵を真っ直ぐ睨む

「南お姉ちゃん！！」

そう、南が来た

「やっぱ風間は初代守護者に似てるな」

リボーンが呟く

「初代風の守護者か！？」

「あぁ、そーだぞ」

笹川の言葉に、リボーンは返事をした

「初代風の守護者・ウィントは、ずっと自分が守護者であることを否定してたんだ

だが、誰よりも仲間思いで、誰よりも強かった…故に“ボンゴレ史上最強の守護者”と言われている

奴はボンゴレ以外のマフィアに入っていたらしいが、最終的にボンゴレだけに入ることになった

そして、そのファミリーと初代ボンゴレの仲間達からもらった武器を常に使っていた」

その武器こそが、今南の持っている…

ウィントの銃！！！！

「（だがウィントは仲間を守るために、ボンゴレ創立数年後で死んじまったけどな…

多くの謎を残して…な）」

リボーンは心の中で言った

ウィントの銃は、ＸＡＮＸＵＳの銃と似ていた

ＸＡＮＸＵＳの銃での『？』という赤い部分が、白い『？』という文字に変わっているだけ

「さぁ、始めようか…

せいぜい楽しませてくれよ？」

今の南は、純粋に戦いに飢えている

もちろん仲間を守ることを忘れてはいないが…

南は不敵は笑みを浮かべ、真7弔花にそう告げた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０５　風の形態変化！（後書き）

風の形態変化は銃です♪
左手でチェーン付き刀を持ってるので、片手撃ちです。
次話でもモチロン使いますよ♪
楽しみに（？）しててください！
そいでは♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０６　霧の形態変化！

コォオォォ…

ウィントの銃の炎圧が上がっていく

この銃の弾はＸＡＮＸＵＳの銃の弾と同じ、死ぬ気の炎を蓄積する、
という性能を持っている

更に、もう一つの性能

炎の特徴をそのまま生かせるのだ

ただ風の炎のみなので、風の特徴・回旋・加速・減速のみ

他の種類の炎を蓄積しても、ＸＡＮＸＵＳの銃と同じ力を発揮する

「んじゃ、始めっか」

南が言う

ゴォッ

嵐スケボーの炎を強くし、一気にトリカブトに近づく

「おらよ！」

チェーンを持ち、刀を投げる

チェーンは雲の炎も帯びているので、伸びる

スルッ…

しかしトリカブトは刀を避ける

「か弱き者よ」

「ナメてもらっちゃ困るね
オレは本気の一割も出してねーし」

銃口をトリカブトに向ける

「消えろ」

ズガンッ

引き金を引く

今蓄積していたのは風の炎で、風の炎の特徴は加速

そのため、弾の速さはハンパない

ズゴッ

弾はトリカブトの肩を貫通し、空に消えてった

このことに真7弔花は驚きの表情をあらわにし、ボンゴレ側では顔を青くしている者が数名

貫通したのだから仕方無いかもしれない

特に真っ青になっているのは、京子、ハル、咲

この三人は、命を懸けた戦いというものを知らない

京子とハルは、今まで平和に過ごしてきたから

咲も、命を懸けた戦いということを理解していない

「ハハン　しかしトリカブトもこの程度ではやられませんよ、風間

様」

最後の南を呼ぶ声を聞き、桔梗を睨む

「そんなに睨まないでくださいよ
戦っている相手でもないのに」

チッ、と舌打ちをし、南はトリカブトを見る

「哀(かな)しき者よ」

ガバッ

トリカブトはリングに炎を灯し、胸にある匣をあらわにする

「いきますかトリカブト…

風間様は殺してはいけませんよ」

「息止めるからまった!!」

目をつぶり、鼻をつまむブルーベル

ガチッ

炎が注入された

そこに現れたのは…蛾（が）の羽のようなものを付けた、トリカブト

「うぇ…　恭弥はデイジーが修羅開匣した時トカゲになった、って言ってたし…

あ、修羅開匣ってこーゆーモン？

デイジーはトカゲの匣に、オマエは蛾？

うわ、何それ……だっさ…」

南は完全に相手を馬鹿にした目で見ている

「うるさいわよ！　風間南！

アンタも一応真7弔花の一人なのよ！？」

ブルーベルが叫ぶが、鼻をつまんでいるせいで変な声になっている

「うっせーなぁ…」

南がため息混じりで言った、その時

「終焉（しゅうえん）の時」

トリカブトが言った途端、景色が回りだした

「修羅開匣とは、人間と匣兵器の能力をかけ合わせたもの
蛾（が）の擬態（ぎたい）を進化させたトリカブトの目玉模様を見たものは一瞬にして五感を狂わされ、真実を見失うのです」

桔梗が説明をし終えると同時に、トリカブトが姿を消す

「あー、更にこーゆー能力ね…
ますます気持ち悪…」

南は霧メガネの匣を取り出した

「開匣」

南の顔に、黒縁のメガネが現れる

「んー…

多少はマシになったけど、肝心のトリカブトの居場所が見えん…

困ったなー…」

南の霧メガネは、幻覚の９割を見抜ける

世界が回っている現象はその９割の範囲内だったために、南の視界

では直った

だがトリカブトの居場所が残りの１割だったために、分からない

それなのに、南は余裕の表情

「風間はなぜ余裕そうな顔をしているのだ！！
トリカブトの場所が分からんというのに！」

笹川が叫ぶ

「オレは、仲間を信じてるからな…」

この発言に、一人を除いて者が不思議そうな表情をした

「ユニちゃんの右側！！」

「りょーかい！！」

南は地上から聞こえた声に返事をし、ユニの右側に銃口を向ける

そして、引き金を引く

ボゴッ

弾は見事にユニの右側で爆発した

これはそこに誰かがいた、という証拠だ

「何!?」

桔梗が目を開き、驚きの表情をあらわにする

「下！！　ずっと下！！」

ズガンッ

そして再び、誰かに当たる

当たった部分からは霧が現れる

「右！！」

この声の主は、クローム

「クロームの霧フクロウが形態変化（カンビオ・フォルマ）したな」

リボーンが話す

「あれが初代霧の守護者が使っていた武器と同じ、ボンゴレ匣

実体のつかめぬ幻影と謳（うた）われた、D・スペードの魔レンズ!!!

初代霧の守護者に魔レンズごしに睨につけられた者は呪われて、

次の日に海に浮かんだと言われる……

（最も初代霧の守護者はクロームとは似ても似つかぬ裏切り者だったがな…）」

リボーンが話している間にも、南はクロームの指示でトリカブトを

撃ち抜いてった

ズガンッ

7発目位になり、幻覚が解け始めた

「サンキュー、クローム！
もう見えるぜ！」

ブンッ、と刀を投げる

グサッ

そして、刀はトリカブトの腹部に突き刺さる

「こっちに来い！！」

ぐいっ、とチェーンを引っ張る

そしてもう一つ匣を開ける

ジジジジ…、と電気のような音がする

開けたのは、雷コインだ

「オレが全てのボンゴレ匣を使って戦った、最初の相手だ
誇らしく思えよ…？」

バジンッ

コインを弾く

バキッ

コインはトリカブトの仮面の部分に当たり、ひび割れていく

「しまった…！！」

桔梗が急いでトリカブトの元(もと)に行く

そしてトリカブトの仮面…カブトを確認する

「……ブルーベル…」

桔梗はブルーベルを呼ぶ

「何？」

ブルーベルは桔梗の隣に行き、カブトを見る

「あ！　割れちゃった…」

「…ここはいったん引きます

白蘭様にご報告しなくてはいけませんからね」

そして真7弔花は消えた

「あーぁ…もう少し強い奴と戦いたかった…」

ため息をこぼしながら、匣をしまっていく

地上に降りてボンゴレ匣も閉じる

「隼人ー、大丈夫かー？」

南は気絶している隼人の元に行く

そして真面目な顔になり、告げる

「……笹川、できるとこまで晴の炎で治療しろ

雨属性の炎出せる奴、いるか？」

「拙者は雨属性ですが…」

南の言葉に、バジルが名乗り出た

「雨の炎の鎮静で、少しだけでも痛みを鈍くさせてやってくれ
どうせ今すぐには目覚めないからよ」

「鎮静をそのようにして使うとは…新しい方法ですね…
分かりました！」

バジルと笹川によって、隼人の体の傷が癒えていく

現時点でボンゴレは、真7弔花の晴、霧を倒した

だが、そのために数名が重傷を負ってしまった…

残る敵は、大空、雲、雨、嵐…そして未(いま)だ姿を現さない雷…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０６　霧の形態変化！（後書き）

初・風のボンゴレ匣全使用！！
雷コインは戦いで使うの書きにくかった…。
…どうでしたか…？
ダサい、なんか弱そう、と思われた方…ゴメンナサイ…。
私は戦いのシーンを書くのが一番苦手なのです…。
もし「こんな方法で使ってみては？」というのがありましたら、ぜひ教えてください！
あ、もちろん何か無くても感想書いてくださっていいですよ！？
それが私の気力回復アイテムなので！
一応風のボンゴレ匣を書いておきます。
・スード（風チーター）
　⇔ウィントの銃（形態変化）
・嵐スケボー
・雷コイン
・雲チェーン
・霧メガネ
です。
変換匣とレウス（風ドラゴン）の匣は含まれませんので！
そいでは♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０７　前夜！

夜

南はまたもや別行動をとっていた

皆は並盛山にいて、南は恭弥を捜索中

並中に行ってみたが、いなかった

「もう夜だし…　恭弥ドコ行ったんだよ…　今日は疲れたのによ

骸と会って、チョイスやって、ユニと会って、形態変化（カンビオ・フォルマ）…

あ――――――、疲れた！！！」

空に向かって叫ぶ

「つーかさ、恭弥を探し始めたのが夕方4時くらいで…今は夜だぜ!?

オレはユニと久しぶりに話したいのに…

ってかアレ？　何で恭弥探してるんだっけ…？」

足を止め、考える

「…なんとなくだ」

そのために何時間も町を歩いていた自分がアホらしくなる

「もーいい…　アイツ無線切ってるし、ユニんとこ戻る…

どーせ戦いには来るだろうし？　戦闘狂だしな　うん、よし

帰る！！」

ぐるっと方向転換し、並盛山に向かう

並盛山に着くと、南は呆然（ぼうぜん）としてしまった

「…皆でアニマル匣出して、何してんの？」

そう、皆がアニマル匣を出していたのだ

瓜

ガット・テンペスタジョン
↓嵐猫　Ｖｅｒ．Ｖ《ボンゴレ》

スコロペンドラ・ディ・ヌーヴォラ
ザムザ
↓雲ムカデ

デルフィーノ・ディ・ピオッジャ
アルフィン
↓雨イルカ

レオネ・ディ・チェーリ
ナッツ
↓天空ライオン　Ｖｅｒ．Ｖ（バージョン　ボンゴレ）

ネレ・ヴォールピ
コルル・ビジェット
↓黒狐

グーフォ・ディ・ネッビア
ムクロウ
↓霧フクロウ　Ｖｅｒ．Ｖ（バージョン　ボンゴレ）

ブーファロ・フルーゾネン
牛丼
↓雷牛　Ｖｅｒ．Ｖ（ボンゴレ）

カングーロ・デル・セレーノ
漢我流
↓晴カンガルー　Ｖｅｒ．Ｖ（バージョン　ボンゴレ）

炎の光が眩しく、南は目を細める

「風間さん！」

ようやく南に気づいた一同

「ヒバリさん…見つかった？」

「並中にいなかったから、途中で探すの辞めたで、何してんの？」

南の問いにγが答える

「ボックス間コンビネーション発動システム

コイツを明日の戦いでやろうと思ってな」

「明日？　何で言い切れるんだよ」

南はγ達がやろうとしていることは気にしない

「それは私が言ったからだよ、南お姉ちゃん」

「ユニ？　…あ、もしかして予知？」

ラルから渡されたコロネロのおしゃぶりをしまい、ユニは答える

「うん　これだけは昔から分かってたの

明日の夜明けとともに始まる戦いですべてが終わる、と

この戦いで勝てば全パラレルワールドの白蘭が消え、恐ろしい未来の待つことのない、平和な過去へ帰れるよ」

ユニはいつもの笑顔で言った

だが、南は少し暗い表情

「恐ろしい未来の待つことのない、平和な過去…か」

南が呟いた声は、誰の耳にも届かなかった

「おい、風間」

突然、リボーンが南を呼んだ

「あ？」

「…ちょっと話がある　来い」

南の返事も聞かず、リボーンは森の中へ入っていく

「チッ　オレに拒否権は無いってか

ムカつくなー　ま、いいけど」

グチグチ言いながら、リボーンの後を追った

それから、数分後

南だけが森の中から出てきて、ユニやクローム達と話していた

先ほどと、何も変わらぬ表情で

だがユニ、クローム、隼人は気づいていた

南が、何かを覚悟していることを

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０８　神との言い合い！

翌日、午前２時

南は寒さのせいで目が覚め、二度寝もできない状態になっていた

空は真っ暗

「眠い…でも寒さのせいで完全に目が覚めちまったし…

ハァ…仕方ない」

極力音を立てないように起き、立ち上がる

南の右ではユニが、左ではクロームが眠っている

二人共、幸せそうだ

南は二人を優しく見つめ、そこから離れていく

１００mほど離れ、ようやく止まった

森の中に姿を隠す

「漣…出て来い」

普通の声の大きさで漣を呼ぶ

するとすぐに漣が現れる

普通の高校生くらいに見える容姿に服装

髪と目の色が外国人っぽいので、日本人には思われないだろうが…

服装も至って普通

ダメージジーンズに、青いTシャツ

これで神というのだから、南が信じず、バカにするのも納得してしまう

「久しぶりだな　どうかしたか？」

「ちょっと、頼みがあるんだ」

聞いた途端、漣は露骨に嫌そうな顔になった

今まで南がマシな頼みをしたことが無かったからだ

だが、南の真剣な顔を見て、漣も真面目な顔になる

「何だ？」

「自分の生命力とかを他の人に渡す機能を、パソコンに付けてくれ」

「は！？」

思わず叫んだ

「オマエ…何考えてんだよ！」

「ウルセェよ…　皆が寝てんだ

オレは呪いのせいで生命力が強くなったハズだろ？　だから分けるんだよ」

「“風”の呪いは、生命力とか、寿命を延ばすものじゃねぇぞ！？

そんくらい、オマエも分かってるだろ？」

漣に言われた南は舌打ちをし、わかってるよ……と言った

「知ってるんなら…なんでだよ…？」

「…いいから、やれ……」

「……ふざけんな！！！！！」

漣が今までに無いくらいの勢いで叫んだ

「漣、だから「いいから聞け！」

……小声で言えよ」

「生命力を分けたら当然だがオマエの生命力が弱まる…つまり死に近づく

全て与えたら与えられた者は長く生きられるようになるが、オマエは死ぬ…そんな危険なことだぞ！

…確かにオマエは…転生者は、異常な程の生命力を持つ

だが、それを他人に渡しても、渡された者が生きられるようになるのはせいぜいプラス２０年…

それに悲しむだけだ…」

そんなことは、南も分かっている

だが、これだけは引けない

「漣…頼む！！！！！」

南が頭を下げる

「え…ちょ…みな、み……？」

漣は困惑していた

今まで南が頭を下げたことなど無かった

ワガママで、自分勝手で、それでも何より仲間を思っていて…

「…とりあえず、頭上げろ」

「……」

無言のまま、南は頭を上げる

「…どうしてそこまでして、生命力を分ける機能が欲しい…？」

「それは……」

南は話した

自分がどうしてそんな機能が欲しいのかを

それを聞いた漣は驚き、驚愕（きょうがく）する

何となく予想はしてたよ…、と言って許可してしまった

「…これで、機能が入った…

ただ分けられるのはオマエが飴をあげた奴だけで、南からしか分けられないようになっている

つまり、オマエにとって負荷しかない…」

漣がため息混じりで言った

「…ありがとな…」

「もういいよ…

っつかオレって一応神様なんだぜ？　その神様に反抗するって…」

「今に始まったことじゃねーし」

「知ってるよ！！」

南は漣の言葉を聞いて思わず笑った

漣は疲れきっている表情だが…

「…そろそろ、夜が明けるな……」

漣が先ほどより少し明るくなった空を見上げ、言う

南も空を見上げる

「…そうだな……」

「負けるなよ？　白蘭に」

「オマエに言われなくとも負けねーよ」

風のマーレリングを手に持つ

南はこのリングを『真7弔花』としてではなく、『アリアから渡されたもの』として持っている

だからこそ破棄せず所持し続けているのだ

「…そろそろ、皆のとこに戻っとけ」

漣に言われて気がついたが、今はもう4時

もしかしたら誰か起きているかもしれない

「そうだな…」

南は無線を耳につける

「んじゃ、改めてありがとな」

「別にいいよ…んじゃな」

そう言って漣は消えた

南はゆっくりと、皆のいる場所に戻った

夜明けまで、あと少し…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０９　戦いが始まる！

夜が明けた

だが、まだどの方向からも敵が来たとの報告を受けていないし、爆発音も聞こえない

「…オレも戦いたかった…」

南は今、ユニやツナ、京子達と同じ場所にいる

南も狙われている身なのだから、戦うな、とのことだ

もちろん南は戦うと言ったが、仲間全員から反対されて渋々諦めた

まぁ、諦めるまでに３０分言い合いをしたが…

「ユニ…？」

心配そうな表情で前を見ているユニに話しかけた

「どうかしたの？　南お姉ちゃん」

「あ…オレ、やっぱ戦っちゃ「だめ」

…ケチ」

「私だけじゃなく、皆が言ってるんだよ？

昨日納得してたのに…」

めずらしくユニがため息をはいた

「…でもさ「だめ」

……こうなったらオレの基準で行くからな！　オレの基準でヤバそうになったらオレは行く

うん、よし、決定！！」

南はまたもや無理矢理決めて、再びユニはため息をはいた

「あ、そうだ」

南はポーチから一つの無線機を取り出す

黒ベースに、オレンジのラインが入ったもの

「ツナ！」

ビッ、と投げる

「ちょ、わっ！！」

ツナはなんとかそれをキャッチする

「…これって…無線機…？」

「あぁ、ツナ用に　それはオマエのヘッドフォンと合体できるから邪魔にもなんねーぜ」

そう言われてみれば形が少し違うかも…と言ってヘッドフォンに取り付ける

「知ってるかもしんねーけど、それはオレとツナとでしか通じねーから

オレと誰か、っつー仕組みだ」

「…なんでそんな仕組みに？」

「……ＸＡＮＸＵＳとか、恭弥とかにも持たせるためだ…」

「なっ！！　ヒバリさんは知ってたけど、ＸＡＮＸＵＳにも！！？」

ツナが白目になって叫ぶ

「？　だからどーかしたか？」

南は至って普通の表情で言う

ツナにとってＸＡＮＸＵＳがどんなに怖くても、南にとって他の者と変わらない仲間なのだ

「…やっぱ風間さんって…」

「そーいや、ツナはこの時代のＸＡＮＸＵＳと会ったことあるっけ？」

「あ…話だけなら…一方的な…」

『一方的』、それが妙に納得してしまう

「ＸＡＮＸＵＳは１０年前と変わんなかったぜー？

あ、霧が変わってたな…フランって奴に」

「へー…

（アルコバレーノだから、マーモンも殺されたのかな…）」

南はＶＡＲＩＡアジトに行ったときのことを思い出していた

更におかしい髪形になったルッス、ウルサさが倍増したスクアーロ、
存在ごと消していたレヴィ、相変わらずの『オレ様王子様ベル様』
だったベル、威圧力が桁違いになったＸＡＮＸＵＳ

ほっぺたムニムニマーモンが毒舌カエルになったのは驚いたが…

「…楽しかった…な」

少し下を向いて、小さく笑った

「…でも、だからこそ……」

ダッ

南が走り出した

「ちょ…風間さん!?」

「南お姉ちゃん!?」

二人が南に叫んだその時

ズオッ

隼人達のいる方角で、大きな爆発があった

いよいよ、始まったのだ

南はそれを気にせず走り、ツナ達は一瞬南から目を離した時に南を見失ってしまった

「どうしよう…多分参戦しに行ったんだろうけど…」

ツナが顔を少し青くしながら言う

「……すみません…私、分かってたのに、止められなかったんです…」

ユニがツナに話す

「予知ではなく予想していたことなのですが、南お姉ちゃんは行く、と分かってたんです…

なのに、止められなかった…」

「…ううん、ユニも風間さんも、悪くなんて無いよ…

それにオレも、風間さんが行くのは何となく分かってたしさ…」

「え…？」

ツナの言葉に、一同は驚く

「昨日も思ったんだけど、風間さんが戦わないはず無いんだよ…

…でも、負けるはずも無いと思う…」

「沢田さん……

はい！　そうですね！！」

ユニは南の向かった場所を見て、心配そうな表情になる

「…南お姉ちゃん……」

今生きている者の中で、南はユニにとって一番付き合いが長い家族だ

1人目はアリア、2人目が南…

アリアは亡くなっているので、ユニにとって南は、本物の家族のようなものだ

それは勿論、南にとっても同じだが

そんな南が、戦いに行った

止めたかった気持ちはもちろんある…だが、南は絶対に止まらない

だから、ユニができることは一つ

ぎゅっ…

胸の前で手を握りしめる

祈るように目を閉じ、口を開く

「どうか…南お姉ちゃんが…皆さんが…無事で戦いが終わりますように……」

目を開いて、優しく微笑んだ

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１１０　嵐の形態変化！

一番早く戦いが始まったのは隼人、ラル、γがいる地点

先ほどの爆発はザクロが修羅開匣したものだ

ツナは南を追いかけるのをやめ、心配そうな表情で爆発した場所を見ていた

だが、どこか安心したような表情で

昨夜――――――――――

「ユニの予知で、敵の来る方向はだいたいわかってる

守りの要（かなめ）となる地点の守備を決めよう」

「そいつはオレがやらせてもらうぜ
敵に黒狐の技が読まれてるってんなら、裏コードの技を使うから心配ない」

γに引き続き、二人が名乗り出る

「オレもいきます！！」

「んじゃオレも♪」

隼人と南だ

「「「「「南（風間）はダメ（だ）！！！！！！」」」」」

会議に参加していた者全員から止められる

「…なんで？　別に敵がオレを狙ってても、逆に手加減するかもしんねーし…」

南がぐちぐち言い続け、隼人達は南を無視して会話を続ける

「それに獄寺君はケガしてるじゃん！！」

ツナが隼人も止めようとする

「なーに、大丈夫っスよ　ケガ人の中じゃ一番軽いぐらいっス！！」

隼人は笑顔で言うが、やられたのは背中…

背中をケガした上での戦いなど、マトモにできない

同じようなことをγが言う

だが…

「ボスの右腕としての気合いが、てめーとはちがうんだ!!
オレはチョイスでも失敗(ミス)しちまってる　このままじゃ10代目の右腕として失格なんだよ!!」

「獄寺君…」

ツナは自分のために命を懸けてほしくないのだ

「オレも行くぞ」

「お、ラル・ミルチも行くのかー

ならオレも「風間さんは何があろうとダメだって！！」

チッ…ダメツナのくせに生意気な…」

「なっ！！！（舌打ちにダメツナって…）

それにラルまで！？」

ツナは南がクロームとユニに止められている姿を横目に見ながらラルに聞く

「動けなくとも獄寺と共に守りの砲台ぐらいにはなるはずだ」

「見ていてください１０代目！　ボンゴレ守護者の誇りにかけて敵を倒してみせます！」

隼人の言葉を聞き、ツナはゆっくり立ち上がる

「…ダメだ　獄寺君！」

「！！」

「許可…できない！！」

――――――――――――――――――――――――

ザクロの修羅開匣…それは６５００万年前以上の恐竜・T（ティー）-REX（レックス）

ミルフィオーレの科学力により、ＤＮＡだけでその生物の匣を作ることが出来ているのだ

「さあT-REXの圧倒的パワーを味わいな」

ザクロはそう言うと、一瞬でγの目の前にいく

そしてγは、一撃でやられてしまう

「この!!」

ラルが攻撃するが、全く歯がたたずにやられてしまった

残りは、隼人一人

「確かオマエ、風間様と仲良かった奴の内一人だったな」

「だとしたらなんだ！！」

話しているザクロに構わず、隼人は攻撃をする

「バーロー、気持ちいいシャワーじゃねーか

風間様の仲間だから、一つ教えてやろうと思ってな…」

「！？　…何の話だ」

「風間様の、秘密だよ…」

「！！？」

隼人は驚きの表情を隠せず、かなり動揺してしまった

だがすぐにいつもの表情に戻る

「南のことで、オマエらが知っててオレらが知らねーことはねーんだよ！！！

瓜！！　形態変化（カンビオ・フォルマ）だ！！！」

「ニャアアア！！」

初代嵐の守護者・Gはボンゴレ？世（プリーモ）の幼なじみであり右腕

？世と共にボンゴレの元となる自警団を組織した男

彼は仕事では使い慣れた銃を使ったが、？世からの直接の依頼には

？世から譲り受けたこの武器を使い、負け無しだった…

その武器こそが、今隼人が持っている――――

荒々しく吹きあれる疾風と謳（うた）われた、Gの弓矢（アーチェリー）！！！

ドオッ

弓の先から放出される炎が強くなった

「ほうっ　これがボンゴレ匣か！！

たしかに出力は段違いに上がったがオレの“恐竜の皮膚（ダイナソースキン）”の前では、冷たいシャワーがぬるま湯になった程度だぜえ

ま、殺す前に風間様の話をしてやるよ」

「だからオマエらが知ってることはオレらも知ってんだよ！」

「それはどうだろうな

風間様の匣の内の一つ、風ドラゴンは見たことがあるな？」

ザクロの問に、隼人は返事をしない

「無視かよ、バーロー　でも驚いてねぇっつーことは見たことあるな
その匣はな……」

隼人は嫌な予感がした

「ミルフィオーレ真7弔花の証なんだよ」

「なに！？」

「修羅開匣は本来、匣が体内に埋まっていてそれを開ける
だが白蘭様は風間様のを少し変えた
体内には埋め込んでないんだよ」

先ほどの話から、ザクロが何を言いたいのかを隼人は理解した

「その匣が……レウスだと言うのか！？」

「レウスってのが風ドラゴンなら、そうだ
これで話は終わりだ　さあ、死ぬか？」

「くっ」

隼人は昨夜のことを思い出していた

「ダメだ！！　許可できない！！」

ボスである、ツナの言葉

隼人は驚き、戸惑っている

「また獄寺君、右腕とか言って…

右腕とかボンゴレの誇りとか…どうでもいいのに……

そんなことのために命をかけてほしくないんだ！！」

ツナが必死で叫ぶ

だが…

「悪ィけど、従えません！！」

隼人が逆らった

「…いいのか？　隼人、それだとツナに逆らうことになんぜ？」

南は必死に笑いを抑えながら言う

「あ〝っ　いえ！！　そんなつもりは……！！」

隼人が言うが、ツナは恐がっていた

「オレが言いたいのは…同じ言葉でも昔のオレとは言ってる意味が違うってことっス……」

「？　昔と違う…？」

「オレは今でも10代目の右腕になることが目標ですし、生きている証です…

ですがたくさんの戦いをご一緒して、10代目の求めている右腕がオレが考えていた、ただ強くて命知らずじゃないってやっと分かったんです…

もうオレの目指す右腕は昔とは違います

オレの目指すボンゴレ?(デーチモ)世の右腕は……

ボスと共に笑い、そのために生き抜く男です!!」

「…獄寺君」

ツナは少し安心したような表情を浮かべた

「それはつまり――――――――――――――」

『白蘭を倒し１０代目もファミリーもオレも、誰一人欠けることなく』

言った時のことを思い出し、隼人は弦を引く力を強める

「なに!?　パワーを溜めてやがったのか!!」

ザクロは気づくが、時すでに遅し

『平和な過去（あのころ）に帰ることです!!!』

そして、弦を離す

赤竜巻の矢（トルネード・フレイムアロー）

カッ

ドオッ

ザクロが長話をしたお蔭で、かなりのパワーが溜まっていた

少し経ち、そこは辺り一体が燃えてかなり見通しの良い平地となっていた

炎が消え、一人の男が声を出す

「ぐあ〝あ〝あ〝！！！」

ザクロだ

だが、上半身の左半分を失っている

それでも生きているのは、やはり彼がバケモノだからだろう

隼人は爆風に吹き飛ばされ、背中を打ってしまった

そしてどうにか力を入れ、少し体を持ち上げる

「（トドメだぜ…果てやがれ）」

Gの弓矢（アーチェリー）を構えた時だった

ビュビュッ

「!?」

ズォン

飛んできた何かが隼人に命中し、再び辺りを爆煙が覆った

Straordinariamente17　風のボンゴレ匣詳細！

風のボンゴレ匣

・風チーター（ゲパルド・ディ・ヴェント）Ver.（バージョン）V（ボンゴレ）（スード）
（ボンゴレ匣を開けると同時に出てくる）
↓形態変化（カンビオ・フォルマ）：ウィントの銃
・嵐スケボー Ver.（バージョン）V（ボンゴレ）
・雷コイン Ver.（バージョン）V（ボンゴレ）
・雲チェーン Ver.（バージョン）V（ボンゴレ）
・霧メガネ Ver.（バージョン）V（ボンゴレ）

嵐・雷・雲・霧のランクAリングが自動的に右手に装着される。
（親指：嵐。人差し指：雷。中指：風のボンゴレリング。薬指：雲。小指：霧。）
ボンゴレ匣から出てきた匣は全て、風の炎も纏うことができる。
ボンゴレ匣から出てきた匣は全て、自動的にパーカーの裏側に装着される。
匣デザインは変わらない。
全て『Ver.（バージョン）V（ボンゴレ）』付く。

ウィントの銃

・弾に死ぬ気の炎を蓄積することができる。
・風の死ぬ気の炎を蓄積させれば、回旋・加速・減速の特徴を生かせる。
・デザインはXANXUSの銃と酷似していて、『?』の赤い文字

が白い『？』の字に変わっただけ。
・南は基本、右手に持って片手撃ちで使用。

嵐スケボー

・全体的に漆黒。タイヤに嵐の刻印と『？』の文字が赤色で刻まれている。
・炎を出して上昇、下降など、どの方向にも動ける。
・雲の炎を浴びると、その量に比例して乗り場が大きくなる。
（それ以外の時は、１人乗りの普通のサイズ。）
・炎が切れても、普通のスケボーとして使用可。
・南は戦闘時はほぼ、この匣を使用している。

雷コイン

・サイズは５００円玉と同じくらい。色は黒。
・表面に雷、裏面に『？』の刻印。それぞれ緑色。
・通常のコインのように弾いて直進するだけだが、南は視認できないほどの細い糸を使って操作することもある。
・炎が切れても、通常コインとして使用可。
・不便なので南はあまり使わないが、たまに使うこともある。

雲チェーン

・雲の炎で伸ばす前は、長さ１ｍほど。色は黒。
・一つ一つの鎖が大きい。
・風の炎で素早く動かせることがあるので不便さは無いが、強い一

撃を与えられない。
・刻印等は無い。
・南の刀の柄頭（つかがしら）に着けて使用することが多い。
（この際、刀を投げて戦うことが多い。）
・敵を拘束したりすることもできる。

霧メガネ

・一見ただの黒縁メガネ。
・幻覚を9割見抜く。
・メガネの『ヨロイ』よりもフレーム側にある場所にマークがあり、右が霧の刻印、左が『？』の刻印。それぞれ藍色。
・霧の炎は刻印の部分から出ている
・炎が切れても通常のメガネとできるが、度が入ってないので無意味。
（ファッションアイテムになる程度。）
・敵が幻覚を作った時以外では使用しない。

南が森の中に消え、咲は消えた場所を見つめていた

憎しみや怒りを含めた目で

「どうして……」

小さな声で呟く

「？　咲ちゃん、どうかしましたか？」

「あ、ううん……なんでもない…」

「咲ちゃん、何か悩みがあるなら相談にのるよ？」

「ありがとう、二人とも…でも、大丈夫だから…」

どうせ何もできないんだから放っておいて、と言う言葉は小さすぎて聞こえなかった

咲はユニの元へ歩み寄っていく

「はじめまして　私、山下咲といいます」

にっこり笑って挨拶する

咲とユニは、今まで一度も話してなかったのだ

ボンゴレアジトでは時間が短く、それ以外では常に南、またはクロームと一緒にいたから

「あ、ご挨拶が遅れてしまってすみません
ユニといいます　いつも姉がお世話になってます」

「いえ…風間さんには、どっちかって言うと迷惑をかけてるから…
それに、嫌われてるし…」

「…本当、すみません……」

ユニが少し頭を下げながら言った

「あ、ごめん　そういうことじゃなくて…
悪いのは、私…だから」

「？」

「…リング戦の時も、あと少しでクロームさんに攻撃してしまうところだったし…

嫌われても仕方ないの…」

咲はうつむきながら話す

「……」

「だから…風間さんが私に言うことも、間違ってはないし…

それがわからない、私が悪いの…」

「山下さん…」

「あ、ごめんね…それじゃ、挨拶は済んだし、またね！」

咲はそれだけ言うと、京子達の元に戻った

ユニは咲のことを少しの間見つめて、すぐに戦いが行われている場所を見た

だが、その時だ

「！！！」

突然、不思議な映像が頭に流れ込んできた

その映像に声は無い

『〇〇〇〇〇』

誰かは分からないが、自分に…まわりにいる大勢の者に声をかけている

そして、映像は途切れた

「今のは……」

どこか見覚えのある後ろ姿が映っていた

「……なんだか…嫌な予感がする……南お姉ちゃん、無事でいてね……」

「おい、ツナ」

「な、なんだよ…」

ツナこと、沢田綱吉に声をかけたのは、彼の家庭教師・リボーン

「…風間のことは、いいのか？」

「追わなくて、か？」

「あぁ、そうだぞ」

ツナは少し暗い表情になる

「本当は、止めたいよ…でも風間さんはオレがなんと言おうが無駄だよ…

クロームや獄寺君、それにユニが止めても行ったんだから、オレが止めても意味無いよ」

「確かにそうだな…風間と一番仲の言い奴らが止めて無理なら、ツナが言っても無駄だな」

「な、なんだよ!!　バカにしたように言いやがって!!!」

「だが、それでも止めないなんて、本当に良かったのか?」

ツナは再び考える

「…風間さんが戦いに行く前に渡してくれた、無線機…」

「あぁ、アレがどうかしたか？」

「…風間さんはオレが止めることも想定してたと思う…

だから、この無線機を渡したんじゃないかな…

『何かあったらすぐに連絡するから』って言うつもりで…」

はー、とリボーンはため息をつく

「…確かにアイツならそう言いくるめるだろうな

（…“風”だから…な）」

「？　リボーン、今何か言った？」

「言ってねーぞ」

「？　…そう」

ツナは南が向かった方向を見た

きっと、南なら大丈夫だと信じて

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１１１　暗殺部隊、参戦！

「まーったくザクロなっさけなーい　迷子になったついでに助けちゃったわ」

ブルーベルがやって来て、トドメをさそうとしていた隼人に攻撃したのだ

「ざまーみろボンゴレー！　めいっぱいトドメさーそお♪」

ブルーベルはボンゴレの状況を見て、楽しそうに笑った

「まてバーロー！　オレの獲物だ！！」

「ザクロ、デイジー程じゃないけど腕とか再生できるから、それまで待てっていうんでしょ？　でしょ？

そんなの待ってらんないよーだ

修羅開匣！！」

左胸に埋まった匣に炎を注入する

ズオッ

修羅開匣した後のブルーベルの姿は、人魚のような姿だった

「さーて、ショニサウルスのパワーも掛け合わされた、ブルーベルの大技を見せてあげるわ」

だがその時、「7割はオレの手柄だ」とザクロが言ってきて、二人が同時に攻撃することになった

ブルーベルは右腕を上げ、ボンバ・アンモニーテを作り出した

「いっちゃえー！！」

「烈火マグマ（マグマ・インフィアンマート）！！！」

言葉通り、同時に放たれる

「（くそ…動けねえ……

……１０代目……スミマセン……）」

隼人が死を覚悟した時

「ＧＡＯＯＯ！」

ライオンの咆哮（ほうこう）のような音が響いた

ピシィ

ドンッ

そしてブルーベルの放ったボンバ・アンモニーテは砕け散った

ボオオ

烈火マグマ(マグマ・インフィアンマート)も雷の炎を纏ったエイに塞(ふさ)がれた

「にょ！？」

「！？」

「なに！！」

敵も味方も驚く

「がん首そろってんじゃねーか」

それは、リング争奪戦以来の者の声

「ドカス共」

暗殺部隊ＶＡＲＩＡが到着した

「ＸＡＮＸＵＳ！！」

隼人はベルに肩を貸してもらいながら叫ぶ

「沢田に伝えろ

ボンゴレ9代目直属暗殺部隊ＶＡＲＩＡは――――――

ボンゴレの旗の下(もと)、ボンゴレリングを所持する者共を援護する！

！」

つまり、助けに来てくれたのだ

隼人とベル、瓜とミンクが対立し始めたが……

「それよりスクアーロどこにいるか知らないかしら？」

「！　……

…アイツはやられて…今…山本達が捜索(そうさく)してる……」

隼人が深刻そうは表情で言うが、ＶＡＲＩＡの反応は予想外のものだった

「ハッ死んだか」

「ってことは次期作戦隊長、私かしら♪」

「これでど突かれなくてすむ♪」

レヴィがＸＡＮＸＵＳの言葉を真似して言っていたが、それは隼人達の耳には聞こえなかった

ブルーベルはＶＡＲＩＡのことを知らないようで、ザクロが説明する

「どのみち消すだけだがな」

「やってみろ、カス」

コォオ、とＸＡＮＸＵＳの手に炎が灯る

「……聞け、ＸＡＮＸＵＳ…！！
奴らはパラレルワールドを使い、お前達の技をすでに攻略している…
型のある技は使わない方がいい！！」

「るせえっ」

ＸＡＮＸＵＳは隼人の言葉を無視し、匣兵器・ベスターに攻撃させた

ガオッ

激しいバトルが開始された

「はいは～い　あなた達はこっちで治療よ～」

ルッスが隼人達に言う

「開匣よん」

ドシュッ

出てきたのは晴クジャク（パヴォーネ・デル・セレーノ）

「ク…クジャク…？」

「それじゃあクーちゃん、よろしくねん」

ルッスに言われ、晴クジャクは治療を始める

「さて、早く沢田綱吉に連絡した方がいいわよぉ
この爆発を見て驚いているだろうから」

「（南にも連絡しねーとな…）

聞こえますか１０代目!!」

『!　獄寺君!?』

ツナの返事の声は、やはり少し慌てた感じがした

「オレ達……ヴァリアーに救われました

今、奴らはザクロとブルーベルって奴と交戦中です」

『え!?　ヴァリアーが…来てるの!?』

理由を聞き、再び驚いた言い方をするツナ

「ハイ　相変わらずムチャクチャな奴らですが…
ボンゴレの旗の下、オレ達を援護するとＸＡＮＸＵＳが！！」

『！！　ザ…ＸＡＮＸＵＳが！！？』

まだまだ驚くツナ

きっと、先ほどからずっと同じような表情をしているだろう

「すみません１０代目　オレ、これから南にも連絡しなくちゃいけないんで…
状況が変わり次第、すぐに連絡します！」

『あ、うん　よろしく頼むよ』

ツナとの通信は、これで切れた

そして、もう一つの無線機を取り出した

黒いベースに赤いラインの入ったモノ…南に渡された無線機だ

「オイ、南…聞こえるか？」

『お、隼人か？　なんか疲れきった声してっけど…
大丈夫か？』

「あぁ、今ヴァリアーに助けられてな…」

『ＸＡＮＸＵＳ…隼人達が重症なら通信しろっつったのに…』

ハァ、と南のため息をする声が聞こえた

「まさか…ヴァリアーが来ること、知ってたのかよ!?」

『あ？　当然だろ？
オレはＸＡＮＸＵＳにも無線機渡してんだぜ？』

今度は隼人がため息をつく

「…なぁ」

『ん？　何？』

「…レウスのこと、ザクロって奴に聞いたんだけどよ…」

隼人は覚悟を決め、口を開いた

もしザクロのことが本当なら、隼人はどう反応すればいいのか…

今それを一生懸命考えながら…

「レウスが修羅開匣の…ミルフィオーレの匣っつーのは本当か？」

『あぁ　そうだけど？　今さら何言ってんだ？』

「……は？」

『いや、前に話しただろ…』

どうやら南は話した気でいるらしい

「話してねーよ！！！」

『あ、マジで？　んじゃあ今話したから』

南（こっち）も相変わらずテキトーな奴だ、と心の中で言いながらため息をついた

『んじゃオレそろそろ……ってオマエ……！！　…ん、わかった……

あ、隼人！　また何かあったら連絡してくれよ』

隼人の返事も聞かず、南は通信を切った

「ったくアイツ……」

再びため息をつく

「私もそろそろ戦いに行くけど、あなた達はここにいなさいよぉ？

じゃないと私が南に怒られちゃうからね…」

ルッスはそれだけ言い残し、去った

ズバァン

少し遠いところが爆発した

「！！　あの方向は……湖の地点か…」

他の者を心配しながらも、隼人は体を休めた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１１１　暗殺部隊、参戦！（後書き）

レウスはミルフィオーレの匣です。
仮でも真7弔花ですから…。
まぁ、これは南が全力否定してるんですけどね。
今度ＶＡＲＩＡとしての匣も出しますので♪
…全く期待しないで待っててください。
あ、あとこないだの番外編ですが、匣兵器の説明は『指摘があったから書いとこう』と思って書いたらたまたま番外編の順番と被っただけなので、１０話ごとの番外編は『非戦闘員達』です。
…ツナは戦闘員だろう、ってツッコミはしないでおいてください…。
では。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１１２　雷・晴の形態変化！

湖の地点

ここは笹川、バジル、ランボ、太猿、野猿が守っていた

ランボは子供で、それ以外は皆ケガ人

そんな場所に攻めてきたのは真(リアル)７弔花のリーダー・桔梗

「ハハン　これほどの敵が待ち伏せているとは正直驚きましたよ」

桔梗は太猿と野猿に攻撃されたのにもかかわらず、傷一つついてなかった

「よくやったぞ太猿、野猿！！」

「ここからは拙者達に任せてください！！」

そう笹川とバジルが言うが、二人共ボロボロだ

太猿がランボのことを言ってランボが調子に乗るが、笹川とバジルはランボを戦わせる気はない

「あなた達にはこの匣一つで充分です

ユニ様と風間様を一刻も早くお連れしたいので早速失礼しますよ

開匣」

炎が注入される

出てきたのは、雲ヴェロキラプチル（ヌーヴォラ）

それも一体ではなく数体

「ぎゃああ！！！」

野猿の左肩が攻撃されて、血が飛び散る

やっかいなのは数だけでなく、一体一体が強いことだ

「恐竜タイプの匣兵器は動物タイプより遥かに強力でしてね

この匣兵器一つで最新装備の軍隊一個師団以上の戦闘能力を誇っています

まぁ、風間様の真7弔花（リアル）としての匣兵器・風ドラゴン（ドラーゴ・ディ・ヴェント）には敵いませんが」

桔梗の言葉に皆が驚く

だが、南が謎だと一番よく知っている者が声を出す

「…風間の奴は大丈夫だ！
第一、オレもよく奴のことを知らんのだから、敵に知らされた程度で動揺してはダメだ！！」

笹川が言ったことはメチャクチャな言葉だったが、皆が冷静さを取り戻すことができた

：：
後で聞けばいい……

そう、思いながら

その時だ

「ぐぴゃっ」

ランボが一体の雲ヴェロキラプトル(ヌーヴォラ)に弾き飛ばされた

その先には、他の雲ヴェロキラプトル(ヌーヴォラ)

このままでは噛み殺されてしまう

「ふんっ」

だが何者かがランボを受け止め、ランボは無事

代わりにその助けた者が噛みつかれてしまったが

「ぬ〝お〝ぉお！！！」

その者は、太猿

「なぜこんなチビを連れてきた！！」

「！！

（……それは…）」

笹川は昨夜のことを思い出す――――――――――――

「ランボを戦わせる!?」

響く、ツナの声

「そんなの反対だよ!!」

「オレも反対だ!!」

「ランボさんいくいく戦う!!」

イマイチ白蘭との決戦のことを理解していないランボ

「でもランボってこんなにチビなんだぞ！！」

「チビじゃないもんね！！」

ツナに抱きかかえられながらも言うランボ

「ランボはアホでウザイチビだが、リングを継承したれっきとしたボンゴレの守護者だ

選ばれたことには意味があるんだ」

リボーンに言われ、調子に乗るランボ

そこに、南が口を挟んだ

「なぁ、ツナ　ランボ（アホ牛）には全く覚悟が無いと思うか？」

「いや…一応ボンゴレ匣だって開匣できるし、覚悟はあるっちゃあると思うけど…

いざというときに炎が出せるとは思わないし…」

「それはツナの考えだ　ランボ（コイツ）のことは自分（コイツ）が一番わかってんだろ

それに、ほんのわずかな戦力でも、あったほうがいいと思うぜ？」

「？」

ツナはまだ、白蘭との最後の戦いということを理解していなかった

「…負けたら、戦闘員だけでなく皆が死ぬ

……このことを理解して反対してんのか…？」

「「！！！！」」

南の言葉はツナと、先ほどツナと共に反対して笹川の心に突き刺さった

しかし、それでも反対するツナ

「オレが極限に責任をもってランボの面倒を見る！！

それならいいだろう？」

笹川が名乗り出た

「ようは勝てばいいのだからな！　大丈夫だ！！」

「そのとおりだ了平

一応念のためにあのアホに軽い催眠で封じておいたスイッチを教

えてやる」

リボーンはフゥ太から笹川の肩に移動し、小声で伝える

「本当にヤバイ時に叫んでみろ」

『本当にヤバイ時』、それを『今』と思い、笹川は大きく息を吸う

「どうしたランボ！！！　沢田のママンに会いたくないのか！！？」

「！！！　ママン……？」

つまり、こういうことだ

大好きな沢田の母親に会いたい、過去で帰りたいと思わせ、眠っている炎（覚悟）を引き出す

リボーンの読み通り、ランボはボンゴレリングに雷属性の炎を灯す

「ママンに会いたい～！！
ぎゅうど～ん！！！」

ボンゴレ匣に炎を注入する

そして同時に、形態変化（カンビオ・フォルマ）

初代雷の守護者は大地主（おおじぬし）の息子で、若くわがままで世間知らずな臆病者だったが、？世（プリーモ）はあえて戦場では先陣を切らせた

その矛盾が武器にも表れている

激しい一撃を秘めた雷電と謳（うた）われた、ランポウの盾（シールド）

その盾（シールド）こそが、恐るべき攻撃力を秘めていた

「ママ～～ン！！！」

コオオ、と盾（シールド）の炎圧が上がる

雷の角（コルナ・フルーミネ）

盾（シールド）から一気に放たれた雷の炎により、雲ヴェロキラプトル（ヌーヴォラ）は全滅した

「ハハン…　雲ヴェロキラプトル（ヌーヴォラ）を倒すとは、遊びは通用しないようですね」

「マ・マ・ン…」

雷のボンゴレ匣は閉じ、ランボは眠ってしまった

「気力を全て使い果たしたな
よくやったぞランボ！！」

「わかりました
もう少し戯(たわむ)れるのも悪くないのですが、私は一刻も早くユニ様と風間様を確保するという目的がある
そろそろ本題をいれましょう」

ボウッ、と雲のマーレリングに大きな炎が灯る

ガチッ

ズオッ

胸の匣に炎を注入した

そう、桔梗が修羅開匣したのだ

「ぐあっ」

何かにバジルは攻撃された

ズバババッ

そして、バジルを攻撃したものと同じ何かが大量に向かってくる

「伏せろ！！」

それをギリギリで避ける

湖の中から現れたのは、大量の恐竜タイプの匣と、バケモノを化した桔梗

「私の体は肉食スピノサウルスの姿を雲の炎で変形増殖させており、原型をとどめていないのです

自らから言うのも何ですが、真7弔花最強の戦闘力を誇っています

この姿になってしまえば、風間様の匣、風ドラゴン（ドラーゴ・ディ・ヴェント）など瞬殺できます」

「相手にとって不足はない…

ここはボンゴレ晴の守護者、笹川了平が相手になる！」

バジルが共闘する、と言うが笹川のスタイルは一対一の方が戦いやすいらしい

「3分、1R（ラウンド）で倒してみせる

我流！！　ブレイクだ！！！」

笹川に言われ、我流は晴の炎を笹川に放つ

「うおおお！！！　我流！！！　形態変化（カンビオ・フォルマ）！！！」

「ガアアッ！！！」

我流と笹川が一体化する

初代晴の守護者は最強の名を欲しいままにした無敗のボクサーだった

だが強すぎた彼はボクシングの試合で相手を殺(あや)めてしまい、拳を封印し神に仕(つか)える仕事についた

それ以後彼がリングにあがることはなかったが、一度だけファミリーに危機がおとずれた時、己に3分間の時間制限を課(か)し、その拳でファミリーを救った

笹川のボンゴレ匣はその時の武器、ならびに状態をも表している

明るく大空を照らす日輪と謳(うた)われた、ナックルの極限(マキシマム)ブレイク

笹川が纏った炎は、他の守護者が形態変化(カンビオ・フォルマ)した時同様、とても純度の高い炎だった

ギャオ

一気に桔梗との距離をつめる

ガキッ

右手でアッパーを放つ

「（何……私の動きについてこれる人間など！）

ハハン　まぐれですよ…」

だが再び桔梗との距離を一気につめる

「極限（マキシマム）コンビネーション！！！」

ズドドドド、と笹川の全パンチが桔梗にヒットする

「（これは…異常だぞ！！　人間としてこの強さ…

私が今まで戦ってきた人間の中では、最も強い個体だ！！）」

「見ていてくれ、師匠！！

極限太陽（マキシマムキャノン）！！！」

晴の炎を飛ばし、完全に桔梗を圧倒する

…否、今の一撃は浅かった

「ハアァ…　わかりました…

あなたがカンガルーから受けた光弾（こうだん）は肉体に直接作用する晴の活性の炎ですね

しかも動きを見る限りケガを修復するたぐいのものではなく、神経と筋肉のみを超活性させ何１０倍ものパワーにする恐ろしい炎だ……

もちろんこの炎に耐えうる肉体を持つ人間などざらにはいないでしょう

普通の人間ならばその圧倒的力に体が耐えられずクラッシュしてしまう……

とはいえあなたも、３分しか肉体がもたないようですがね」

先ほど笹川が言った3分というのは、肉体のタイムリミットだったのだ

「もっとも今のあなたの攻撃力を真正面から受けたら私も勝てそうにない

さあここからは競争です

残りの時間で私の雲の増殖による防御が勝るか、あなたの晴の活性による攻撃が勝るか」

そして、恐竜が凄まじい勢いで分裂し、増えていく

「面白い…その勝負受けて立つ！！

ゆくぞ！！！」

二人の勝負が始まった

「極限（マキシマム）イングラム！！！」

笹川は攻撃側だが、襲ってくる恐竜から防御しながら戦わなければならない

そんな攻防が続いた…

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１１３　貝の霧、参戦！

笹川が形態変化（カンビオ・フォルマ）して、３分が経ってしまった

…つまり、タイムリミット

笹川は超活性の反動が来ていて、かなりつらい状況だ

せっかく倒した雲ヴェロキラプトル（ヌーヴォラ）も、雲の増殖によって元通りになってしまった

「せっかくなら一人と言わず、そこに隠れているあなた達もどうですか？」

桔梗はバジル達と少し離れている場所を見る

そしてそこから現れたのは、、恭弥と……敵の標的（ターゲット）である、南

桔梗が『あなた』などと言ったのは、南がいることを分かっていたからである

「ヒバリ殿!!　それに風間殿まで!!」

「風間!!　なぜ来た!!」

南が戦いに行ったことを、ここにいる者は知らない

まぁ、恭弥は知っていたが…

「やはり風間様とあなたでしたか

なぜ手を出さず見ていたのですか?」

「並中(うち)のボクシング部主将は試合中に手を出すと、委員長会議にまで乗り込んできてうるさいからね」

「あー？　見ておもしろかったからかなー　ま、今はタイクツだけど」

「ヒバリ…風間……」

笹川のピンチにも関わらず、南は呑気に欠伸までしている

「なるほど　風間様は違いますが、美しい友情の協定ですね

ですが私のルールはあなたと違い…

手段は選びません」

桔梗が右手を少し上に持ち上げる

「「！！？」」

南が地中から出てきた1体の雲ヴェロキラプトル(ヌーヴォラ)に飲み込まれた

そしてその直後に、恭弥が南の時と同じように地中から出てきた1体に右肩から先を持って行かれた

つまり、失ってしまったのだ

「さようなら　そして目的を1つ達成です

ちなみに、風間様の捕獲を先に行った理由は1つ

風間様が彼の怪我を見て暴走しないためです

今は雲ヴェロキラプトル(ヌーヴォラ)の中で暴れているでしょうがね

もうここでの目的は達成したので、あなたたちにあまり時間を割(さ)けないのです

先を急ぐことをお許しください」

驚いている笹川達を無視し、桔梗は話し続けた

そしてギュオッ、と恭弥の上空から雲ヴェロキラプトル(ヌーヴォラ)が接近してくる

「…！　ロール…防御だ」

すると恭弥の前にいくつかの球針態が現れる

…が、雲ヴェロキラプトル(ヌーヴォラ)は地中からも迫ってきていた

「がっ」

上空からの雲ヴェロキラプトル(ヌーヴォラ)は球針態を避け、襲いかかる

ドズズズズ

そこからは、大量の血が噴き出した

「ヒバリイィ！！！」

笹川の叫び声がこだました

その頃

ＶＡＲＩＡＶＳザクロ・ブルーベルの戦いは更に激しくなっていた

その戦いは大きく２つに分断された

まず一方の、ベル・ルッス・レヴィＶＳブルーベル

ベル達はブルーベルが作る防御壁、クラゲ（バリエーラ・メドゥーサ）・バリアに苦戦していた

だがベルがレヴィの雷エイ（トルペディネ・フルーミネ）に乗り、それを破る

今だ、と言わんばかりに3人は一気に襲いかかる

……が、それは逆にブルーベルの罠にかかってしまっていた

「クラゲ（バリエーラ・メドゥーサ）・バリアの内側が本当の私の絶対防御領域なのよ～っだ

わざと派手な防御壁を展開して、私がまとってる透明で純度１００％（パーセント）の雨の炎のフィールドに誘いこんだってわけ

純度１００％（パーセント）の雨の炎のプールってどんなかわかる？

雨の炎は“鎮静”　すべての分子の運動を停止に近づけるわ」

そして……

ボゴッ

雨の炎のプールに、血が広がった

ＸＡＮＸＵＳＶＳザクロ

ＸＡＮＸＵＳはベル達の異変に気付いた

「どーだ？　バーロー　部下が殺(や)られた気分は」

「てめえはいちいちアリンコの死に動揺するか？」

ドウッ、とＸＡＮＸＵＳが引き金を引く

「強(つえ)え奴が生き残る　それだけだ」

「グハハハ！！

ならばやはり、死ぬのはてめーだ！！」

ゴキャッ

ＸＡＮＸＵＳの体に雲ヴェロキラプトル（ヌーヴォラ）の牙が刺さる

ザクロが桔梗のいる方向へ逃げ、誘い込まれたのだ

そしてＸＡＮＸＵＳにも大量の雲ヴェロキラプトル（ヌーヴォラ）が襲いかかった

「これで…ボンゴレ側の守備は全滅ですね」

「バーロー、当然だ　この圧倒的強さこそが真7弔花（リアル）なんだからな」

「ニュニュ～　そういえば風間南は？

どっかに来たって聞いたけど…誰のとこに来たの？」

ブルーベルはベル達の話を聞いて、知っていたのだ

「風間様なら今、雲ヴェ（ヌーヴォラ）ロキラプトルの中にいますよ
地中から一気に捕獲しました」

「ニュ！　いぃ～な～
風間南と戦いたかったー！！」

「残念ですが、戦ってはいませんよ
一瞬で捕獲しましたので」

「バーロー、風間様と戦うなら逆にオレらの覚悟が必要だ」

「ザクロなっさけなーい」

ブルーベルの一言により、徐々に戦闘態勢になっていくザクロ

「落ち着きなさい　私達にはもう1人の目的、ユニ様がいるのを忘れたのですか？」

桔梗の言葉で、一瞬で冷静になる2人

「…では参りましょう　ユニ様のもとへ」

桔梗が2人に声をかけ、行こうとしたその時

奇妙な音を立てながら、雲ヴェ（ヌーヴォラ）ロキラプトルの顔が変形した

「それは叶わないよ」

「極限に行かせんぞ」

「止めてみせる」

恭弥や笹川、バジル、ＶＡＲＩＡの者達

皆、殺(や)られた者の顔だ

さらに……

ズパッ

一体の雲ヴェロキラプトル(ヌーヴォラ)の体から、1人の人間が飛び出した

南だ

「な!?　雲ヴェロキラプトル(ヌーヴォラ)の体内から抜け出すなど…!!!」

桔梗があり得ない!!、と言いながら南を見る

「あー、疲れた

中でじっとしてるのもヒマなんだよ…意外とな…」

ボンゴレ匣を開け、さらに嵐スケボーを開けて乗る

南がふあああぁ、と欠伸をしている間も、桔梗達は頭が変わった雲ヴェロキラプトル（ヌーヴォラ）に攻撃されている

「ぎゃ　ぐはっ！！！」

「どあぁ！！！　どうなってんだ、桔梗！？」

「がはっ　こんなことが……

！！　幻覚か！」

桔梗はようやく真実に辿り着く

そして殺気が放たれたのを感じ、その場所に攻撃する

ドオッ

大きな爆発が起こった

爆煙とともに、霧も晴れていく

幻覚をかけるために使用されていた霧だ

そしてそこからカエルのような被り物が見える

「あれー？　師匠今、なにげに一歩前に出ましたねー

すぐ真ん中に立とうとするんですからー」

「クフフ…　何を言っているのです、おチビさん」

そして、霧と煙が完全に晴れた

「お前の頭が邪魔だからですよ」

「そーやっておいしいとこもってくんですよねー」

骸と、フランの姿だ

そして殺されたはずの者達もいる

そう、全てが幻覚だったのだ

……いや、全てでは無い

「おー、もう少し楽しめるかと思ったんだけどなー

期待ハズレ」

南が愚痴を零(こぼ)しながら骸達の元(もと)へ行く

「クフフ　それは残念でしたね

しかし、期待ハズレでもいい、と言って幻覚ではなく実体で行った南が悪いのですよ」

「だってさー　なんか楽しそうだと思ったからー」

「南までフランのような話し方をしないでください」

「へーへー、わかりやしたよ」

そう、南だ

南は興味から、実体で行くことにしたのだ

その理由は今南が言った通り、『楽しめそうだったから』

こんな命がけの時にまで、南はテキトーなことを考えていたのだ

「クフフフ…ウォーミングアップは済みました」

知っていると思うが、骸は復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄から出て1日と経っていない

つい数時間前まで水牢に入れられていたのだ

「おーいフラン」

「ハーイセンパーイ」

ベルがナイフを出しながらフランを呼ぶ

「幻覚で敵をダマすのはいーが、わざわざオレ達を殺してみせる意味あったのか？」

「わかってないなーベルセンパイ

リアリティのためですよ　幻覚っていうのはドッキリみたいなもんですからー

ねぇ師匠？」

「ちがいますよ」

「あれ…」

「てんめー」

ベルがキレてるくせに、フランはポケー、っとした表情

「じゃあアレですー　師匠のスプラッタな趣味全開ですー」

「ちがいますよ」

グサッ、と骸の三叉の槍がフランの被り物に刺さる

笹川やルッスが驚いた表情をしているが、当の本人は全く気にしていない

「師匠イタイですー　やめてくださーい」

「今回の幻覚の目的は2つ　僕のウォーミングアップと…

真7弔花（リアル）の能力を引き出しデータを取ることです

実際幻覚で彼らに程よい優越感を抱かせることにより、ブルーベルの絶対防御領域と桔梗の地中からの攻撃、及び捕獲方法の一つのデータを引き出すことに成功しました」

骸の言葉に反応する、ブルーベルと桔梗

「なーる」

「なーるじゃねーよ！」

一人勝手に納得するフラン（の被り物）に、ナイフを突き刺すベル

「ってかいつまで六道骸の幻覚だしてんだ？
あいつは復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄に沈んでんだろが」

「あれ――――――？　聞いてませんか？
あのパイナッポー頭（ヘア）は幻覚ではなく正真正銘（しょうしんしょうめい）1分の1スケールの
六道骸本人ですー
ミーの師匠復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄から出所しちゃいましたー」

途中で再び骸から槍が刺されたが、そんなことよりも皆はフランの
こ言葉に驚いていた

骸の出所

各々が驚きの声をあげている

だが……

「ま、そーゆーことらしいぜ？」

南は知っていた……

「何で南知ってんだよ！！？」

隼人が驚きの声をあげた

「ん？　さっき隼人と通信してる時に骸と会ったんだよ　それで――――――――――」

南が隼人と通信している時

その時、南は湖の地点に向かっていた

最初は隼人達の場所に行こうと思ったのだが、ＸＡＮＸＵＳからの通信で湖の地点に行くことにした

「いや、前に話しただろ…」

レウスの真実について言いながら、南は走っていた

『話してねーよ！！！』

「あ、マジで？　んじゃあ今話したから」

と南が言うと、隼人のため息が聞こえた

南は一瞬言い返そうと思ったが、今南はそんなにヒマではない

早く湖の地点に着きたいのだ

「んじゃオレそろそろ……」

南が通信を切る、と言おうとした時

「ってオマエ……！！」

南の目の前に、骸が現れた

もちろんフランもいる

「クフフ…少し話、いいですか？」

「（話…？）ん、わかった……

あ、隼人！　また何かあったら連絡してくれよ」

南は隼人の返事を聞かず、無線を切った

「んで、話って？　……その前に、オマエ…今の骸は実体か？　幻覚か？」

「クフフ…どちらだと思いますか？」

「……実体」

「……正解です」

「んじゃあ……復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄、脱獄したのか！！？」

少し楽しそうに言う南

「違いますよー　師匠は“出所”したんですー」

骸ではなく、フランが答えた

「出所…？　まぁいいけど…

んで、話って？」

「今、南は湖の地点に行こうとしてたのですか？」

「あぁ、そうだけど？」

だから話は手短にな！、と付け加える

「…その必要はありません　今から相手に幻覚をかけます

それで南も幻覚で出そうかと思ってるのですが「ダメだ！！！」

…？」

骸の話を遮り、南が叫んだ

「オレは助けに行くより、戦いを楽しみたいんだ！！

だからオレは実体で行く！！！」

「……いいですよ…僕も南が思い通りに動くとは思っていませんでしたしね…

むしろ、こうなってくれるのが僕の予想通り、とでも言うべきでしょうか」

「ならオレはもう行くから　んじゃな♪」

と、南は勝手に行ったのであった

「…っとまぁ、こんな理由だ」

「……オマエはまた勝手なこと言ったのかよ…」

もはや隼人は、骸のことより南の言葉に呆れていた

「なんだよー　オレはいつでもこんな感じだぜ？」

「わかってるよ……あン時は骸と会ったから通信を切ったんだな」

「あぁ、そうだぜ

……それより早く、話進めてくれよー」

かったりー、と言いながら南は嵐スケボーの匣を開け、それに乗る

「ハハン、なるほど　脱獄不可能と言われる牢獄の門番、復讐者(ヴィンディチェ)を欺(あざむ)いたのが六道骸の弟子だというのならば納得もできるというものです」

「ヤッター師匠、有名人じゃないですかー」

「黙りなさい、おチビ」

そしてもう一度槍を突き刺す

「このようなダメ弟子を預かっていただいていることには感謝しま

すよ、ＸＡＮＸＵＳ」

そして恭弥が骸にトンファーを構えるが、今は敵に集中する

「幻術で彼らの技を知ってなおのこと、真(リアル)7弔花は強いと
ここからは本当の死闘となるでしょう」

「はーい、本番いきまーす！」

そして、今話している間にザクロの左腕は完治した

だが、これはボンゴレ側の狙いなのだ

完全な状態な相手を倒したいだけ

「ここがミルフィオーレとボンゴレ、総力決戦の場となりそうですね」

「ここを制した側が、勝つでしょう」

「でも師匠は戦っちゃダメですー　指をくわえて見ててくださいー　病み上がりみたいなもんなんだから、せめてボンゴレ匣くるまでまってくださいーーーーー」

ボンゴレ匣……つまり、クロームが来るまで

「そーいやどこいったんら？　あのバカ女！」

「来てないね…クローム…」

「南センパイ何か知ってますかー？」

フランに聞かれ、南は答える

「来てはいるんだけどよ…無線に出てくんねーんだ……

それより犬!!　クロームのことをバカ女呼ばわりか……」

「げっ」

犬の顔色がだんだん悪くなっていく

「……次言ったら、泣かすかんな」

「わ、わかったから殺気抑えろびょん!!」

「……んじゃ、殺(や)るか……♪」

南は心底楽しみそうに言い、妖しく笑った

その表情に、敵だけではなく味方の一部までもが怯えた

怒らせてはいけない者を、怒らせてしまった……

真7弔花（リアル）の者は、そう感じていた

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１１３　貝の霧、参戦！（後書き）

お久しぶりです…。
一週間も更新しなくてすみません。
理由は活動報告にも書いてありますが、忙しくて時間が取れなかったのです…。
もし待っててくださった方がいましたら、スミマセン…。
これからも毎日更新が難しくなっていくと思います。
特に、今月末から来月の頭にかけてテストが…。
でも未来編が終わったら毎日更新が復活できそうです！
一週間更新しなかった分も、一日二話更新したりして追いつかせますんで！
あと未来編は１０数話。
そこからは小説オリジナル編に入ります。

あ、あと予告（？）です。
今度自由な風を再投稿します。
設定を変えなければならなくなってきて…。
でも大幅な変化はしませんので！
そして、その改版が今のに追いついたら、こっちのは削除か完結させます。
なので改版に再お気に入り登録してください。

…長々とスミマセンでした。
再投稿に関しては、活動報告で書いていくのでそちらもご覧ください。
それでは

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2328v/

家庭教師ヒットマンREBORN!　自由な風、来る！

2011年11月20日19時30分発行